

下高田白山遺跡 下高田稲荷谷Ⅱ遺跡 向原Ⅳ遺跡

(一)宇田磯部停車場線(富岡工区)事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2022

群馬県富岡土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

第706集

下高田白山遺跡・下高田稲荷谷遺跡・向原Ⅳ遺跡

(一)宇田磯部停車場線(富岡工区)事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇二二

群馬県富岡土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



下高田白山遺跡
下高田稻荷谷Ⅱ遺跡
向原Ⅳ遺跡

(一)宇田磯部停車場線(富岡工区)事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2022

群馬県富岡土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

県道宇田磯部停車場線(富岡工区)バイパス整備事業は、甘楽富岡地域と安中地域の周遊性向上と、安全で快適な通行確保を目的として計画が進められ、既に開通の安中工区分に続き、富岡工区分の開通が待ち望まれています。

富岡工区分として整備が加えられる下高田地域は、2006年の合併により旧妙義町より富岡市に編入となりました。切り立った岩壁が屏風のように聳える妙義山より流れる高田川流域に広がる自然豊かな環境の地であり、周辺には上野国一ノ宮貫前神社や2014年に世界遺産登録となった富岡製糸場などがあります。

遺跡の発掘調査におきましては、下高田白山遺跡と下高田稲荷谷Ⅱ遺跡では、丘陵の傾斜地の一角で営まれた古代の集落が、また、向原Ⅳ遺跡では横野台地一帯で検出されている古代の牧(放牧地)の区画溝の一部などの遺構群が調査されました。

発掘調査から報告書刊行に至る間、ご指導・ご協力を賜りました地域住民・関係機関の皆様方に、改めて感謝を申し上げますと共に、本書が地域史解明の一助となりますことを願い、刊行の序といたします。

令和4年3月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 向田忠正

例 言

1. 本書は、平成27年度から30年度にかけて、(一)宇田磯部停車場線 補助公共 社会資本総合整備(広域・栃木長野)、同(広域・新潟長野)に伴う埋蔵文化財発掘調査として実施された「下高田白山遺跡(しもたかたはくさんいせき)」・「下高田稲荷谷Ⅱ遺跡(しもたかたいなりやつにいせき)」・「向原Ⅳ遺跡(むかいほらよんいせき)」の調査成果をまとめた発掘調査報告書である。
2. 遺跡の所在地は、以下のとおりである。

〔下高田白山遺跡〕・〔下高田稲荷谷Ⅱ遺跡〕	群馬県富岡市妙義町下高田
〔向原Ⅳ遺跡〕	群馬県富岡市妙義町下高田・群馬県安中市中野谷
3. 遺跡の発掘調査は、群馬県教育委員会文化財保護課(現群馬県地域創生部文化財保護課)の調整に基づき、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が群馬県富岡土木事務所より、委託を受けて実施した。
4. 遺跡の発掘調査期間と調査担当者は、以下のとおりである。

〔下高田白山遺跡〕	第一次調査：平成28(2016)年1月1日～平成28(2016)年3月31日 調査担当者：関 俊明・小林茂夫・麻生敏隆・大西雅広 第二次調査：令和元(2019)年1月1日～令和元(2019)年3月31日 調査担当者：黒田 晃・麻生敏隆
〔下高田稲荷谷Ⅱ遺跡〕	平成28(2016)年1月1日～平成28(2016)年3月31日 調査担当者：関 俊明・小林茂夫・麻生敏隆・大西雅広
〔向原Ⅳ遺跡〕	第一次調査：平成29(2017)年1月1日～平成29(2017)年1月31日 調査担当者：黒田 晃・飯田陽一 第二次調査：平成29(2017)年4月1日～平成29(2017)年5月31日 調査担当者：黒田 晃・飯田陽一
5. 整理事業の期間と執筆・編集の担当者は、以下のとおりである。

整理期間	令和3(2021)年4月1日～令和4(2022)年3月31日 (履行期間 令和3(2021)年4月1日～令和4(2022)年3月31日)
編集担当	専門調査役 新倉明彦
デジタル編集	主任調査研究員(資料統括) 齊田智彦
観察表執筆	専門調査役 岩崎泰一〔石器・石製品〕、同 大西雅広〔陶磁器〕、同 神谷佳明〔土師器・須恵器〕、 同 大木伸一郎〔弥生土器〕、同 山口逸弘〔縄文土器〕、専門員 板垣泰之〔金属器〕
原稿執筆	岩崎泰一〔2章3節4項〕、神谷佳明〔2章出土遺物項〕、大木伸一郎〔4章1節〕、 調査課長(総括) 津島秀章・岩崎泰一〔3章5節〕、他 編集担当
鑑定・分析	石材鑑定 群馬県地質研究会 飯島静男 自然科学分析 (株)火山灰考古学研究所〔テフラ分析〕 (株)古環境研究所〔花粉・植物珪酸体分析〕 (株)パレオ・ラボ〔黒色塗膜・黒曜石分析〕
6. 発掘調査記録・出土遺物は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管されている。

凡 例

- 1 本報告書の挿図中で使用した座標値は、すべて「日本測地系2011(JGD2011)」を用い、記された方位は座標北を示す。また、等高線や遺構断面図に記した値は、海拔標高値を示す。
- 2 遺構名称は、原則として調査時に付した名称・番号を踏襲したが、一部変更を加えたものについては、調査資料との整合性を保つため()内に旧称を併記した。
- 3 遺構の主軸方位は、座標北を基準として、カマドを有する住居はカマドがある壁を上にして縦中軸の傾きを、それ以外の遺構は長軸の傾きをそれぞれ計測した。
- 4 遺構計測値で、例えば一部が調査対象地外にあるなどして、全容が計測できない遺構については、()内に検出部の値を記した。
- 5 挿図の縮尺については、原則として以下のとおり掲載し、各図に縮尺を明記した。
〔遺構図〕 竪穴建物=1:60(カマド=1:30)、土坑・ピット=1:40、溝=1:80、水田=1:160(断面=1:80)
〔遺物図〕 土器・陶磁器 1:3、石器・石製品 1:1・1:2・1:3・1:4・4:5、金属製品 1:1・1:2
- 6 遺物観察表や土層注記文中の色調は、農林水産省技術会議監修、(財)日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』1996年版の色名を使用した。
- 7 本書で使用した地形図・地勢図(国土地理院)等の名称、および縮尺については、挿図ごとに記した。
- 8 遺物観察表の凡例については、別記(185頁)を参照。
- 9 挿図中で使用したトーンは、次のとおりである。

〔遺構図〕

平面図  焼土  硬化面  炭化物  粘土  灰

断面図  攪乱  As-B

〔遺物図〕

 スス  灰軸  黒色  漆  燻  朱墨

目次

序

例言・凡例

目次 挿図目次 表目次 写真目次

第1章 調査に至る経緯と周辺の環境

第1節 調査に至る経緯と調査経過	1
第2節 調査方法と整理方法	4
第3節 遺跡周辺の環境	6
第1項 地理的環境	6
第2項 歴史的環境	8
第4節 基本土層(土層堆積状況)	11

第2章 検出された遺構と遺物

第1節 下高田白山遺跡	15
第1項 竪穴建物・竪穴状遺構	15
第2項 掘立柱建物・柵列	130
第3項 礎石・集石・焼土	138
第4項 ビット・土坑・溝・畑	145
第5項 旧石器確認調査	171
第6項 遺構外出土遺物	175
第2節 下高田稲荷谷Ⅱ遺跡	212
第1項 竪穴建物	212
第2項 ビット・土坑	268
第3項 溝・水田	274
第4項 遺構外出土遺物	283
第3節 向原Ⅳ遺跡	301
第1項 畑・溝	301
第2項 土坑・ビット	313
第3項 遺構外出土遺物	319
第4項 旧石器時代	328

第3章 科学分析

第1節 下高田白山遺跡・下高田稲荷谷Ⅱ遺跡火山灰分析 [(株)火山灰考古学研究所]	356
第2節 下高田白山遺跡植物珪酸体・花粉分析報告 [(株)古環境研究所]	366
第3節 下高田白山遺跡出土漆製品の塗膜分析 [(株)パレオ・ラボ]	380
第4節 下高田稲荷谷Ⅱ遺跡出土の黒曜石製石核の産地推定 [(株)パレオ・ラボ]	382
第5節 黒色安山岩の原産地同定	385

第4章 まとめ

第1節 下高田白山遺跡出土の弥生土器について	387
第2節 遺跡概観	389

報告書抄録

写真図版 検出遺構
出土遺物

挿図目次

第1図	下高田白山道路・下高田橋荷谷Ⅱ道路 調査区設定図	71
第2図	道路位置図(1)(国土地理院1/200,000地形図「長野」平成24年5月1日、「宇都宮」平成23年6月1日発行を使用)	72
第3図	道路位置図(2)(国土地理院1/25,000地形図「松井田」平成14年7月1日発加工)	74
第4図	周辺道路位置図(1)(国土地理院1/25,000地形図「松井田」下仁田を加工)	75
第5図	周辺道路位置図(2)(とみわがWebまっす 富岡市都市計画図を加工)	76
第6図	下高田白山道路・下高田橋荷谷Ⅱ道路 基本土層図	77
第7図	下高田白山道路 1・2区全体図	78
第8図	下高田白山道路 3・4・5区全体図	79
第9図	1号型穴建物平・断面図及び出土遺物(1)	80
第10図	1号型穴建物掘り方平・断面図及び出土遺物(2)	81
第11図	1号型穴建物力マド平・断面図及び出土遺物(3)	82
第12図	1号型穴建物出土遺物(4)	83
第13図	2号型穴建物平・断面図	84
第14図	2号型穴建物掘り方平・断面図及び出土遺物(1)	85
第15図	2号型穴建物力マド平・断面図及び出土遺物(2)	86
第16図	3号型穴建物平・断面図	87
第17図	3号型穴建物掘り方平・断面図及び出土遺物(1)	88
第18図	4号型穴建物平・断面図	89
第19図	4号型穴建物掘り方平・断面図及び出土遺物(1)	90
第20図	4号型穴建物出土遺物(2)	91
第21図	5号型穴建物平・断面図及び出土遺物(1)	92
第22図	5号型穴建物力マド平・断面図及び出土遺物(2)	93
第23図	5号型穴建物出土遺物(3)	94
第24図	6号型穴建物平・断面図及び出土遺物	95
第25図	7号型穴建物平・断面図及び出土遺物	96
第26図	8号型穴建物平・断面図及び出土遺物	97
第27図	9号型穴建物平・断面図	98
第28図	9号型穴建物出土遺物	99
第29図	10号型穴建物平・断面図	100
第30図	10号型穴建物力マド平・断面図及び出土遺物(1)	101
第31図	10号型穴建物出土遺物(2)	102
第32図	11号型穴建物平・断面図及び出土遺物	103
第33図	12号型穴建物平・断面図及び出土遺物(1)	104
第34図	12号型穴建物力マド平・断面図及び出土遺物(2)	105
第35図	13号型穴建物平・断面図及び出土遺物	106
第36図	14・15号型穴建物平・断面図	107
第37図	14号型穴建物力マド平・断面図及び出土遺物(1)	108
第38図	14号型穴建物出土遺物(2)	109
第39図	15号型穴建物出土遺物	110
第40図	16・17号型穴建物平・断面図	111
第41図	16・17号型穴建物掘り方平・断面図及び出土遺物(1)	112
第42図	16・17号型穴建物力マド平・断面図	113
第43図	16号型穴建物出土遺物(2)	114
第44図	17号型穴建物出土遺物	115
第45図	18号型穴建物平・断面図	116
第46図	18号型穴建物力マド平・断面図及び出土遺物	117
第47図	19号型穴建物平・断面図	118
第48図	19号型穴建物出土遺物	119
第49図	20号型穴建物平・断面図	120
第50図	20号型穴建物力マド平・断面図及び出土遺物(1)	121
第51図	20号型穴建物出土遺物(2)	122
第52図	20号型穴建物出土遺物(3)	123
第53図	20号型穴建物出土遺物(4)	124
第54図	21号型穴建物平・断面図及び出土遺物(1)	125
第55図	21号型穴建物力マド平・断面図及び出土遺物(2)	126
第56図	22号型穴建物平・断面図及び出土遺物(1)	127
第57図	22号型穴建物掘り方・力マド平・断面図	128
第58図	22号型穴建物出土遺物(2)	129
第59図	23号型穴建物平・断面図	130
第60図	24号型穴建物平・断面図	131
第61図	24号型穴建物出土遺物	132
第62図	25号型穴建物平・断面図	133
第63図	25号型穴建物力マド平・断面図及び出土遺物	134
第64図	26号型穴建物平・断面図	135
第65図	26号型穴建物力マド平・断面図及び出土遺物	136
第66図	27号型穴建物平・断面図	137
第67図	27号型穴建物力マド平・断面図及び出土遺物	138
第68図	28号型穴建物平・断面図	139
第69図	29号型穴建物平・断面図及び出土遺物	140
第70図	30・31号型穴建物平・断面図	141
第71図	30・31・56号型穴建物掘り方平・断面図	142
第72図	30・31号型穴建物力マド平・断面図及び30号型穴建物出土遺物(1)	143
第73図	30号型穴建物出土遺物(2)	144
第74図	31号型穴建物出土遺物	145
第75図	32号型穴建物平・断面図及び出土遺物(1)	146
第76図	32号型穴建物出土遺物(2)	147
第77図	33・33号型穴建物平・断面図及び33号型穴建物出土遺物(1)	148
第78図	33号型穴建物力マド平・断面図	149
第79図	53号型穴建物力マド平・断面図及び出土遺物	150
第80図	33号型穴建物出土遺物(2)	151
第81図	34・35号型穴建物平・断面図及び34号型穴建物出土遺物	152
第82図	35号型穴建物力マド平・断面図及び出土遺物(1)	153
第83図	36号型穴建物平・断面図及び出土遺物(1)	154
第84図	36号型穴建物掘り方平・断面図及び出土遺物(2)	155
第85図	37号型穴建物平・断面図及び出土遺物	156
第86図	38号型穴建物平・断面図	157
第87図	38号型穴建物掘り方平面図及び出土遺物	158
第88図	38号型穴建物力マド平・断面図	159
第89図	39号型穴建物平・断面図及び出土遺物(1)	160
第90図	39号型穴建物力マド平・断面図及び出土遺物(2)	161
第91図	40号型穴建物平・断面図	162
第92図	40号型穴建物掘り方平・断面図及び出土遺物	163
第93図	41号型穴建物平・断面図	164
第94図	41号型穴建物掘り方平・断面図及び出土遺物(1)	165
第95図	41号型穴建物力マド平・断面図及び出土遺物(2)	166
第96図	42号型穴建物平・断面図及び出土遺物	167
第97図	43号型穴建物平・断面図及び出土遺物	168
第98図	44号型穴建物平・断面図	169
第99図	44号型穴建物出土遺物	170
第100図	45号型穴建物平・断面図及び出土遺物(1)	171
第101図	45号型穴建物力マド平・断面図及び出土遺物(2)	172
第102図	46号型穴建物平・断面図	173
第103図	46号型穴建物力マド平・断面図及び出土遺物(1)	174
第104図	46号型穴建物出土遺物(2)	175
第105図	46号型穴建物出土遺物(3)	176
第106図	46号型穴建物出土遺物(4)	177
第107図	47号型穴建物平・断面図	178
第108図	47号型穴建物力マド平・断面図及び出土遺物(1)	179
第109図	47号型穴建物出土遺物(2)	180
第110図	48号型穴建物平・断面図	181
第111図	48号型穴建物出土遺物	182
第112図	49号型穴建物平・断面図及び出土遺物	183
第113図	50号型穴建物平・断面図	184
第114図	50号型穴建物力マド平・断面図及び出土遺物(1)	185
第115図	50号型穴建物出土遺物(2)	186
第116図	51号型穴建物平・断面図及び出土遺物	187
第117図	52号型穴建物平・断面図	188
第118図	54号型穴建物平・断面図	189
第119図	55号型穴建物平・断面図及び出土遺物	190
第120図	4号型伏柱遺構・5号型伏柱遺構平・断面図	191
第121図	1号型竪立柱建物平・断面図	192
第122図	1号型竪立柱建物断面図及び出土遺物	193
第123図	2号型竪立柱建物平・断面図	194
第124図	3号型竪立柱建物・4号型竪立柱建物平・断面図	195
第125図	5号型竪立柱建物平・断面図	196
第126図	6号型竪立柱建物平・断面図	197
第127図	1号欄石平・断面図	198
第128図	1号礎石平・断面図、5～9号礎石位置図	199
第129図	1～4号礎石平・断面図及び3号礎石出土遺物	200
第130図	5～9号礎石平・断面図	201
第131図	1・2号礎石平・断面図及び出土遺物、3号礎石平・断面図	202

第132回	3号坑上出土遺物	143
第133回	4号坑上平・断面図及び出土遺物	144
第134回	1～19号ピット平・断面図	147
第135回	20～24・26・28～30・36・39・40・46・47号ピット平・断面図、4号ピット出土遺物	148
第136回	54～73・75号ピット平・断面図	149
第137回	77～90・92・94・96～100号ピット平・断面図	150
第138回	101・102・105・107～118・120・121・126・129・130・132号ピット平・断面図	151
第139回	134～148号ピット平・断面図	152
第140回	1～3号土坑平・断面図及び3号土坑出土遺物	153
第141回	4～7号土坑平・断面図及び4～6号土坑出土遺物	154
第142回	8～15号土坑平・断面図及び8～10号土坑出土遺物	155
第143回	16～20号土坑平・断面図及び16・18号土坑出土遺物	156
第144回	21～26号土坑平・断面図及び26号土坑出土遺物	157
第145回	27～31・33～35号土坑平・断面図及び29号土坑出土遺物	158
第146回	36～41号土坑平・断面図	159
第147回	42～47号土坑平・断面図	160
第148回	48～53号土坑平・断面図	161
第149回	1号溝平・断面図及び出土遺物	162
第150回	2号溝・3号溝平・断面図	163
第151回	3号溝出土遺物	164
第152回	4号溝平・断面図	165
第153回	6号溝・9号溝平・断面図	166
第154回	5号溝・7号溝平・断面図	167
第155回	8号溝平・断面図	168
第156回	10号溝平・断面図	169
第157回	1号堀平・断面図	170
第158回	3区B区石器試掘トレンチ位置図及び土層断面図	171
第159回	4区B区石器試掘トレンチ位置図及び土層断面図	172
第160回	5区トレンチ位置図及び土層断面図	173
第161回	3区・4区地形平・断面図	174
第162回	1区遺構外出土遺物(1)	175
第163回	1区遺構外出土遺物(2)	176
第164回	1区遺構外出土遺物(3)	177
第165回	1区遺構外出土遺物(4)	178
第166回	1区遺構外出土遺物(5)	179
第167回	1区遺構外出土遺物(6)	180
第168回	2区遺構外出土遺物(1)	181
第169回	2区遺構外出土遺物(2)	182
第170回	2区遺構外出土遺物(3)	183
第171回	3区遺構外出土遺物	183
第172回	4区・その他の遺構外出土遺物(1)	183
第173回	4区・その他の遺構外出土遺物(2)	184
〔下高田稲荷谷日遺跡〕		
第174回	下高田稲荷谷日遺跡 全体図	209
第175回	下高田稲荷谷日遺跡 1区B区石器試掘平・断面図	211
第176回	1号竪穴建物平・断面図	212
第177回	1号竪穴建物カマド平・断面図及び出土遺物(1)	213
第178回	1号竪穴建物出土遺物(2)	214
第179回	1号竪穴建物出土遺物(3)	215
第180回	2・3号竪穴建物平・断面図	216
第181回	2号竪穴建物出土遺物(1)	217
第182回	2号竪穴建物出土遺物(2)	218
第183回	4・5号竪穴建物平・断面図	219
第184回	4・5号竪穴建物掘り方平・断面図	220
第185回	4号竪穴建物出土遺物	221
第186回	5号竪穴建物出土遺物	221
第187回	6号竪穴建物平・断面図	222
第188回	6号竪穴建物カマド平・断面図及び出土遺物	223
第189回	7号竪穴建物平・断面図及び出土遺物	224
第190回	8号竪穴建物平・断面図及び出土遺物(1)	225
第191回	8号竪穴建物カマド平・断面図及び出土遺物(2)	226
第192回	8号竪穴建物出土遺物(3)	227
第193回	9号竪穴建物平・断面図	228
第194回	9号竪穴建物出土遺物	229
第195回	10号竪穴建物平・断面図	230
第196回	10号竪穴建物カマド平・断面図及び出土遺物	231
第197回	11号竪穴建物平・断面図及び出土遺物	232
第198回	12号竪穴建物平・断面図及び出土遺物(1)	233
第199回	12号竪穴建物カマド平・断面図及び出土遺物(2)	234
第200回	13号竪穴建物平・断面図	235

第201回	13号竪穴建物出土遺物	236
第202回	14号竪穴建物平・断面図及び出土遺物(1)	237
第203回	14号竪穴建物カマド平・断面図及び出土遺物(2)	238
第204回	14号竪穴建物出土遺物(3)	239
第205回	15号竪穴建物平・断面図	240
第206回	15号竪穴建物カマド平・断面図	241
第207回	15号竪穴建物出土遺物(1)	242
第208回	15号竪穴建物出土遺物(2)	243
第209回	16号竪穴建物平・断面図及び出土遺物	243
第210回	17号竪穴建物平・断面図	244
第211回	17号竪穴建物カマド平・断面図及び出土遺物	245
第212回	19号竪穴建物平・断面図	246
第213回	19号竪穴建物カマド平・断面図及び出土遺物	247
第214回	20号竪穴建物平・断面図及び出土遺物(1)	248
第215回	20号竪穴建物カマド平・断面図及び出土遺物(2)	249
第216回	20号竪穴建物出土遺物(3)	250
第217回	21号竪穴建物平・断面図	251
第218回	21号竪穴建物カマド平・断面図及び出土遺物(1)	252
第219回	21号竪穴建物出土遺物(2)	253
第220回	22号竪穴建物平・断面図	255
第221回	22号竪穴建物カマド平・断面図及び出土遺物(1)	256
第222回	22号竪穴建物出土遺物(2)	257
第223回	23号竪穴建物平・断面図及び出土遺物	258
第224回	24・25号竪穴建物平・断面図及び24号竪穴建物出土遺物	260
第225回	24・25号竪穴建物掘り方、25号竪穴建物カマド平	261
第226回	25号竪穴建物出土遺物(1)	262
第227回	25号竪穴建物出土遺物(2)	263
第228回	26号竪穴建物平・断面図及び出土遺物	263
第229回	27号竪穴建物平・断面図及び出土遺物	264
第230回	28・29号竪穴建物平・断面図	265
第231回	28・29号竪穴建物カマド平・断面図	266
第232回	28号竪穴建物出土遺物	267
第233回	29号竪穴建物出土遺物	267
第234回	1～8号ピット平・断面図	268
第235回	9～17号ピット平・断面図	269
第236回	1号土坑平・断面図及び出土遺物	269
第237回	2～5号土坑平・断面図及び出土遺物	270
第238回	6～10号土坑平・断面図及び出土遺物	271
第239回	11～13・16号土坑平・断面図及び出土遺物	272
第240回	14・15・19号土坑平・断面図及び出土遺物	273
第241回	1号溝・9号溝・10号溝平・断面図	275
第242回	5・6号溝出土遺物	276
第243回	2号溝・3・4号溝・5・6号溝・7号溝平・断面図	277
第244回	7号溝出土遺物	278
第245回	8号溝平・断面図及び出土遺物	279
第246回	水田平断面図	280
第247回	水田断面図	281
第248回	1・2区遺構外出土遺物	283
第249回	2区遺構外出土遺物(2)	284
第250回	3区遺構外出土遺物	284
第251回	4区遺構外出土遺物	285
第252回	5区・その他の遺構外出土遺物	285
〔原原IV遺跡〕		
第253回	1号堀、9号溝平・断面図及び1号堀出土遺物	302
第254回	2号堀、10号溝平・断面図	303
第255回	1・5号溝、2号溝平・断面図	305
第256回	3・4号溝平・断面図	306
第257回	6号溝平・断面図	307
第258回	7号溝平・断面図	309
第259回	周辺遺跡合成図	311
第260回	1～15号ピット平・断面図	314
第261回	16～40号ピット平・断面図	315
第262回	41～65号ピット平・断面図	316
第263回	66・67号ピット平・断面図	317
第264回	1～4号土坑平・断面図及び2・3号土坑出土遺物	317
第265回	5～7号土坑平・断面図及び5号土坑出土遺物	318
第266回	遺構外出土遺物	319
第267回	原原IV遺跡 遺跡全体図、旧石器調査範囲図	321
第268回	基本上層図	323
第269回	トレンチ断面図(1)	324
第270回	トレンチ断面図(2)	325
第271回	トレンチ断面図(3)	326

第272図	トレンチ断面図(4)	327
第273図	石部分布図	328
第274図	1～3号ブロック石部分布図	330
第275図	4～8号ブロック石部分布図	332
第276図	9～11号ブロック石部分布図	334
第277図	出土石器(1)	335
第278図	出土石器(2)	336
第279図	出土石器(3)	337
第280図	出土石器(4)	338
第281図	接合資料-1, 2, 3, 4	341
第282図	接合資料-5, 6	342
第283図	接合資料-7, 8	343
第284図	接合資料-9, 10, 11, 12, 13	344
第285図	接合資料-14, 15, 16, 17, 18, 20, 21	345
第286図	接合資料-19, 22, 23	346
第287図	接合資料分布図(1)	347
第288図	石器別分布図(1)	348
第289図	接合資料分布図(2)、石器別分布図(2)	349
[自然科学分析まとめ]		
第290図	地点1(下高田白山遺跡)の上層柱状図	352
第291図	地点2(下高田白山遺跡)の上層柱状図	363
第292図	下高田白山遺跡・下高田稲荷谷Ⅱ遺跡 写真図版	364

1	地点1・軽石A(透過光)	
2	地点1・軽石B(透過光)	
3	地点1・試料20(透過光)	
4	地点1・試料28(透過光)	
5	地点1・試料46(透過光)	
6	地点2・試料11(透過光)	
第293図	下高田白山遺跡：1区トレンチA南壁地点における植物珪体体分析結果	368
第294図	下高田白山遺跡の植物珪体体(プラント・オパール)	370
第295図	下高田稲荷谷Ⅱ遺跡：5区水田A南壁地点における植物珪体体分析結果	373
第296図	下高田稲荷谷Ⅱ遺跡：5区水田A南壁における花粉ダイアグラム	377
第297図	下高田稲荷谷Ⅱ遺跡の花粉・胞子	379
第298図	隕塵表面の赤外吸収スペクトル	381
第299図	分析対象遺物および建築断面構造	381
第300図	黒曜石産地分布図(東日本)	382
第301図	黒曜石産地分布図(東日本)別図(1)	384
第302図	黒曜石産地分布図(東日本)別図(2)	384
第303図	黒色火山岩製石器の薄片の偏光顕微鏡写真	386
第304図	下高田白山遺跡の湧生土器例	388
第305図	長野県荒山出土遺	388

表 目 次

第1表	下高田白山遺跡、下高田稲荷谷Ⅱ遺跡、向原IV遺跡の周辺遺跡・8〔下高田白山遺跡〕	
第2表	4区1号孤立柱建物計測表	131
第3表	1区2号孤立柱建物計測表	131
第4表	1区3号孤立柱建物計測表	132
第5表	1区4号孤立柱建物計測表	134
第6表	1区5号孤立柱建物計測表	134
第7表	1区6号孤立柱建物計測表	135
第8表	ピット計測表	145
第9表	土坑計測表	152
第10表	竪穴建物出土遺物観察表	186
第11表	孤立柱建物出土遺物観察表	202
第12表	集石出土遺物観察表	202
第13表	焼石出土遺物観察表	202
第14表	土坑、ピット出土遺物観察表	202
第15表	湧出出土遺物観察表	203
第16表	遺構外出土遺物観察表	204
[下高田稲荷谷Ⅱ遺跡]		
第17表	ピット計測表	268
第18表	土坑計測表	269
第19表	竪穴建物出土遺物観察表	286
第20表	土坑出土遺物観察表	297
第21表	湧出出土遺物観察表	298

第22表	遺構外出土遺物観察表	298
[向原IV遺跡]		
第23表	ピット計測表	313
第24表	土坑計測表	317
第25表	向原IV遺跡建物観察表	320
第26表	器種・石材構成	329
第27表	ブロック別器種構成	329
第28表	ブロック別石材構成	329
第29表	出土石器一覧表	350
[自然科学分析]		
第30表	地点1(下高田白山遺跡)におけるテフラ検出分析結果	359
第31表	地点2(下高田稲荷谷Ⅱ遺跡)におけるテフラ検出分析結果	360
第32表	屈折率測定結果	361
第33表	下高田白山遺跡における植物珪体体分析結果	367
第34表	下高田稲荷谷Ⅱ遺跡における植物珪体体分析結果	372
第35表	下高田稲荷谷Ⅱ遺跡における花粉分析結果	376
第36表	分析対象遺物	380
第37表	生漆の赤外吸収位置とその強度	380
第38表	無機物層のX線分析結果	380
第39表	隕塵分析結果	380
第40表	東日本黒曜石産地の判別簡	382
第41表	測定値および産地測定結果	383
第42表	分析試料一覧	385

写真目次

遺跡遺景		
P.L. 1	1 遺跡遠景 南西上空より	
P.L. 2	1 白山遺跡遠景 高田川上空より横野台地を望む	
	2 白山遺跡3・4・5区 遠景 北西上空より	
P.L. 3	1 白山遺跡3・4・5区 遠景 西上空より	
	2 白山遺跡3・4・5区 全景 上空より	
P.L. 4	1 白山遺跡4区南平部 遠景 北西より	
	2 白山遺跡1・2区東平部 全景 上空より	
P.L. 5	1 白山遺跡1・2区および稲荷谷Ⅱ遺跡5区 遠景 西上空より	
	2 稲荷谷Ⅱ遺跡5区(As-B下水田) 全景 上空より	
P.L. 6	1 稲荷谷Ⅱ遺跡1・2区 遠景 西上空より	
	2 稲荷谷Ⅱ遺跡1・2区 全景 上空より	
下高田白山遺跡		
P.L. 7	1 1号竪穴建物 全景 南西より	
	2 1号竪穴建物ピット1 遺物出土状態 南西より	
	3 1号竪穴建物ピット1 全景 南西より	
	4 1号竪穴建物ピット2 全景 南西より	
	5 1号竪穴建物ピット3 全景 南西より	

P.L. 8	1 1号竪穴建物 遺物出土状態 全景 南西より	
	2 1号竪穴建物 遺物出土状態 近景 南西より	
	3 1号竪穴建物 カマド 全景 南西より	
	4 1号竪穴建物 カマド 埋土断面 北西より	
	5 1号竪穴建物 カマド 埋土断面 南西より	
P.L. 9	1 2号竪穴建物 全景 南西より	
	2 2号竪穴建物 遺物出土状態 全景 南西より	
	3 2号竪穴建物 遺物出土状態 近景 南より	
	4 2号竪穴建物 遺物出土状態 近景 南より	
	5 2号竪穴建物 遺物出土状態 近景 南より	
P.L. 10	1 2号竪穴建物 カマド全景 南西より	
	2 2号竪穴建物 カマド埋土断面 南西より	
	3 2号竪穴建物 掘り方全景 南西より	
	4 2号竪穴建物 ピット1 全景 南西より	
	5 2号竪穴建物 ピット3 遺物出土状態 南西より	
	6 2号竪穴建物 ピット3 全景 南西より	
	7 2号竪穴建物 ピット4 全景 南西より	
	8 2号竪穴建物 カマド脇ピット 全景 南西より	
P.L. 11	1 3号竪穴建物 遺物出土状態 全景 南より	

	2	3号型穴建物	カマド埋上断面	北西より		5	21号型穴建物	遺物出土状態	全景	北西より		
	3	3号型穴建物	全景	南西より	P.L. 27	1	22号型穴建物	遺物出土状態	南より			
	4	4号型穴建物	遺物出土状態	全景		西より	2	22号型穴建物	掘り方	全景	南より	
	5	4号型穴建物	遺物出土状態	近景		西より	3	22号型穴建物	カマド埋上断面	南東より		
P.L. 12	1	4号型穴建物	全景	西より		4	23号型穴建物	掘り方	全景	南西より		
	2	4号型穴建物	カマド	全景		西より	5	24号型穴建物	遺物出土状態	全景	南より	
	3	4号型穴建物	遺物出土状態	近景	西より	6	24号型穴建物	遺物出土状態	近景	南より		
	4	4号型穴建物	カマド掘り方	全景	西より	7	24号型穴建物	全景	南西より			
	5	4号型穴建物	掘り方	全景	西より	8	24号型穴建物	カマド掘り方	南西より			
P.L. 13	1	5号型穴建物	全景	北西より	P.L. 28	1	25号型穴建物	全景	南西より			
	2	5号型穴建物	遺物出土状態	全景		北西より	2	25号型穴建物	遺物出土状態	南より		
	3	5号型穴建物	遺物出土状態	近景		北西より	3	25号型穴建物	カマド遺物出土状態	南西より		
	4	5号型穴建物	遺物出土状態	近景		北西より	4	25号型穴建物	掘り方	全景	南西より	
	5	5号型穴建物	掘り方遺物出土状態	全景		北西より	5	25号型穴建物	カマド	掘り方	南西より	
P.L. 14	1	6号型穴建物	全景	南より	P.L. 29	1	26号型穴建物	全景	西より			
	2	6号型穴建物	掘り方	全景		南西より	2	27号型穴建物	掘り方	全景	西より	
P.L. 15	1	7号型穴建物	全景	西より	P.L. 30	1	28号型穴建物	全景	西より			
	2	8号型穴建物	全景	西より		2	28号型穴建物	掘り方	全景	西より		
P.L. 16	1	9号型穴建物	遺物出土状態	全景		北西より	3	29号型穴建物	全景	北西より		
	2	9号型穴建物	遺物出土状態	近景		北西より	4	29号型穴建物	掘り方	全景	北西より	
	3	9号型穴建物	遺物出土状態	近景		北西より	5	30・31・49・52・54号型穴建物	重複状況	遠景	北西より	
	4	9号型穴建物	遺物出土状態	近景	北西より	P.L. 31	1	30号型穴建物	遺物出土状態	全景	北西より	
	5	9号型穴建物	掘り方	全景	西より		2	31号型穴建物	全景	北西より		
P.L. 17	1	10号型穴建物	全景	西より	P.L. 32	1	30号型穴建物	遺物出土状態	近景	北西より		
	2	10号型穴建物	遺物出土状態	全景		西より	2	30号型穴建物	掘り方	全景	北西より	
	3	10号型穴建物	カマド遺物出土状態	全景		西より	3	31号型穴建物	カマド	掘り方	全景	北西より
	4	10号型穴建物	掘り方遺物出土状態	全景		西より	4	31・49・56号型穴建物	掘り方	全景	北西より	
	5	10号型穴建物	掘り方	全景		南より	5	49号型穴建物	遺物出土状態	全景	北西より	
P.L. 18	1	11号型穴建物	カマド掘り方	全景	南より	6	49号型穴建物	掘り方	全景	北東より		
	2	11号型穴建物	掘り方	全景	西より	7	52号型穴建物	掘り方	全景	北西より		
	3	12号型穴建物	カマド	全景	西より	8	30・31・49・52・54号型穴建物	重複状況	遠景	南西より		
	4	12号型穴建物	カマド掘り方	全景	西より	P.L. 33	1	32号型穴建物	掘り方	全景	南西より	
	5	12号型穴建物	カマド掘り方	全景	西より		2	32号型穴建物	遺物出土状態	全景	南西より	
P.L. 19	1	13号型穴建物	掘り方	全景	西より		3	32号型穴建物	遺物出土状態	近景	南より	
	2	13号型穴建物	埋上断面	南より			4	32号型穴建物	遺物出土状態	近景	西より	
	3	13号型穴建物	遺物出土状態	近景	北東より		5	32号型穴建物	遺物出土状態	近景	西より	
	4	13号型穴建物	カマド掘り方埋上	南西より		P.L. 34	1	33号型穴建物	掘り方	全景	北西より	
	5	15号型穴建物	掘り方	全景	西より		2	33号型穴建物	掘り方	全景	北西より	
P.L. 20	1	14号型穴建物	遺物出土状態	全景	西より		P.L. 35	1	33号型穴建物	遺物出土状態	全景	北西より
	2	14号型穴建物	遺物出土状態	全景	南より			2	33号型穴建物	遺物出土状態	近景	北西より
	3	14号型穴建物	カマド	全景	西より			3	33号型穴建物	遺物出土状態	全景	南西より
	4	14号型穴建物	掘り方	全景	西より	4		33号型穴建物	遺物出土状態	近景	南西より	
	5	14号型穴建物	掘り方	全景	南より	5		33号型穴建物	第2カマド	遺物出土状態	北西より	
P.L. 21	1	16号型穴建物	遺物出土状態	近景	南より	6	33号型穴建物	第1カマド	掘り方	北西より		
	2	16号型穴建物	カマド掘り方	遺物出土状態	南より	7	33・53・54号型穴建物	第2カマド	掘り方	南西より		
	3	16号型穴建物	掘り方	全景	南より	8	33号型穴建物	重複状況	全景	南西より		
P.L. 22	1	17号型穴建物	遺物出土状態	全景	西より	P.L. 36	1	53号型穴建物	掘り方	全景	南西より	
	2	17号型穴建物	遺物出土状態	近景	南より		2	34号型穴建物	掘り方	全景	北西より	
	3	17号型穴建物	カマド埋上	西より			1	53号型穴建物	全景	北東より		
	4	17号型穴建物	カマド掘り方	埋上	西より		2	35号型穴建物	遺物出土状態	全景	北西より	
	5	16・17号型穴建物	掘り方	全景	西より	3	35号型穴建物	掘り方	工具痕			
P.L. 23	1	18号型穴建物	全景	北より	P.L. 37	4	35号型穴建物	カマド	掘り方	北西より		
	2	18号型穴建物	埋上断面	西より		5	35号型穴建物	掘り方	全景	北西より		
	3	18号型穴建物	掘り方	全景		北より	P.L. 38	1	36号型穴建物	掘り方	北西より	
	4	18号型穴建物	カマド2掘り方	北東より		2		36号型穴建物	遺物出土状態	全景	北東より	
	5	18号型穴建物	掘り方	全景		北より		3	36号型穴建物	遺物出土状態	近景	南西より
P.L. 24	1	19号型穴建物	掘り方	全景	西より	4		36号型穴建物	掘り方	全景	北東より	
	2	19号型穴建物	カマド	全景	西より	5		36号型穴建物	掘り方	全景	北東より	
	3	19号型穴建物	掘り方埋上	西より		P.L. 39	1	37号型穴建物	掘り方	全景	北西より	
	4	19号型穴建物	掘り方	全景	西より		2	37号型穴建物	掘り方	全景	北西より	
	5	19号型穴建物	掘り方	全景	北西より		3	38号型穴建物	遺物出土状態	全景	南西より	
P.L. 25	1	20号型穴建物	遺物出土状態	全景	西より		4	38号型穴建物	カマド	遺物出土状態	南西より	
	2	20号型穴建物	カマド埋上	南東より			5	38号型穴建物	掘り方	全景	南西より	
	3	20号型穴建物	遺物出土状態	全景	南西より	P.L. 40	1	39号型穴建物	遺物出土状態	全景	北西より	
	4	20号型穴建物	掘り方埋上	南より			2	39号型穴建物	カマド	遺物出土状態	北西より	
	5	20号型穴建物	掘り方	全景	南西より		3	39号型穴建物	カマド掘り方	北西より		
P.L. 26	1	21号型穴建物	遺物出土状態	全景	北西より		4	39号型穴建物	掘り方	全景	北西より	
	2	21号型穴建物	カマド	全景	北西より		5	39号型穴建物	掘り方土坑	北西より		
	3	21号型穴建物	掘り方	全景	北西より	P.L. 41	1	40号型穴建物	遺物出土状態	全景	南西より	
	4	21号型穴建物	カマド	掘り方	北西より		2	40号型穴建物	遺物出土状態	全景	北西より	

	3	40号型穴建物	遺物出土状態	近景	
	4	40号型穴建物	遺物出土状態	近景	
	5	40号型穴建物	柱穴	北より	
P.L. 42	1	41号型穴建物	全景	南西より	
	2	41号型穴建物	カマド	遺物出土状態	南西より
	3	41号型穴建物	振り方	全景	北西より
	4	41号型穴建物	振り方	近景	北東より
	5	41号型穴建物	振り方	工員前	近景
P.L. 43	1	42号型穴建物	全景	北西より	
	2	42号型穴建物	カマド	振り方	南西より
	3	43号型穴建物	全景	北西より	
	4	43号型穴建物	遺物出土状態	北西より	
	5	55号型穴建物	遺物出土状態	北東より	
P.L. 44	1	44号型穴建物	遺物出土状態	南東より	
	2	44号型穴建物	全景	北西より	
	3	45号型穴建物	全景	北西より	
	4	45号型穴建物	遺物出土状態	北西より	
	5	45号型穴建物	振り方	全景	北西より
P.L. 45	1	46号型穴建物	全景	南西より	
	2	46号型穴建物	遺物出土状態	南西より	
	3	46号型穴建物	カマド	遺物出土状態	西より
	4	46号型穴建物	振り方	全景	南西より
	5	46号型穴建物	カマド建物	出土状態	南東より
P.L. 46	1	47号型穴建物	全景	南西より	
	2	47号型穴建物	理上堆積状況	西より	
	3	47号型穴建物	カマド	遺物出土状態	南西より
	4	47号型穴建物	振り方	全景	南西より
	5	47号型穴建物	カマド	振り方	南西より
P.L. 47	1	48号型穴建物	全景	南西より	
	2	48号型穴建物	遺物出土状態	全景	南西より
	3	48号型穴建物	カマド	全景	南西より
	4	48号型穴建物	振り方	全景	南西より
	5	48号型穴建物	カマド	振り方	南西より
P.L. 48	1	50号型穴建物	遺物出土状態	全景	南西より
	2	50号型穴建物	カマド	遺物出土状態	南西より
	3	50号型穴建物	振り方	全景	南西より
	4	51号型穴建物	全景	南西より	
	5	51号型穴建物	全景	南より	
P.L. 49	1	4号型穴遺構	全景	南西より	
	2	5号型穴遺構	全景	南西より	
P.L. 50	1	1号孤立柱建物	遠景	北西より	
	2	3号孤立柱建物	全景	南西より	
P.L. 51	1	3・4・5号孤立柱建物	遠景	北東より	
	2	2・3・4・5号孤立柱建物	遠景	南西より	
P.L. 52	1	1号礎石	遠景	南より	
	2	1号礎石	遠景	西より	
P.L. 53	1	1号集石	全景	南より	
	2	2号集石	全景	南より	
	3	4号集石	全景	北西より	
	4	3号集石	全景	東より	
	5	6号集石	全景	南西より	
P.L. 54	1	3号礎上	検出状態	南より	
	2	3号礎上	新ち割り状態	西より	
	3	3号礎上	遺物出土状態	南より	
	4	4号礎上	検出状態	東より	
	5	4号礎上	遺物出土状態	東より	
P.L. 55	1	2号ビット	全景	南西より	
	2	5号ビット	全景	西より	
	3	12～21号ビット	遠景	西より	
	4	22～24・26・28～30号ビット	遠景	西より	
	5	6号孤立柱建物P8	全景	西より	
	6	134号ビット	全景	西より	
	7	145・146号ビット	全景	西より	
	8	57号ビット	全景	西より	
P.L. 56	1	70・90号ビット	全景	西より	
	2	75号ビット	全景	西より	
	3	83号ビット	全景	西より	
	4	100号ビット	全景	西より	
	5	102号ビット	全景	西より	
	6	1号孤立柱建物P4	全景	西より	
	7	4区ビット	遠景	西より	
	8	4区ビット	遠景	西より	

P.L. 57	1	1号土坑	全景	北より
	2	3号土坑	遺物出土状態	南より
	3	3号土坑	遺物出土状態	南より
	4	6号土坑	全景	南より
	5	7号土坑	全景	南より
	6	9号土坑	全景	南より
	7	10号土坑	全景	南より
	8	11号土坑	全景	南より
P.L. 58	1	13号土坑	全景	北より
	2	14号土坑	全景	南より
	3	16号土坑	埋上	南より
	4	16号土坑	全景	北より
	5	16・17・19号土坑	遠景	北より
	6	22号土坑	全景	南より
	7	23号土坑	全景	西より
	8	26号土坑	全景	西より
P.L. 59	1	28号土坑	全景	西より
	2	29号土坑	全景	西より
	3	30号土坑	配石状況	西より
	4	30号土坑	配石状況	西より
	5	30号土坑	全景	西より
P.L. 60	1	31号土坑	全景	西より
	2	1号孤立柱建物P3	全景	西より
	3	33号土坑	全景	西より
	4	35号土坑	全景	南より
	5	37号土坑	全景	南より
	6	38号土坑	埋上	南より
	7	41号土坑	全景	西より
	8	42号土坑	全景	西より
P.L. 61	1	1号溝	全景	北東より
	2	2号溝	全景	南東より
	3	3号溝	埋上	西より
	4	3号溝	全景	北東より
	5	3号溝	全景	北東より
	6	4号溝	埋上	南より
	7	4号溝	全景	北より
	8	5号溝	全景	東より
P.L. 62	1	7号溝	全景	南より
	2	8号溝	埋上	南より
	3	8号溝	全景	南より
	4	8号溝	全景	南より
	5	9号溝	全景	南より
	6	10号溝	全景	北より
	7	10号溝	全景	北より
	8	51号土坑(田口溝)	全景	西より

下高田橋荷谷目道路

P.L. 63	1	1号型穴建物	全景	北西より	
	2	1号型穴建物	遺物出土状態	北西より	
	3	1号型穴建物	カマド	遺物出土状態	北西より
	4	1号型穴建物	振り方	全景	北西より
	5	1号型穴建物	振り方	全景	北西より
P.L. 64	1	2号型穴建物	全景	南西より	
	2	2号型穴建物	遺物出土状態	南西より	
	3	2号型穴建物	遺物出土状態	東より	
	4	2号型穴建物	カマド	全景	南西より
	5	2号型穴建物	振り方	全景	南西より
P.L. 65	1	4・5・6号型穴建物	遺物出土状態	全景	北西より
	2	6号型穴建物	カマド	遺物出土状態	北西より
	3	4号型穴建物	カマド	遺物出土状態	北西より
	4	4号型穴建物	貯蔵穴	遺物出土状態	
	5	4号型穴建物	柱穴	南西より	
P.L. 66	1	4・5・6号型穴建物	全景	北西より	
	2	4・5・6号型穴建物	振り方	全景	北西より
P.L. 67	1	7号型穴建物	全景	北西より	
	2	7号型穴建物	振り方	全景	北西より
P.L. 68	1	8号型穴建物	全景	北西より	
	2	8号型穴建物	遺物出土状態	北西より	
	3	8号型穴建物	カマド	埋上	北より
	4	8号型穴建物	カマド	遺物出土状態	北西より
	5	8号型穴建物	振り方	全景	北西より
P.L. 69	1	9号型穴建物	遺物出土状態	全景	西より
	2	9号型穴建物	カマド	遺物出土状態	西より

	2	4号溝	埋土断面	西より		2	51号ビット	全景	南より	
	3	4号溝	埋土断面	西より		3	52号ビット	全景	南より	
	4	5号溝	全景	西より		4	53号ビット	全景	南より	
	5	6号溝	全景	西より		5	54号ビット	全景	西より	
P.L. 101	1	7号溝	全景	東より		6	55号ビット	全景	西より	
	2	7号溝	全景	西より		7	56号ビット	全景	西より	
P.L. 102	1	8号溝	全景	北より		8	57号ビット	全景	西より	
	2	8号溝	全景	北より	P.L. 114	1	58号ビット	全景	西より	
P.L. 103	1	7号溝	埋土断面	西より		2	59号ビット	全景	西より	
	2	8号溝	埋土断面	北より		3	60号ビット	全景	西より	
P.L. 104	1	北半部2面	溝・土坑・ビット	南より		4	61号ビット	全景	南より	
	2	北半部2面	溝・土坑・ビット	北より		5	62～65号ビット	全景	東より	
P.L. 105	1	南半部2面	ビット	遠景	北より	P.L. 115	1	62号ビット	全景	南より
	2	南半部2面	ビット	遠景	北より		2	62～65号ビット	全景	西より
	3	南半部2面	ビット	遠景	北より		3	63号ビット	全景	西より
	4	南半部2面	ビット	遠景	北より		4	64号ビット	全景	西より
	5	南半部2面	ビット	遠景	北より		5	65号ビット	全景	西より
P.L. 106	1	1号土坑	全景	南より		6	66号ビット	全景	南より	
	2	1号土坑	埋土断面	南より		7	67号ビット	全景	西より	
	3	2・3号土坑	全景	北より	P.L. 116	1	1号トレンチ石器出土状態	北より		
	4	5号土坑	全景	北より		2	16号トレンチ石器出土状態	南より		
	5	4号土坑	全景	西より		3	堆積層断面	東より		
	6	7号土坑	全景	西より	P.L. 117	1	24号トレンチ石器出土状態	東より		
P.L. 107	1	1号ビット	全景	南より		2	36号トレンチ石器出土状態	北より		
	2	2号ビット	全景	南より	P.L. 118	1	第4ブロック石器出土状態	西より		
	3	3号ビット	全景	南より		2	第5ブロック石器出土状態	北より		
	4	4号ビット	全景	南より	P.L. 119	1	第6ブロック石器出土状態	北より		
	5	5号ビット	全景	南より		2	旧石器調査風景			
	6	6号ビット	全景	南より	下高田白山遺跡出土遺物					
	7	7号ビット	全景	南より	P.L. 120	1号整穴建物・2号整穴建物(1)				
	8	8号ビット	全景	南より	P.L. 121	2号整穴建物(2)・3・4号整穴建物				
P.L. 108	1	9号ビット	全景	南より	P.L. 122	5・7・8号整穴建物・9号整穴建物(1)				
	2	10号ビット	全景	高より	P.L. 123	9号整穴建物(2)・10～13号整穴建物・14号整穴建物(1)				
	3	11号ビット	全景	南より	P.L. 124	14号整穴建物(2)・15号整穴建物・16号整穴建物(1)				
	4	12号ビット	全景	南より	P.L. 125	16号整穴建物(2)・17～19号整穴建物				
	5	13号ビット	全景	南より	P.L. 126	20号整穴建物(1)				
	6	14号ビット	全景	南より	P.L. 127	20号整穴建物(2)				
	7	15号ビット	全景	南より	P.L. 128	20号整穴建物(3)・21号整穴建物				
	8	16号ビット	全景	南より	P.L. 129	22・24～26号整穴建物				
P.L. 109	1	17号ビット	全景	南より	P.L. 130	27・29～31号整穴建物・32号整穴建物(1)				
	2	18号ビット	全景	南より	P.L. 131	32号整穴建物(2)・33・35号整穴建物				
	3	19号ビット	全景	南より	P.L. 132	36・38・39号整穴建物				
	4	20号ビット	全景	南より	P.L. 133	40・41号整穴建物				
	5	21号ビット	全景	高より	P.L. 134	42・44号整穴建物・45号整穴建物(1)				
	6	22号ビット	全景	高より	P.L. 135	45号整穴建物(2)・46号整穴建物(1)				
	7	23号ビット	全景	高より	P.L. 136	46号整穴建物(2)				
	8	24号ビット	全景	南より	P.L. 137	46号整穴建物(3)・48・49号整穴建物				
P.L. 110	1	25号ビット	全景	南より	P.L. 138	50・55号整穴建物・3号集石・3・4号横土				
	2	26号ビット	全景	南より	P.L. 139	4号ビット・6・10・18号土坑・3号溝・1区道溝外(1)				
	3	27号ビット	全景	南より	P.L. 140	1区道溝外(2)				
	4	28号ビット	全景	南より	P.L. 141	1区道溝外(3)・2区道溝外(1)				
	5	29号ビット	全景	南より	P.L. 142	2区道溝外(2)・3区道溝外・4区その他の道溝外				
	6	30号ビット	全景	南より	下高田稲荷谷Ⅱ遺跡出土遺物					
	7	31号ビット	全景	南より	P.L. 143	1号整穴建物・2号整穴建物(1)				
	8	32号ビット	全景	南より	P.L. 144	2号整穴建物(2)・4号整穴建物				
P.L. 111	1	33号ビット	全景	南より	P.L. 145	6・8号整穴建物				
	2	34号ビット	全景	高より	P.L. 146	9～12号整穴建物				
	3	35号ビット	全景	南より	P.L. 147	13・14号整穴建物				
	4	36号ビット	全景	南より	P.L. 148	15～17号整穴建物・20号整穴建物(1)				
	5	37号ビット	全景	南より	P.L. 149	20号整穴建物(2)・21号整穴建物(1)				
	6	38号ビット	全景	南より	P.L. 150	21号整穴建物(2)・22・23号整穴建物・25号整穴建物(1)				
	7	39号ビット	全景	南より	P.L. 151	25号整穴建物(2)・26・28・29号整穴建物・4・9・10・12・13・16号土坑・7・8号溝				
	8	40号ビット	全景	南より	P.L. 152	1～4区道溝外・5区その他の道溝外				
P.L. 112	1	41号ビット	全景	南より	向原IV遺跡出土遺物					
	2	42号ビット	全景	南より	P.L. 153	1号畑・2・3・5号土坑・道溝外・旧石器(1)				
	3	43号ビット	全景	南より	P.L. 154	旧石器(2)				
	4	44号ビット	全景	南より	P.L. 155	旧石器(3)・接合資料-1～8				
	5	45号ビット	全景	高より	P.L. 156	接合資料-9～20				
	6	46号ビット	全景	南より	P.L. 157	接合資料-21～24, 黒色山岩, 黒曜石				
	7	47号ビット	全景	南より	P.L. 158	赤井宮前道溝出土黒曜石原石・下高田稲荷谷Ⅱ遺跡出土黒曜石原石と石鏝				
P.L. 113	1	50号ビット	全景	南より						

第1章 調査に至る経緯と周辺の環境

第1節 調査に至る経緯と調査経過

第1項 調査に至る経緯

1. 道路整備計画

群馬県道194号宇田磯部停車場線は、富岡市宇田を起点に北進し、安中市磯部交差点から磯部温泉の温泉街を經由し、JR信越線磯部駅北口に至る延長5.85kmの一般道である。現在の道路は道幅が狭く、富岡市と安中市の境界付近では急カーブや急坂が連続し歩道也未整備であるため、通行の安全性や快適性に支障を来し、改善が望まれていた。県の掲げる「持続可能な地域づくり・まちづくり」「観光ネットワークの構築」との政策から、甘楽富岡地域と安中地域の周遊性向上と、安全で快適な通行を確保するため、バイパス道路の建設が計画され、富岡工区分の改良・整備が加えられることとなった。

2. 試掘調査

上記の事業対象地域が周知の埋蔵文化財包蔵地であることから、群馬県教育委員会文化財保護課(現、群馬県地域創生部文化財保護課)は、群馬県県土整備部道路整備課の要請に基づき、安中市、並びに富岡市教育委員会の協力のもと、下記のとおり埋蔵文化財試掘調査を実施した。

【下高田白山遺跡・下高田稲荷谷Ⅱ遺跡】

平成25年12月、事業対象地内において、後の下高田白山遺跡調査区1・2区に2号トレンチ、3区に1号トレンチ、4区に3号トレンチが、下高田稲荷谷Ⅱ遺跡調査区の1区に5号トレンチ、2区に4号トレンチ、3区に6号トレンチがそれぞれ設定され、小型重機を用いての掘削が行われた。結果、全てのトレンチ内において竪穴建物・土坑・溝の遺構が検出された。

平成29年10月、平成27年度に調査された調査区南東部の試掘調査が実施された。事業対象地5,840.6㎡に対して小型重機を用いて1m幅の試掘用トレンチを4条(箇所)、計74㎡を掘削した。1号トレンチにて竪穴建物跡を、3号トレンチよりピット3基の遺構が検出されたた

め、本調査が必要であるとの判断が下された。

【向原Ⅳ遺跡】

平成25年2月、安中市遺跡番号0420内の事業対象地2,631㎡に対して、小型重機を用いて1m幅の試掘用トレンチを2条(箇所)、計129㎡を掘削した。1号トレンチにおいて事業地北側には埋没谷が存在することを、また、2号トレンチにおいては溝3条と土坑1基・ピット4基を検出し、事業地内に遺構群が展開し、全域にわたり本調査が必要であるとの判断が下された。特に検出された溝のうち2条の溝は、隣接地で調査された古代の牧園連の溝の延長に当たる可能性が高いものと考えられた。

第2項 調査経過

【下高田白山遺跡・下高田稲荷谷Ⅱ遺跡】

平成27年、群馬県教育委員会文化財保護課(当時)の調整のもと、群馬県富岡土木事務所と公益財団法人群馬県埋蔵文化財事業団の間で委託契約が結ばれ、当該対象地の発掘調査が翌年1月から3月末までの間で実施された。調査対象地は、高田川左岸の横野台地南縁を樹脂状に浸食する谷を隔てた東西に在り、西側の稲荷谷Ⅱ遺跡の東端低地部(稲荷谷Ⅱ遺跡5区)は、当初周知の埋蔵文化財包蔵地に該当していなかったが、隣接部の状況から調査に際して新たに包蔵地認定がなされ、発掘調査に至った。隣接する二遺跡の調査面積は、7,724㎡を測る。

また、平成29年度に実施された試掘調査の結果から、平成27年度の下高田白山遺跡調査地点の南東に続く6,446㎡を対象に、平成31(令和元)年1月から3月末までの間で下高田白山遺跡の第二次発掘調査を実施した。

【向原Ⅳ遺跡】

平成28年、群馬県教育委員会文化財保護課(当時)調整のもと、群馬県富岡土木事務所と公益財団法人群馬県埋蔵文化財事業団の間で委託契約が結ばれ、当該対象地の発掘調査が翌年の1月～3月までの間で実施された。

次いで、平成28年度調査の継続調査として、平成29年4月～5月までの間、同遺跡の本線部分と接続道部分の発掘調査が実施された。

第1章 調査に至る経緯と周辺の環境

調査日誌(抜粋)

【平成27年度】

日付	下高田稲荷谷B遺跡	下高田白山遺跡(第一次)
1月4日	調査準備、打合せ、器材搬入	
1月5日	調査事務所整備、調査区設定、区長挨拶、安全対策	
1月6日	4区1面重機による表土除去作業開始	
1月7日	3区トレンチ掘削開始	
1月8日	4区1面道構確認作業開始	
1月14日	4区道構掘削作業開始	2区表土掘削作業開始
1月15日	4区ビット完了、1～3号竪穴建物調査開始	1区表土掘削作業開始
1月18日	降雪のため作業中止	
1月19日	除雪作業	
1月20日	3区調査表土掘削作業	2区表土掘削作業
1月21日	3区道構確認作業、4区1～3号竪穴建物調査	
1月25日	3区4～6号竪穴建物掘削作業、4区竪穴建物調査	2区道構確認作業
1月26日	2区調査区設定、3区道構調査、4区道構確認作業	2区道構確認作業
1月27日		2区1～3号竪穴建物掘削作業
1月29日	降雪のため作業中止	
2月2日	1・2区環境整備、3区道構確認、5区調査準備	2区1～5号竪穴建物・土坑・ビット調査
2月3日	3区道構確認作業、5区As-B上面道構確認作業	2区1～8号竪穴建物他調査
2月5日	模型ヘリコプターによる空中写真撮影	
2月8日	1区道構確認作業、5区As-B軽石除去作業	2区1～8号竪穴建物・土坑調査
2月10日	1区7～12号竪穴建物掘削、5区As-B下水田検出作業	2区1～9号竪穴建物調査、旧石器確認調査
2月11日	1区道構調査、2区表土除去作業、5区水田調査	1区表土掘削～道構調査、2区旧石器確認調査
2月16日	1区8～14号竪穴建物調査、5区水田調査	1区道構確認～10号竪穴建物掘削、2区旧石器確認調査
2月17日	1区竪穴建物調査、2区道構確認、5区2～7号溝調査	1区10号竪穴建物調査、2区旧石器確認調査
2月18日	5区溝調査、一部埋め戻し	2区谷部As-B掘土掘り下げ
2月23日	1区竪穴建物、2区17～20号竪穴建物・溝・土坑調査	1区10～14号竪穴建物調査、2区谷部掘り下げ
2月26日	1区・2区竪穴建物調査、5区埋め戻し	1区11～15号竪穴建物、2区6号土坑・3号集石調査
3月1日	第2回空中写真撮影	
3月2日	1区道構・旧石器確認調査、2区道構調査	1区12～14号竪穴建物、2区9号竪穴建物・土坑等調査
3月3日	1区旧石器確認、2区15～27号竪穴建物等調査	1区竪穴建物、2区竪穴建物・14・15号土坑等調査
3月8日	1区旧石器確認、2区15～29号竪穴建物等調査	1区16・17号竪穴建物・9～14号土坑調査
3月9日	降雪のため作業中止	
3月11日	1区旧石器確認、2区道構調査・旧石器確認調査開始	1区道構調査・谷部調査
3月12日	休日調査実施	
3月13日	降雪のため作業中止	
3月16日	2区道構調査・旧石器調査	1区・2区道構調査、1区谷部調査
3月17日	1区旧石器確認調査、2区道構調査・旧石器確認調査	
3月24日	調査終了	
3月25日	撤収・埋め戻し作業	
3月30日	撤収・埋め戻し完了	

【平成30年度】

日付	下高田白山遺跡(第二次)
12月14日	調査準備
12月18日	現地打ち合わせ
12月20日	調査事務所設置・整備
1月4日	器材搬入
1月8日	調査事務所・駐車場整備、調査区整備、掘削・測量業者打ち合わせ
1月9日	調査区設定作業、観測西隣確認作業
1月11日	草木伐採・表土掘削作業～道構確認作業開始
1月16日	道構掘削・調査開始(4・5号竪穴建物・1号溝、12・13号土坑)、富岡市水道局確認、安全巡回、測量基準杭設置
1月17日	道構掘削・調査(1号礎石・18号竪穴建物)、全景写真撮影
1月18日	道構確認及び道構調査(3号溝・14号土坑・ビット12～21・18号竪穴建物)
1月21日	道構確認及び道構調査(2～4号溝・ビット22～7・8号集石)、富岡市水道局来訪、遺跡内水道管の確認
1月22日	道構確認及び道構調査(1号溝・ビット22～33)
1月23日	道構確認及び道構調査(5号溝・20～26号竪穴建物検出・ビット22～35・7・8号集石)
1月24日	道構確認及び道構調査(6号溝・15号土坑・ビット12～21、22～35、南斜面部調査、防塵シート敷設)
1月25日	道構確認及び道構調査(7号溝)、富岡土木事務所係員来訪
1月26日	4区南東防塵ネット設置工事
1月28日	道構確認及び道構調査(7・8・9号溝、18～20・22～24・28号竪穴建物)、現場安全点検

第1節 調査に至る経緯と調査経過

1月29日	遺構調査(21・25・26号竪穴建物、16～20号土坑・36～47号ピット)、断面にて敷間にAs-Aが溜まった畑を検出
1月30日	遺構調査(20～27号竪穴建物・16～20号土坑、富岡市水道局来訪、搬出路を東に付け替え
1月31日	遺構調査(20～27号竪穴建物)、NTT日本電柱確認、地元住民見学、安全対策打ち合わせ、午後から小雨
2月5日	遺構確認及び遺構調査(18～27号竪穴建物・ピット48～57)、表土掘削作業は終了、安全柵(単管パイプ)設置
2月8日	遺構調査(20・25・26号竪穴建物)、4区南側遺構確認作業、竪穴建物・溝確認
2月12日	遺構調査(20・25・26号竪穴建物、8号溝、21～24号土坑、4区22・42・43・46・47・50・51号竪穴建物・10号溝調査)
2月13日	遺構調査(3区20・25・26号竪穴建物、4区22・42・43・46・47・50・51号竪穴建物、25号土坑)調査、安全巡回点検
2月14日	遺構調査(3区25・20号、4区23・42・43・46・47・50号竪穴建物)、36・38～41・44・45号竪穴建物調査開始
2月18日	遺構調査(3区20号竪穴建物、4区23・32・33・36・38～47・50号竪穴建物)
2月19日	午後、降雨のため作業休止
2月20日	遺構調査(4区29～37・39・42・43・45～47・50・51号竪穴建物)、4区48・49号竪穴建物調査開始
2月25日	遺構調査(4区30～36・38～41・43～46・48・50・51号竪穴建物)、午後、安全点検巡回
2月28日	降雨のため現場休止、富岡土木事務所・建設業者と埋め戻しの打ち合わせ
3月4日	降雨のため作業休止、警察より4区南で車が左路肩に突っ込み安全看板を破損との連絡あり確認
3月6日	4区遺構調査(4区30・31・33・38～43・45～48・51号竪穴建物)、午後は航空写真撮影準備、安全点検巡回
3月7日	航空写真撮影、4区遺構調査(4区30・31・33・38～43・45～48・51号竪穴建物)
3月11日	4区遺構調査(30～33・38～43・45～48・51～54号竪穴建物)、3区旧石器確認トレンチ調査
3月12日	4区遺構調査(30～33・38～43・45～48・51～54号竪穴建物)、3区・4区旧石器確認トレンチ調査
3月13日	4区30～33・49・52～54号竪穴建物調査終了、3区・4区旧石器確認トレンチ調査、5区NTT電話線工事
3月18日	旧石器調査(トレンチ3箇所終了、トレンチ4・5・6継続、トレンチ7開始)、3区埋め戻し作業開始
3月20日	旧石器調査(トレンチ4・5・6・7)、3区埋め戻し終了、4区埋め戻し開始、安全巡回点検
3月25日	旧石器調査5区トレンチ調査、駐車場復旧作業、埋め戻し継続、キャリーダンプ・油漬庫等返却
3月26日	調査終了、器材撤収作業、埋め戻し継続、駐車場復旧作業
3月29日	器材搬出、重機作業終了～搬出

【平成28年度】

日付	向原IV遺跡(第一次)
1月4日	調査準備、打合せ、器材搬入
1月5日	安全対策、調査区東半部重機による表土除去作業開始
1月6日	調査区東半部遺構確認作業～南東部遺構(ピット)掘削
1月9日	休止
1月10日	調査区南東部遺構調査開始
1月12日	調査区南部旧石器確認調査開始
1月13日	As-A下1号溝調査、旧石器確認調査
1月16日	1号溝・1号溝・旧石器確認調査
1月17日	調査区北半部溝確認、旧石器3号トレンチ内遺物出土
1月18日	旧石器1～4号トレンチ掘削
1月26日	調査区北半部遺構(土坑・溝・ピット)掘削・調査
1月27日	強風のため一時作業休止
1月30日	調査区北側より埋め戻し開始
1月31日	調査終了、器材等撤去

【平成29年度】

日付	向原IV遺跡(第二次)
4月6日	調査準備、打合せ、器材搬入
4月7日	安全対策、重機による伐根～表土除去作業開始
4月10日	表土除去、調査区南側遺構確認～As-A下6号溝・溝調査
4月11日	降雨のため作業休止
4月12日	調査区中央部でAs-B下溝(古代牧園連)検出
4月13日	東側調査区で南北方向の古代牧園連の溝を検出
4月14日	7・8号溝掘削、南側調査区全景写真撮影
4月19日	ドローンによる空中写真撮影
4月21日	旧石器確認トレンチ調査開始
4月24日	ほぼ全域に及び、各旧石器確認トレンチより石器出土
5月2日	作業員を増員し、旧石器調査を継続
5月27日	休日、旧石器調査継続
5月30日	調査終了
5月31日	撤収作業

第2節 調査方法と整理方法

第1項 調査方法

【下高田白山・下高田稲荷谷Ⅱ遺跡】

調査に際し、対象地内を横断する生活道や地形変換点を境として、それぞれの遺跡に調査区を設定した。谷を挟んで南東側に位置する白山遺跡においては、南側から1区、2区の調査区を設定し、対岸の稲荷谷Ⅱ遺跡においては、北西側から1区、2区、3区、4区、5区の調査区を設定した。また、下高田白山遺跡の第二次調査においては、1・2区に接した北西側より3区・4区・5区の調査区を設定した。〔調査区設定図を参照〕

事業用地内での調査事務所用地の確保が難しいため、調査区外に借地をして事務所・駐車場を設置した。

調査に先駆けての安全対策として、調査区の周囲に安全柵や防護ネットを巡らし、各種注意看板を設置して立ち入りの禁止と危険箇所の明示を行った。

表土の掘削に際しては、試掘調査の結果を参考に調査区ごとに掘削深度を策定し、主に大型の重機(バックホー・不整地運搬車)を用いて表土の除去や埋め戻しを行ったが、調査開始当初は大型掘削重機の進入が難しく、搬入路確保のために人力による表土除去も行った。掘削土は、事業地内での仮置きが困難なため、隣接地を借地し排土置き場とした。いずれの状況においても安全を重視し、オペレーターとの打合せ、安全巡視員による指導、かつ公道や水路の環境保護などを心がけた。

遺構の掘削に際して、作業環境の整備も含め、遺跡掘削工事請負業者に委託して行った。

調査の記録に際し、測量用基準・水準杭の設置から遺構平・断面図測量等の地上測量業務を専門業者に委託して行い、計測に際しては、世界測地系(日本測地系2011、JGD2011)を基準とした。また、ドローンや模型ヘリコプターを用いた上空からの空中写真撮影についても同様に専門業者に委託して行った。

写真の記録は調査担当者が行い、35mmデジタル一眼レフカメラを主に、一部に中型プロローニー判フィルムカメラ(モノクロフィルム)を用いて撮影を行った。

【向原Ⅳ遺跡】

第一次・第二次共に、調査範囲が限られていたため、調査区の分割設定は行われなかった。便宜上の呼称として、第一次調査では本線部の南北に長い調査区であったため、調査区北側・南側、第二次調査では調査区が十字状を呈しているため、東調査区・南調査区といった呼び方が用いられた。

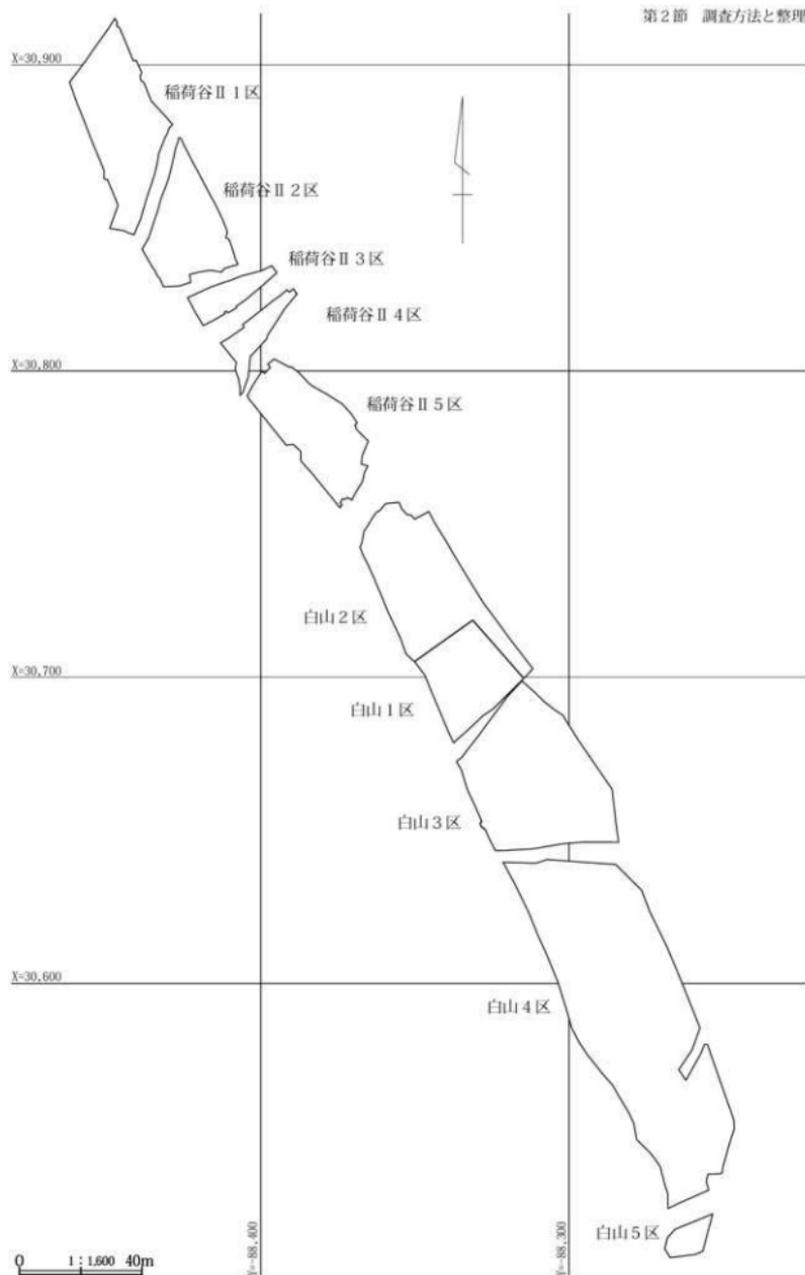
表土・遺構の掘削、調査の記録に関しては、前述の下高田白山遺跡・下高田稲荷谷Ⅱ遺跡に同じである。

第2項 整理方法

整理作業は、発掘調査時に記録された遺構平・断面図の整合性の確認および修正、同写真の選出、出土遺物の接合・復元・図化・観察・写真撮影や金属遺物など脆弱遺物の保存処理、検出遺構と出土遺物に関する原稿執筆、報告書掲載図・文・写真のレイアウトおよび版組を行い、印刷用デジタル原稿データの作成を行った。これを基に指名競争入札を行い、印刷業者による印刷・製本を経て、全国の関係機関等への発送、出土遺物・調査資料の保管用収納の作業を実施した。

遺構名称については、原則として調査時に付した名称・番号を踏襲したが、整合性を保つため、一部に変更を加え新たな名称と番号を付した。変更した遺構については旧称を()内に記した。

調査時に於いて、座標軸を基に設定された「グリッド」については、その分割単位や呼称方法が調査年度により不統一であったため、報告時にはこれを用いず、座標値のX・Yそれぞれの下3桁を組み合わせて位置の呼称とした。



第1図 下高田白山遺跡・下高田稲荷谷Ⅱ遺跡 調査区設定図

第3節 遺跡周辺の環境

第1項 地理的環境

〔遺跡の位置〕

本報告書所収の3遺跡は、群馬県の南西部、富岡市と安中市の境界に位置し、富岡市役所より北西に3.8km、安中市役所より南西に6.8km、最寄りの公共交通機関では、JR東日本信越本線磯部駅より南へ約2.6km、上信電鉄上信線上州一ノ宮駅より北西へ約2.7kmの位置に在る。

下高田白山遺跡と下高田稲荷谷Ⅱ遺跡の地番は、群馬県富岡市妙義町下高田(しもたかた)に在り、平成18(2006)年に旧甘楽郡妙義町と富岡市が合併したことにより、現在は富岡市に属する。向原Ⅳ遺跡は、南側が富岡市妙義町下高田、北側が安中市中野谷に属す。

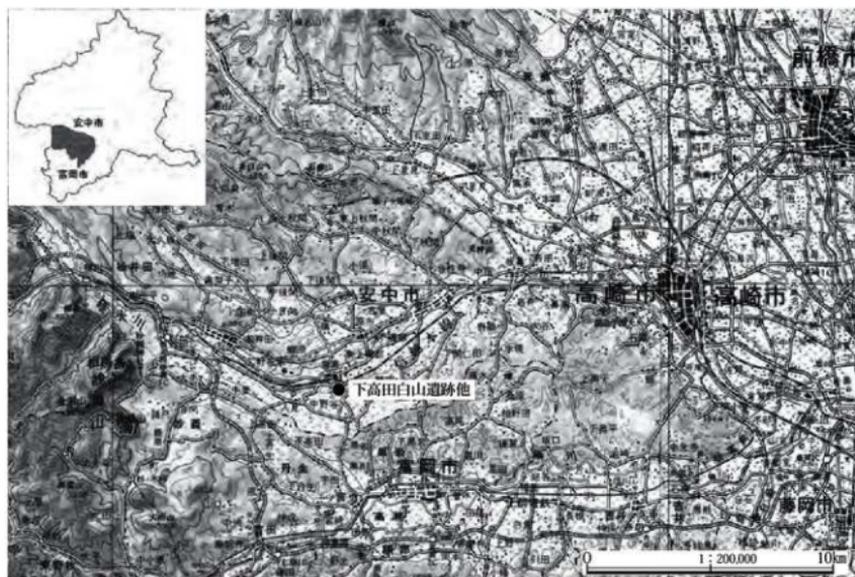
富岡・安中の両市は、関東平野の北西端に位置し、西には切り立った岩壁が屏風のような姿でそそり立ち、その急峻で険しい山容が日本三大奇景(勝)のひとつに数えられる妙義山(最高峰1,103.8~1,162.1m)が聳え、富岡

市内には上野国一ノ宮貫前神社や、2014年に世界遺産登録された富岡製糸場などがある。

交通網の鉄道面として、かつては信越本線が碓氷峠を越えて東京―長野・直江津―新潟間を結び、現在はこれに変わり、北陸新幹線が東京―長野―金沢間を結んでいる。一方、道路面では、国道18号線が入山峠・碓氷峠を越えて軽井沢へ、国道254号線が内山峠を越えて佐久へ、上信越自動車道が八風山トンネルを抜けて佐久・小諸方面へと、いくつかのルートで本県と長野県を結び、鉄道と道路の両面で、交通の要衝となっている。

〔遺跡の立地〕

群馬県と長野県の県境に位置する碓氷峠に源を發し、安中市内を流れる碓氷川の右岸上位段丘面に東西に広がる横野台地南辺を、妙義山岩峰のひとつ金鶏山(標高856.1m)南麓に源を發し東流する高田川が、左岸に比高差50~60mの段丘崖を形成する。この台地南辺部には湧水点が点在し、高田川へと向かう樹枝状の開析谷が複雑な地形を形成し、遺跡はこの開析谷に挟まれた台地端に展開する。一方、高田川の右岸は微高地となり、川の両

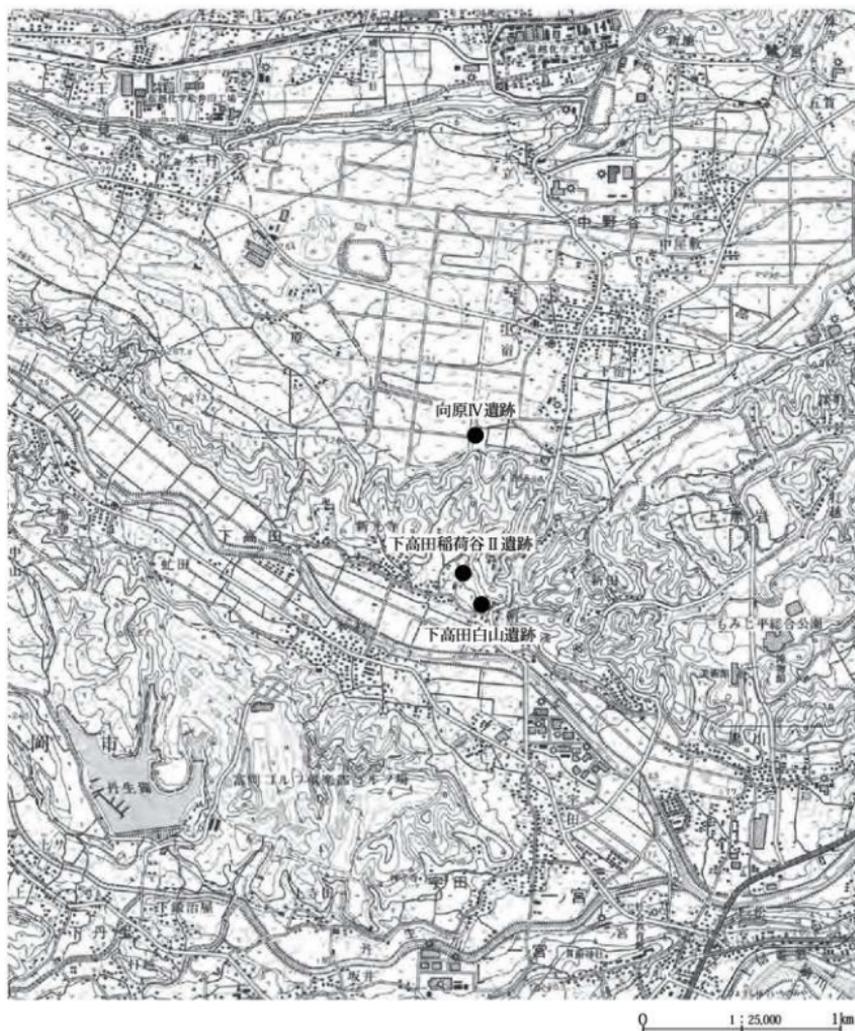


第2図 遺跡位置図(1) (国土地理院1/200,000地勢図「長野」平成24年5月1日、「宇都宮」平成23年6月1日発行を使用)

岸の沖積面には水田が帯状に広がる。

下高田白山遺跡と同稲荷谷Ⅱ遺跡の調査において、台地縁辺付近の検出遺構に地山土の削平がみられ、地域住民の方より昭和10年に土砂の流失があったことを伝え聞

いた。これは、古い地滑り地形が昭和10年9月の台風上陸に伴う豪雨による災害で、特に烏川・碓氷川・吾妻川流域に土石流や山崩れの被害を及ぼした、通称「烏川災害」と呼ばれる災害の爪痕と推察される。

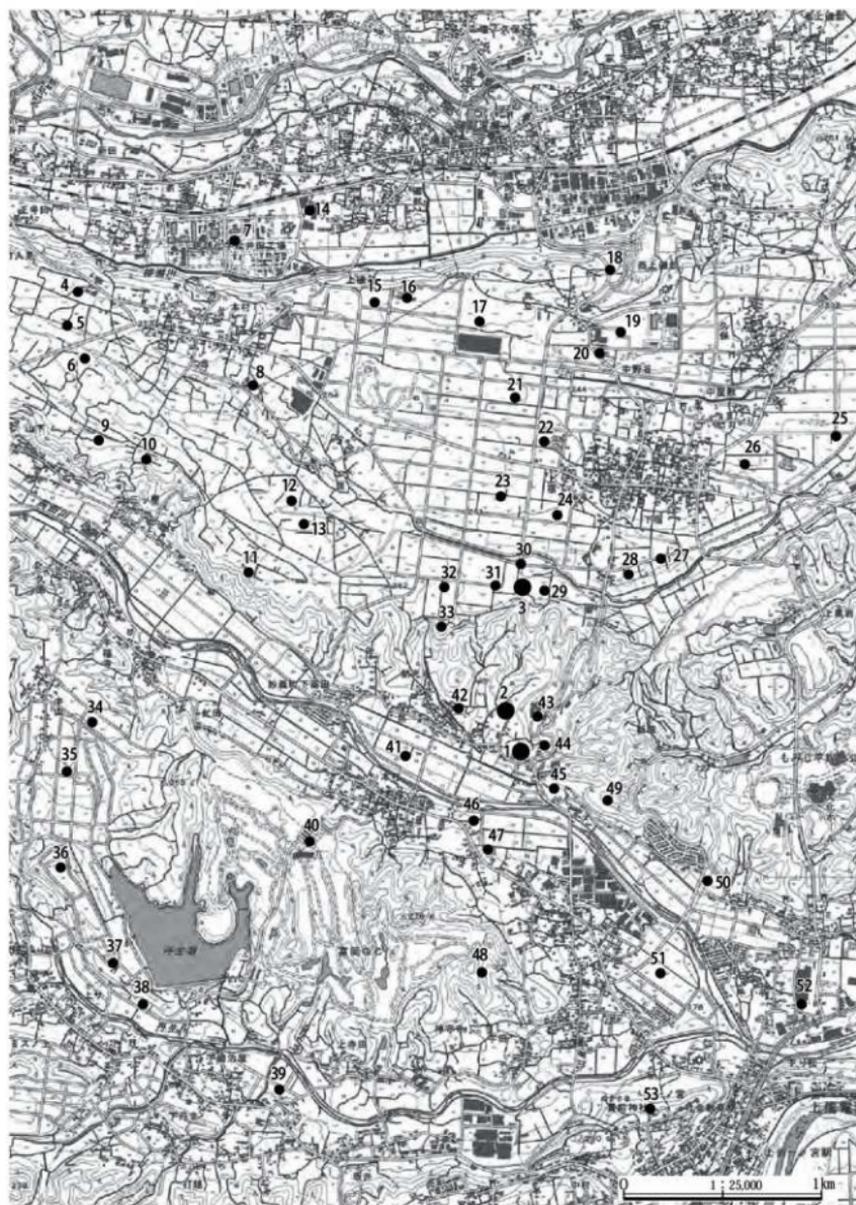


第3図 遺跡位置図(2) (国土地理院1/25,000地形図「松井田」平成14年7月1日を加工)

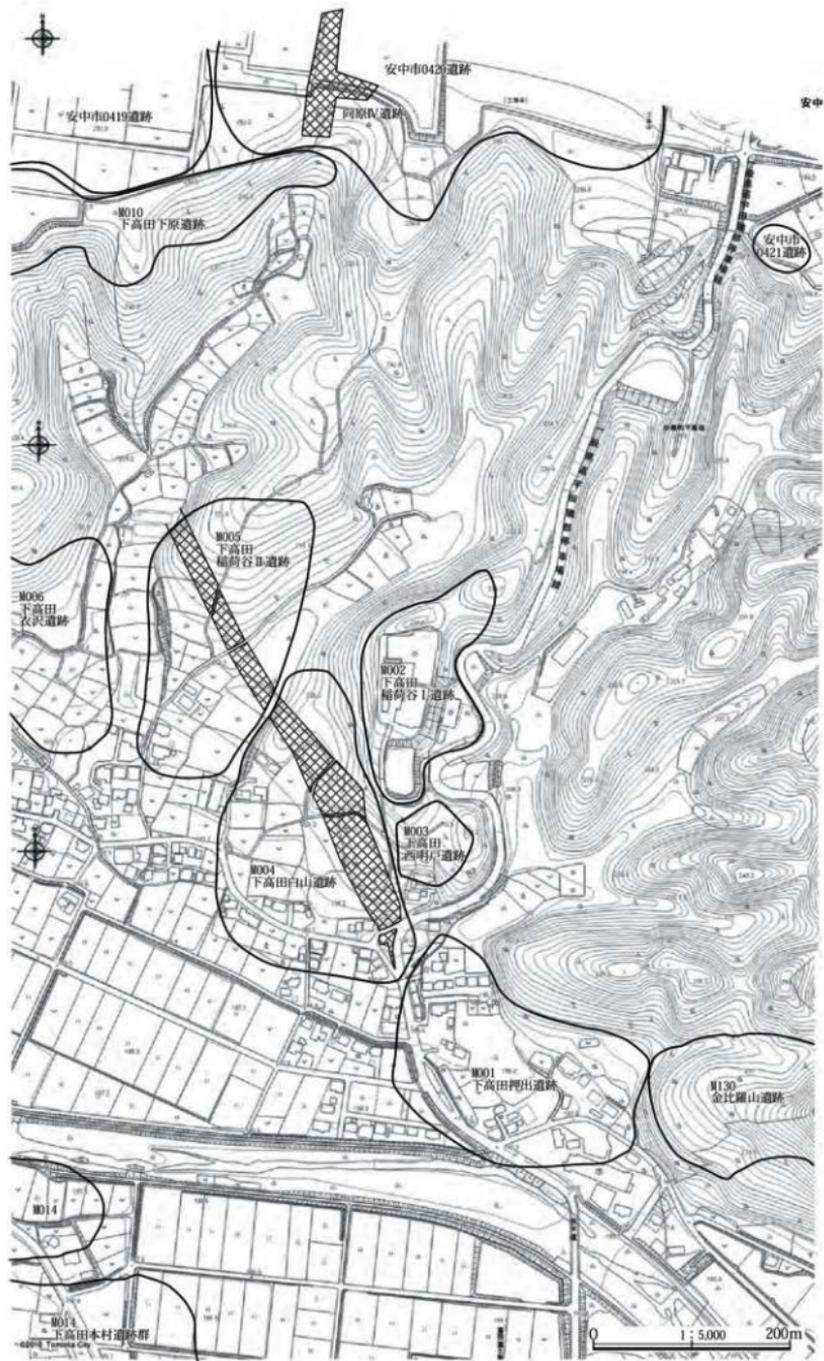
第2項 歴史的環境

第1表 下高田白山道跡、下高田稲荷谷Ⅱ道跡、向原Ⅳ道跡の周辺道跡

No	道跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良 平安	中世	近世	文 献
1	下高田白山道跡			○		○			本報告
2	下高田稲荷谷Ⅱ道跡					○			本報告
3	向原Ⅳ道跡	○				○			本報告
4	人見坂ノ上道跡		○		○				安中市教育委員会「西横野中部地区道跡群」2017
5	人見西原道跡		○		○				安中市教育委員会「西横野中部地区道跡群」2017
6	上人見道跡			○	○				安中市教育委員会「西横野東部地区道跡群」2014
7	松井田工業団地道跡		○	○		○			松井田町教育委員会「松井田工業団地道跡」1990
8	人見東原・Ⅱ道跡		○	○		○			安中市教育委員会「西横野東部地区道跡群」2014
9	上高田筑前上道跡				○	○			富岡市教育委員会「下高田上原道跡Ⅱ 下高田筑前上道跡」2011
10	下高田原Ⅳ道跡		○	○	○				富岡市教育委員会「下高田上原道跡 下高田原Ⅳ道跡」2011
11	下高田上原道跡				○	○			富岡市教育委員会「下高田上原道跡 下高田原Ⅳ道跡」2011
12	人見枝谷津道跡		○	○	○				安中市教育委員会「西横野東部地区道跡群」2014
13	人見東向原道跡			○	○	○			安中市教育委員会「西横野東部地区道跡群」2014
14	西裏道跡		○	○	○	○			安中市教育委員会「西裏道跡」2005
15	上北原道跡			○	○				安中市教育委員会「中野谷地区道跡群Ⅱ」2004
16	中野谷原道跡		○	○	○				安中市教育委員会「中野谷地区道跡群Ⅱ」2004
17	加賀塚道跡			○	○				安中市教育委員会「加賀塚道跡Ⅰ」2007 安中市教育委員会「加賀塚道跡Ⅱ」2011
18	長谷津道跡		○	○	○				財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団「長谷津道跡」2012
19	中野谷松原道跡	○	○	○	○				安中市教育委員会「中野谷松原道跡」1998
20	天神原道跡		○	○	○				安中市教育委員会「中野谷地区道跡群」1994 安中市教育委員会「中野谷地区道跡群Ⅱ」2004
21	中島道跡			○	○	○			安中市教育委員会「中野谷地区道跡群Ⅱ」2004
22	砂押道跡					○			安中市教育委員会「中野谷地区道跡群Ⅱ」2004
23	大道南道跡		○						安中市教育委員会「中野谷地区道跡群Ⅱ」2004
24	上京南道跡								安中市教育委員会「中野谷地区道跡群Ⅱ」2004
25	中原道跡		○	○	○				安中市教育委員会「中野谷地区道跡群」1994
26	東畑道跡								安中市教育委員会「中野谷地区道跡群」1994
27	棚田道跡			○	○	○			安中市教育委員会「中野谷地区道跡群」1994 安中市教育委員会「中野谷地区道跡群」1994 安中市教育委員会「中野谷地区道跡群」1994 安中市教育委員会「中野谷地区道跡群」1994
28	和久田道跡								安中市教育委員会「中野谷地区道跡群」1994 安中市教育委員会「中野谷地区道跡群」1994
29	向原Ⅲ道跡			○	○	○			安中市教育委員会「向原Ⅲ道跡」2007
30	向原Ⅱ道跡			○					安中市教育委員会「中野谷地区道跡群Ⅱ」2004
31	向原道跡								安中市教育委員会「中野谷地区道跡群Ⅱ」2004
32	西向原道跡			○	○				安中市教育委員会「向原Ⅲ道跡」2007
33	下高田下原道跡			○	○				
34	上丹生早道場道跡			○	○	○			富岡市教育委員会「丹生地区道跡群」2009
35	上丹生屋敷山道跡			○	○	○			富岡市教育委員会「丹生地区道跡群」2009
36	丹生東城跡						○		富岡市教育委員会「丹生地区道跡群」2009
37	下丹生中山Ⅰ道跡		○	○	○				富岡市教育委員会「丹生地区道跡群」2009
38	下丹生中山Ⅱ道跡			○	○	○			富岡市教育委員会「丹生地区道跡群」2009
39	下丹生小川道跡		○	○	○				富岡市教育委員会「丹生地区道跡群」2009
40	高田城跡				○	○			富岡市・妙義町教育委員会・高田城址調査会「高田城址」1991
41	前期高田館						○		妙義町教育委員会「妙義東部道跡群(Ⅱ)」1989
42	下高田衣沢道跡			○	○				
43	下高田稲荷谷Ⅰ道跡								
44	下高田西門ノ下道跡						○		
45	下高田押出道跡			○	○	○		○	
46	下高田畑郷道跡		○	○	○				妙義町教育委員会「妙義東部道跡群」1987
47	下高田高島井道跡		○	○	○				妙義町教育委員会「妙義東部道跡群(Ⅱ)」1989
48	宇田城跡						○		富岡市教育委員会・宇田城址調査会「宇田城址」1990
49	金比羅山の砦							○	群馬県教育委員会「群馬県の中世城館跡」1988
50	東八木道跡			○	○	○			富岡市教育委員会「東八木道跡、阿曾岡・権現堂道跡」1997
51	阿曾岡・権現堂道跡								富岡市教育委員会「東八木道跡、阿曾岡・権現堂道跡」1997
52	黒川小塚道跡		○	○	○				富岡市教育委員会「黒川小塚道跡Ⅱ」2001 富岡市教育委員会「黒川小塚道跡Ⅳ」2008
53	貫前神社					○	○	○	富岡市教育委員会「一ノ宮貫前神社調査報告書」2016



第4図 周辺遺跡位置図(1) (国土地理院1/25,000地形図「松井田」「下仁田」を加工)



第5図 周辺道路位置図(2) (とみまかWebまっぷ 富岡市都市計画図を加工)

第4節 基本土層

下高田白山遺跡および下高田稲荷谷Ⅱ遺跡は、高田川を南に望む横野台地南辺の樹枝状の開析谷に挟まれた台地端に位置する。

下高田白山遺跡では、台地部の緩斜面に弥生時代から平安時代に至る集落が展開し、1区においては埋没谷の存在も確認される。

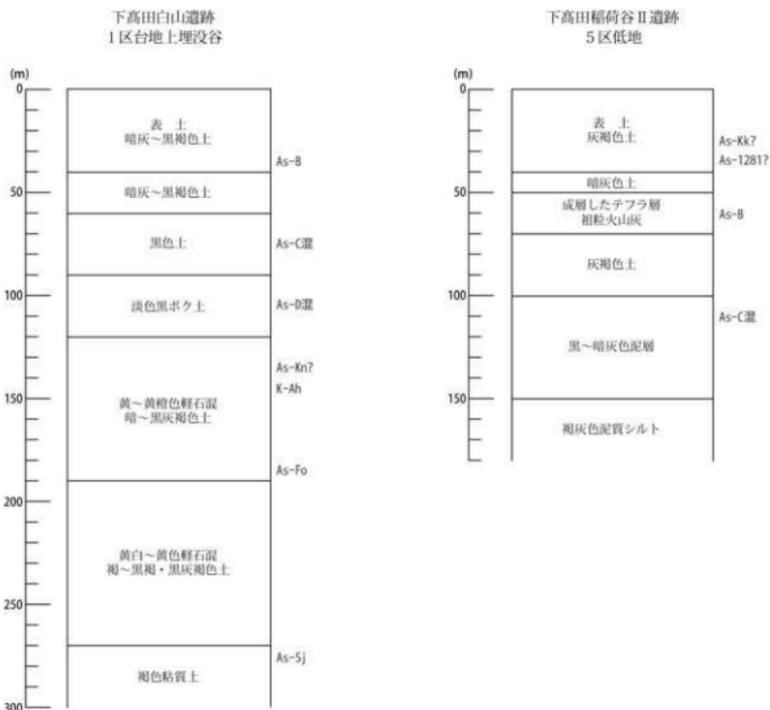
下高田稲荷谷Ⅱ遺跡では、下高田白山遺跡との境に当たる5区低地部でAs-Bテフラにより埋没した水田が検出

され、台地上部の緩斜面では奈良・平安時代の集落が検出される。

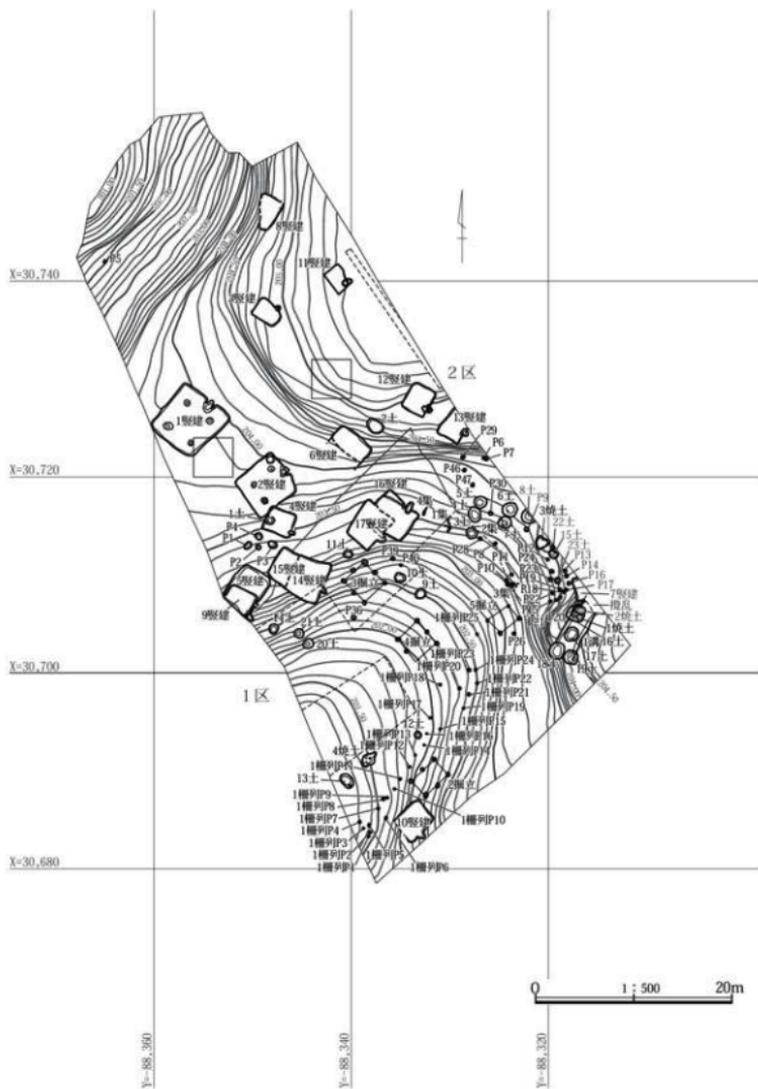
両遺跡共にその立地は、入り組んだ開析谷に挟まれた舌状台地の緩斜面という複雑な地形を呈している。

以下に両遺跡の2地点の土層堆積状況の柱状図を記す。

なお、ローム層土ならびにローム層中のテフラの堆積に関しては、後掲の下高田白山遺跡の旧石器確認調査の項(第2章第1節第5項)、ならびに向原Ⅳ遺跡の旧石器の項(第2章第3節第4項)を参照されたい。



第6図 下高田白山遺跡・下高田稲荷谷Ⅱ遺跡 基本土層図



第7図 下高田白山道跡 1・2区全体図

X=30,700

X=30,680

X=30,660

X=30,640

X=30,620

X=30,600

X=30,580

X=30,560

X=30,540

X=30,520

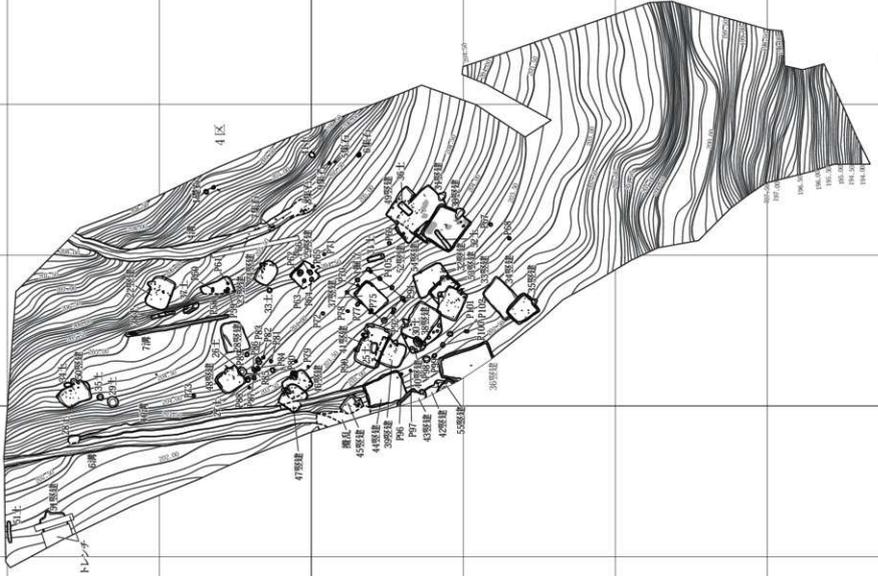
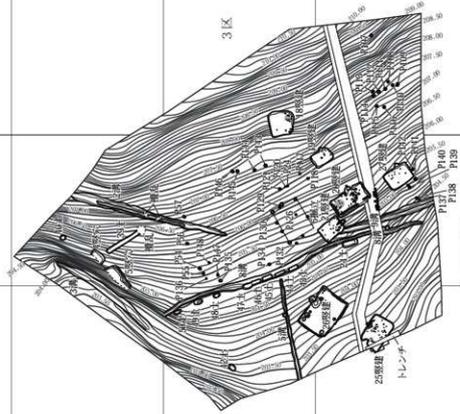
Y=88,340

Y=88,320

Y=88,300

Y=88,280

Y=88,240



第8図 下高田白山遺跡3・4・5区全体図

第2章 検出された遺構と遺物

第1節 下高田白山遺跡

〔概要〕北西に在る下高田稲荷谷Ⅱ遺跡の5区と谷を隔てて下高田白山遺跡の1・2区、続いて3区、4区と遺構は展開するが、谷側の2区北西端と4区南東端部は遺構が希薄となる。

検出された遺構は、竪穴建物56軒、竪穴状遺構2基、掘立柱建物6棟、柵列1条、礎石1基、集石9基、焼土4基、ピット111穴、土坑52基、溝9条、畑1面を数える。集落の時期・構成・様相については後述するとして、検出された遺構毎に詳細を以下に記す。

第1項 竪穴建物・竪穴状遺構

〔竪穴建物〕第一次調査において1・2区の埋没谷周縁部より17軒、第二時調査において3・4区より39軒、計56軒の竪穴建物跡が検出された。时期的な内訳は、弥生時代中期と比定される竪穴建物が6軒、奈良・平安時代に比定される建物が50軒となる。前者の弥生時代中期の竪穴建物は、4区の中央部南西寄りに集中する。後者の奈良・平安時代の竪穴建物は、カマドの設置方向が大きく二分され、北東壁にカマドを持つ一群と南東壁にカマドを持つ一群に大別される。それぞれの群内での重複も若干認められるが、大枠では南東壁にカマドを持つ建物の方が新しい傾向にあることが判明した。以下に個々の建物についての詳細を記す。

1号竪穴建物 第9～12図 PL. 7・8・120

(旧2区1号住居)

位置：2区 726—354付近

規模：6.10×5.72m、深度は8～18cm程を計る。

面積：33.732㎡

形状：正方形

主軸方位：N—39°—E

埋没土：褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。上面の削平により、壁高は20～25cmほどを計る。

床面：炭化物・灰・焼土を含む褐色土による貼り床を有し、硬化が確認される。検出時には、カマド周辺から中央部の床面上にカマドの残骸と思われる焼土が散乱する。

カマド：北東壁中央やや南東寄りに位置する。左袖部の芯材として据えられたと思われる礎の出土が1点みられるのみで、残存する礎は少ない。燃焼部は壁ラインのやや内側に位置し、浅く窪む。煙道部は壁よりあまり突出せず、急勾配で立ち上がる。燃焼部を中心に焼土化が著しく、長期間の使用が推察される。

柱穴：柱間3mほどの間隔で、径50×100cm、深度50～72cm程を計る円形の柱穴が4穴検出される。4穴の埋土断面には径15～20cm程の柱痕が確認できる。

貯蔵穴：北東コーナー部壁際より径65×85cm、深度30cm程を計り、楕円形を呈する土坑が1基検出される。

壁周溝：北西コーナー部の壁際のみ、幅20cm強、深度15cm程を計る壁周溝が検出される。

掘り方：床面の全域を5～8cmほど平準に掘り込み、北東コーナー付近の壁寄りに径120×150cm、深度20cmほどの土坑状の掘り込みを1基有するのみ。

重複：なし。

遺物：本建物からは土師器、須恵器、鉄製品などが出土している。図示した土器には、土師器杯・小型甕・甕・台付甕、須恵器杯蓋・杯・甕がある。このうち、No.6・7の土師器杯、No.17・22の土師器甕、No.13の須恵器杯蓋、No.14の須恵器杯、No.24の須恵器甕が床面、No.8・9の土師器杯、No.16・20の土師器甕がカマド、No.2の土師器杯が柱穴P1の底部、No.15の須恵器有台杯がP4、No.5の土師器杯、No.15の須恵器杯、No.18・19の土師器甕が掘り方からの出土である。

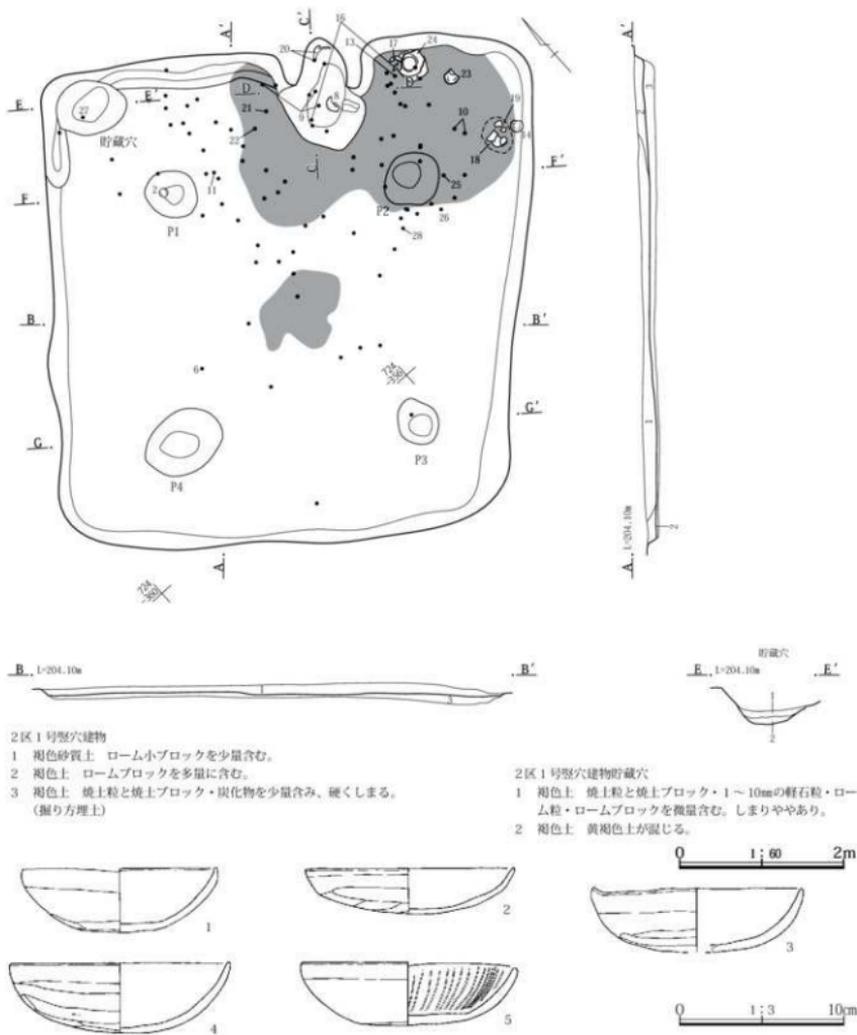
所見：調査区1・2区の北西半の南西端に在り、周囲には主軸をほぼ同じくする2号竪穴建物が並ぶ。建物の規模としては、一辺が6mほどを計る比較的大型の建物で、建物の使用はカマド内部の焼土化の様相から長期的な居住の痕跡が窺える。本建物の時期は、床面やカマド、掘り方から出土した土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯の形態

第2章 検出された遺構と遺物

から8世紀第1四半期に比定できる。

なお、この時期の土師器甕は、古墳時代終末の所謂「長胴甕」と呼称された縦方向にヘラ削りが施された形態から胴部がやや短くなり頸部下のヘラ削りは斜めに施され

た形態のものが上毛野国の広域に供給されている煮沸具である。しかし、本遺跡においては1号竪穴建物№19・20のような頸部まで縦方向のヘラ削りが施された土師器甕が8世紀前後の竪穴建物から出土している。



2区1号竪穴建物

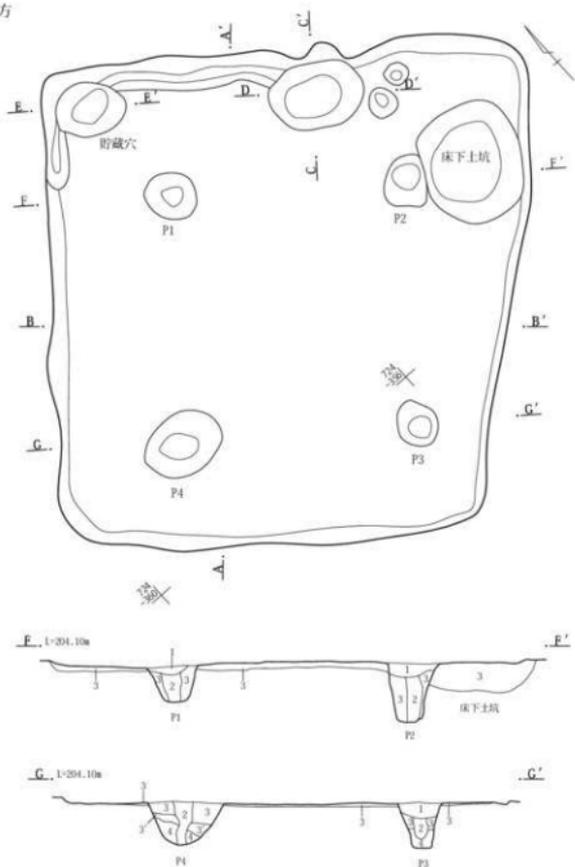
- 1 褐色砂質土 ローム小ブロックを少量含む。
- 2 褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 3 褐色土 焼土粒と焼土ブロック・炭化物を少量含む。硬くしまる。(掘り方土)

2区1号竪穴建物貯蔵穴

- 1 褐色土 焼土粒と焼土ブロック・1～10mmの軽石粒・ローム粒・ロームブロックを微量含む。しまりややあり。
- 2 褐色土 黄褐色土が混じる。

第9図 1号竪穴建物・断面図及び出土遺物(1)

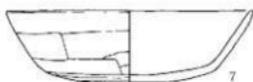
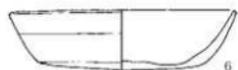
掘り方



2区1号貯穴建物P1～P4

- 1 褐色土 黄褐色土がわずかに混じる。1～3mmの軽石粒を微量含む。しまりややあり。
- 2 黄褐色土 褐色土が混じり合う。黄褐色土がやや多め。しまりあまりなし。柱痕跡。
- 3 褐色土 黄褐色土が混じり合う。褐色土が多め。底部に焼土ブロックを少量含む。しまりあまりなし。
- 3' 褐色土 黄褐色土が混じる。3層に比べ、黄褐色土が多い。しまりあまりなし。
- 4 黄褐色土 焼土粒をわずかに含む。しまりあまりなし。

0 1:60 2m

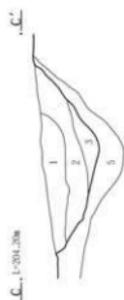
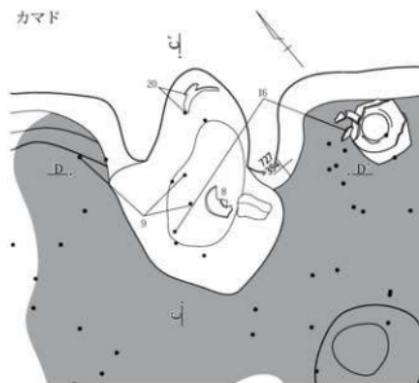


0 1:3 10cm

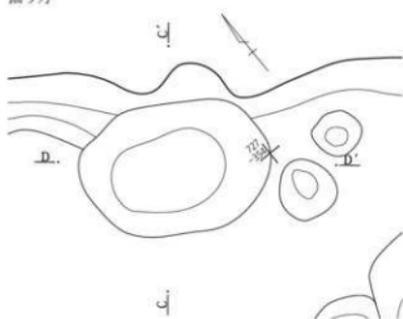
第10図 1号貯穴建物掘り方平・断面図及び出土遺物(2)

第2章 検出された遺構と遺物

カマド



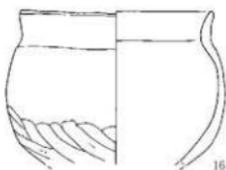
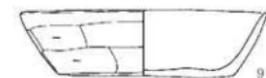
掘り方



2区1号竪穴建物カマド

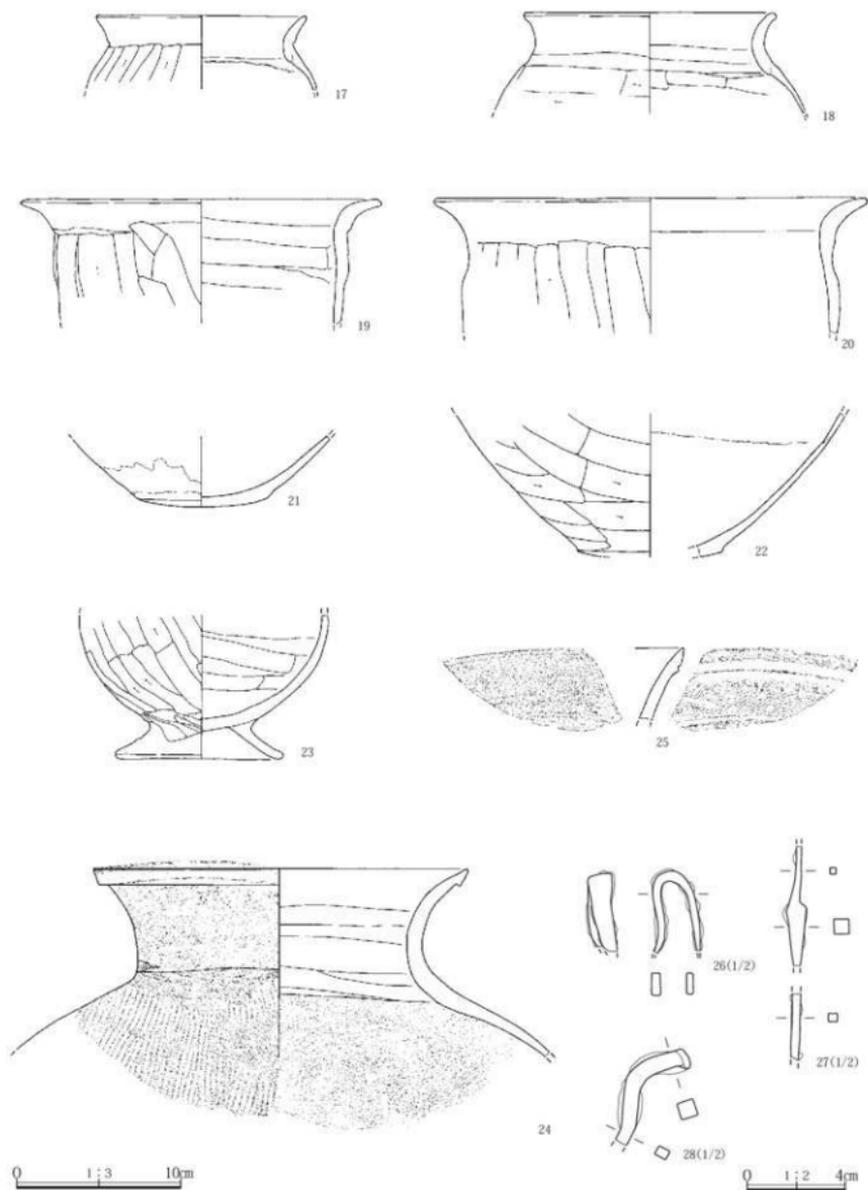
- 1 褐色砂質土 ローム小ブロックを少量含む。
- 2 暗褐色土 焼土大ブロックを多量に含む。天井部崩落土。
- 3 黒褐色土 焼土小ブロックと灰を多量に含む。
- 4 焼土
- 5 褐色土 ハードロームブロックを多量に含む。(掘り方理上)

0 1:30 1m



0 1:3 10cm

第11図 1号竪穴建物カマド平・断面図及び出土遺物(3)



第12図 1号竪穴建物出土遺物(4)

2号竪穴建物 第13～15図 PL. 9・10・120・121

(旧2区2号住居)

位置：2区 720—348付近

規模：5.0×4.71m、深度は3～22cmほどを計る。

面積：(23.3m²)

形状：一部歪な正方形

主軸方位：N—52°—E

埋没土：暗褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。上面の削平により、南コーナー付近での壁高は僅か4～5cmほどを計るのみである。

床面：掘り方・貼り床を有さず、掘削下面の地山ローム土を踏み固め、床面とする。検出時には、カマド前面から南側の床面上に焼土が、カマド左前面には灰が散乱する。

カマド：北東壁中央部に位置する。遺存状態は悪く、右袖部が僅かに残るのみ。燃焼部は壁ラインのやや内側に位置し、浅く窪む。煙道部は壁より突出せず、急勾配で

立ち上がる。燃焼部を中心に焼土化が著しく、長期間の使用が推察される。

柱穴：北西(P1)・南西(P4)・南東(P3)の3カ所に径50～70cm、深80～85cmを計る柱穴が3基検出されるが、北東部の柱穴は確認できない。

南西辺のP3・P4間は190cmほど、北西辺のP1・P4間はやや広く、240cmほどを計る。

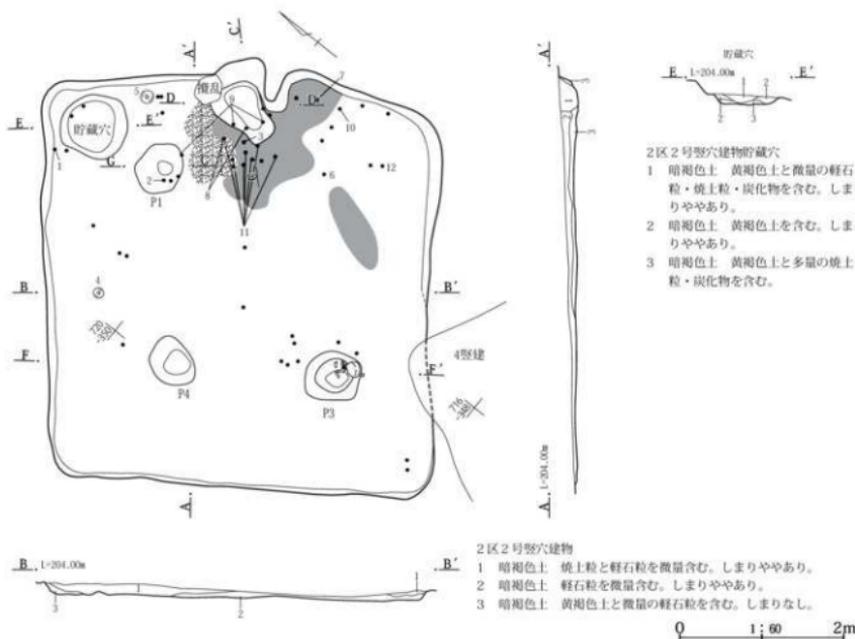
貯蔵穴：北側コーナー付近に径80cm、深度12cmほどの浅い皿状の土坑が検出される。

壁周溝：なし。

掘り方：掘り方は有せず、南西側の柱穴間にて小ピットを2穴検出したのみである。

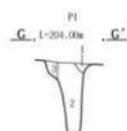
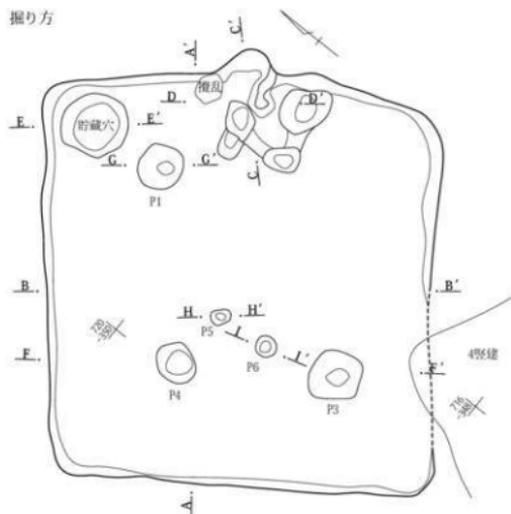
重複：南東壁の南コーナー寄りにて4号竪穴建物と重複し、新旧関係は検出時の埋土の様相より、本建物の方が古いものと判断された。

遺物：本建物からは土師器、須恵器、石製品(叢石)などが出土している。図示した土器には、土師器杯・甕、須



第13図 2号竪穴建物平・断面図

掘り方



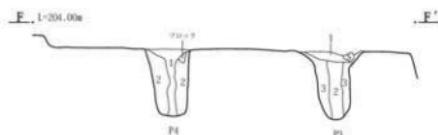
2区2号竪穴建物P1

- 1 褐色土 黄褐色土と多量の焼土ブロック・軽石を含む。しまりあり。やや粘性あり。
- 2 褐色土 焼土粒と軽石粒をわずかに含む。しまりややあり。
- 3 褐色土 しまりあまりなし。



2区2号竪穴建物P5

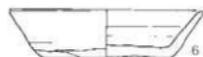
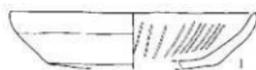
- 1 黒褐色土 ローム粒を微量含む。しまりなし。
- 2区2号竪穴建物P6
- 1 黒褐色土 ローム粒とロームブロック・焼土粒をわずかに含む。しまりあまりなし。



2区2号竪穴建物P3・4

- 1 褐色土 黄褐色土と多量の焼土ブロック・軽石を含む。しまりあり。やや粘性あり。
- 2 褐色土 焼土粒と軽石粒をわずかに含む。しまりややあり。
- 3 褐色土 しまりあまりなし。

0 1; 60 2m



0 1; 3 10cm

第14図 2号竪穴建物掘り方平・断面図及び出土遺物(1)

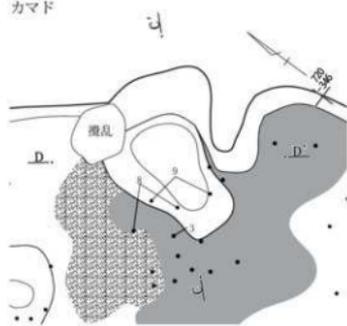
恵器杯蓋・杯がある。このうち、No 7の小型甕、9・11の土師器甕、No 4・5の須恵器杯蓋、No 6の杯が床面、No 8の土師器甕がカマドからの出土である。

所見：調査区1・2区の北西半に在り、周囲は、主軸をほぼ同じくする1号竪穴建物が並ぶ。建物の規模として

は一辺が4m強の建物であり、L字型を呈する3穴の柱穴配置が見所である。本建物の時期は、床面やカマドから出土した土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯の形態から、8世紀第1四半期に比定できる。

第2章 検出された遺構と遺物

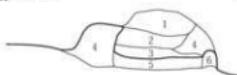
カマド



掘り方



D, 1:204.00m

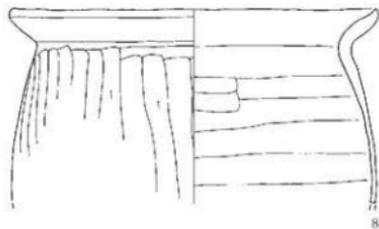


D'

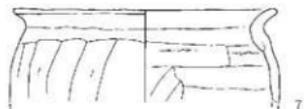
2区2号竪穴建物カマド

- 1 黄褐色土 暗褐色土と焼土粒を少量含む。
- 2 にぶい黄褐色土 褐色土粒と焼土粒を少量含む。
- 3 赤褐色土 焼土を多量に含む。天井部崩落土。
- 4 黄褐色土 ハードローンを主に粘土ブロックを含む。天井部構築材。
- 5 暗褐色土 多量の灰・焼土粒・焼土ブロックと少量の炭化物を含む。
- 6 地山ローム土 掘り残し。

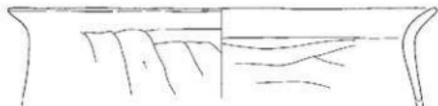
0 1:30 1m



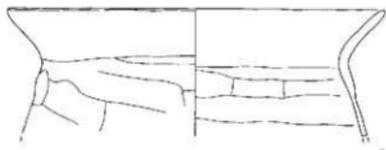
8



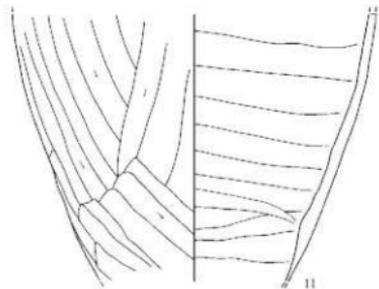
7



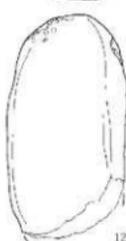
10



9



11



12

0 1:3 10cm

第15図 2号竪穴建物カマド平・断面図及び出土遺物(2)

3号竪穴建物 第16・17図 PL.11・121

(旧2区3号住居)

位置：2区 736-348付近

規模：2.82×1.56m、深度は7～21cmほどを計る。

面積：5.351㎡

形状：歪な隅丸長方形

主軸方位：N-38°-E

埋没土：暗褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。上面の削平により、浅いところでは壁高は僅か8cmほどを計るのみである。

床面：掘り方・貼り床を有さず、掘削下面の地山ローム土を踏み固めて床面とする。

カマド：北東壁の東コーナー付近に位置し、遺存状態は悪い。燃焼部は壁ラインのやや内側に位置し、浅く窪む。煙道部は壁よりあまり突出せず、緩やかな勾配で立ち上がる。床面上よりカマド構築材と思われる礫が散逸して出土していることから、石組みのカマドであったと推察される。

柱穴：掘り方調査においても柱穴は検出されなかった。

貯蔵穴：床面では検出し得なかったが、掘り方調査時に北西コーナー付近より検出された径60×78cm、深度15cmの土坑が貯蔵穴の可能性ある

壁周溝：なし。

掘り方：掘り方は有せず、南東コーナーにて径90×110cm、深度30cmを計る土坑が1基検出された。

重複：なし。

遺物：本建物からは土師器、須恵器、灰釉陶器、石製品(叢石)などが出土している。図示した土器には、土師器甕、須恵器椀、灰釉陶器椀がある。このうち、No.6の土師器甕、No.1・4の須恵器椀、No.5の灰釉陶器椀が床面、No.7の土師器甕がカマド、No.3の須恵器椀が貯蔵穴からの出土である。

所見：調査区1・2区の北西半に在り、周囲には主軸と規模をほぼ同じくする11号竪穴建物が北東隣りに在る。建物の規模としては短辺が1.7mほどの小型の建物である。本竪穴建物の時期は、床面やカマドから出土した土師器杯甕、須恵器椀の形態から9世紀第3四半期に比定できる。



貯蔵穴



2区3号竪穴建物貯蔵穴

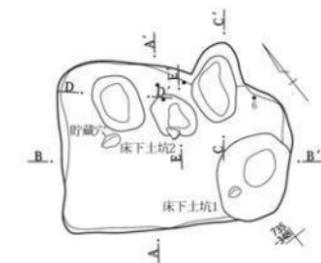
- 1 暗褐色土 黄褐色土がブロック状に部分的に混じる。焼土粒と炭化物を多く含む。しまりややあり。
- 2 黄褐色土 暗褐色土がブロック状に部分的に混じる。焼土粒をわずかに含む。しまり粘性ともにややあり。



2区3号竪穴建物

- 1 暗褐色土 1～5mmの軽石粒を微量含む。しまりあまりなし。
- 2 暗褐色土 黄褐色土が混じり、1～10mmの軽石粒を微量、焼土粒と軽石粒をわずかに含む。しまりあまりなし。

床下土坑2



2区3号竪穴建物床下土坑1・2

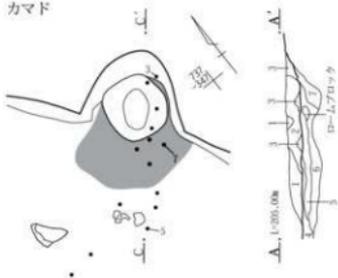
- 3 黄褐色土 黄褐色土をわずかに含む、1～5mmの軽石粒を微量含む。しまりややあり。
- 4 黄褐色土 黄褐色土を少量、1～3mmの軽石粒を微量、焼土粒と炭化物をわずかに含む。しまりややあり。
- 5 黄褐色土 焼土粒を多量に含む、1～3mmの軽石粒を微量、炭化物をわずかに含む。しまりややあり。
- 6 黄褐色土 焼土粒をわずかに含む。しまりややあり。

0 1:60 2m

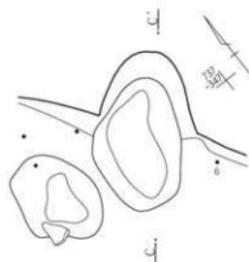
第16図 3号竪穴建物平・断面図

第2章 検出された遺構と遺物

カマド



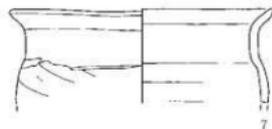
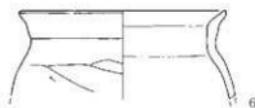
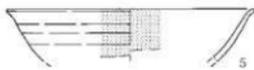
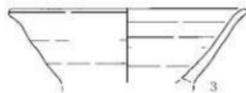
掘り方



2区3号竪穴建物カマド

- 1 灰黄色土 灰白色粘土小ブロックを含む。
- 2 灰黄色土 焼土粒子を少量含む。
- 3 褐色土 焼土小ブロックを多量に含む。
- 4 褐色土 ローム小ブロックを多量、ローム粒を少量含む。(掘り方埋土)
- 5 暗褐色土 焼土粒子と焼土小ブロック・ローム小ブロックを少量含む。
- 6 黒褐色土 ローム粒子を微量含む。
- 7 褐色土 大径のロームと焼土・灰白色粘土ブロックを含む。

0 1:30 1m



0 1:3 10cm

第17図 3号竪穴建物カマド平・断面図及び出土遺物

4号竪穴建物 第18～20図 PL.11・12・121

(旧2区4号住居)

位置：2区 715-347付近

規模：2.85×2.43m、深度は17～27cmほどを計る。

面積：7.717㎡

形状：隅丸長方形

主軸方位：N-111°-E

埋没土：暗褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。

床面：掘り方埋土の上面を踏み固めて床面とする。カマド前面の床面上に焼土と灰の散乱が確認される。

カマド：長方形の短辺である南東壁の南コーナー寄りに位置する。遺存状態は悪く、袖部は残らない。燃焼部は壁ラインよりやや外側に位置し、浅く窪む。煙道部は壁より突出せず、急勾配で立ち上がる。埋土中より大型の焼礫が出土しており、構築材として使用されていた物と推察される。

柱穴：掘り方調査においても柱穴は検出されなかった。

貯蔵穴：なし。

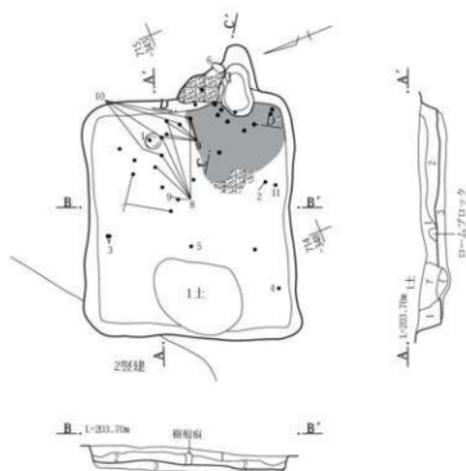
壁周溝：なし。

掘り方：全体に10cmほど掘り下げ、中央から南西コーナー付近に土坑状の掘り込みを2基有する。

重複：北東壁際の中程にて1号土坑と重複し、検出時の埋土状況より、本建物の方が古いものと判断された。

遺物：本建物からは土師器、須恵器、羽口片などが出土している。出土した土器には、土師器甕、須恵器杯、椀がある。このうち、№1の須恵器杯、№2～4の須恵器椀、№7～10の土師器甕が床面、№6の土師器甕がカマドからの出土である。

所見：調査区1・2区の中ほどに在り、周囲には主軸を同じくする14号竪穴建物がある。建物の規模としては2.5×3.0mほどの建物であり、短辺側へのカマド配置が所見的である。本建物の時期は、床面やカマドから出土した土師器甕、須恵器杯・椀の形態から、9世紀第3四半期に比定できる。



2区4号竪穴建物

- 1 暗褐色土 褐色ローム漸移層土を斑状に含み、焼土粒子とローム小ブロックを少量含む。
 2 暗褐色土 ローム小ブロックを多量に含み、焼土粒子を少量含む。
 3 暗褐色土 淡黄～灰白色ロームブロックを多量に含む。(掘り方埋土)
 ア 暗褐色土 褐色ローム漸移層土を斑状に含み、ローム小ブロックを少量含む。
 イ 暗褐色土 ローム小ブロックを微量含む。

掘り方



2区4号竪穴建物床下土坑

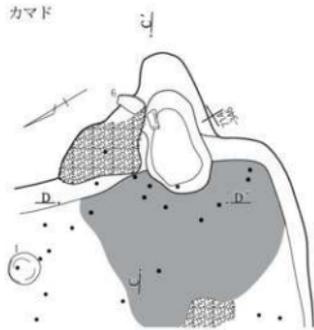
- 1 褐色土 部分的に黄褐色土が混じる。焼土粒と炭化物をわずかに含む。しまりあまりなし。

0 1:60 2m

第18図 4号竪穴建物平・断面図

第2章 検出された遺構と遺物

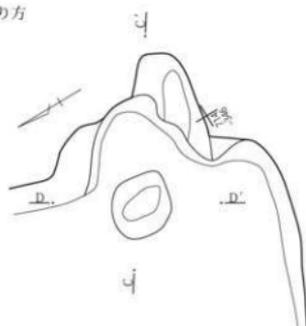
カマド



掘り方



掘り方



D, 1=200, 70m

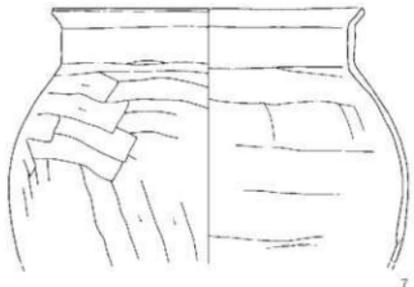
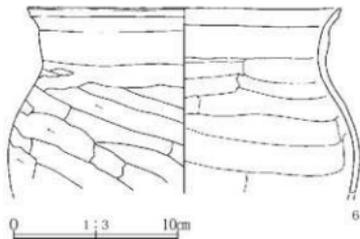
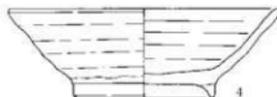
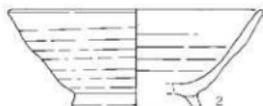
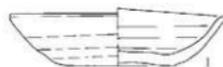
D'



2区4号竪穴建物カマド

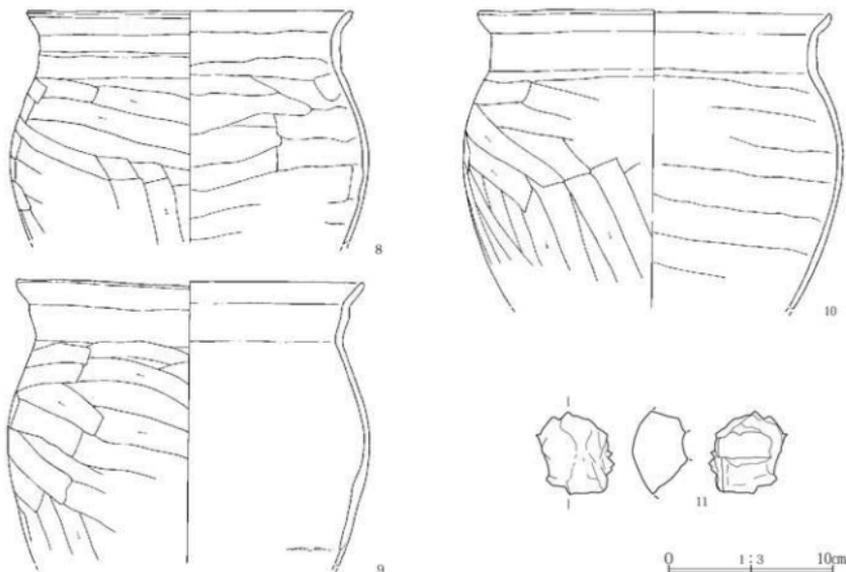
- 1 褐色土 部分的に黄褐色土と黒褐色土が混じる。焼土粒・焼土ブロックを多量に含む。しまりあまりなし。
- 2 褐色土 黄褐色土と黒褐色土を多量に含む。焼土粒をわずかに含む。しまりあまりなし。
- 3 褐色土 黄褐色土ブロックを多量に含む。しまりあり。

0 1:30 1m



0 1:3 10m

第19図 4号竪穴建物カマド平・断面図及び出土遺物(1)



第20図 4号竪穴建物出土遺物(2)

5号竪穴建物 第21～23図 PL.13・122

(旧2区5号住居)

位置：2区 708—351付近

規模：4.69×3.44m、深度は25～55cmほどを計る。

面積：15.507㎡

形状：隅丸長方形

主軸方位：N—128°—E

埋没土：褐色～暗褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。

床面：後記の掘り方土坑上面を除いては貼り床を有さず、掘削下面の地山ローム土を踏み固めて床面とする。

カマド：南東壁の南コーナー寄りに位置する。遺存状態は悪く、袖部は残らない。燃焼部は壁ラインよりやや外側に位置し、浅く窪む。煙道部は壁より突出せず、緩やかな勾配で立ち上がる。

柱穴：なし。

貯蔵穴：なし。

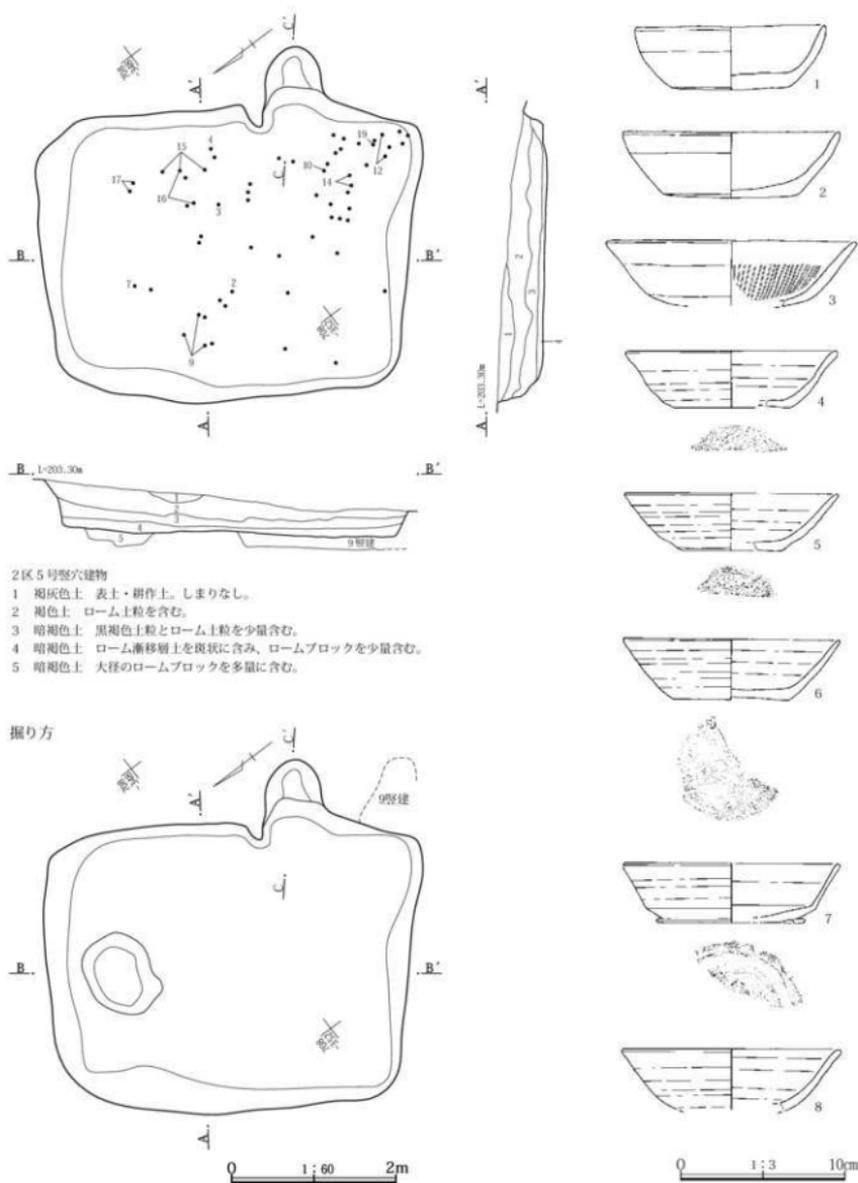
壁周溝：なし。

掘り方：全体的な掘り方は有せず、北東壁の中程付近にて径70×105cm、深度20cmを計る土坑が1基検出された。

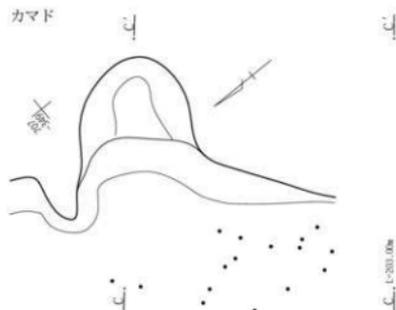
重複：中央から南東半部にて9号竪穴建物と重複し、検出時の埋土状況より本建物の方が新しいものと判断された。

遺物：本建物からは土師器、須恵器、内耳銅片、不明鉄製品などが出土している。図示した土器には、土師器杯・甕、須恵器杯・碗がある。このうち、No.2～4土師器杯、No.7の須恵器杯、No.6・9・12の須恵器碗、No.10の須恵器大型碗、No.14～17の土師器甕が床面からの出土である。出土した土器のうち、No.2・3の土師器杯、No.7の須恵器杯は8世紀前半代、他の土器は9世紀第2四半期から第3四半期の年代観が与えられる。8世紀前半の年代観が与えられる土器のなかにも床面からの出土で本竪穴建物に共伴すると想定できる位置からの出土土器があるが、9世紀第3四半期の年代観が与えられるNo.16の土師器甕の一部が掘り方から出土しており、年代観が与えられる土器群が本竪穴建物に共伴すると考えられる。

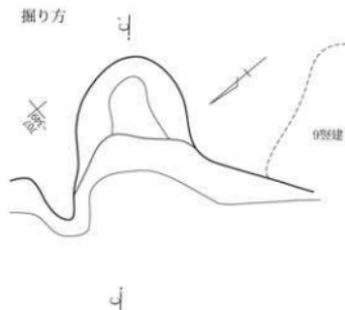
所見：調査区1・2区の中央部南西端の埋没谷周縁に在る。本竪穴建物の時期は、前記のように共伴する土器群から、9世紀第3四半期に比定すると考える。



カマド



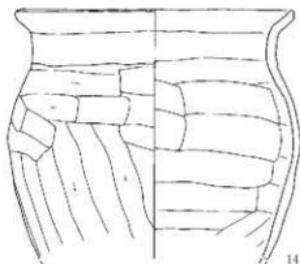
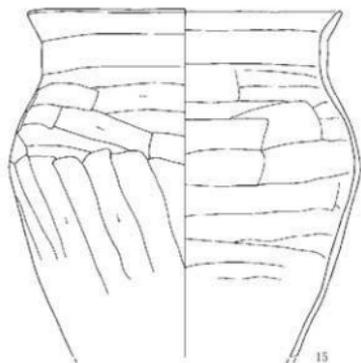
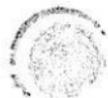
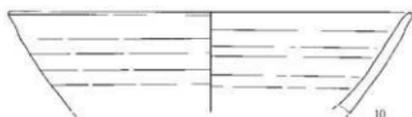
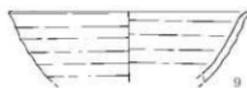
掘り方



2区5号竪穴建物カマド

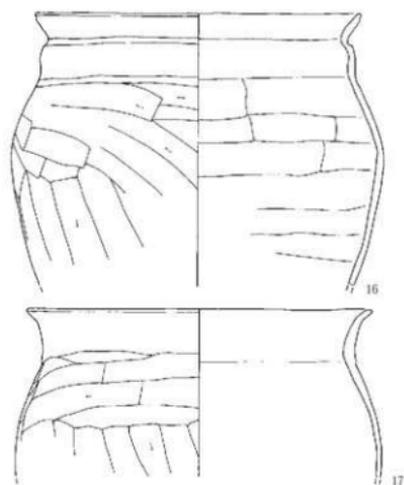
- 1 黄褐色土 暗褐色土と焼土粒を少量含む。
- 2 にぶい黄褐色土 褐色土粒を少量含む、焼土粒を多量に含む。
- 3 赤褐色土 焼土を多量に含み、褐色土粒を微量含む。

0 1:30 1m

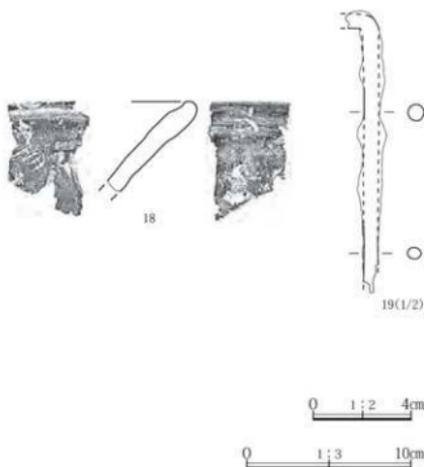


0 1:3 10m

第22図 5号竪穴建物カマド平・断面図及び出土遺物(2)



第23図 5号竪穴建物出土遺物(3)



6号竪穴建物 第24図 PL.14

(旧2区6号住居)

位置：2区 724—340付近

規模：4.12×(1.83)m、深度は18～30cmほどを計る。

面積：7.491m²+α

形状：隅丸方形、若しくは隅丸長方形

主軸方位：N—53°—W

埋没土：褐灰色～褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。南西半部を上面の削平により失う。

床面：貼り床を有さず、掘削下面の地山ローム土を踏み固めて床面とする。

カマド：残存範囲においては検出されていない。

柱穴：残存範囲においては検出されていない。

貯蔵穴：残存範囲においては検出されていない。

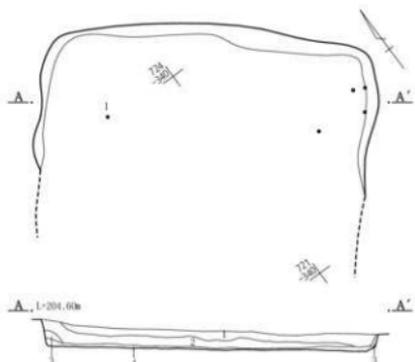
壁周溝：残存範囲においては検出されていない。

掘り方：なし。

重複：なし。

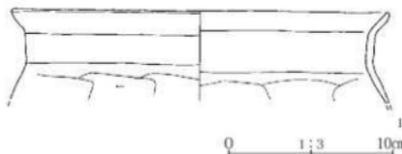
遺物：本建物からは土師器、須恵器などが出土している。図示できた土器は、床面からの出土の土師器甕の1点だけである。

所見：調査区1・2区の中央部に在る。本建物の時期は、床面から出土した土師器甕の形態から、9世紀第3四半期に比定できる。



2区6号竪穴建物

- 1 褐灰色砂質土 しまりなし。
- 2 褐色土 ローム土粒を微量含む。
- 3 暗褐色土 黒褐色土粒とローム土粒を少量含む。
- 4 黄褐色土 ローム土を多量に含む。



第24図 6号竪穴建物平・断面図及び出土遺物

7号竪穴建物 第25図 PL.15・122

(旧2区7号住居)

位置：2区 709-317

規模：2.40×(0.7)m、深度は5～19cmほどを計る。

北東半部が調査区外に在り、全容は不明。

面積：2.693m²+α

形状：隅丸方形、若しくは隅丸長方形か

主軸方位：N-15°-W

埋没土：暗褐色～黒褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。

床面：掘り方壇土上面を踏み固めて床面とする。

カマド：南東壁際の南コーナー寄りの床面に焼土が確認されることから、この位置にカマドを有していたものと推察される。

柱穴：残存範囲においては検出されていない。

貯蔵穴：残存範囲においては検出されていない。

壁周溝：残存範囲においては検出されていない。

掘り方：全体に5～8cmほど掘り下げる。

重複：なし。

遺物：本建物からは土師器、須恵器、鉄製品などが出土している。図示できた土器は、須恵器碗の2点だけである。このうち、No. 2の須恵器杯椀が床面からの出土である。

所見：調査区1・2区の南東端の埋没谷周縁部に在る。

本竪穴建物の時期は、図示できた遺物が少なく、小片のため時期の比定は難しい点があるが、床面須恵器碗の形態から、10世紀前半に比定したい。

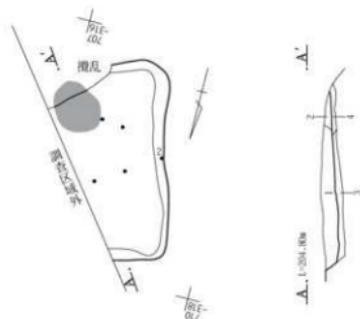
いない。

掘り方：なし。

重複：なし。

遺物：本建物からは土師器、須恵器、石製品(磁石)などが出土している。図示できた土器は、須恵器羽釜の2点だけである。No. 1・2の須恵器羽釜はともに床面からの出土である。

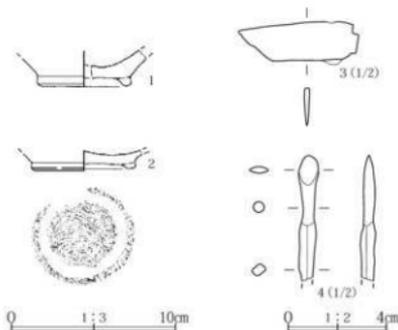
所見：調査区1・2区の北東端の台地端部に在り、北西側は谷地へと傾斜する。本建物の時期は、床面から出土した須恵器羽釜の形態から、10世紀前半に比定できる。



2区7号竪穴建物

- 1 黒褐色土 褐色ローム薄層土を混在に含み、ローム粒を少量含む。
- 2 暗褐色土 褐色土ブロックを少量含み、焼土粒を微量含む。
- 3 褐色土 ローム粒と焼土粒を微量含む。(掘り方壇上)
- 4 3層土の焼土化。隅丸により逸出したカマド使用面下の痕跡。

0 1:60 2m



第25図 7号竪穴建物平・断面図及び出土遺物

8号竪穴建物 第26図 PL.15・122

(旧2区8号住居)

位置：2区 748-348

規模：3.46×(0.96)m、深度は7～12cmほどを計る。

西半部が削平され、全容は不明。

面積：5.845m²+α

形状：隅丸方形、若しくは隅丸長方形か

主軸方位：N-29°-E

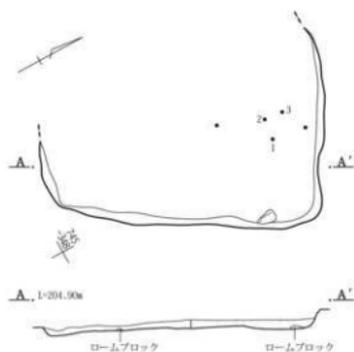
埋没土：暗褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。

床面：貼り床を有さず、掘削下面の地山ローム土を踏み固めて床面とする。

カマド：不明。

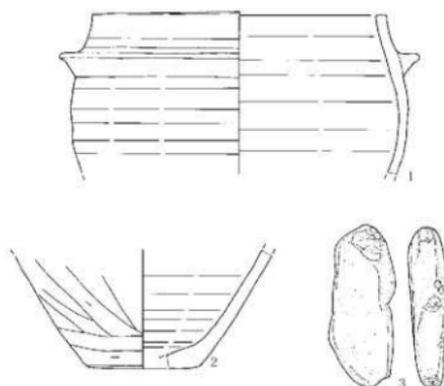
柱穴・貯蔵穴・壁周溝：残存範囲においては検出されて

第2章 検出された遺構と遺物



2区8号竪穴建物

1 暗褐色土・黒褐色土粒とローム土粒を微量含む。



0 1:60 2m

0 1:3 10cm

第26図 8号竪穴建物平・断面図及び出土遺物

9号竪穴建物 第27・28図 PL.16・122・123

(旧2区9号住居)

位置: 2区 708—352付近

規模: 3.00×(2.27)m、深度は15～22cmほどを計る。

面積: 6.021㎡+α

形状: 隅丸方形、若しくは隅丸長方形

主軸方位: N—119°—E

埋没土: 黄褐色～暗褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。南西半部が調査区外に在り、北東半部は上面を重複遺構により削逸する。

床面: 検出範囲においては貼り床を有さず、掘削下面の地山ローム土を踏み固めて床面とする。

カマド: 南東壁に造られるが、南西半部が調査区外に在り建物の全容が明らかではないため、建物内の位置関係は不明。重複遺構による削平は免れ、遺存状態は比較的良好だが、右袖部は残らない。燃烧部は壁ライン上に位置し、浅く窪む。煙道部は壁より突出せず、緩やかな勾配で立ち上がる。

柱穴: なし。

貯蔵穴: なし。

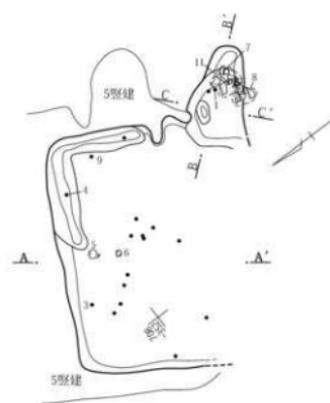
壁周溝: なし。

掘り方: なし。

重複: 北東半部にて5号竪穴建物と重複し、検出時の埋

土状況より本建物の方が古いものと判断された。

遺物: 本建物からは土師器、須恵器、灰釉陶器などが出土している。図示した土器には、土師器甕、須恵器椀、灰釉陶器小瓶がある。このうち、No. 3の須恵器椀、No. 5の灰釉陶器小瓶、No. 9の土師器甕が床面、No. 1・2の須恵器椀、No. 7・8・10の土師器甕がカマド、No. 4の須恵器椀が周溝からの出土である。なお、土師器甕はNo. 7・10のように器壁が薄い形態とNo. 8・9・11のように器壁が厚い形態がみられ、年代的な幅がある。
所見: 調査区1・2区の中央部南西端の埋没谷周縁に在る。本建物の時期は、床面やカマドから出土した土師器甕、須恵器椀の形態から9世紀後半の年代が比定できるが、土師器甕の形態から第4四半期に主体があったとみられる。



A., 1=203.30m

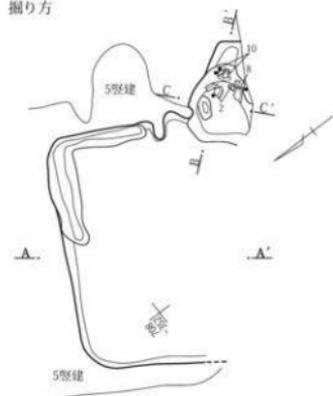
A'



2区9号壑穴建物

- 1 暗褐色土 黒褐色土粒と焼土粒・ローム土粒を微量含む。
- 2 黄褐色土 暗褐色土とローム土を少量含む。

掘り方



A.

A'

5号建

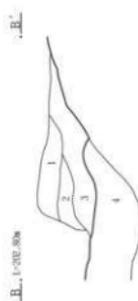
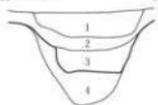
0 1:60 2m

カマド



C., 1=202.80m

C'



B., 1=202.80m

2区9号壑穴建物カマド

- 1 暗褐色土 ローム粒と焼土粒を微量含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒と焼土粒・焼土小ブロックを少量含む。
- 3 暗褐色土 焼土ブロックを多量に含む。天柱部崩落土。
- 4 暗褐色土 焼土小ブロックとロームブロックを少量含む。

掘り方

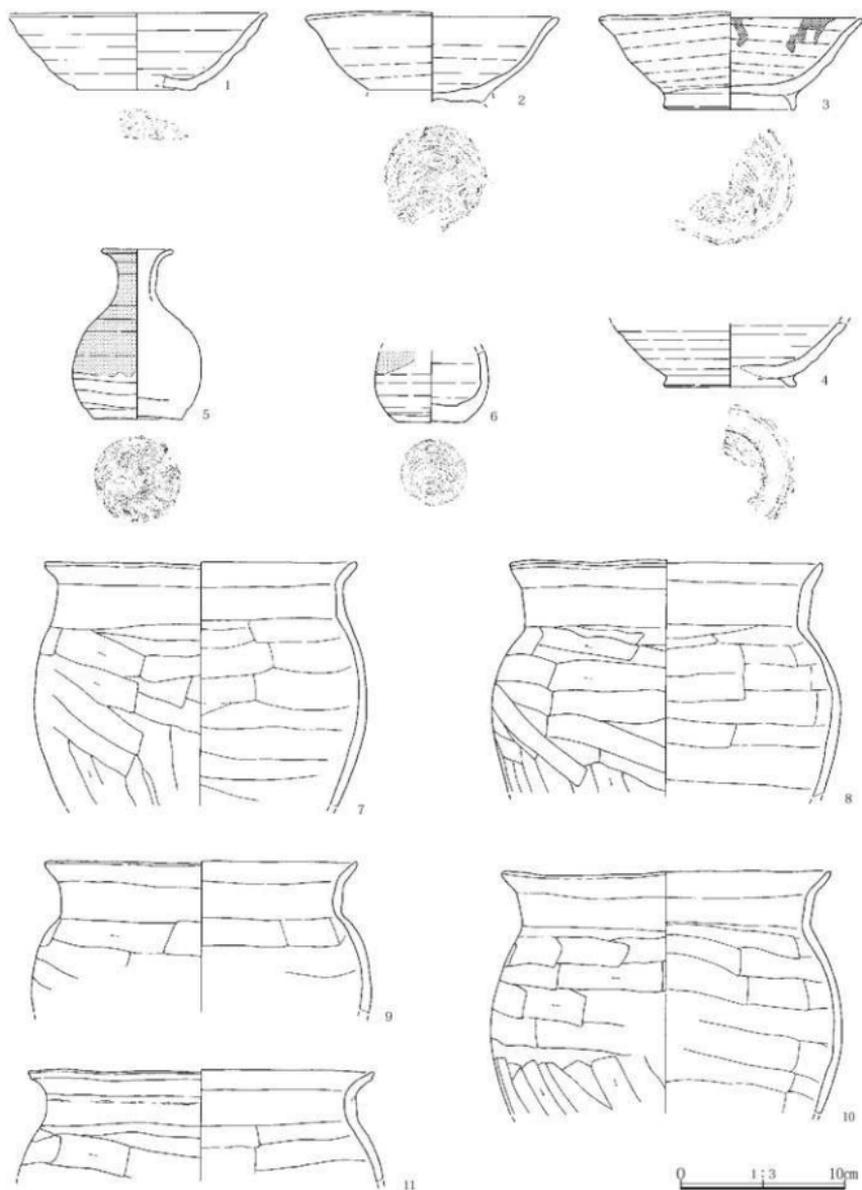


5号建

0 1:30 1m

第27図 9号壑穴建物平・断面図

第2章 検出された遺構と遺物



第28図 9号竪穴建物出土遺物

10号竪穴建物 第29～31図 PL.17・123

(旧1区10号住居)

位置：1区 684—334周辺

規模：3.53×2.86m、深度は22～28cmほどを計る。

南西壁を削平により失う。

面積：(10.555) m²

形状：やや歪な間丸長方形

主軸方位：N—138°—E

埋没土：暗褐～黒褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。

床面：掘り方理土を踏み固めて床面とする。検出時、カマド前面に焼土の散乱が確認される。

カマド：南東壁の中央やや南寄りに位置し、遺存状態は悪い。燃焼部は壁ラインのやや内側に位置し、浅く窪む。煙道部は壁よりあまり突出せず、緩やかな勾配で立ち上がる。カマド構築材と思われる礫の出土は僅かな量であり、石組みのカマドか否かは不明。

柱穴：掘り方調査においても柱穴と思われる掘り込みは検出されなかった。

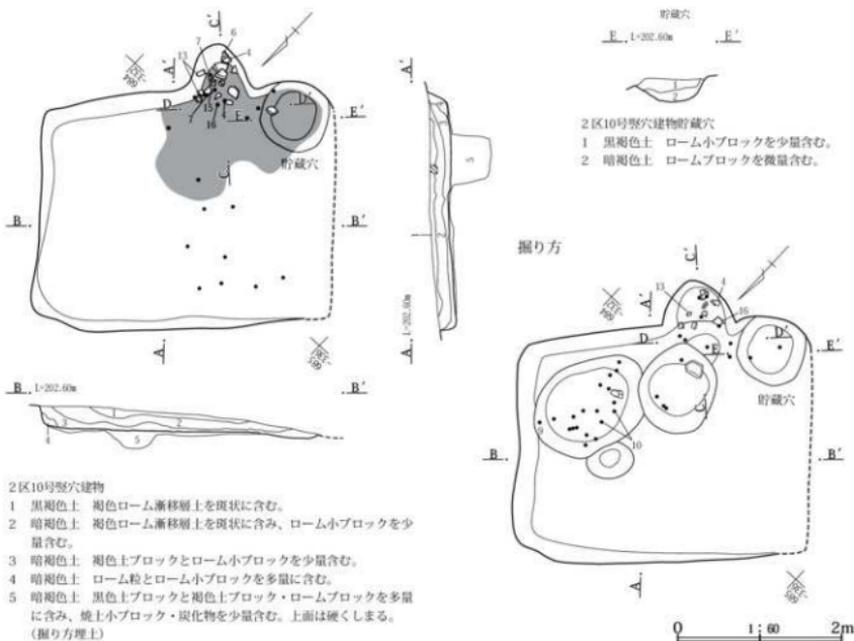
貯蔵穴：床面では検出し得なかったが、掘り方調査時に南コーナー部より検出された径80×85cm、深度28cmの土坑が貯蔵穴となる可能性が高い。

壁周溝：なし。

掘り方：カマド前面から北東コーナーにかけて大型の土坑状の掘り込みが検出された。

重複：なし。

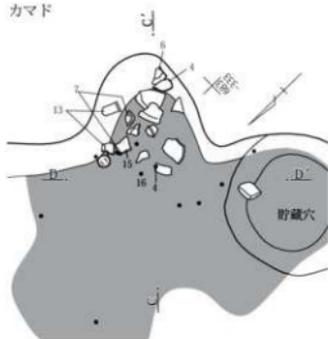
遺物：本建物からは土師器、須恵器、黒色土器、灰軸陶器、石製品(叢石)などが出土している。図示した土器には、土師器甕、須恵器椀・羽釜、黒色土器椀・鉢、灰軸陶器椀がある。このうち、No. 4・6の須恵器杯、No. 2・3・5・7の須恵器椀、No.13の土師器小型甕、No.15・16須恵器羽釜がカマド、No.17の須恵器羽釜が貯蔵穴、No. 1の須恵器椀、No. 9の須恵器鉢、No.10の灰軸陶器椀、No.14の土師器小型甕が掘り方からの出土である。



第29図 10号竪穴建物平・断面図

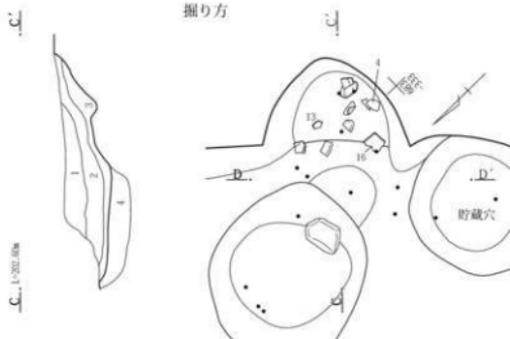
第2章 検出された遺構と遺物

カマド



D, 1=100.00m

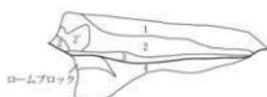
掘り方



D'

2区10号竪穴建物カマド

- 1 黒褐色土 焼土粒を微量含む。
- 2 暗褐色土 褐色土小ブロックを多量に含み、焼土粒子を微量含む。
- 2' 暗褐色土 2層上に灰黄色土を斑状に含む。
- 3 暗褐色土 ローム小ブロックと灰・焼土粒・焼土小ブロックを少量含む。
- 4 黒褐色土 ローム小ブロックを多量に含む。



ロームブロック

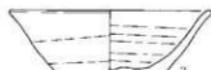
0 1:30 1m



1



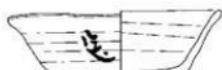
2



3



4



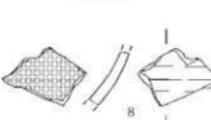
5



6



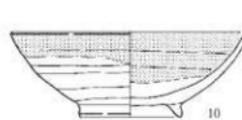
7



8



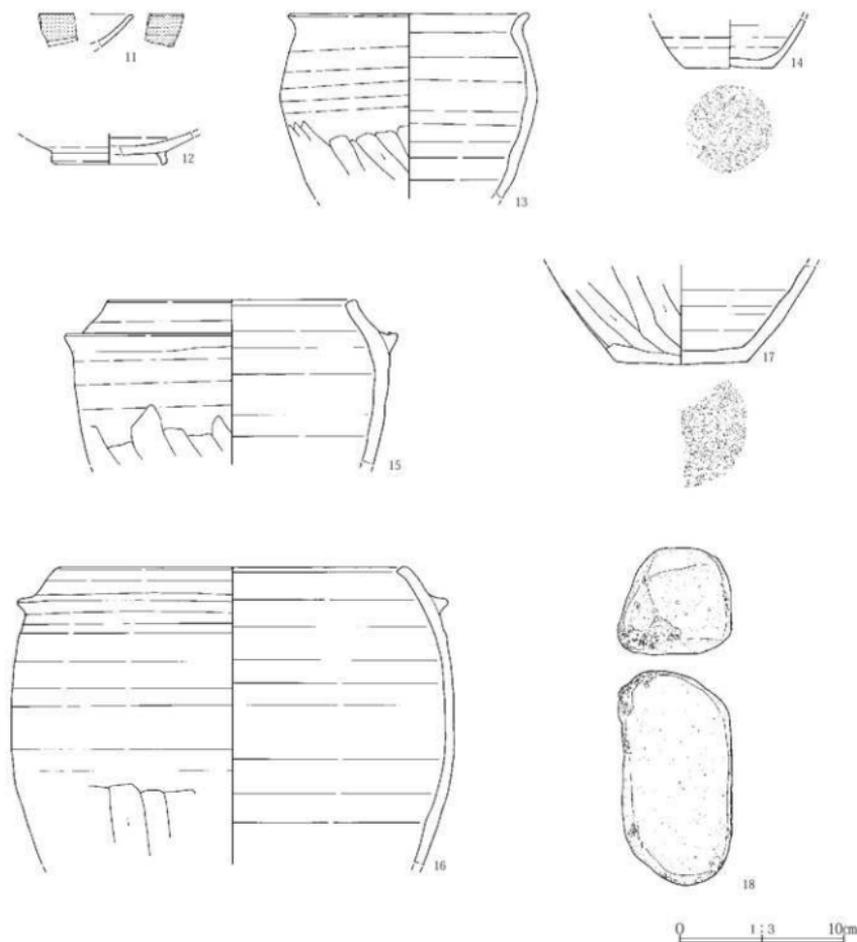
9



10

0 1:3 10m

第30図 10号竪穴建物カマド平・断面図及び出土遺物(1)



第31図 10号竪穴建物出土遺物(2)

なお、No. 9の須恵器鉢には漆が被膜状に残っていた。
No. 13・14の土師器甕はロクロ成整形によるものである。
所見：調査区1・2区の南西端の埋没谷周縁部に在り、建物の規模としては、短辺が3m弱の小型の建物である。本建物の時期は、カマドや掘り方から出土した土師器甕、須恵器椀・羽釜、灰軸陶器椀の形態から、10世紀第1四半期に比定できる。

11号竪穴建物 第32図 PL.18・123

(旧2区11号住居)

位置：2区 740-342周辺

規模：2.45×(1.87)m、深度は4～13cmほどを計る。南西側を削平により失う。

面積：4.772㎡+α

形状：隅丸方形

主軸方位：N-43°-E

埋没土: 床面上の埋土を削平で失っており、埋没の様相は明らかではない。

床面: 削平により逸失。

カマド: 北東壁の東コーナー部に位置し、主軸は建物軸よりやや東へ傾く。これに伴い建物北東壁も湾曲する。遺存状態は悪く、掘り方を残すのみ。燃焼部は壁のやや内側に位置し、浅く窪む。煙道部は壁よりあまり突出せず、緩やかな勾配で立ち上がる。煙道部端の一部に地山ローム土の焼土化がみられる。

柱穴: なし。

貯蔵穴: なし。

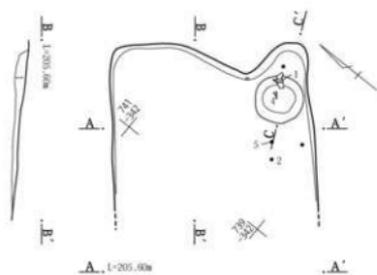
壁周溝: なし。

掘り方: 全体を平準に彫り窪める。

重複: なし。

遺物: 本建物からは土師器、須恵器などが出土している。図示できた個体は、土師器甕と台付甕の5点だけである。このうちNo. 5の台付甕が床面、No. 3・4の甕はカマド、No. 1の甕が貯蔵穴からの出土である。

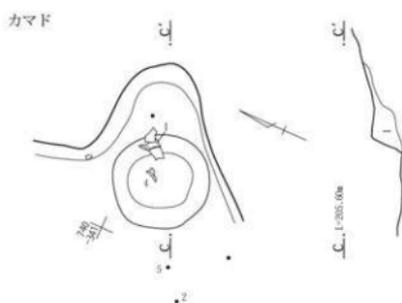
所見: 調査区1・2区の北東部に在り、建物の規模としては、一辺が2.5mほどの小型の建物である。本建物の時期は、床面やカマドなどから出土した土師器甕の形態から、9世紀第3四半期に比定できる。



2区11号竪穴建物

1 暗褐色土 黒褐色土粒と焼土粒・ローム土粒を微量含む。

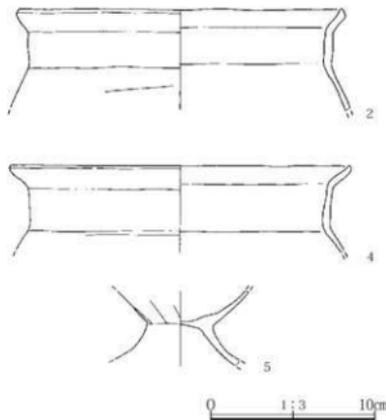
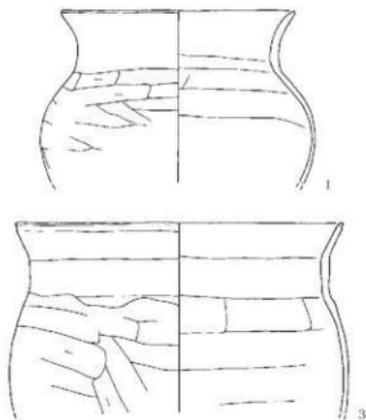
0 1:60 2m



2区11号竪穴建物カマド

1 暗褐色土 焼土粒をわずかに含む。

0 1:30 1m



第32図 11号竪穴建物平・断面図及び出土遺物

12号竪穴建物 第33・34図 PL.18・123

(旧2区12号住居)

位置：2区 728-333周辺

規模：2.98×2.52m、深度は14～19cmほどを計る。

面積：7.781㎡

形状：隅丸方形

主軸方位：N-119°-E

埋没土：暗褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。

南西側は削平より壁高が7～8cmほどしか残らない。

床面：掘り方埋土とローム地山土を固めて床面とする。

カマド：南東壁の中央やや南コーナー寄りに位置する。

遺存状態は比較的良好で、掘り方には両袖石・両壁芯材石の4石の立石と中央部に支脚石が据えられたまま残り、間には天井石が落下した状態で出土する。いずれの礎も被熱のため焼硬化する。燃焼部は壁のやや外側に位

置し、煙道部は突出せず、急な勾配で立ち上がる。

柱穴：なし。

貯蔵穴：カマド脇の建物南コーナー部に検出されるが、深度が20cmほどしかない。

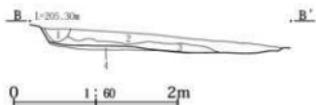
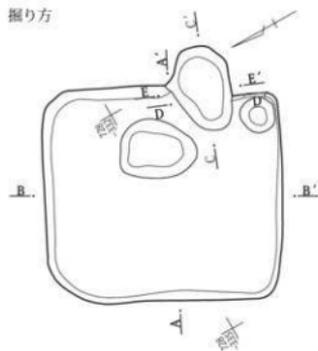
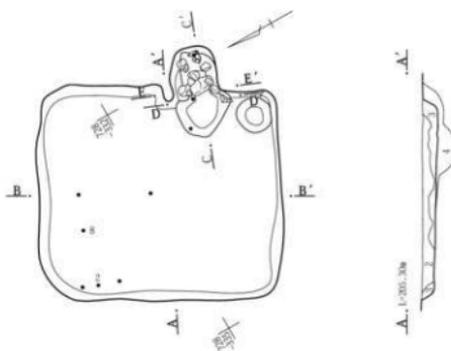
壁周溝：なし。

掘り方：建物中央南西壁寄りに土坑状の掘り込みを1基有する。

重複：なし。

遺物：本建物からは土師器、須恵器、鉄製品(鎌)などが出土している。図示した土器は、土師器杯・甕がある。このうち、No. 2の土師器杯が床面、No. 4～6の土師器甕がカマドからの出土である。

所見：調査区1・2区の中央部北東端に在る。本建物の時期は、カマドから出土した土師器甕の形態から9世紀第2～3四半期に比定できる。



2区12号竪穴建物

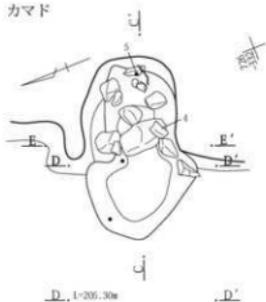
- 1 暗褐色土 黒褐色土粒と淡色黒ボク土粒を少量含む。
- 2 暗褐色土 褐色ローム層砂層土を斑状に含み、黒褐色土粒とローム土粒を少量含む。
- 3 暗褐色土 黒褐色土粒と炭化物・ローム土粒を微量含む。
- 4 暗褐色土 褐色土と黒褐色土ブロック・ローム小ブロックを多量に含み、焼土粒子を少量含む。(掘り方埋土)



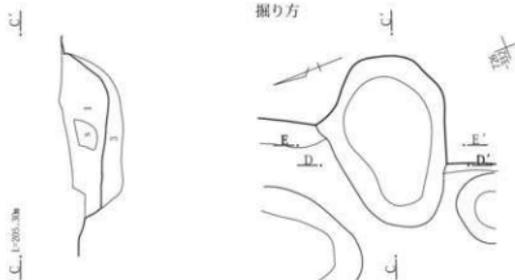
第33図 12号竪穴建物平・断面図及び出土遺物(1)

第2章 検出された遺構と遺物

カマド

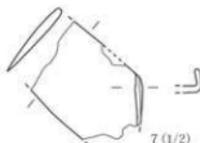
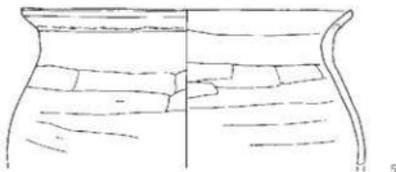
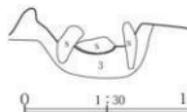
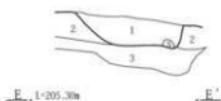


掘り方



2区12号竪穴建物カマド

- 1 暗褐色土 黒褐色上ブロックとローム小ブロックを含み、焼土粒子を少量含む。
 2 褐色土 黒褐色上ブロックを少量含む、ローム粒子を微量含む。(油桐炭材)
 3 黒褐色土 ロームブロックと灰褐色上ブロック・焼土小ブロックを少量含む。



第34図 12号竪穴建物カマド平・断面図及び出土遺物(2)

13号竪穴建物 第35図 PL.19・123

(旧2区13号住居)

位置：2区 725—330周辺

調査区端に位置し、北東壁が調査区域外に在る。

規模：(3.28)×2.45m、深度は10～21cmほどを計る。

面積：7.313m²+α

形状：やや歪な調丸長方形

主軸方位：N—127°—E

埋没土：暗褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。

床面：カマド前面を除き、ローム地山土を固めて床面とする。

カマド：南東壁の中央やや南コーナー寄りに位置し、遺存状態は悪い。燃焼部は壁ライン上に位置し、煙道部は突出せず、緩やかな勾配で立ち上がる。

柱穴：なし。

貯蔵穴：カマド脇の建物南コーナー部に検出されるが、深度が18cmほどしかない。

壁周溝：なし。

掘り方：カマド前面部に土坑状の掘り込みを1基有する。

重複：なし。

遺物：本建物からは土師器、須恵器などが出土している。図示できた個体は、須恵器椀だけであった。このうち、No. 1・4の須恵器椀が床面、No. 3・4の須恵器椀がカマドからの出土である。

所見：調査区1・2区の中央部北東端、埋没谷の周縁に在る。本建物の時期は、床面やカマドから出土した椀の形態から、9世紀第4四半期～10世紀初頭に比定できる。

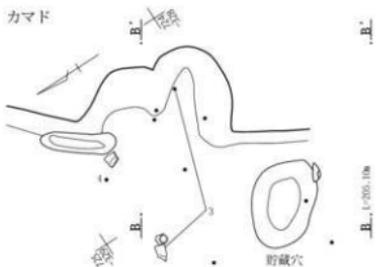


2区13号竪穴建物

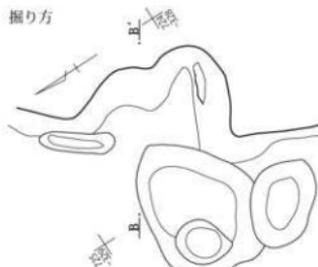
- 1 暗褐色土 黒褐色土粒と淡色黒ボク土粒を少量含む。
- 2 暗褐色土 黒褐色土粒と焼土粒・ローム土粒を微量含む。
- 3 暗褐色土 黒褐色土粒と炭化物・ローム土粒を微量含む。
- 4 暗褐色土 大径のソフトロームブロックを含む。(掘り方埋土)

0 1:60 2m

カマド



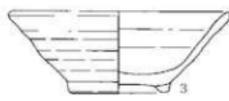
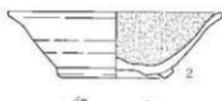
掘り方



2区13号竪穴建物カマド

- 1 暗褐色土 ローム小ブロックと焼土粒を少量含む。
- 2 黒褐色土 淡黄色粘土小ブロックと焼土粒を少量含む。
- 3 暗褐色土 大径のソフトロームブロックを含む。(掘り方埋土)

0 1:30 1m



0 1:3 10m

第35図 13号竪穴建物平・断面図及び出土遺物

14号竪穴建物 第36～38図 PL.20・123・124

(旧1区14号住居)

位置：1区 710-345周辺

規模：4.35×3.48m、深度は27～38cmほどを計る。

面積：15.129㎡

形状：やや歪な隅丸方形

主軸方位：N-114°-E

埋没土：暗褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。

床面：掘り方の土坑上面を除き、ローム地山土を踏み固めて床面とする。

カマド：南東壁の中央やや南コーナー寄りに位置する。遺存状態は悪く、右袖部の袖石のみが残る。燃焼部は壁ライン上に位置すると思われる、煙道部は突出せず、緩やかな勾配で立ち上がる。

柱穴：なし。

貯蔵穴：カマド脇の建物南コーナー部に検出され、深度は20cmほどを計る。

壁周溝：北西壁と北東壁の中ほどの際に、深度15cmほどの溝が検出される。

掘り方：カマド前面部に土坑状の掘り込みを1基有する。

重複：北西壁部にて15号竪穴建物と重複し、埋土の様相より本建物の方が新しいものと判定される。

遺物：本建物からは土師器、須恵器、黒色土器、灰釉陶器、鉄製品(釘・鎌等)などが出土している。図示した土器には、土師器甕、須恵器杯・羽釜、黒色土器碗、灰釉陶器皿・碗・輪花碗がある。このうち、No.1の須恵器杯、No.2の須恵器碗、No.8の灰釉陶器輪花碗が床面、No.11の土師器小型甕がカマド、No.6の黒色土器碗、No.13の須恵器羽釜が貯蔵穴、No.4の須恵器碗、No.9の灰釉陶器碗が掘り方からの出土である。

所見：調査区1・2区の中央部南西寄りの埋没谷周縁に在る。本建物の時期は、床面やカマド、貯蔵穴から出土した土師器甕、須恵器碗・羽釜から、10世紀第1四半期に比定できる。

15号竪穴建物 第36・39図 PL.19・124

(旧1区15号住居)

位置：1区 711-347周辺

規模：3.46×(2.25)m、深度は7～17cmほどを計る。

面積：7.304㎡+α

形状：隅丸方形

主軸方位：N-35°-E

埋没土：暗褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。

床面：掘り方の土坑上面を除き、ローム地山土を踏み固めて床面とする。

カマド：重複のため不明。

柱穴：なし。

貯蔵穴：重複のため不明。

壁周溝：なし。

掘り方：土坑状の掘り込みを数基有する。

重複：南東側にて14号竪穴建物と重複し、埋土の様相より本建物の方が古いものと判定される。重複する14号建物の掘り込みが深いため、南東壁寄りの施設の痕跡も残らない。

遺物：本建物からは土師器、須恵器、灰釉陶器、鉄製品(紡錘車・鎌)などが出土している。図示した土器には、土師器甕、須恵器碗、灰釉陶器碗、小瓶がある。このうち、No.5の土師器甕とNo.2の灰釉陶器碗が床面からの出土である。なお、灰釉陶器碗は高台の形態や施釉方法から大原2号式期に比定できる。

所見：調査区1・2区の中央部南西寄りの埋没谷周縁に在る。

本建物の時期は、床面から出土した灰釉陶器碗や埋没土からの出土であるが須恵器碗から、10世紀前半に比定できる。

16号竪穴建物 第40～43図 PL.21・22・124・125

(旧1区16号住居)

位置：1区 716-336周辺

規模：4.49×3.47m、深度は9～24cmほどを計る。

面積：16.627㎡

形状：やや歪な隅丸方形

主軸方位：N-39°-E

埋没土：暗褐～黒褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。

床面：掘り方埋土の上面を踏み固めて床面とする。カマド前面に灰、西コーナーと南コーナー付近には焼土の散乱がみられる。

また、北東壁カマド脇から北コーナーにかけて、テラス状の張り出しが設けられる。



貯蔵穴
E, 1-203.00m E'



1区14号壑穴建物貯蔵穴
1 黒褐色土 ローム粒を少量含む。



14号壑穴建物床下土坑1
G, 1-203.00m G'

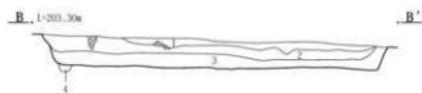


14号壑穴建物床下土坑2-3
H, 1-203.00m H'



14号壑穴建物床下土坑4
I, 1-203.00m I'

1区14号壑穴建物床下土坑1~4
1 暗褐色土 ハードロームブロックを少量含む。



1区14号壑穴建物

- 1 暗褐色土 黒褐色土粒と淡色黒ボク土粒を少量含む。
- 2 暗褐色土 黒褐色土粒と焼土粒・ローム土粒を含む。
- 3 暗褐色土 褐色ローム漸移層上を斑状に含み、ローム小ブロックと炭化物を少量含む。
- 4 暗褐色土 ローム小ブロックを多量に含む。

1区15号壑穴建物

- 1 暗褐色土 ソフトローム小ブロックを微量含む。
- 2 暗褐色土 ローム小ブロックを少量含む。

15号壑穴建物床下土坑1
J, 1-203.30m J'



15号壑穴建物床下土坑2
K, 1-203.30m K'

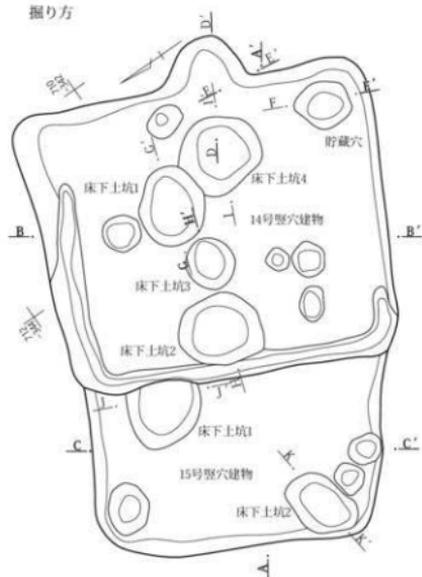


1区15号壑穴建物床下土坑1・2

- 1 暗褐色土 黒褐色土粒とローム土粒を微量含む。
- 2 暗褐色土 黒褐色土粒を微量含み、ローム粒を多量に含む。

0 1:60 2m

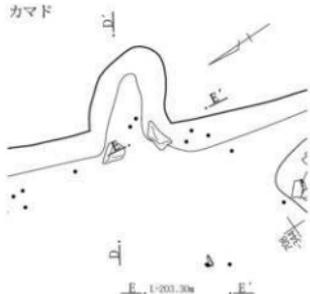
掘り方



第36図 14・15号壑穴建物平・断面図

第2章 検出された遺構と遺物

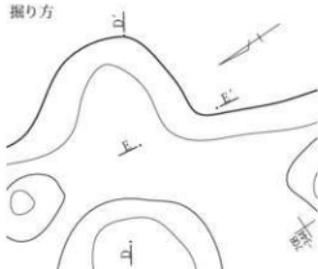
カマド



D-D'



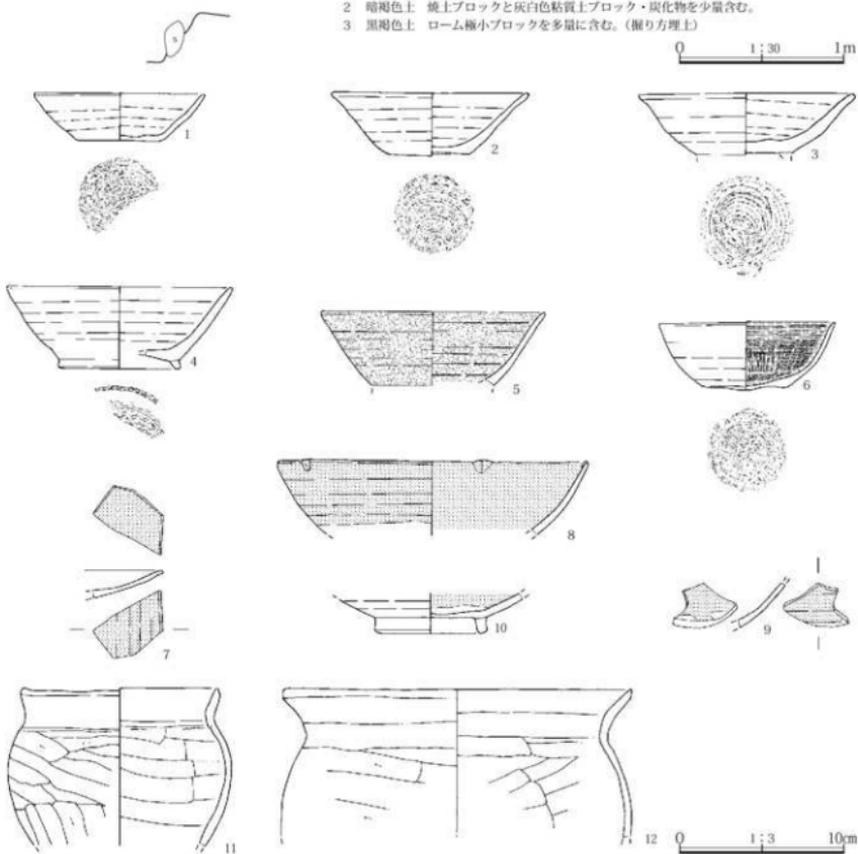
掘り方



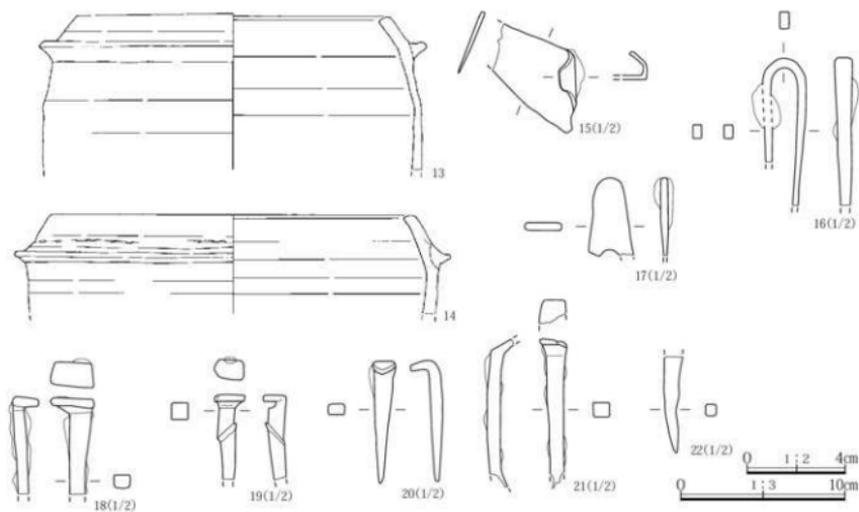
1区14号竪穴建物カマド

- 1 暗褐色土 焼土粒をわずかに含む
- 2 暗褐色土 焼土ブロックと灰白色粘質土ブロック・炭化物を少量含む。
- 3 黒褐色土 ローム極小ブロックを多量に含む。(掘り方埋土)

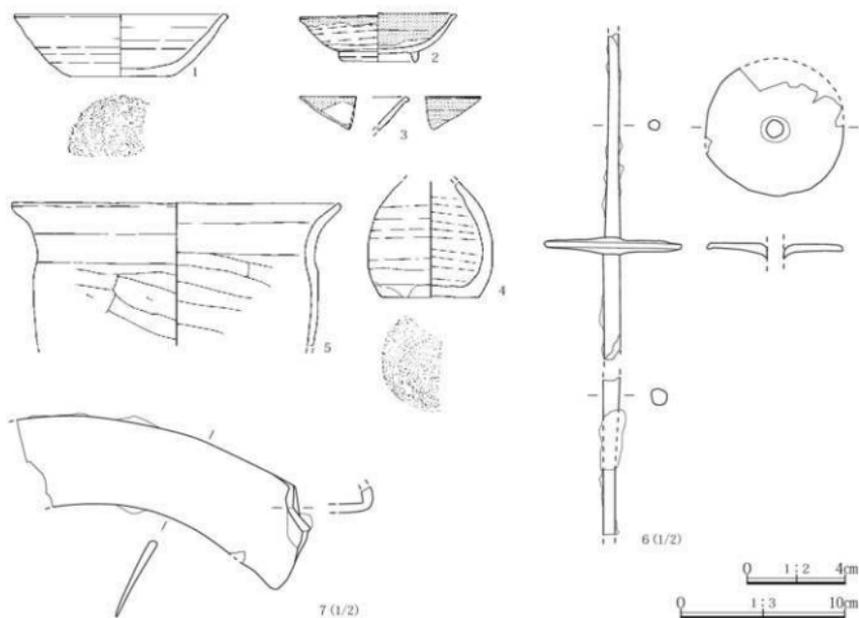
0 1:30 1m



第37図 14号竪穴建物カマド平・断面図及び出土遺物(1)



第38图 14号竪穴建物出土遺物(2)



第39图 15号竪穴建物出土遺物

カマド：北東壁の東コーナー寄りに位置する。遺存状態は比較的良好。掘り方調査において燃焼部端から煙道にかけての両壁芯材礫が出土する。また、後記の貯蔵穴よりも焼礫が出土し、石組みのカマドであったと解される。燃焼部はほぼ壁ライン上からやや外側に位置し、燃焼部奥で段を有し、煙道部へ続く。煙道部はやや突出し、緩やかな勾配で立ち上がる。

柱穴：なし。

貯蔵穴：カマド脇の建物東コーナー部に検出され、深度は20cm強を計る。カマド寄りの埋土上層より、カマド構築材と思われる焼礫が出土する。

壁周溝：北西壁の中央から西コーナーにかけて、深度10cmほどの溝が検出される。

掘り方：主に建物中央より北東壁寄りに土坑状の掘り込みを数基有する。

重複：西コーナー部において17号竪穴建物と重複し、埋土の様相より本建物の方が新しいものと判定される。

遺物：本建物からは土師器、須恵器、黒色土器、灰釉陶器、鉄滓などが出土している。図示した土器には、土師器甕・甔、須恵器椀、羽釜、黒色土器椀、灰釉陶器、輪花椀、小瓶がある。このうち、No. 2・3の須恵器椀、No. 10の灰釉陶器小瓶、No. 14の土師器甕が床面、No. 4の須恵器椀、No. 9の灰釉陶器輪花椀、No. 11・12・14・15の土師器甕、No. 16の土師器甔、No. 17の須恵器羽釜がカマド、No. 5・6の黒色土器椀が貯蔵穴、No. 7の黒色土器椀、No. 13の土師器甕が掘り方からの出土である。なお、掘り方から出土しているNo. 13の土師器甕は9世紀第3四半期の年代観が与えられることから、構築時に混入したか伝世品したものとみられる。この他、図示できなかった灰釉陶器の椀には、光ヶ丘1号竪穴式期に比定できるものが存在している。

所見：調査区1・2区の中央部、埋没谷周縁に在る。

本建物の時期は、床面やカマドから出土した須恵器椀や羽釜から、10世紀第1四半期に比定できる。

17号竪穴建物 第40～42・44図 PL.22・125

(旧1区17号住居)

位置：1区 715—338周辺

規模：4.13×2.90m、深度は9～21cmほどを計る。

面積：(13.847) m²

形状：隅丸長方形

主軸方位：N—127°—E

埋没土：暗褐～黒褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。

床面：掘り方の土坑上面を除き、ローム地山土を踏み固めて床面とする。

カマド：南東壁のほぼ中央に位置する。カマド内や貯蔵穴周辺より出土する礫の存在から、石組みのカマドであったと解されるが、遺存状態は悪い。燃焼部はほぼ壁ライン上に位置し、煙道部はあまり突出せず、緩やかな勾配で立ち上がる。

柱穴：なし。

貯蔵穴：カマド脇の建物南コーナー部に検出され、深度は20cmほどを計る。

壁周溝：北西壁の北コーナー付近に、深度10cmほどの溝が検出される。

掘り方：主に建物中央より北西壁にかけて、土坑状の掘り込みを数基有する。

重複：東コーナー部において16号竪穴建物と重複し、埋土の様相より本建物の方が古いものと判定される。

遺物：本建物からは土師器、須恵器、灰釉陶器、鉄製品(刀子・釘)、鉄滓などが出土している。図示した土器には、須恵器椀・羽釜、灰釉陶器皿がある。このうち、No. 3の須恵器杯、No. 7・8の須恵器椀とNo. 10の須恵器羽釜が床面からの出土である。なお、No. 10の須恵器羽釜の一部片は掘り方からも出土している。

所見：調査区1・2区の中央部、埋没谷周縁に在る。

本建物の時期は、床面から出土した須恵器椀、羽釜から10世紀第1四半期に比定できる。

18号竪穴建物 第45・46図 PL.23・125

(旧3区18号竪穴建物)

位置：3区 664—298周辺

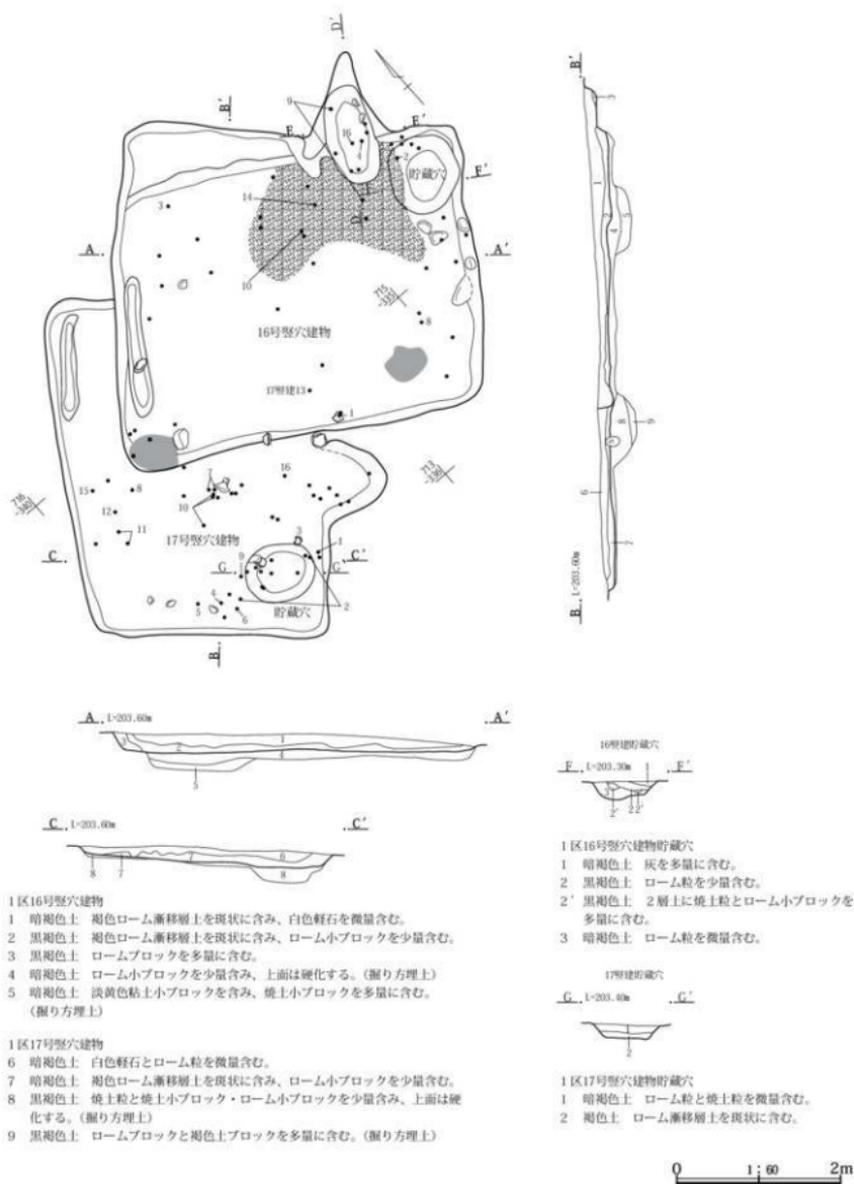
規模：3.36×3.22m、深度は23～28cmほどを計る。

面積：9.745m²

形状：隅丸台形

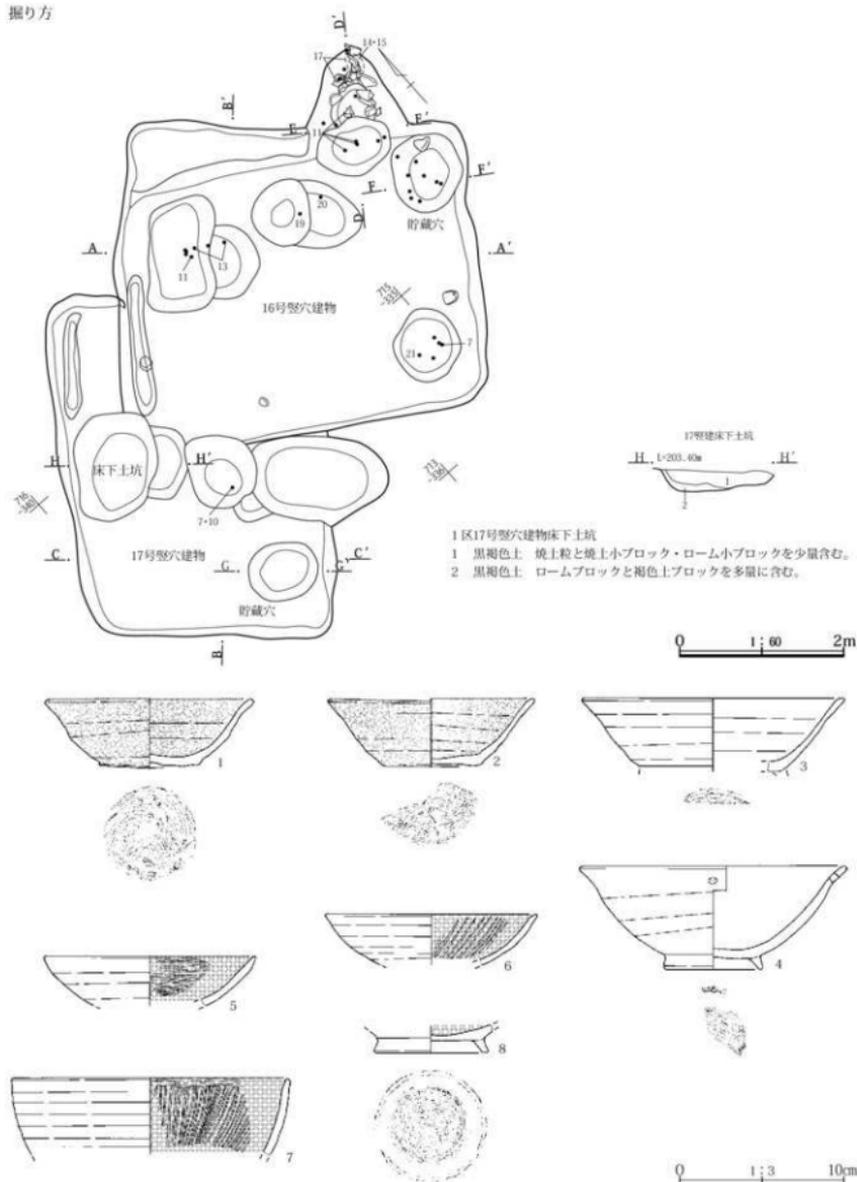
主軸方位：N—175°—E

埋没土：暗褐～黄褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。傾斜地形上に立地し、かつ上面の削平により、西半部の上位が失われる。



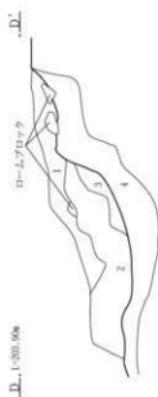
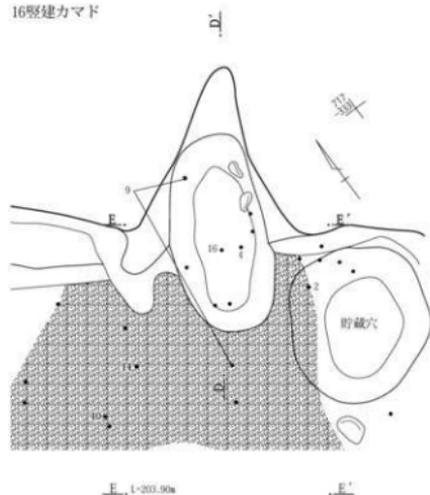
第40図 16・17号壑穴建物平・断面図

掘り方

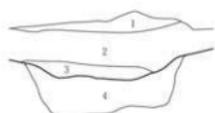


第41図 16・17号堅穴建物掘り方平・断面図及び16号堅穴建物出土遺物(1)

16号建物カマド



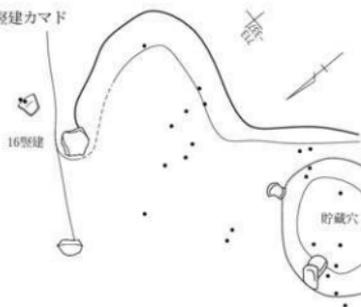
1:200, 90m



1区16号貯蔵穴建物カマド

- 1 暗褐色土 ローム粒を少量含む、ローム大ブロックを多量に含む。
- 2 黒褐色土 褐色土ブロックとローム粒子を少量含む。
- 3 灰層 焼土小ブロックを少量含む。
- 4 暗褐色土 ローム粒を少量含む。(掘り方埋土)

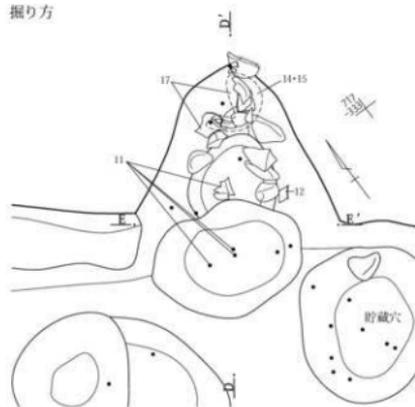
17号建物カマド



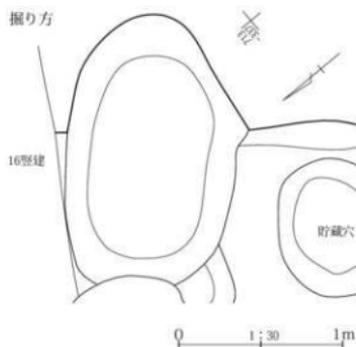
16号建

貯蔵穴

掘り方

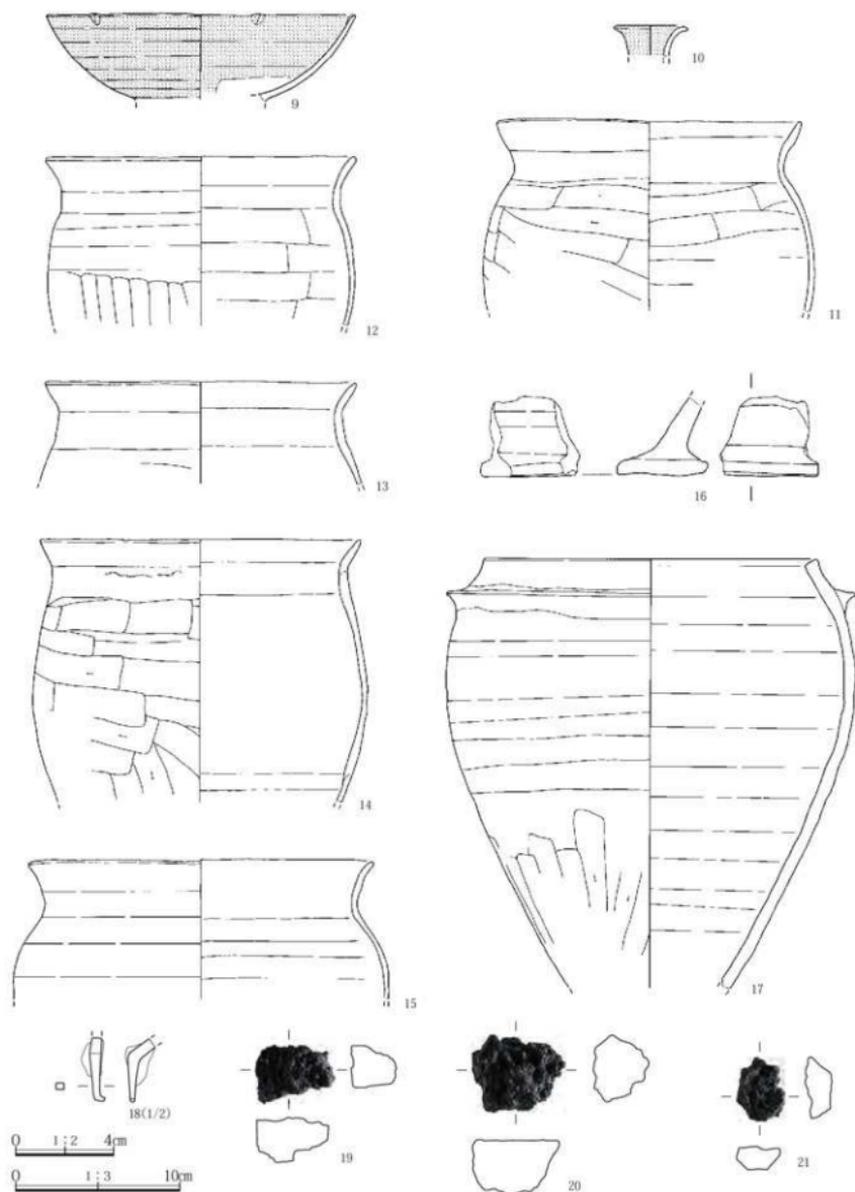


掘り方

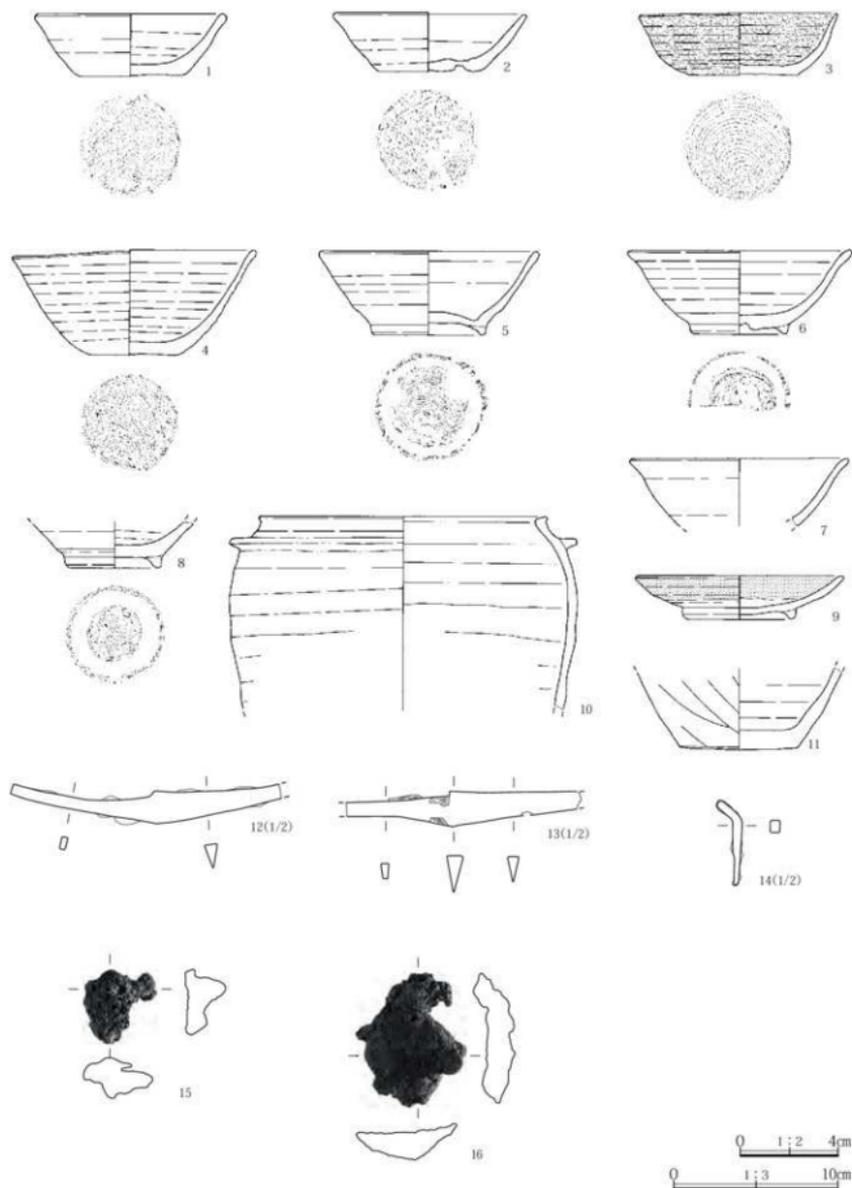


第42図 16・17号貯蔵穴建物カマド平・断面図

第2章 検出された遺構と遺物



第43図 16号竪穴建物出土遺物(2)



第44图 17号竪穴建物出土遺物

床面：掘り方の土坑P1とカマド1上面を除き、ローム地山土を踏み固めて床面とする。

カマド：南壁の南西コーナー部に位置する。遺存状態は不良。袖や壁の芯材としての礫の敷設は認められない。燃焼部は壁の内側に位置し、煙道部に向けて急峻に立ち上がる。天井部崩落土の堆積が僅かに認められたが、使用感は少ない。これに対し、同南壁の南東側に多量の焼土が散乱し、下方にはカマド掘り方が検出された。掘り方下面のローム地山は赤く焼土化しており、長期間の使用の痕跡が認められた。使用面は遺存せず、付近より焼礫も出土していることから、破壊されたカマド跡と推察される。

南西側のカマド〔カマド2〕と南東側のカマド〔カマド1〕との新旧関係は、カマド2が、使用痕跡があまり認められず、カマド形状と下面の掘り方形状が一致していないことから、建物築造当初からのものではく、新しく築造されたものと推察される。これに対して南東部のカマド1は、掘り方底面の焼土化から、建物築造当初よりのカマド跡で、長期にわたる使用の痕跡が認められたことから、カマド1を旧カマド、カマド2を新カマドと断

定した。カマド1の廃絶時期は、付近に構築材の焼礫が認められることから、建物廃絶の直前まで使用されていた可能性が高い。

柱穴：建物中央北東よりに位置するP2、北西壁際のP3、北壁際のP4が柱穴となる可能性が高い。

貯蔵穴：なし。

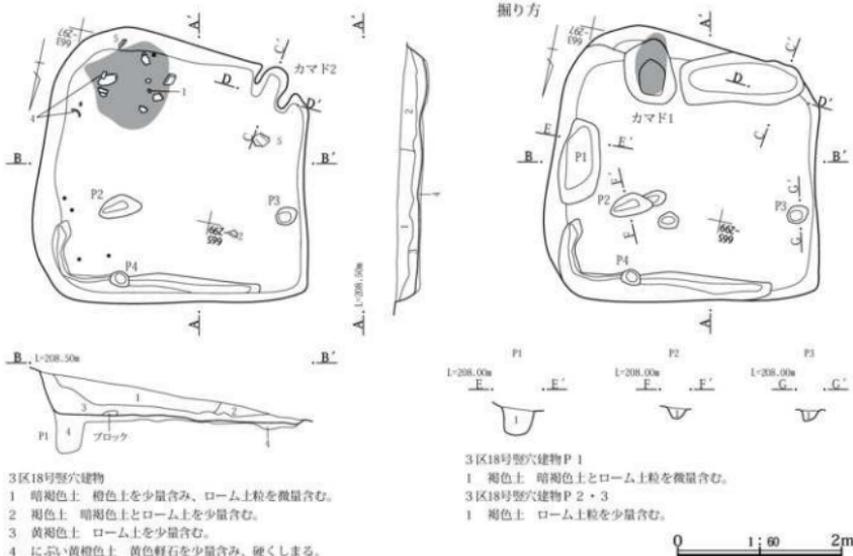
壁周溝：北壁から北東コーナー付近にかけて、深度10cmほどの溝が検出される。

掘り方：東壁際と南壁コーナー寄りの際に楕円形の土坑状掘り込みを有する。

重複：なし。

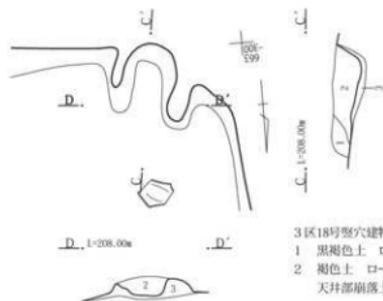
遺物：本建物からは土師器、須恵器、鉄製品(鎌)などが出土している。図示した土器には、土師器杯・甕、須恵器杯蓋がある。このうち、No. 4の土師器甕が床面からの出土である。

所見：調査区3区の中央部東よりに在り、本建物の時期は、床面から出土した土師器甕から7世紀第4四半期に比定できるが、埋没土からの出土であるがNo. 2の土師器杯やNo. 3の須恵器杯蓋から8世紀初頭まで存続していたことが想定できる。

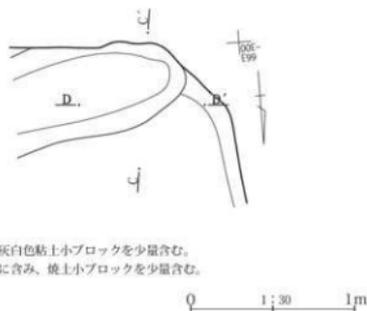


第45図 18号型穴建物平・断面図

カマド2

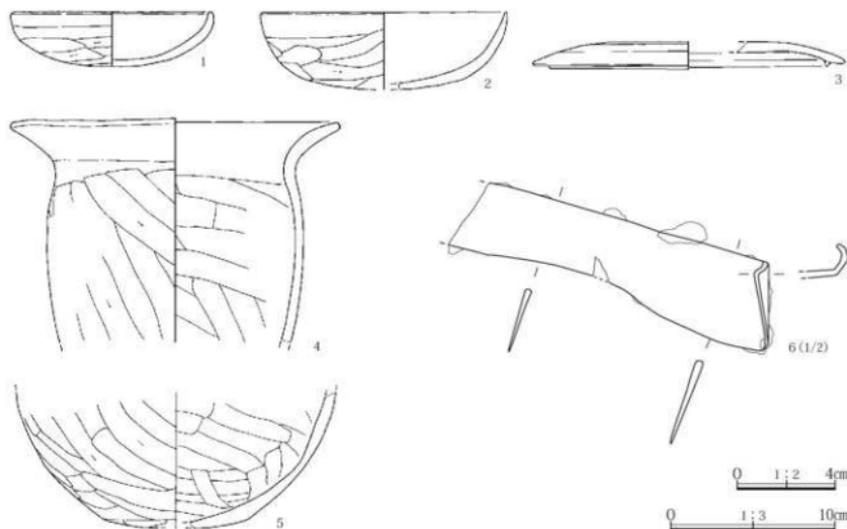


カマド2掘方



3区18号竪穴建物カマド

- 1 黒褐色土 ローム小ブロックと灰白色粘土小ブロックを少量含む。
- 2 褐色土 ロームブロックを多量に含み、焼土小ブロックを少量含む。天井部崩落上。



第46図 18号竪穴建物カマド平・断面図及び出土遺物

19号竪穴建物 第47・48図 PL.24・125

(旧3区19号竪穴建物)

位置：3区 659-303周辺

規模：2.72×1.90m、深度は上面の削平を受け10～20cmほどを計るのみ。

面積：5.087㎡

形状：隅丸長方形

主軸方位：N—53°—E

埋没土：暗褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。

床面：全面に掘り方土を踏み固めて床面(貼り床)とする。
カマド：北東壁の中央東コーナー寄りに位置する。カマド周辺より出土する礫の存在から、石組みのカマドであったと解されるが、遺存状態は悪い。燃焼部はほぼ壁ライン上に位置し、煙道部はあまり突出せず、急峻な勾配で立ち上がる。掘り方底面の地山に焼土化が観られることから、長期間に及ぶ使用が想定される。

柱穴：なし。**貯蔵穴**：建物北コーナー部に方形の土坑が検出され、深

第2章 検出された遺構と遺物

度は20cmほどを計る。

壁周溝：カマド脇の東コーナー付近を除く各壁際に、深度5cmほどの溝が検出される。

掘り方：カマド前面に土坑状の掘り込みとピット状の掘り込みを有する。

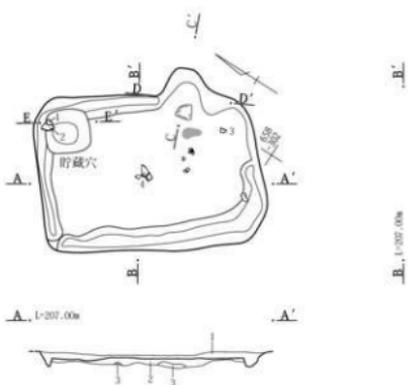
重複：なし。

遺物：本建物からは土師器、須恵器などが出土している。

図示した土器には、土師器杯・鉢、須恵器長頸壺がある。

このうち、No. 4の須恵器長頸壺が床面からの出土である。なお、No. 4の須恵器長頸壺の一部片は、4区50号竪穴建物からも出土している。

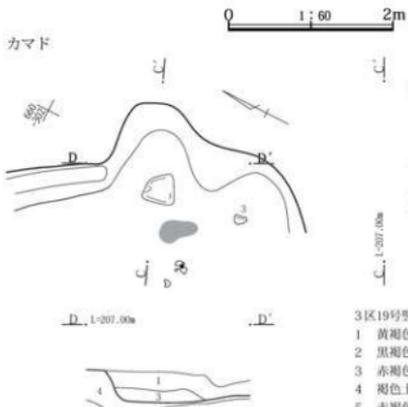
所見：調査区3区の中央部南東寄りに在り、本建物の時期は、床面から出土した須恵器長頸壺からは8世紀前半の年代観が与えられるが、断定には至らない。しかし、埋没土中からの出土した土師器杯などを考慮すると、この年代に比定するのが妥当と考える。



3区19号竪穴建物

- 1 暗褐色土 褐色土とローム土粒を微量含む。
- 2 褐色土 ロームブロックと黒色土ブロックを多量に含み、硬くしまる。磨り床
- 3 暗褐色土 黒褐色土粒とローム土を少量含む。

カマド



3区19号竪穴建物カマド

- 1 黄褐色土 暗褐色土と焼土粒を少量含む。
- 2 黒褐色土 褐色土粒と焼土粒を少量含む。
- 3 赤褐色土 焼土を多量に含み、褐色土粒を微量含む。
- 4 褐色土 焼土を少量含む。(袖部)
- 5 赤褐色土 焼土を多量に含む。



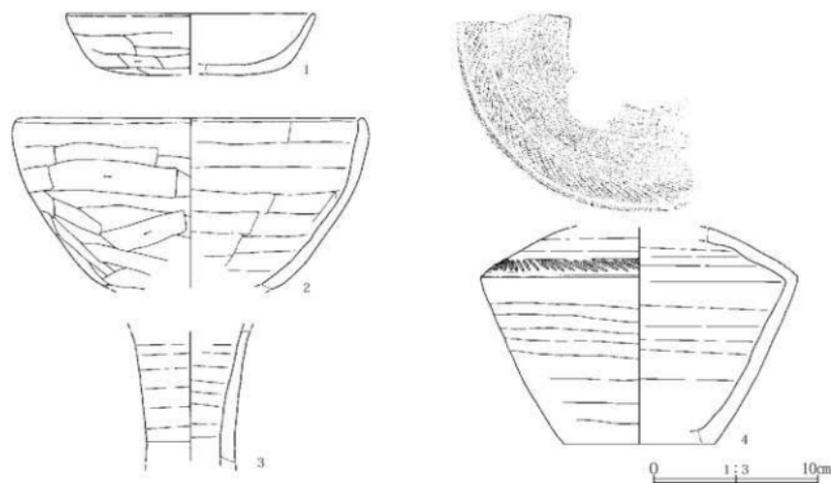
3区19号竪穴建物貯蔵穴

- 1 褐色土 YPと褐色土を少量含む。
 - 2 黄褐色土 YPとローム土を少量含む。
- 3区19号竪穴建物P1
- 1 黒褐色土 黒色土と褐色土を少量含む。
 - 2 褐色土 ローム土を含み、YPを微量含む。

掘り方



第47図 19号竪穴建物平・断面図



第48図 19号竪穴建物出土遺物

20号竪穴建物 第49～53図 PL.25・126～128

(旧3区20号竪穴建物)

位置：3区 655～308周辺

規模：5.00×2.6m、深度は27～43cmほどを計る。

面積：13.639㎡

形状：隅丸長方形

主軸方位：N-56°-E

埋没土：暗褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。

床面：全面に掘り方土を踏み固めて床面とする。

カマド：北東壁の中央やや東コーナー寄りに位置する。

カマド両袖部は、地山ローム土の掘り残しを芯とし、その上に粘質土を用いて構築される。検出時には煙道の天井部の一部が残った状態であった。燃焼部は壁ライン上のやや内側に位置し、煙道部はあまり突出せず、急峻な勾配で立ち上がる。掘り方底面の地山に焼土化が観られることから、長期間に及ぶ使用が想定される。

柱穴：なし。

貯蔵穴：なし。

壁周溝：カマドが在る北東壁を除く各壁際に、深度10cmほどの溝が検出される。南西壁の中ほどの一部が途切れ、この部分が入り口となる可能性がある。

掘り方：建物中央の長軸に沿って、大型の円形土坑が6

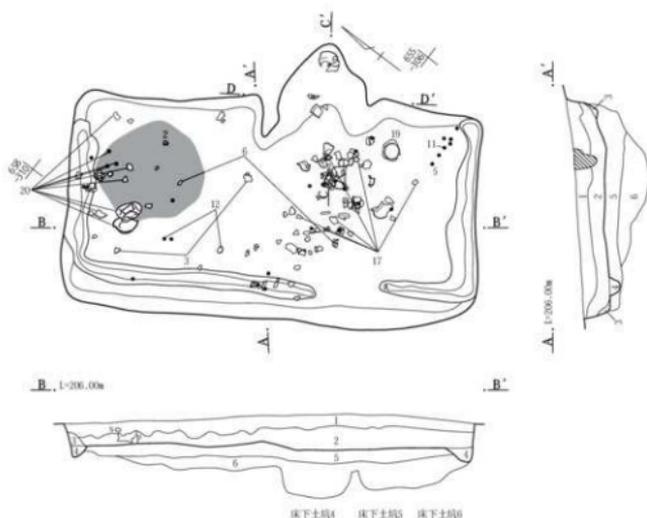
基掘られる。

重複：なし。

遺物：本建物からは土師器、須恵器などが出土している。図示した土器には、土師器杯・甕・台付甕・壺、須恵器杯・甕がある。このうち、No. 2・6の土師器杯、No. 14・15の土師器甕、No. 18の土師器甕、No. 20の土師器甕、21の土師器甕が床面、No. 8の土師器小型甕、No. 13・15の土師器甕がカマド、No. 16の土師器甕が掘り方からの出土である。

所見：調査区3区の中央部南東寄りに在り、本竪穴建物の時期は、床面やカマドから出土した土師器杯、甕から7世紀第4四半期から8世紀初頭に比定できる。

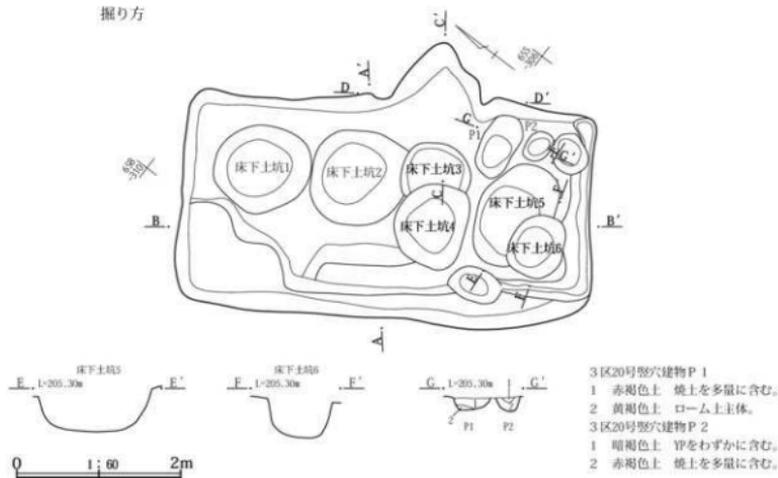
なお、本建物から出土している土師器甕は2区1号竪穴建物と同様にすべて縦方向のヘラ削りによるものである。No. 6のような土師器杯が共伴する段階では、県内出土の土師器甕を概観すると胴部上位には斜め方向のヘラ削りが施される。しかし、こうした整形の甕がみられないことは、この地域の特性と考えられる。



3区20号竪穴建物

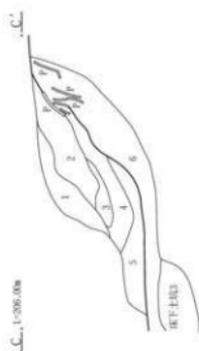
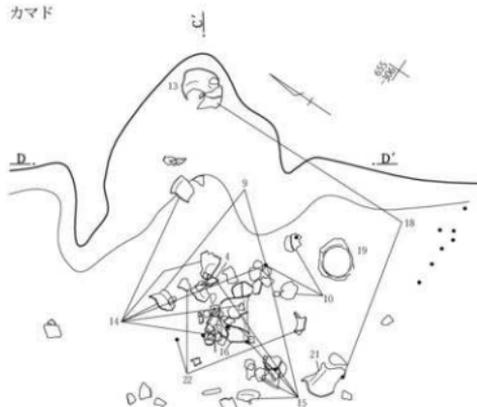
- 1 暗褐色土 褐色土を少量含み、黒褐色土粒をわずかに含む。
- 2 暗褐色土 褐色土を少量含む。
- 3 褐色土 褐色土を多量に含む。壁の崩壊土。
- 4 褐色土 褐色土と黒褐色土をわずかに含む。
- 5 黄褐色土 ロームブロックと黒褐色土ブロックを多量に含み、焼土粒子を少量含む。硬くしまる。貼り床
- 6 暗褐色土 ロームブロックを多量に含み、黒褐色土と褐色土ブロックを少量含む。

掘り方



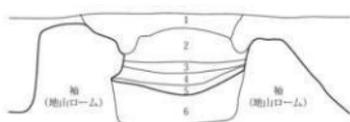
第49図 20号竪穴建物平・断面図

カマド

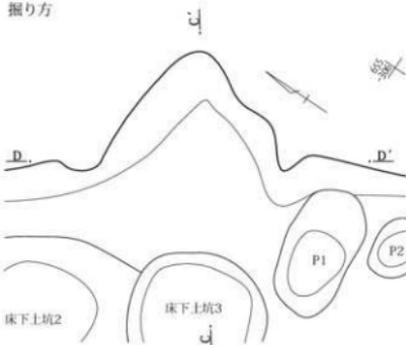


D, 1:200.0m

D'



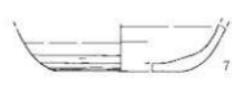
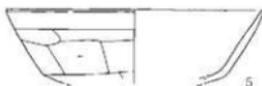
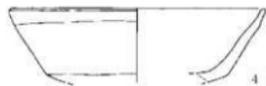
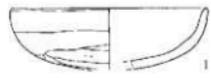
掘り方



3区20号竪穴建物カマド

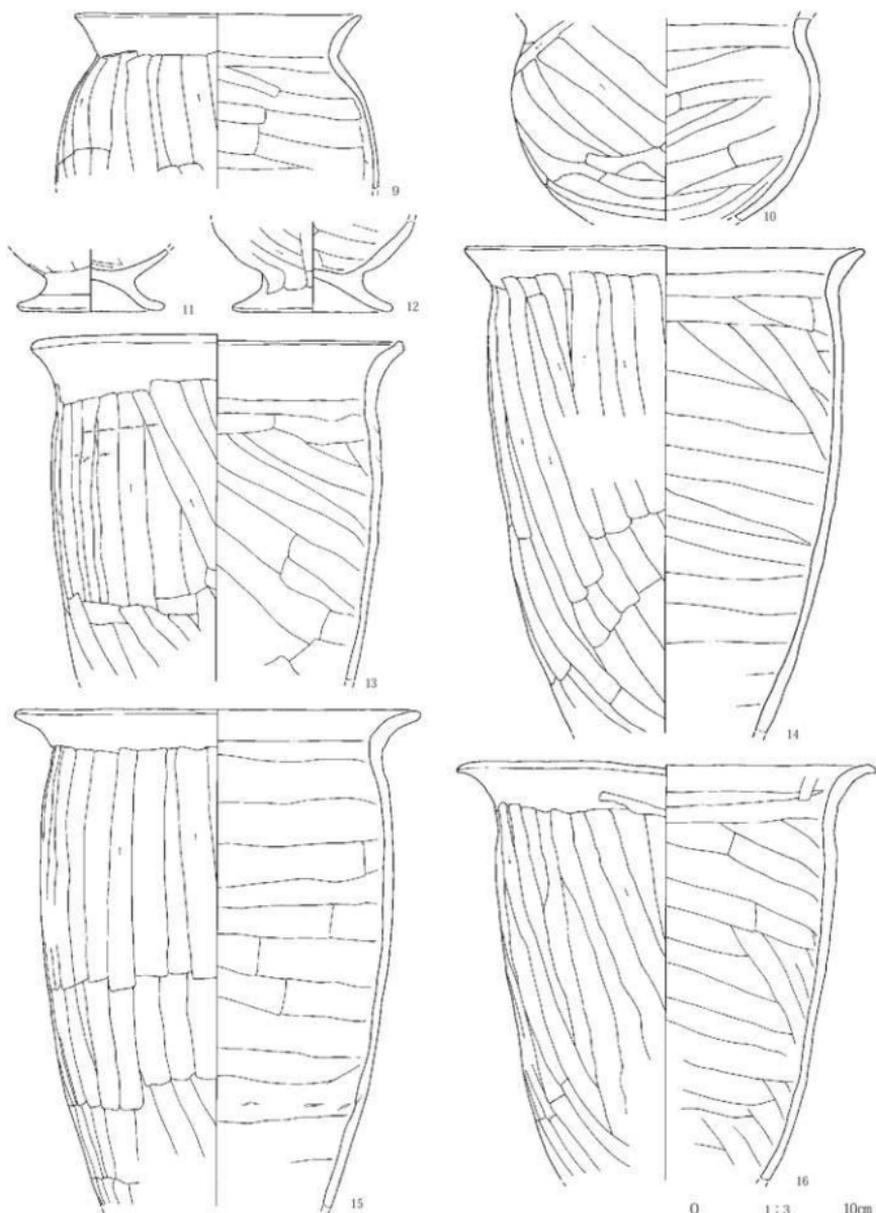
- 1 暗褐色土 黒褐色土粒を微量含む。
- 2 淡黄色土 白色軽石を微量含む。ハードルーム上。(天井部)
- 3 暗褐色土 粘土を含み、焼土粒を微量含む。
- 4 褐色土 粘土を多量に含み、焼土を少量含む。
- 5 赤褐色土 焼土を多量に含む。
- 6 黄褐色土 ローム小ブロックと黒褐色土小ブロックを多量に含み、焼土粒子を少量含む。

0 1:30 1m

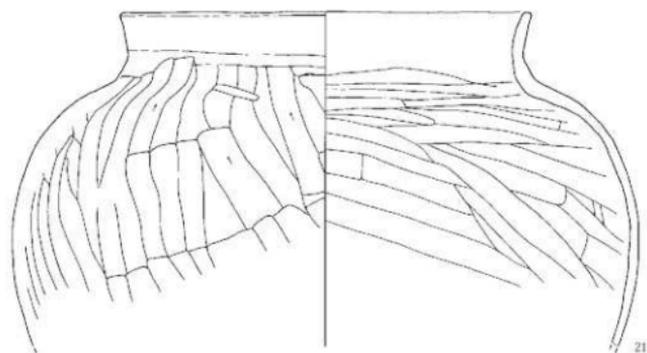
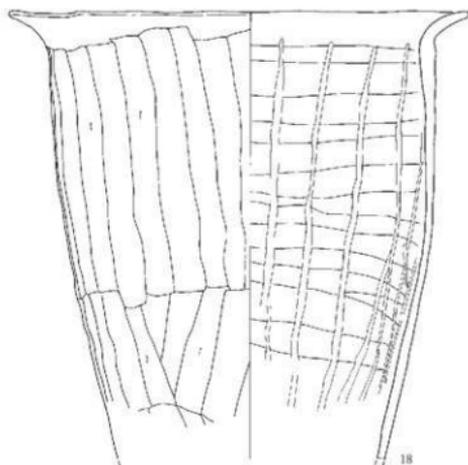
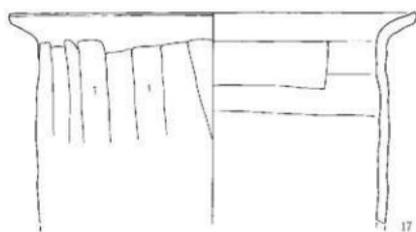


0 1:3 10cm

第50図 20号竪穴建物カマド平・断面図及び出土土遺物(1)

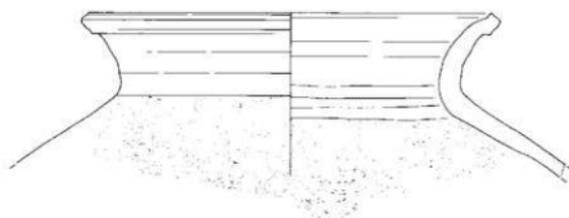
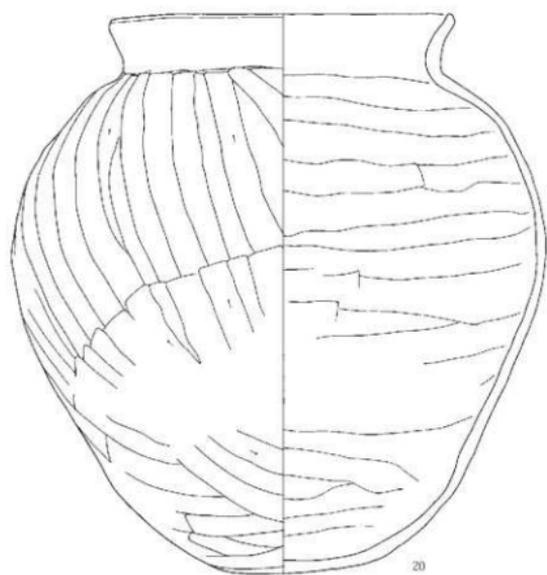
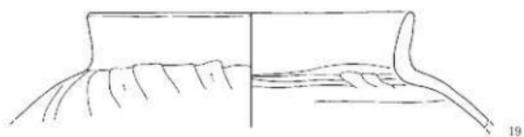


第51図 20号竪穴建物出土遺物(2)



0 1:3 10m

第52図 20号竪穴建物出土遺物(3)



0 1:3 10cm

第53図 20号竪穴建物出土遺物(4)

21号竪穴建物 第54・55図 PL.26・128

(旧3区21号竪穴建物)

位置：3区 658-313周辺

規模：3.14×2.19m、深度は25～28cmほどを計る。

面積：7.103㎡

形状：長方形

主軸方位：N-140°-E

埋没土：暗褐～黒褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。

床面：全面ローム地山土を踏み固めて床面とする。

カマド：北東壁の中央やや東コーナー寄りに位置する。

検出時にはカマド両袖部の袖石が据えられ、その間に天井石砂岩が崩れ落ちた状態であった。燃焼部は壁ライン上のやや外側に位置し、煙道部はあまり突出せず、先端は急峻な勾配で立ち上がる。据えられた両袖石は被熱のため赤く焼燥化していることから、長期間に及ぶ使用が想定される。

柱穴：なし。

貯蔵穴：カマド右脇に設けられ、径65cm、深度30cmほどを計る。

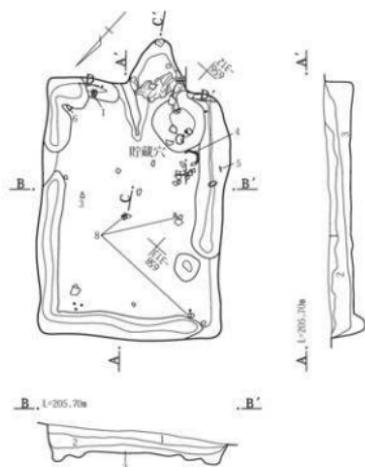
壁周溝：各壁際に、深度10cmほどの溝が検出される。南西壁の西コーナー寄りの一部が途切れ、この部分が入り口となる可能性がある。

掘り方：なし。

重複：なし。

遺物：本建物からは土師器、須恵器などが出土している。図示した土器には、土師器杯・甕・壺、須恵器杯蓋・杯がある。このうち、No. 4の土師器杯蓋、No. 5の須恵器杯が床面上、No. 1・2の土師器杯、No. 6の土師器小型甕が周溝内、No. 7の土師器甕が貯蔵穴内、No. 8の土師器壺がカマドからの出土である。なお、No. 8の土師器壺は貯蔵具であることから、カマドの構築材として使用されたものと判断できる。

所見：調査区3区の中央部南東寄りに在り、本建物の時期は、床面や周溝、貯蔵穴内から出土した土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯などから、8世紀第1四半期に比定できる。



3区21号竪穴建物

1 暗褐色土 褐色土とロームブロックを少量含む。

2 黒褐色土 黒色土とローム粒を少量含む。

3 暗褐色土 YFを微量含む、ローム小ブロックを少量含む。

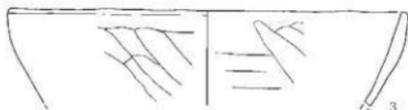
貯蔵穴

E, 1:205, 50m

3区21号竪穴建物貯蔵穴

1 黒色土 大小ロームブロックを多量に含む。

0 1:60 2m

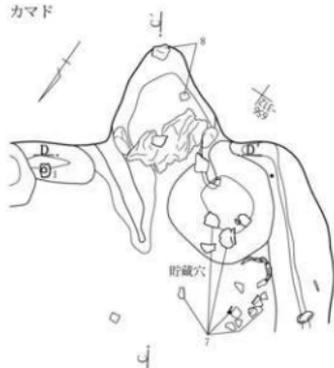


0 1:3 10cm

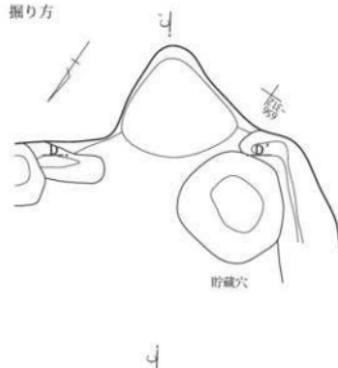
第54図 21号竪穴建物平・断面図及び出土遺物(1)

第2章 検出された遺構と遺物

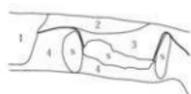
カマド



掘り方



D, 1:200, 70m

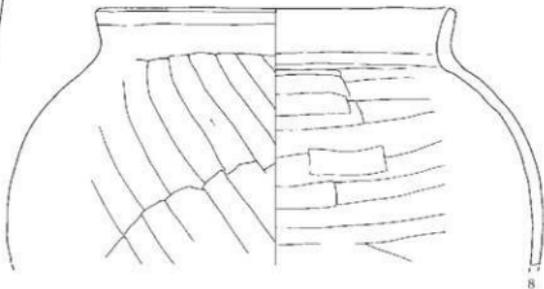
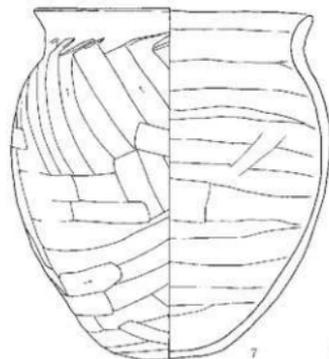
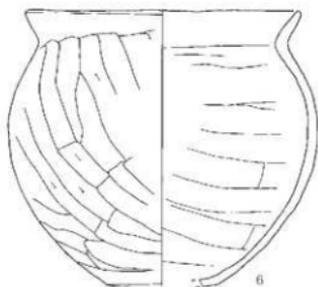


D'

3区21号竪穴建物カマド

- 1 視瓦(樹木)
- 2 褐色土 棕色土を少量含む。
- 3 黒褐色土 棕色粘土粒を少量含む。
- 4 黒褐色土 ロームブロックを多量に含む。(カマド掘り方埋土)

0 1:30 1m



0 1:3 10cm

第55図 21号竪穴建物カマド平・断面図及び出土遺物(2)

22号竪穴建物 第56～58図 PL.27・129

(旧4区22号竪穴建物)

位置：4区 620-285周辺

規模：4.35×2.97m、深度は11～56cmほどを計る。

面積：12.593㎡

形状：隅丸長方形

主軸方位：N-24°-E

埋没土：暗褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。南西半部は削平により、上層を失う。

床面：掘り方の床下土坑上面を除き、ローム地山土を踏み固めて床面とする。

カマド：北東壁の中央東コーナー寄りに位置する。遺存状態は悪く、袖部も残らない。燃焼部は壁ライン上のやや外側に位置し、標道部はあまり突出せず、先端は急峻な勾配で立ち上がる。燃焼部壁面のローム地山土が被熱のため赤く焼硬化していることから、長期間に及ぶ使用が想定される。

柱穴：床面の中央と各コーナー部からピットが検出され

るが、その深度には差異が認められる。

貯蔵穴：掘り方調査において、カマド右脇より楕円形の土坑が検出されるが、深度が浅い。

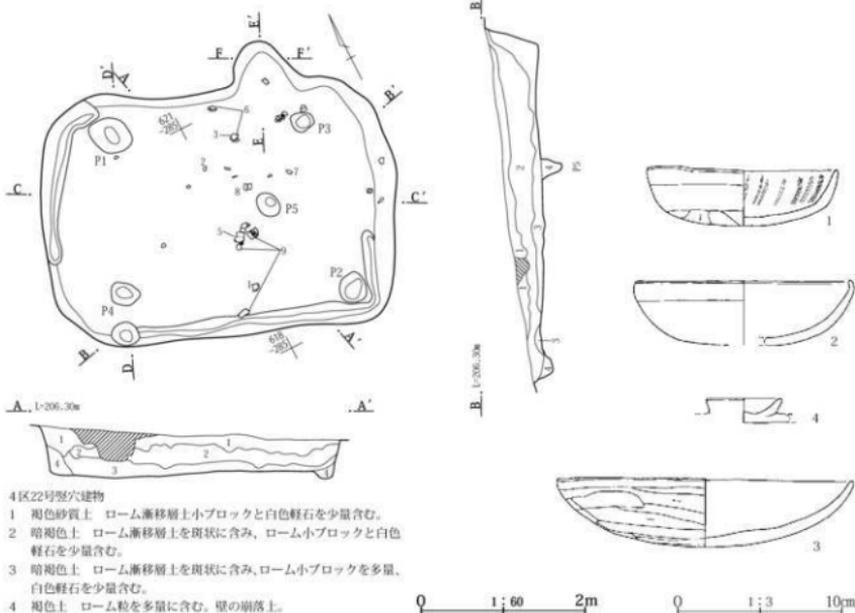
壁周溝：北西壁の北半部と南西壁から南コーナー部にかけて、壁溝が検出される。

掘り方：建物の長軸線に沿い、土坑状の深い掘り込みを有する。

重複：なし。

遺物：本建物からは土師器、須恵器などが出土している。図示した土器には、土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・甕がある。このうち、No. 1の土師器杯、No. 6の須恵器有台杯、No. 9の土師器甕が床面からの出土である。なお、No. 8の土師器甕は内面にヘラミガキが施されていることから襦の可能性もある。

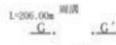
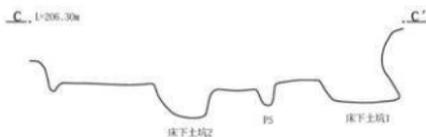
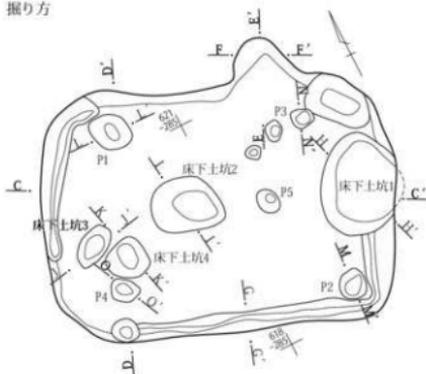
所見：調査区4区の中央部北よりに在り、本建物の時期については、床面から出土した土師器甕・杯や須恵器杯から8世紀第1四半期に比定できる。



第56図 22号竪穴建物・断面図及び出土遺物(1)

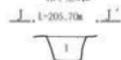
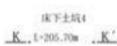
第2章 検出された遺構と遺物

掘り方



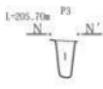
4区22号竪穴建物周溝

1 褐色土 ローム粒を多量に含む。壁の崩落上。



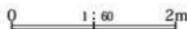
4区22号竪穴建物床下土坑1~4

1 黒褐色土 ローム小ブロックと褐色土ブロック・YPを少量含む。

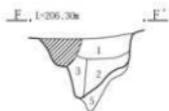
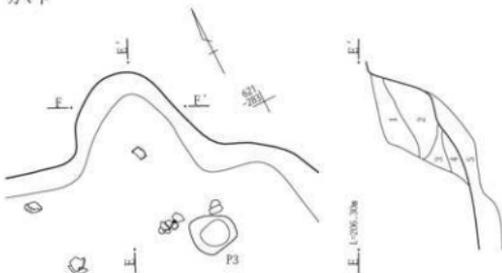


4区22号竪穴建物P1~4

1 黒褐色土 ローム小ブロックを微量含み、褐色ローム漸移層土ブロックを少量含む。



カマド



4区22号竪穴建物カマド

1 暗褐色土 ローム粒を少量含む。

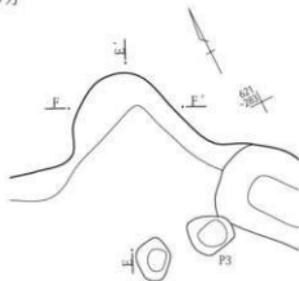
2 褐色土 焼土を多量に含む。

3 黒褐色土 ローム土粒と焼土粒を少量含む。

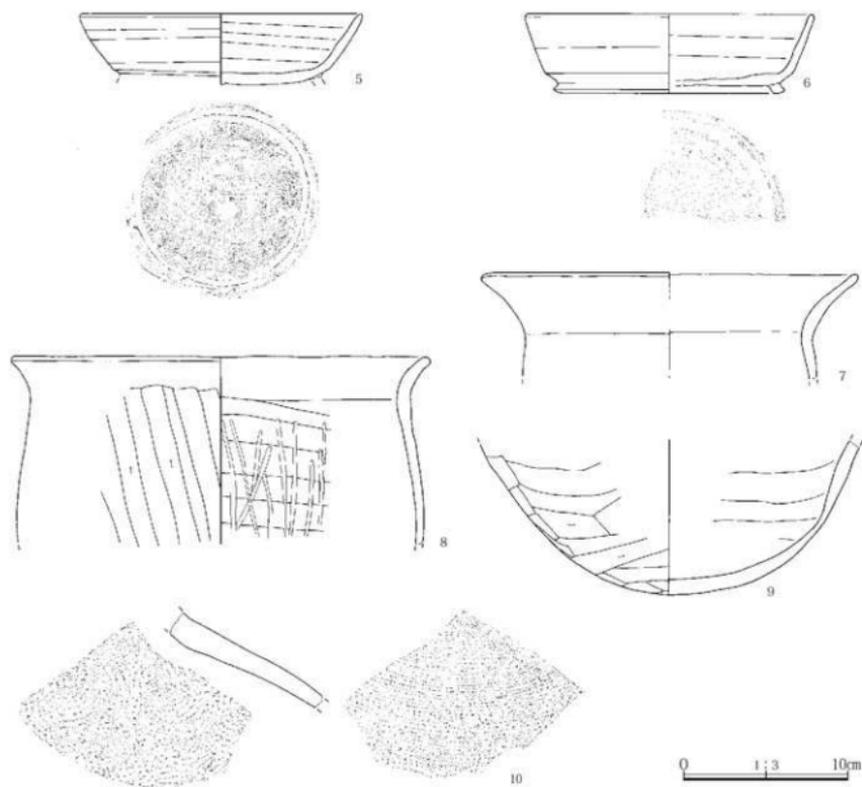
4 褐色土 焼土粒を少量含む。

5 暗褐色土 ローム漸移層土を斑状に含み、ローム粒を多量に含む。(カマド掘り方理上)

掘り方



第57図 22号竪穴建物掘り方・カマド平・断面図



第58図 22号竖穴建物出土遺物(2)

23号竪穴建物 第59図 PL.27

(旧4区23号竪穴建物)

位置：4区 612-285周辺

規模：4.20×(2.13)m、深度は7～12cmほどを計る。

面積：6.847㎡+α

形状：不明

主軸方位：N-21°-W

埋没土：暗褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。南西半部を削平により失う。

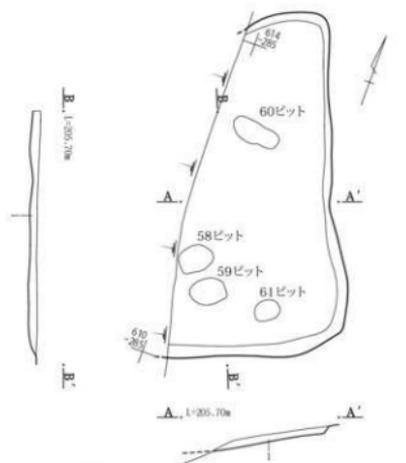
床面：残存部においては、ローム地山土を踏み固めて床面とする。

カマド(炉)・柱穴・貯蔵穴：不明。残存部においては検出されていない。

掘り方：なし。

重複：58・59・60・61号ピットと重複し、遺構確認時の様相より、本建物の方が古いものと判断される。

所見：調査区4区の中央部北よりに在る。南西半部を削平により大きく失うため時期は不明なれど、遺構の主軸方位より、弥生時代中期に属する可能性が高い。



4区23号竪穴建物

1 暗褐色土 橙色土と黒褐色土を微量含む。

第59図 23号竪穴建物平・断面図

24号竪穴建物 第60・61図 PL.27・129

(旧3区24号竪穴建物)

位置：3区 606-282周辺

規模：3.26×2.15m、深度は3～7cmほどを計る。

面積：6.829㎡

形状：やや歪な隅丸長方形

主軸方位：N-34°-E

埋没土：暗褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。削平により、上層の大半を失う。

床面：南西半のみ薄い貼り床を施し、他所はローム地山土を踏み固めて床面とする。

カマド：北東壁の中央東コーナー寄りに位置する。遺存状態は悪く、袖部も残らない。燃焼部は壁ライン上やや内側に位置し、煙道部は突出せず立ち上がる。カマド前面に大小の焼礫が散乱していることから、石組みのカマドであり、また、礫の被熱から長期間に及ぶ使用が想定される。

柱穴：南東壁と南西壁際の中ほど部にピットが2基検出されるが、その深度は浅い。

貯蔵穴：なし。

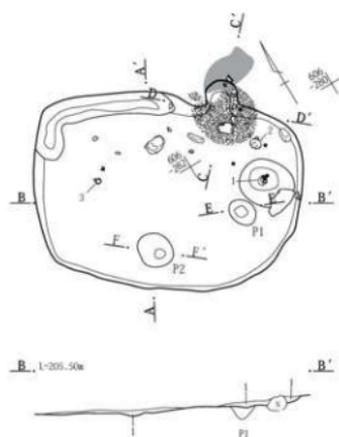
壁周溝：北コーナーから北東壁のカマド脇にかけて、壁溝が検出される。

掘り方：床面の南西部に3～5cmほどの浅い掘り込み面を有する。

重複：なし。

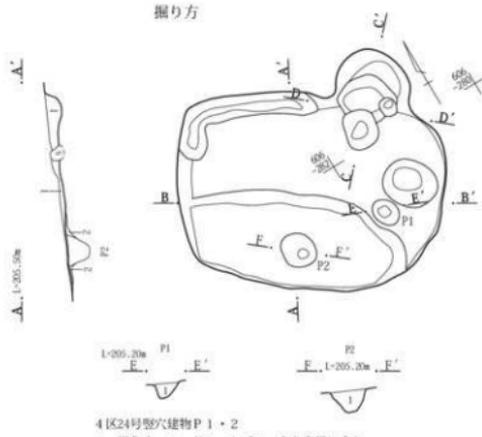
遺物：本建物からは土師器、須恵器などが出土している。図示した土器には、土師器甕、須恵器椀がある。このうち、No. 1～3の須恵器椀が床面、No. 4の土師器甕、No. 5の土師器小型甕がカマドからの出土である。なお、No. 5の土師器小型甕はロク口成形によるものである。

所見：調査区3区の中央部やや北よりに在り、周囲には同規模・同軸の遺構はない。本建物の時期は、床面から出土した須恵器椀や土師器甕から9世紀第4四半期に比定できる。



4区24号竪穴建物

- 1 暗褐色土 褐色土と黒褐色土を微量含む。
- 2 暗褐色土 ローム小ブロックを少量含む。貼り床。

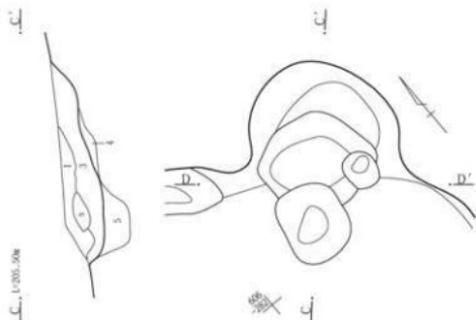
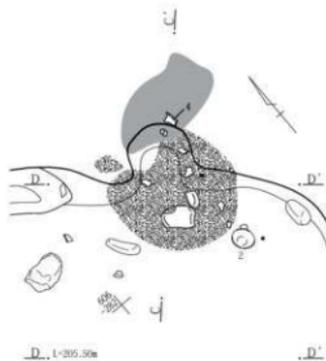


4区24号竪穴建物P1・2

- 1 褐色土 ハードロームブロックを多量に含む。

0 1:60 2m

カマド



4区24号竪穴建物カマド

- 1 灰白色粘質土 ロームブロックを多量に含む。カマド構築材。
- 2 暗褐色土 ソフトロームブロックを少量含む。
- 3 浅黄色土 ハードロームを主体とし、焼土粒を微量含む。天井部崩落土。
- 4 明赤褐色土 ハードローム上の焼土化。
- 5 黒褐色土 焼土粒と灰を少量含む。

0 1:30 1m

第60図 24号竪穴建物平・断面図

25号竪穴建物 第62・63図 PL.28・129

(旧3区25号竪穴建物)

位置：3区 652—326周辺

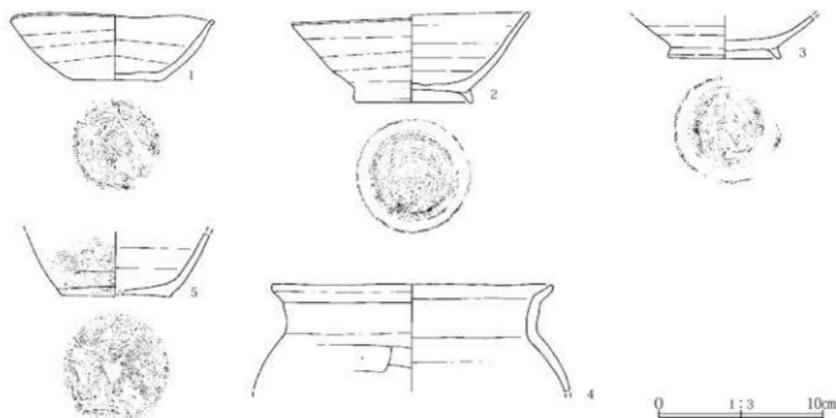
規模：4.43×3.07m、深度は30～42cmほどを計る。

面積：(13.847) m²

形状：隅丸長方形

主軸方位：N—35°—E

埋没土：暗褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。



第61図 24号竪穴建物出土遺物

床面:南東半部は掘り方の床下土坑上面に貼り床を施し、掘り方の無い北西半部は、ローム地山土を踏み固めて床面とする。

カマド:北東壁の中央やや東コーナー寄りに位置する。袖部はローム地山を掘り残すかたちで構築される。燃焼部は壁ライン上のやや内側に位置し、奥壁は直立する。段をへて煙道へと向かい、煙道部は突出せず急峻な勾配で立ち上がる。カマド内外に礫は残らず、また、設置された痕跡も無いことから、石組みのカマドではなかったと推察される。

調査時に、北西壁際に検出された焼土を、第1カマドとして記録するが、床面と焼土の間に建物土の堆積が認められることから、カマドではなく、建物埋没途上の焼土の廃棄による堆積と判断された。

柱穴:なし。

貯蔵穴:なし。

壁周溝:なし。

掘り方:建物の南西半のみに大型の土坑2基が設けられる。

重複:なし。

遺物:本建物からは土師器、須恵器などが出土している。図示した土器には、土師器杯・鉢・甕、須恵器杯・椀・甕がある。このうち、No. 3の土師器杯、No. 4の土師器鉢、No. 8の土師器小型甕が床面、No. 2の土師器杯がカマドからの出土である。なお、埋没土から出土して

いるNo. 6・7の須恵器杯、No. 9の土師器甕は9世紀後半の年代観が与えられることから、本建物が廃棄し埋没後にここに投棄されたとみられる。

所見:調査区3区の南西端に在り、北東側にはやや間隔を空けて、主軸を同じくする26号竪穴建物が在る。

本建物の時期は、床面やカマドから出土した土師器杯、甕から8世紀第1四半期に比定できる。

26号竪穴建物 第64・65図 PL.29・129

(旧3区26号竪穴建物)

位置:3区 659—323周辺

規模:5.94×4.18m、深度は1～21cmほどを計る。

面積:24.647㎡

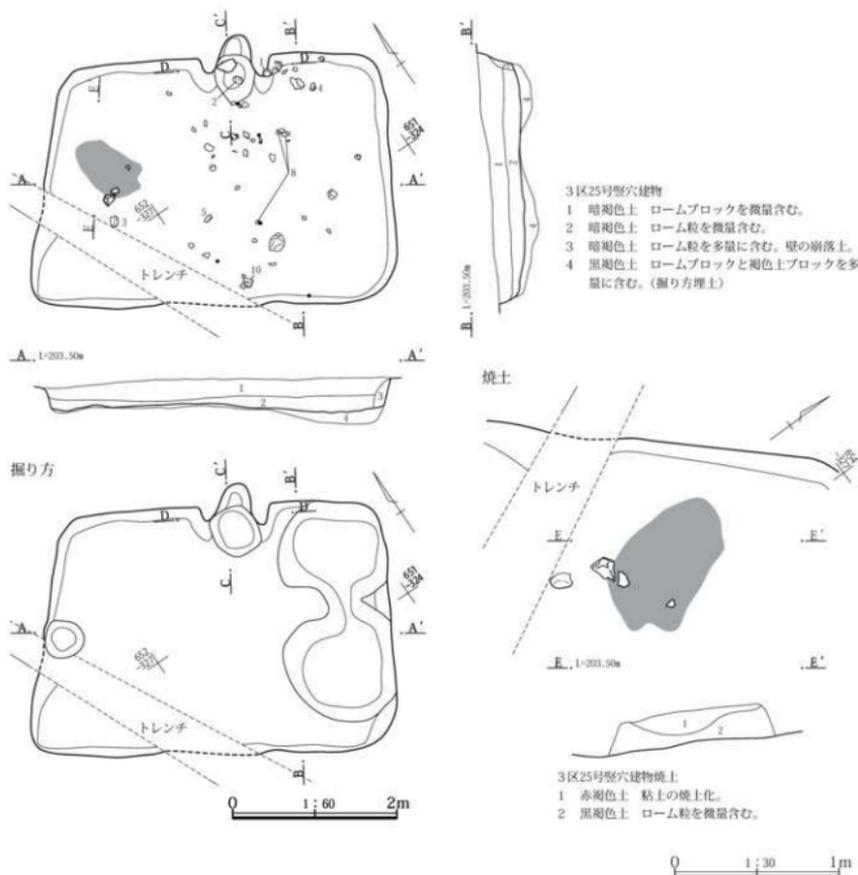
形状:長方形

主軸方位:N-36°-E

埋没土:暗褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。南西壁側は削平により上層を大きく失う。

床面:掘り方や床下土坑の上面には貼り床を施し、掘り方の無い中央部はローム地山土を踏み固めて床面とする。

カマド:北東壁の中央やや東コーナー寄りに位置する。燃焼部はほぼ壁のライン上に位置し、煙道部はあまり突出せず急峻な勾配で立ち上がる。カマド内外に焼礫が出土することから、石組みのカマドであったと推察される。燃焼部から煙道部にかけての掘り方壁面の地山が被熱し



第62図 25号竪穴建物平・断面図

焼土化していることから、長期間の使用が推察される。

柱穴：南側を除く3方のコーナー付近と、南西壁際中ほどにピットが検出され、柱穴となるものと推察される。

貯蔵穴：なし。

壁周溝：北東コーナー付近を除く各壁際より、深度5～10cmほどの溝が検出される。

掘り方：建物の中央部を除く壁寄りを浅く掘り溜め、一部に土坑状の掘り込みを有する。

重複：なし。

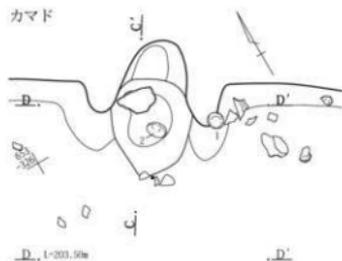
遺物：本建物からは土師器、須恵器などが出土している。図示した土器には、土師器杯・甕、須恵器杯蓋がある。このうち、No. 1の土師器杯が床面、No. 2の須恵器杯蓋・No. 3の土師器甕がカマドからの出土である。

所見：調査区3区の中央部西よりに在り、南西側にはやや間隔を空けて主軸を同じくする25号竪穴建物が在る。

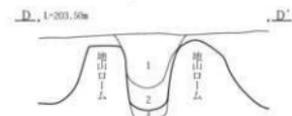
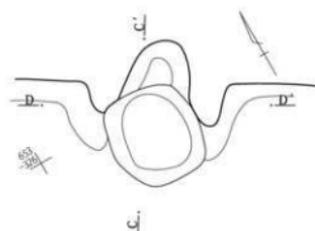
本建物の時期は、床面やカマドから出土した土師器杯・甕、須恵器杯蓋から8世紀第1四半期に比定できる。

第2章 検出された遺構と遺物

カマド



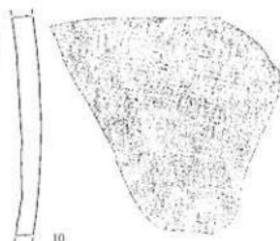
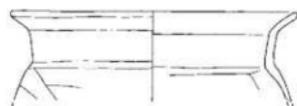
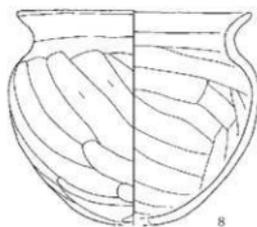
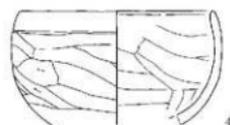
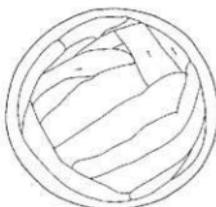
掘り方



3区25号竪穴建物カマド

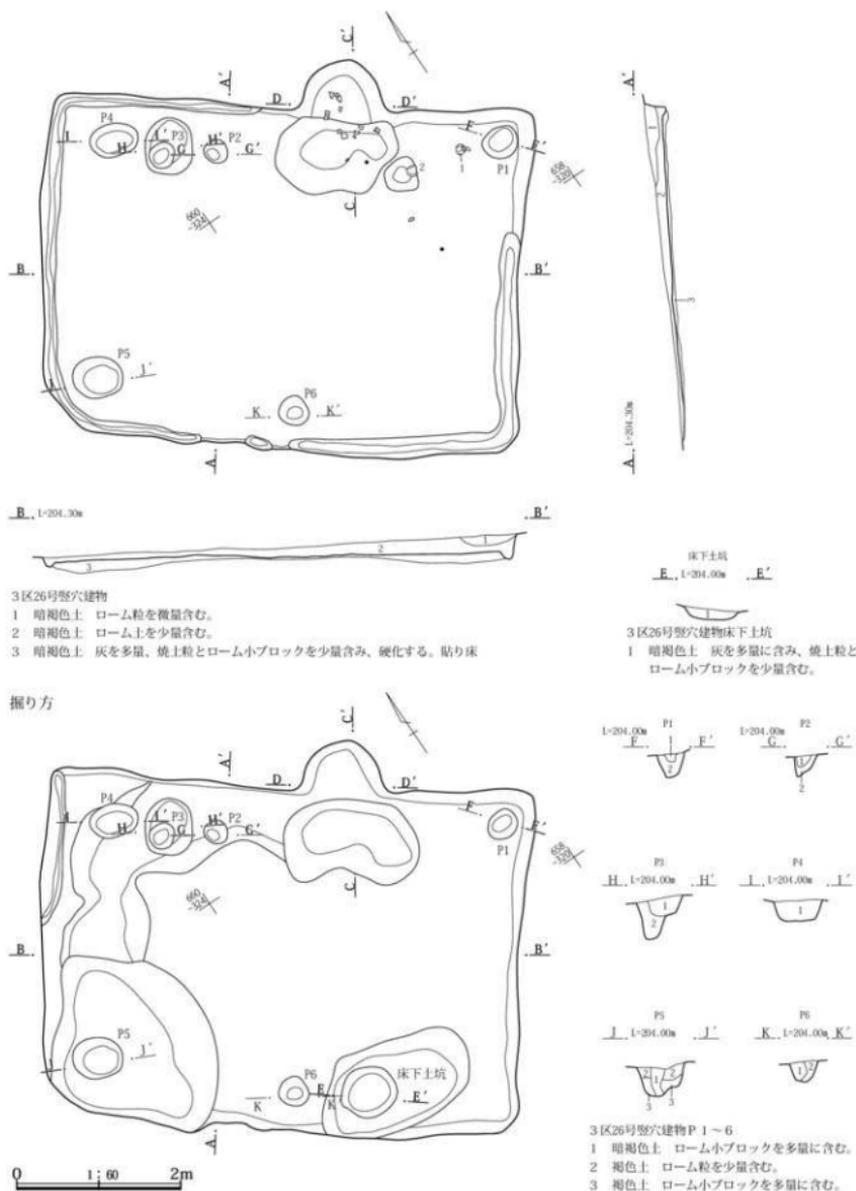
- 1 暗褐色土 ローム小ブロックを少量含む。
- 2 に赤い黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。カマド構築材。
- 3 暗褐色土 ローム小ブロックを微量含む。
- 4 焼土 多量の焼土大小ブロックで構成。(天井部崩落土・使用面)

0 1:30 1m



0 1:3 10cm

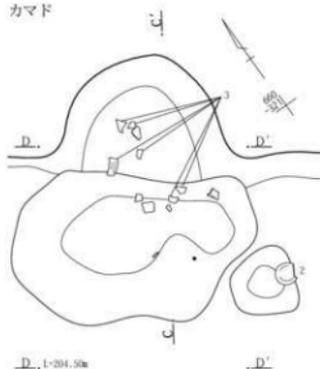
第63図 25号竪穴建物カマド平・断面図及び出土遺物



第64図 26号竪穴建物平・断面図

第2章 検出された遺構と遺物

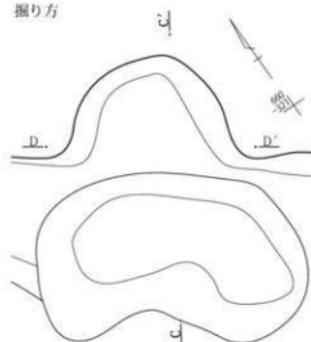
カマド



掘り方



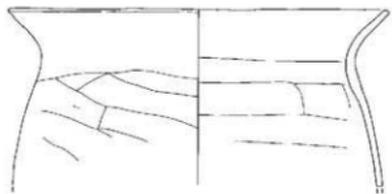
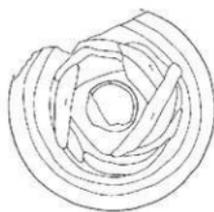
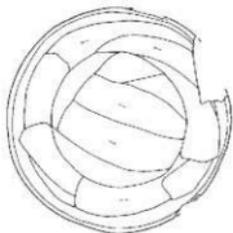
掘り方



3区26号竪穴建物カマド

- 1 暗褐色土 白色軽石を少量含む、焼土粒を微量含む。
- 2 赤褐色土 焼土を少量含む。
- 3 黄褐色土 ローム粒子和ロームブロックを少量含む。天井部崩落上。
- 4 暗褐色土 焼土粒と焼土小ブロックを多量に含む。(カマド掘り方埋土)

0 1:30 1m



0 1:3 10cm

第65図 26号竪穴建物カマド平・断面図及び出土遺物

27号竪穴建物 第66・67図 PL.29・130

(旧3区27号竪穴建物)

位置：3区 649-305周辺

規模：3.58×2.40m、深度は19～25cmほどを計る。

面積：8.919㎡

形状：長方形

主軸方位：N-56°-E

埋没土：黒褐～暗褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。南西壁側は削平により上層を失う。

床面：西コーナー付近の床下土坑の上面のみに貼り床を施し、他所はローム地山土を踏み固めて床面とする。特にカマド前前から中央部は硬化する。

カマド：北東壁の中央やや東コーナー寄りに位置する。燃焼部は壁の内側に位置し、突出せず壁のラインで立ち上がる。煙道部は勾配もなく、短く立ち上がる。貯蔵穴上より大型の焼礫が出土することから、石組みのカマド

であった可能性がある。

柱穴：床面中央やや南東寄りに、径50cm深度75cmほどを計るピットが検出され(P3)、主柱穴となるものと推察される。また、この柱穴を中心に建物中央長軸線上の壁際より小型のピット(P1・P2)が検出され、支柱穴となるものと推察される。

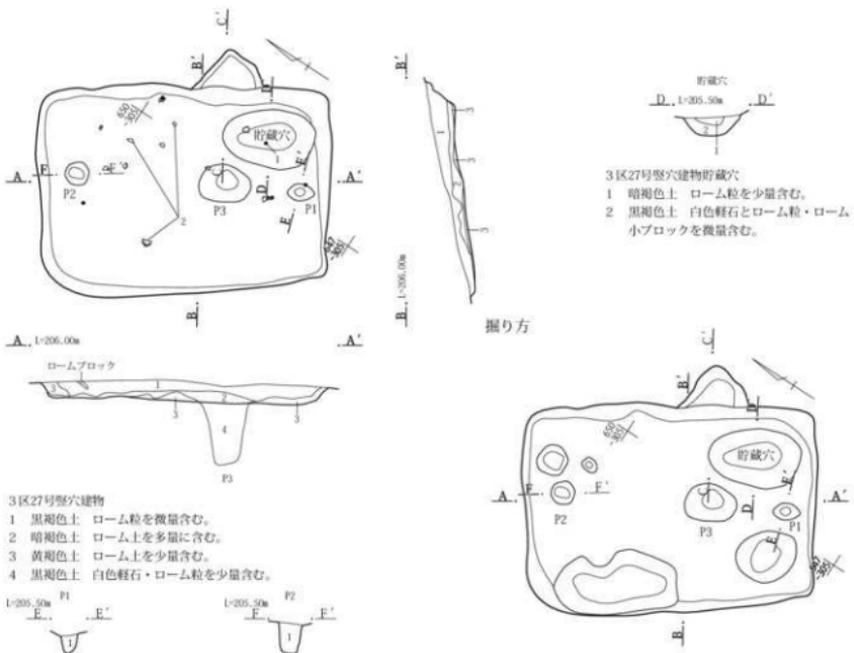
貯蔵穴：カマド脇の東コーナーより、深度20cm強の土坑が検出される。

壁周溝：なし。

掘り方：建物の西コーナーと南コーナー付近にのみ土坑状の掘り込みを有する。

重複：なし。

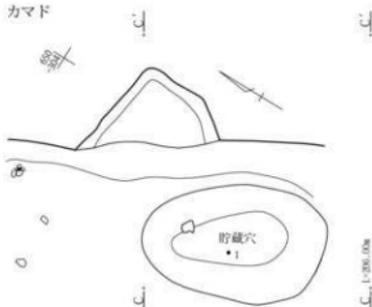
遺物：本建物からは土師器、須恵器などが出土している。図示した土器には、土師器杯、須恵器長頸壺がある。No. 1の土師器杯は貯蔵穴、No. 2の須恵器長頸壺は床面、貯蔵穴からの出土と4区50号竪穴建物から出土した



第66図 27号竪穴建物平・断面図

第2章 検出された遺構と遺物

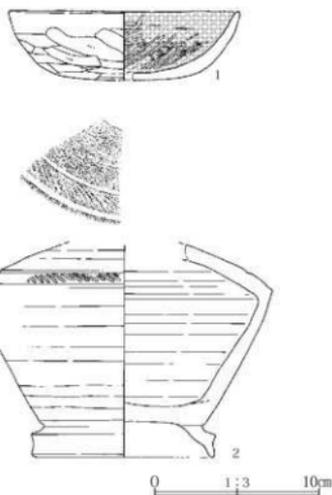
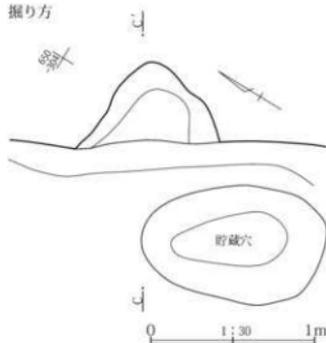
カマド



3区27号竪穴建物カマド

- 1 暗褐色土 やや砂質。
- 2 黒褐色土 焼土を少量含む。
- 3 暗褐色土 上面に灰層を有し、ローム小ブロックを少量含む。(カマド掘り方埋土)

掘り方



第67図 27号竪穴建物カマド平・断面図及び出土遺物

破片が接合している。また、No. 1の土師器杯は内面黒色処理が施されており、この時期のものでは稀な事例である。なお、一般的に黒色土器とされている個体はロウロ成整形によることから土師器と判断した。

所見：調査区3区の南東部に在り、出土遺物の接合が見られる50号竪穴建物は、南東に15m程の位置となる。

本建物の時期は、出土した土器から8世紀前半に比定できる。

28号竪穴建物 第68図 PL.30

(旧4区28号竪穴建物)

位置：4区 610—290周辺

規模：4.05×2.98m、深度は3～10cmほどを計る。

面積：11.925㎡

形状：やや歪な隅丸長方形

主軸方位：N-72°-E

埋没土：暗褐色砂質土による自然埋没の様相を呈するとみられるが、削平を受けて上層を大きく失う。

床面：建物中央付近と西コーナー部の床下土坑上面のみに貼り床を施し、他所はローム地山土を踏み固めて床面とする。

燃烧施設：南東壁の南コーナー部に地山ロームの焼土化が確認されることから、この位置にカマドが設置されていた可能性がある。

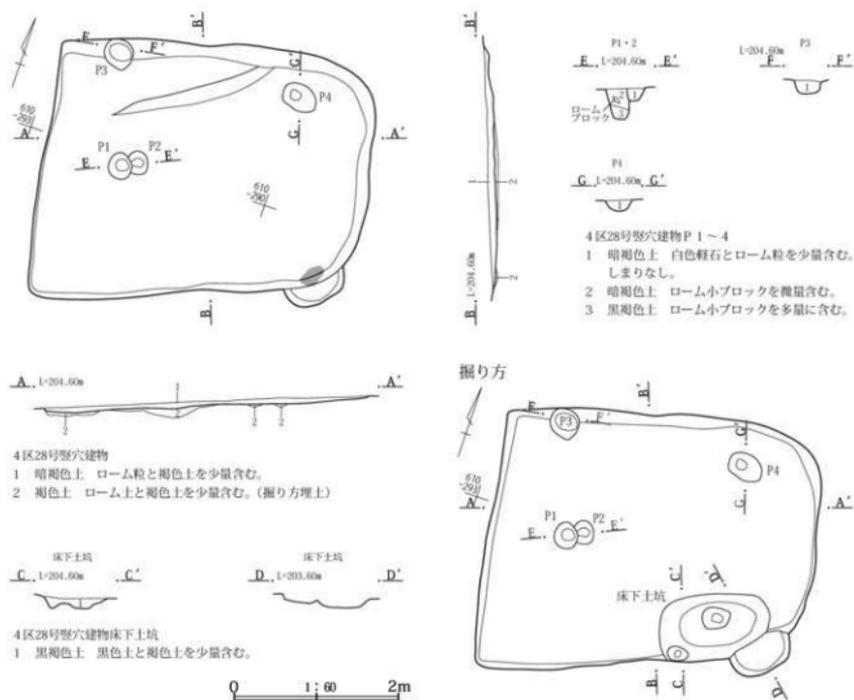
柱穴：床面中央南西寄りに、径30cm、深度40cmほどを計るピットが検出され(P1)、主柱穴となるものと推察される。また、北西壁際より小型のピット(P3・4)が検出され、支柱穴となるものと推察される。

貯蔵穴：なし。 **壁周溝**：なし。

掘り方：建物の中央部を浅く皿状に窪ませ、東コーナー付近に土坑状の掘り込みを有する。

重複：なし。

所見：調査区4区の中央部北西よりに在る。南西半部を削平により大きく失い出土遺物も乏しいため、時期は不明。



第68図 28号竪穴建物平・断面図

29号竪穴建物 第69図 PL30・130

(旧4区29号竪穴建物)

位置：4区 601—282周辺

規模：3.08×2.90m、深度は5～9cmほどを計る。

面積：(8.585) m²

形状：隅丸方形

主軸方位：N—140°—E

埋没土：暗褐色砂質土による自然埋没の様相を呈するとみられるが、削平を受けて上層を大きく失う。

床面：建物中央から北東半部には、ローム地山土の硬化が認められ、床面が遺存していると思われるが、南西半部は削平のため床面を失う。

カマド：南東壁の中央部に地山ロームの焼土化が確認されることから、この位置にカマドが設置されていた可能性が高い。

柱穴：重複するピットが多く、不明。

貯蔵穴：なし。

壁周溝：北東壁際のみ周溝が遺存するが、他所の有無は削平のため不明。

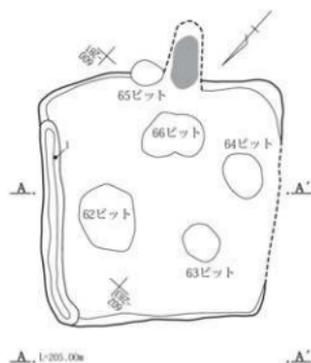
掘り方：建物の中央部を浅く皿状に窪ませる。

重複：なし。

遺物：本建物からは土師器、須恵器などが出土している。図示できたものは、No. 1 須恵器椀だけである。この須恵器椀は床面からの出土である。

所見：調査区4区の中央部にやや北西寄りに在り、周囲には主軸を同じくする建物はない。本建物の時期は、床面から出土した須恵器椀から9世紀に比定できる。

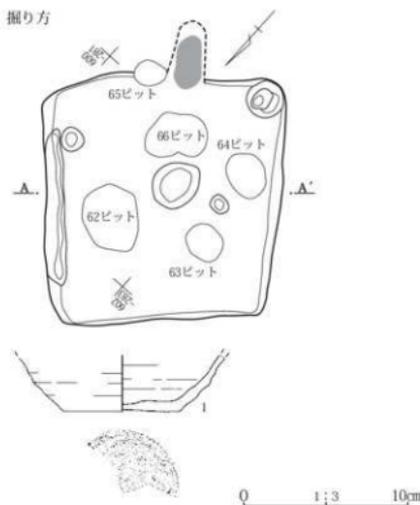
第2章 検出された遺構と遺物



4区29号竪穴建物

- 1 暗褐色土：ローム粒を微量含む。
- 2 暗褐色土：ローム土を多量に含む。

0 1:60 2m



第69図 29号竪穴建物平・断面図及び出土遺物

30号竪穴建物 第70～73図 PL.30・31・32・130

(旧4区30号竪穴建物)

位置：4区 582～276周辺

規模：5.25×4.64m、深度は6～25cmほどを計る。

面積：24.781㎡

形状：やや歪な方形

主軸方位：N-124°-E

埋没土：暗褐～褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。

床面：掘り方・床下土坑の上面は、埋土を踏み固めて床を施し、他所はローム地山土を床面とする。カマド構築材の粘土・焼土が、床面上に広く散乱する。

カマド：南東壁の中央やや南コーナー寄りに設けられ、遺存状態は悪い。燃焼部はほぼ壁のライン上に位置し、煙道部は長く突出せず、急峻に立ち上がる。

調査時に北東壁の北コーナー付近に堆積する焼土を第2カマドとして調査・記録するが、堆積状況から上層はカマド廃棄時の構築材散乱によるもの、床面から壁にかけての焼土は、重複する54号竪穴建物のカマドに伴うものと判断される。

柱穴：床面より3穴(P1・P2・P3)の柱穴を検出

するが、北側の1穴は掘り方調査においても検出し得なかった。検出された柱穴は、径35～65cm、深度30～50cmを計り、柱間はP1-P2間が2.5m、P1-P3間が1.9mを計る。

貯蔵穴：なし。

壁周溝：各壁際のみにも周溝が巡らされるが、南東壁のカマド脇南コーナー間と北西壁の北コーナー付近のみ溝が途切れる。

掘り方：建物の北東壁寄りを掘り窪ませ、中央部と北コーナー部に土坑状の掘り込みを穿つ。また、壁周溝の内側にも壁と並行する仕切り溝が検出される。

重複：北東壁側にて31号竪穴建物・54号竪穴建物と重複し、埋土の様相から、いずれの遺構よりも新しいものと判断された。

遺物：本建物からは土師器、須恵器などが出土している。図示した土器には、土師器甕、須恵器椀・甕がある。このうち、No. 6の土師器甕とNo. 7の須恵器甕が床面、No. 1・2の須恵器椀、No. 5の土師器甕がカマド、No. 4の土師器甕が掘り方からの出土である。

なお、No. 1～3の須恵器椀は9世紀後半、No. 4～7の土師器甕・甕、須恵器甕は7世紀後半～8世紀前半

の年代観が与えられる。それぞれ床面やカマドからの出土が確認されており、どちらが混入か判断としない。

所見：調査区4区の中央部に在り、周囲には建物が密集し、重複が激しい。

本建物の時期は、前記のように床面や床面から出土した土師器甕や須恵器碗の年代観が2時期与えられ、どちらも本竪穴建物に共存する位置からの出土が確認できる。なお、本竪穴建物は31号竪穴建物と重複関係にあり、31号竪穴建物でも同様な結果が見られる。発掘調査時の所見は30号竪穴建物が新しいとの見解であるが、遺構の形態をみると新旧関係は逆の状態と判断できる。こうした想定から時期を判断すると、本竪穴建物の時期は8世紀前半に比定するのが妥当と考える。

31号竪穴建物 第70～72・74図 PL.30・31・32・130

(旧4区31号竪穴建物)

位置：4区 585—274周辺

規模：6.13×3.70m、深度は11～20cmほどを計る。

面積：23.644㎡+α

形状：やや歪な長方形

主軸方位：N—131°—E

埋没土：褐色～暗褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。

床面：重複により南西壁周辺部の床が失われる。残存部においては、掘り方・床下土坑の上面は埋土を踏み固めて床を施し、カマド前面はローム地山土を踏み固めて床面とする。中央部の床面上には、カマド構築材の粘土・焼土が散乱する。

カマド：南東壁の中央やや南コーナー寄りに設けられ、遺存状態は悪い。燃焼部はほぼ壁のライン上に位置し、煙道部は長く突出せず立ち上がる。掘り方調査にて、両袖部に芯材として袖石を据えたと考えられる穴が2穴検出された。

柱穴：掘り方調査においても検出し得なかった。

貯蔵穴：なし。

壁周溝：なし。

掘り方：建物の北東壁寄りを10cmほど掘り窺ませていると思われる。

重複：36号土坑・30号竪穴建物と重複し、本建物の方が古いと判断される。また、北西側にて56号・54号・52号・

49号竪穴建物と重複し、埋土の様相から、いずれの建物より新しいものと判断される。

遺物：本建物からは土師器、須恵器などが出土している。図示した土器には、土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・碗がある。このうち、No.1・2・4の土師器杯、No.10の須恵器碗、No.11・12の土師器甕が床面、No.5の土師器杯、No.9の須恵器杯、No.13の土師器甕が掘り方からの出土である。

なお、本建物でもNo.6・7の須恵器杯蓋、No.8・9の須恵器杯、No.12～14の土師器甕は9世紀後半、No.1～5・11の土師器杯や甕は7世紀後半～8世紀前半の年代観が与えられる。それぞれ床面や掘り方からの出土が確認されており、どちらが共存するか混入したものか判断としない。また、本建物は49号竪穴建物とも重複関係にあり、49号竪穴建物との重複する範囲から出土しているNo.2・3・11の土師器杯・甕は49号竪穴建物に帰属する可能性が高い。

所見：調査区4区の中央部に在り、周囲には竪穴建物が密集し、重複が激しい。本建物の時期は、出土遺物からみると2時期の混在がみられるが、30号竪穴建物でも記したように新旧関係の再検討からすると本建物の時期は9世紀後半に比定するのが妥当と考える。

56号竪穴建物 第71図 PL.32

(旧称なし)

位置：4区 587—275周辺

規模：3.60×3.20m、深度は8～25cmほどを計る。

面積：計測不可

形状：隅丸方形

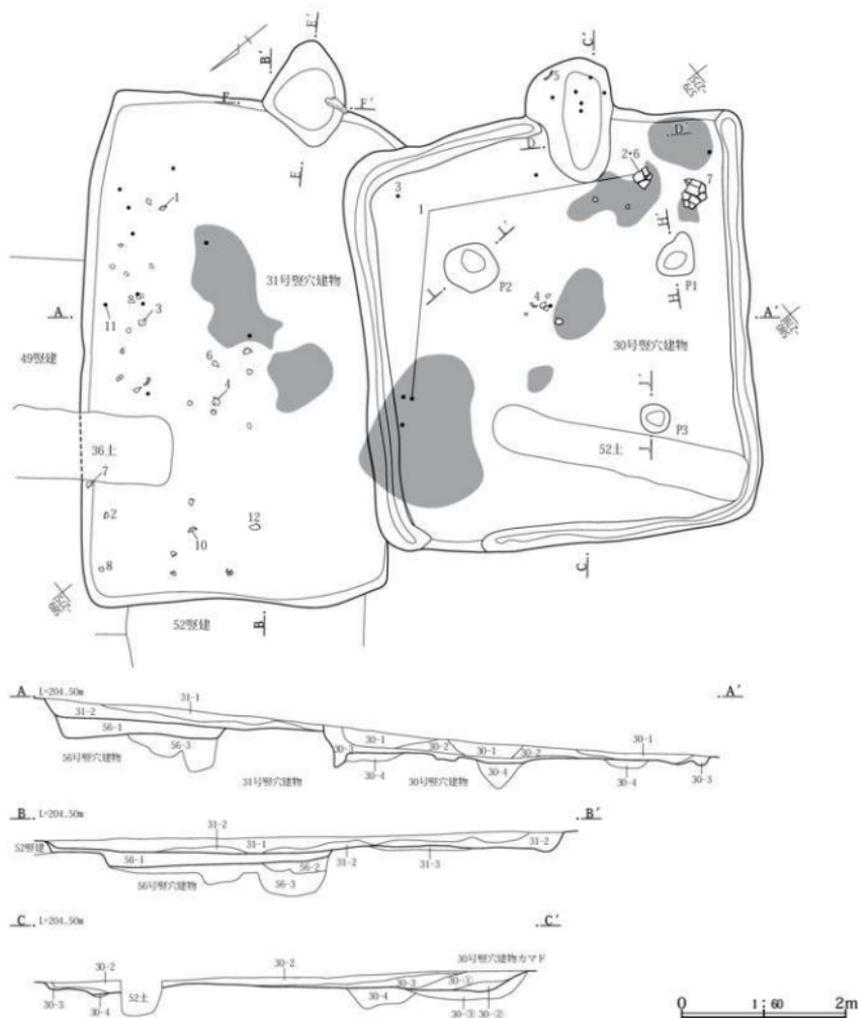
主軸方位：N—131°—E

埋没土：黒褐色砂質土による自然埋没の様相を呈するとと思われるが、上層を重複により失っており不明。

床面：掘り方の上面は埋土を踏み固めて床を施し、南西壁際はローム地山土を踏み固めて床面とする。

カマド：南東壁の中央やや東コーナー寄りに設けられる。上層を重複により失うため、遺存状態は悪い。燃焼部はほぼ壁のライン上に位置し、煙道部は長く突出せず立ち上がる。調査時にはカマドとしての認識が無く、詳細は不明。

柱穴：掘り方調査において、中央部西寄りに径35cm、深



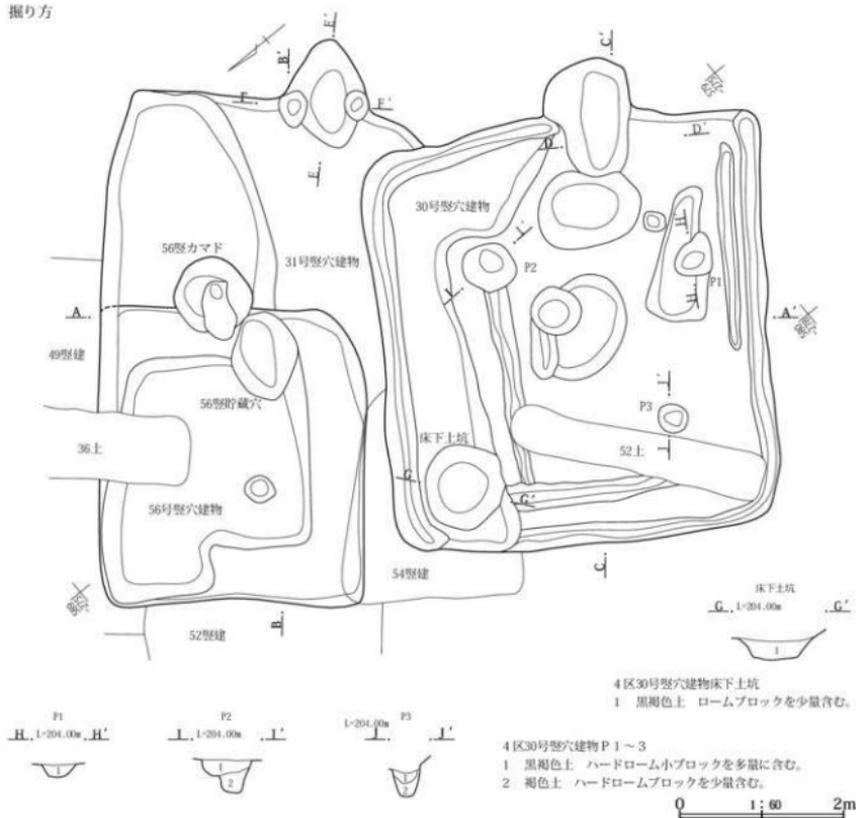
4区30・31・56号竪穴建物

- 30-1 暗褐色土 ローム漸移層土を斑状に含み、ローム小ブロックを少量含む。
- 30-2 褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 30-3 褐色土 ローム小ブロックとローム粒を少量含む。
- 30-4 黒褐色土 ロームブロックを少量含む。(掘り方理上)
- 31-1 褐色土 ローム漸移層土を斑状に含み、白色軽石を少量含む。

- 31-2 暗褐色土 白色軽石とローム粒を少量含む。
- 31-3 黒褐色土 ハードロームブロックを多量に含む。
- 56-1 黒褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 56-2 暗褐色土 ローム漸移層土を斑状に含み、上層に硬土粒子を多量に含む。(貯蔵穴理上)
- 56-3 暗褐色土 ローム小ブロックとYPを少量含む。(掘り方理上)

第70図 30・31号竪穴建物平・断面図

掘り方



第71図 30・31・56号竪穴建物掘り方平・断面図

度20cmほどを計るビットが1穴検出され、柱穴となる可能性がある

貯蔵穴：不明。掘り方において、カマド右脇に検出された土坑が貯蔵穴となる可能性はあるが、位置的にカマドに近すぎる。

壁周溝：なし。

掘り方：建物軸に沿うようにL字形に深度20～40cmほど掘り進ませている。

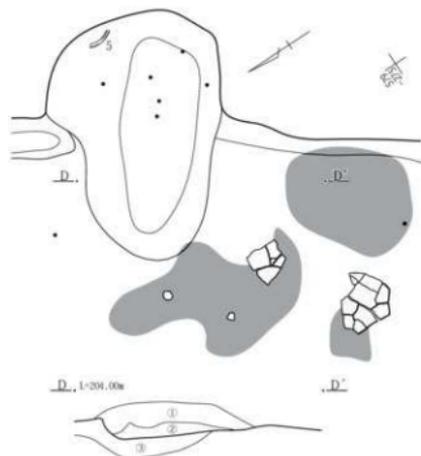
重複：36号土坑・31号竪穴建物と重複し、本建物の方が古いと判断される。また54号・52号・49号竪穴建物と重複し、埋土の様相から、いずれの建物より新しいものと

判断される。

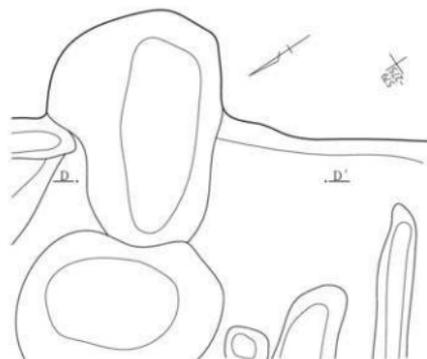
所見：調査時には31号竪穴建物の掘り方の一部として処理されている。そのために記録が少なく、詳細は不明。

第2章 検出された遺構と遺物

30建竪カマド



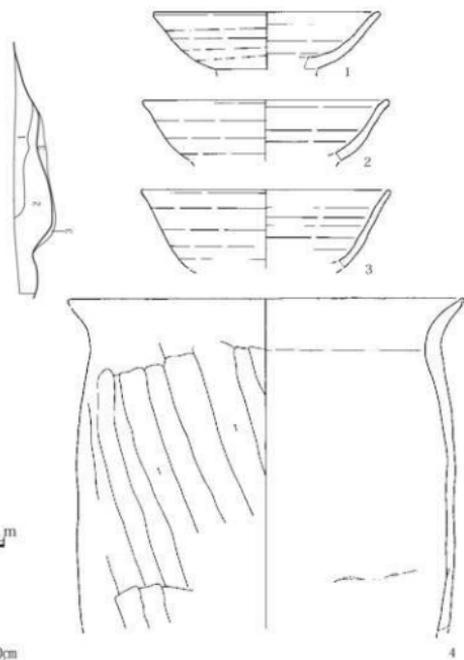
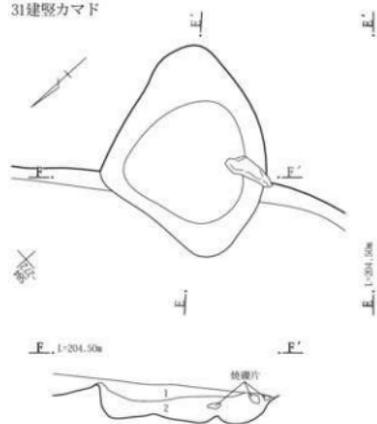
30建竪カマド振り方



4区30号竪穴建物カマド

- ① 暗褐色土 焼土粒を少量含む。
- ② 褐色土 焼土粒と灰を少量含む、ローム小ブロックを多量に含む。
- ③ 灰褐色土 ハードロームブロックを多量に含む。(カマド振り方理上)

31建竪カマド



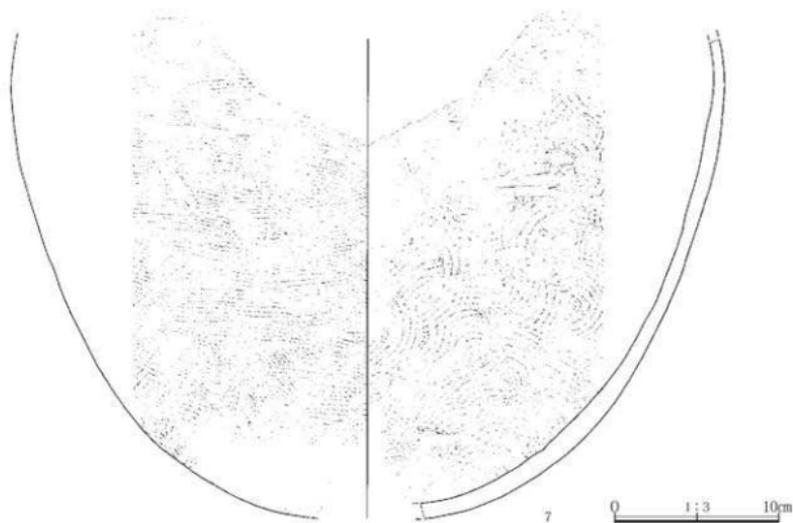
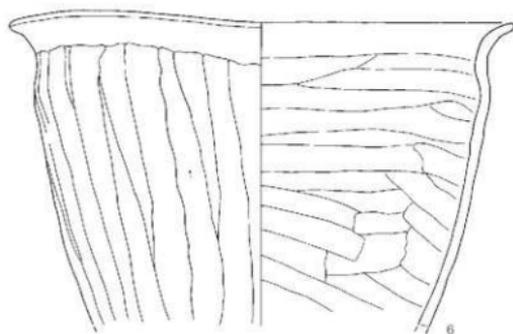
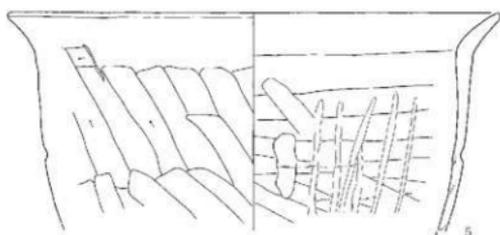
4区31号竪穴建物カマド

- 1 暗褐色土 焼土を微量含む。YP軽石混じる。
- 2 褐色土 焼土を少量含む。
- 3 焼土 小ブロックを含む灰層。

0 1:30 1m

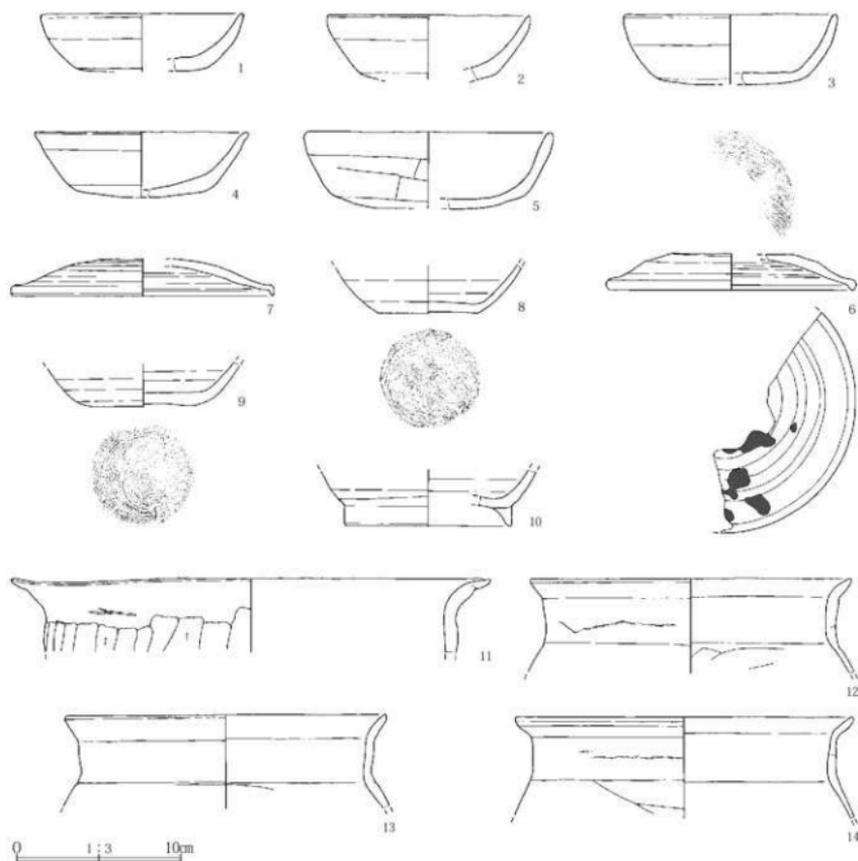
0 1:3 10cm

第72図 30・31号竪穴建物カマド平・断面図及び30号竪穴建物出土遺物(1)



0 1:3 10cm

第73図 30号竪穴建物出土遺物(2)



第74図 31号竪穴建物出土遺物

32号竪穴建物 第75・76図 PL.33・130・131

(旧4区32号竪穴建物)

位置：4区 584—283周辺

規模：4.67×3.12m程、深度は14～19cm程を計る。

面積：12.473㎡+α

形状：歪な長方形

主軸方位：N—61°—E

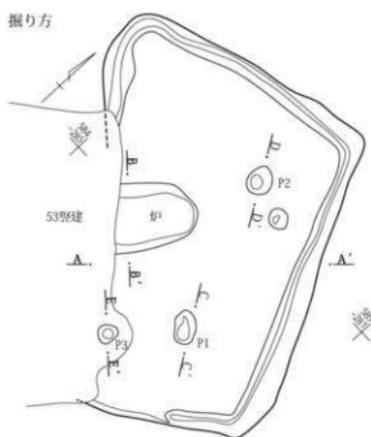
埋没土：褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。

床面：ロームブロックを含む暗褐色土による貼り床を有し、硬化が確認される。

炉：建物中央部の南西寄りに位置する。80cm×100cm強を計る楕円形を呈し、南西端部は重複遺構により失う。浅く皿状に窪み、内には枕石として楕円形の礎を配しする。炭化物と灰の堆積はあるが、底面の焼土化は認められない。

柱穴：北東壁より1m程の所に、2mほどの間隔で、径25～40cm、深度45～60cm程を計る円形の柱穴が2穴検出される。

壁周溝：南東壁の一部を除き、検出された壁際に、幅20cm強を計る浅い壁周溝が検出される。側面への記載は



A, 1:204.00m

A'



4区32号型穴建物

- 1 暗褐色土 褐色ローム薄粘層土を斑状に含む。
- 2 暗褐色土 褐色土ブロックを少量含む。
- 3 暗褐色土 ハードロームブロックを少量含む、硬くしまる。粘り床。

0 1:60 2m

B, 1:203.50m

4区32号型穴建物P1

- 1 暗褐色土 炭化物と灰を多量に含み、黄褐色粘土小ブロックを少量含む。

1:203.50m

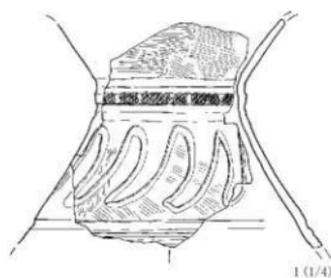
1:203.50m

1:203.50m

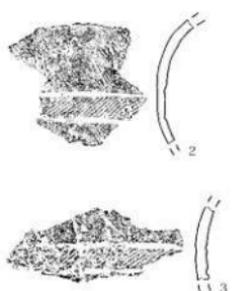


4区32号型穴建物P1~3

- 1 黒色土 ローム粒を微量含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子を多量に含む。

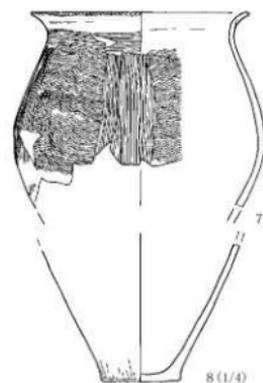


1(1/4)



2

3



7



4

5

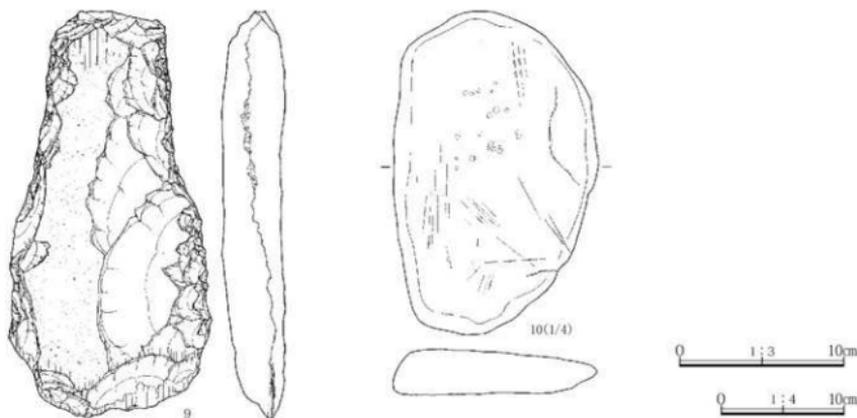


6(1/4)

0 1:3 10m

0 1:4 10m

第75図 32号型穴建物平・断面図及び出土遺物(1)



第76図 32号竪穴建物出土遺物(2)

ないが、掘り方写真上には建物北西壁の内側に南東壁と並行する細い溝の存在が読み取れる。

掘り方：貼り床下に深さ2～5cmほどの粗掘りの凹凸が認められる。

重複：南西側で53号竪穴建物と重複し、埋土の様相より本建物の方が古いものと判断される。

遺物：本建物からは、壺No. 1～6、埴No. 7・8、石鏡No. 9などが出土する。

所見：本建物は、調査区4区中央部の南西寄りに在り、緩傾斜地の平坦面という好地形であるため、周囲には他の時期の竪穴建物も密集し、重複が激しい。北西側には軸を同じくし、同時期と考えられる40号竪穴建物が並ぶ。本建物の時期については、出土遺物の年代より弥生時代中期と推定される。

33号竪穴建物 第77・78・80図 PL.34・35・131

(旧4区33号竪穴建物)

位置：4区 582—286周辺

規模：3.94×2.88m、深度は34～61cmほどを計る。

面積：12.331㎡

形状：長方形

主軸方位：N—140°—E

埋没土：黒褐色～暗褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。

床面：全体に掘り方・床下土坑の埋土上面を踏み固めて

床を施す。

カマド1：南東壁の中央やや南コーナー寄りに設けられる。燃焼部はほぼ壁のライン上に位置し、煙道部は突出せず急峻に立ち上がる。燃焼部から煙道部にかけての掘り方壁面の地山が被熱し焼土化していることから、長期間の使用が推察される。

カマド2：北東壁の中央やや東コーナー寄りに、もう一基のカマドが検出される。検出時には袖部を欠いていることから、同時に2基が併用されたのではなく、カマド1使用時にはカマド2は既に廃棄されていたと考えられる。燃焼部はほぼ壁のライン上に位置しており、壁より内側部分を欠いている。煙道部は突出せず急峻に立ち上がる。燃焼部から煙道部にかけての掘り方壁面地山が被熱し焼土化していることから、こちらのカマドも長期間の使用が推察される。

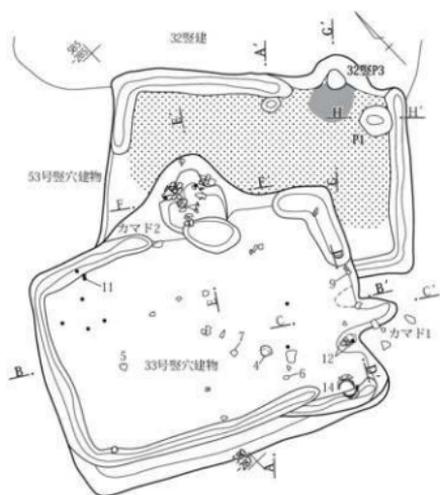
柱穴：掘り方調査においても検出しなかった。

貯蔵穴：なし。

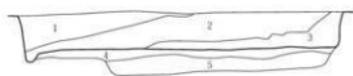
壁周溝：南東壁のカマド前面と北東壁のカマド前面を除く壁際に周溝が巡る。ただし、南西壁側のみ壁と溝には20cmほどの間隔がある。

掘り方：大きく二段の方形状の掘り込みと、北コーナー部の大型の土坑状の掘り込みが穿たれる。掘り方の深い所と遺構確認面との比高差は80cmを越える。

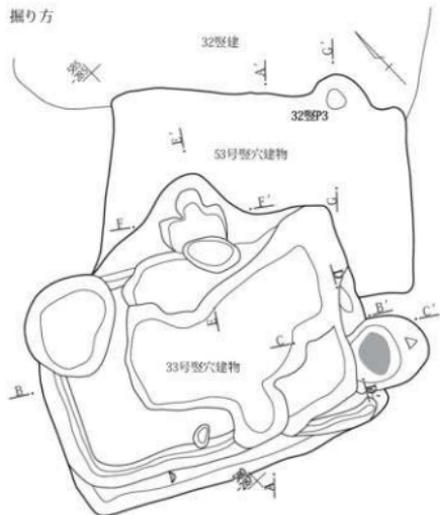
調査段階では一棟の建物で、カマドの付け替えが行われたとの見解であったが、掘り方での方形状の掘り込み



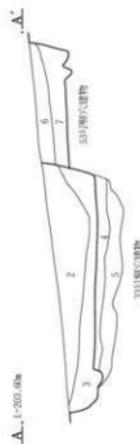
B-B' L=203.60m



掘り方



0 1:60 2m

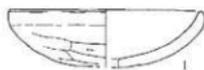


L=203.50m P1



4区53号壱穴建物P1
1 黒褐色土 ハードローム小ブ
ロックと灰を少量含む。

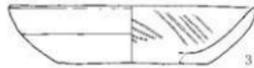
- 4区33号壱穴建物
- 1 黒褐色土 白色軽石・ソフトロームブロックを少量含む。
 - 2 暗褐色土 ローム漸移層土を斑状に含み、ローム大ブロックを少量含む。
 - 3 黒褐色土 白色軽石を多量に含み、褐色土ブロックを少量含む。
 - 4 黒褐色土 ローム小ブロックを少量含み、下端に褐色粘質土大ブロックを含む。(掘り方理上)
 - 5 暗褐色土 褐色土ブロックを少量含む。(掘り方理上)
- 4区53号壱穴建物
- 6 黒褐色土 褐色ローム漸移層土を斑状に含む。
 - 7 暗褐色土 白色軽石とソフトロームブロックを少量含む。



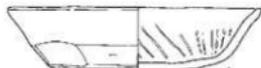
1



2



3



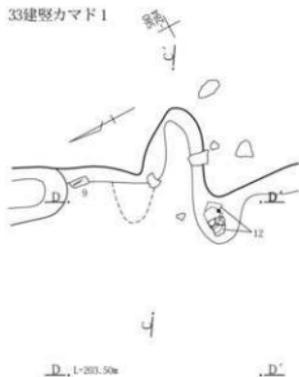
4

0 1:3 10m

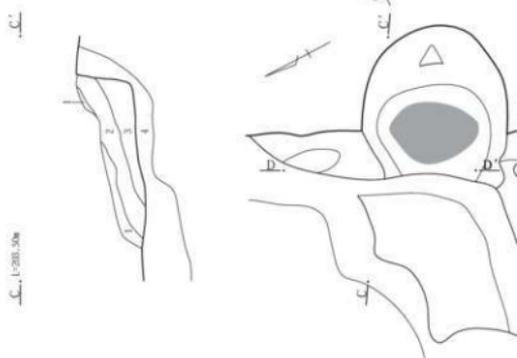
第77図 33・53号壱穴建物平・断面図及び33号壱穴建物出土遺物(1)

第2章 検出された遺構と遺物

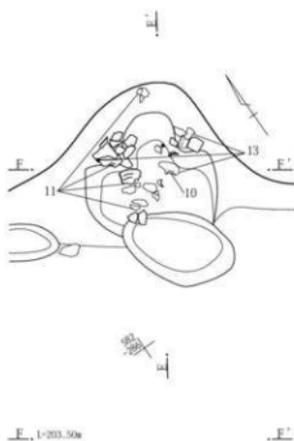
33建竪カマド1



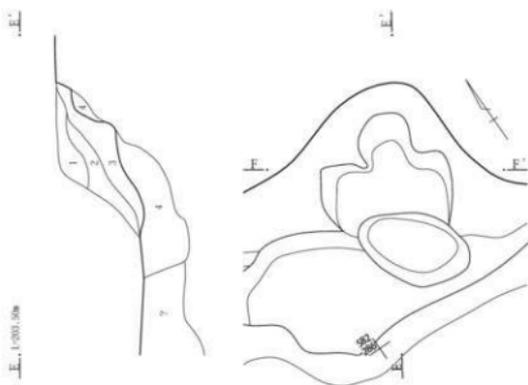
33建竪カマド1掘り方



33建竪カマド2



33建竪カマド2掘り方



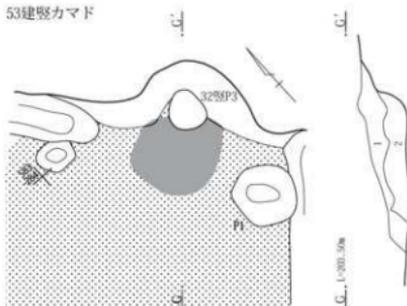
4区33号竪穴建物カマド

- 1 暗褐色土 白色軽石とローム小ブロックを少量含む。
 - 2 黒褐色土 白色軽石を多量に含み、ローム小ブロックを少量含む。
 - 2' 黒褐色土 2層上に赤褐色粘土ブロックを多量に含む。
 - 3 黒褐色土 ローム小ブロックとハードロームブロックを少量含む。
 - 4 黒褐色土 白色軽石と焼土粒子・焼土ブロックを少量含む。(掘り方埋土)
- *掘り方の中央部は地山ロームが焼土化する。

0 1:30 1m

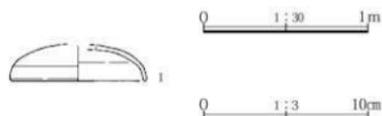
第78図 33号竪穴建物カマド平・断面図

53号竪穴カマド



4区53号竪穴建物カマド

- 1 黒褐色土、ローム大ブロックと焼土小ブロックを少量含む。
 - 2 褐色土、焼土粒子を多量に含む。
- * 掘り方を持たず、使用面下のローム地山土は焼土化する。



第79図 53号竪穴建物カマド平・断面図及び出土遺物

と、南西壁と周溝のズレ、カマド2の存在などから、33号竪穴建物とは別の重複する古い竪穴建物である可能性が高い。

重複：東側で53号竪穴建物と重複し、検出時の埋土の様相から、本建物の方が新しいと判断される。

遺物：本建物からは土師器、須恵器などが出土している。図示した土器には、土師器杯・鉢・甕・壺、須恵器杯がある。このうち、No. 4・5の土師器杯、No. 7の土師器鉢、No. 12の土師器甕、No. 14の土師器壺が床面、No. 11・13の土師器甕がカマドからの出土である。なお、No. 6・7の土師器鉢は口縁部が内湾する鉄鉢状を呈している。No. 11～13の土師器甕は口縁部が「くの字」を呈するが、胴部上位のヘラ削りの方向が縦または縦に近い斜め方向であり、県中央部での同形態の甕と異なる様相がみられる。

所見：本建物は、調査区4区中央部の南西寄りに在り、緩傾斜地の平坦面という好地形であるため、周囲には他の時代の竪穴建物も密集し、重複が激しい。

本建物の時期は、床面やカマドから出土した土師器杯や甕から8世紀第三四半期に比定できる。

53号竪穴建物 第77・79図 PL.35・36

(旧4区53号竪穴建物)

位置：4区 582-284周辺

規模：3.83×2.25m、深度は34～38cmほどを計る。

面積：(14.718) m²

形状：隅丸方形

主軸方位：N-116°-E

埋没土：黒～暗褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。

床面：掘り方をもたず、ローム地山土を踏み固めて床面とする。

カマド：北東壁の東コーナー寄りに設けられる。床面同様に掘り方を持たず、地山ローム面を使用面とし、赤く焼土化する。燃焼部は壁ラインの内側に位置し、煙道部は長く突出せずに立ち上がる。

柱穴・貯蔵穴：東コーナー付近に径35cm、深度25cmほどを計るピットが1穴検出されるが、その用途は明らかではない。

周溝：カマド部を除く北東壁、南東壁、北・南コーナー部において壁下に巾25cm、深度10cm程の壁溝が検出される。

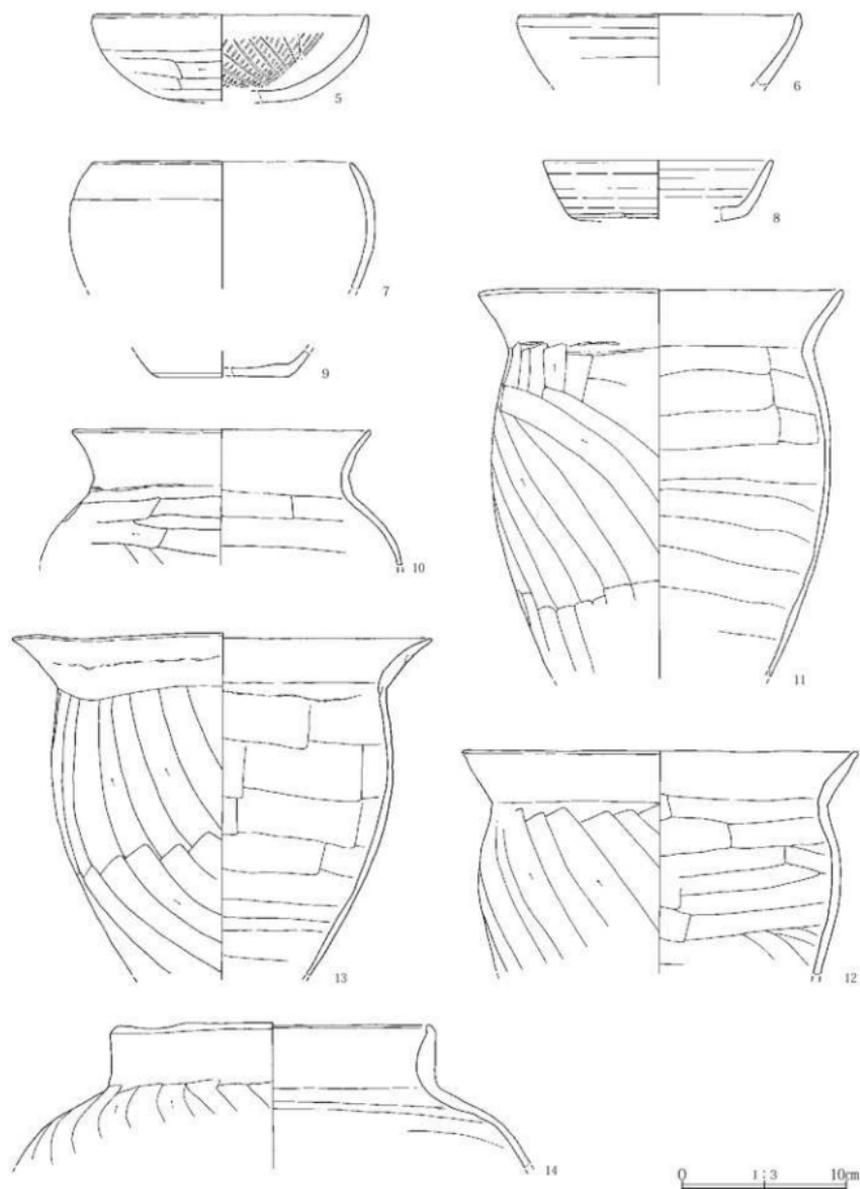
掘り方：なし。

重複：32号竪穴建物および33号竪穴建物と重複し、埋土の様相から、本建物は32号竪穴建物より新しく、33号竪穴建物より古いものと判断される。

遺物：図示できたものは、須恵器杯蓋だけである。この須恵器杯蓋は埋没土からの出土である。

所見：本竪穴建物の時期は、出土した土器が埋没土からで本竪穴建物に共存するか判然としないが、ともに7世紀前半の年代観が与えられることから本竪穴建物の時期もこの時期に比定したい。

第2章 検出された遺構と遺物



第80図 33号竪穴建物出土遺物(2)

34号竪穴建物 第81図 PL.36

(旧4区34号竪穴建物)

位置：4区 575—285周辺

規模：4.87×3.11m程、深度は5～15cm程を計る。

面積：(16.443) m²

形状：やや歪な長隅丸長方形

主軸方位：N—48°—E

埋没土：褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。削平により上層部の大半を失う。

床面：ローム地山を踏み固めて床面とする。若干の細かな凹凸を有し、硬化が確認される。

炉：遺存部分においては、炉・カマドなどの施設は検出されていない。

柱穴：なし

貯蔵穴：なし

壁周溝：なし

掘り方：なし

重複：南コーナー部側で35号竪穴建物と重複し、埋土の様相より本建物の方が古いものと判断される。

遺物：埋土中より、弥生土器壺片1点が出土する。

所見：本建物は、調査区4区中央部の南西寄りに在り、緩傾斜地の平坦面という好地形であるため、周囲には他の時代の竪穴建物も密集し、重複が激しい。

本建物の時期については、遺構の重複状況や出土遺物より弥生時代中期と推定される。

35号竪穴建物 第81・82図 PL.37・131

(旧4区35号竪穴建物)

位置：4区 572—287周辺

規模：3.76×2.42m、深度は15～32cmほどを計る。

面積：10.856m²

形状：隅丸台形

主軸方位：N—140°—E

埋没土：暗褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。

床面：全体に浅い掘り方埋土を踏み固めて貼り床を施す。

カマド：南東壁のほぼ中央に設けられる。燃焼部は壁のラインのやや外側に位置し、煙道部は突出せずに立ち上がる。

柱穴：なし

貯蔵穴：なし。

壁周溝：カマド前面を除く全ての壁際に周溝が巡る。

掘り方：なし。

重複：北コーナー部側で34号竪穴建物と重複し、検出時の埋土の様相から本建物の方が新しいと判断される。

遺物：本建物からは土師器、須恵器、石製品(叢石)、鉄製品(刀子)などが出土している。図示した土器には、土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・盤・長頸壺・甕がある。このうち、No. 8の土師器甕がカマドからの出土である。なお、No. 6の須恵器杯は底部が回転糸切り無調整で9世紀前半の年代観が与えられ、その他の土器とは異なる。こうした点からNo. 6は埋没後の混入と判断できる。

所見：本建物は、調査区4区中央部の南西寄りに在り、緩傾斜地の平坦面という好地形であるため、周囲には他の時代の竪穴建物も密集し、重複が激しい。

本建物の時期は、カマドから出土した土師器甕とNo. 6以外の土器は共存すると判断できることから、8世紀後半に比定できる。

36号竪穴建物 第83・84図 PL.37・38・132

(旧4区36号竪穴建物)

位置：4区 580—295周辺

規模：7.36×(2.56)m、深度は16～36cmほどを計る。

面積：(23.557) m²

形状：隅丸台形

主軸方位：N—21°—W

埋没土：黒褐～暗褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。

床面：全体に荒く掘られた建物底面の凹凸を埋め、上面を踏み固めて貼り床を施す。

カマド：調査区内においては検出されていない。

柱穴：北東壁より1.5m内側に2.8m程の柱間で、径35～50cm、深度70～85cmを計る柱穴が2穴検出される。(P1・P2)

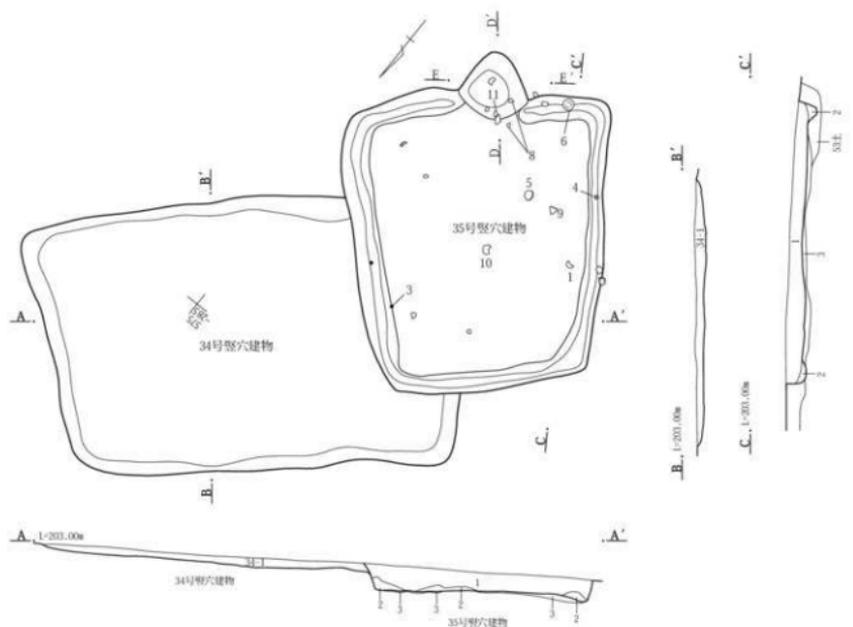
貯蔵穴：調査区内においては検出されていない。

壁周溝：調査区内の北西・北東・南東の全ての壁際に周溝が巡る。

掘り方：なし。

重複：北西側で55号竪穴建物と重複し、検出時の埋土の様相から本建物の方が古いと判断される。

遺物：埋土中よりNo. 1～7弥生土器 壺片、No. 8 同高



4区34号壑穴建物

1 褐色土 ローム小ブロックを少量含む。

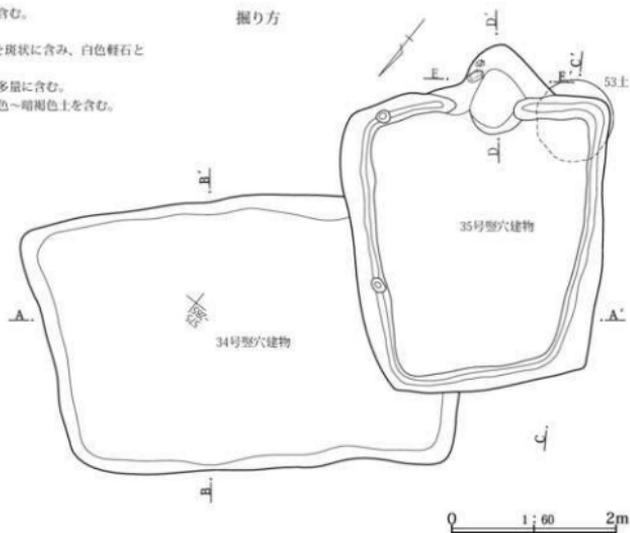
4区35号壑穴建物

1 暗褐色土 褐色ローム漸移層土を斑状に含み、白色軽石とローム粒を少量含む。

2 暗褐色土 1層上にローム粒子を多量に含む。

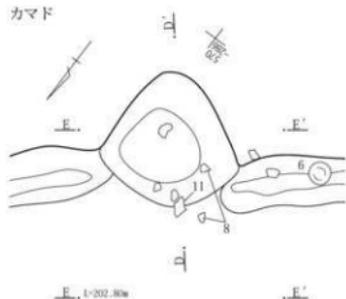
3 黄褐色土 ローム土を主体に、褐色～暗褐色土を含む。

掘り方

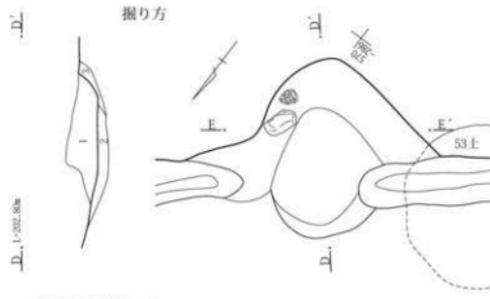


第81図 34・35号壑穴建物平・断面図及び34号壑穴建物出土遺物

カマド



掘り方

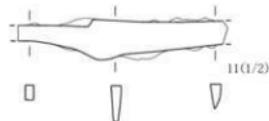
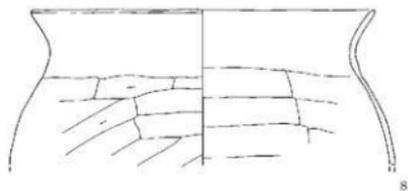
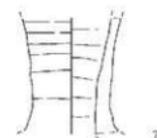
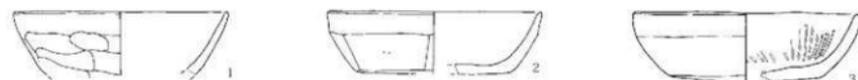


4区35号竪穴建物カマド

- 1 暗褐色土 焼土粒子と焼土小ブロックを少量含む。
- 2 褐色土 ローム小ブロックと焼土小ブロックを多量に含む。(掘り方理上)
- 3 黒褐色土 ローム小ブロックと焼土小ブロックを少量含む。(掘り方理上)



0 1:30 1m

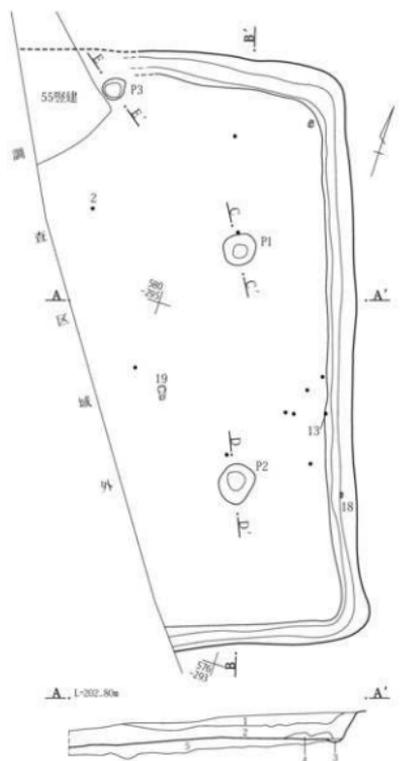


0 1:2 4cm

0 1:3 10cm

第82図 35号竪穴建物カマド平・断面図及び出土遺物

第2章 検出された遺構と遺物



4区36号竪穴建物

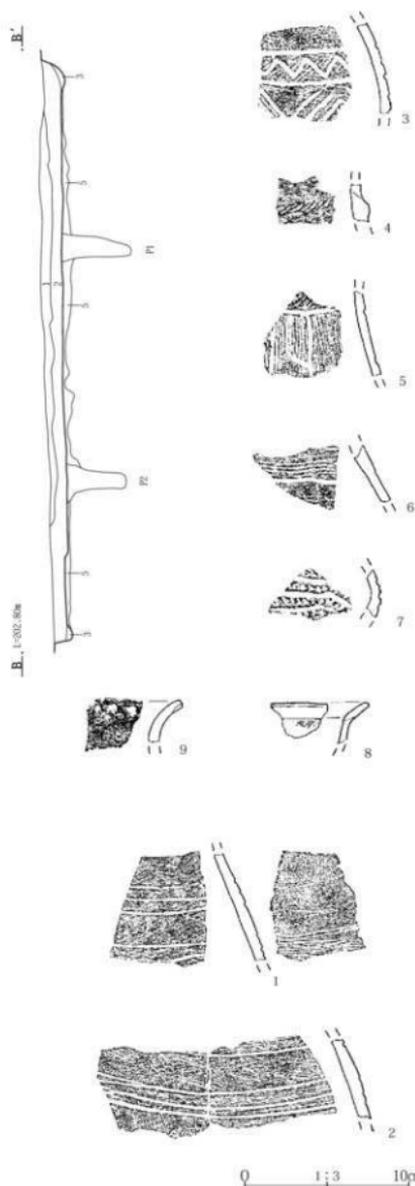
- 1 黒褐色土 暗褐色土を少量含む。
- 2 暗褐色土 褐色土ブロックを少量含む。
- 3 暗褐色土 黒褐色土粒を少量含む、ローム土を微量含む。
- 4 褐色土 ローム土を微量含む。
- 5 黒褐色土 ハードローム小ブロックを少量含む、多量の褐色ローム
漸移層土を斑状に含み、硬化する。(掘り方理上)

0 1:60 2m

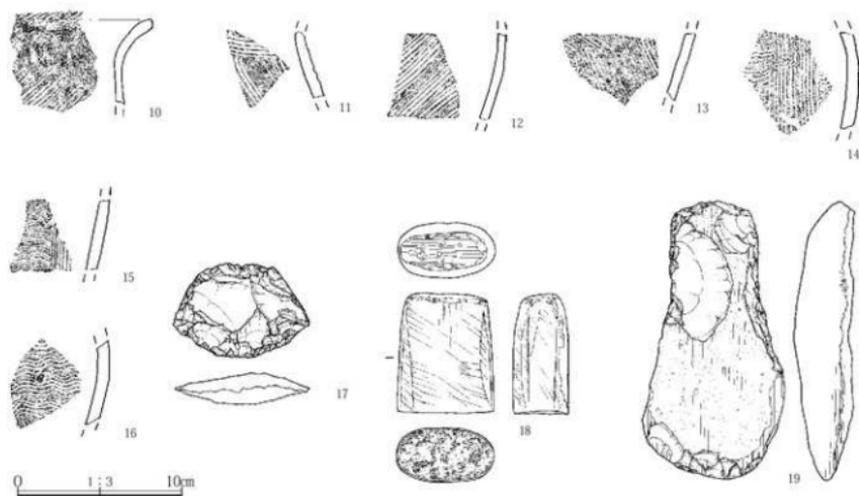
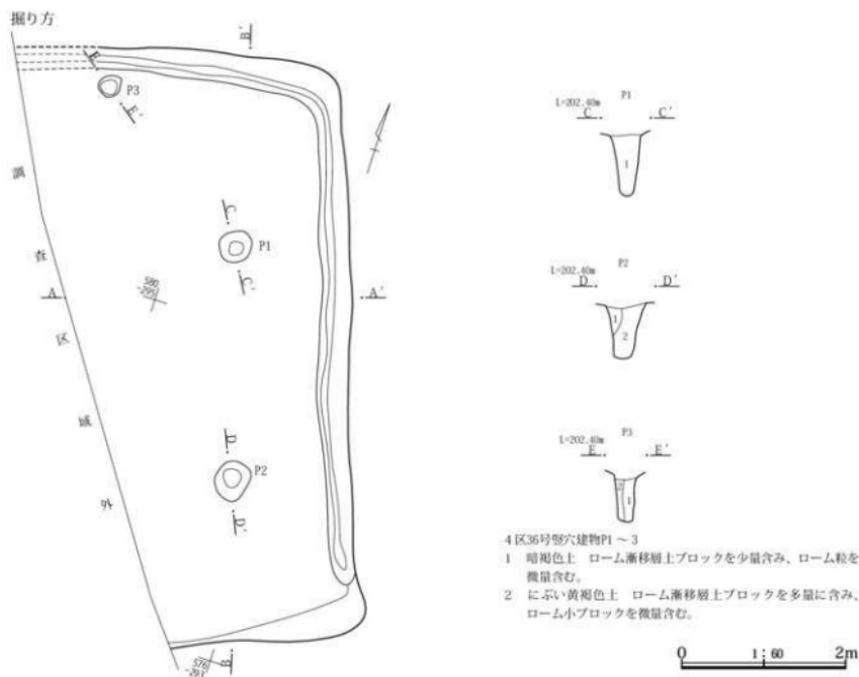
杯片、No. 9～16同焼片のほか、No.18石槌、No.19石鏝などが出土する。

所見：本建物は、調査区4区中央部の調査区南西端に位置し、建物の大半は調査区域外に在る。全容が不明ながら、一辺が7mを越える大型の竪穴建物である。

本建物は、本建物の時期については、出土遺物の年代より弥生時代中期と推定される。



第83図 36号竪穴建物平・断面図及び出土遺物(1)



第84図 36号穴建物掘り方平・断面図及び出土遺物(2)

37号竪穴建物 第85図 PL.39

(旧4区37号竪穴建物)

位置：4区 592-285周辺

規模：4.08×2.70m程、深度は5～10cm程を計る。

面積：10.691㎡

形状：隅丸長方形

主軸方位：N-44°-E

埋没土：褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。

床面：ロームブロックを含む暗褐色土による貼り床を有し、硬化が確認される。

炉・カマド：なし。

柱穴：北西壁の西コーナー付近で、径45cm、深度35cm程を計る円形のピットが1穴検出されるのみ。

壁周溝：北東壁から東コーナー一部の壁際に、浅い壁周溝が検出される。

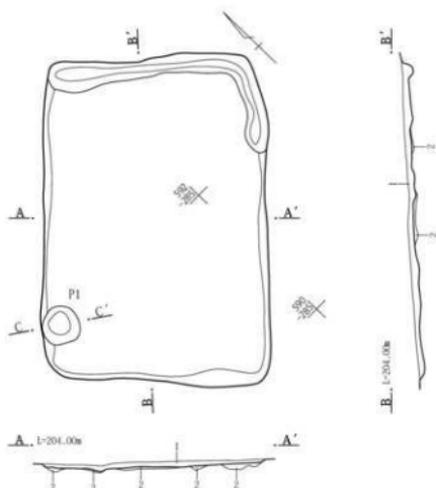
掘り方：貼り床下に深さ2～5cmほどの粗掘りの凹凸が認められる。

重複：なし。

遺物：本建物からは土師器、須恵器石製品(砥石)が出土している。図示できたのは、No. 1 須恵器碗の1点だけであった。この須恵器碗は埋没土からの出土である。

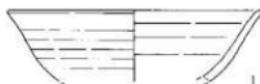
所見：本建物は、調査区4区中央部の南西寄りに在り、緩傾斜地の平坦面という好地形であるため、周囲には他の時期の竪穴建物も密集し、重複が激しい。

本建物の時期は、確実に共存する土器が存在しないが図示した須恵器碗から9世紀後半に比定したい。

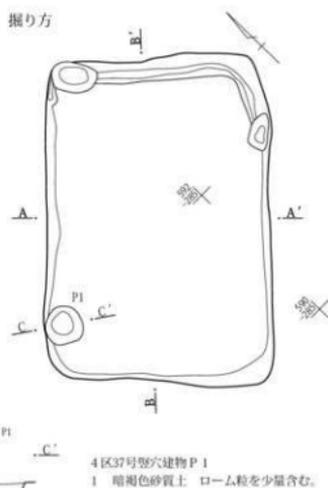


4区37号竪穴建物

- 1 暗褐色土 褐色ローム漸移層土を斑状に含み、ローム粒を少量含む。
- 2 暗褐色土 ハードロームブロックを多量に含む。



0 1:3 10cm



4区37号竪穴建物P1

- 1 暗褐色砂質土 ローム粒を少量含む。

0 1:60 2m

第85図 37号竪穴建物平・断面図及び出土遺物

38号竪穴建物 第86～88図 PL.39・132

(旧4区38号竪穴建物)

位置：4区 586～289周辺

規模：5.07×3.45m、深度は14～26cmほどを計る。

面積：16.865㎡

形状：やや歪な間丸長方形

主軸方位：N-27°-E

埋没土：黒褐～暗褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。

床面：全体に掘り方理土を踏み固めて貼り床を施す。

カマド：北東壁の北コーナー寄りに設けられる。燃焼部は壁のラインのやや外側に位置し、煙道部は突出せずに立ち上がる。掘り方の左右袖部に袖石設置の痕跡を有する。

柱穴：なし

貯蔵穴：北東壁際の東コーナー部より1mほどに、径

90cm、深度25cmを計る土坑が検出される。

壁周溝：なし。

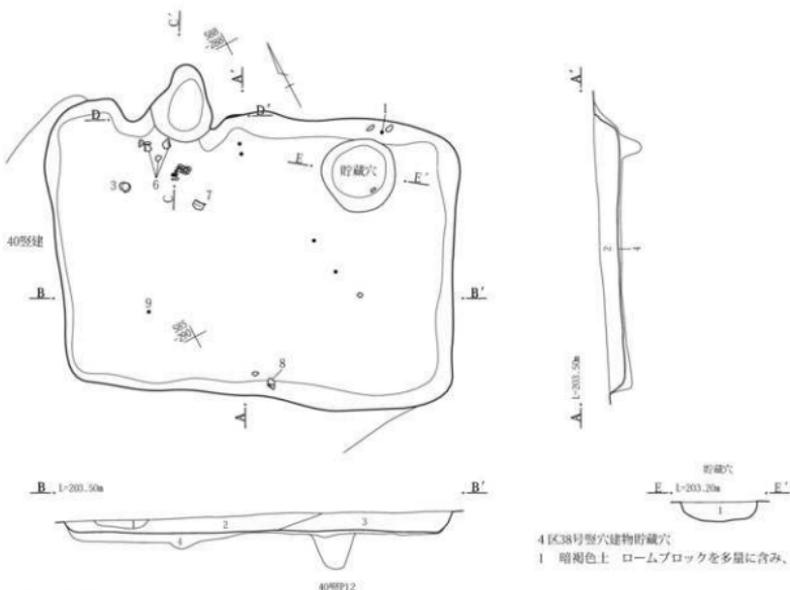
掘り方：なし。

重複：西半側で40号竪穴建物と重複し、埋土の様相から本建物の方が新しいと判断される。

遺物：本建物からは土師器、須恵器などが出土している。図示した土器には、土師器杯・甕、須恵器杯・椀がある。このうち、No. 3の須恵器杯、No. 6～8の土師器甕が床面からの出土、No. 6・7の土師器甕の一部はカマドからも出土していた。

所見：本建物は、調査区4区中央部の南西寄りに在り、緩傾斜地の平坦面という好地形であるため、周囲には他の時代の竪穴建物も密集し、重複が激しい。

本建物の時期は、床面やカマドから出土した土師器甕から9世紀第3四半期に比定できる。



4区38号竪穴建物

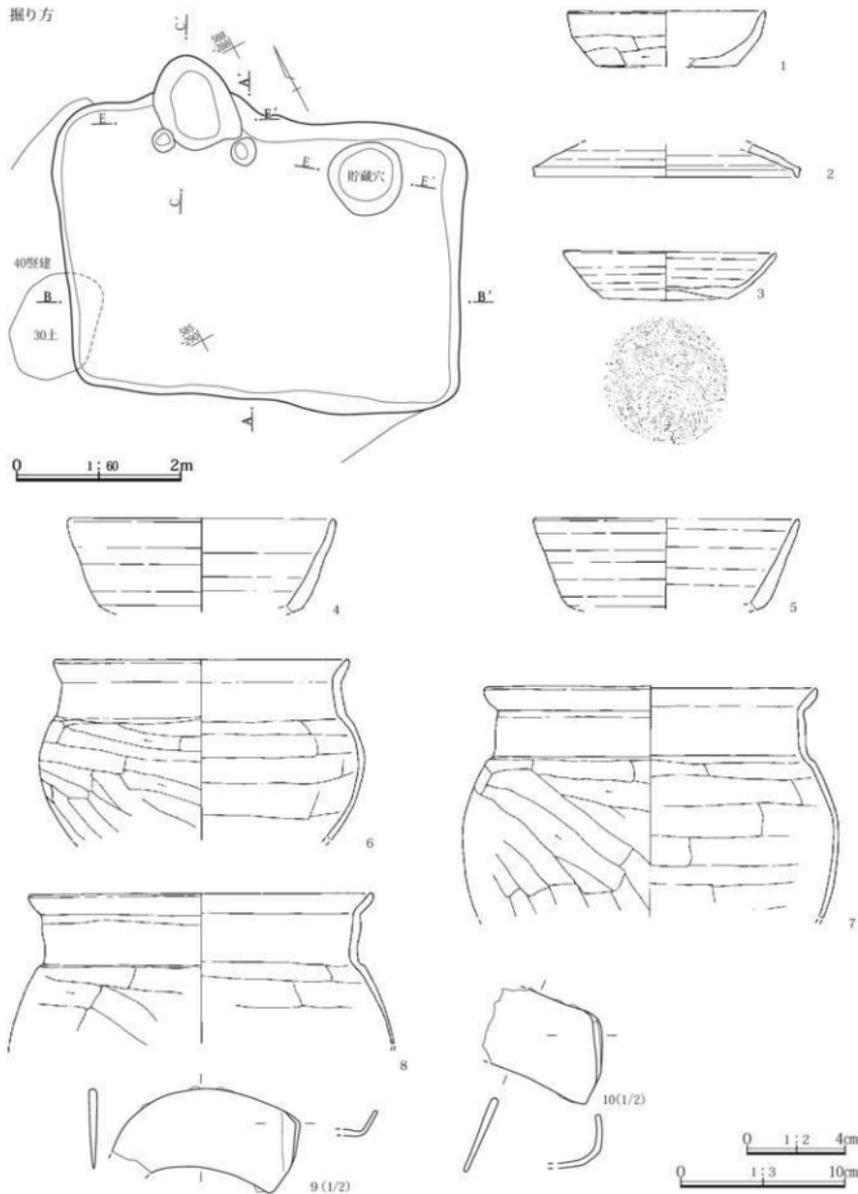
- 1 黒褐色土：ローム土粒と褐色土を微量含む。
- 2 暗褐色土：ローム土粒と焼土細粒を微量含む。
- 3 暗褐色土：黒褐色土粒とローム土を少量含む。
- 4 暗褐色土：ロームブロックを多量に含み、硬化する。(掘り方理土)

第86図 38号竪穴建物平・断面図

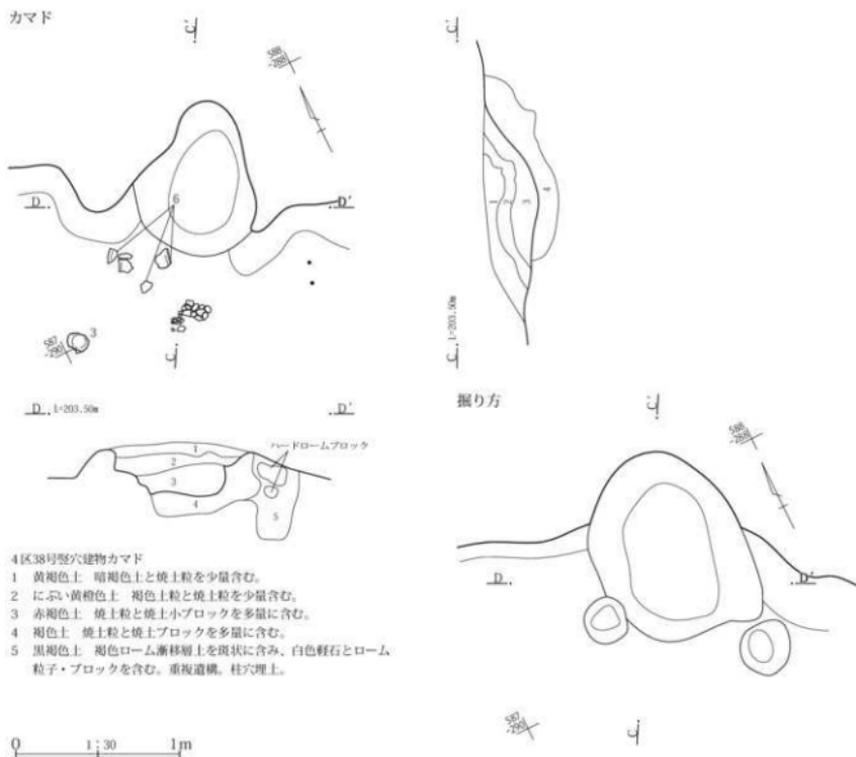
0 1:60 2m

第2章 検出された遺構と遺物

掘り方



第87図 38号竪穴建物掘り方平面図及び出土遺物



4区38号竪穴建物カマド

- 1 黄褐色土 暗褐色土と焼土粒を少量含む。
- 2 に近い黄褐色土 褐色土粒と焼土粒を少量含む。
- 3 赤褐色土 焼土粒と焼土小ブロックを多量に含む。
- 4 褐色土 焼土粒と焼土ブロックを多量に含む。
- 5 黒褐色土 褐色ローム層杉材層を斑状に含み、白色軽石とローム
粒子・ブロックを含む。重複遺構。柱穴埋土。

第88図 38号竪穴建物カマド平・断面図

39号竪穴建物 第89・90図 PL.40・132

(旧4区39号竪穴建物)

位置：4区 590—293周辺

規模：3.84×3.25m、深度は7～20cmほどを計る。

面積：(12.556) m²

形状：やや歪な圓方形

主軸方位：N—111°—E

埋没土：暗褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。

床面：全体に掘り方埋土を踏み固めて貼り床を施す。

カマド：南東壁の中央に設けられる。燃焼部は壁のラインのやや内側に位置し、煙道部は突出せずに立ち上がる。

カマド内外より焼礫が出土していることから、礫を多用したカマドであったと推察される。また、掘り方の埋土

内に焼土ブロックを多く含むことから、使用途中で改修が行われ、掘り方底面の地山ロームが焼土化していることにより、長期間に渡り使用されたものと推察される。

柱穴：なし。

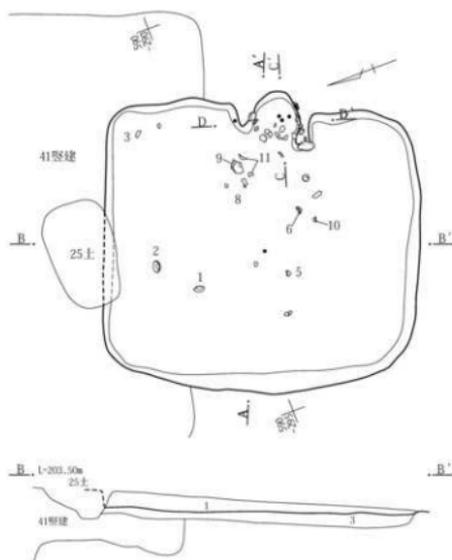
貯蔵穴：なし。掘り方調査において、床面中央北西寄りに径110cm、深度25cmを計り、床面より穿たれた円形の土坑が1基検出される。

壁周溝：なし。

掘り方：床面全体を10～15cmほど覆い、北西壁中央北寄りに土坑状の掘り込みを有する。

重複：北東壁側で41号竪穴建物と重複し、埋土の様相から本建物の方が新しいと判断される。また、同位置にて25号土坑とも重複し、埋土の様相より本建物の方が古い

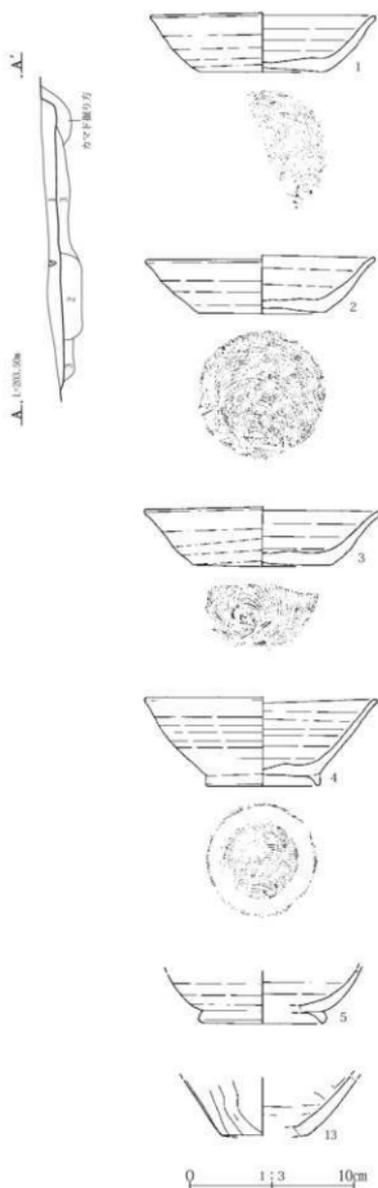
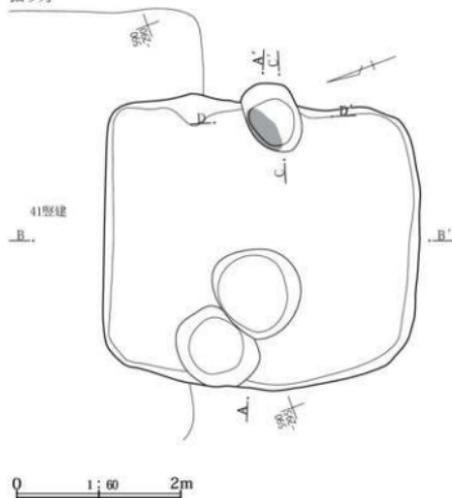
第2章 検出された遺構と遺物



4区39号竪穴建物

- 1 暗褐色土 黒褐色土粒とローム土を少量含む。
- 2 黒褐色土 YP軽石を少量含む。
- 3 にぶい黄褐色土 黄色軽石を少量含み、YPを多量に含む。硬くしまる。

掘り方



第89図 39号竪穴建物平・断面図及び出土遺物(1)

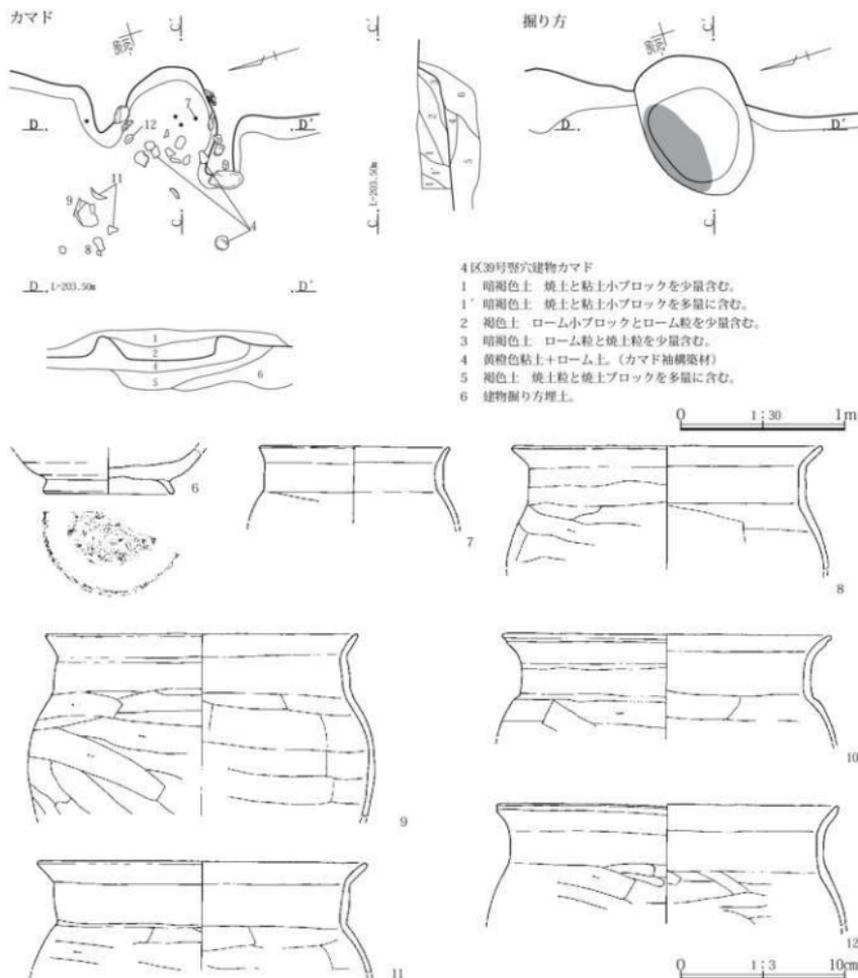
と判断される。

遺物：本建物からは土師器、須恵器などが出土している。図示した土器には、土師器甕、須恵器杯・椀がある。このうち、No. 1・2の須恵器杯、No. 4・6の須恵器椀、No. 8・9の土師器甕が床面、No. 4の須恵器椀、No. 7・11・12の土師器甕がカマド、No. 10の土師器甕が

掘り方からの出土である。

所見：本建物は、調査区4区中央部の南西寄りに在り、緩傾斜地の平坦面という好地形であるため、周囲には他の時代の竪穴建物も密集し、重複が激しい。

本建物の時期は、床面やカマドから出土した須恵器杯・椀、土師器甕から9世紀第3四半期に比定できる。



第90図 39号竪穴建物カマド平・断面図及び出土遺物(2)

40号竪穴建物 第91・92図 PL.41・133

(旧4区40号竪穴建物)

位置：4区 585—290周辺

規模：5.62×(3.53)m、深度は13～20cmほどを計る。

面積：16.543㎡+α

形状：やや歪な間丸長方形

主軸方位：N—26°—W

埋没土：暗褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。

床面：全体に掘り方理土を踏み固めて貼り床を施す。

炉：床面の残存範囲においては検出されておらず、重複遺構により失われた中央から東半部に存在した可能性が高い。

柱穴：床面より径25～75cm、深度30～50cmを計るピットが17穴ほど検出され、その位置関係は整然とせず、壁寄りに多くが穿たれる。

貯蔵穴：南西壁に径50×75cm、深度30cmを計る楕円形の土坑(P5)が1基検出される。

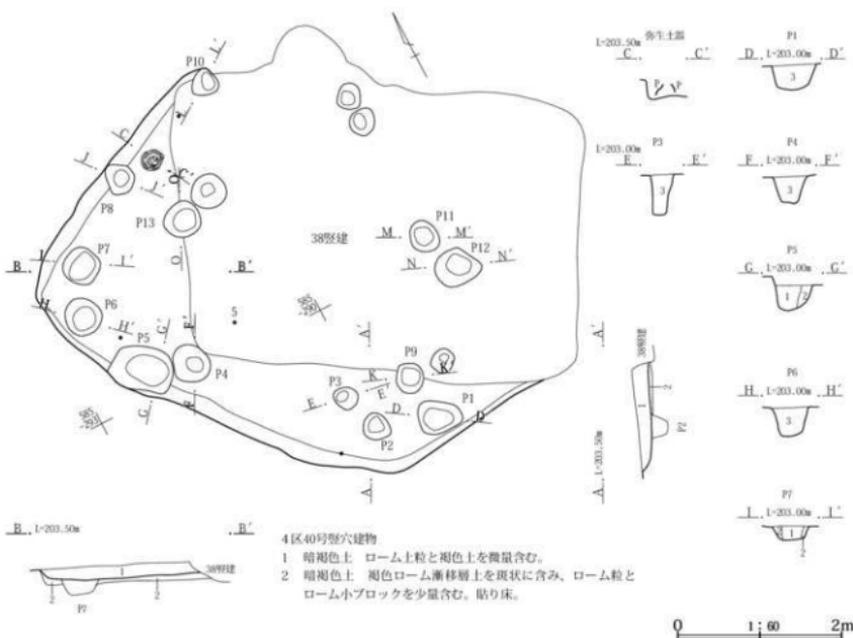
壁周溝：なし。

掘り方：床面全体を3cmほど掘り窪める。

重複：東半部で38号竪穴建物と重複し、埋土の様相から本建物の方が古いと判断される。

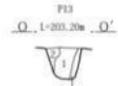
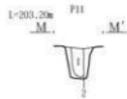
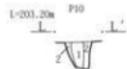
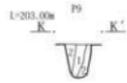
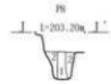
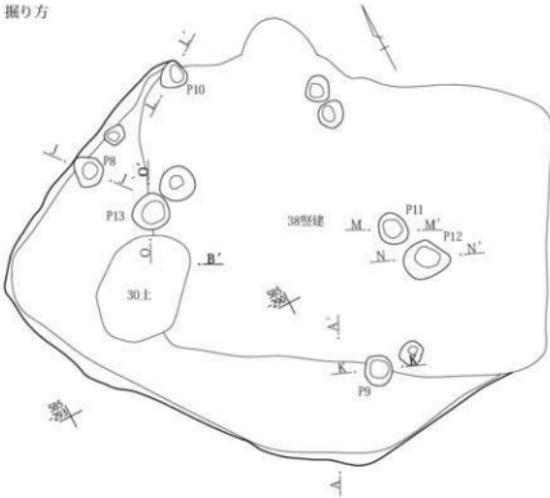
遺物：北西壁際より弥生土器 壺の頸～胴部(No.1)がほぼ床面直上より出土する(土器出土断面図参照)。その他、埋土中よりNo.2同甕片、No.3・4壺片などが出土する。

所見：本建物は、調査区4区中央部の南西寄りに在り、緩傾斜地の平坦面という好地形であるため、周囲には他の時代の竪穴建物も密集し、重複が激しい。南東側には軸を同じくし、同時期と考えられる32号竪穴建物が並ぶ。本建物の時期については、出土遺物の年代より弥生時代中期と推定される。



第91図 40号竪穴建物平・断面図

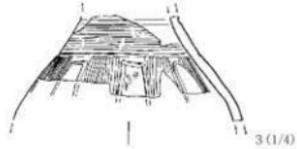
掘り方



4区40号竪穴建物P1・3～13

- 1 黒褐色土 ローム粒子を微量含む。柱穴柱痕。
- 2 黒褐色土 褐色土小ブロックとローム小ブロック・ローム粒子を少量含む。
- 3 暗褐色土 ローム粒子を少量含む。

0 1:60 2m



0 1:3 10m

0 1:4 10m

第92図 40号竪穴建物掘り方平・断面図及び出土遺物

41号竪穴建物 第93～95図 PL.42・133

(旧4区41号竪穴建物)

位置：4区 592-292周辺

規模：5.54×3.31m、深度は44～58cmほどを計る。

面積：(18.983) m²

形状：隅丸長方形

主軸方位：N-22°-E

埋没土：主に暗褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。

床面：全体に掘り方理土を踏み固めて貼り床を施す。

カマド：北東壁の中央東コーナー寄りに設けられる。燃焼部は壁のラインの内側に位置し、煙道部は突出せずに立ち上がる。掘り方の燃焼部下の地山ローム土が焼土化していることから、長期間に渡り使用されたものと推察される。

柱穴：なし。

貯蔵穴：東コーナー部に径100×150cm、深度40cmを計る楕円形の土坑が1基検出される。

壁周溝：北西壁から北コーナー部を除く各壁際に溝が巡る。

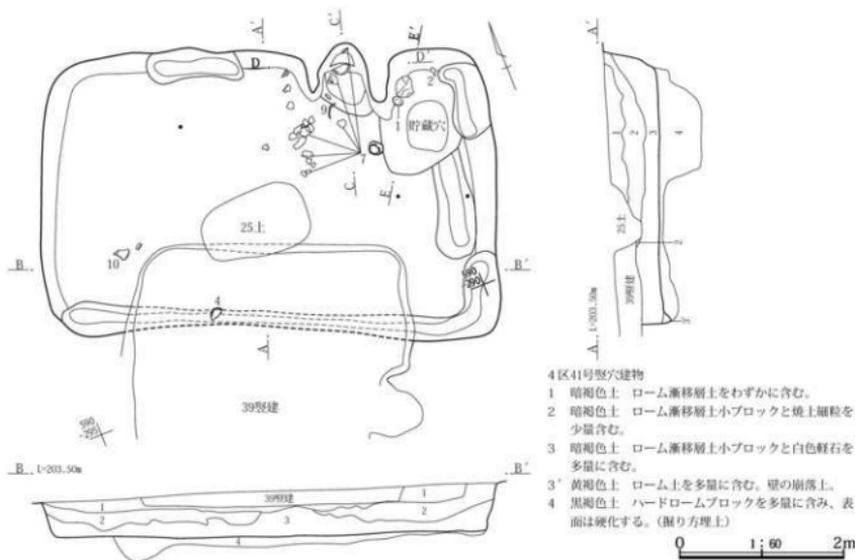
掘り方：床面全体を5～10cmほど覆い、中央北寄りに土坑状の掘り込みを有する。北西壁際に鋤状工具による連続する掘削痕が検出される。

重複：南西壁側で39号竪穴建物と重複し、埋土の様相から本建物の方が古いと判断される。

遺物：本建物からは土師器、須恵器などが出土している。図示した土器には、土師器杯・甕・壺、須恵器杯蓋がある。このうち、No. 1の土師器杯、No. 6・7の土師器甕が床面、No. 5の須恵器杯蓋、No. 8の土師器甕がカマドからの出土である。なお、No. 7の土師器甕の一部片はカマドからも出土していた。No. 10の土師器甕は9世紀第3四半期の年代観が与えられるもので本竪穴建物が埋没した後に混入したと判断できる。

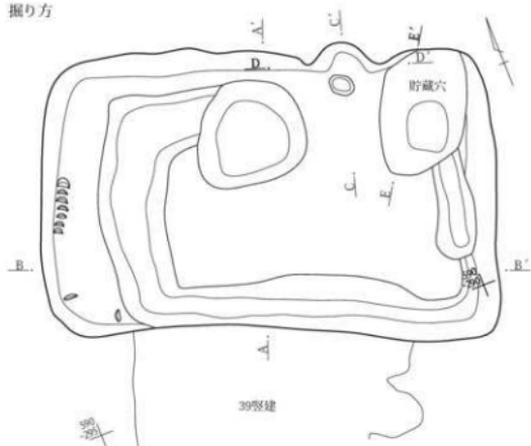
所見：本建物は、調査区4区中央部の南西寄りに在り、緩傾斜地の平坦面という好地形であるため、周囲には他の時代の竪穴建物も密集し、重複が激しい。

本建物の時期については、床面やカマドから出土した土師器杯・甕、須恵器杯蓋から7世紀末～8世紀初頭に比定できる。



第93図 41号竪穴建物平・断面図

掘り方

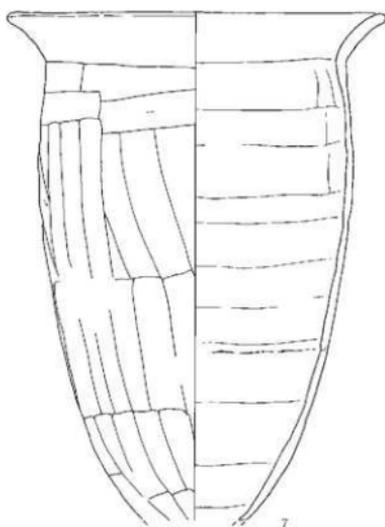
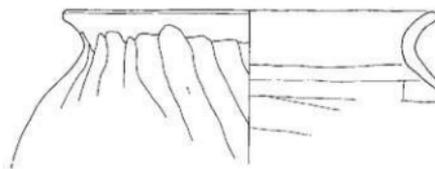
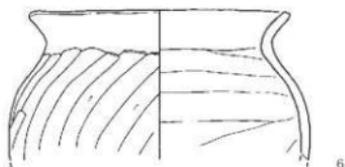


貯蔵穴
E 1-203.00m E



4区41号貯蔵穴建物の貯蔵穴

1 褐色土 黒褐色土とロームブロック・
焼土粒を少量含む。

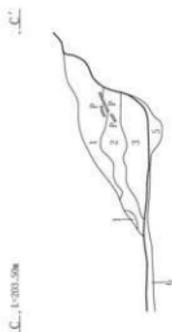
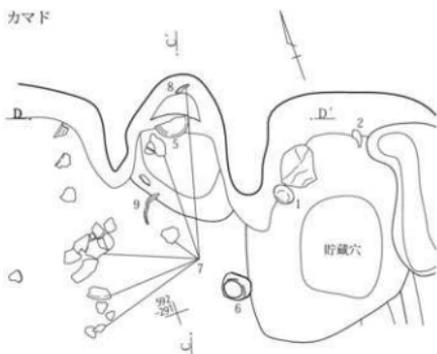


0 1:3 10cm

第94図 41号貯蔵穴建物掘り方平・断面図及び出土遺物(1)

第2章 検出された遺構と遺物

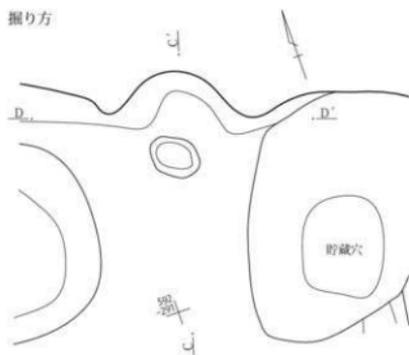
カマド



1:200.50m

1:200.50m

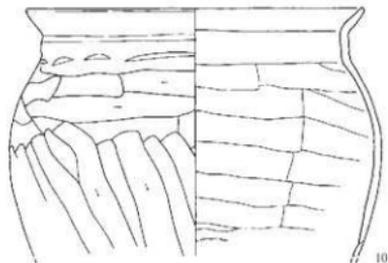
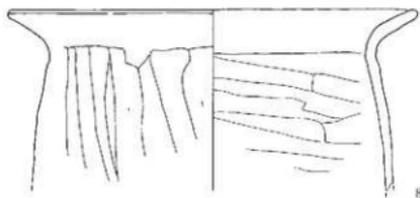
掘り方



4区41号竪穴建物カマド

- 1 黒褐色土 褐色土小ブロックと焼土粒を少量含む。
- 2 黒褐色土 濃い黄褐色土と褐色土ブロックを多量に含む。
- 3 濃い黄褐色土 粘土小ブロックと焼土小ブロック少量含む。
- 4 淡黄色粘土 袖部構築材。
- 5 黒褐色土 焼土粒を多量に含む、粘土小ブロックを少量含む。
- 6 建物掘り方埋土。

0 1:30 1m



0 1:3 10cm

第95図 41号竪穴建物カマド平・断面図及び出土遺物(2)

42号竪穴建物 第96図 PL.43・134

(旧4区42号竪穴建物)

位置：4区 593-297周辺

規模：(3.50)×(1.00)m、深度は14～25cmほどを計る。

面積：3.739㎡+α

形状：南西部の大半が調査区域外に在るため、全体の形状は不明。

主軸方位：N-66°-E

埋没土：暗褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。

床面：北半部はローム地山を、南半部は重複建物の埋土を踏み固めて床面とする。

カマド：北東壁の東コーナー寄りに設けられる。燃焼部は壁のラインの内側に位置し、煙道部は突出せず、緩やかに立ち上がる。掘り方の燃焼部下から煙道部にかけて、地山ローム土が焼土化していることから、長期間に渡り使用されたものと推察される。

柱穴：不明。調査範囲内では検出されていない。

貯蔵穴：不明。調査範囲内では検出されていない。

壁周溝：不明。調査範囲内では検出されていない。

掘り方：調査範囲内においては、掘り方は認められない。

重複：北西壁側で43号竪穴建物と重複し、埋土の様相から本建物の方が古いと判断される。また、南東側で55号竪穴建物と重複し、埋土の様相から本建物の方が新しいと判断される。

遺物：本建物からは土師器、須恵器などが出土している。図示できた土器は、土師器甕の2点だけであった。この2点は、共にカマドからの出土である。

所見：本建物は、調査区4区中央部の南西端に位置し、大半が調査区域外に在る。緩傾斜地の平坦面という好地形であるため、周囲には他の時期の竪穴建物も密集し、重複が激しい。本建物の時期は、カマドから出土した土師器甕から8世紀第1四半期に比定できる。

43号竪穴建物 第97図 PL.43

(旧4区43号竪穴建物)

位置：4区 587-299周辺

規模：4.07×(0.52)m、深度は27～45cmほどを計る。

面積：4.660㎡+α

形状：南西部の大半が調査区域外に在るため、全体の形状は不明。

主軸方位：N-136°-E

埋没土：褐色～暗褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。

床面：ローム地山を踏み固めて床面とする。

カマド：南東壁の東コーナー寄りに設けられる。燃焼部はほぼ壁のライン上に位置し、煙道部は突出せず、急峻に立ち上がる。掘り方の燃焼部下から煙道部にかけて、地山ローム土が焼土化していることから、長期間に渡り使用されたものと推察される。

柱穴：不明。調査範囲内では検出されていない。

貯蔵穴：不明。調査範囲内では検出されていない。

壁周溝：北東壁から東コーナー部にかけて深い周溝が検出される。他の壁下の様相は不明。

掘り方：調査範囲内においては、掘り方は認められない。

重複：南東側のカマド部で42号竪穴建物と重複し、カマドの残存から本建物の方が新しいと判断される。また、北東部で44号竪穴建物と重複し、検出時の埋土の様相より、本遺構の方が新しいと判断される。

遺物：本建物からは土師器、須恵器などが出土している。図示できた土器は、土師器甕の口縁部から胴部上・中位片2点だけであった。この土師器甕は、埋没土からの出土で本竪穴建物に共存するか否かは判然としない。

所見：本建物は、調査区4区中央部の南西端に位置し、大半が調査区域外に在る。緩傾斜地の平坦面という好地形であるため、周囲には他の時期の竪穴建物も密集し、重複が激しい。

本建物の時期については、出土土器から8世紀に比定できるが、出土位置が埋没土であることから不確実である。

44号竪穴建物 第98・99図 PL.44・134

(旧4区44号竪穴建物)

位置：4区 590-298周辺

規模：5.20×3.30m、深度は3～11cmほどを計る。

面積：(18.983)㎡

形状：やや歪な隅丸長方形

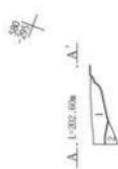
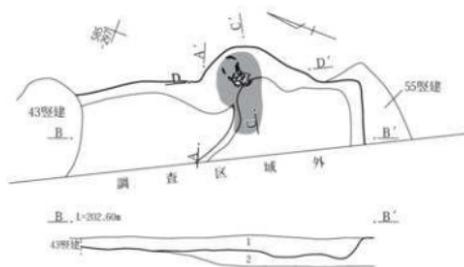
主軸方位：N-24°-W

埋没土：暗褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。

床面：全体に薄く貼り床を施す。

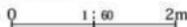
炉：残存範囲においては検出されておらず、重複する10

第2章 検出された遺構と遺物

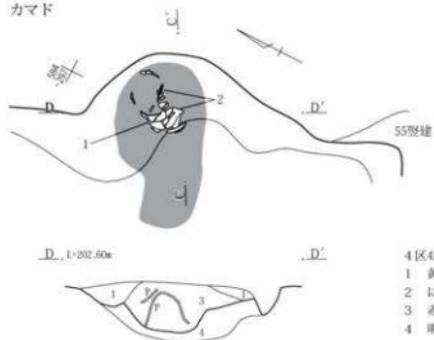


4区42号型穴建物

- 1 暗褐色土：ローム粒とロームブロックを少量含む。
- 2 暗褐色土：褐色ローム漸移層土を斑状に含み、ローム粒とローム小ブロックを少量含む。(55号型穴建物上)

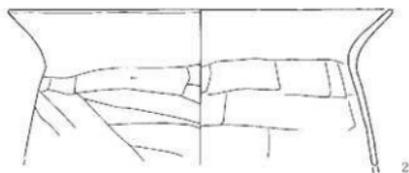
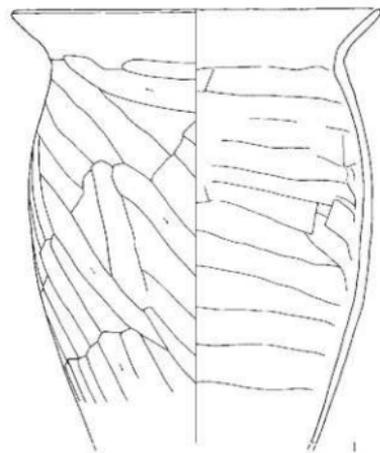


カマド

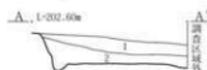
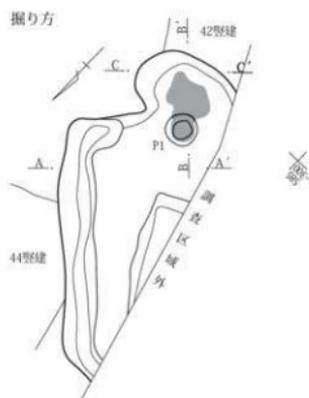
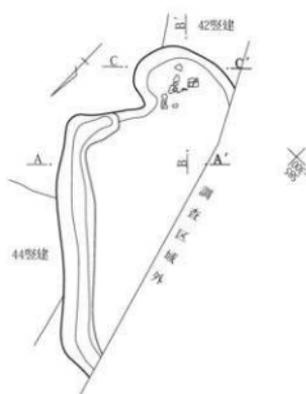


4区42号型穴建物カマド

- 1 黄褐色土：暗褐色土と焼土粒を少量含む。
- 2 にぶい黄褐色土：褐色土粒と焼土粒を少量含む。
- 3 赤褐色土：焼土を多量に含み、褐色粒を微量含む。
- 4 明黄褐色土：ローム小ブロックを多量に含む。(カマド掘り方理上)



第96図 42号型穴建物平・断面図及び出土遺物

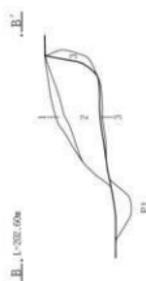


4区43号竪穴建物

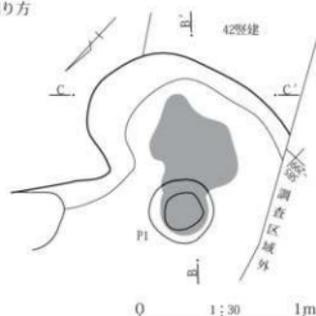
- 1 褐色土 ローム粒と焼土細粒を少量含む。
- 2 暗褐色土 黒褐色土とロームブロックを少量含む。

0 1:60 2m

カマド



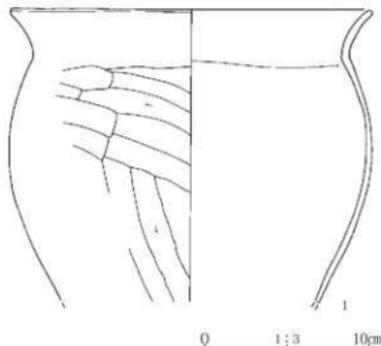
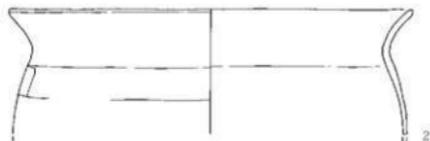
掘り方



0 1:30 1m

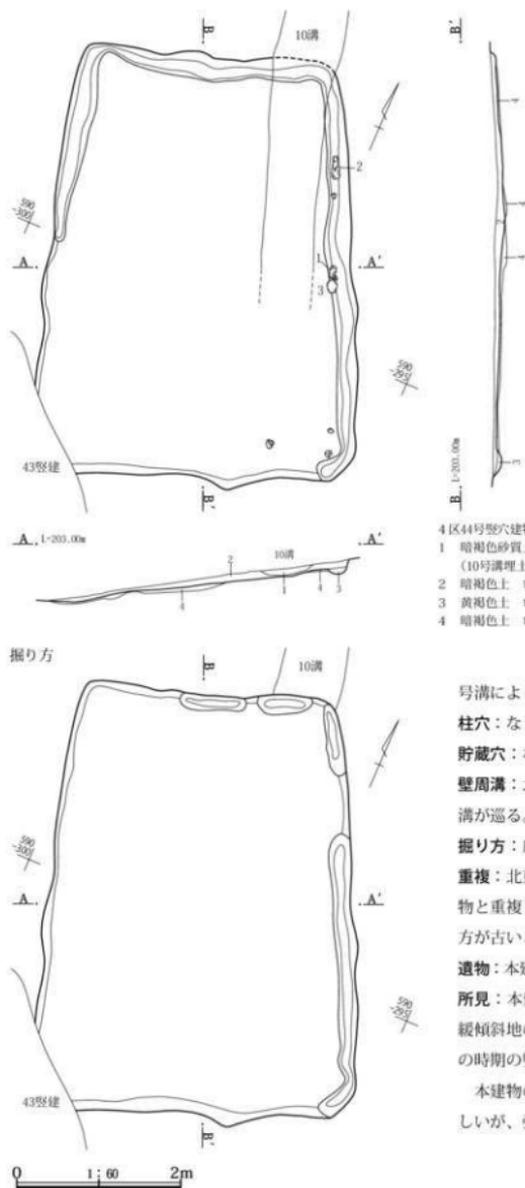
4区43号竪穴建物カマド

- 1 黄褐色土 暗褐色土を少量含み、焼土粒をわずかに含む。
- 2 赤い黄褐色土 褐色土粒と焼土粒を少量含む。
- 3 赤褐色土 地山ロームの焼土化。



0 1:3 10cm

第97図 43号竪穴建物平・断面図及び出土遺物



4区44号竪穴建物

- 1 暗褐色砂質土 漸移層土ブロックとローム粒を少量含む。しまり弱。(10号溝埋土)
- 2 暗褐色土 ローム漸移層土を斑状に含み、ローム粒子を少量含む。
- 3 黄褐色土 ローム土を多量に含む。壁の崩落土。
- 4 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。貼り床。

号溝により失われた北東壁際にあった可能性もある。

柱穴：なし。

貯蔵穴：なし。

壁周溝：北東壁・北西壁から南西壁の中段までの壁際に溝が巡る。

掘り方：床面全体が2～5cmほど浅く掘り下げられる。

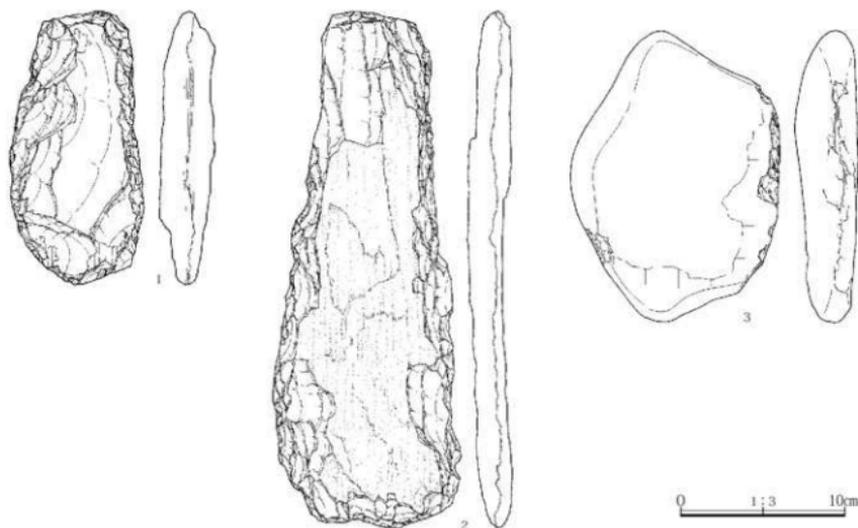
重複：北東壁際で10号溝と、南コーナー部で43号竪穴建物と重複し、いずれも検出時の埋土の様相から本建物の方が古いと判断される。

遺物：本建物からはNo. 1・No. 2の石鏃が出土している。

所見：本建物は、調査区4区中央部の南西寄りに在り、緩傾斜地の平坦面という好地形であるため、周囲には他の時期の竪穴建物も密集し、重複が激しい。

本建物の時期については、出土遺物が乏しく断定は難しいが、弥生時代中期以前と推定される。

第98図 44号竪穴建物平・断面図



第99図 44号竪穴建物出土遺物

45号竪穴建物 第100・101図 PL.44・134・135

(旧4区45号竪穴建物)

位置：4区 595—300周辺

規模：2.58×(2.25)m、深度は18～32cmほどを計る。

面積：4.995m²+α

形状：隅丸長方形形状を呈すると思われるが、南西半部が攪乱により失っているため、全体の形状は不明。

軸方位：N-128°-E

埋没土：黒褐～暗褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。

床面：掘り方の土坑部を除き、ローム地山を踏み固めて床面とする。

カマド：南東壁の東コーナー寄りに設けられる。燃焼部は壁のラインより内側に位置し、煙道部は突出せず、緩やかに立ち上がる。袖部には芯材に礫が埋め込まれ、天井部は灰白色砂岩を方柱状に加工した物が用いられている。袖～天井部は灰白色粘土とローム土を貼り、構築される。掘り方の燃焼部下の地山ローム土が焼土化していることから、長期間に渡り使用されたものと推察される。

柱穴：不明。調査範囲内では検出されていない。

貯蔵穴：東コーナー部に径75cm、深度55cmを計る土坑が検出される。

壁周溝：なし。

掘り方：カマドの北西方向に径75cm、深度60cm強を計る土坑が穿たれる。

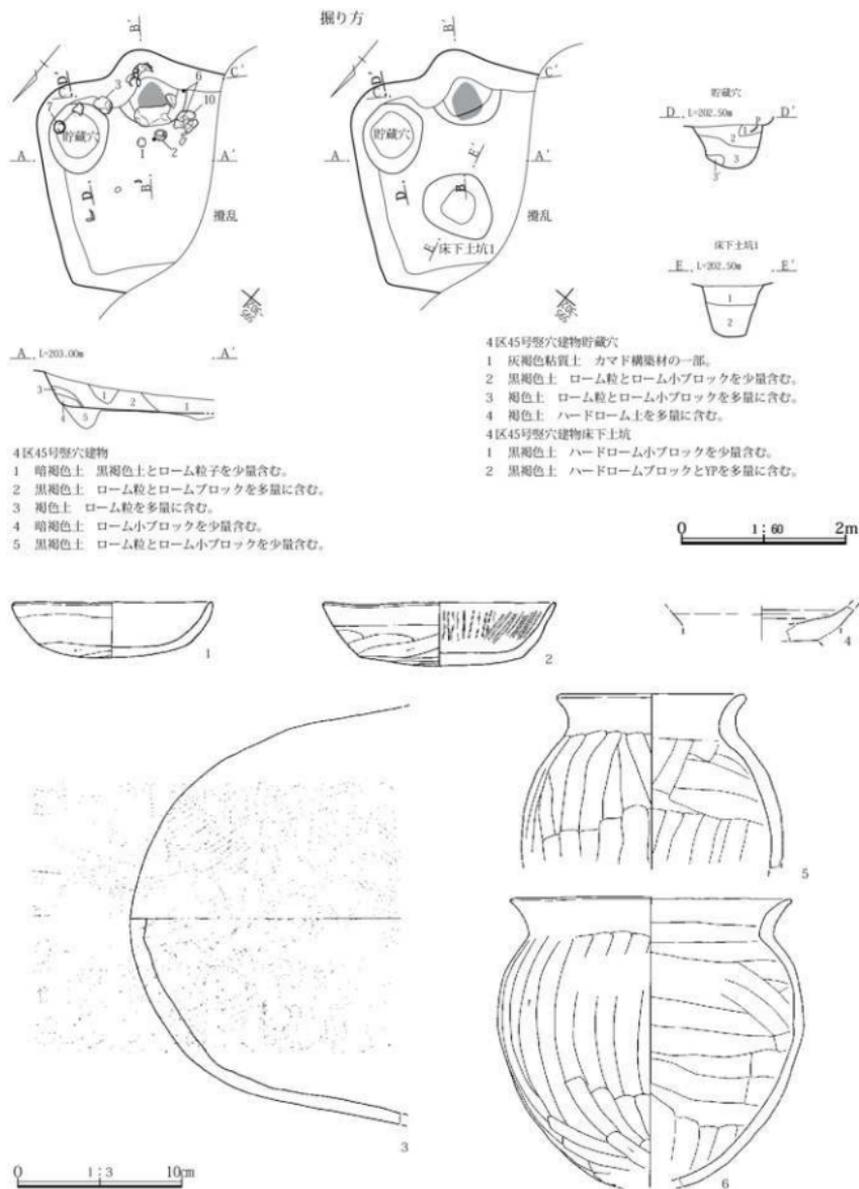
重複：なし。

遺物：本建物からは土師器、須恵器などが出土している。図示した土器には、土師器杯・小型甕・甕・壺、須恵器横瓶などがある。このうち、No.1・2の土師器杯、No.3の須恵器横瓶、No.6の土師器小型甕、No.10の土師器壺が床面、No.5・6の土師器小型甕、No.9・No.10の土師器甕がカマド、No.7の土師器小型甕、No.11の土師器甕が貯蔵穴からの出土である。

所見：本建物は、調査区4区中央部の南西端に位置する。緩傾斜地の平坦面という好地形であるため、周囲には他の時代の竪穴建物も密集し、重複が激しい。本建物は、北東壁が2.5mほどの小型の建物であるが、カマドの造りも良く、長期間の使用が認められる。

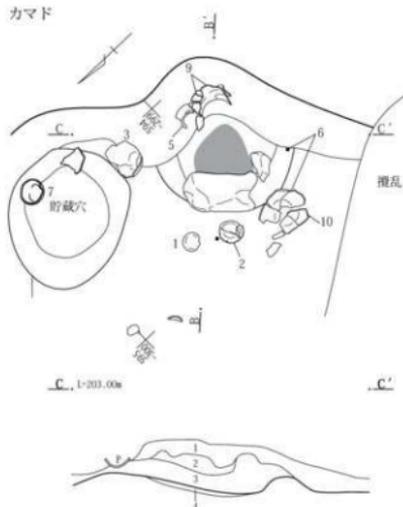
本建物の時期は、床面やカマドから出土した土師器杯や甕から7世紀末～8世紀初頭に比定できる。

第2章 検出された遺構と遺物



第100図 45号貯蔵穴建物平・断面図及び出土遺物(1)

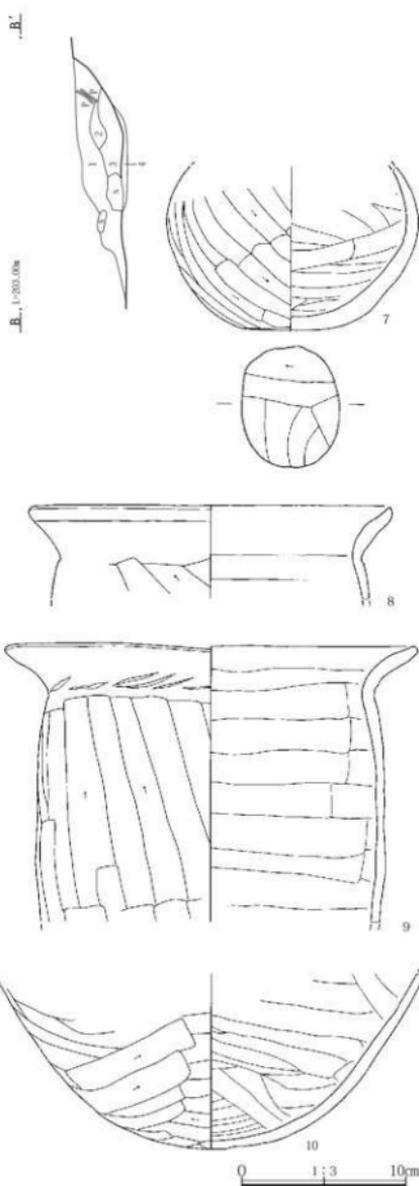
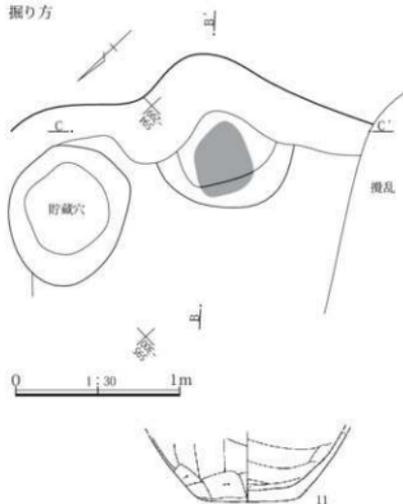
カマド



4区45号竪穴建物カマド

- 1 黒褐色土 褐色土を斑状に含み、ローム粒とローム小ブロックを多く含む。
- 2 黄褐色土 暗褐色土を斑状に含み、焼土粒を少量含む。
- 3 にぶい黄褐色土 褐色土と焼土粒を少量含む。
- 4 赤褐色土 焼土を多量に含む。天井部崩落上。
- 5 赤褐色土 灰を多量に含む。カマド使用面。

掘り方



第101図 45号竪穴建物カマド・断面図及び出土遺物(2)

46号竪穴建物 第102～106図 PL.45・135～137

(旧4区46号竪穴建物)

位置：4区 602-297周辺

規模：2.8×3.6m、深度は50cmほどを計る。

面積：10.033㎡

形状：隅丸長方形状

主軸方位：N-52°-E

埋没土：暗褐～黒褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。

床面：北西側の重複遺構埋土部を除き、ローム地山を踏み固めて床面とする。

カマド：北東壁の中央やや東コーナー寄りに設けられる。燃焼部は壁のラインより内側に位置し、煙道部は突出せず、急峻に立ち上がる。袖部や燃焼部側壁には芯材の礫が埋め込まれ、石組みのカマドであり、掘り方の燃焼部下の地山ローム土が焼土化していることから、長期間に渡り使用されたものと推察される。

柱穴：なし。

貯蔵穴：東コーナー部に径50～70cm、深度12cmを計る土坑が検出される。

壁周溝：北東壁下のカマド左脇にのみ、壁周溝が検出される。

掘り方：カマド部のみ、袖部や燃焼部側壁の芯材礫を埋め込む小ピットが穿たれる。

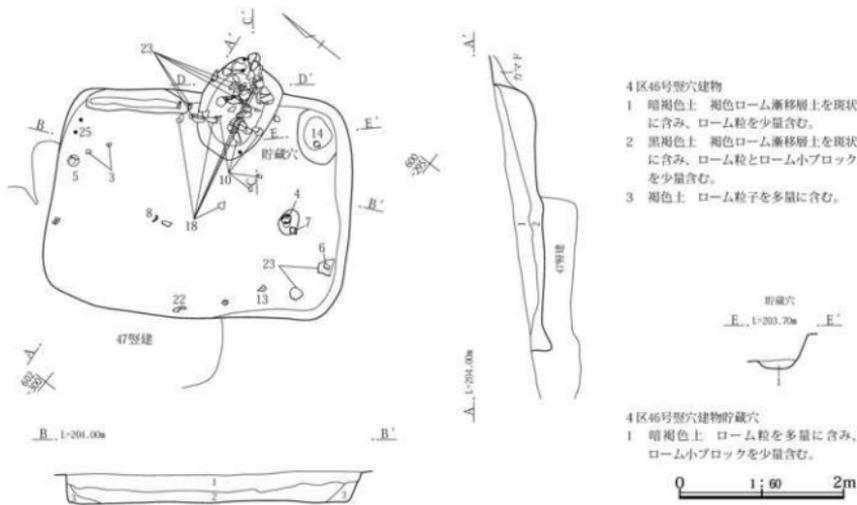
重複：北西側にて47号竪穴建物と重複し、埋土の様相より、本建物の方が新しいと判断される。

遺物：本建物からは土師器、須恵器、灰釉陶器、鉄製品(刀子)など、多くの遺物が出土している。

図示した土器には、土師器甕、須恵器杯蓋・杯・椀・壺・甕・羽釜・甕がある。このうち、No.22・23の須恵器甕が床面、No.2・3の須恵器杯、No.5の須恵器椀、No.9の土師器小型甕・10の土師器壺、No.12の土師器甕、No.15・17の須恵器甕、No.18～21の須恵器羽釜、No.23・24の須恵器甕がカマド、No.14の土師器小型甕が貯蔵穴、No.4の須恵器杯がピット、No.1の須恵器杯蓋が掘り方からの出土である。

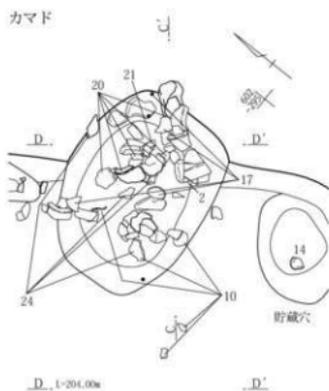
所見：本建物は、調査区4区中央部の南西端に位置する。緩傾斜地の平坦面という好地形であるため、周囲には他の時代の竪穴建物も密集し、重複が激しい。本建物は、短辺が2.8mほどの小型の建物であるが、カマドの造りも良く、長期間の使用が認められる。

本建物の時期については、床面やカマドから出土した土師器甕、須恵器杯・椀、羽釜から10世紀第1四半期に比定できる。

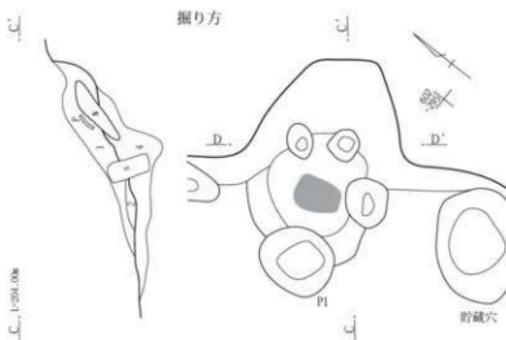


第102図 46号竪穴建物平・断面図

カマド



掘り方



D_ 1:200.0m

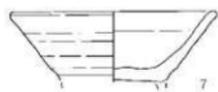
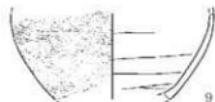
D'

4区46号型穴建物カマド

- 1 褐色土 焼土粒を少量含む。
- 2 赤褐色土 焼土を多量に含む。
- 3 褐色土 カマド裏込め。
- 4 赤褐色土 焼土を少量含む。

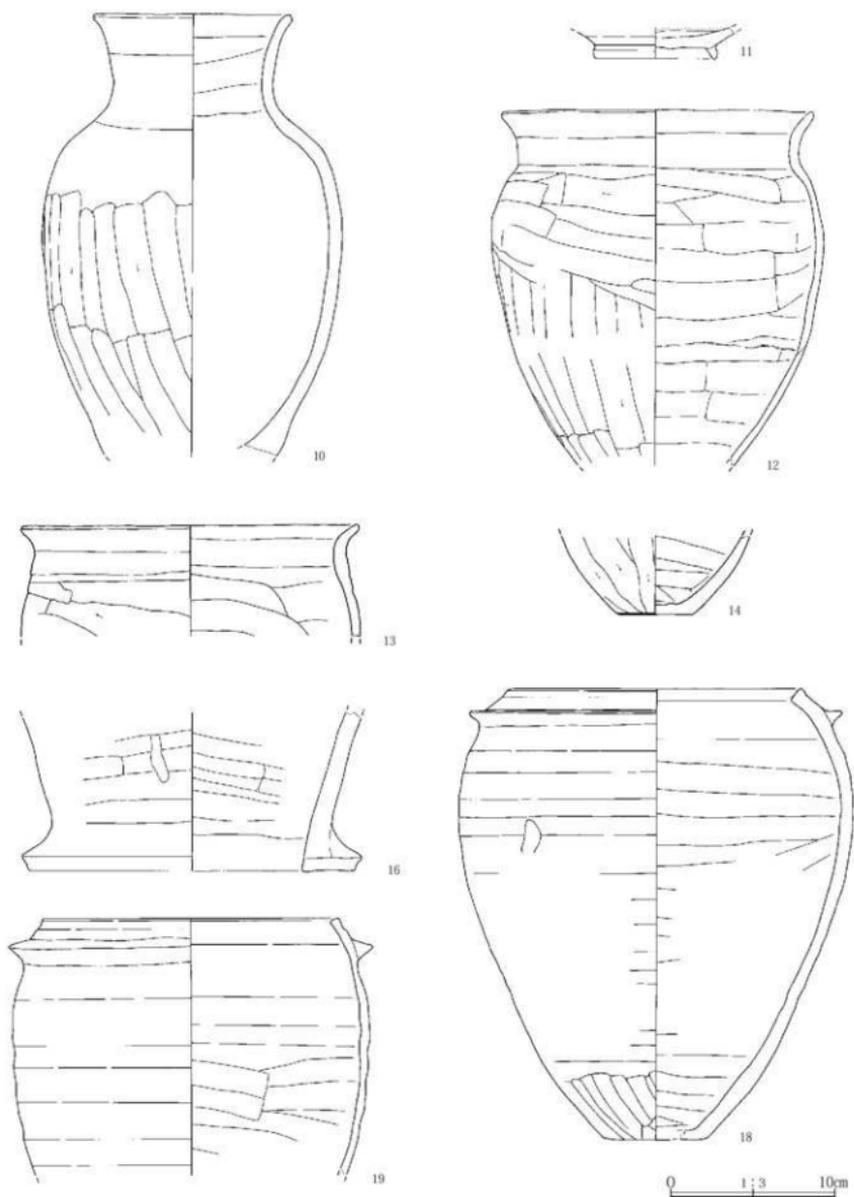


0 1:30 1m

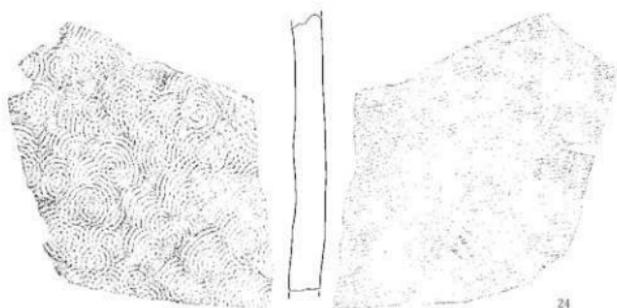
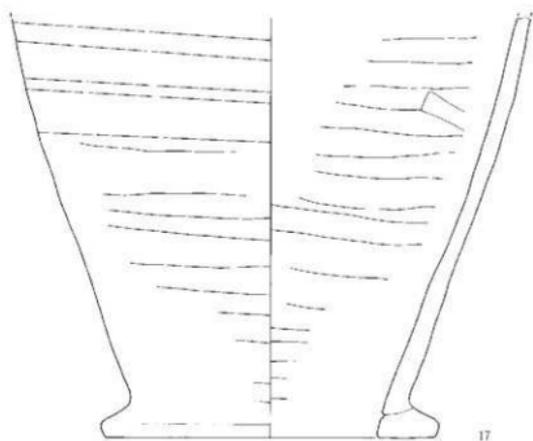
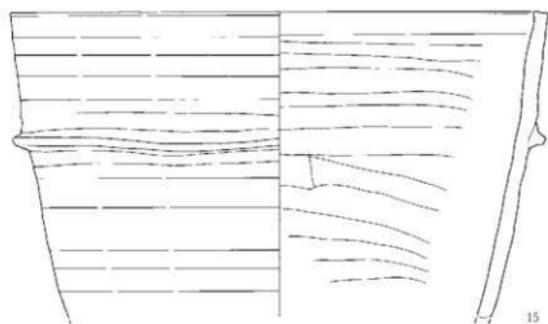


0 1:3 10cm

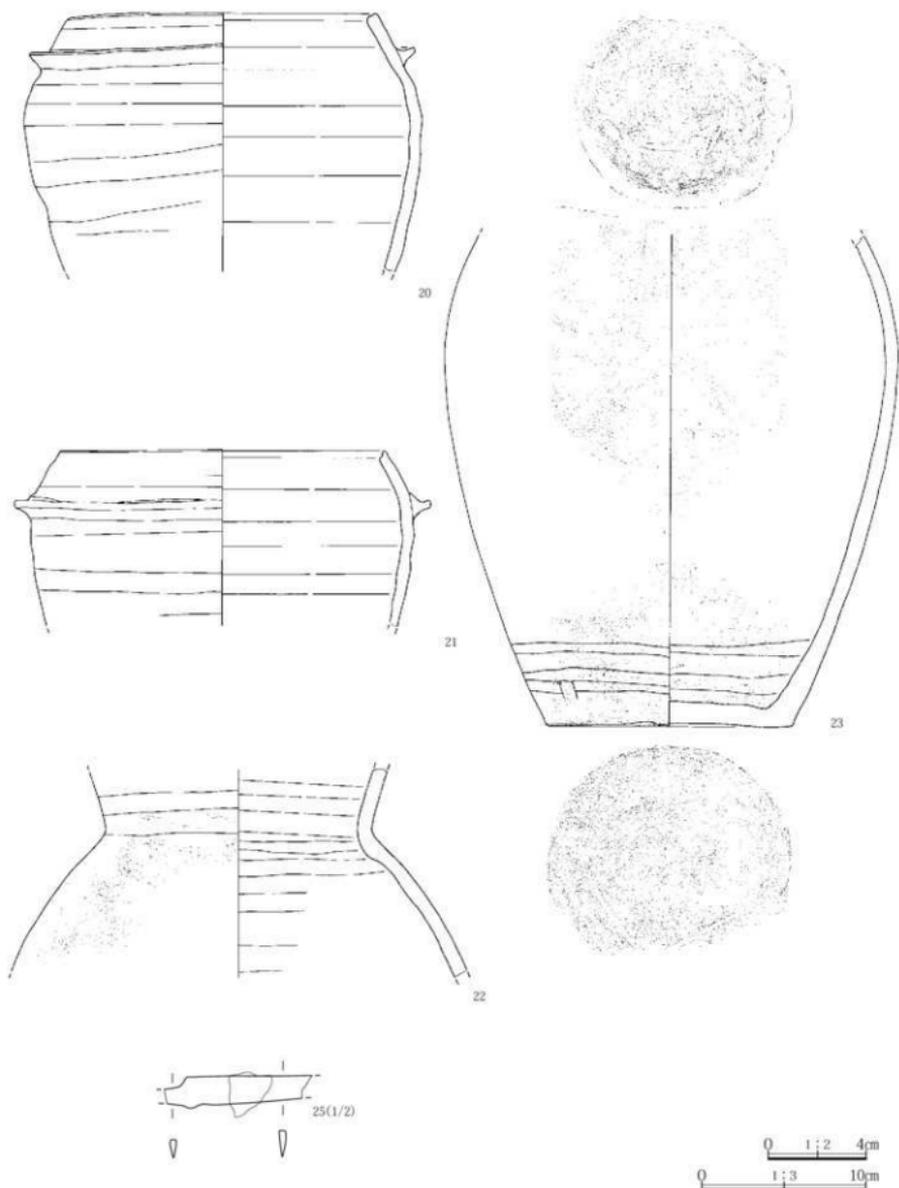
第103図 46号型穴建物カマド平・断面図及び出土遺物(1)



第104図 46号竪穴建物出土遺物(2)



第105図 46号竪穴建物出土遺物(3)



第106図 46号竪穴建物出土遺物(4)

47号竪穴建物 第107～109図 PL.46

(旧4区47号竪穴建物)

位置：4区 602-299周辺

規模：(2.75)×(1.60)m、深度は57～70cmほどを計る。

面積：(9.301)㎡

形状：隅丸方形状

主軸方位：N-32°-E

埋没土：主に黒褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。

床面：床面中央部の掘り方土坑埋土部を除き、ローム地山を踏み固めて床面とする。

カマド：北東壁のほぼ中央に設けられる。燃焼部は壁のライン上に位置し、煙道部は突出せず、急峻に立ち上がる。両袖部は地山ローム土を掘り残す形で構築される。掘り方の燃焼部下の地山ローム土が焼土化していること

から、長期間に渡り使用されたものと推察される。

柱穴：なし。

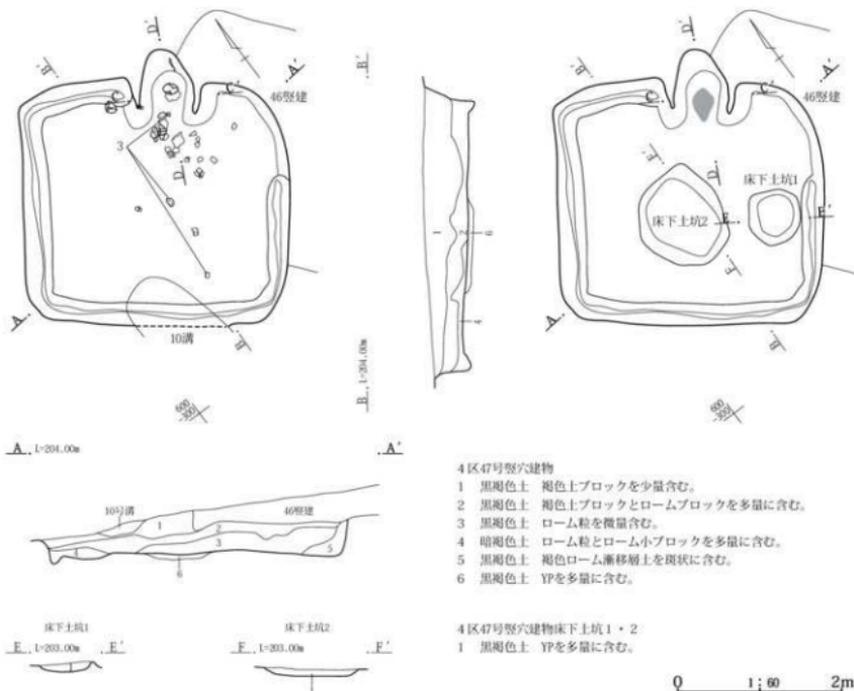
貯蔵穴：なし。

壁周溝：カマド右脇から南東壁中程までを除く他の壁下に、壁周溝が検出される。

掘り方：床面中央部に土坑状の掘り込みが穿たれる。

重複：北東側にて46号竪穴建物と重複し、埋土の様相より本建物の方が古いと判断される。また、南西部にて10号溝と重複し、遺構確認時の埋土の様相より、本建物の方が古いと判断される。両重複遺構の深度は浅く、本建物の床面には至らない。

遺物：本建物からは土師器、須恵器、灰釉陶器などが出土している。図示した土器には、土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯がある。このうち、No. 3の須恵器杯、No. 4・5の土師器甕が床面からの出土であり、この3



第107図 47号竪穴建物平・断面図

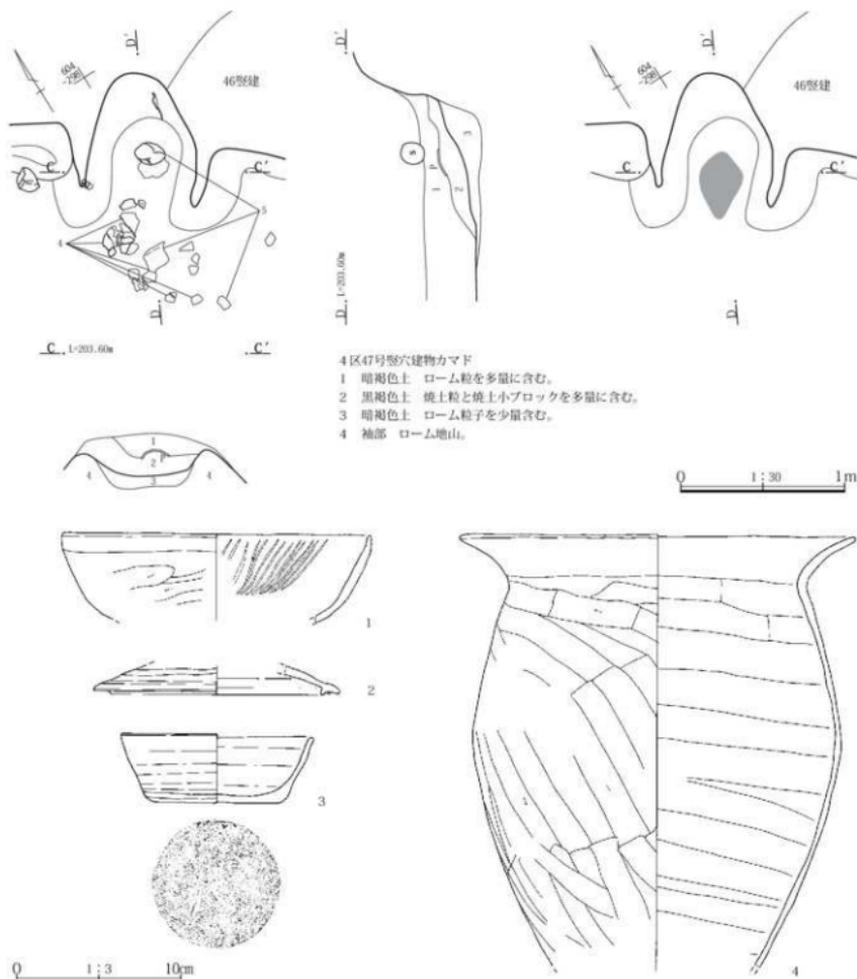
第2章 検出された遺構と遺物

点はカマドからも一部片が出土している。なお、図示できなかった灰釉陶器は検で詳細は不明であるが10世紀代に比定できる。

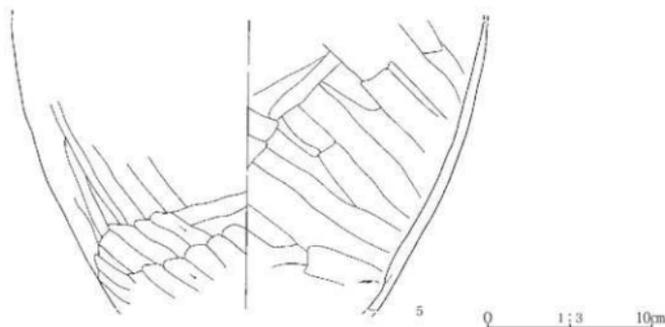
所見：本建物は、調査区4区中央部の南西端に位置する。緩傾斜地の平坦面という好地形であるため、周囲には他の時期の竪穴建物も密集し、重複が激しい。本建物は、

一边が3mほどの小型の建物であるが、カマドの造りも良く、長期間の使用が認められる。

本建物の時期は、床面やカマドから出土した須恵器杯や土師器甕から7世紀末～8世紀初頭に比定できる。



第108図 47号竪穴建物カマド平・断面図及び出土遺物(1)



第109図 47号竪穴建物出土遺物(2)

48号竪穴建物 第110・111図 PL.47・137

(旧4区48号竪穴建物)

位置：4区 611-296周辺**規模**：3.36×2.77m、深度は17～40cmほどを計る。**面積**：9.460㎡**形状**：隅丸形状**主軸方位**：N-55°-E**埋没土**：主に暗褐色砂質土による自然埋没の様相を呈するが、一部に北東側からの流入の痕跡が認められる。**床面**：ローム地山を踏み固めて床面とし、浅い凹凸を埋める様に薄い貼り床を施す。**カマド**：北東壁の中央やや東コーナー寄りに設けられる。遺存状態は悪く、袖部も残らない。燃焼部は壁のラインよりやや外側に位置し、煙道部は突出せず、急峻に立ち上がる。掘り方の燃焼部下の地山ローム土が焼土化していることから、長期間に渡り使用されたものと推察される。**柱穴**：北東壁の壁周溝端に検出された径35～40cm、深度20cmを計る小ピットが、壁柱穴となる可能性がある。**貯蔵穴**：なし。**壁周溝**：北コーナー部付近の壁下に、壁周溝が検出される。**掘り方**：浅い凹凸の掘り込みのみ。**重複**：南東壁にて26号土坑と重複し、埋土の様相より本建物の方が新しいと判断される。**遺物**：本建物からは土師器、須恵器、石製品(紡錘車紡輪)などが出土している。

図示した土器には、土師器甕、須恵器杯・椀・甕がある。このうち、No. 1の須恵器杯、No. 4・5の土師器甕がカマドからの出土である。

所見：本建物は、調査区4区中央部の北西寄りに位置する。緩傾斜地の平坦面という好地形であるため、周囲には他の時期の竪穴建物も密集する。本建物も一辺が3mほどの小型の建物であるが、カマドの造りも良く、長期間の使用が認められる。

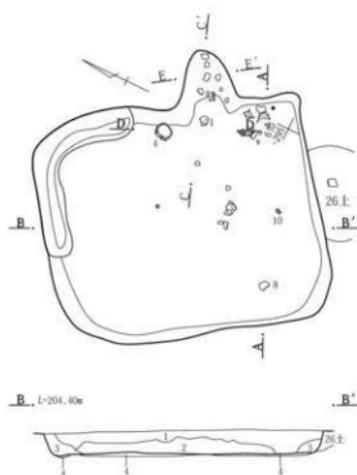
本建物の時期については、カマドから出土した須恵器杯、土師器甕から9世紀第4四半期に比定できる。

49号竪穴建物 第112図 PL.30・32・137

(旧4区49号竪穴建物)

位置：4区 588-273周辺**規模**：4.58×1.52m、深度は27～37cmほどを計る。**面積**：8.296㎡+α**形状**：不明。**主軸方位**：N-127°-E**埋没土**：主に暗褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。**床面**：掘り方埋土を踏み固めて床面とする。**カマド**：南東壁の残存部端に壁の突出がみられ、埋土に焼土を多く含み、床面に粘土の散乱が見られることから、この位置にカマドが設けられていた可能性が高い。**貯蔵穴**：不明。**壁周溝**：残存部では、北コーナー部付近の壁下に、壁周溝が検出される。

第2章 検出された遺構と遺物



4区48号竪穴建物

- 1 暗褐色土 褐色土ブロックとローム粒子を少量含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒を多量に含む。
- 3 黒褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 4 に近い黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。暗り床上。



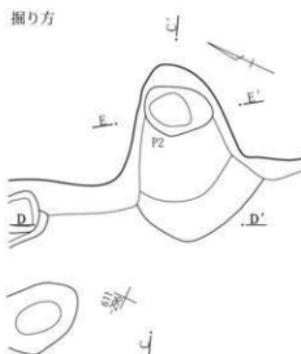
4区48号竪穴建物P1

- 1 褐色土 ローム粒とロームブロックを多量に含む。
- 2 暗褐色土 黒色土を多量に含み、ローム粒を少量含む。



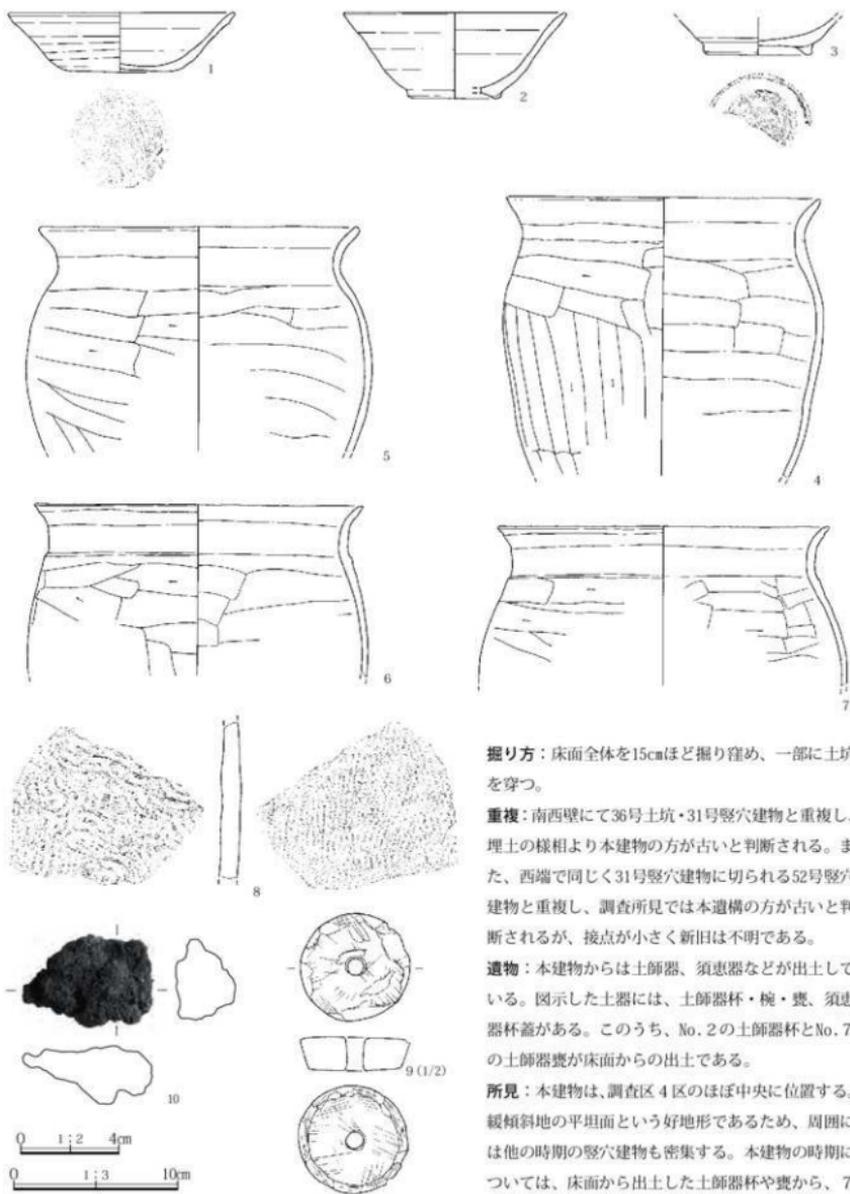
4区48号竪穴建物カマド

- 1 褐色土 焼土粒とローム粒を微量含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒を少量含む。
- 2' 明黄褐色土 ローム粒とロームブロックを多量に含む。天井部崩落上。
- 3 暗褐色土 褐色土を斑状に含み、ローム粒子を少量含む。
- 4 暗褐色土 ローム小ブロックと焼土ブロックを多量に含む。
- 5 黒褐色土 ローム土と珪粒・焼土を多量に含む。(掘り方埋土)



E, l=204.50m

第110図 48号竪穴建物平・断面図



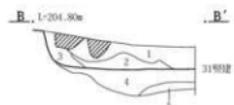
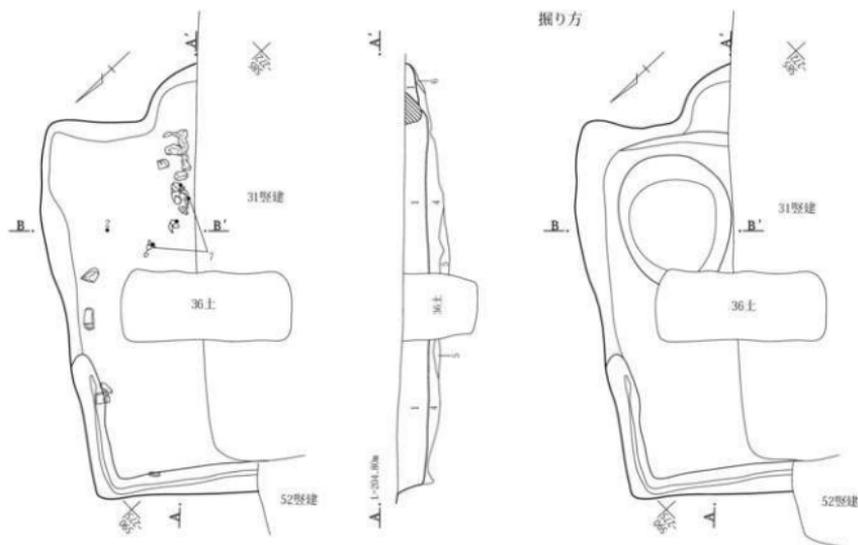
第111図 48号竪穴建物出土遺物

掘り方: 床面全体を15cmほど掘り窪め、一部に土坑を穿つ。

重複: 南西壁にて36号土坑・31号竪穴建物と重複し、埋土の様相より本建物の方が古いと判断される。また、西端で同じく31号竪穴建物に切られる52号竪穴建物と重複し、調査所見では本遺構の方が古いと判断されるが、接点が小さく新旧は不明である。

遺物: 本建物からは土師器、須恵器などが出土している。図示した土器には、土師器杯・椀・甕、須恵器杯蓋がある。このうち、No. 2の土師器杯とNo. 7の土師器甕が床面からの出土である。

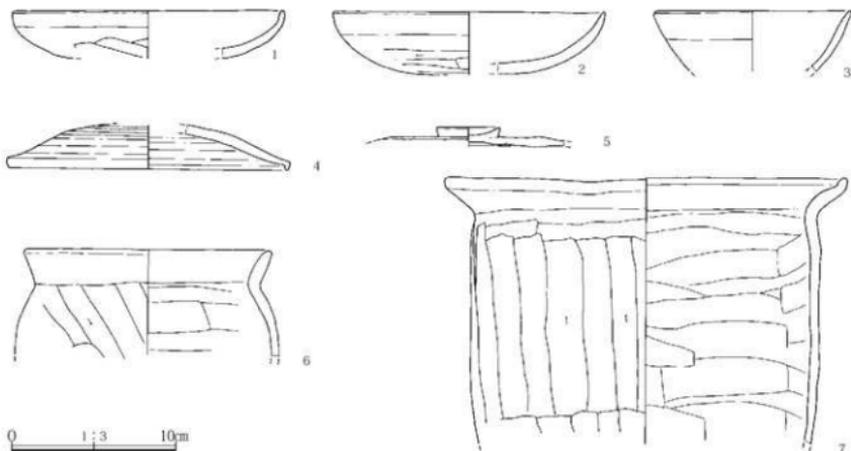
所見: 本建物は、調査区4区のほぼ中央に位置する。緩傾斜地の平坦面という好地形であるため、周囲には他の時期の竪穴建物も密集する。本建物の時期については、床面から出土した土師器杯や甕から、7世紀末～8世紀初頭に比定できる。



4区49号竪穴建物

- 1 暗褐色土 ローム粒を少量含む。
- 2 暗褐色土 ソフトロームブロックを少量含む。
- 3 褐色土 ハードロームブロックを多量に含む。
- 4 暗褐色土 褐色土ブロックと黒褐色土ブロックを多量に含む。
- 5 褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 6 暗褐色土 焼土小ブロックを多量に含む。

0 1:60 2m



0 1:3 10m

第112図 49号竪穴建物平・断面図及び出土遺物

50号竪穴建物 第113～115図 PL.48・138

(旧4区50号竪穴建物)

位置：4区 631-298周辺

規模：4.56×2.40m、深度は11～44cmほどを計る。

面積：10.957㎡

形状：歪な隅丸長方形。

主軸方位：N-62°-E

埋没土：褐色～黒褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。

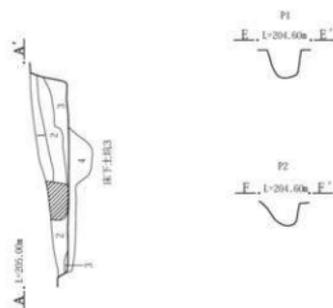
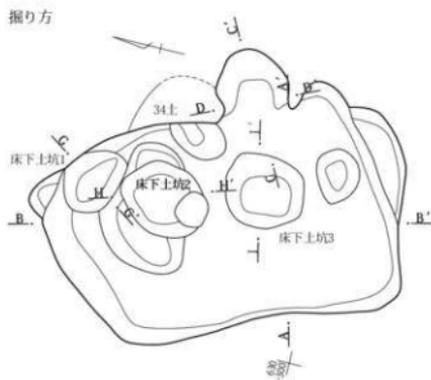
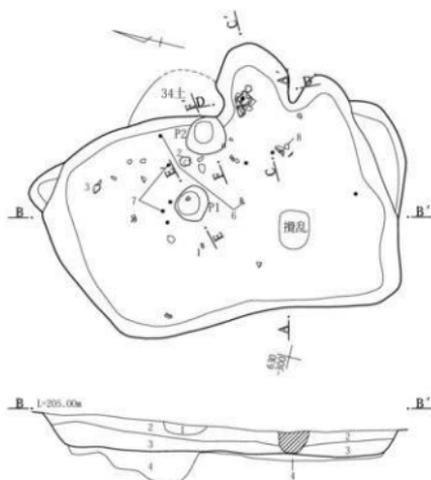
床面：掘り方土を踏み固めて床面とする。

カマド：北東壁の中央東寄りに位置し、遺存状態は悪く、袖等は残らない。燃焼部は、ほぼ壁のライン上に位置し、煙道部へとやや急峻に立ち上がる。燃焼部下の掘り方面の地山ロームに所々焼土化がみられることから、長期間の使用が推察される。

貯蔵穴：なし。

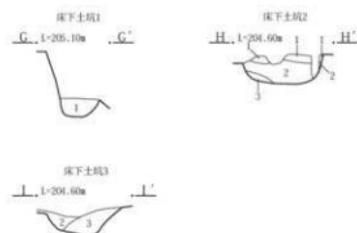
壁周溝：なし。

掘り方：床面全体を15cmほど掘り窪め、中央部から北



4区50号竪穴建物

- 1 暗褐色土 ソフトローム大ブロックと白色軽石を多量に含む。
- 2 黒褐色土 褐色ローム漸移層土を塊状に含み、ローム粒と白色軽石を少量含む。
- 3 褐色土 ソフトロームブロックを少量含む。
- 4 黒褐色土 ハードローム小ブロックを少量含み、硬くしまる。(掘り方埋土)



4区50号竪穴建物床下土坑1～3

- 1 黒褐色土 ハードローム小ブロックを少量含み、硬くしまる。
- 2 黒褐色土 焼土小ブロックと炭化物・灰を含む。
- 3 黒褐色土 焼土小ブロックと炭化物・灰・ハードローム・粘土小ブロックを含む。

0 1:60 2m

第113図 50号竪穴建物平・断面図

第2章 検出された遺構と遺物

コーナーにかけて土坑状の掘り込みを穿つ。

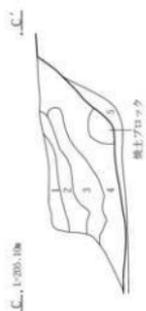
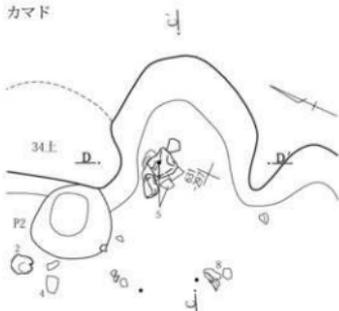
重複：北西壁にて34号土坑と重複し、埋土の様相より本建物の方が新しいと判断される。

遺物：本建物からは土師器、須恵器が出土している。図示した土器には、土師器杯・甕・甕・壺、須恵器壺がある。このうち、No. 2の土師器杯、No. 6の土師器甕が床面、No. 5の土師器甕がカマド、No. 3の土師器壺が掘り方からの出土である。なお、No. 2の土師器杯は盤状の

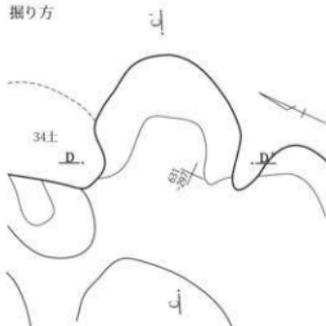
形態を呈し、底部に螺旋状暗文、No. 3は底部に放射状暗文と口縁部にヘラミガキが施されており、県内から出土している暗文の施文方法でもやや特異な例である。

所見：本建物は、調査区4区の北西部に位置する。竪穴建物の密集地からはやや離れる。本建物は、本建物の時期については、床面から出土した土師器杯・甕から、7世紀末～8世紀初頭世紀に比定できる。

カマド



掘り方



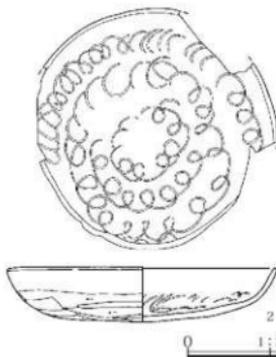
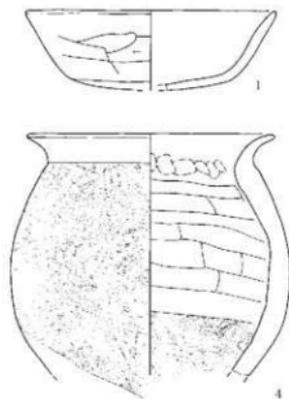
D., 1:300, 10m

D'

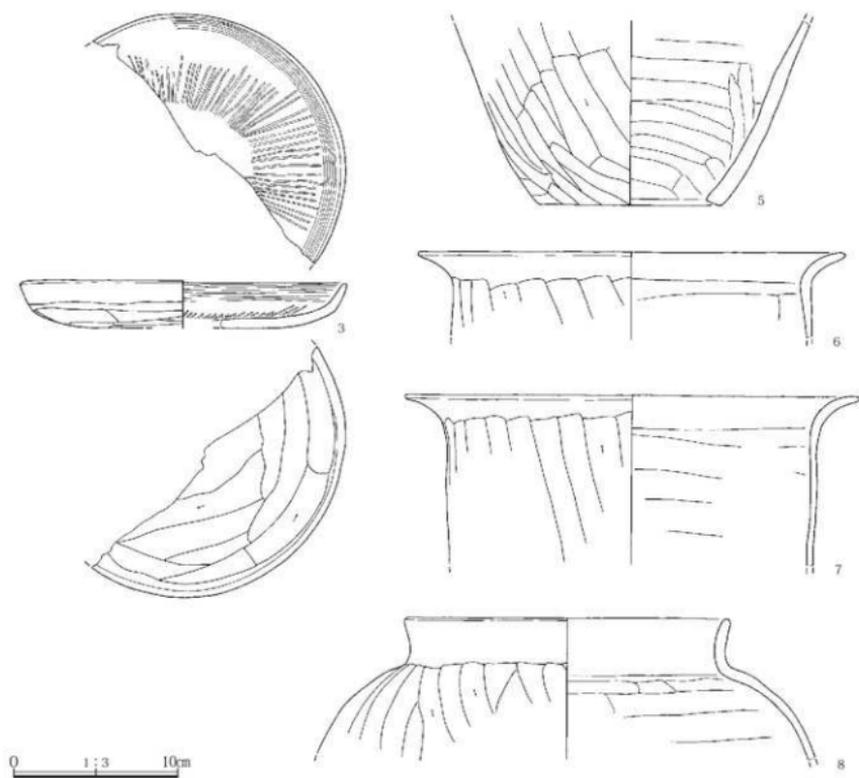
4区50号竪穴建物カマド

- 1 暗褐色土 褐色ローム薄層層土とローム粒を少量含む。
- 2 暗褐色土 褐色土を斑状に含み、ソフトローム土を少量、ローム粒と焼土粒を微量含む。
- 3 黒褐色土 ローム粒と焼土粒・粘土粒・炭化物を多量に含み、ローム小ブロックと粘土小ブロックを少量含む。
- 4 黒褐色土 ローム小ブロックと粘土小ブロックを少量含み、焼土小ブロックを微量含む。
- 5 焼土化粘土。

0 1:30 1m



第114図 50号竪穴建物カマド平・断面図及び出土遺物(1)



第115図 50号竪穴建物出土遺物(2)

51号竪穴建物 第116図 PL.48

(旧4区51号竪穴建物)

位置：4区 634—315周辺

規模：3.34×(1.82)m、深度は11～20cmほどを計る。

面積：7.645㎡+α

形状：不明。南西側の大半をトレンチ調査にて失う。

主軸方位：N-72°-E

埋没土：暗褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。

床面：掘削底面の地山土を踏み固めて、床面とする。

カマド：北東壁の中央北寄りに位置する。上面の削平を受け、遺存状態は悪く袖等は残らない。燃焼部は、ほぼ壁のライン上に位置するが、煙道部への立ち上がりは不明。

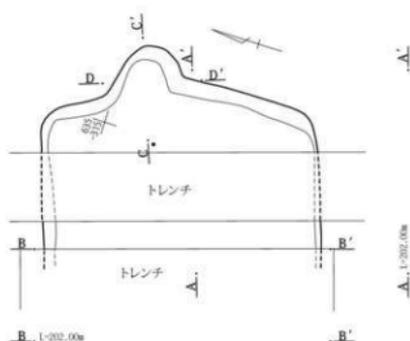
貯蔵穴・壁周溝・掘り方：調査範囲内においては検出されていない。

重複：なし。

遺物：本建物からは土師器、須恵器が出土している。図示できた土器は、土師器甕、須恵器椀の2点だけである。この2点はともに埋没土からの出土である。

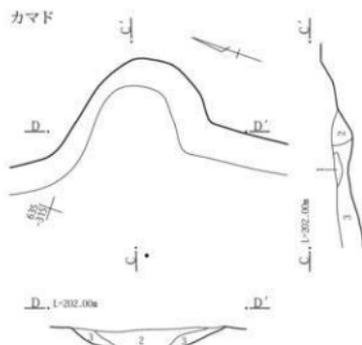
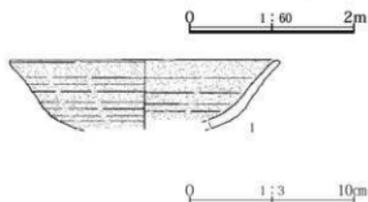
所見：本建物は、調査区4区の北西端に位置し、竪穴建物の密集地からはやや離れる。本建物は、本建物の時期については、出土した土器が埋没土からの出土で、本竪穴建物に共存するか判断としないが、ともに9世紀後半の年代観が与えられることから、本竪穴建物の時期もこの時期に比定したい。

第2章 検出された遺構と遺物



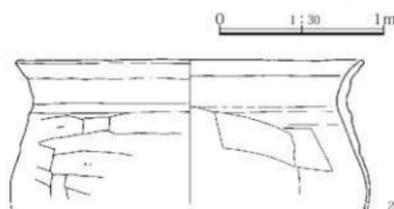
4区51号竪穴建物

1 暗褐色土 褐色ローム層移層土を斑状に含み、白色軽石を少量含む。



4区51号竪穴建物カマド

- 1 焼土化砂岩片
- 2 にぶい黄褐色土 ローム土を主体とし、焼土粒子を少量含む。
- 3 黒褐色土 褐色土小ブロックとローム粒・焼土粒を少量含む。



第116図 51号竪穴建物平・断面図及び出土遺物

52号竪穴建物 第117図 PL.30・32

(旧4区52号竪穴建物)

位置：4区 588—277周辺

規模：2.89×0.95m、深度は2～27cmほどを計る。

面積：3.560㎡+α

形状：不明。南東側の大半を重複遺構にて失う。

主軸方位：N—40°—E

埋没土：暗褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。

床面：掘削底面の地山土を踏み固めて、床面とする。

カマド(炉)・貯蔵穴：調査範囲内においては検出されていない。

壁周溝：北西壁の北側の壁際に溝が検出される。

掘り方：なし。

重複：南東部にて31号竪穴建物と重複し、検出時の埋土の様相より、本建物の方が古いものと判断される。また、南端部にて54号竪穴建物と重複するが、接点が僅かであ

るため新旧は明らかではない。

所見：本建物は、調査区4区のほぼ中央に位置する。緩傾斜地の平坦面という好地形であるため、周囲には他の時期の竪穴建物も密集する。本建物の時期については、出土遺物に乏しく、不明である。

54号竪穴建物 第118図 PL.30・32・35

(旧4区54号竪穴建物)

位置：4区 585—277周辺

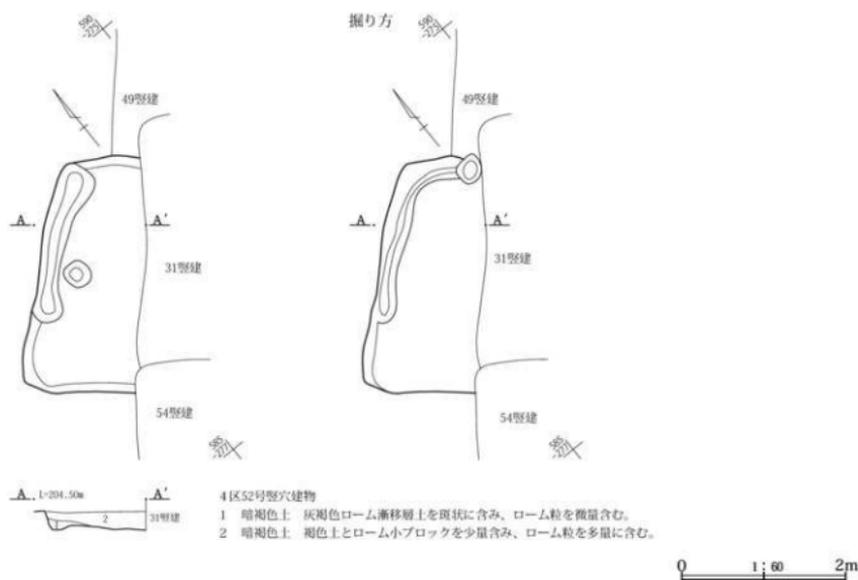
規模：(2.60)×2.20m、深度は0cmほどを計る。

面積：3.519㎡+α

形状：不明。南東側の大半と、北東壁の上面を重複遺構にて失う。

主軸方位：N—51°—W

埋没土：埋土のほとんどを逸しているため、自然埋没か否かは不明。



第117図 52号竪穴建物平・断面図

床面: 掘削底面の地山土を踏み固めて、床面とする。

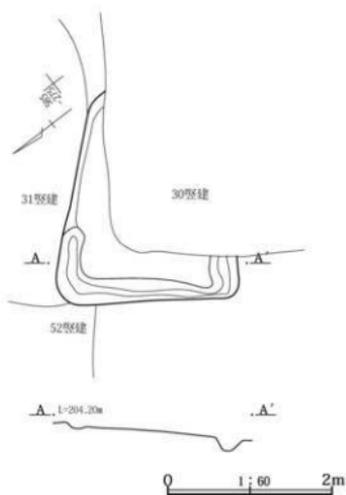
カマド・柱穴・貯蔵穴: 調査範囲内においては検出されていない。

壁周溝: 北西壁の壁際から、北・西両コーナー部にかけて溝が検出される。

掘り方: なし。

重複: 北東部にて31号竪穴建物と、南東部にて30号竪穴建物とそれぞれ重複し、検出時の埋土の様相より、いずれの遺構よりも本建物の方が古いものと判断される。また、北西端部にて52号竪穴建物と重複するが、接点があるため、新旧は明らかではない。

所見: 本建物は、調査区4区のほぼ中央に位置する。緩傾斜地の平坦面という好地形であるため、周囲には他の時代の竪穴建物も密集する。本建物は、短辺が2.2mほどの小型の建物で在る。本建物の時期については、出土遺物が乏しく、不明である。



第118図 54号竪穴建物平・断面図

55号竪穴建物 第119図 PL.43・138

(旧4区55号竪穴建物)

位置：4区 582-297周辺

規模：(2.42)×(0.98)m、深度は38～45cmほどを計る。

面積：1.561+α㎡

形状：南西側の大半が調査区域外に在るため、全容は不明。

主軸方位：N-49°-W

埋没土：暗褐色砂質土による自然埋没と推察される。

床面：掘削底面の地山土を踏み固めて、床面とする。

カマド・柱穴・貯蔵穴：調査範囲内においては検出されていない。

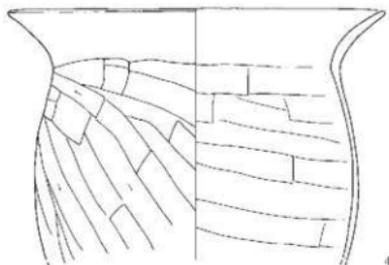
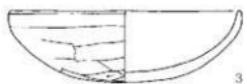
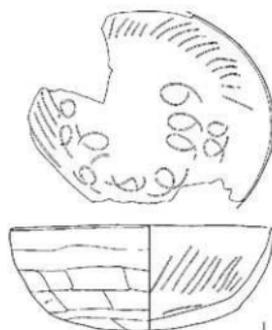
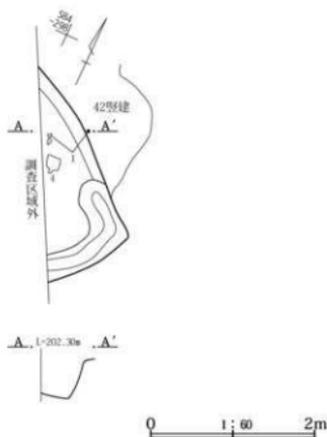
壁周溝：東コーナー部に溝が検出される。

掘り方：なし。

重複：北部にて42号竪穴建物と重複し、検出時の理土の様相より本建物の方が古いものと判断される。

遺物：本建物からは土師器、須恵器などが出土している。図示した土器には、土師器杯・甕がある。このうち、No.1の土師器杯が床面からの出土であるが、この土師器杯は壁外や42号カマドから出土した破片と接合している。

所見：本建物は、調査区4区のほぼ中央の南西端に位置する。緩傾斜地の平坦面という好地形であるため、周囲には他の時期の竪穴建物も密集する。本建物の時期については、床面から出土した土師器杯や埋没土からの出土ではあるが、No.1の土師器と同様の年代観が与えられる土師器杯や甕から、7世紀末～8世紀初頭に比定できる。



第119図 55号竪穴建物平・断面図及び出土遺物

〔竪穴状遺構〕 調査区3区内より、2基の竪穴状遺構が検出された。調査時には1号から5号の番号が付されたが、1～3号は土坑等の他の遺構と認定され、欠番となる。以下に個々の遺構についての詳細を記す。

4号竪穴状遺構 第120図 PL.49

(旧3区4号竪穴状遺構)

位置：3区 689—316周辺

規模：1.98×(1.03)m、深度は18cmほどを計る。

面積：1.76+ α ㎡

形状：南東部の壁やコーナーの形状から、隅丸方形ないし隅丸長方形を呈すると思われるが、北西側の大半を上面の削平により失うためため、全容は不明。

主軸方位：N—42°—E

埋没土：暗褐色砂質土による自然埋没と推察される。

床面等：壁は緩やかに立ち上がり、底面は凹凸を有し、

床面とはなり得ない。

掘り方：なし。

重複：なし。

所見：本建物は、調査区3区の北端部に位置する。北西に向けての傾斜地にあるため、周囲には竪穴建物等はない。壁の立ち上がりや床面(底面)の様相は竪穴建物に類するものではなく、時期・用途は定かではない。

5号竪穴状遺構 第120図 PL.49

(旧3区5号竪穴状遺構)

位置：3区 687—318周辺

規模：(3.90)×(1.50)m、深度は20cmほどを計る。

面積：4.85+ α ㎡

形状：南東部の壁やコーナーの形状から、隅丸方形ないし隅丸長方形を呈すると思われるが、北西側の大半を上面の削平により失うためため、全容は不明。

主軸方位：N—52°—E

埋没土：黒褐色砂質土による自然埋没と推察される。

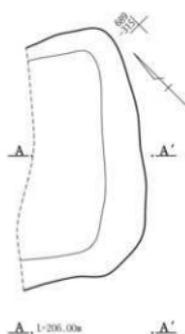
床面等：壁は急峻に立ち上がり、床面の硬化は見られないものの、掘り方埋土上に平坦な面を有する。

掘り方：検出部の全域を10cmほど掘り窪める。

重複：なし。

所見：本建物は、調査区3区の北端部に位置する。北西に向けての傾斜地にあるため、周囲には竪穴建物等はない。壁の立ち上がりや床面(底面)の様相は竪穴建物に近似するため、造築途中の竪穴建物の可能性もある。

4号竪穴状遺構



3区4号竪穴状遺構

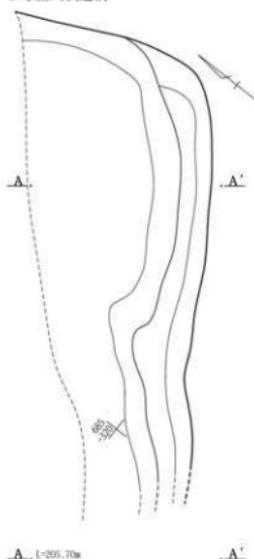
1 暗褐色土：ローム粒と焼土粒を少量含む。

3区5号竪穴状遺構

- 1 暗褐色土：ローム粒と焼土粒を少量含む。
- 2 黒褐色土：ロームブロックを少量含む。
- 3 暗褐色土：にぶい黄褐色土ブロックを多量に含む。

0 1:40 1m

5号竪穴状遺構



A-A' 1:200.70m

第120図 4号竪穴状遺構・5号竪穴状遺構平・断面図

第2項 掘立柱建物・柵列

調査区1区の中央部、3区中央部、4区中央部より、都合6棟の掘立柱建物が検出される。また、1区では掘立柱建物群に隣接して柵列が1条検出される。認定された建物の他にも、周辺には柱穴と考えられるピットが存在し、何らかの構造物となる可能性がある。集落内の建物構成については、他の遺構も含めて別途分析を行うとして、以下に個々の掘立柱建物についての詳細を記す。

1号掘立柱建物 第121・122図 PL.50

(旧4区1号掘立柱建物、P74~77・91~95・103~105・32号土坑)

位置：4区 592-285周辺

規模：2間×3間。

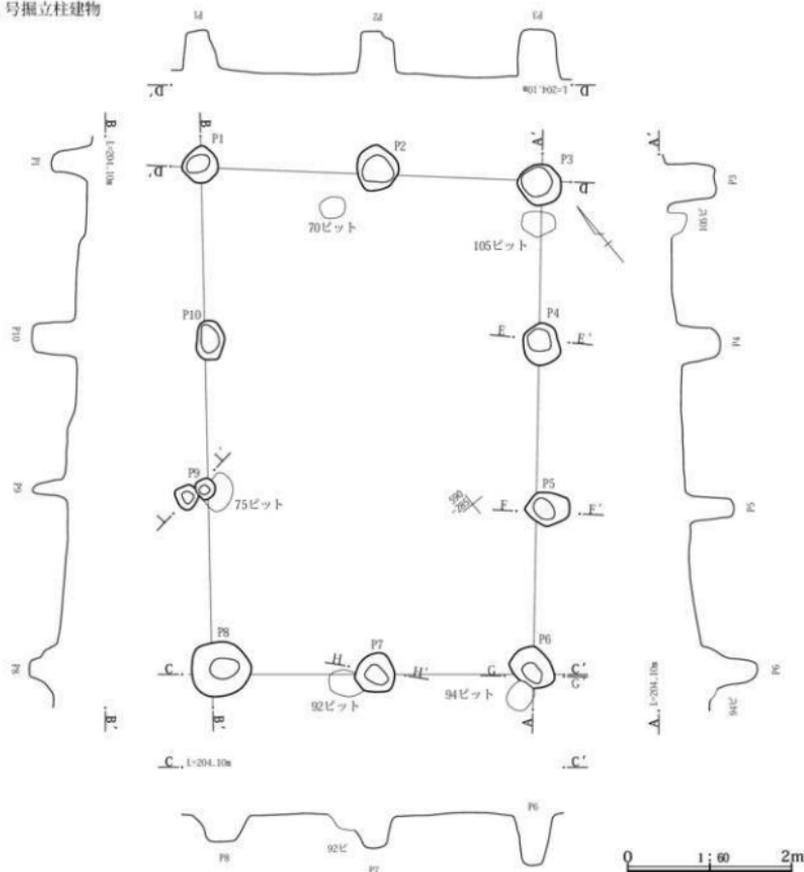
柱間は185~210cmを計る。

面積：24.84㎡

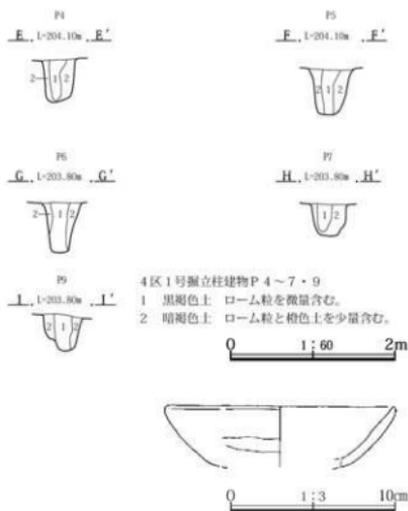
長軸方位：N-40°-E

柱穴：径23~72cm、深度33~62cmほどを計る。暗褐~黒

4区1号掘立柱建物



第121図 1号掘立柱建物平・断面図



第122図 1号掘立柱建物断面図及び出土遺物

褐色砂質土により埋没。一部に柱痕が残る。

重複： 37号竪穴建物と重複(P9・P10)し、検出時の埋土の様相より本建物の方が新しいものと判断される。

遺物： なし。

所見： 本建物は、調査区4区のほぼ中央に位置する。緩傾斜地の平坦面という好地形であるため、周囲には竪穴建物も密集し、カマドを有する建物とほぼ軸を同じくする。本建物の時期については、主軸方位を同じくする竪穴建物の関係から、8世紀代の建物と推定される。

第2表 4区1号掘立柱建物計測表

位置	X=30587 ~ 30596 Y=-88281 ~ 88289			
建物全体規模	長軸: 6.75 (m) × 短軸: 4.62 (m)			
柱穴No.	3間×2間			主軸方位
	主軸方位			N-40°-E
No.	柱穴規模(cm)			形状
	長径	短径	深さ	
P 1	46	45	47	楕円形 ~ P2=216
P 2	55	51	50	楕円形 ~ P3=197
P 3	54	52	60	楕円形 ~ P4=195
P 4	50	44	52	楕円形 ~ P5=200
P 5	55	47	55	楕円形 ~ P6=196
P 6	56	44	61	楕円形 ~ P7=192
P 7	49	48	38	楕円形 ~ P8=187
P 8	72	67	35	楕円形 ~ P9=223
P 9	49	29	40	不整形 ~ P10=181
P 10	48	33	54	楕円形 ~ P1=215

2号掘立柱建物 第123図 PL.51

(旧1区P48~53)

位置： 1区 589-332周辺

規模： 1間×2間。

柱間は150~210cmを計る。

面積： 6.98㎡

長軸方位： N-46°-E

柱穴： 径32~60cm、深度30~47cmほどを計る。黒色~黒褐色砂質土により埋没。

重複： なし。

遺物： なし。

所見： 本建物は、調査区1区のほぼ南端に位置する。埋没谷上であり、周囲には掘立柱建物やピットが密集し、ほぼ軸を同じくする。重複はないものの、10号竪穴建物に近接する。

本建物の時期については、その立地と主軸方位を同じくする周辺遺構との関係から、10世紀代の建物と推定される。

第3表 1区2号掘立柱建物計測表

位置	X=30687 ~ 30691 Y=-88330 ~ 88334			
建物全体規模	長軸: 3.65 (m) × 短軸: 2.55 (m)			
柱穴No.	2間×1間			主軸方位
	主軸方位			N-46°-E
No.	柱穴規模(cm)			形状
	長径	短径	深さ	
P 1	40	36	42	楕円形 ~ P2=210
P 2	42	35	45	楕円形 ~ P3=153
P 3	47	36	51	楕円形 ~ P4=160
P 4	58	37	45	楕円形 ~ P5=212
P 5	42	40	35	楕円形 ~ P6=169
P 6	35	33	29	楕円形 ~ P1=158

3号掘立柱建物 第124図 PL.50・51

(旧1区P31~35、P37・38)

位置： 1区 709-339周辺

規模： 2間×2間。

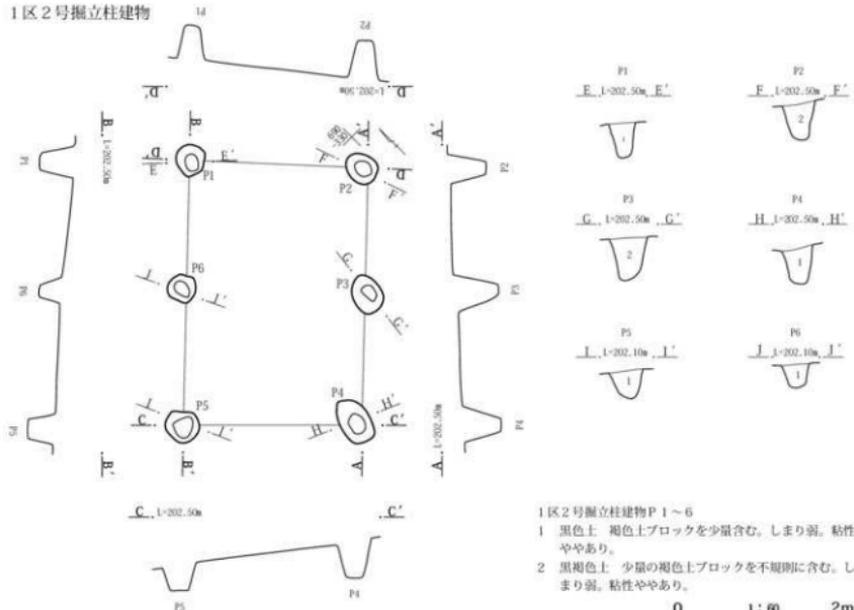
柱間は150~290cmを計る。

面積： 8.86㎡

長軸方位： N-43°-W

柱穴： 径30~65cm、深度27~60cmほどを計る。黒色~黒褐色砂質土により埋没。南東辺のみ間柱を欠く。

1区2号掘立柱建物



1区2号掘立柱建物P1～6

- 1 黒色土 褐色土ブロックを少量含む。しまり弱。粘性ややあり。
- 2 黒褐色土 少量の褐色土ブロックを不規則に含む。しまり弱。粘性ややあり。

0 1:60 2m

第123図 2号掘立柱建物平・断面図

重複：なし。

遺物：なし。

所見：本建物は、調査区1区の中央北西寄りに位置する。周囲には掘立柱建物やピットが密集し、ほぼ軸を同じくする。本建物の時期については、その立地と主軸方位を同じくする周辺遺構との関係から、10世紀代の建物と推定される。

第4表 1区3号掘立柱建物計測表

位置	X=30707 ~ 30711 Y=-88336 ~ 88340			
建物全長	3.48 (m) × 短軸: 3.28 (m)			
体規模	2間×2間		主軸方位 N-43°-W	
柱穴No	柱穴規模(cm)		形状	柱間寸法(cm)
	長さ	幅		
P1	49	37	楕円形	~ P2=145
P2	48	41	楕円形	~ P3=140
P3	63	51	楕円形	~ P4=147
P4	45	40	楕円形	~ P5=148
P5	37	32	楕円形	~ P6=289
P6	42	31	楕円形	~ P7=142
P7	38	32	楕円形	~ P1=163

4号掘立柱建物 第124図 PL.51

(旧1区P41~45)

位置：1区 703-333周辺

規模：1間×2間？

柱間は150~270cmを計る。

面積：8.28㎡

長軸方位：N-41°-W

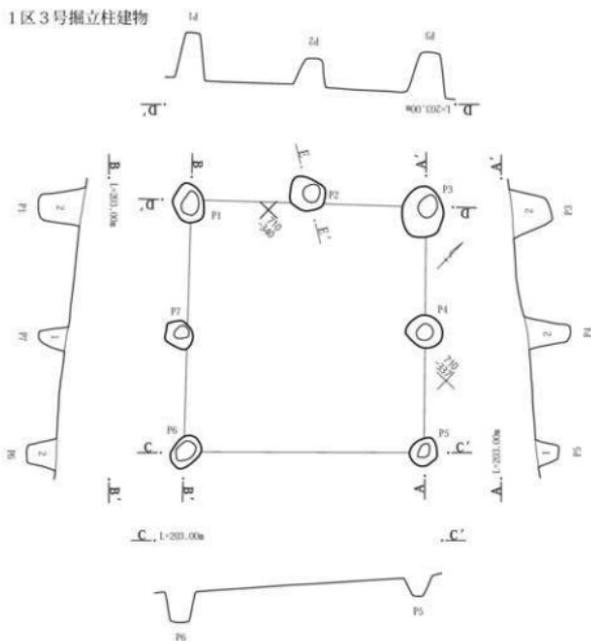
柱穴：径35~48cm、深度25~32cmほどを計る。黒色～黒褐色砂質土により埋没。

重複：なし。

遺物：なし。

所見：本建物は、調査区1区のほぼ中央に位置する。埋没谷上にあり、周囲には掘立柱建物やピットが密集し、ほぼ軸を同じくする。本建物の時期については、その立地と主軸方位を同じくする周辺遺構との関係から、10世紀代の建物と推定される。

1区3号掘立柱建物

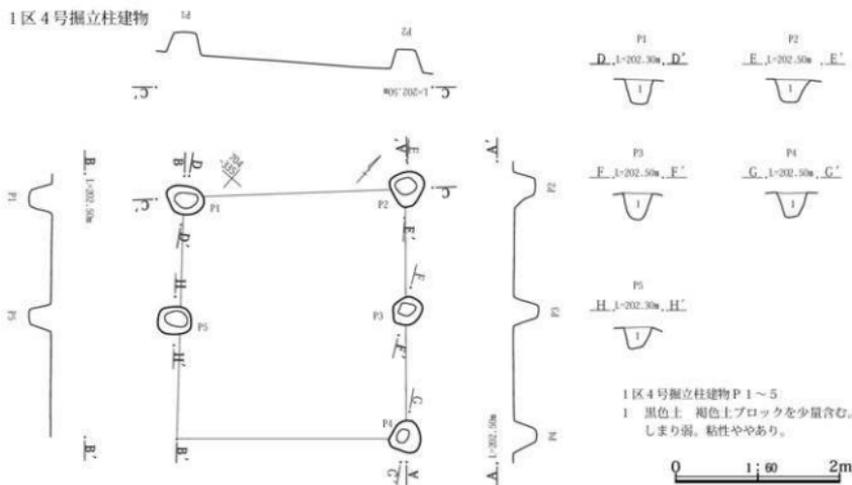


1区3号掘立柱建物P1~7

- 1 黒色土 褐色土ブロックを少量含む。しまり弱。粘性ややあり。
- 2 黒褐色土 少量の褐色土ブロックを不規則に含む。しまり弱。粘性ややあり。

0 1:60 2m

1区4号掘立柱建物



1区4号掘立柱建物P1~5

- 1 黒色土 褐色土ブロックを少量含む。しまり弱。粘性ややあり。

0 1:60 2m

第124図 3号掘立柱建物・4号掘立柱建物平・断面図

第2章 検出された遺構と遺物

第5表 1区4号掘立柱建物計測表

位置	X=30701 ~ 30705 Y=-88331 ~ 88335				
建物全長	長軸: 3.43 (m) × 短軸: 3.13 (m)				
体規模	2間 × 1間		主軸方位 N-41°-E		
柱穴No	柱穴規模(cm)			形状	柱間寸法(cm)
	長径	短径	深さ		
P1	47	36	28	楕円形	~ P2=270
P2	43	42	28	楕円形	~ P3=149
P3	39	33	32	楕円形	~ P4=153
P4	38	37	29	楕丸長方形	-
P5	41	34	26	楕円形	~ P1=147

柱穴: 径30~45cm、深度30~45cmほどを計る。黒色砂質土により埋没する。

重複: なし。

遺物: なし。

所見: 本建物は、調査区1区の中央の北東よりに位置する。周囲には4号・2号掘立柱建物が存在し、ほぼ軸を同じくする。本建物の時期については、その立地と主軸方位を同じくする周辺遺構との関係から、10世紀代の建物と推定される。

5号掘立柱建物 第125図 PL.51

(旧1区P25・27、1号櫛列P26・27)

位置: 1区 705-325周辺

規模: 1間 × 1間

柱間は170~250cmを計る。

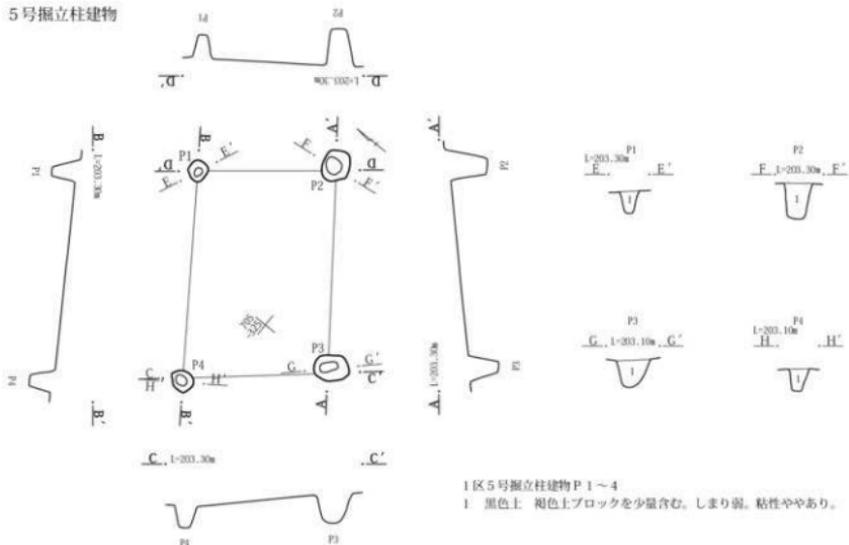
面積: 4.36㎡

長軸方位: N-55°-E

第6表 1区5号掘立柱建物計測表

位置	X=30703 ~ 30706 Y=-88322 ~ 88326				
建物全長	長軸: 2.85 (m) × 短軸: 2.15 (m)				
体規模	1間 × 1間		主軸方位 N-55°-E		
柱穴No	柱穴規模(cm)			形状	柱間寸法(cm)
	長径	短径	深さ		
P1	27	25	27	楕円形	~ P2=167
P2	42	35	45	楕円形	~ P3=249
P3	44	33	33	楕円形	~ P4=182
P4	29	25	23	楕円形	~ P1=258

5号掘立柱建物



1区5号掘立柱建物 P1~4

1 黒色土 褐色土ブロックを少量含む。しまり弱。粘性ややあり。

0 1:60 2m

第125図 5号掘立柱建物平・断面図

6号掘立柱建物 第126図

(旧1区P27~30、P32・33・36・38)

位置：3区 665-310周辺

規模：2間×3間。

柱間は130~290cmを計る。

面積：17.88㎡

長軸方位：N-59°-E

柱穴：径30~45cm、深度18~55cmほどを計る。黒色砂質土により埋没する。

重複：なし。

遺物：なし。

所見：本建物は、調査区3区の中央に位置する。近接には19・20号竪穴建物が存在し、ほぼ軸を同じくする。本建物の時期については、その立地と主軸方位を同じくする周辺遺構との関係から、10世紀代の建物と推定される。

1号柵列 第127図

(旧1区1号柵列)

位置：1区 336-688周辺

規模：5間 延長12.8m

柱間は250cmほどを計る。

軸方位：N-38°-E

柱穴：径20~30cm、深度20~35cmほどを計る。黒色砂質土により埋没。

重複：なし。

遺物：なし。

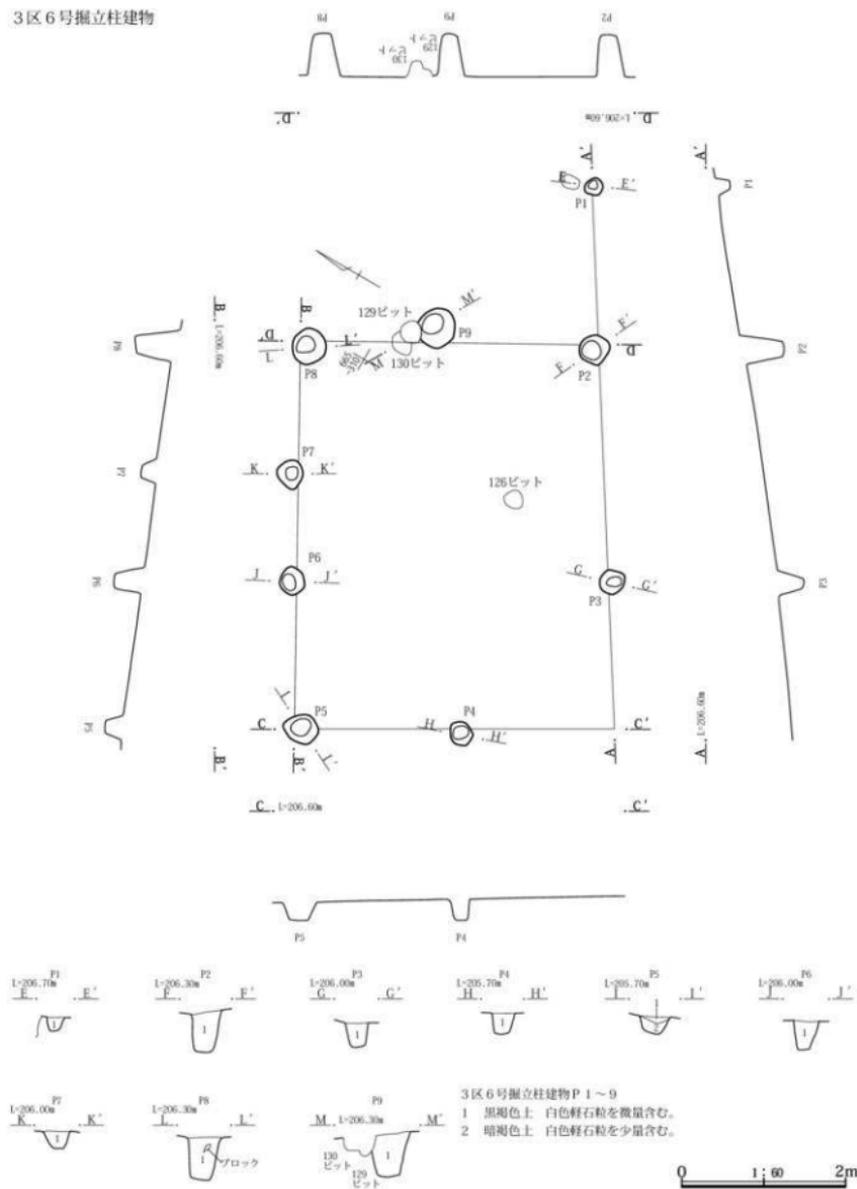
所見：本柵列は、調査区1区の南側に位置する。柱間2.5m間隔の間にも軸線上に同規模のピットが存在する。周囲には2号・4号・5号掘立柱建物が並ぶが、主軸はやや異なる。

本遺構の時期については、その立地と主軸方位を同じくする竪穴建物の関係から、10世紀代の建物と推定される。

第7表 1区6号掘立柱建物計測表

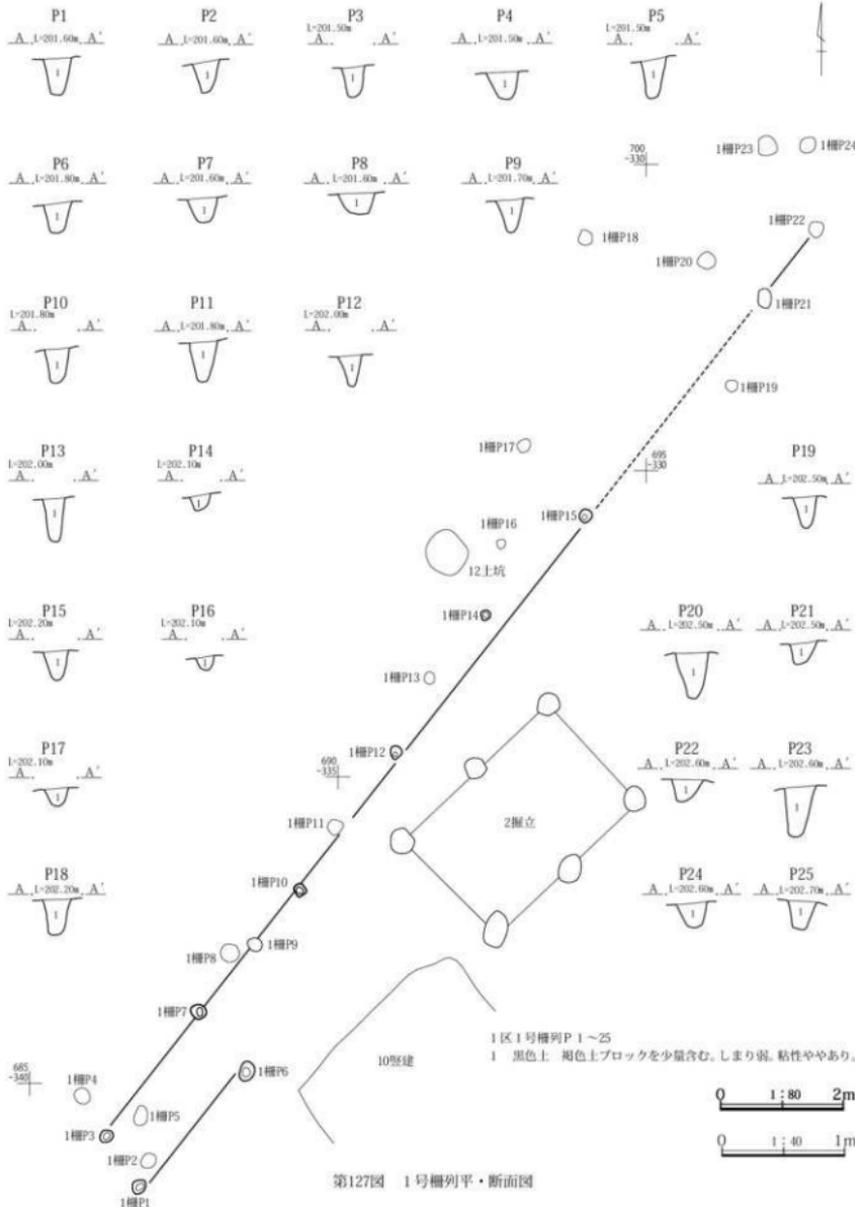
位置	X=30660 ~ 30665 Y=-88306 ~ 88314					
建物全体規模	長軸：5.10 (m) × 短軸：3.85 (m)				主軸方位	N-59°-E
柱穴No.	柱穴規模(cm)			形状	柱間寸法(cm)	
	長さ	短径	深さ			
P1	23	22	16	楕円形	~ P2=200	
P2	38	36	50	楕円形	~ P3=286	
P3	33	31	30	楕円形	—	
P4	31	27	25	楕円形	~ P5=194	
P5	45	36	22	楕円形	~ P6=180	
P6	35	30	35	楕円形	~ P7=133	
P7	34	31	21	楕円形	~ P8=155	
P8	45	42	51	ほぼ円形	~ P9=154	
P9	49	47	52	ほぼ円形	~ P1=193	

3区6号掘立柱建物



第126図 6号掘立柱建物平・断面図

1区1号欄列



第127図 1号欄列平・断面図

第3項 礎石・集石・焼土

[礎石]調査区4区の中央東端部より、礎石2基(2石)が検出される。2基の礎石は対となり、構造物の基礎となると思われるが、間隔(柱間)はやや狭く、周囲から他の礎石は検出されていない。以下に遺構の詳細を記す。

1号礎石 第128図 PL.52

(旧4区1号礎石)

位置：4区 614-272周辺

規模：1間

柱間は110~115cmを計る。

軸方位：N-30°-W

柱穴：径40~62cm、深度10~25cmほどを計る。柱穴の断面形状は、据えられた礎石の底面形状に沿う。2基の礎石上端は、ほぼ水平であることから、原位置を保っているものと推察される。礎石上面は、一部加工が加えられ、径30cmほどの水平面を造り出す。

また、2基の南側より、遺構に伴わないが、平坦面を有する小型の礎の出土が見られる。

重複：なし。

遺物：なし。

所見：本建物は、調査区4区の中央東端に位置する。2基の礎石の柱間は110cmほどと短く、他に相対する礎石が残存していないため、建物の想定は難しい。時期についても推定が難しいが、35~50cmほどの大型の礎石であることから、1区の埋没谷包含層出土の瓦類に伴う建物・構造物に伴う礎石である可能性もある。

[集石]調査区1・2区より4基、4区の東端~東南部より5基の大小の礫を集めた遺構が検出される。遺構の用途・性格は個々に異なり、不要礫の廃棄から、カマド構築材の廃棄や構造物の基礎(地業)と考えられる人為的な遺構も含まれる。

以下に検出された遺構の詳細を記す。

1号集石 第129図 PL.53

(旧1・2区1号集石)

位置：1・2区 716-330周辺

規模：140cm×60cmほどを計る。

遺構：20cmほどの高低差を有し、小型の礫の出土が見られる。出土礫には被熱により赤色に変色した焼礫も含まれるが、焼土・炭化物・粘土等は含まれない。

重複：なし。

遺物：なし。

所見：本建物は、調査区1・2区の中央部東寄りに位置する。出土する礫の中には、被熱により変色した焼礫が含まれることから、竪穴建物の廃絶に伴うカマド構築材の廃棄と考えられる。遺構の時期については、周辺の状況から他の集石や礎石と同時期の8世紀前半から9世紀後半と推定される。

2号集石 第129図 PL.53

(旧1・2区2号集石)

位置：1・2区 715-325周辺

規模：110cm×60cmほどを計る。

遺構：少量の小型礫の散乱が見られる。出土する礫には焼礫も含まれるが、焼土・炭化物・粘土等は含まれない。

重複：なし。

遺物：なし。

所見：本建物は、調査区1・2区の中央部東寄りに位置する。出土する礫の中には、被熱により変色した焼礫が含まれることから、竪穴建物の廃絶に伴うカマド構築材の廃棄と考えられる。遺構の時期については、周辺の状況から他の集石や礎石と同時期の8世紀前半から9世紀後半と推定される。

3号集石 第129図 PL.53・138

(旧1・2区3号集石)

位置：1・2区 709-323周辺

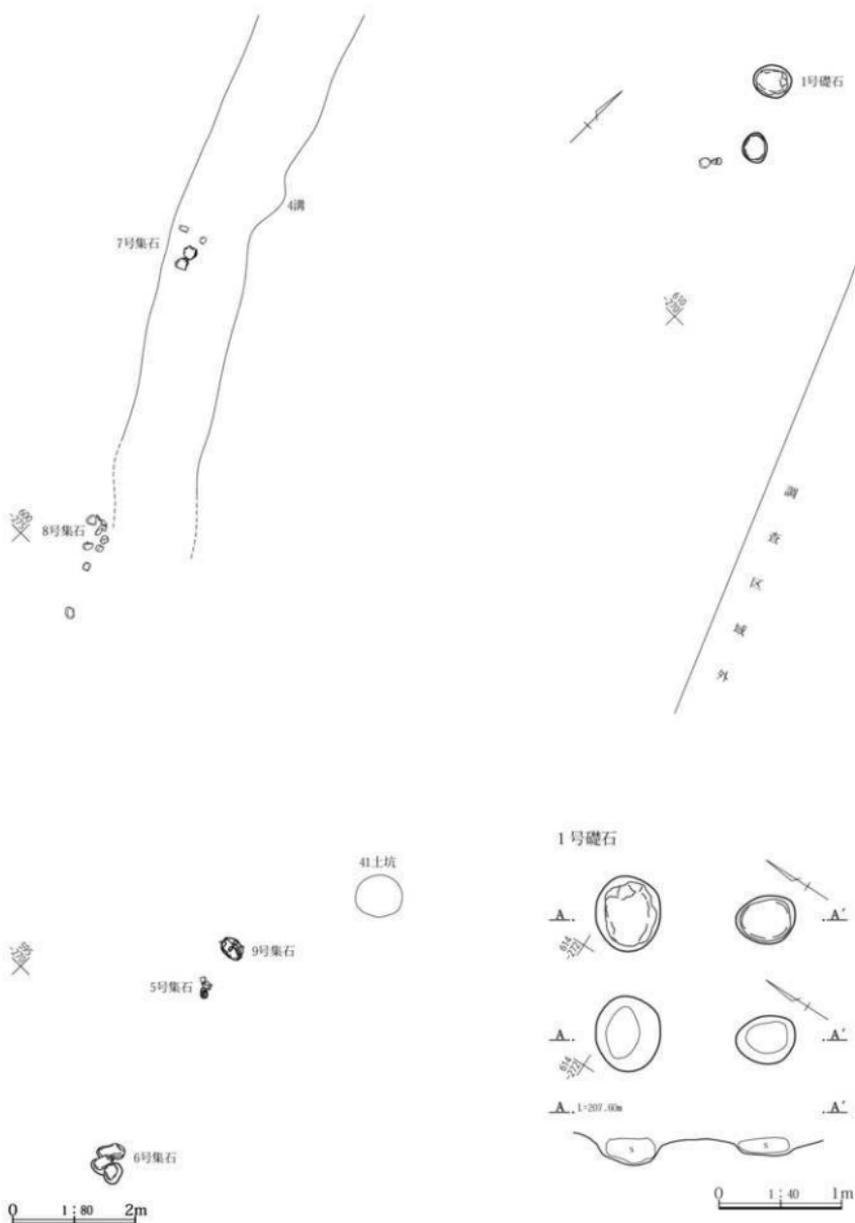
規模：140cm×60cmほどを計る。

遺構：平坦面に小型の礫が密集して出土する。出土礫には被熱により赤色に変色した焼礫も含まれ、周辺土には多量の焼土・炭化物・粘土が含まれる。

重複：なし。

遺物：出土遺物として、須恵器長頸壺がある。

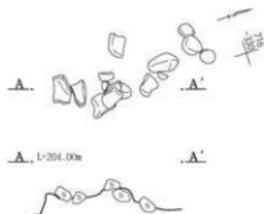
所見：本建物は、調査区1・2区の中央部東寄りに位置する。被熱により変色した焼礫や多量の焼土・炭化物・粘土が出土することから、竪穴建物の廃絶に伴うカマド構築材の廃棄と考えられる。遺構の時期については、出



第128図 1号礎石平・断面図、5～9号集石位置図

第2章 検出された遺構と遺物

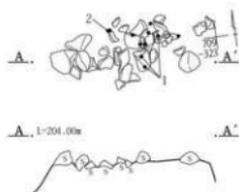
1号集石



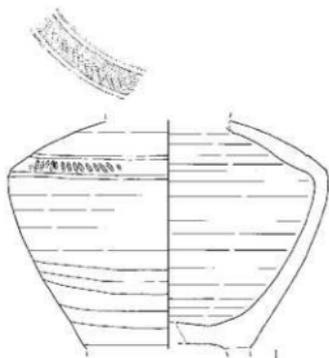
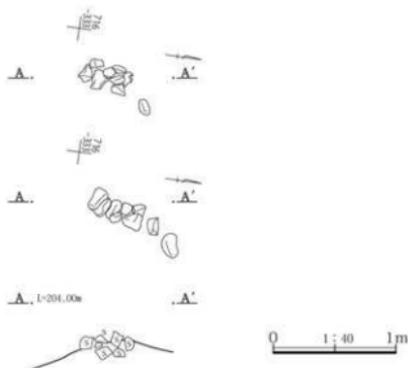
2号集石



3号集石



4号集石



土遺物より8世紀前半と推定される。

4号集石 第129図 PL.53

(旧1・2区4号集石)

位置：1・2区 716-333周辺

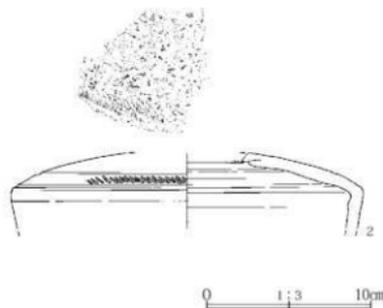
規模：100cm×30cmほどを計る。

遺構：平坦面に小型の礫が密集して出土する。出土礫には被熱により赤色に変色した焼礫も含まれ、周辺土には少量の焼土が含まれる。

重複：なし。

遺物：なし。

所見：本建物は、調査区1・2区の中央部東寄りに位置する。出土する礫の中には、被熱により変色した焼礫や焼土が含まれることから、竪穴建物の廃絶に伴うカマド構築材の廃棄と考えられる。遺構の時期については、周辺の状況から他の集石や礎石と同時期の8世紀前半から9世紀後半と推定される。



第129図 1～4号集石平・断面図及び3号集石出土遺物

5号集石 第128・130図

(旧4区5号集石)

位置：4区 597-268周辺

規模：35cm×20cmほどを計る。

遺構：平坦面に小型の礫が12点ほど出土する。出土礫は円礫で、平坦面を持つものはない。

重複：なし。

遺物：なし。

所見：本遺構は、調査区4区の東端中央付近に位置する。出土する礫には礎石となるような平坦面を持つ物はなく、構造物下の地葉か不要礫の廃棄と考えられる。遺構の時期については、周辺の状況から他の集石や礎石と同時期の8世紀前半から9世紀後半と推定される。

6号集石 第128・130図 PL.53

(旧4区6号集石)

位置：4区 594-267周辺

5号集石



A. 1:200.0m

6号集石



A. 1:200.60m

7号集石



A. 1:205.60m

9号集石



A. 1:206.00m

8号集石



A. 1:205.50m



7号集石



A. 1:205.60m



A. 1:205.60m

9号集石



A. 1:206.00m



A. 1:206.00m

第130図 5～9号集石平・断面図

0 1:40 1m

規模：65cm×70cmほどを計る。

遺構：5cmほど皿状に掘り窪めた所に、20cmほどの円礫2点が出土する。

重複：なし。

遺物：なし。

所見：本遺構は、調査区4区の東端中央付近に位置する。出土する礫には礎石となるような成形された平坦面を持つ物はなく、構造物下の地業か、不要礫の廃棄と考えられる。遺構の時期については、周辺の状況から他の集石や礎石と同時期の8世紀前半から9世紀後半と推定される。

8号集石 第128・130図

(旧4区8号集石)

位置：4区 600-274周辺

規模：50cm×180cmほどを計る。

遺構：平坦な所に、5～20cmほどの円礫10点が出土する。いくつかの礫は平坦面を上方にして配される。

重複：なし。

遺物：なし。

所見：本遺構は、調査区4区の東端中央付近に位置する。出土する礫には礎石となるような成形された平坦面を持つ物はなく、構造物下の地業か、不要礫の廃棄と考えられる。遺構の時期については、周辺の状況から他の集石や礎石と同時期の8世紀前半から9世紀後半と推定される。

9号集石 第128・130図

(旧4区4号集石)

位置：4区 598-268周辺

規模：30cm×40cmほどを計る。

遺構：深度30cmほどのビット内に、20×30cmを計る扁平な楕円礫を、平坦面を上方にして据え、周囲に5～15cmほどの小円礫を配する。

重複：なし。

遺物：なし。

所見：本遺構は、調査区4区の東端中央付近に位置する。1号礎石より劣るものの、構造物下の礎石か地業の可能性が考えられる。遺構の時期については、周辺の状況から他の集石や礎石と同時期の8世紀前半から9世紀後半

と推定される。

[焼土] 遺構確認面において、多量の焼土と少量の灰・炭化物・粘土ブロックなどの散乱が4地点で検出され、1～4号焼土として調査された。いずれも焼土を取り除いた土坑状の窪みは不定形で底面の焼土化も見られないことから、当所における焼き火等の痕跡ではなく、竪穴建物のカマドの修復や廃絶にともなう構築材の廃棄と推察され、その時期もカマドを有する竪穴建物と同時期と推定される。

1・2号焼土 第131図 PL.54

(旧1・2区1号焼土・2号焼土)

位置：1・2区 706-317周辺

規模：70cm×60cm〔1号焼土〕

120cm×80cm〔2号焼土〕

遺構：1号焼土と2号焼土が隣接する。共に多量の焼土と少量の灰・炭化物・粘土小ブロックが散逸する。

重複：2基の焼土は16号土坑と重複し、埋土の様相から本焼土の方が新しいと判断される。

遺物：埋土中よりNo.1須恵器椀・No.2土師器甕が出土する。

所見：本遺構の時期については、出土遺物より9世紀後半と推定される。

3号焼土 第131・132図 PL.54・138

(旧1・2区3号焼土)

位置：1・2区 714-321周辺

規模：140cm×140cmほどを計る不定形。

遺構：深度10～15cmほどの皿状の窪み内に、多量の焼土と少量の灰・炭化物・粘土小ブロックが散逸する。

重複：なし。

遺物：埋土中より須恵器椀・杯・皿と鉄製品が出土する。

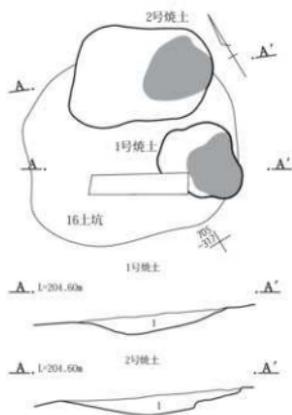
所見：本遺構の時期については、出土遺物より9世紀後半から10世紀前半と推定される。

4号焼土 第133図 PL.54・138

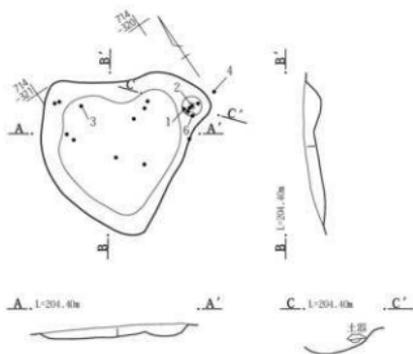
(旧1・2区4号焼土)

位置：1・2区 692-338周辺

1・2号焼土



3号焼土

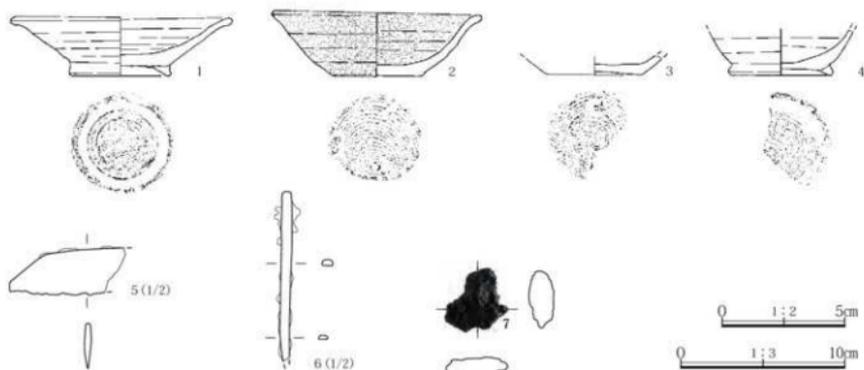


2区1～3号焼土

1 褐灰色土 焼土を多量に含み、灰と炭化物・粘土小ブロックを少量含む。



第131図 1・2号焼土平・断面図及び出土遺物、3号焼土平・断面図



第132図 3号焼土出土遺物

規模：190cm×120cmほどを計る不定形。

遺構：深度10～18cmほどの皿状の窪み内に、多量の焼土と少量の灰・炭化物・粘土小ブロックが散逸する。

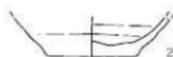
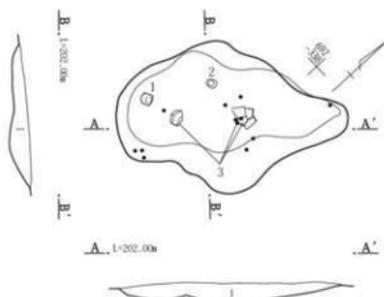
重複：なし。

遺物：埋土中より須恵器椀・杯・羽釜が出土する。

所見：本遺構の時期については、出土遺物より10世紀前半と推定される。

第2章 検出された遺構と遺物

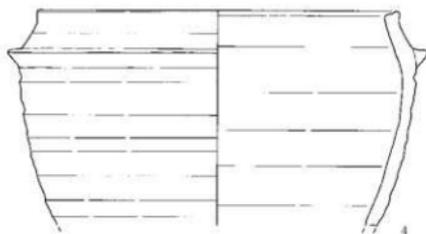
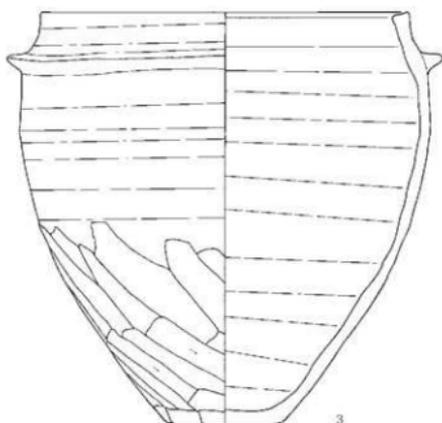
4号焼土



1区4号焼土

1 褐色土 焼土を多量に含み、灰と炭化物・粘土小ブ
ロックを少量含む。

0 1:40 1m



0 1:3 10cm

第133図 4号焼土平・断面図及び出土遺物

第4項 ピット・土坑・溝・畑

[ピット・土坑] 1～4区の竪穴建物周辺にピットが多く検出される。形状・深度から建物などの支柱と思われるものも含まれるが、相対するピットが検出されず建物として認識されなかった遺構もある。

下図の一覧表に、遺構の詳細を記す。

第8表 ピット計測表

名称	区	写真番号	位置(X-Y)	平面形状	断面形状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	重複遺構	備考
1号ピット	1・2		712-350	楕丸長方形	不明	83	59	48		
2号ピット	1・2	PL.55	712-349	楕円形	U字状	52	47	39		
3号ピット	1・2		712-347	楕円形	不明	92	69	25		
4号ピット	1・2	PL.139	713-349	楕丸長方形	逆台形状	75	63	30		9世紀前半
5号ピット	1・2	PL.55	741-364	楕円形	U字状	33	30	30		
6号ピット	1・2		721-326	(不整形)	V字状	(28)	28	24	7ピット	
7号ピット	1・2		712-326	不整形	V字状	37	34	21	6ピット	
8号ピット	1・2		713-325	楕円形	V字状	36	28	26		
9号ピット	1・2		714-322	楕丸方形	逆台形状	41	40	33		
10号ピット	1・2		709-324	楕円形	V字状	38	32	33		
11号ピット	1・2		709-323	楕円形	V字状	33	29	50		
12号ピット	1・2	PL.55	711-319	楕円形	V字状	28	26	37		
13号ピット	1・2	PL.55	710-318	楕円形	V字状	40	32	37		
14号ピット	1・2	PL.55	709-318	楕円形	V字状	38	35	33		
15号ピット	1・2	PL.55	707-319	楕円形	V字状	30	29	29		
16号ピット	1・2	PL.55	709-317	楕円形	V字状	37	33	48		
17号ピット	1・2	PL.55	708-318	楕円形	V字状	34	28	17		
18号ピット	1・2	PL.55	708-318	楕円形	V字状	32	27	33		
19号ピット	1・2	PL.55	708-318	楕円形	U字状	35	32	32		
20号ピット	1・2	PL.55	707-318	楕円形	V字状	30	27	34		
21号ピット	1・2	PL.55	707-319	楕円形	U字状	30	23	27		
22号ピット	1・2	PL.55	708-319	正方形	U字状	31	27	22		
23号ピット	1・2	PL.55	709-319	不整形	U字状	43	41	45		
24号ピット	1・2	PL.55	710-319	不整形	V字状	38	36	38		
26号ピット	1・2	PL.55	703-323	不整形	U字状	35	32	29		
28号ピット	1・2	PL.55	713-326	不整形	V字状	35	29	31		
29号ピット	1・2	PL.55	722-328	楕円形	V字状	42	33	47		
30号ピット	1・2	PL.55	716-325	不整形	U字状	39	35	23		
36号ピット	1・2		705-339	楕円形	U字状	45	40	36		
39号ピット	1・2		711-335	楕円形	V字状	37	32	18		
40号ピット	1・2		710-334	正方形	U字状	24	20	31		
46号ピット	1・2		720-328	楕円形	U字状	37	31	46		
47号ピット	1・2		719-327	楕円形	逆台形状	40	32	17		
54号ピット	3		675-317	不整形	V字状	39	30	32		
55号ピット	3		674-318	不整形	逆台形状	30	27	16		
56号ピット	3		676-314	楕丸長方形	V字状	38	29	41		
57号ピット	3	PL.55	677-310	楕円形	U字状	41	31	44		
58号ピット	4		611-284	楕円形	U字状	42	32	15	23竪穴建物	
59号ピット	4		610-284	楕円形	U字状	43	32	17	23竪穴建物	
60号ピット	4		612-284	不整形	U字状	60	27	27	23竪穴建物	
61号ピット	4		610-283	楕円形	U字状	32	25	15	23竪穴建物	
62号ピット	4		601-282	楕円形	逆台形状	85	70	34	29竪穴建物	
63号ピット	4		600-283	楕円形	V字状	47	40	42	29竪穴建物	
64号ピット	4		599-282	楕円形	U字状	58	46	25	29竪穴建物	
65号ピット	4		599-281	楕円形	U字状	40	32	17	29竪穴建物	
66号ピット	4		599-281	不整形	逆台形状	78	52	29	29竪穴建物	
67号ピット	4		576-275	楕円形	U字状	50	44	30		
68号ピット	4		573-277	楕円形	U字状	42	39	24		
69号ピット	4		589-278	楕円形	U字状	47	45	19		
70号ピット	4	PL.56	593-283	楕円形	U字状	31	27	15	1孤立柱建物	
71号ピット	4		598-279	楕円形	U字状	39	34	12		
72号ピット	4		598-287	楕丸方形	U字状	41	38	22		

第2章 検出された遺構と遺物

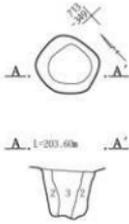
名称	区	写真番号	位置(X-Y)	平面形状	断面形状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	重複遺構	備考
73号ピット	4		615-298	ほぼ円形	U字状	44	42	21		
75号ピット	4	PL.56	591-287	(楕円形)	U字状	48	(34)	34	1	1 孤立柱建物 P 9
77号ピット	4		593-286	楕円形	U字状	56	43	35		
78号ピット	4		595-287	楕円形	逆台形状	45	33	22		
79号ピット	4		600-294	不整形	U字状	32	31	21		
80号ピット	4		604-295	楕円形	不明	66	58	23		
81号ピット	4		605-293	楕円形	V字状	46	38	38		
82号ピット	4		606-293	楕円形	U字状	40	36	41		
83号ピット	4	PL.56	606-293	不整形	不明	92	68	43		
84号ピット	4		606-294	不整形	V字状	64	45	31		
85号ピット	4		607-295	楕円形	U字状	50	36	29	86ピット	
86号ピット	4		607-294	(楕円形)	不明	(52)	43	29	85ピット	
87号ピット	4		607-296	不整形	U字状	56	54	30		
88号ピット	4		608-297	楕円形	U字状	35	30	26		
89号ピット	4		608-292	楕円形	不明	62	55	46		
90号ピット	4	PL.56	594-292	(楕円形)	V字状	(30)	34	34	41	41 竪穴建物
92号ピット	4		589-287	(楕円形)	不明	(44)	32	17	1	1 孤立柱建物 P 7
94号ピット	4		587-285	楕円長方形	U字状	35	30	48	1	1 孤立柱建物 P 6
96号ピット	4		588-295	楕円形	U字状	33	29	54		
97号ピット	4		586-295	楕円形	U字状	27	24	30		
98号ピット	4		584-293	楕円形	皿状	96	84	26		
99号ピット	4		583-293	楕円形	逆台形状	62	47	35		
100号ピット	4	PL.56	582-291	楕円形	U字状	66	55	36		
101号ピット	4		581-290	楕円形	U字状	70	63	39		
102号ピット	4	PL.56	579-289	楕円形	V字状	59	36	36		
105号ピット	4		592-282	楕円形	不明	41	32	23	1	1 孤立柱建物
107号ピット	3		652-286	楕円形	U字状	41	34	24		財3区12ピット
108号ピット	3		650-292	不整形	U字状	30	26	45		財3区13ピット
109号ピット	3		649-293	不整形	U字状	48	38	27		財3区14ピット
110号ピット	3		649-293	楕円長方形	V字状	32	31	53		財3区15ピット
111号ピット	3		650-293	楕円長方形	V字状	35	33	34		財3区16ピット
112号ピット	3		651-294	楕円長方形	V字状	41	37	46		財3区17ピット
113号ピット	3		652-294	楕円形	U字状	40	29	44		財3区18ピット
114号ピット	3		652-294	楕円形	U字状	39	37	38		財3区19ピット
115号ピット	3		651-296	不整形	U字状	35	31	26		財3区20ピット
116号ピット	3		650-296	不整形	U字状	33	32	27		財3区21ピット
117号ピット	3		611-305	楕円形	逆台形状	23	21	17		財3区22ピット
118号ピット	3		660-305	楕円形	U字状	28	26	15		財3区23ピット
120号ピット	3		663-306	楕円形	U字状	21	16	27		財3区25ピット
121号ピット	3		664-307	ほぼ円形	U字状	32	31	21		財3区26ピット
126号ピット	3		662-310	楕円形	U字状	25	23	25	6	6 孤立柱建物内 財3区31ピット
129号ピット	3		664-309	ほぼ円形	V字状	27	26	24	6	6 孤立柱建物 P 9、130ピット 財3区34ピット
130号ピット	3		664-309	(楕円形)	不明	30	(21)	15	129ピット	財3区35ピット
132号ピット	3		662-314	楕円形	U字状	28	24	15		財3区37ピット
134号ピット	3	PL.55	665-317	楕円形	逆台形状	36	29	17		財3区39ピット
135号ピット	3		672-319	楕円形	U字状	42	33	28		財3区40ピット
136号ピット	3		674-318	楕円形	U字状	22	17	15		財3区41ピット
137号ピット	3		646-308	楕円形	U字状	30	22	49		財3区42ピット
138号ピット	3		646-308	楕円長方形	V字状	27	26	36		財3区43ピット
139号ピット	3		647-306	楕円形	U字状	30	28	20		財3区44ピット
140号ピット	3		647-306	楕円形	逆台形状	30	25	23		財3区45ピット
141号ピット	3		646-305	楕円形	不明	40	30	25		財3区46ピット
142号ピット	3		647-304	不整形	V字状	33	32	19		財3区47ピット
143号ピット	3		666-303	正方形	V字状	38	34	51		財3区48ピット
144号ピット	3		667-304	楕円形	U字状	38	35	60		財3区49ピット
145号ピット	3	PL.55	670-304	楕円形	V字状	42	35	40		財3区50ピット
146号ピット	3	PL.55	670-304	楕円形	U字状	42	33	33		財3区51ピット
147号ピット	3		672-318	楕円形	U字状	35	27	40		財3区52ピット
148号ピット	3		673-316	正方形	逆台形状	21	20	15		財3区53ピット

1・2区ピット

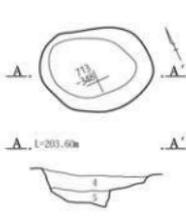
1号ピット



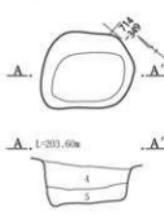
2号ピット



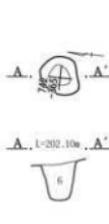
3号ピット



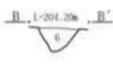
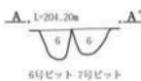
4号ピット



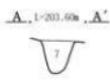
5号ピット



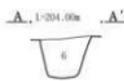
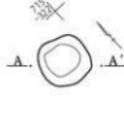
6・7号ピット



8号ピット



9号ピット



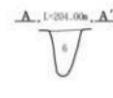
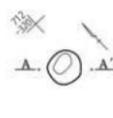
10号ピット



11号ピット



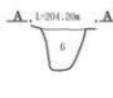
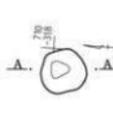
12号ピット



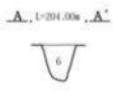
13号ピット



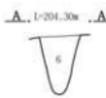
14号ピット



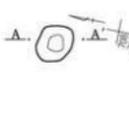
15号ピット



16号ピット



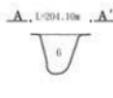
17号ピット



18号ピット



19号ピット



0 1:40 1m

第134図 1～19号ピット平・断面図

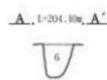
第2章 検出された遺構と遺物

1・2区ビット

20号ビット



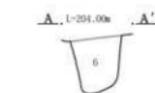
21号ビット



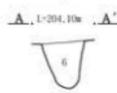
22号ビット



23号ビット



24号ビット



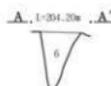
26号ビット



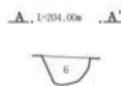
28号ビット



29号ビット



30号ビット



36号ビット



39号ビット



40号ビット



46号ビット



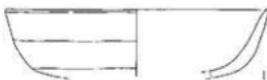
47号ビット



1・2区ビット

- 1 暗褐色土 褐色土を多量に含み、ローム粒を微量含む。
- 2 褐色土 ローム粒を微量含む。
- 3 暗褐色土 黒色土粒とローム粒を少量含む。
- 4 暗褐色土 黒褐色土を少量含み、ローム粒を微量含む。
- 5 褐色土 ローム粒を少量含む。
- 6 黒褐色土 褐色土小ブロックを斑状に含む。しまり弱。
- 7 黒色土 褐色土ブロックを斑状に含む。しまり弱。粘性ややあり。

4号ビット出土遺物



第135図 20～24・26・28～30・36・39・40・46・47号ビット平・断面図、4号ビット出土遺物

3・4区ピット

54号ピット



A. 1-205.80m A'



55号ピット



A. 1-205.70m A'



56号ピット



A. 1-206.40m A'



57号ピット



A. 1-207.00m A'



58・59号ピット



A. 1-205.50m A'



60号ピット



A. 1-205.50m A'



61号ピット



A. 1-205.50m A'



62号ピット



A. 1-204.80m A'



63号ピット



A. 1-204.60m A'



64号ピット



A. 1-204.60m A'



65号ピット



A. 1-204.80m A'



66号ピット



A. 1-204.80m A'



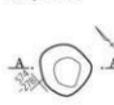
67号ピット



A. 1-203.70m A'



68号ピット



A. 1-203.50m A'



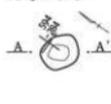
69号ピット



A. 1-204.50m A'



70号ピット



A. 1-204.00m A'



71号ピット



A. 1-205.00m A'



72号ピット



A. 1-204.10m A'



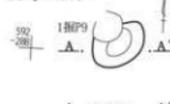
73号ピット



A. 1-204.30m A'



75号ピット



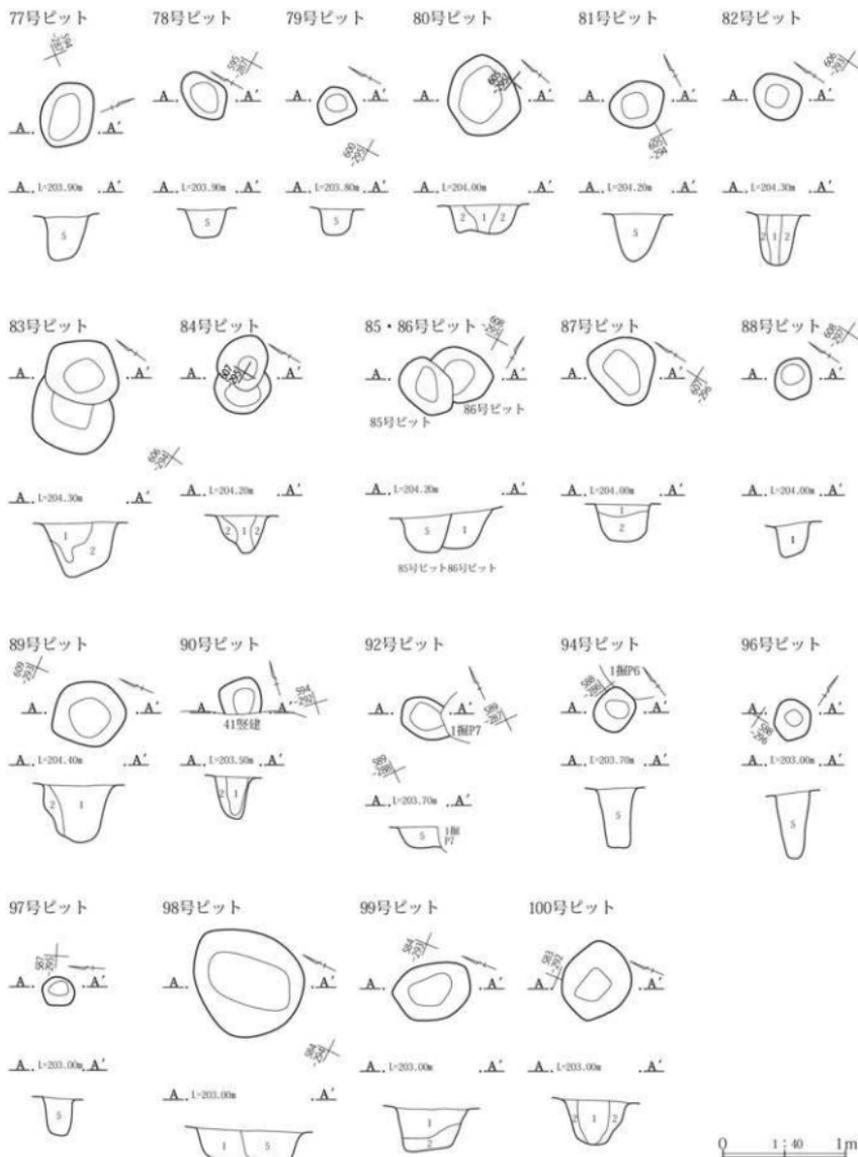
A. 1-203.80m A'



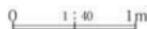
0 1:40 1m

第136図 54～73・75号ピット平・断面図

3・4区ビット

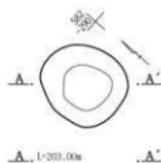


第137図 77~90・92・94・96~100号ビット平・断面図

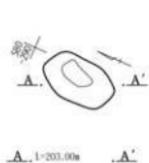


3・4区ピット

101号ピット



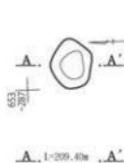
102号ピット



105号ピット



107号ピット



108号ピット



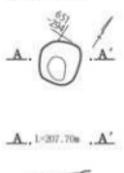
109号ピット



110号ピット



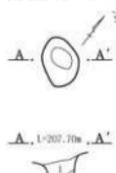
111号ピット



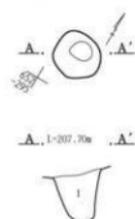
112号ピット



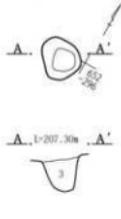
113号ピット



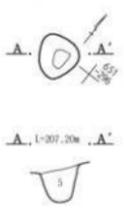
114号ピット



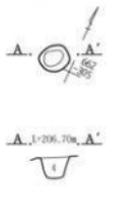
115号ピット



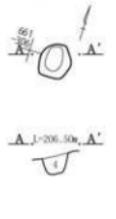
116号ピット



117号ピット



118号ピット



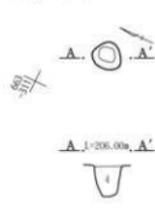
120号ピット



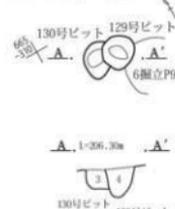
121号ピット



126号ピット



129・130号ピット



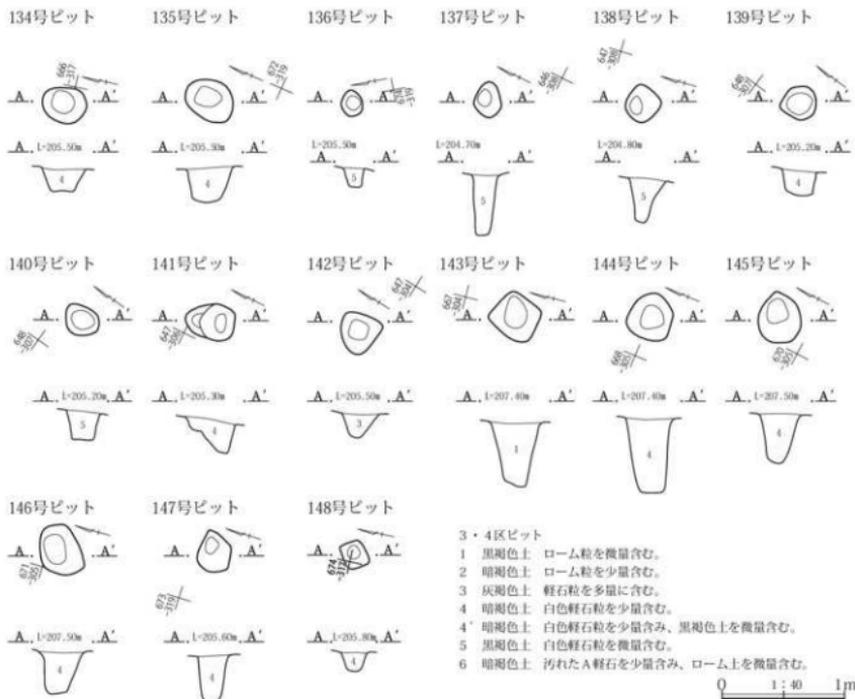
132号ピット



0 1:40 1m

第138図 101・102・105・107～118・120・121・126・129・130・132号ピット平・断面図

3・4区ピット



第139図 134～148号ピット平・断面図

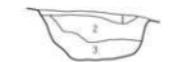
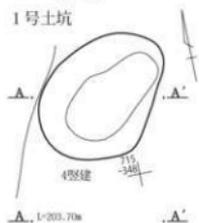
第9表 土坑計測表

名称	区	写真番号	時期	位置(X-Y)	平面形状	断面形状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	主軸方位	重復遺構	備考
1号土坑	1・2	PL.57		715-347	楕円形	U字状	120	91	40	N-57°-E	4堅穴建物	
2号土坑	1・2			724-336	楕円形	皿状	176	130	18	N-54°-W		
3号土坑	1・2	PL.57	10世紀前半	713-327	ほぼ円形	皿状	113	103	19	N-33°-W		
4号土坑	1・2		10世紀前半	715-326	楕円形	皿状	154	123	26	N-15°-W		
5号土坑	1・2		9世紀後半	716-326	ほぼ円形	皿状	127	118	20	N-88°-E		
6号土坑	1・2	PL.57-139	10世紀前半	716-323	楕円形	逆台形状	153	144	74	N-62°-E		
7号土坑	1・2	PL.57		714-323	楕円形	逆台形状	131	120	41	N-78°-E		
8号土坑	1・2		9世紀後半	715-321	(楕円形)	U字状	158	(89)	43	不明		調査区域外へ
9号土坑	1・2	PL.57	10世紀前半	707-332	楕円形	U字状	114	95	27	N-55°-E		
10号土坑	1・2	PL.57-139		709-334	不整形	皿状	107	97	23	N-88°-W		
11号土坑	1・2	PL.57		711-339	楕円形	皿状	91	79	16	N-81°-W		
12号土坑	1・2			693-332	楕円形	皿状	75	69	16	N-11°-W		
13号土坑	1・2	PL.58		688-339	楕円形	逆台形状	160	107	29	N-41°-W		
14号土坑	1・2	PL.58		704-347	楕円形	皿状	101	92	20	N-6°-E		
15号土坑	1・2			711-319	楕円形	皿状	96	73	12	N-57°-W		
16号土坑	1・2	PL.58	9世紀後半	705-316	不整形	逆台形状	186	167	108	N-74°-E	1・2坑上、1溝	
17号土坑	1・2	PL.58		703-317	楕円形	逆台形状	151	125	64	N-34°-E	1溝	
18号土坑	1・2	PL.139	10世紀前半	701-318	楕円形	U字状	165	145	73	N-20°-E	1溝	
19号土坑	1・2	PL.58		700-317	楕円形	逆台形状	153	141	63	N-21°-W	1溝	
20号土坑	1・2			702-343	楕円形	逆台形状	105	94	45	N-65°-E		
21号土坑	1・2			703-344	円形	逆台形状	96	95	30	N-41°-W		
22号土坑	1・2	PL.58	10世紀前半	712-319	楕円形	逆台形状	50	45	21	N-14°-E		
23号土坑	1・2	PL.58		709-318	楕円形	逆台形状	60	56	30	N-26°-E		

名称	区	写真番号	時期	位置(X-Y)	平面形状	断面形状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	主軸方位	重複遺構	備考
24号土坑	3			654-313	長方形	逆台形状	206	85	98	N-17°-W	8溝	
25号土坑	4			591-291	長方形	皿状	91	88	21	N-83°-W	41整穴建物	
26号土坑	4	PL.58		608-294	楕円形	U字状	121	106	73	N-28°-E	48整穴建物	
27号土坑	4			608-296	楕円形	U字状	73	57	27	N-89°-E		
28号土坑	4	PL.59		630-303	(隅丸長方形)	皿状	161	(100)	17	N-11°-W	10溝	
29号土坑	4	PL.59	7世紀後半	625-298	円形	皿状	143	138	30	N-26°-E		
30号土坑	4	PL.59		585-290	楕円形	U字状	139	101	55	N-56°-E	38・40整穴建物	
31号土坑	4	PL.60		590-279	長方形	U字状	230	70	46	N-17°-W		
33号土坑	4	PL.60		605-284	楕円形	U字状	68	60	43	N-47°-E		
34号土坑	4			631-296	楕円形	不明	101	67	58	N-5°-W	50整穴建物	
35号土坑	4			627-298	ほぼ円形	U字状	84	79	31	N-60°-E		
36号土坑	4	PL.60		586-272	長方形	逆台形状	208	85	39	N-43°-E	31・49整穴建物	
37号土坑	4	PL.60		614-286	不整形	U字状	227	101	82	N-27°-W		
38号土坑	4	PL.60		618-287	隅丸長方形	U字状	321	60	138	N-13°-W		
39号土坑	3			683-312	(長方形)	筒状	(490)	65	47	N-33°-W		旧3区12土坑
40号土坑	3			692-313	楕円形	皿状	78	63	24	N-8°-W		旧3区13土坑
41号土坑	4	PL.60		599-266	楕円形	U字状	77	69	31	N-34°-E		旧4区14土坑
42号土坑	3	PL.60		670-330	楕円形	皿状	101	69	13	N-38°-E		旧3区15土坑
43号土坑	3			662-317	長方形	筒状	126	47	57	N-26°-W	8溝	旧3区16土坑
44号土坑	3			664-317	長方形	筒状	134	38	56	N-26°-W	8溝	旧3区17土坑
45号土坑	3			665-318	長方形	筒状	129	50	72	N-23°-W	8溝	旧3区18土坑
46号土坑	3			667-319	(長方形)	筒状	(123)	48	60	N-20°-W	8溝、47土坑	旧3区19土坑
47号土坑	3			668-319	(楕円形)	U字状	(130)	73	65	N-20°-W	8溝、46土坑	旧3区20土坑
48号土坑	3			672-320	楕円形	U字状	93	53	47	N-17°-W		旧3区21土坑
49号土坑	3			674-321	楕円形	V字状	116	63	51	N-18°-W		旧3区22土坑
50号土坑	3			677-323	楕円形	V字状	103	52	39	N-23°-W		旧3区23土坑
51号土坑	4	PL.62	近世	639-315	長方形	逆台形状	140	22	21	N-86°-E		旧4区11溝
52号土坑	4		近世	581-276	長方形	逆台形状	157	27	32	N-51°-E	30整穴建物	旧4区12溝
53号土坑	4			569-285	ほぼ円形	皿状	101	95	18	N-21°-W	35整穴建物	

1・2区土坑

1号土坑

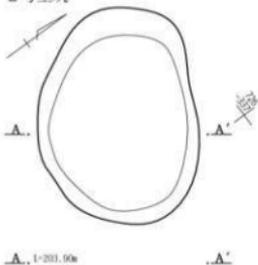


2区1号土坑

- 暗褐色土 黒色土と焼土粒を少量含む。しまりあまりなし。
- 暗褐色土 黄褐色土と焼土粒・ロームブロックを少量含む。しまりあまりなし。
- 暗褐色土 黄褐色土とロームブロックを微量含む。しまりややあり。



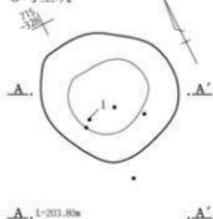
2号土坑



2区2号土坑

- 暗褐色土 褐色土とローム粒を少量含む。

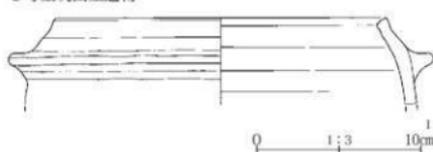
3号土坑



1区3号土坑

- 暗褐色土 褐色土とローム粒を少量含む。
- 暗褐色土 黄褐色土と微量のローム粒子を含む。

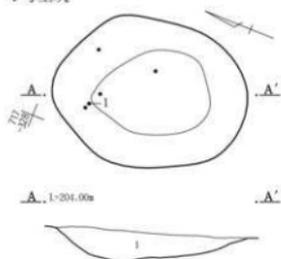
3号土坑出土遺物



第140図 1～3号土坑平・断面図及び3号土坑出土遺物

1・2区土坑

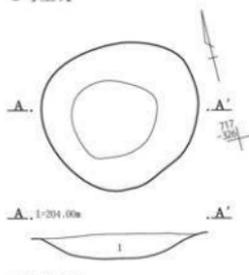
4号土坑



2区4号土坑

1 暗褐色土 褐色土とローム粒を少量含む。

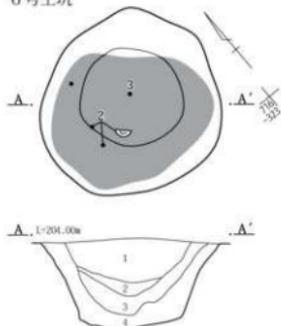
5号土坑



2区5号土坑

1 暗褐色土 灰褐色土と褐色土小ブロック・ローム粒・白色軽石を少量含む。

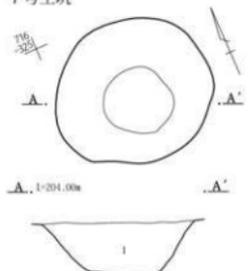
6号土坑



2区6号土坑

- 1 暗褐色土 褐色土を斑状に含み、ローム粒を少量含む。
- 2 黒褐色土 ローム粒を微量含む。
- 3 暗褐色土 黄褐色土ブロックとローム小ブロック・焼土粒を多量に含み、ローム粒を少量含む。
- 4 暗褐色土 褐色土小ブロックを微量含む。

7号土坑

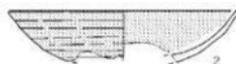


2区7号土坑

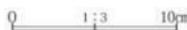
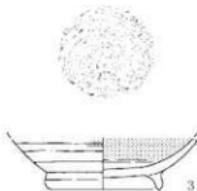
1 暗褐色土 灰褐色土と褐色土小ブロック・ローム粒・白色軽石を少量含む。



4号土坑出土遺物



6号土坑出土遺物



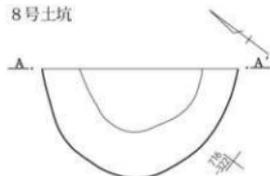
5号土坑出土遺物



第141図 4～7号土坑平・断面図及び4～6号土坑出土遺物

1・2区土坑

8号土坑



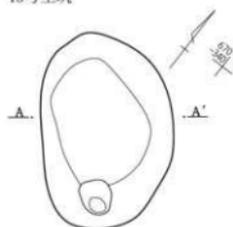
A. 1:204.10m A'



1区 8号土坑

- 1 暗褐色土 褐色土ブロックとローム粒を少量含む。
2 黒褐色土 褐色土ブロックとローム粒を微量含む。

13号土坑

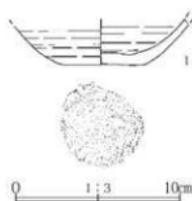


A. 1:201.30m A'

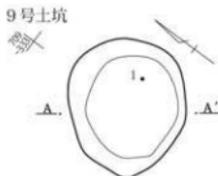
1区 14・15号土坑

- 1 暗褐色土 褐色土小ブロックとローム粒を少量含む。
2 黒褐色土 褐色土小ブロックとローム粒を微量含む。

8号土坑出土遺物



9号土坑

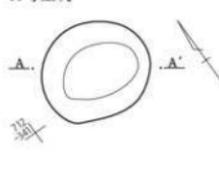


A. 1:203.00m A'

1区 9・10号土坑

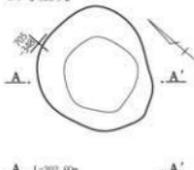
- 1 暗褐色土 ローム・漸移層土を斑状に含み、ローム粒子を少量含む。

11号土坑



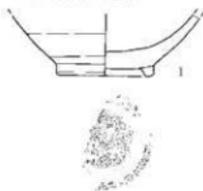
A. 1:203.30m A'

14号土坑

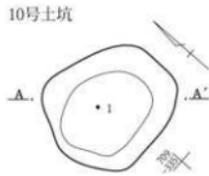


A. 1:202.00m A'

9号土坑出土遺物

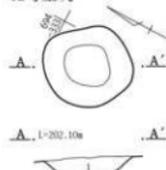


10号土坑



A. 1:203.10m A'

12号土坑



A. 1:202.10m A'

1区 11・12号土坑

- 1 暗褐色土 ローム・漸移層土を斑状に含み、ローム粒子を少量含む。

15号土坑



A. 1:204.20m A'

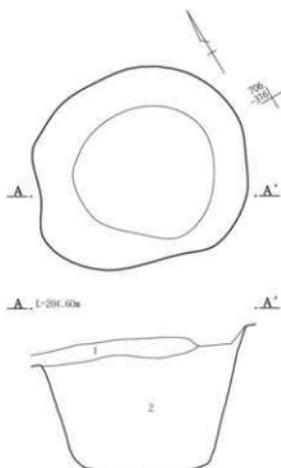
10号土坑出土遺物



第142図 8～15号土坑平・断面図及び8～10号土坑出土遺物

1・2区土坑

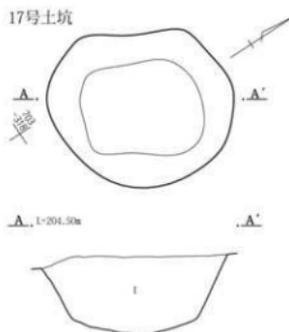
16号土坑



2区16号土坑

- 1 暗褐色土 焼土を多量に含み、白色粘土と炭化物を少量含む。(同1・2号焼土)
 2 にぶい黄褐色土 ロームブロックを少量含む。しまり弱。粘性ややあり。

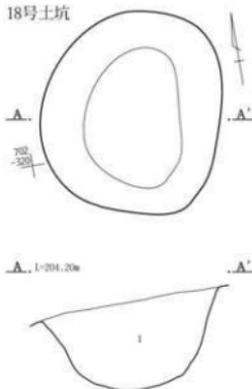
17号土坑



2区17号土坑

- 1 黒褐色土 褐色土小ブロックとローム粒を微量含む。しまりなし。粘性ややあり。

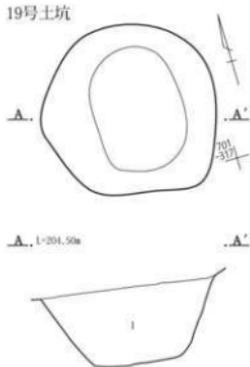
18号土坑



18号土坑出土遺物



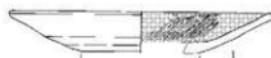
19号土坑



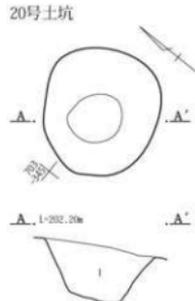
2区18・19号土坑

- 1 黒褐色土 褐色土小ブロックとローム粒を微量含む。しまりなし。粘性ややあり。

16号土坑出土遺物



20号土坑



1区20号土坑

- 1 黒褐色土 褐色土小ブロックとローム粒を微量含む。しまり粘性ともにややあり。



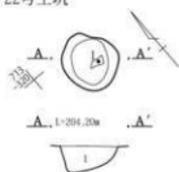
第143図 16～20号土坑平・断面図及び16・18号土坑出土遺物

1・2区土坑

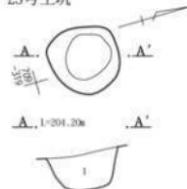
21号土坑



22号土坑



23号土坑



1区21号土坑

1 黒褐色土 ローム粒を微量含む。しまり、粘性ともにややあり。

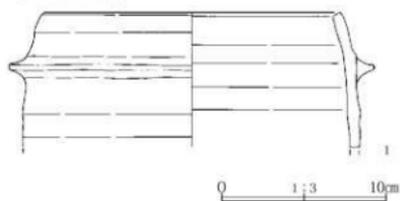
2区22号土坑

1 黒褐色土 ローム粒を微量含む。しまり、粘性ともにあまりなし。

2区23号土坑

1 黒褐色土 ローム粒と黄白色軽石を微量含む。しまり粘性ともにあまりなし。

22号土坑出土遺物



4区土坑

25号土坑



A, 1=203.50m

A'

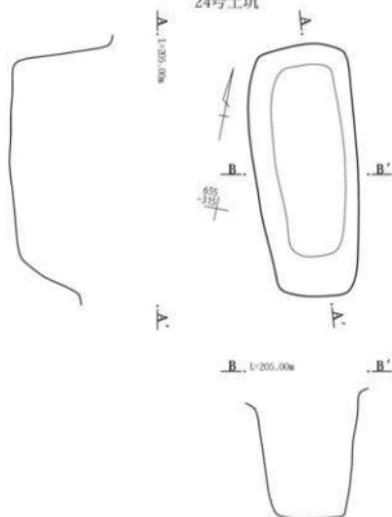


4区25号土坑

1 灰褐色土 白色軽石を少量含む。しまり弱。

3区土坑

24号土坑



A, 1=205.00m

A'

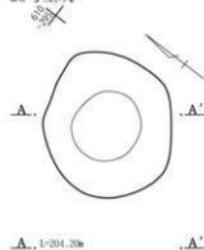
B

B'

B, 1=205.00m



26号土坑



A, 1=204.20m

A'



4区26号土坑

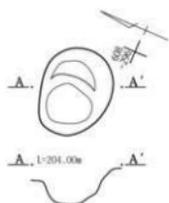
1 暗褐色土 褐色土ブロックとロームブロックを少量含む。

0 1:40 1m

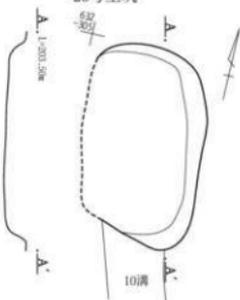
第144図 21~26号土坑平・断面図及び22号土坑出土遺物

4区土坑

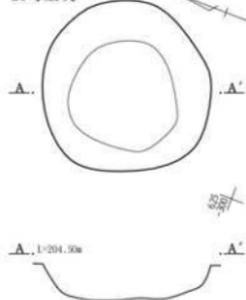
27号土坑



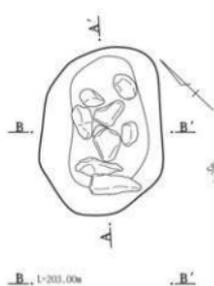
28号土坑



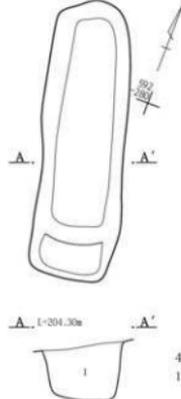
29号土坑



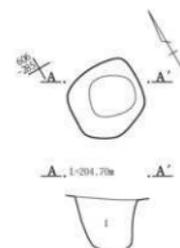
30号土坑



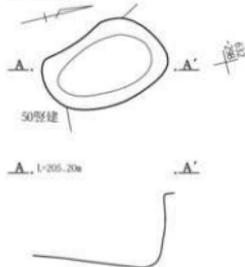
31号土坑



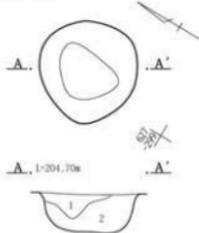
33号土坑



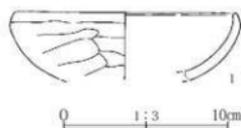
34号土坑



35号土坑



29号土坑出土遺物



4区35号土坑

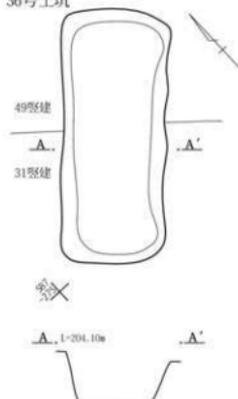
- 1 暗褐色土 褐色土粒を微量含む。
- 2 黒褐色土 褐色土小ブロックを少量含む。



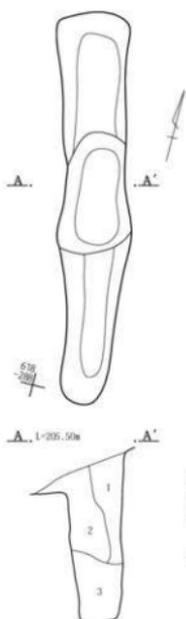
第145図 27～31・33～35号土坑平・断面図及び29号土坑出土遺物

3・4区 土坑

36号土坑



38号土坑



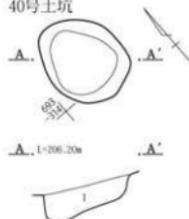
37号土坑



4区37号土坑

- 1 暗褐色土 ローム粒を少量含む。しまり粘性ともになし。
- 2 暗褐色土 ローム小ブロックを多量に含む。
- 3 暗褐色土 ローム粒を多量に含む。
- 4 暗褐色土 ローム小ブロックを多量に含む。
- 5 暗褐色土 軽石を多量に含む。

40号土坑



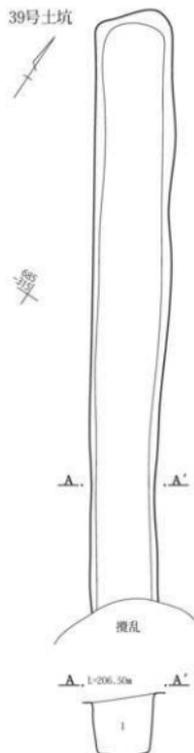
3区40号土坑

- 1 暗黄褐色土 ロームを多量に含む。

4区38号土坑

- 1 暗褐色土 褐色土ブロックとローム粒を少量含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒を多量に含む、ローム小ブロックを少量含む。
- 3 黒褐色土 褐色土ブロックを少量含む。

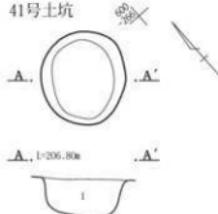
39号土坑



3区39号土坑

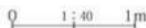
- 1 暗褐色土 ローム粒と軽石を微量含む。

41号土坑



4区41号土坑

- 1 暗褐色土 ローム粒を少量含む。しまり弱。



第146図 36~41号土坑平・断面図

3・4区 土坑

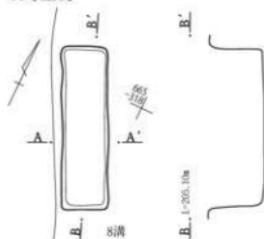
42号土坑



3区42号土坑

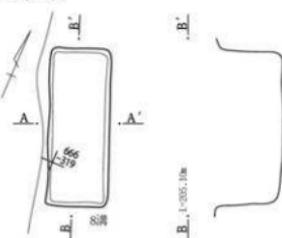
- 1 暗褐色土 ローム粒を少量含む。
- 2 黒褐色土 ローム粒を微量含む。

44号土坑



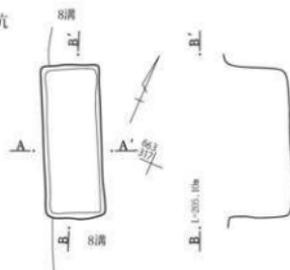
A., 1-205.10m

45号土坑



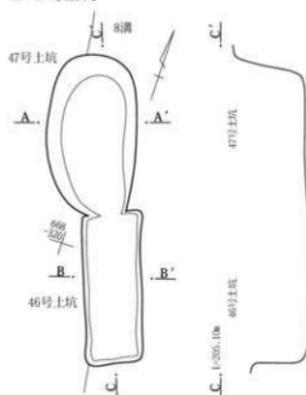
A., 1-205.10m

43号土坑



A., 1-205.10m

46・47号土坑



A., 1-205.10m

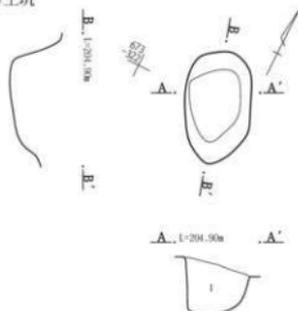
B., 1-205.10m

0 1:40 1m

第147図 42~47号土坑平・断面図

3・4区 土坑

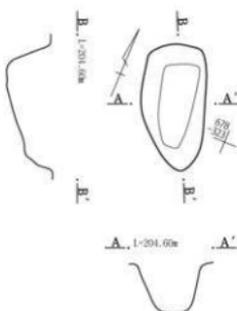
48号土坑



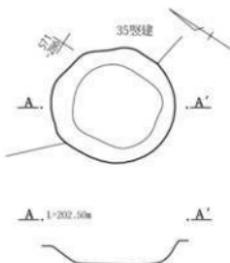
3区48号土坑

1 褐色土 ローム小ブロックを多量に含む。

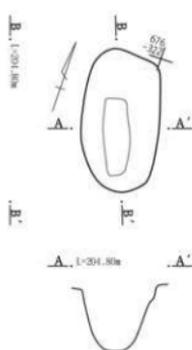
50号土坑



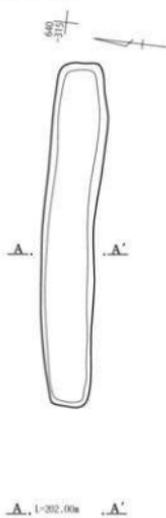
53号土坑



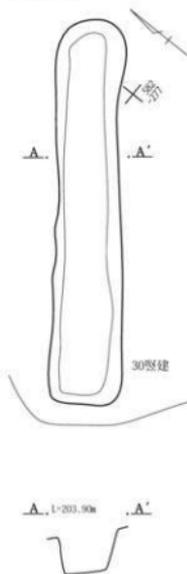
49号土坑



51号土坑



52号土坑



4区51号土坑

1 黒褐色土 汚れたA軽石を多量に含む。

0 1:40 1m

第148図 48~53号土坑平・断面図

第2章 検出された遺構と遺物

[溝]調査区1・2区内にて1条、3区内にて4条、3～4区にて1条、4区にて3条の都合9条の溝が検出された。多くは等高線に沿い南北に走行する水路跡で、集落より時期の新しい中近世の遺構が大半であった。以下に個々の遺構の詳細を記す。

1号溝 第149図 PL.61

位置：1・2区 705-315周辺

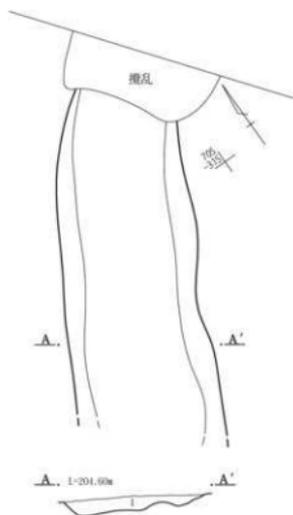
規模：1.8～2.3m×5.3m

断面形状：皿形

走行及び底面標高：N E 204.49m→S W 204.10m

埋没土：褐色砂質土

1号溝



2区1号溝

1 褐色土 大径の黒褐色土ブロックを多く含む。

0 1:80 2m



第149図 1号溝平・断面図及び出土遺物

水流痕跡：不明

重複：16～19号土坑と重複し、埋土の様相から、いずれの土坑よりも新しいと判断される。

遺物：図示した灰釉陶器陶器は大原2号窯式期に比定でき、10世紀前半の年代観が与えられる。

所見：調査区1・2区の南東端に在り、検出範囲が少ないため全容は不明。本溝の時期については、出土遺物より10世紀前半と推定される。

2号溝 第150図 PL.61

(旧3区1号溝)

位置：3区 680-310周辺

規模：0.4～1.3m×21m

断面形状：U字形・皿形

走行及び底面標高：N E 207.54m→S W 206.11m

直線的に走行する。

埋没土：As-A混土

水流痕跡：不明

重複：なし。

遺物：なし。

所見：調査区3区の北東端部に在り、勾配が確認されることから水路と推察される。本溝の時期については、埋土にAs-A混土を含むことから、江戸時代中・後期頃と推定される。

3号溝 第150・151図 PL.61・139

(旧3区2・3号溝)

位置：3区 690-320周辺

規模：0.6～1.2m×15 m

断面形状：U字形

走行及び底面標高：N E 203.79m→S W 203.25m

埋没土：As-A混土および二次堆積のAs-A

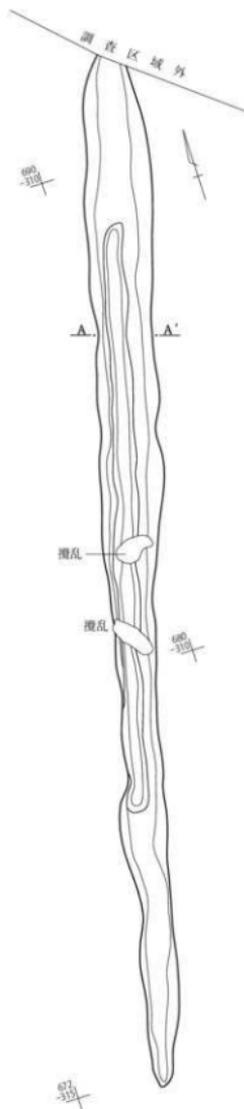
水流痕跡：不明

重複：なし。

遺物：なし。

所見：調査区3区の北端に在り、緩やかではあるが勾配が確認されることから水路と推察される。本溝の時期については、埋土に二次堆積のAs-Aを含むことから、天明3(1783)年のAs-A降灰に近い時期に廃絶された溝と推定される。

2号溝



3号溝



A-A', 1:207.70m



3区2号溝

- 1 暗褐色土 As-A 軽石混土。
- 2 暗褐色土 ローム粒と軽石を微量含む。

0 1:80 2m

A-A', 1:204.30m



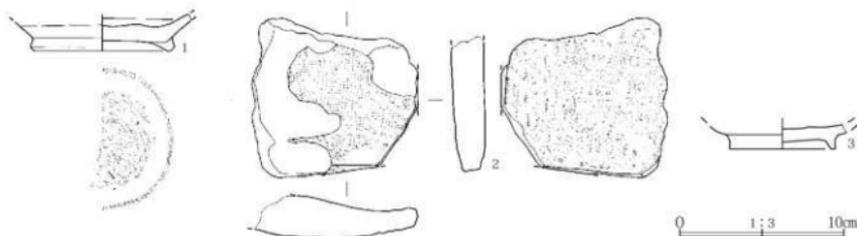
3区3号溝

- 1 二次堆積 As-A 軽石 斜面での流れ込み。
- 2 暗褐色土 As-A 軽石を少量含む。

0 1:100 3m

0 1:80 2m

第150図 2号溝・3号溝平・断面図



第151図 3号溝出土遺物

4号溝 第152図 PL.61

位置：4区 610-275周辺

規模：1.2~2.0m×30m

断面形状：皿形

走行及び底面標高：N 206.21m→S 205.37m

埋没土：As-A混土および二次堆積のAs-A

水流痕跡：不明

重複：なし。

遺物：なし。

所見：調査区4区の北端部に在り、緩やかではあるが勾配が確認されることから水路と推察される。本溝の時期については、埋土上面に二次堆積のAs-Aを含むことから、天明3(1783)年のAs-A降灰に近い時期に廃絶された溝と推定される。

5号溝 第154図 PL.61

位置：4区 663-325周辺

規模：0.3~0.5m×13m

断面形状：U字形・逆台形

走行及び底面標高：N E 204.81m→S W 203.34m

直線的に走行する。

埋没土：不明

水流痕跡：不明

重複：なし。

遺物：なし。

所見：調査区3区の北端に在り、緩やかな勾配が確認されるが、等高線に直行して直線的に走行する。本溝の時期については、調査時の記録がなく不明。

6号溝 第153図

位置：4区 620-305周辺

規模：0.8~1.5m×44m

断面形状：U字形

走行及び底面標高：N 203.14m→S 202.34m

埋没土：暗褐色砂質土

水流痕跡：不明

重複：なし。

遺物：なし。

所見：調査区4区の北西部に在り、10号溝と並行し、緩やかに蛇行する。北西部では隣接の3区9号溝に接続するものと思われる。緩やかな勾配が確認されるが、水路か否か不明。本溝の時期については、中近世と推定される。

9号溝 第153図 PL.62

位置：3区 655-310周辺

規模：0.8~1.2m×13m

断面形状：U字形

走行及び底面標高：N 205.11m→S 204.12m

埋没土：暗褐色砂質土

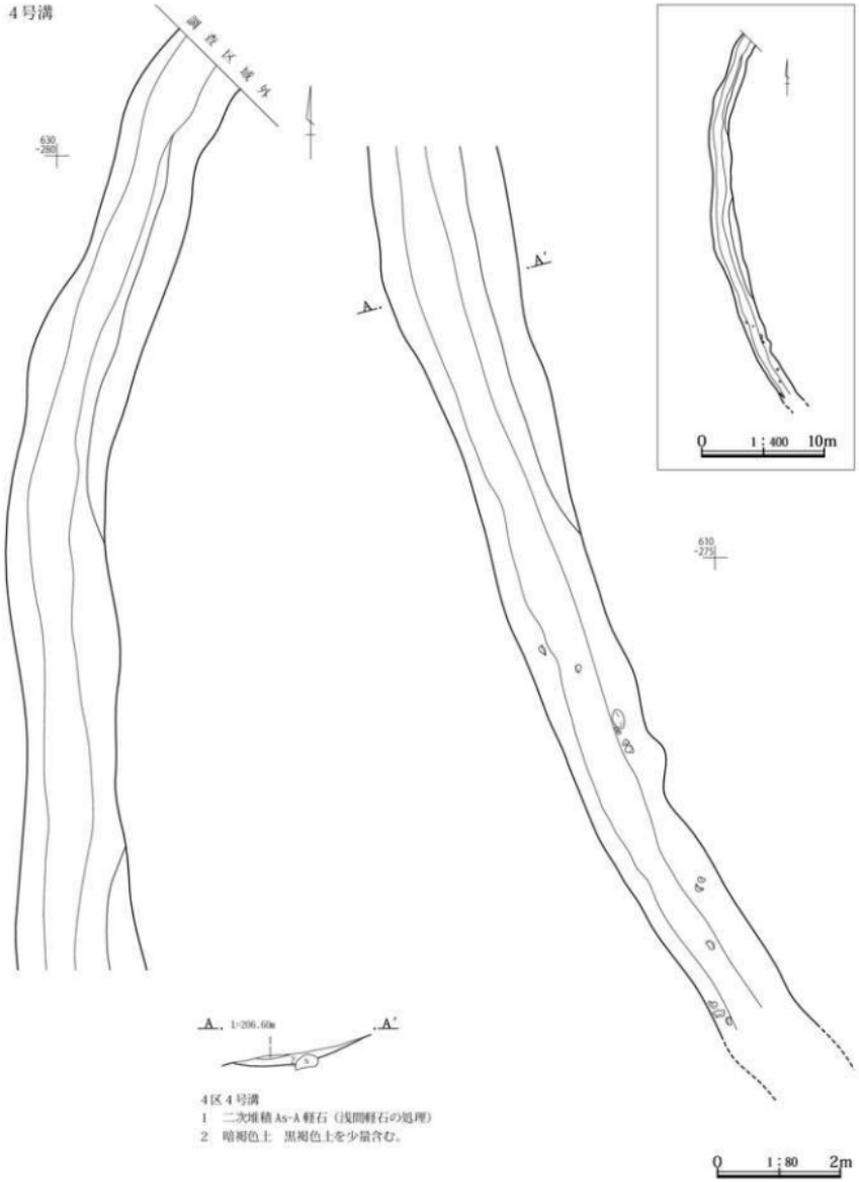
水流痕跡：不明

重複：北側で21号竪穴建物と重複する。本溝の方が新しいが、上面の削平により重複部を境に失われる。

遺物：なし。

所見：調査区3区の南端中央部に在り、8号溝の南端部と並行する。南側では隣接の4区6号溝に接続するものと思われる。急峻な勾配が確認されるが、水路か否か不明。本溝の時期については、中近世と推定される。

4号溝



A-A' 1:200.00m

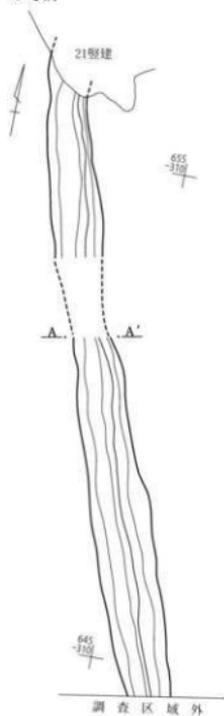
- 4区4号溝
 1 二次堆積 As-A 軽石（浅間軽石の処理）
 2 暗褐色土：黒褐色土を少量含む。

0 1:80 2m

第152図 4号溝平・断面図

第2章 検出された遺構と遺物

9号溝



0 1:100 3m

A, l=205.50m A'

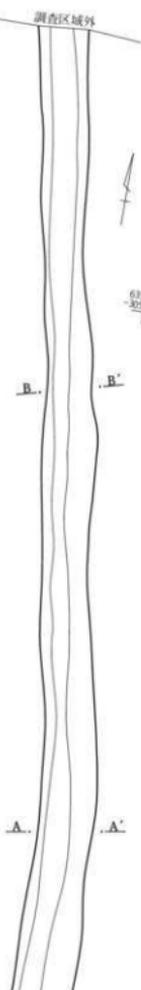


3区9号溝

1 暗褐色土 黑色土と白色軽石粒を少量含む。

0 1:80 2m

6号溝



B, l=203.30m B' A, l=203.30m A'



4区6号溝

1 暗褐色土 黑色土と白色軽石粒を少量含む。

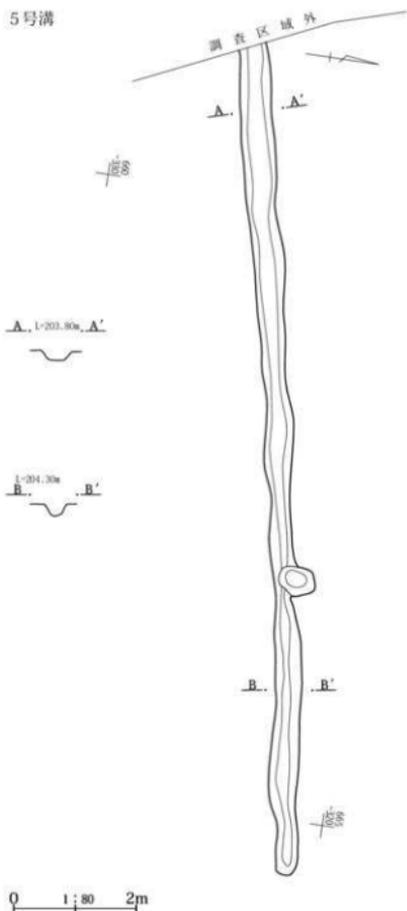
0 1:80 2m



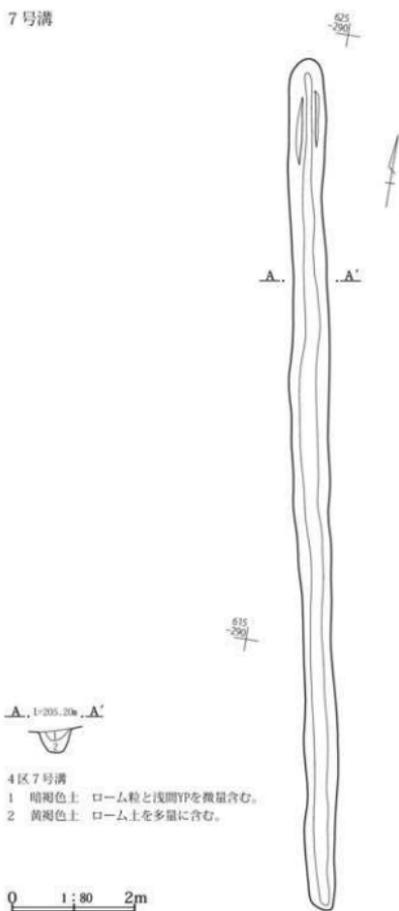
0 1:100 3m

第153図 6号溝・9号溝平・断面図

5号溝



7号溝



第154図 5号溝・7号溝平・断面図

7号溝 第154図 PL.62

位置：4区 620-290周辺

規模：0.5~0.7m×14m

断面形状：U字形

走行及び底面標高：N 204.76m→S 204.44m

埋没土：暗~黄褐色砂質土

水流痕跡：不明

重複：なし。

遺物：なし。

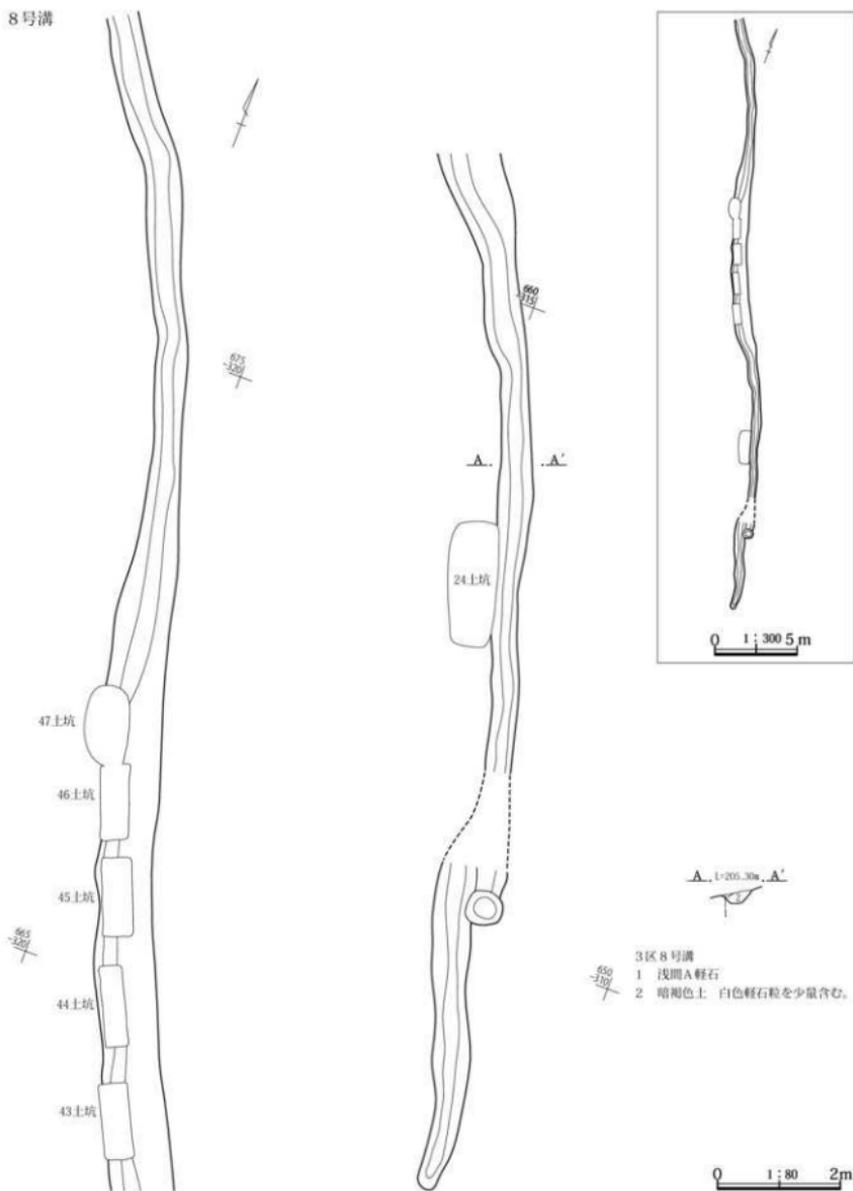
所見：調査区4区の中央北よりに在り、直線的に走行する。緩やかな勾配が確認されるが、水路か否か不明。本溝の時期については、中近世と推定される。

8号溝 第155図 PL.62

位置：3区 660-315周辺

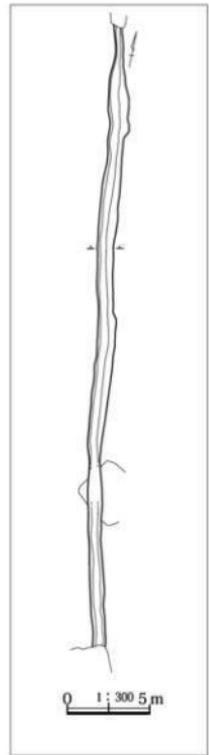
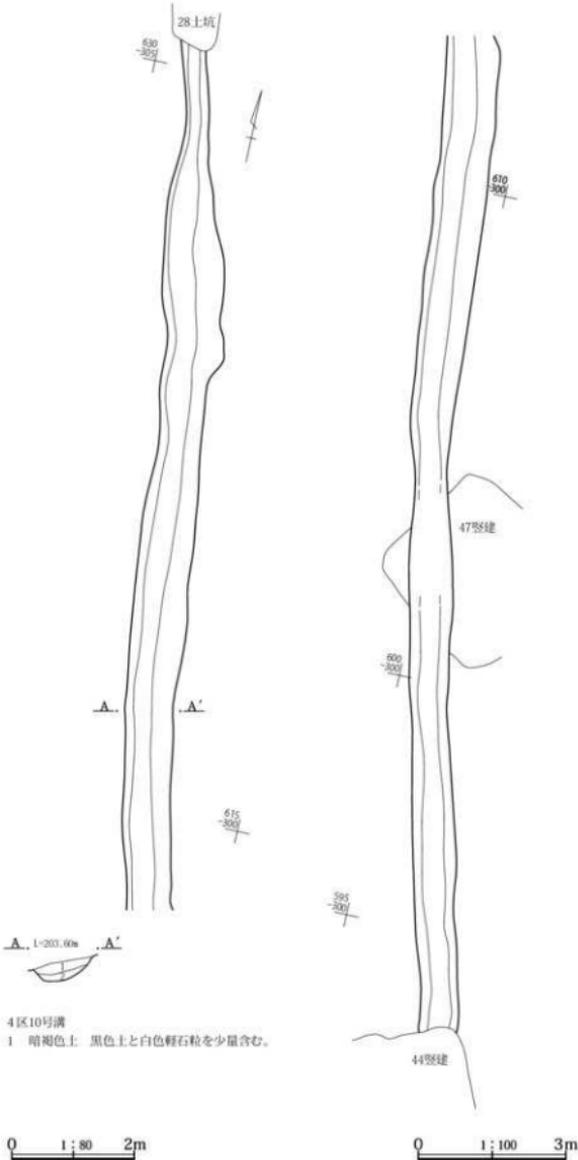
規模：0.5~1.0m×36m

8号溝



第155図 8号溝平・断面図

10号溝



第156図 10号溝平・断面図

断面形状：U字形

走行及び底面標高：N 204.71m→S 203.97m

埋没土：As-A混土および二次堆積のAs-A

水流痕跡：不明

重複：24・43～47号土坑と重複し、本溝の方が古いと判断される。土坑は長方形～楕円形を呈し、軸を描えて8号溝と並行して配列される。

遺物：なし。

所見：調査区3区の中央南西寄りに在り、緩やかではあるが勾配が確認されることから水路と推察される。本溝の時期については、埋土上面に二次堆積のAs-Aを含むことから、天明3(1783)年のAs-A降灰に近い時期に廃絶された溝と推定される。

10号溝 第156図 PL.62

位置：4区 610～300周辺

規模：0.7～1.2m×38m

断面形状：U字形

走行及び底面標高：N 203.25m→S 202.76m

埋没土：暗褐色砂質土

水流痕跡：不明

重複：47号竪穴建物と重複し、埋土の様相より本溝の方が新しいと判断される。

遺物：なし。

所見：調査区4区の北西部に在り、6号溝と並行し、緩やかに蛇行する。緩やかな勾配が確認されるが、水路か否か不明。本溝の時期については、中近世と推定される。

11・12号溝 (縦長の近世土坑と判断、欠番)

[細] 調査区3区中央南西寄りの小範囲において、畑跡が検出された。畑は南北方向に畝立てされ、サクは天明3(1783)年の浅間山噴火に伴う降下テフラAs-Aで埋没する。検出は小範囲ではあるが、当地の近世の土地利用と被災の様子が窺える。以下に遺構の詳細を記す。

1号畑 第157図

(旧3区耕作痕)

位置：3区 652～310周辺

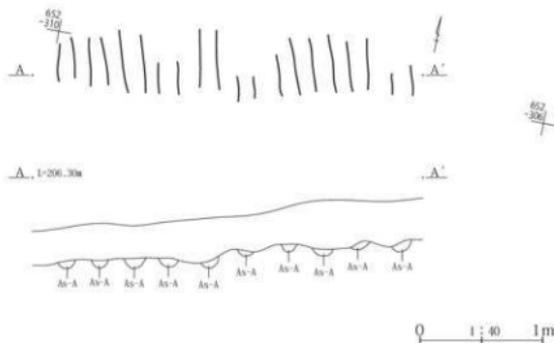
規模：300cm×70cmほどを計る。

遺構：サクの深度は5～10cmほどを計り、畝の間隔は25cmほどを計る。南北方向に畝立てされる。

重複：なし。

遺物：なし。

所見：遺構の年代は、サクがAs-Aで埋没していることから、天明三(1783)年以前の畑跡で、As-Aの降灰により廃棄されたものと考えられる。

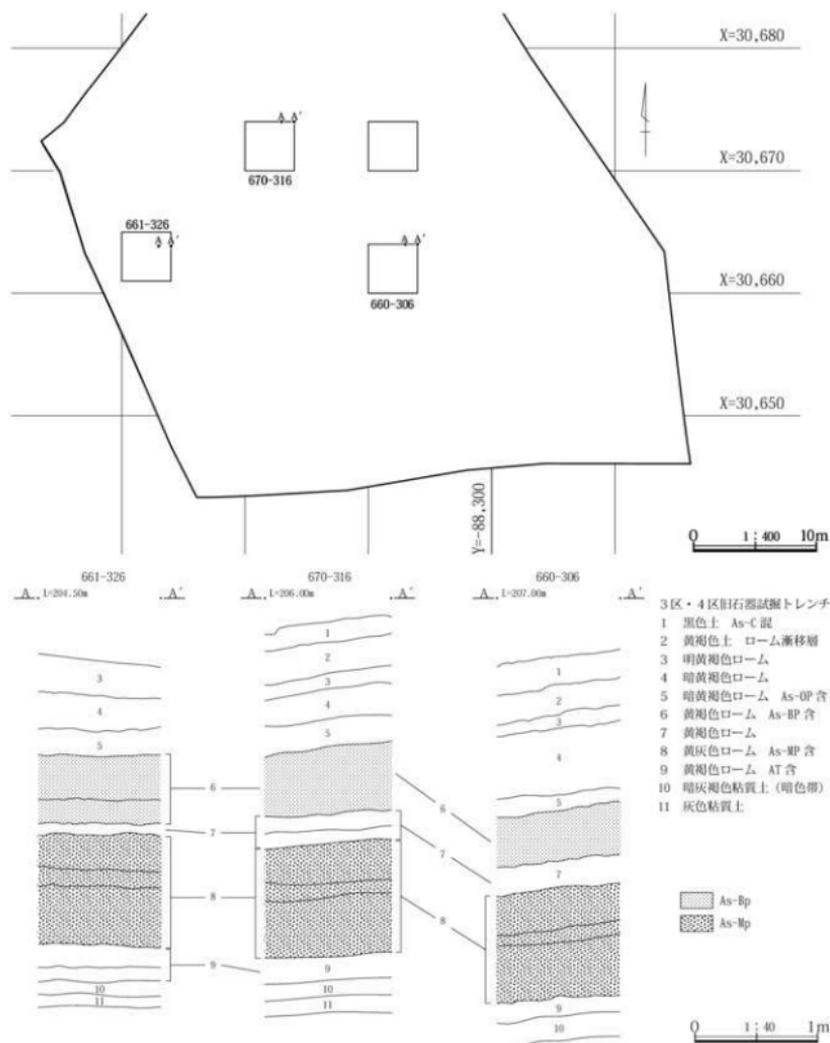


第157図 1号畑平・断面図

第5項 旧石器試掘調査

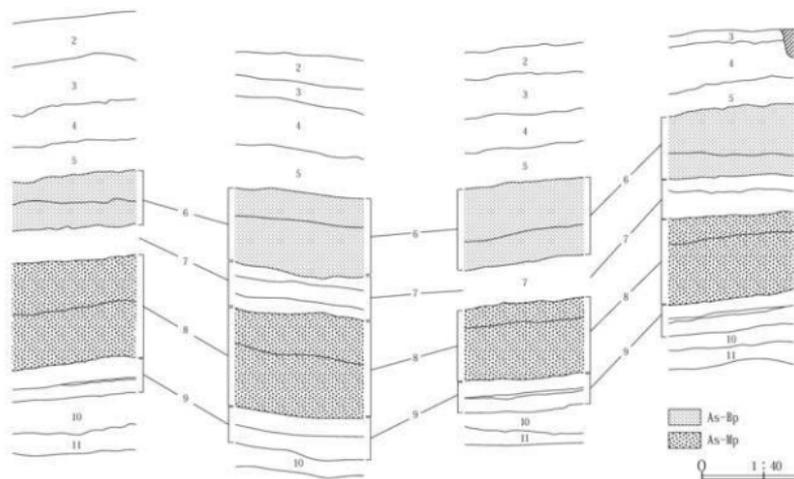
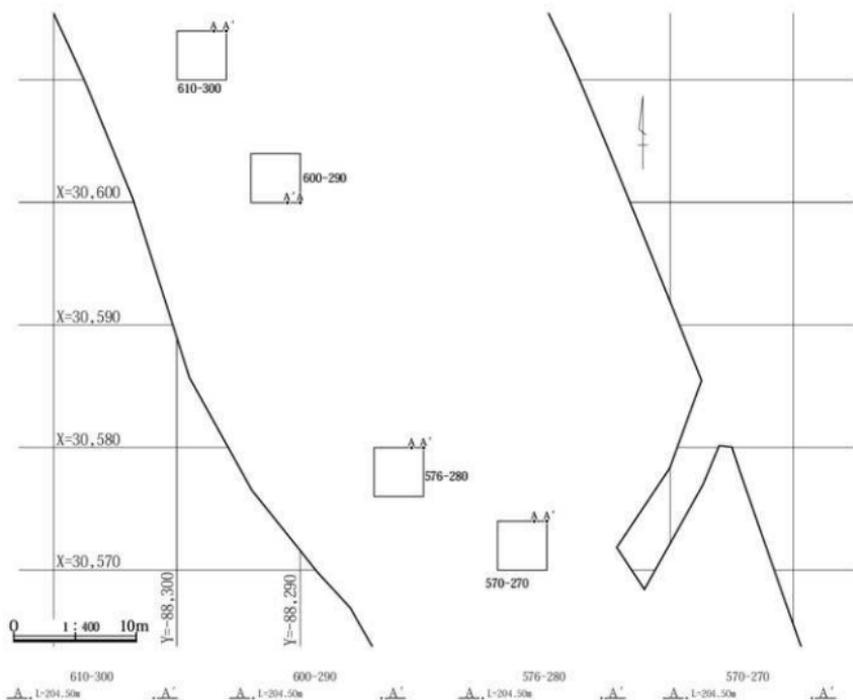
台地上の良好なローム層地山を有する3・4区において、旧石器の確認調査を行った。調査方法は、下図の位

置に4m角のトレンチを設定し、階段状にA T層下ローム暗色帯まで掘り下げた。確認調査の結果、旧石器の出土はなく、堆積層の記録に留まった。

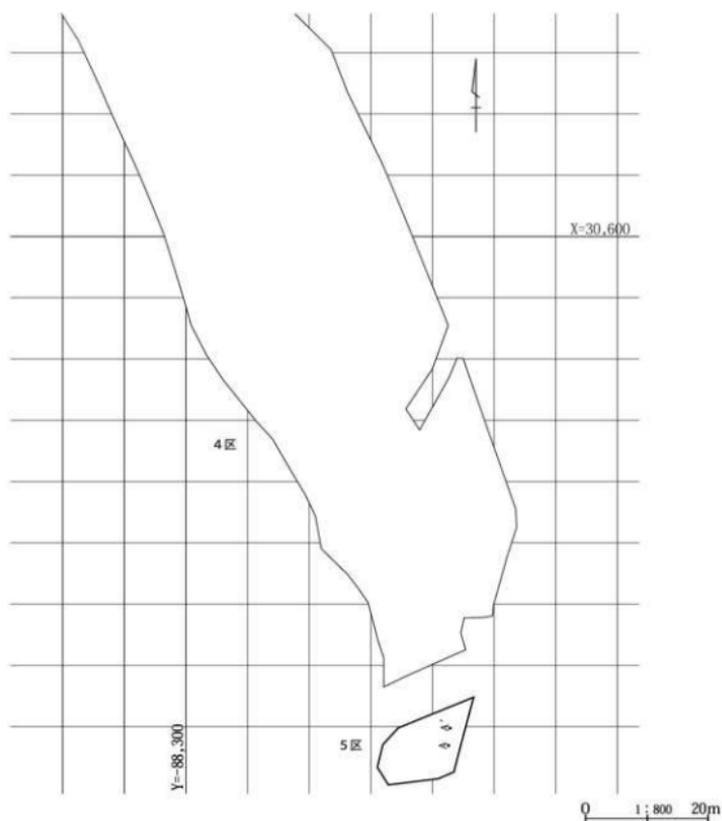


第158図 3区旧石器試掘トレンチ位置図及び土層断面図

第2章 検出された遺構と遺物

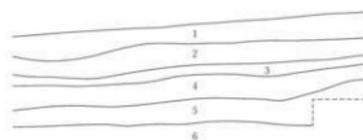


第159図 4区旧石器試掘トレンチ位置図及び土層断面図



.A., 1:100.50m

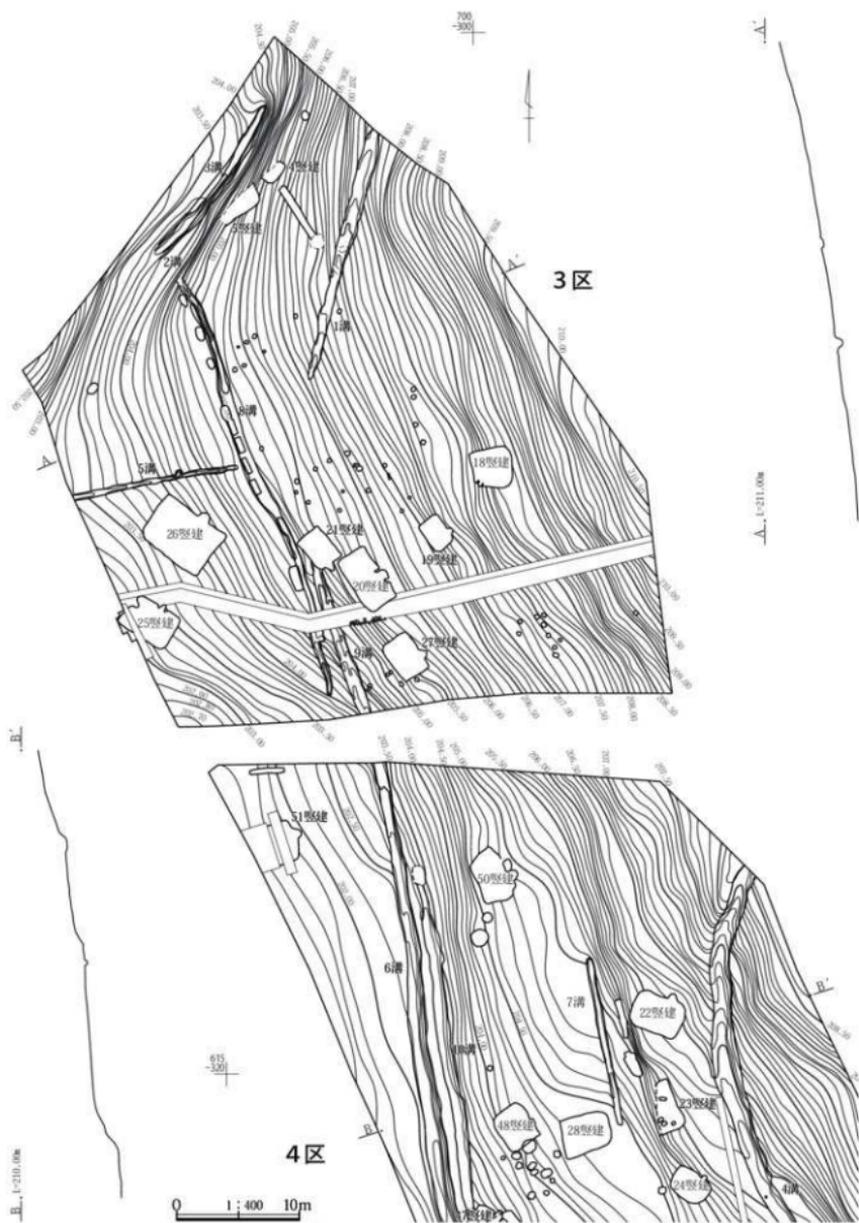
.A'



5区トレンチ

- 1 硯研作土 浅間A軽石 (As-A) を多く、浅間B軽石 (As-B) を含む。
- 2 暗褐色土 As-B を多く含む。
- 3 浅間B軽石 (As-B) 層
- 4 黒色土 粘性土。
- 5 黒褐色土 浅間C軽石 (As-C) を含む。
- 6 暗褐色土 浅間山起源の礫土・藤岡バミス等を含む。

第160図 5区トレンチ位置図及び土層断面図



第161图 3区・4区地形平・断面图

第6項 遺構外出土遺物

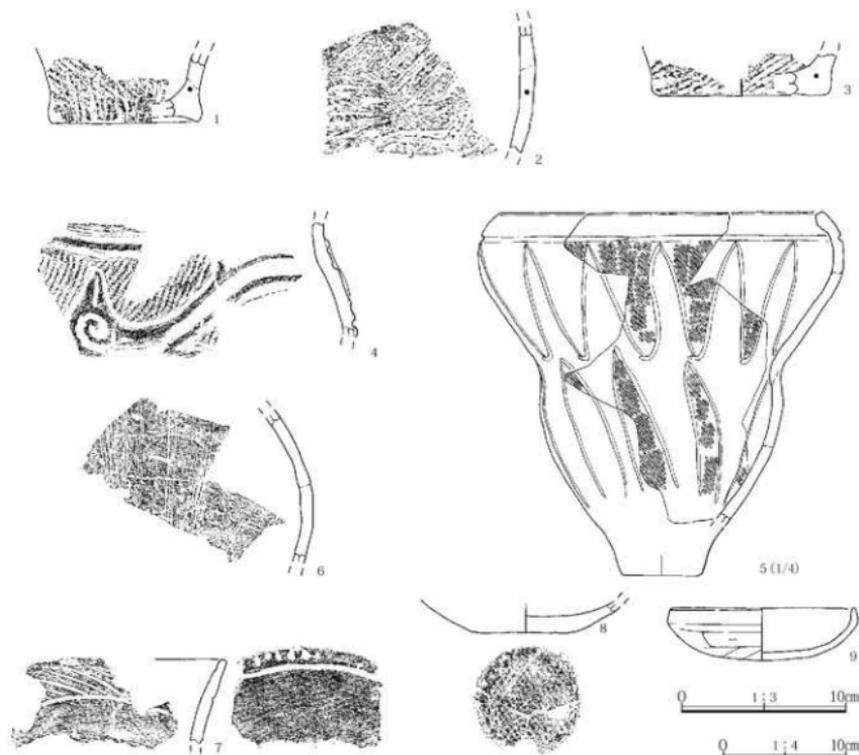
本遺跡は、横野台地の樹枝状に入り込む開析谷に挟まれた狭い台地上の緩斜面に展開し、調査区1・2区の南東部から隣接の3区にかけて、遺構検出面下に埋没谷が存在する。この谷を埋める暗褐色土内より多数の遺物が出土している。この遺物中には、瓦の出土も若干みられる。土器の主体は須恵器や黒色土器、灰軸陶器の椀である。このうち、図示できたものは黒色土器4点、灰軸陶器24点であるが、未掲載としたものには黒色土器91点、灰軸陶器155点と集落から出土している量より多い。灰軸陶器をみると椀が大部分を占め、皿が若干含まれる状態である。生産地は胎土などからすべて東濃産と判断で

きる。期的には2区No.22の椀が内面底部にも刷毛による施軸が施されていることから、光ヶ丘2号窯式期古段階に比定できるが、大部分は大原2号窯式期に比定される。また、黒色土器は椀が大部分を占めているが口径や底軸がやや小さくなった段階であることから10世紀代の年代観が与えられる。

こうした灰軸陶器や黒色土器を多く含む食膳具が廃棄されている状態は、4区礎石の存在などと併せ、谷地の東側一帯に竪穴建物など庶民の居住施設ではなく、富裕層住宅や公的施設の存在が想定できる。

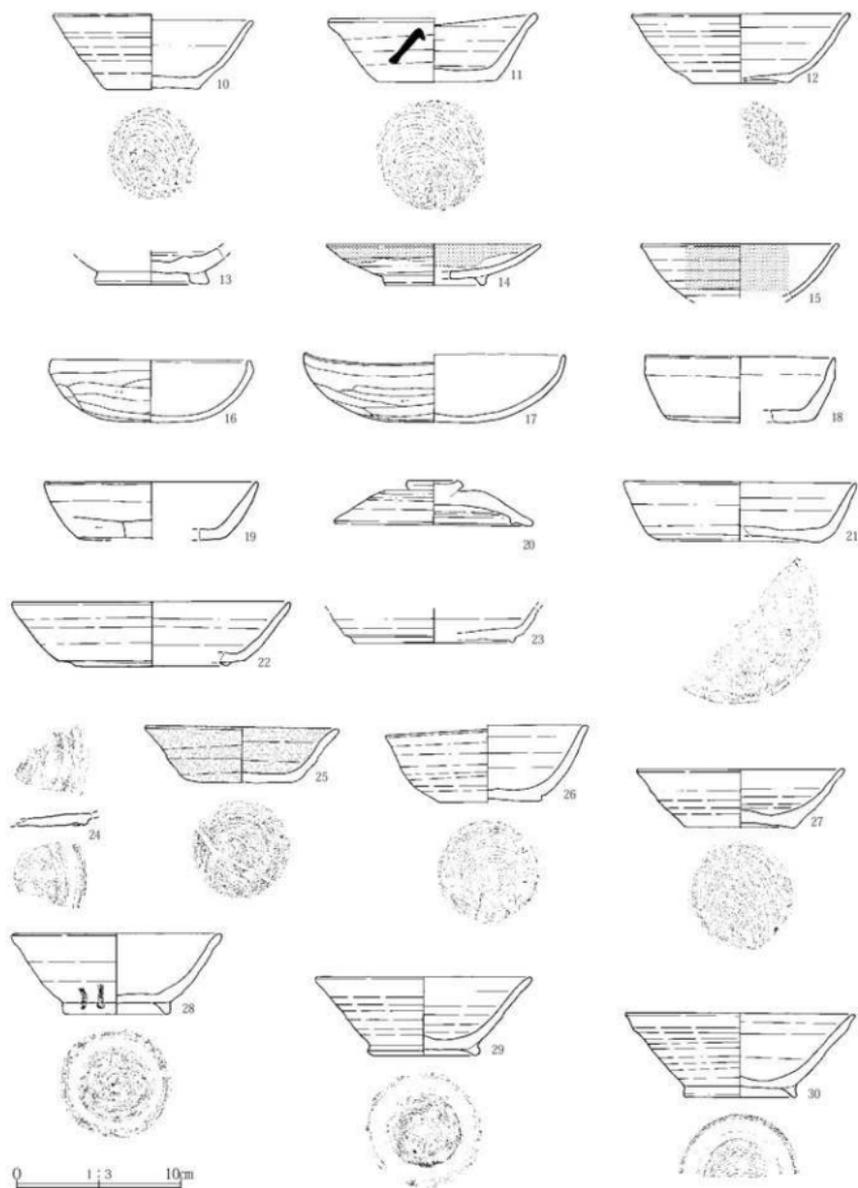
主に表土除去作業から遺構確認作業において遺構以外の地点から採取された資料を以下に掲げる。

(第162～173図 PL.139～142)

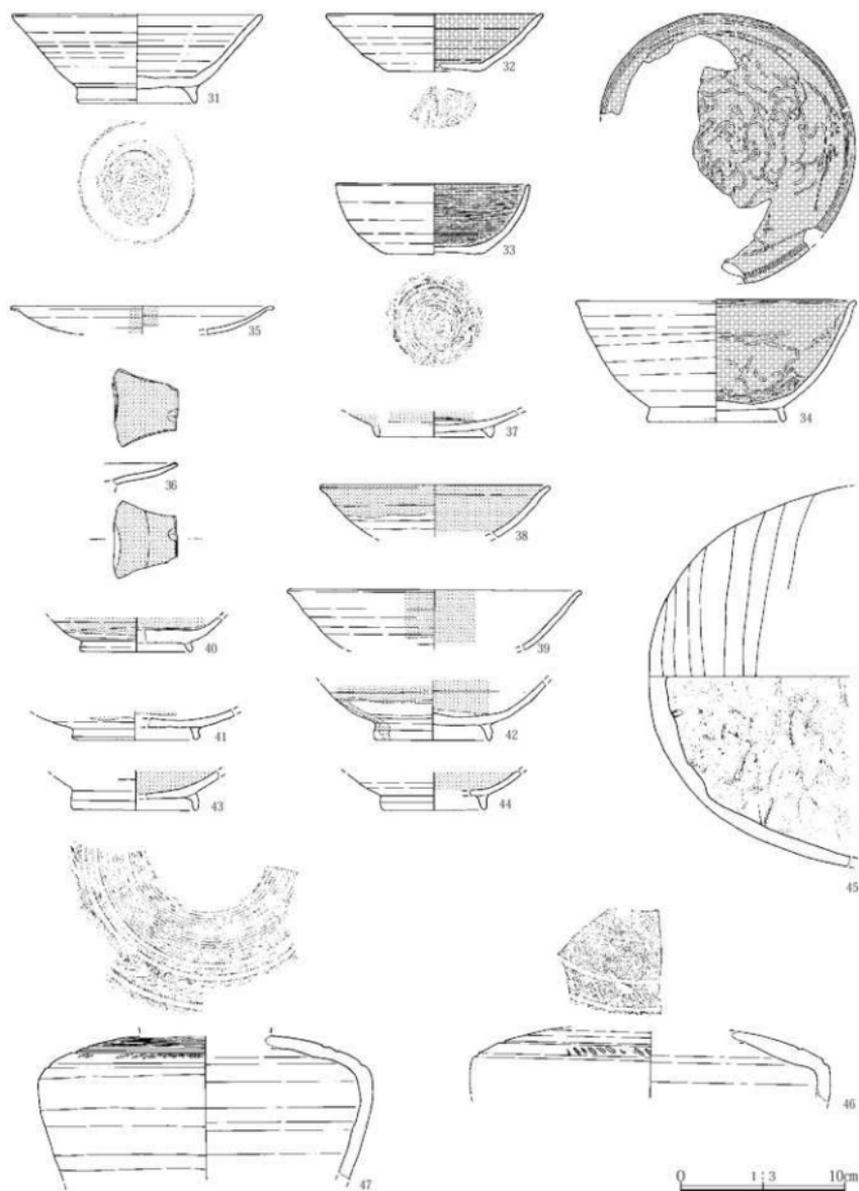


第162図 1区遺構外出土遺物(1)

第2章 検出された遺構と遺物

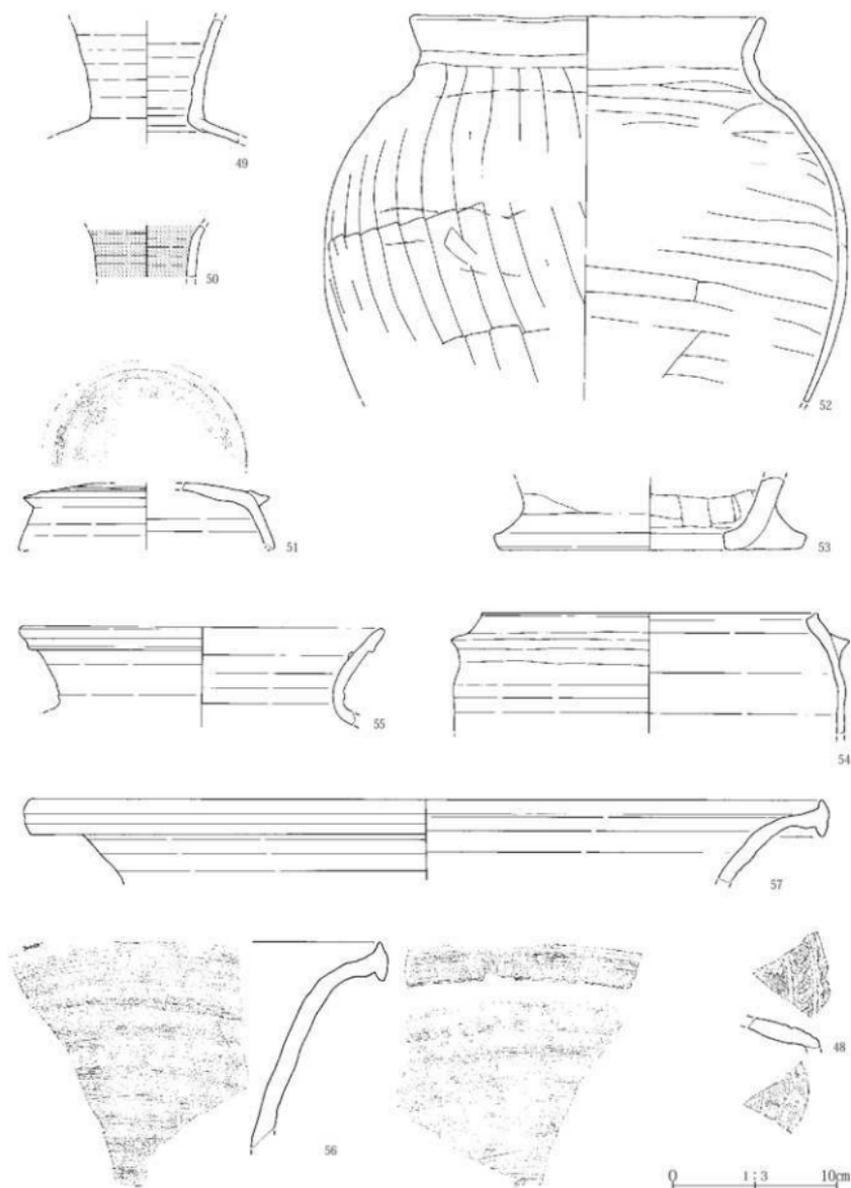


第163図 1区遺構外出土遺物(2)

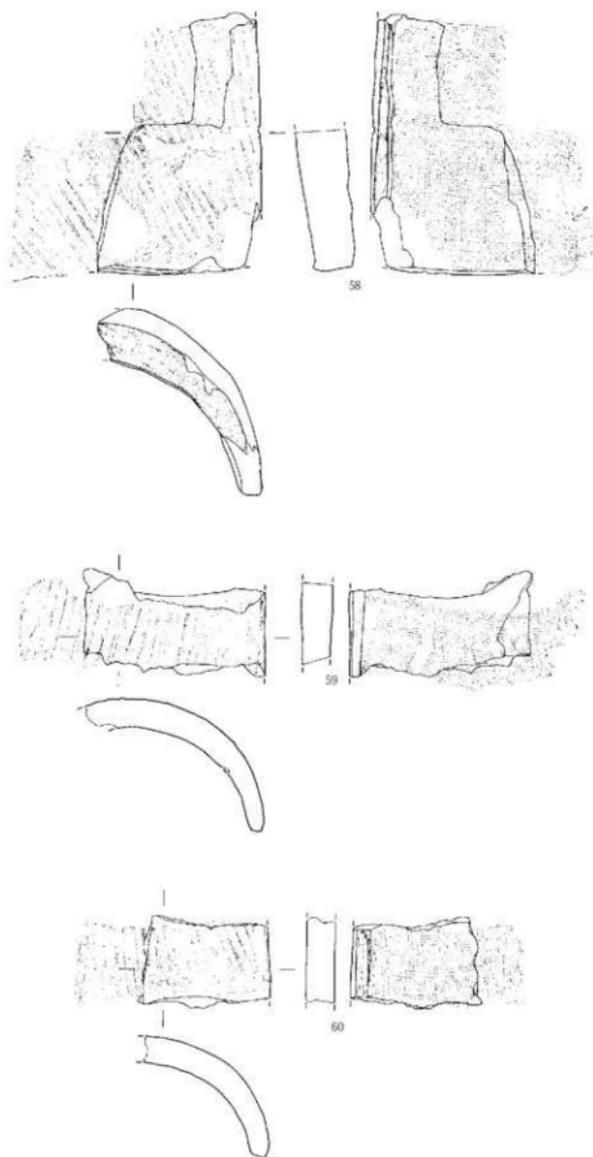


第164図 1区遺構外出土遺物(3)

第2章 検出された遺構と遺物



第165図 1区遺構外出土遺物(4)



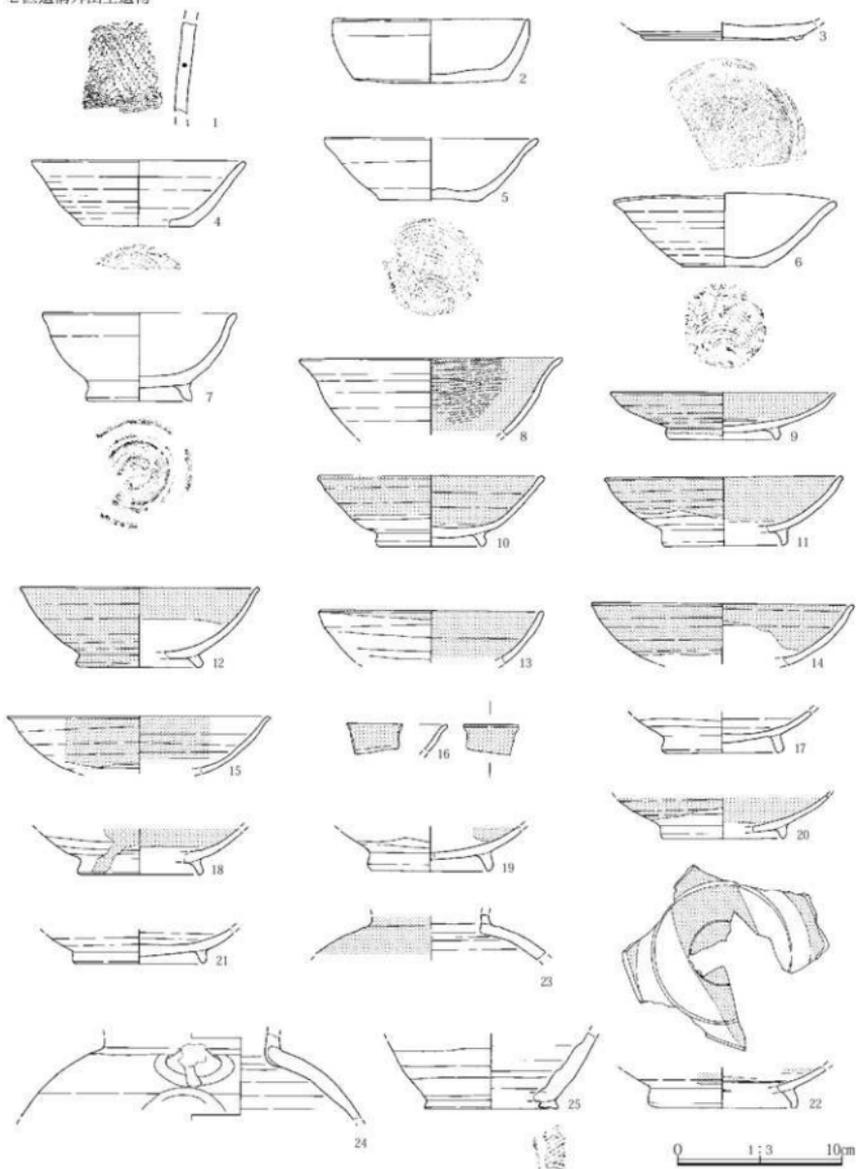
0 1:3 10cm

第166図 1区遺構外出土遺物(5)

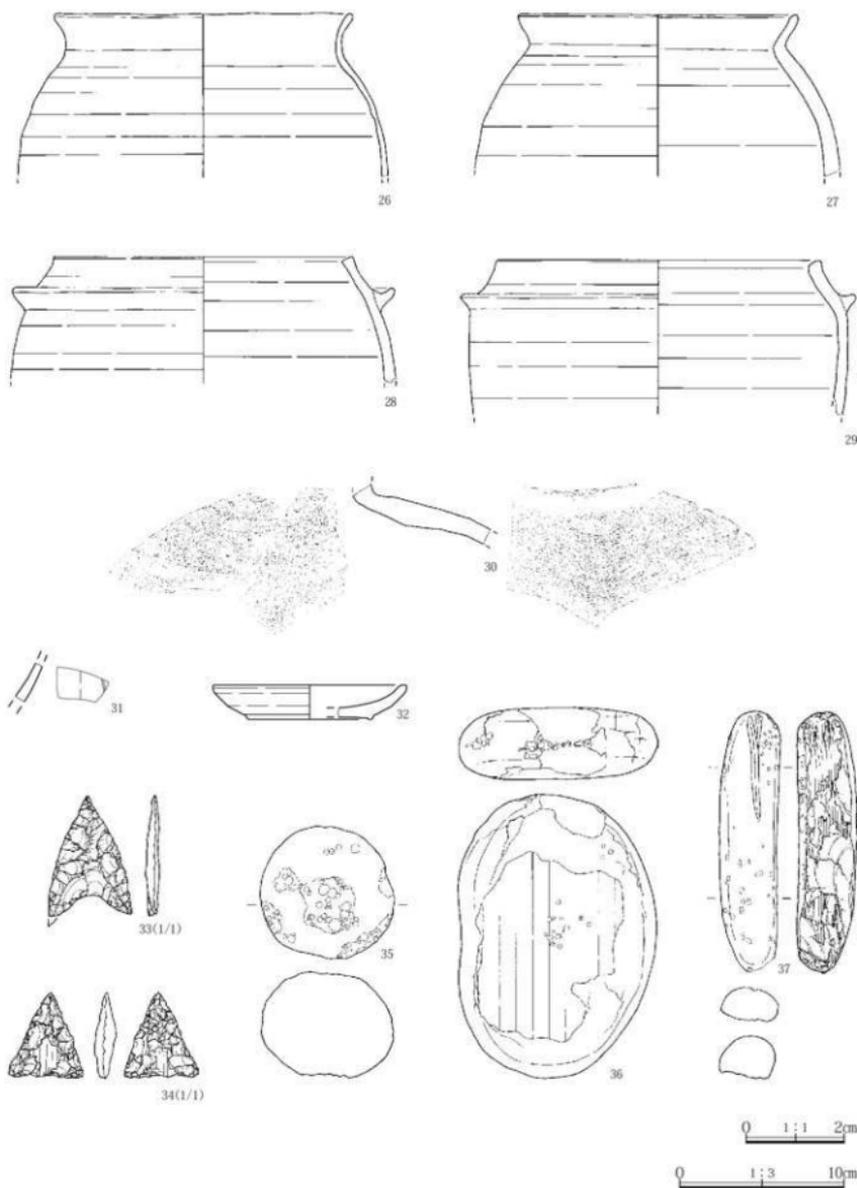


第167図 1区遺構外出土遺物(6)

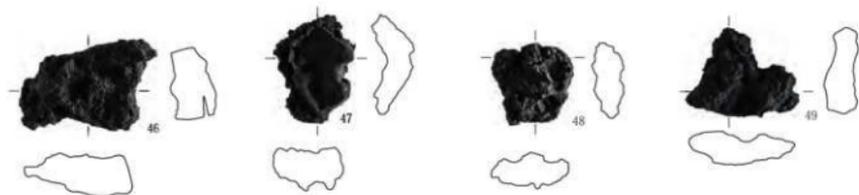
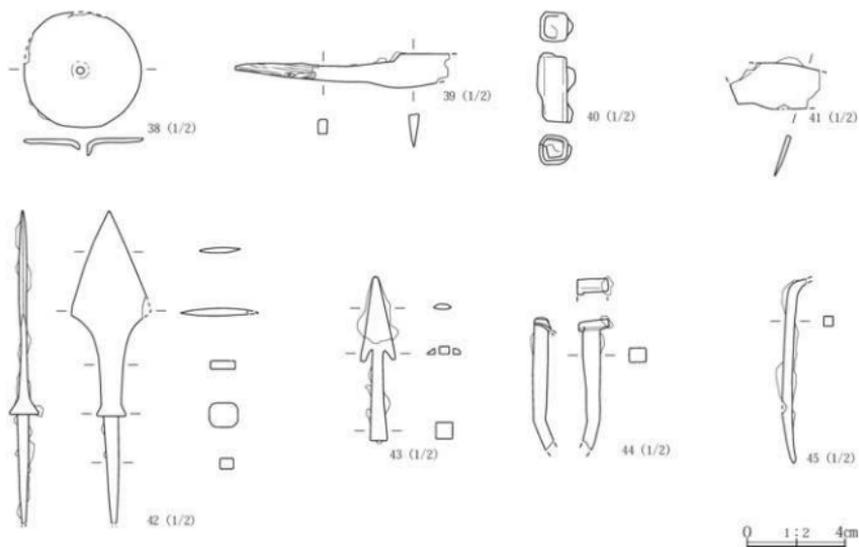
2区遺構外出土遺物



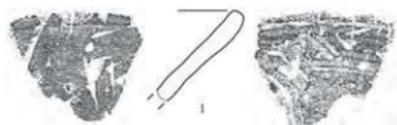
第168图 2区遺構外出土遺物(1)



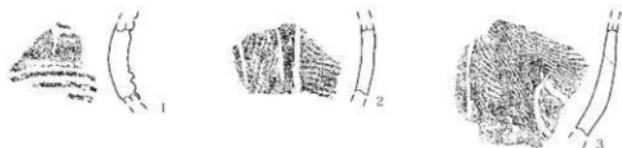
第169図 2区遺構外出土遺物(2)



第170図 2区遺構外出土遺物(3)



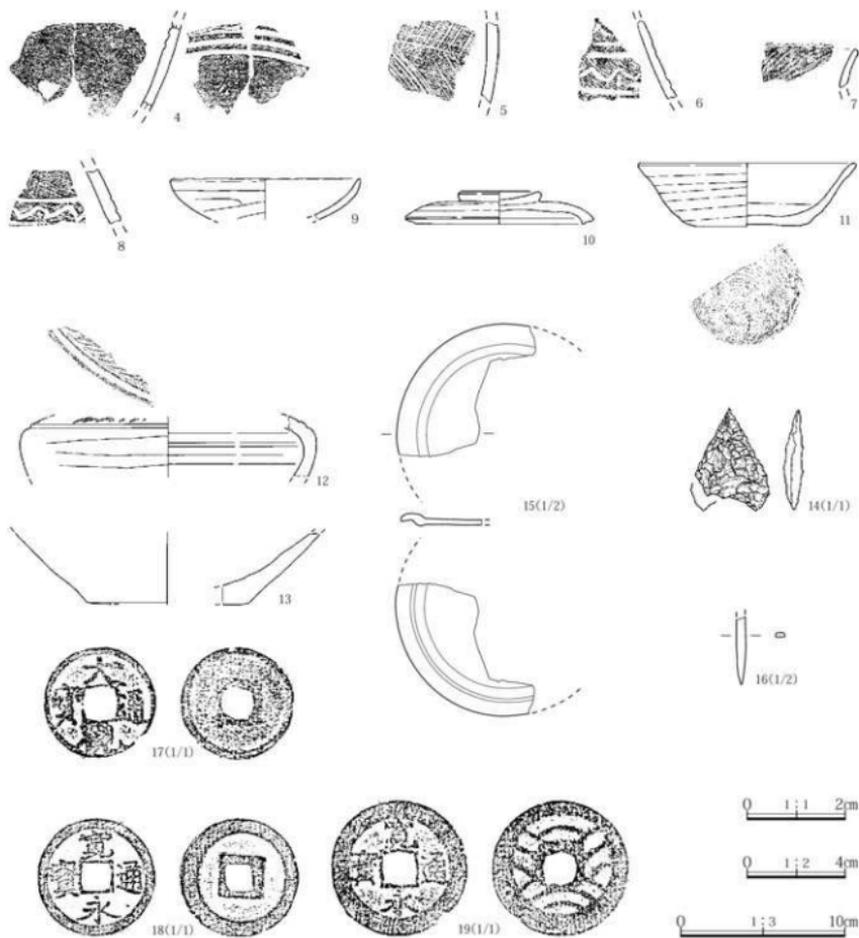
第171図 3区遺構外出土遺物



第172図 4区・その他の遺構外出土遺物(1)



第2章 検出された遺構と遺物



第173図 4区・その他の遺構外出土遺物(2)

土師器・須恵器等観察表凡例

1 種類

文化庁文化財部記念物課監修2010年『発掘調査のてびき』に準じて土師器、須恵器、黒色土器、施釉陶器(灰釉陶器)、土製品等に種別している。

なお、古墳時代に黒色処理を施された土器については、その成整形から土師器とした。

その後の奈良時代中頃から出現する内面及び内外面を黒色処理された土器については、成整形から黒色土器として種別してある。

2 器種

文化庁文化財部記念物課監修2010年『発掘調査のてびき』に準じて杯、碗、高杯、盤、皿、鉢、埴、器台、壺・瓶(長頸壺、短頸壺、平瓶、横瓶、提瓶、罎)、甕、硯等の名称を使用している。なお、杯と碗の区分は、器高/口径比が大きいものを碗としているが、明確に数値化できていない。壺と甕との区分は、頸部/胴部最大径比によって区分しているが、例外として胴部最大径より頸部系径の大きい形態である広口壺と呼称しているものも存在する。

3 残存率

概ね全体の比率で「完形」、「3/4」、「1/2」等で表示している。なお、1/4以下については、「口縁部片」、「底部片」等の部位片で表示している。

4 計測値

計測力所は、以下のように省略している。

口：口径、底：底径、高：器高、台：高台径、摘：摘径、カ：杯蓋等のカエリ径、頸：頸部径、胴：胴部最大径、孔：甕・有孔鉢などの底部に設けられた孔径等である。この他の略称についてはそれぞれ備考等に表示した。

なお、単位はcmである。

5 胎土

記載中の表現にある細砂粒は、径2mm以下、粗砂粒は2～5mmのものを表す。5mm以上は、礫と表示した。

6 焼成

土師器は、比較的硬質に焼成されているものを「良好」、軟質や脆い状態のものを「軟質」、「不良」で表示してある。須恵器は、「還元焰」、「酸化焰」で表示してある。

7 色調

農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色調帖』に準じている。

8 特徴

成整形を中心に記載している。

9 備考

灰釉陶器は、猛投古窯跡群と東濃古窯跡群とを区分し、可能な限り各窯式期を判断して記載している。

10 掲載縮尺

原則 1/3で掲載している。

遺物観察表

第10表 竪穴建物出土遺物観察表

1号竪穴建物

棟目 No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 高	底 高	底 径			
第9区	1	土師器 杯	埋没上 1/3	口 11.8 高 3.9			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへら削り、口唇部は僅かに内湾する。	
第9区 PL-120	2	土師器 杯	埋没上 ほぼ完形	口 12.7 高 2.8			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部は上平がナデ、下平から底部は手持ちへら削り、器面摩滅のため削り方向不明。	
第9区	3	土師器 杯	埋没上 1/2	口 12.8			細砂粒/良好/に ぶい相	口縁部は横ナデ、体部は上平がナデ、下平から底部は手持ちへら削り。	
第9区 PL-120	4	土師器 杯	埋没上 完形	口 13.4 高 4.3			細砂粒/良好/に ぶい黄橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへら削り。口縁部横ナデと体部へら削りの間にナデ部分が残る。	
第9区 PL-120	5	土師器 杯	カマド、カマド種方 3/4	口 12.9 底 6.0	高 3.9		細砂粒/良好/に ぶい黄橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへら削り。体部と底部は器面摩滅のため単位不明。内面は体部から口縁部に放射状暗文。	
第10区 PL-120	6	土師器 杯	体面 完形	口 13.7 底 10.1	高 3.7		細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへら削り。体部と底部は器面摩滅のため単位不明。	
第10区 PL-120	7	土師器 杯	体面 3/4	口 15.0 底 10.4	高 4.4		細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへら削り。	
第10区 PL-120	8	土師器 杯	カマド 3/4	口 15.0 底 10.4	高 4.7		細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへら削り。体部は器面摩滅のため単位不明。	
第11区 PL-120	9	土師器 杯	体面、カマド ほぼ完形	口 15.1 底 10.8	高 4.2		細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへら削り。外面の体部と底部の境は明瞭な線をなす。	
第11区 PL-120	10	土師器 杯	埋没上 ほぼ完形	口 16.0 底 10.5	高 4.6		細砂粒/良好/に ぶい相	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへら削り。内面は体部から口縁部に放射状暗文。	
第11区	11	須恵器 蓋	埋没上 口縁部～天井部片	口 13.2 径 10.8			細砂粒/還元焼 灰黄	ロクロ整形、回転は右回り。天井部は回転へら削り、内面にカエリを作る。	
第11区	12	須恵器 杯蓋	埋没上 口縁部～天井部片	口 15.6 径 12.8			細砂粒/還元焼 灰白	ロクロ整形、回転は右回り。天井部は中程まで回転へら削り、内面にカエリを作る。	
第11区	13	須恵器 杯蓋	体面 口縁部～天井部片	口 15.8 径 12.8			細砂粒/還元焼 灰黄	ロクロ整形、回転は右回り。天井部は中程まで回転へら削り、内面にカエリを作る。	
第11区 PL-120	14	須恵器 杯	体面 ほぼ完形	口 12.7 底 8.6	高 4.2		細砂粒/還元焼 灰白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は手持ちへら削り。	
第11区	15	須恵器 有台杯	P4 底部片	底 11.4 径 11.0			細砂粒/還元焼 明オリーブ灰	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転へら削り、高台は貼付。断面は酸化塩状。	
第11区 PL-120	16	土師器 小型甕	カマド、埋没上 口縁部～胴部下位片	口 11.6 径 13.3			細砂粒/良好/に ぶい相	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り、上平は器面摩滅のため単位不明。内面は胴部にヘラナデ。	
第12区	17	土師器 甕	体面 口縁部～胴部上位片	口 12.6			細砂粒/良好/に ぶい相	口縁部は横ナデ、胴部はへら削り。内面は胴部にヘラナデ。	
第12区	18	土師器 甕	1床下上坑 口縁部～胴部上位片	口 15.0			細砂粒/良好/明 赤褐	口縁部は横ナデ、胴部はへら削り。内面は胴部にヘラナデ。	
第12区	19	土師器 甕	1床下上坑 口縁部～胴部上位片	口 21.6			細砂粒/良好/明 赤褐	口縁部は横ナデ、胴部はへら削り。内面は胴部にヘラナデ。	
第12区 PL-120	20	土師器 甕	カマド、埋没上 口縁部～胴部上位片	口 26.0			細砂粒/良好/に ぶい相	口縁部は横ナデ、胴部はへら削り。内面は胴部にヘラナデ。	
第12区	21	土師器 甕	埋没上 底部～胴部下位片	底 8.0			細砂粒/良好/橙	底部と胴部はへら削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。外面胴部は器面剥落により単位不明。	
第12区	22	土師器 甕	体面 底部～胴部下位片	底 8.8			細砂粒/良好/橙	内面胴部に輪轆み痕が残る。底部と胴部はへら削り。内面は底部から胴部にヘラナデ、器面摩滅のため単位不明。	
第12区 PL-120	23	土師器 台付甕	埋没上 上部～胴部下平	底 6.2 台 9.6			細砂粒/良好/明 赤褐	台部は胴部に貼付。胴部はへら削り、台部は横ナデ。内面は底部から胴部にヘラナデ。	
第12区 PL-120	24	須恵器 甕	体面 口縁部～胴部上位片	口 22.7			細砂粒・粗砂粒 /還元焼 灰黄	胴部は引き締め成形。口唇部はロクロ整形。口唇部は上下に引き出されるように作られ、口縁部下平にも平行引き出し痕が残る。胴部も平行引き出し痕が残る。内面は口縁部にヘラナデ。胴部に同心円状アケ痕が残る。	
第12区	25	須恵器 甕	埋没上 口縁部片				細砂粒・磯 元焼 灰	口縁部はロクロ整形。口唇部下に凸帯、中に凹線が走る。凸帯と凹線の間に波状文が施されている。	
第12区 PL-120	26	鉄製品 不明	一部	長 (7.0) 厚 幅 1.0 重 6.3	0.2		//	断面長方形。U字状に曲げられている。左右がずれて曲げられており、製品としての形状にはなっていない。	
第12区 PL-120	27	鉄製品 不明	一部欠損	長 (17.5) 厚 幅 0.9 重 5.0	0.7		//	2片に分かれており、同一体と思われるが、接合関係は確認できない。一方は四角形の断面のまま、袴状に太くなる。	
第12区 PL-120	28	鉄製品 釘	ほぼ完形	長 (5.0) 厚 幅 0.7 重 5.2	0.7		//	頭部が折り曲げられているが、周囲が錆に覆われており、はっきりしない。体部の途中から折れ曲がっている。	

2号竪穴建物

棟目 No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 高	底 高	底 径			
第14区	1	土師器 杯	埋没上 口縁部～底部片	口 14.9 底 10.0			細砂粒/良好/明 赤褐	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへら削り、器面摩滅のため単位不明。内面は体部から口縁部に放射状暗文。	
第14区	2	土師器 杯	埋没上 口縁部～体部片	口 12.1			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部は手持ちへら削り。	
第14区	3	土師器 杯	埋没上 口縁部～体部片	口 12.8			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部は手持ちへら削り、器面摩滅のため単位不明。	

挿入 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第14図 PL.120	4	須臾器 杯蓋	床面 完形	□ 13.2 幅 10.0	高 4.3 厚 2.8	細砂粒/還元焰/ 灰オリーブ	ロクロ整形、回転は右回り。天井部は中程まで回転ヘラ削り。内面にカエリを作る。縁はボタン状の粘土板を貼付し周囲をつまみ上げ環状にする。	
第14図 PL.120	5	須臾器 杯蓋	床面 完形	□ 15.8 幅 12.8	高 4.7 厚 3.5	細砂粒・礫/還 元焰/灰白	ロクロ整形、回転は右回り。外面に重積さびが残る。天井部は中程まで回転ヘラ削り。内面にカエリを作る。縁はボタン状の粘土板を貼付し周囲をつまみ上げ環状にする。	
第14図 PL.120	6	須臾器 杯蓋	床面 1/5	□ 11.7 幅 7.8		細砂粒/還元焰/ 浅黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は手持ちヘラ削り。	
第15図 PL.120	7	土師器 小型甕	床面 口縁部～胴部上位片	□ 16.0		細砂粒/良好/周	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。	
第15図 PL.120	8	土師器 費	カマド、埋没上 口縁部～胴部上位片	□ 22.1		細砂粒/良好/周	口縁部から頸部は横ナデ、胴部は下位から頸部に向けての縦方向ヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。	
第15図 PL.121	9	土師器 費	床面、カマド 口縁部～胴部上位片	□ 23.0		細砂粒/良好/明 赤褐	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。	
第15図 PL.120	10	土師器 費	埋没上 口縁部～胴部上位片	□		細砂粒/良好/周	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。	
第15図 PL.121	11	土師器 費	床面、埋没上 胴部下半			細砂粒・粗砂粒/ 良好/明褐	胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	
第15図 PL.121	12	巖石		長 13.6 幅 7.2	厚 3.8 重 501.8	粗粒輝石安山岩 //	礫の小口部に敲打痕がある。下端部は破損する。礫形状は扁平礫の部に属す。	
3号竪穴建物								
挿入 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第17図 PL.121	1	須臾器 椀	床直、埋没上 2/3	□ 11.7 幅 5.6	高 3.8	多量の細砂粒/ 還元焰/ぶい 黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り無調整。	
第17図 PL.121	2	須臾器 椀	埋没上 1/4	□ 12.4 幅 6.0	高 3.7	細砂粒/酸化焰/ 浅黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り無調整。	
第17図 PL.121	3	須臾器 椀	カマド、貯蔵穴 口縁部～体部片	□ 14.2		細砂粒/酸化焰/ 浅黄	ロクロ整形、回転は右回り。	
第17図 PL.121	4	須臾器 椀	床直 底部～体部	底 6.8 幅 6.0		細砂粒/酸化焰/ 浅黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り、高台は貼付。	
第17図 PL.121	5	灰輪陶器 椀	床面 口縁部片	□ 14.8		微砂粒/還元焰/ 灰白	ロクロ整形、回転は右回り。縁輪方法は漬け付けか、口唇部は僅かに外反す。	大原2号竪 穴跡
第17図 PL.121	6	土師器 費	床直、側方 口縁部～胴部上位片	□ 12.4		細砂粒/良好/周	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。	
第17図 PL.121	7	土師器 費	カマド 口縁部～胴部上位片	□ 15.8		細砂粒/良好/周	口縁部は横ナデ、下下から底部は手持ちヘラ削り。	
第17図 PL.121	8	巖石		長 11.3 幅 4.9	厚 4.8 重 396.4	粗粒輝石安山岩 //	礫の上下両面に強い敲打痕がある。表面は摩滅しているようにも見えるが、窪んだ部分も同様で、認定に積極的にはなれない。棒状器を用いる。	
4号竪穴建物								
挿入 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第19図 PL.121	1	須臾器 椀	床面 完形	□ 12.9 幅 7.0	高 3.5 厚 0	細砂粒・礫/還 元焰/灰白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り無調整。	
第19図 PL.121	2	須臾器 椀	床面 1/4	□ 15.2 幅 7.4	高 6.0	細砂粒/還元焰/ 灰白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切りか、高台は貼付。	
第19図 PL.121	3	須臾器 椀	床面 ほぼ完形	□ 15.7 幅 8.2	高 6.0 厚 5.6	細砂粒/還元焰/ 灰白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り、高台は貼付。	
第19図 PL.121	4	須臾器 椀	床面 1/4	□ 16.2 幅 8.6	高 8.2 厚 5.4	細砂粒・礫/還 元焰/灰白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り、高台は貼付。	
第19図 PL.121	5	須臾器 椀	側方 底部～体部	底 7.4		細砂粒/還元焰/ 灰	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り、高台は貼付が剥落。	
第19図 PL.121	6	土師器 費	カマド 口縁部～胴部上半片	□ 18.8 幅 21.2		細砂粒/良好/周	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。	
第19図 PL.121	7	土師器 費	床面、カマド、埋没上 口縁部～胴部中位片	□ 18.8 幅 24.3		細砂粒/良好/明 赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。器面摩滅のため単位不明、残存部下位に輪積み痕が残る。	
第20図 PL.121	8	土師器 費	床面、埋没上 口縁部～胴部中位	□ 19.6 幅 21.8		細砂粒/良好/周	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。	
第20図 PL.121	9	土師器 費	床面、カマド、埋没上 口縁部～胴部中位	□ 20.8 幅 22.0		細砂粒/良好/ ぶい赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。	
第20図 PL.121	10	土師器 費	床面、カマド、埋没上 口縁部～胴部中位	□ 21.2 幅 23.0		細砂粒/良好/明 赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。	
第20図 PL.121	11	土製品 羽口	破片	長 4.0 幅 5.0	厚 3.0 重 51.1	//	羽口の胎土内に0.3mm程度の砂が含まれる。一部やや溶融し、ガラス化している。付着している薄質は密。	
5号竪穴建物								
挿入 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第21図 PL.122	1	土師器 杯	埋没上 1/3	□ 11.4 幅 7.2	高 3.9	細砂粒/良好/周	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り、器面摩滅のため単位不明。	
第21図 PL.122	2	土師器 杯	床面、埋没上 1/2	□ 13.0 幅 8.2	高 4.0	細砂粒/良好/明 黄褐	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り、器面摩滅のため単位不明。	

遺物観察表

排 戻 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
				口	底			
第21図	3	土師器 上鉢	床面 1/4	口 15.0 底 10.0		細砂粒/良好/黄褐色	口縁部は横ナデ。体部から底部は手持ちへう削り、器面厚減のため単位不明。内面は体部から口縁部に斜放射状ヘラミガキ。口縁部は器面厚減のため単位不明。	
第21図	4	須恵器 須	床面 口縁部～底部片	口 12.6 底 7.0	高 3.5	細砂粒/還元焰/黄灰	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り無調整。	
第21図	5	須恵器 検	埋没土 口縁部～底部片	口 12.8 底 6.6	高 3.5	細砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り無調整。	
第21図	6	須恵器 検	床面、埋没土	口 13.0 底 7.0	高 3.7	細砂粒/酸化焰/にぶい濁	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り無調整。	
第21図	7	須恵器 有台杯	床面、埋没土	口 13.0 底 8.2	台 8.6 底 3.7	細砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転へう削り、高台は貼付。体部下面に稜を作る。	
第21図	8	須恵器 検	埋没土 口縁部～底部片	口 13.0		細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転は右回り	
第22図	9	須恵器 検	床面、埋没土 口縁部～底部片	口 14.4		細砂粒/還元焰/黄灰	ロクロ整形、回転は右回り	
第22図	10	須恵器 大型検	床面 口縁部～体部片	口 24.4		細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転は右回り	
第22図	11	須恵器 検	埋没土 底部～体部片	底 6.2 台 5.8		細砂粒/酸化焰/外焼/灰オリーブ	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り、高台は貼付。外面は焼し焼成。	
第22図	12	須恵器 検	床面 底部～体部片	底 8.0 台 7.0		細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り、高台は貼付。	
第22図	13	須恵器 検	埋没土 底部～体部片	底 9.0 台 9.6		細砂粒/還元焰/黄灰	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り、高台は貼付。	
第22図 PL.122	14	土師器 検	床面 口縁部～胴部上位片	口 16.8 削 17.8		細砂粒/良好/明赤濁	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はへう削り。内面は胴部にヘラナデ。	
第22図 PL.122	15	土師器 検	床面、埋没土 口縁部～胴部上位片	口 19.0 削 21.4		細砂粒/良好/明赤濁	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はへう削り。内面は胴部にヘラナデ。	
第23図 PL.122	16	土師器 検	床面、埋没土 口縁部～胴部上位片	口 19.6 削 22.8		細砂粒/良好/にぶい黄濁	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はへう削り。内面は胴部にヘラナデ。	
第23図 PL.122	17	土師器 検	床面、埋没土 口縁部～胴部上位片	口 20.6		細砂粒/良好/明赤濁	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はへう削り。内面は胴部にヘラナデ。	
第23図	18	在地系土器 内耳瓶	口縁部片	口 一 底 一	高 一	にぶい濁//	器表は灰黒色。器器厚く口縁部は短い。口縁部横溝で、内面は丁寧な煮で。体部外面は撫で。	14世紀後半～15世紀中葉
第23図 PL.122	19	鉄製品 不明	一部欠損	長 11.6 幅 0.7	厚 0.7 重 20.3	//	断面形状は丸く、端部の一方が折れている。詳細不明。	
6号整穴建物								
排 戻 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
口	底							
第24図	1	土師器 上鉢	床面 口縁部～胴部上位片	口 23.0		細砂粒/良好/明赤濁	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はへう削り。内面は胴部にヘラナデ。	
7号整穴建物								
排 戻 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
口	底							
第25図	1	須恵器 検	埋没土 底部～体部小片	底 5.6 台 5.0		細砂粒/還元焰/灰黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り、高台は貼付。	
第25図	2	須恵器 検	床面 底部	底 6.2 台 6.3		細砂粒/酸化焰/明黄濁	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り、高台は貼付。	
第25図 PL.122	3	鉄製品 不明	破片	長 4.8 幅 1.5	厚 0.2 重 3.8	//	一見、刀子の破片のように見える。刃のように見える形状があるが、形としてははっきりとしない。	
第25図 PL.122	4	鉄製品 鏡カ	一部欠損	長 5.1 幅 0.6	厚 0.5 重 6.2	//	体部の一部が残存している。一方の端部が大きく錆に覆われている。某にあたる部分の断面は丸く、先端の断面はレンズ状となる。	
8号整穴建物								
排 戻 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
口	底							
第26図	1	須恵器 羽釜	床面 口縁部～胴部上半片	口 18.0 削 22.0	胴 21.6	細砂粒/還元焰/灰オリーブ	ロクロ整形、回転は右回り。胴は貼付。口縁部端は平坦面を作る。	
第26図	2	須恵器 羽釜	床面、埋没土 底部～胴部下位片	底 7.0		細砂粒/還元焰/黄濁	底部、胴部ともへう削り。	
第26図 PL.122	3	巖石	長 9.9 幅 4.1	厚 2.3 重 124.6		粗粒輝石安山岩	板状を呈す棒状塊の上端側先端部および側面に鋭い稜打痕がある。表面は窪んだ部分も摩滅しているが、摩耗痕として認定するのは難しい。	
9号整穴建物								
排 戻 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
口	底							
第28図	1	須恵器 検	カマド 口縁部～底部片	口 15.6 底 7.2	高 4.7	細砂粒・粗砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転は右回り。底部切り離し技法不明。高台貼付の可能性有り。	
第28図 PL.122	2	須恵器 検	カマド 3/4	口 15.2 底 8.4		細砂粒・粗砂粒/還元焰/灰黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転へう削り、高台は貼付が剥落。	
第28図 PL.122	3	須恵器 検	口 15.8 底 8.1	台 7.6 高 6.0		細砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り、高台は貼付。内面口縁部にスス付着範囲有り。	

採 掘 PL.No.	No.	種 類 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
第289R	4	須恵器 検	周溝 底部～体部片	底 台	7.9 7.6	高 5.4 10.4	細砂粒/還元焼/ 黄灰	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付。	
第289R PL-122	5	須恵器 小瓶	床面 ほぼ完整	口 底	4.0 7.8	高 5.4 10.4	微砂粒/還元焼/ 灰白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整、胴部下位は回転へら削り。施釉方法は不明。	光ヶ丘1号 窯式期
第289R PL-122	6	須恵器 小瓶	埋没上 底部～胴部下半	口 底	4.0 6.9	高	微砂粒/還元焼/ 灰白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整、胴部の最下部に回転へら削り。施釉方法は不明。	
第289R PL-122	7	土師器 カマド	口縁部～胴部中段片	口 底	18.8 20.2	高	細砂粒/良好/明 赤褐色	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面は胴部にへらナデ。	
第289R PL-122	8	土師器 カマド	埋没上 口縁部～胴部中段片	口 底	18.8 21.2	高	細砂粒/良好/に ぶい赤褐色	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面は胴部にへらナデ。	
第289R	9	土師器 豊	床面 口縁部～胴部上位片	口 底	18.8	高	細砂粒/良好/明 赤褐色	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面は胴部にへらナデ。	
第289R PL-123	10	土師器 カマド	埋没上 口縁部～胴部中段片	口 底	19.8 21.3	高	細砂粒/良好/橙 赤褐色	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面は胴部にへらナデ。	
第289R	11	土師器 豊	口縁部～胴部上位片	口 底	20.8	高	細砂粒/良好/明 赤褐色	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面は胴部にへらナデ。	

10号窯穴建物

採 掘 PL.No.	No.	種 類 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
第309R PL-123	1	須恵器 検	床下土坑、側方、カマド 下側方、埋没上 1/2	口 底	12.2 6.4	高 3.6	細砂粒/酸化焼/ 橙	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第309R PL-123	2	須恵器 小瓶	カマド 1/3	口 底	12.0 5.8	高 4.1	細砂粒/酸化焼/ にぶい黄褐色	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第309R PL-123	3	須恵器 小瓶	カマド 1/3	口 底	12.0 5.8	高 4.2	細砂粒/還元焼/ 灰白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第309R	4	須恵器 杯	カマド 1/4	口 底	12.6 6.0	高 3.9	細砂粒/酸化焼/ にぶい黄褐色	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第309R PL-123	5	須恵器 検	カマド、床下土坑、埋 没上 ほぼ完整	口 底	12.8 6.6	高 4.5	細砂粒/酸化焼/ にぶい黄褐色	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整、外面体部に墨書、判読不能。	
第309R	6	須恵器 杯	カマド 1/5	口 底	12.8 7.2	高 3.9	細砂粒/酸化焼/ 橙	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第309R	7	須恵器 検	カマド 底部～体部	口 底	7.2 6.8	高	細砂粒/酸化焼/ 明黄褐色	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付。	
第309R PL-123	8	黒色土器 鉢	埋没上 体部片				細砂粒/酸化焼/ にぶい黄褐色	ロクロ整形、回転方向不明。内面黒色処理。内面はへらミガキか、単位不鮮明。	
第309R PL-123	9	須恵器 鉢	床下土坑				//	内面に漆付着。	分析試料
第309R PL-123	10	灰輪陶器 匣	床下土坑、埋没上 1/2	口 底	14.2 6.2	台 高 6.0 5.2	微砂粒/還元焼/ 灰白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転へらナデ、高台は貼付。体部は回転へら削り。施釉方法は漬け掛か、	虎尻山1号 窯式期
第318R	11	灰輪陶器 匣	埋没上 口縁部小片				微砂粒/還元焼/ 灰白	ロクロ整形、回転は右回り。施釉方法は不明。口唇部は僅かに外反。	大原2号 窯式期
第318R	12	灰輪陶器 匣	埋没上 底部小片	底 台	7.0 6.4	高	微砂粒/還元焼/ 灰白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転へらナデ、高台は貼付。	光ヶ丘1号 窯式期
第318R PL-123	13	土師器 小型甕	カマド 口縁部～胴部片	口 底	14.2 15.6	高	細砂粒/良好/に ぶい黄褐色	ロクロ整形、回転は右回り。胴部下半はへら削り。	ロクロ土師 器
第318R PL-123	14	土師器 小型甕	床下土坑 底部～胴部下位	底	5.5	高	細砂粒/良好/に ぶい赤褐色	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。	ロクロ土師 器
第318R	15	須恵器 羽釜	カマド 口縁部～胴部上半片	口 底	15.0 20.2	胴 19.3	細砂粒/酸化焼/ 橙	ロクロ整形、回転は右回り。跨は貼付。胴部下半はへら削り。口唇部端は平坦面を作る。	
第318R PL-123	16	須恵器 羽釜	カマド、カマド側方、 貯蔵穴 口縁部～胴部片	口 底	21.0 26.2	胴 27.0	細砂粒/酸化焼/ 明黄褐色	ロクロ整形、回転は右回り。跨は貼付。胴部下位はへら削り。口唇部端は平坦面を作る。	
第318R PL-123	17	須恵器 羽釜	貯蔵穴、床下土坑 底部～胴部下位片	底	7.8	高	細砂粒/酸化焼/ 灰黄褐色	ロクロ整形、回転方向不明。底部と胴部はへら削り。	
第318R PL-123	18	磁石		長 幅 重	13.1 6.9 831.4	厚 6.5	粗粒輝石安山岩 //	先端部および踵部部に飛打痕が集中する。礎形状は角柱状とされるものであるが、側面観は三角形に近い。礎面は部人だ部分も摩耗していることから、摩耗痕と色するは難しい。	

11号窯穴建物

採 掘 PL.No.	No.	種 類 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
第329R PL-123	1	土師器 豊	貯蔵穴 口縁部～胴部片	口 底	14.0 16.2	高	細砂粒/良好/黒 色	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面は胴部にへらナデ。	
第329R	2	土師器 豊	埋没上 口縁部～胴部上位片	口 底	19.6	高	細砂粒/良好/に ぶい赤褐色	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面は胴部にへらナデ。	
第329R	3	土師器 豊	カマド側方 口縁部～胴部上位片	口 底	19.6 21.8	高	細砂粒/良好/橙 赤褐色	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面は胴部にへらナデ。	
第329R	4	土師器 豊	カマド 口縁部～胴部上位片	口 底	20.6	高	細砂粒/良好/明 赤褐色	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面は胴部にへらナデ。	
第329R	5	土師器 台付甕	床面、埋没上 台部～胴部下位片	底	4.0	高	細砂粒/良好/明 赤褐色	台部と胴部の貼付状態不明。胴部はへら削り、台部は横ナデ。内面は胴部がへらナデ。	

遺物観察表

12号型穴建物

採掘 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第338	1	土師器 杯	埋没上 口縁部～底部片	口 底	12.8 9.0		細砂粒/良好/黄	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。器面厚薄のため単位不明。	
第338	2	土師器 杯	床面 口縁部～底部片	口 底	13.4 9.4		細砂粒/良好/黄	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。器面厚薄のため単位不明。	
第338	3	土師器 杯	埋没上 口縁部～底部片	底	8.6		細砂粒/良好/に ぶい黄	口縁部は横ナデ、体部は上半がナデ部分が残る、下半から底部は手持ちヘラ削り。	
第338	4	土師器 壺	カマド 口縁部～胴部上位片	口	19.8		細砂粒/良好/黄	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。	
第348 PL.123	5	土師器 壺	カマド、カマド掘方、 埋没上 口縁部～胴部上位片	口	20.0		細砂粒/良好/明 赤	外面頸部に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。	
第348	6	土師器 壺	カマド 底部～胴部下位片	底	4.2		細砂粒/良好/に ぶい黄	底部と胴部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。	
第348	7	鉄製品 鏝	破片	長 幅	(4.5) 3.3	厚 重	0.5 14.4	//	耳がつく鏝、やや曲がりの角度がきつい。
第348 PL.123	8	鉄製品 鏝か	破片	長 幅	(4.5) 2.8	厚 重	0.2 14.6	//	両面する背にあたると思われる部分にも刃の形状が見られる。

13号型穴建物

採掘 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第358	1	須恵器 碗	床面 口縁部～底部片	口 底	13.4 6.8	高	3.4	細砂粒/還元焼 成/黒	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り無調整。内外面とも焼し焼成。
第358 PL.123	2	須恵器 碗	埋没上 1/4	口 底	13.1 7.0	台	6.3 4.0	細砂粒/酸化焼 成/黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転ヘラナデ、高台は貼付。内面は焼し焼成。
第358	3	須恵器 碗	埋没上 1/4	口 底	13.4 6.0	台	5.4 5.0	細砂粒/酸化焼 成/にぶい黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り、高台は貼付。
第358 PL.123	4	須恵器 碗	ほぼ完形	口 底	13.6 6.2	台	5.8 4.9	細砂粒・粗砂粒 /還元焼成/黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り、高台は貼付。

14号型穴建物

採掘 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第378 PL.123	1	須恵器 杯	床面 1/2	口 底	10.4 5.0	高	2.9	細砂粒/酸化焼 成/にぶい黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り無調整。
第378 PL.123	2	須恵器 杯	埋没上 2/3	口 底	11.9 4.9	高	3.9	細砂粒・粗砂粒 /還元焼成/灰白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り無調整。
第378 PL.123	3	須恵器 杯	埋没上 高台欠損	口 底	13.1 5.8	高	4.0	細砂粒/酸化焼 成/にぶい黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り、高台は貼付が剥落。
第378	4	須恵器 杯	掘方 口縁部～底部片	口 底	13.7 7.4	台	7.2 5.0	細砂粒/酸化焼 成/灰黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り、高台は貼付。
第378	5	須恵器 杯	埋没上 口縁部～体部片	口 底	13.6 7.4	高	4.1	細砂粒/還元焼 成/オリーブ黒	ロクロ整形、回転は右回り。内外面とも焼し焼成。
第378 PL.123	6	黒色土器 杯	貯蔵穴 3/4	口 底	10.6 5.3	高	4.1	細砂粒/酸化焼 成/にぶい黄	ロクロ整形、回転は右回り。内面黒色処理。底部は回転系切り無調整。内面は底部から口縁部に放射状ヘラミガキ後口縁部に横方向のヘラミガキ。
第378	7	灰輪陶器 皿	埋没上 口縁部片					微砂粒/還元焼 成/灰白	ロクロ整形、回転は右回り。施釉方法不明。口唇部は僅かに外反。
第378	8	灰輪陶器 輪花椀	床面、1. 2 焼上、埋 没上 口縁部～体部片	口	18.9			微砂粒/還元焼 成/黄	ロクロ整形、回転は右回り。施釉方法は刷毛垂りか、口唇部に輪花を5カ所。
第378	9	灰輪陶器 杯	掘方 体部片					微砂粒/還元焼 成/灰白	ロクロ整形、回転は右回り。施釉方法不明。
第378	10	灰輪陶器 杯	埋没上 底部～体部片	底 台	6.8 6.2			微砂粒/還元焼 成/灰白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転ヘラナデ、高台は貼付。施釉方法は漬け掛けか。
第378	11	土師器 小型壺	カマド 口縁部～胴部片	口 胴	11.9 13.5			細砂粒/良好/明 赤	内面頸部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。
第378	12	土師器 壺	埋没上 口縁部～胴部上位片	口	21.1			細砂粒/良好/に ぶい黄	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。
第388 PL.123	13	須恵器 羽釜	貯蔵穴 口縁部～胴部上半片	口 底	19.0 23.5	胴	23.2	細砂粒/酸化焼 成/にぶい黄	ロクロ整形、回転は右回り。跨は貼付。
第388	14	須恵器 羽釜	埋没上 口縁部～胴部上位片	口 底	22.1 26.5			細砂粒/酸化焼 成/にぶい黄	ロクロ整形、回転は右回り。跨は貼付。
第388 PL.124	15	鉄製品 鏝	破片	長 幅	(3.6) 2.7	厚 重	0.1 9.0	//	耳がつく、刃が鈍っているのか刃の曲がり具合に角度が付いている。
第388 PL.124	16	鉄製品 不明	一部欠損か	長 幅	(10.0) 0.7	厚 重	9.5	//	円型になっている断面四角の棒状製品。片方の断面積が小さくなり、大きさが異なる。
第388 PL.124	17	鉄製品 不明	完形か	長 幅	3.2 1.8	厚 重	0.6 5.4	//	楕円形の薄い鉄製品。一方の端部がやや広がる。
第388 PL.124	18	鉄製品 釘	一部欠損	長 幅	(4.0) 0.6	厚 重	0.6 9.0	//	頭部を大きく薄く押し出し、折り曲げている。
第388 PL.124	19	鉄製品 釘	一部欠損	長 幅	(3.5) 0.7	厚 重	0.7 4.7	//	頸部の一部が欠損している。頭部は折り返され、体部に被り合っており、製作時の痕跡の可能性もある。
第388 PL.124	20	鉄製品 釘	ほぼ完形	長 幅	5.0 0.7	厚 重	0.5 4.3	//	頭部が折られ、頭部に近い体部から少しずつ細くなり、頸部が形成される。

種 類 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第388号 PL.124	21	鉄製品 釘	一部欠損	長 (6.0) 厚 0.6 幅 0.7 重 9.3	//	頭部の一部と脚部が欠損する。脚部の劣化が多く見られ、頭部の端部が欠損しているが、折れは確認できる。	
第388号 PL.124	22	鉄製品 釘	一部欠損	長 3.9 厚 1.1 幅 0.8 重 2.6	//	頭部が欠損する。断面形状も跡によって変形してはつきりとしにくい部分が多い。	

15号竪穴建物

種 類 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第390号 PL.124	1	須臾器 小瓶	埋没土	口 12.8 高 3.8 底 6.6	細砂粒・粗砂粒/ 還元塩/灰	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第390号 PL.124	2	灰釉陶器 小瓶	床面	口 9.4 台 4.4 底 4.8 高 2.9	微砂粒/還元塩/ 灰白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転ヘラナデ、高台は貼付、体部下位は回転ヘラナデ。施釉方法は漬け掛け。口縁部は僅かに外反する。	大原2号室 式期
第390号 PL.124	3	灰釉陶器 小瓶	埋没土 口縁部小片	口 9.4 台 4.4 底 4.8 高 2.9	微砂粒/還元塩/ 灰白	ロクロ整形、回転は右回り。施釉方法は漬け掛け。口縁部は僅かに外反する。	大原2号室 式期
第390号 PL.124	4	灰釉陶器 小瓶	埋没土 底部～胴部片	底 6.0 胴 7.6	微砂粒/還元塩/ 灰白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整、胴部下位は回転ヘラナデ。施釉方法は漬け掛け。	大原2号室 式期
第390号 PL.124	5	土師器 甕	口縁部～胴部上位片	口 19.8	細砂粒/良好/明 期	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラナデ。内面は胴部にヘラナデ。	
第390号 PL.124	6	鉄製品 鉄鉢車	一部欠損	長 (19.5) 厚 - 径 5.5 重 49.3	//	紡輪の中心部分が片面が凹む。紡輪には糸の痕跡が残存する。全体の劣化が激しく、多数破損が見られる。	
第390号 PL.124	7	鉄製品 鎌	一部欠損	長 12.0 厚 0.3 幅 3.6 重 55.5	//	耳がわずかに上部の角から削られている。先端部は欠けて欠損している。	

16号竪穴建物

種 類 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第410号 PL.124	1	須臾器 小瓶	埋没土	口 12.4 高 4.2 底 6.0	細砂粒・粗砂粒/ 還元塩・燻/ふい 黄粒	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整、内外面とも燻し黄粒。	
第410号 PL.124	2	須臾器 小瓶	床面	口 12.5 高 4.1 底 6.0	細砂粒/酸化塩 きみ/灰白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整、内外面とも燻し黄粒。	
第410号 PL.124	3	須臾器 小瓶	床面	口 15.8 高 5.7 底 8.2	細砂粒/還元塩/ 黄灰	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付が剥落。	
第410号 PL.124	4	須臾器 小瓶	カマド	口 16.0 台 5.7 底 6.0 高 6.3	細砂粒・粗砂粒/ 酸化塩 /灰黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付。口唇部下に径5mmの穿孔あり。	
第410号 PL.124	5	黒色土器 小瓶	貯蔵穴 口縁部小片	口 12.8	細砂粒/酸化塩/ にふい黄粒	ロクロ整形、回転は右回りか。内面黒色処理。内面は横方向のヘラミガキ。	
第410号 PL.124	6	黒色土器 小瓶	貯蔵穴 口縁部～体部片	口 12.9	細砂粒/酸化塩/ にふい黄粒	ロクロ整形、回転は右回り。内面黒色処理。内面は放射状暗文状のヘラミガキ。	
第410号 PL.124	7	黒色土器 小瓶	掘方、1焼土 口縁部～体部片	口 16.7	細砂粒/酸化塩/ にふい黄粒	ロクロ整形、回転は右回り。内面黒色処理。内面は体部から口縁部に放射状ヘラミガキ後口唇部に横方向のヘラミガキ。	
第410号 PL.124	8	黒色土器 小瓶	埋没土 底部片	底 6.4 台 6.1	細砂粒/酸化塩/ にふい黄粒	ロクロ整形、回転は右回り。内面黒色処理。底部は回転ヘラナデ、高台は貼付。内面はヘラミガキ。単位不明。	
第430号 PL.124	9	灰釉陶器 輪花鏡	カマド、埋没土、 1、2焼土 口縁部～体部片	口 18.4 高 8.8	微砂粒/還元塩/ 黄灰	ロクロ整形、回転は右回り。施釉方法は刷毛垂りか。口唇部に輪花を5カ所。	14号室No.8 と同一か
第430号 PL.124	10	灰釉陶器 小瓶	床面 口縁部片	口 3.9	微砂粒/還元塩/ 灰白	ロクロ整形、回転は右回り。施釉方法不明。	
第430号 PL.124	11	土師器 甕	掘方、カマド、埋没土 口縁部～胴部上半	口 18.3 高 20.2	細砂粒/良好/暗 期	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラナデ。内面は胴部にヘラナデ。	
第430号 PL.124	12	土師器 甕	カマド掘方 口縁部～胴部中位片	口 18.8 高 18.7	細砂粒/良好/に ふい黄粒	ロクロ整形、回転は右回りか。胴部中程から下位にヘラナデ。内面は胴部にヘラナデ。	ロクロ土師 器
第430号 PL.124	13	土師器 甕	掘方 口縁部～胴部上位片	口 18.8	細砂粒/良好/に ふい黄粒	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラナデ。内面は胴部にヘラナデ。	
第430号 PL.124	14	土師器 甕	床面、カマド、掘方、 カマド掘方 口縁部～胴部中位片	口 19.4 高 20.3	細砂粒・粗砂粒/ 良好/明赤期	外面頸部と内面胴部に輪帯が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラナデ。内面は胴部にヘラナデ。	
第430号 PL.124	15	土師器 甕	カマド掘方 口縁部～胴部上位片	口 20.8	細砂粒/良好/に ふい黄粒	ロクロ整形、回転は右回り。内面は胴部にヘラナデ。	ロクロ土師 器
第430号 PL.124	16	土師器 甕	カマド 底部片		細砂粒/酸化塩/ にふい黄粒	ロクロ整形、胴部と底部は貼付。	
第430号 PL.125	17	須臾器 羽釜	カマド掘方 口縁部～胴部下位	口 20.0 高 25.0	細砂粒・粗砂粒/ 酸化塩/明黄期	ロクロ整形、回転は右回り。唇は貼付。胴部下位はヘラナデ、中位にヘラナデ。	
第430号 PL.124	18	鉄製品 釘	破片	長 (2.7) 厚 0.5 幅 0.5 重 2.3	//	多くが錆に覆われているが、断面が四角く脚部が確認できる。脚部の端部と体部の途中から曲がっている。	
第430号 PL.124	19	鉄滓	一部欠損	長 4.4 厚 3.0 幅 3.2 重 51.1	//	破損面がきれいな断面となっている。滓質は小さな小さな窪みが見られる。	
第430号 PL.124	20	鉄滓	一部欠損	長 4.9 厚 3.9 幅 4.3 重 88.6	//	酸化土砂が付着する。上面の滓質は密で流動状になる。下面はやや窪んでいる。	
第430号 PL.124	21	鉄滓	一部	長 3.8 厚 1.6 幅 2.8 重 15.9	//	砂がわずかに見られ、滓質は密。上面に空腔がわずかに見られる。炭酸塩は確認できない。	

遺物観察表

17号壙6建物

採掘 PL.No.	No.	種 類 種 類	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考		
第44回 PL.125	1	須恵器 杯	埋没土 2/3	口 底	11.2 6.4	高 0	3.8	細砂粒・粗砂粒/ 酸化塩/にぶい 黄緑	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り無調整。	
第44回 PL.125	2	須恵器 杯	埋没土 4/5	口 底	11.6 6.3	高 0	3.6	細砂粒/酸化塩/ 浅黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り無調整。	
第44回 PL.125	3	須恵器 杯	床面 ほぼ完形	口 底	11.9 6.7	高 0	3.8	細砂粒/還元塩/ 煙/黒	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り無調整。 内外面とも焼し焼成。	
第44回 PL.125	4	須恵器 碗	埋没土 4/5	口 底	14.6 5.9	高 0	6.4	細砂粒/酸化塩/ にぶい黄緑	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り無調整。	
第44回 PL.125	5	須恵器 碗	埋没土 1/3	口 底	13.0 7.0	台 5.1	6.6	細砂粒・粗砂粒/ 酸化塩/灰黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り、高台は貼付。	
第44回 PL.125	6	須恵器 碗	埋没土 1/4	口 底	13.1 6.0	台 5.1	5.6	細砂粒・粗砂粒/ 酸化塩/灰黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り、高台は貼付。	
第44回	7	須恵器 碗	床面、掘方 口縁部～体部	口 底	13.0			細砂粒/酸化塩/ 灰黄	ロクロ整形、回転は右回り。	
第44回	8	須恵器 碗	口縁部～体部	底 台	6.0 5.3			細砂粒/酸化塩/ 粉	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り、高台は貼付。	
第44回 PL.125	9	灰釉陶器 皿	埋没土 1/4	口 底	12.4 7.0	台 2.7	6.4	微砂粒/還元塩/ 灰白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転ヘラナデ、高台は貼付。施釉方法不明。	大塚2号壙式副
第44回 PL.125	10	須恵器 羽釜	床面、掘方 口縁部～胴部上位片	口 底	17.4 19.0			細砂粒/酸化塩/ にぶい黄緑	ロクロ整形、回転は右回り。胴部中位より下位は内外面ともヘラナデ。	
第44回	11	須恵器 羽釜	埋没土 底部～胴部下位片	口 底	7.2			細砂粒/酸化塩/ にぶい黄緑	ロクロ整形、回転は右回り。底部と胴部下位はヘラ削り。	
第44回 PL.125	12	鉄製品 刀子	ほぼ完形	長 幅	10.5 1.3	厚 重	0.6 10.9	//	反りが大きい刀子。機間は段がはっきりしているが、対照に段は見られない。	
第44回 PL.125	13	鉄製品 刀子	一部欠損	長 幅	9.5 2.0	厚 重	0.5 13.3	//	切っ先と茎の一部が欠損する。柄部分に木質が残存する。区は南区とみられるが、刃区が浅くはっきりとしない。	
第44回 PL.125	14	鉄製品 釘	一部欠損	長 幅	3.5 0.4	厚 重	0.5 1.7	//	頭部が欠損しているが、埋蔵時からの欠けと見られる。体部がやや折れ曲がっている。	
第44回 PL.125	15	鉄滓	一部	長 幅	4.0 4.2	厚 重	2.5 28.5	//	下面は滓質が密で一部に気泡が見られる。上面はやや気泡が大きく、やや粗である。炭酸鉄は見られない。	
第44回 PL.125	16	鉄滓	完形	長 幅	8.0 6.5	厚 重	2.5 85.4	//	酸化土砂が付着し、滓質は密。底面は丸みを帯びている。底面にわずかに空隙が確認でき、炭酸鉄は確認できない。	

18号壙6建物

採掘 PL.No.	No.	種 類 種 類	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考		
第46回 PL.125	1	土師器 杯	埋没土 1/2	口 底	12.0 3.3			細砂粒/良好/ ぶい黄	口縁部は横ナデ、体部は上平がナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。	
第46回 PL.125	2	土師器 杯	埋没土 1/4	口 底	14.8 4.7			細砂粒/良好/明 褐色	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
第46回 PL.125	3	須恵器 杯蓋	埋没土 口縁部～天井部片	口 底	19.0 16.8			細砂粒/還元塩/ 黄灰	ロクロ整形、回転は右回り。天井部は中程まで回転ヘラ削り。内面に力りを作る。	
第46回 PL.125	4	土師器 甕	床面、埋没土 口縁部～胴部中位片	口 底	19.6 15.6			細砂粒/良好/ ぶい黄	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。	
第46回 PL.125	5	土師器 甕	埋没土 底部～胴部下片	底	9.0			細砂粒/良好/明 褐色	底部と胴部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。	
第46回 PL.125	6	鉄製品 釵	一部欠損	長 幅	13.8 3.7	厚 重	0.3 55.5	//	切っ先部分が欠損している。刃の一部が大きき凹んでおり、研ぎ減りによるもの可能性がある。耳の折り返しがやや鋭い。	

19号壙6建物

採掘 PL.No.	No.	種 類 種 類	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考		
第48回 PL.125	1	土師器 杯	埋没土 1/5	口 底	15.0 11.4	高 3.7		細砂粒・褐色粒/ 良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
第48回 PL.125	2	土師器 鉢	埋没土 口縁部～体部片	口 底	20.8 21.6			細砂粒/良好/明 褐色	口唇部は横ナデ、口縁部はナデ、体部はヘラ削り。内面は体部から口縁部にヘラナデ。	
第48回	3	須恵器 長頸壺	埋没土 頸部片					細砂粒/還元塩/ 灰	ロクロ整形、回転は右回り。口縁部下位に凹線を施す。内面はヘラナデ。	
第48回 PL.125	4	須恵器 長頸壺	壁、埋没土、4区50 堅 胴部片	口 底	20.0			細砂粒/還元塩/ 灰白	ロクロ整形、回転は右回り。胴部下位に回転ヘラ削り、その上位から肩にかけてはヘラナデ。胴部上位の肩に凹線を施す。区画内に割変文を施す。	

20号壙6建物

採掘 PL.No.	No.	種 類 種 類	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考		
第50回 PL.126	1	土師器 杯	埋没土 1/2	口 底	11.8 3.7			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部は上平がナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。	
第50回 PL.126	2	土師器 杯	床面、掘方、埋没土 1/2	口 底	13.6 9.4	高 4.2		細砂粒/良好/ ぶい黄	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。器面摩滅のため単位不明。	
第50回 PL.126	3	土師器 杯	埋没土 1/2	口 底	13.8 4.2			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。器面摩滅のため単位不明。内面は体部から口縁部に放射状暗文。	

棟 号 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第500R PL.126	4	土師器 杯	埋没土 1/4	口 底	15.4 11.0		細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。器面摩滅のため単位不明。
第500R PL.126	5	土師器 杯	埋没土 口縁部～底部片	口 底	15.6 11.0		細砂粒・粗砂粒 /良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。
第500R PL.126	6	土師器 杯	床面、掘方 1/3	口 底	15.8 11.0	高 5.0	細砂粒/良好/に ぶい黄橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。内面は体部から口縁部に放射状暗文。上位は器面摩滅のため不鮮明。
第500R PL.126	7	須恵器 杯蓋	埋没土 底部～体部下片	底	8.0		細砂粒/還元焼 灰白	ロクロ整形、回転は右回り。底部から底部周縁は回転ヘラ削り。
第500R PL.126	8	土師器 小型甕	カマド、埋没土 口縁部～底部下片	口 底	14.4 16.7		細砂粒・粗砂粒 /良好/明黄橙	口縁部から頸部は横ナデ。胴部は縦方向のヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。
第510R PL.126	9	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴部上半片	口 底	17.1 20.4		細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。
第510R PL.126	10	土師器 小型甕	埋没土 頸部～胴部	頸 底	16.0 17.6		細砂粒・粗砂粒 /良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、胴部と底部はヘラ削り。内面胴部は底部から胴部にヘラナデ。
第510R PL.126	11	土師器 杯蓋	埋没土 底部～胴部下片	台	8.4		細砂粒/良好/に ぶい黄	台部下半は横ナデ。上半はナデ。胴部はヘラ削り。内面胴部は底部から胴部にヘラナデ。
第510R PL.126	12	土師器 台付甕	埋没土 底部～胴部下位	台	9.3		細砂粒/良好/に ぶい黄	台部から底部までを作り、そこに胴部を貼付する形で成形。台部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。
第510R PL.126	13	土師器 甕	カマド 口縁部～胴部下位	口 底	22.2 20.1		細砂粒/良好/に ぶい黄	外面胴部に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。
第510R PL.126	14	土師器 甕	床面、カマド、埋没土 口縁部～胴部下位	口 底	23.9 21.4		細砂粒・粗砂粒・ 礫/良好/橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。
第510R PL.126	15	土師器 甕	床面、カマド、埋没土 口縁部～胴部下位	口 底	24.0 21.4		細砂粒/良好/に ぶい黄橙	内面胴部に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。
第510R PL.127	16	土師器 甕	埋没土、掘方 口縁部～胴部下片	口 底	24.4 21.6		細砂粒/良好/明 黄	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。
第520R PL.127	17	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴部上位	口 底	24.6 21.2		細砂粒・粗砂粒 /良好/にぶい黄	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。
第520R PL.127	18	土師器 甕	床面、カマド 口縁部～胴部下位	口 底	27.5		細砂粒・粗砂粒 /良好/にぶい黄 橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ後間隔をあけて縦方向のヘラミガキ。
第530R PL.127	19	土師器 甕	床面 口縁部～胴部上位	口 底	19.6		細砂粒/良好/明 黄	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。
第530R PL.128	20	土師器 甕	床面、埋没土 2/3	口 底	20.4 32.2	高 10.5	細砂粒・粗砂粒 /良好/にぶい黄	口縁部は横ナデ、胴部と底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。
第520R PL.128	21	土師器 甕	床面 口縁部～胴部下片	口 底	24.6 38.2		細砂粒・粗砂粒 /良好/橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。
第530R PL.128	22	須恵器 甕	埋没土 口縁部～胴部上位片	口 底	24.4		細砂粒/還元焼 灰白	口縁部はロクロ整形、回転は右回り。胴部は叩き締め成形。外面は胴部に平行叩き痕が残る。内面は頸部にヘラナデ。胴部には同心状アテ貝痕が残る。

21号発穴建物

棟 号 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第540R PL.128	1	土師器 杯	溝溝 1/4	口 底	16.4 9.2	高 4.3	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。体部は上半がナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。内面は底部から口縁部にヘラナデ。
第540R PL.128	2	土師器 杯	溝溝、埋没土 口縁部～底部片	口 底	15.6		細砂粒/良好/に ぶい黄橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。
第540R PL.128	3	土師器 鉢	埋没土 口縁部～体部片	口 底	24.0		細砂粒/良好/に ぶい黄橙	口唇部は横ナデ。口縁部から体部はヘラ削り。内面は体部にヘラナデ。
第540R PL.128	4	土師器 杯蓋	床面 ほぼ完成	口 底	19.2 7.3	力 16.0 高 3.6	細砂粒/還元焼 灰白	ロクロ整形、回転は右回り。天井部は回転ヘラ削り。内面にカエリが設けられている。縁はボタン状の粘土板を貼付し周囲をつまみ上げ環状化する。
第550R PL.128	5	須恵器 杯蓋	埋没土 口縁部～体部片	口 底	17.2 11.6		細砂粒/還元焼 灰白	ロクロ整形、回転は右回り。底部周縁は回転ヘラ削り。
第550R PL.128	6	土師器 小型甕	溝溝、埋没土 1/4	口 底	16.4 18.6	底 6.8	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。胴部と底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。
第550R PL.128	7	土師器 甕	床面、貯蔵穴、埋没土 ほぼ完成	口 底	16.6 19.3	底 6.4 高 21.5	細砂粒/良好/明 黄	口縁部は横ナデ。胴部と底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。外面胴部にスガが付着。
第550R PL.128	8	土師器 甕	床面、カマド、埋没土 口縁部～胴部上半片	口 底	21.2 32.2		細砂粒/良好/に ぶい黄	口縁部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。内面にスガが付着。

22号発穴建物

棟 号 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第560R PL.129	1	土師器 杯	床面、埋没土 完成	口 底	11.5 9.6	高 3.6	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。体部はナデ。底部は手持ちヘラ削り。内面から体部は放射状暗文。
第560R PL.129	2	土師器 杯	埋没土 1/5	口 底	13.0 13.4	高 3.9	細砂粒/良好/に ぶい黄橙	口縁部は横ナデ。体部は上半がナデ。下半から底部は手持ちヘラ削り。器面摩滅のため不鮮明。
第560R PL.129	3	土師器 杯	埋没土 3/4	口 底	17.8 4.2	高 4.2	細砂粒/良好/明 赤黄	口唇部は横ナデ。口縁部、体部から底部は手持ちヘラ削り。
第560R PL.129	4	須恵器 杯蓋	埋没土 掘	口 底	4.6		細砂粒/還元焼 灰黄	ロクロ整形、回転は右回り。縁はボタン状の粘土板を貼付し周囲をつまみ上げ環状化する。
第580R PL.129	5	須恵器 有台杯	埋没土 1/3	口 底	16.8 12.2		細砂粒/還元焼 灰黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転ヘラ削り。高台は貼付が脱落。

遺物観察表

種 類 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
第58図 PL.129	6	須臾器 有台杯	床直、埋没上	口 底	17.2 13.5	台 高	12.7 4.8	細砂粒/還元焼/灰白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転ヘラ削り、高台は貼付。
第58図 PL.129	7	土師器 土師器	埋没上 口縁部～胴部上位片	口	22.6			細砂粒/良好/明赤褐	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。
第58図 PL.129	8	土師器 壺	埋没上 口縁部～胴部上位片	口	25.0			細砂粒/良好/にふい赤褐	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ後腹方向に削りヘラミガキ。
第58図 PL.129	9	土師器 須臾器	底部～胴部下位	胴	24.6			細砂粒・粗砂粒/良好/明赤褐	底部と胴部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。
第58図 PL.129	10	須臾器 壺	埋没上 胴部上位片					細砂粒/還元焼/灰	明き締め成形。外面はカキヌ、平行明き痕が幾かに残る。内面は同心円状アテ貝痕が残る。

24号竪穴建物

種 類 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
第61図 PL.129	1	須臾器 検	床面 ほぼ完形	口 底	12.2 5.6	高	4.1	細砂粒/酸化焼/灰黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り無調整。
第61図 PL.129	2	須臾器 検	床面、埋没上 完形	口 底	14.2 7.0	台 高	7.0 5.5	細砂粒/酸化焼/灰白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り、高台は貼付。
第61図 PL.129	3	須臾器 土師器	床面 底部～体部片	底 台	6.5 6.6			細砂粒・粗砂粒/酸化焼/にふい黄橙	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り、高台は貼付。
第61図 PL.129	4	土師器 壺	カマド 口縁部～胴部上位片	口	16.8			細砂粒/良好/明赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。
第61図 PL.129	5	土師器 小型壺	カマド、埋没上 底部～胴部下位片	底	6.7			細砂粒/酸化焼/橙	ロクロ整形、回転は右回り。胴部は回転系切り。胴部はカキヌ。

25号竪穴建物

種 類 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
第63図 PL.129	1	土師器 杯	埋没上 完形	口 底	10.9 11.0	高	3.3	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。
第63図 PL.129	2	土師器 杯	カマド 完形	口 底	12.5 11.5	高	3.2	細砂粒/良好/橙	底部と胴部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。口縁部から体部は器面摩滅のため不明。
第63図 PL.129	3	土師器 杯	床面 1/3	口 底	15.0 10.0	高	4.3	細砂粒/良好/明赤褐	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。内面は体部から口縁部に放射状痕文。
第63図 PL.129	4	土師器 鉢	床面 口縁部～体部片	口 最	11.6 12.8	最		細砂粒/良好/にふい黄橙	口縁部は横ナデ、体部は手持ちヘラ削り。外面はスガが付着。
第63図 PL.129	5	須臾器 杯	埋没上 1/3	口 底	12.3 8.4	高	3.8	細砂粒/還元焼/灰白	ロクロ整形、回転は右回り。胴部は手持ちヘラ削り。
第63図 PL.129	6	須臾器 杯	埋没上 1/3	口 底	12.4 5.4	高	3.7	細砂粒/還元焼/灰黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り無調整。
第63図 PL.129	7	須臾器 杯	埋没上 底部片	底	6.7			細砂粒/酸化焼/明黄褐	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り無調整。
第63図 PL.129	8	土師器 杯	床面 1/3	口 胴	14.2 14.2	高	13.1	細砂粒/良好/明赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部と底部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。
第63図 PL.129	9	土師器 杯	埋没上 口縁部～胴部上位片	口	17.3			細砂粒/良好/にふい赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。
第63図 PL.129	10	須臾器 壺	埋没上 胴部片					細砂粒/還元焼/灰オリーブ	明き締め成形。外面は平行明き痕、内面は同心円状アテ貝痕が残るが、両面とも器面摩滅。破損後再利用可。

26号竪穴建物

種 類 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
第65図 PL.129	1	土師器 杯	床面 ほぼ完形	口 底	13.3 8.2	高	4.1	細砂粒/良好/にふい黄橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。内面は底部に放射状痕文、体部から口縁部に放射状痕文。
第65図 PL.129	2	須臾器 杯蓋	カマド右横Pit 4/5	口 胴	12.6 3.4	高	9.9 2.3	細砂粒/還元焼/灰	ロクロ整形、回転は右回り。天井部は中程まで手持ちヘラ削り。内面にカエリを留付。縁はボタン状の粘土板を貼付し圓形をなすまじり環状に作る。
第65図 PL.129	3	土師器 壺	カマド、埋没上 口縁部～胴部上位片	口	22.8			細砂粒/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。

27号竪穴建物

種 類 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
第67図 PL.130	1	土師器 杯	貯蔵穴 1/4	口 底	13.8 8.0	高	4.3	細砂粒/良好/にふい黄橙	内面黒色処理。口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。内面はやや不規則なヘラミガキ。
第67図 PL.130	2	須臾器 長頸壺	床直、貯蔵穴、埋没上、4区5号際 底部～胴部片	胴 底	18.0 9.6	台	10.8	細砂粒/還元焼/灰黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部はヘラナデ。高台は貼付。胴部上位・肩には凹線による区画、区画内に刺突文を施す。

29号竪穴建物

種 類 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
第69図 PL.130	1	須臾器 検	床面 底部～体部片	底	7.0			細砂粒/還元焼/灰白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り無調整。

30号竪穴建物

種 類 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
第72図 PL.130	1	須臾器 検	カマド、埋没上 口縁部～底部片	口 底	13.6 6.2			細砂粒/酸化焼/浅黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り、高台は貼付が剥落。

棟 号 Pl.No.	No.	種 類	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第728号	2	須忠器 椀	カマド 口縁部～体部片	口	14.8	細砂粒/酸化塩/ 浅黄	ロクロ整形、回転は右回り。	
第728号	3	須忠器 上師器	埋没上 口縁部～体部片	口	15.2	細砂粒/還元塩/ 灰白	ロクロ整形、回転は右回り。	
第728号	4	上師器 甕	掘方 口縁部～胴部中位片	口	(24.0)	細砂粒・粗砂粒/ 良好/赤褐色	内面胴部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面は胴部にへらナデか、器面摩滅のため単位不明。	
第738号	5	上師器 甕	カマド 口縁部～胴部上位片	口	29.8	細砂粒・粗砂粒/ 磯/良好/にぶい 褐色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はへら削り。内面は胴部にへらナデ後開削をあけた縦方向のへらミガキ。	
第738号 PL.130	6	上師器 甕	床面 口縁部～胴部上半片	口	30.4	細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい褐色	口縁部は横ナデ。胴部はへら削り。内面は胴部にへらナデ。	
第738号 PL.130	7	須忠器 甕	床面 底部～胴部下半片	胴	43.0	細砂粒・粗砂粒/ 還元塩/灰黄	叩き締め成形。外面には平行叩き、内面は同心円状アテ貝痕が残る。	

31号壺穴建物

棟 号 Pl.No.	No.	種 類	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第748号	1	上師器 杯蓋	床面 口縁部～底部片	口	12.2 底 8.0	細砂粒/良好/に ぶい黄褐色	口縁部は横ナデ。体部から底部は手持ちへら削り、器面摩滅のため単位不明。	
第748号 PL.130	2	上師器 杯蓋	床面 口縁部～底部片	口	12.2 底 8.4	細砂粒/良好/に ぶい黄褐色	口縁部は横ナデ。体部から底部は手持ちへら削り、器面摩滅のため単位不明。	
第748号 PL.130	3	上師器 杯蓋	埋没上 1/3	口	12.6 底 8.8	高 4.3 細砂粒/良好/に ぶい黄褐色	口縁部は横ナデ。体部から底部は手持ちへら削り、器面摩滅のため単位不明。	
第748号 PL.130	4	上師器 杯蓋	床面 1/4	口	12.8 底 8.8	高 4.0 細砂粒/良好/に ぶい黄褐色	口縁部は横ナデ。体部から底部は手持ちへら削り、器面摩滅のため単位不明。	
第748号	5	上師器 杯蓋	掘方 1/4	口	14.8 底 11.6	高 4.7 細砂粒/良好/に ぶい黄褐色	口縁部は横ナデ。体部から底部は手持ちへら削り、器面摩滅のため単位不明。	
第748号 PL.130	6	須忠器 杯蓋	掘方、埋没上 口縁部～天井部片	口	14.8	細砂粒/還元塩/ 灰白	ロクロ整形、回転は右回り。天井部は横開削にロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り痕が残る、中程まで回転へら削り。口縁部端部は折り曲げ。内面に朱墨痕がみられる。	
第748号	7	須忠器 杯蓋	埋没上 口縁部～天井部片	口	15.8	細砂粒/還元塩/ 灰	ロクロ整形、回転は右回り。天井部は中程まで回転へら削り。口縁部端部は折り曲げ。	
第748号	8	須忠器 杯蓋	埋没上 底部～体部	底	6.0	細砂粒/還元塩/ 灰オリーブ	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第748号	9	須忠器 杯蓋	掘方 底部～体部片	底	6.4	細砂粒/還元塩/ 灰	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第748号	10	須忠器 椀	床面 底部～体部片	底	10.2 台 10.0	細砂粒/還元塩/ 灰	ロクロ整形、回転は右回り。底部はへらナデ。高台は貼付。	
第748号	11	上師器 甕	床面 口縁部～胴部上位片	口	29.0	細砂粒/良好/粗	口縁部は横ナデ。胴部は下から頸部へ向けての縦方向へら削り。内面は胴部にへらナデ。	
第748号	12	上師器 甕	床面 口縁部～胴部上位片	口	19.4	細砂粒/良好/粗	外面頸部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面は胴部にへらナデ。	
第748号	13	上師器 甕	掘方 口縁部～胴部上位片	口	19.4	細砂粒/良好/粗	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はへら削り。内面は胴部にへらナデ。	
第748号	14	上師器 甕	埋没上 口縁部～胴部上位片	口	20.4	細砂粒/良好/粗	外面頸部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面は胴部にへらナデ。	

32号壺穴建物

棟 号 Pl.No.	No.	種 類	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第758号 PL.130	1	赤生土器 壺	頸～胴部1/4			安山岩系粗砂・ 円筒礫ににぶ い黄褐色//	頸部に太い横沈線で画した凸帯に縄文(LR)。斜に太沈線による舌状斜行文をめぐらす。胴部境界には横位太沈線区画内に柳指横線文を充填する。沈線施文具は幅7mm、竹管凸面によるか。外面整形はハケメ、内面は刷磨で不明。	
第758号	2	赤生土器 壺	頸部片			安山岩系粗～細 砂粒/明黄褐色//	頸部に横位沈線区画縄文帯(LR)をめぐらす。外面整形はハケメ後ミガキ、内面は上位がミガキ、下位はナデ。	
第758号 PL.130	3	赤生土器 壺	埋上 頸部片			安山岩系粗砂/ にぶい黄褐色//	頸部に横位沈線区画縄文帯(LR)をめぐらす。外面整形はハケメ、内面はナデとミガキ。	
第758号	4	赤生土器 壺	埋上 頸部片			白岩片粗砂多 い/にぶい黄褐色 //	頸部に凸帯をめぐらし縄文(LR)を施す。外面整形はハケメ、内面ナデ。	
第758号	5	赤生土器 壺	埋上 頸部片			白岩片・長石等 細角礫多い/ にぶい黄褐色//	頸部に横位沈線区画縄文帯(LR)をめぐらす。外面整形はハケメ後ミガキ、内面はナデ。	
第758号 PL.130	6	赤生土器 壺	底部片1/3	底	(10.7)	安山岩系粗～細 砂粒/にぶい赤褐 色//	外面は横～斜位ミガキ。内面はナデ。	
第758号 PL.130	7	赤生土器 甕	口縁3/4、体部下半欠			安山岩系粗砂/ にぶい黄褐色//	口唇に縄文(LR)、頸部に柳指横線文をめぐらす。体部には、柳指横線文を3帯5単位垂下し、その間に柳指波状文を6～7帯重ねる。柳指施文具は10mm/16mm。施文帯は頸部横線→頸垂文→波状文。外面整形はハケメ、内面は横ミガキ。	
第758号	8	赤生土器 甕	体部～底部1/4	底	6.4	白岩片粗砂多 い/にぶい褐色//	内外面とも縦～斜位ミガキ。	7と同ーか

遺物観察表

採 掘 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
76号 PL-131	9	石楸		長 幅	24.8 12.3	厚 重	3.9 1189.3	デザイン//	完成状態。表裏面とも対面摩耗が著しい。傷跡については不明確。器体下半部で破損した2点が接合した。表裏面とも右辺部が破熟、欠ける。
76号 PL-131	10	台石?		長 幅	26.5 16.6	厚 重	4.1 2071.6	砂岩//	背面側面に最打痕があり、台石的に使われたことは明らか。このほか、表面には粗い線条痕があり、砥石的使用も想定しておきたい。破熟してヒビ割れる。

33号竪穴建物

採 掘 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
77号	1	土師器 杯	埋没土 口縁部～底部片	口 径	11.6 11.9	高	3.5	細砂粒/良好/橙	口縁部は上半が横ナデ、下半はナデ。体部から底部は手持ちへつり。
77号	2	土師器 杯	埋没土 口縁部～底部片	口 径	11.8 7.3	高	3.4	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。体部から底部は手持ちへつり。器面摩滅のため単位不明。
77号	3	土師器 杯	埋没土 口縁部～底部片	口 径	14.8 9.2	高	3.5	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。体部から底部は手持ちへつり。内面は体部から口縁部に斜射状暗文。
77号 PL-131	4	土師器 杯	体面 3/4	口 径	15.1 10.2	高	4.1	細砂粒/良好/黄 橙	口縁部は横ナデ。体部から底部は手持ちへつり。内面は体部から口縁部に斜射状暗文。
80号	5	土師器 杯	体面 1/4	口 径	15.6 9.0	高	5.3	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。体部から底部は手持ちへつり。内面は体部から口縁部に斜射状暗文。
80号	6	土師器 杯	埋没土 口縁部～体部片	口 径	17.0 17.2			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。体部は手持ちへつり。内面は体部から口縁部に斜射状暗文。
80号	7	土師器 杯	体面 口縁部～体部上位片	口 径	15.8 18.5			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。体部は手持ちへつり。器面摩滅のため単位不明。
80号	8	須臾器 杯	埋没土 口縁部～底部片	口 径	13.6 10.6			細砂粒/還元焼/ 灰白	ロクロ整形、回転は右回り。胴部は回転へつり。
80号	9	須臾器 杯	埋没土 底部～体部片	底 径	8.4			細砂粒/還元焼/ 灰	ロクロ整形、回転は右回り。胴部は回転へつり。
80号 PL-131	10	土師器 杯	埋没土 口縁部～胴部上位片	口 径	17.8			細砂粒/良好/明 赤褐	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はへつり。内面は胴部にへつり。
80号 PL-131	11	土師器 杯	カマド、埋没土 口縁部～胴部片	口 径	21.1 20.4			細砂粒/良好/明 赤褐	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はへつり。内面は胴部にへつり。
80号 PL-131	12	土師器 甕	体面、埋没土 口縁部～胴部上半片	口 径	23.8 22.0			細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はへつり。内面は胴部にへつり。
80号 PL-131	13	土師器 甕	カマド、埋没土 口縁部～胴部中位	口 径	25.4 20.8			細砂粒/良好/明 赤褐	外面口縁部と内面頸部に輪組み痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部はへつり。内面は胴部にへつり。
80号 PL-131	14	土師器 壺	体面 口縁部～胴部上位片	口 径	19.1			細砂粒/良好/明 赤褐	口縁部は横ナデ。胴部はへつり。内面は胴部にへつり。

34号竪穴建物

採 掘 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
81号	1	赤生土器 甕	埋土 胴部片					チャート・白百 片細角礫/褐色	縞線波状文(4角/10mm)を横位にめぐらす。外面整形はハケメ、内面ナデ。

35号竪穴建物

採 掘 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
82号	1	土師器 杯	埋没土 口縁部～体部片	口 径	12.9			細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい	口縁部は横ナデ。体部は手持ちへつり。内面は体部上半から口縁部に斜射状、下半に縦條状。器面摩滅のため単位不明。
82号 PL-131	2	土師器 杯	埋没土 1/3	口 径	13.0 9.5	高	3.8	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。体部から底部は手持ちへつり。
82号	3	土師器 杯	埋没土 1/4	口 径	13.4 8.8	高	4.2	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。体部から底部は手持ちへつり。器面摩滅のため単位不明。内面は体部から口縁部に斜射状暗文。
82号	4	須臾器 杯蓋	埋没土 口縁部～天井部片	横 径	3.6 0			細砂粒/還元焼/ 灰	ロクロ整形、回転は右回り。天井部は回転へつり。柄はボタン状の粘土板を粘付し周囲をつまみ上げ環状に作る。
82号	5	須臾器 盤	埋没土 底部～体部片	底 径	17.0 16.0			細砂粒・粗砂粒/ 還元焼/灰	ロクロ整形、回転は右回り。底部は高台の内側に回転へつり。高台は粘付。
82号 PL-131	6	須臾器 杯	埋没土 完形	口 径	13.4 7.4	高	3.2	細砂粒/還元焼/ 灰白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り無調整。外面の一部に降灰が付着。
82号	7	須臾器 長頸壺	埋没土 口縁部下半片	頸 径	5.4			細砂粒/還元焼/ 灰	ロクロ整形、回転は右回り。外面下位は回転へつり。
82号	8	須臾器 杯	カマド、埋没土 口縁部～胴部上位片	口 径	20.8			細砂粒/良好/明 赤褐	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はへつり。内面は胴部にへつり。
82号	9	須臾器 甕	埋没土 胴部片					細砂粒/還元焼/ 灰	叩き締め成形。外面は平形叩き痕が残る。一部にカキメ、内面はへつり。
82号 PL-131	10	巖石		長 幅	9.2 11.8	厚 重	3.5 540.4	粗粒輝石安山岩 //	左辺エッジには最打痕が著しいほか、右辺には最打に伴う剝離痕が生じている。左辺側剝離痕および上端側破損面は破熟剝離の可能性が大。

遺物観察表

棟 号 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第87号 PL.132	6	土師器 上師器	床面、カマド、埋没土 口縁部～胴部上半片	口 径	17.8 19.8	高 3.6	細砂粒/良好/明 赤褐色	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへう削り。内面は胴部にへうナデ。	
第87号 PL.132	7	土師器 上師器	床面、カマド 口縁部～胴部上半片	口 径	20.0 22.6	高 3.6	細砂粒/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへう削り。内面は胴部にへうナデ。	
第87号 PL.132	8	土師器 上師器	床面 口縁部～胴部上半片	口 径	20.8	高 3.6	細砂粒/良好/明 赤褐色	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへう削り。内面は胴部にへうナデ。	
第87号 PL.132	9	鉄製品 鎌	一部欠損	長 幅	(7.5) 3.3	厚 重	0.3 19.9	//	端部が折れて耳がつく鎌、一部に有機物が付着しているが、使用時に伴うかは不明。
第87号 PL.132	10	鉄製品 鎌		長 幅	(4.8) 3.4	厚 重	0.4 16.1	//	耳がつく鎌。残存する部分は刃部分がそこまで薄くならない。

39号整穴建物

棟 号 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第89号 PL.132	1	須恵器 杯	床面 1/3	口 径	13.4 7.9	高 3.6	細砂粒・粗砂粒/ 還元焼/黄灰	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り無調整。	
第89号 PL.132	2	須恵器 杯	床面 ほぼ完形	口 径	13.6 7.9	高 3.5	細砂粒・粗砂粒/ 還元焼/黄灰	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り無調整。	
第89号 PL.132	3	須恵器 杯	埋没土 1/4	口 径	14.0 8.4	高 3.6	細砂粒/還元焼/ 灰白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り無調整。内面は酸化焼に近い。	
第89号 PL.132	4	須恵器 碗	床直、カマド、掘方 3/4	口 径	13.9 7.0	高 6.6 5.4	細砂粒/酸化焼/ にぶい黄橙	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り、高台は貼付。	
第89号 PL.132	5	須恵器 碗	埋没土 底部～体部片	底 径	7.2 7.2	高 3.6	細砂粒/還元焼/ 浅黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部切り離し技法不明。高台は貼付。	
第90号 PL.132	6	須恵器 碗	床面 底部～体部片	底 径	7.6 7.6	高 3.6	細砂粒・粗砂粒/ 還元焼/灰黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り。高台は貼付。	
第90号 PL.132	7	土師器 上師器	カマド、埋没土 口縁部～胴部上位片	口 径	11.4 11.0	高 3.6	細砂粒/良好/ ふい濁	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへう削り。内面は胴部にへうナデ。	台付費か
第90号 PL.132	8	土師器 上師器	床面 口縁部～胴部上位片	口 径	18.6	高 3.6	細砂粒/良好/ ふい濁	口縁部は横ナデ、頸部は上半がナデ、下半は横ナデ、胴部はへう削り。内面は胴部にへうナデ。	
第90号 PL.132	9	土師器 上師器	床面 口縁部～胴部上位片	口 径	18.8 21.0	高 3.6	細砂粒/良好/ ふい濁	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへう削り。内面は胴部にへうナデ。	
第90号 PL.132	10	土師器 上師器	掘方、埋没土 口縁部～胴部上位片	口 径	19.8	高 3.6	細砂粒/良好/ ふい濁	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへう削り。内面は胴部にへうナデ。	
第90号 PL.132	11	土師器 上師器	床直、カマド、埋没土 口縁部～胴部上位片	口 径	19.8	高 3.6	細砂粒/良好/明 赤褐色	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへう削り。内面は胴部にへうナデ。	
第90号 PL.132	12	土師器 上師器	カマド、埋没土 口縁部～胴部上位片	口 径	2.6	高 3.6	細砂粒/良好/ ふい濁	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへう削り。内面は胴部にへうナデ。	
第89号 PL.132	13	土師器 上師器	掘方、埋没土 底部～胴部下位片	底 径	5.3	高 3.6	細砂粒/良好/ ふい濁	底部と胴部はへう削り。内面は底部から胴部にへうナデ。	

40号整穴建物

棟 号 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第92号 PL.133	1	赤生土器 壺	口縁、胴部以下欠				安山岩系粗角礫 多いにぶい黄 褐色//	頸部に凸帯をめぐらし縄文(LR)を施す。凸帯下に沈線山形文。肩に横位沈線区画縄文(LR)を間隔を空けて2部めぐらす。胴部には縄文(LR)地文に三角形か弧線モチーフの沈線文を重ねる。沈線内に赤彩痕残す。外面はハケメ整形後無文部ミナギ。内面に2.5cm幅の横上げ痕を残す。	
第92号 PL.133	2	赤生土器 甕	埋上 口縁片				安山岩系粗～細 砂/黒褐色//	やや肥厚させた幅広い口縁と口唇部に縄文(LR)を施し、沈線山形文をめぐらす。頸部に帯横線文。内面はミナギ。	
第92号 PL.133	3	赤生土器 壺	胴部片1/2				石英・白岩片粗 砂多量/明黄褐色//	上位に横位沈線区画の帯横線文。下位に帯横線文(7歯/16mm)を充填した凸状懸文?～単単位凸文。ハケメ整形後内面に粗いミナギ。	
第92号 PL.133	4	赤生土器 壺	埋上 頸部片				安山岩系粗砂/ 橙褐色//	頸部に帯横線文をめぐらし、板状小口の刺突列点施す。下位は太い沈線による凸状懸文か。	
第92号 PL.133	5	二次加工ある 割片		長 幅	(14.3) 8.7	厚 重	4.1 554.5	//	大形の幅広割片を横位に用い、割片端部を粗く加工する。上端部平面面は周辺加工より後出するものであり、石奔未製品を転用している可能性も否定できない。下端部対部は強く摩耗する。

41号整穴建物

棟 号 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
第94号 PL.133	1	土師器 杯	床面 完形	口 径	13.8 10.8	高 4.7	細砂粒/良好/明 赤褐色	口縁部は横ナデ。体部はへう削り。内面は体部にへうナデ。器面摩滅のため単位不明。内面は体部下半に環状、上半から口縁部に斜射放射状文。		
第94号 PL.133	2	土師器 埋没土	埋没土 1/3	口 径	14.0 14.4	高 4.9	細砂粒/良好/橙	口縁部は上半が横ナデ、下半はナデ。体部から底部は手持ちへう削り。		
第94号 PL.133	3	土師器 盤	埋没土 胴部～体部片	口 径	18.8	高 3.6	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。体部は上半がナデ、下半から底部は手持ちへう削り。		
第94号 PL.133	4	須恵器 杯蓋	埋没土 1/2	口 径	19.0 7.6	力 幅	17.0 2.9	細砂粒/還元焼/ 灰黄	ロクロ整形、回転は右回り。天井部は回転へう削り。内面にカエリを作り、中央部はへうナデ。溝はボタン状の粘土板を貼付し周壁をつまみ上げ環状に作る。	
第94号 PL.133	5	須恵器 杯蓋	カマド 1/2	口 径	20.2 7.6	力 幅	17.2 3.2	細砂粒/還元焼/ 灰黄	ロクロ整形、回転は右回り。天井部は回転へう削り。内面にカエリを作る。溝はボタン状の粘土板を貼付し周壁をつまみ上げ環状に作る。	

挿入No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第94図 PL-133	6	土師器 甕	床面、埋没上 口縁部～胴部上半片	口 径	15.2 18.2	細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄緑	口縁部は横ナデ、胴部はへら削り。内面は胴部にへらナデ。		
第94図 PL-133	7	土師器 甕	床面、カマド、埋没上 口縁部～胴部	口 径	22.4 18.4	細砂粒/良好/褐色	口縁部は横ナデ、胴部はへら削り。内面は胴部にへらナデ。		
第95図	8	土師器 甕	カマド 口縁部～胴部上位片	口 径	24.4	細砂粒/良好/明褐色	口縁部は横ナデ、胴部はへら削り。内面は胴部にへらナデ。		
第94図 PL-133	9	土師器 甕	埋没上 口縁部～胴部上位片	口 径	22.2	細砂粒・粗砂粒/ 良好/明褐色	口縁部は横ナデ、胴部はへら削り。内面は胴部にへらナデ。		
第95図 PL-133	10	土師器 甕	埋没上 口縁部～胴部中位片	口 径	20.4 22.6	細砂粒/良好/明赤褐色	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面は胴部にへらナデ。		
42号竪穴建物									
挿入No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第96図 PL-134	1	土師器 甕	カマド 口縁部～胴部	口 径	22.1 20.7	細砂粒/良好/ にぶい黄緑	口縁部は横ナデ、胴部はへら削り。内面は胴部にへらナデ。		
第96図 PL-134	2	土師器 甕	カマド 口縁部～胴部上位	口 径	23.2	細砂粒/良好/褐色	口縁部は横ナデ、胴部はへら削り。内面は胴部にへらナデ。		
43号竪穴建物									
挿入No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第97図	1	土師器 甕	カマド、埋没上 口縁部～胴部中位片	口 径	21.8 22.0	細砂粒/良好/褐色	口縁部は横ナデ、胴部はへら削り。内面は胴部にへらナデ。器面厚減のため単位不明。		
第97図	2	土師器 甕	カマド 口縁部～胴部上位片	口 径	24.4	細砂粒/良好/褐色	口縁部は横ナデ、胴部はへら削り。内面は胴部にへらナデ。		
44号竪穴建物									
挿入No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第99図 PL-134	1	石蔵		長 幅	16.7 8.2	厚 重	3.4 450.2	変質安山岩//	側縁が開き気味で、最大幅は対部上端にある。対部は右辺側が直線的で、対部両生が明らかである。
第99図 PL-134	2	石蔵		長 幅	31.4 11.3	厚 重	2.7 974.8	紅れん石片岩//	完成状態、対部摩耗・他部も不明瞭。対縁には打撃痕が残り、石蔵としては恐らく未使用。
第99図 PL-134	3	磯器		長 幅	17.6 12.7	厚 重	3.8 1136.1	粗粒輝石安山岩//	右辺側表面面を粗く打ち欠き、対部を作出する。対縁は摩耗しており、蓋く・擦る機能を果たしたのでろう。また、左辺には打痕が連続する。右辺側面には摩耗範囲を認めてみたが、その差は微妙である。
45号竪穴建物									
挿入No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第1000図 PL-134	1	土師器 杯	床面 完形	口 径	12.0 9.2	高	3.3	細砂粒/良好/褐色	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへら削り。体部は器面厚減のため単位不明。
第1000図 PL-134	2	土師器 杯	床面 完形	口 径	14.1 10.0	高	3.8	細砂粒/良好/明黄褐色	口縁部は横ナデ、体部は上半がナデ、下半から底部は手持ちへら削り。内面は体部から口縁部に放射状暗文。
第1000図 PL-134	3	須恵器 横瓶か	床面 胴部片					細砂粒/還元焰/ 灰白	明き締め成形。外面には平行明き痕、内面は同心円状アテ具痕が残る。
第1000図	4	須恵器 壺	埋没上 底部～胴部下位片	底 径	7.0			細砂粒/還元焰/ 灰	ロクロ整形、回転は右回り。底部はへらナデ、高台は貼付が剥落。
第1000図 PL-134	5	土師器 小型甕	カマド 口縁部～胴部上半	口 径	11.0 16.0			細砂粒・粗砂粒/ 良好/褐色	口縁部は横ナデ、胴部はへら削り。内面は胴部にへらナデ。
第1000図 PL-134	6	土師器 小型甕	床面、カマド、埋没上 1/3	口 径	16.8 18.6			細砂粒/良好/褐色	口縁部は横ナデ、胴部から底部はへら削り。内面は底部から胴部にへらナデ。
第101図 PL-135	7	土師器 小型甕	貯蔵穴 底部～胴部中位	底 径	6.0 7.3 15.2			細砂粒/良好/褐色	底部と胴部はへら削り。内面は底部から胴部にへらナデ。底部は楕円形を呈す。
第101図	8	土師器 甕	埋没上 口縁部～胴部上位片	口 径	21.6			細砂粒/良好/ にぶい褐色	口縁部は横ナデ、胴部はへら削り。内面は胴部にへらナデ。
第101図 PL-135	9	土師器 甕	カマド 口縁部～胴部上位	口 径	24.6 21.2			細砂粒/良好/明褐色	口縁部は横ナデ、胴部は下から頸部へ向けての縦方向へら削り。内面は胴部にへらナデ。
第101図 PL-135	10	土師器 甕	床面、カマド 底部～胴部下位					細砂粒/良好/ にぶい褐色	底部と胴部はへら削り。内面は底部から胴部にへらナデ。
第101図 PL-135	11	土師器 甕	貯蔵穴、埋没上 底部～胴部下位	底 径	6.4			細砂粒/良好/ にぶい黄褐色	底部と胴部はへら削り。内面は底部から胴部にへらナデ。
46号竪穴建物									
挿入No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第103図	1	須恵器 杯蓋	掘方 桶～天井部片	幅	4.0			細砂粒/還元焰/ 灰白	ロクロ整形、回転は右回り。天井部は中程まで回転へら削り。桶はボタン状の粘土板を貼付し周囲をつまみ上げ環状に作る。
第103図 PL-135	2	須恵器 杯	カマド、埋没上 1/3	口 径	12.6 5.8	高	3.4	細砂粒/還元焰/ 褐色	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り無調整。
第103図 PL-135	3	須恵器 杯	カマド、埋没上 1/2	口 径	12.6 6.0	高	3.7	細砂粒/還元焰/ 洗黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り無調整。内面はススが付着。
第103図 PL-135	4	須恵器 杯	Pt4 完形	口 径	12.6 6.3	高	3.7	細砂粒/還元焰/ 明黄褐色	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り無調整。

遺物観察表

挿入 No.	種 類	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第10398 PL-135	須恵器 椀	カマド 3/4	口 底	12.8 6.2	高 4.4	細砂粒/酸化塩/ 浅黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り無調整。
第10398	須恵器 椀	埋没上 口縁部～底部片	口 底	12.8 6.0	高 3.5	細砂粒/酸化塩/ 浅黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り無調整。
第10398	須恵器 椀	埋没上 1/4	口 底	12.2 6.6		細砂粒/酸化塩/ 浅黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転ヘラナデ、高台は貼付が剥落。
第10398	須恵器 椀	埋没土 底部～体部片	底 台	7.6 7.4		細砂粒・粗砂粒/ 酸化塩/にぶい 黄緑	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転ヘラナデ、高台は貼付。
第10398	ロクロ上師 器 小型甕	カマド 胴部片	胴	12.3		細砂粒/酸化塩/ にぶい 黄	ロクロ整形、回転は右回りか。外面はカキメ、内面はヘラナデ。
第10408 PL-136	上師器 壺	カマド、埋没上 口縁部～胴部	口 胴	11.6 18.1		細砂粒/良好/黄	口縁部は横ナデ、頸部から胴部上位はナデ、中位から下位はヘラナデ。内面は口唇部が横ナデ、口縁部から胴部はヘラナデ。胴部は器面剥離のため単位不明。
第10408 PL-135	灰輪陶器 底部片	埋没上 口縁部	底 台	7.4 7.2		微砂粒/還元塩/ 灰黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転ヘラナデ、高台は貼付。施軸方法は漬け掛け。
第10408 PL-136	上師器 壺	カマド 口縁部～胴部	口 胴	18.8 20.0		細砂粒/良好/黄	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラナデ、一部器面摩滅。内面は胴部ヘラナデ。
第10408	上師器 壺	埋没上 口縁部～胴部上位片	口 胴	20.2		細砂粒/良好/に ぶい 黄	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラナデ。内面は胴部にヘラナデ。
第10408	上師器 小型甕	貯蔵穴 底部～胴部下位片	底	4.6		細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい 黄緑	底部と胴部はヘラナデ。内面は底部から胴部にヘラナデ。
第10508 PL-135	須恵器 壺	カマド 口縁部～胴部上半片	口 胴	32.6 32.4		細砂粒/酸化塩/ 黄	ロクロ整形、回転は右回り。罫は貼付。内面はヘラナデ。口唇部は平坦面を作る。
第10408 PL-135	須恵器 壺	埋没上 底部～胴部下位片	底 孔	19.6 13.4		細砂粒/酸化塩/ 灰黄	ロクロ整形、回転は右回り。罫は貼付。内面は最下位にヘラナデ。その上位はヘラナデ。
第10508 PL-136	須恵器 壺	カマド 底部～胴部上位片	底 孔	20.0 13.0		細砂粒/酸化塩/ 黄	ロクロ整形、回転は右回り。罫は貼付。胴部から胴部中位はヘラナデ。内面は底部から胴部にヘラナデ。
第10408 PL-135	須恵器 羽釜	カマド、埋没上 1/2	口 底	17.6 22.6	高 6.4 底 高 27.4	細砂粒/酸化塩/ にぶい 黄	ロクロ整形、回転は右回り。罫は貼付。胴部は上位から下位上半にヘラナデ。下位下半にヘラナデ。
第10408 PL-136	須恵器 羽釜	カマド、埋没上 口縁部～胴部上半片	口 胴	18.0 22.2	胴 21.7	細砂粒/酸化塩/ にぶい 黄緑	ロクロ整形、回転は右回り。罫は貼付。内面は中位以下にヘラナデ。口唇部は内傾する平坦面を作る。
第10608 PL-136	須恵器 羽釜	カマド、埋没上 口縁部～胴部中位	口 胴	18.5 23.4	胴 24.0	細砂粒/酸化塩/ 浅黄	ロクロ整形、回転は右回り。罫は貼付。胴部中位はヘラナデ。
第10608 PL-137	須恵器 羽釜	カマド 口縁部～胴部上位片	口 胴	19.8 25.4		細砂粒/酸化塩/ 明黄緑	ロクロ整形、回転は右回りか。罫は貼付。胴部はヘラナデ。内面口縁部にススが付着。口唇部は内傾する平坦面を作る。
第10608 PL-137	須恵器 壺	床面、47型 口縁部下半～胴部上 位片				細砂粒・粗砂粒/ 還元塩/灰	口縁部はロクロ整形。胴部の成形は不詳明。口縁部はヘラナデ。内面は胴部にヘラナデ。
第10608 PL-137	須恵器 壺	床直、カマド、埋没 上、47型 底部～胴部片	底 胴	15.0 27.5		細砂粒・粗砂粒/ 還元塩/灰	胴部は叩き締め成形か。底部はヘラナデ。胴部下位にヘラナデ。中・上位はヘラナデか、器面摩滅のため単位不明。内面はアテ具痕をナデ消している。
第10508	須恵器 壺	カマド 胴部片				細砂粒・粗砂粒/ 還元塩/灰	叩き締め成形。外面に下半は平打ち筋。内面は同心円状アテ具痕が残る。
第10608	鉄製品 刀子	2/3	長 幅	(6.2) 1.2	厚 重 3.0 5.2	//	切っ先と茎の一部が欠損する。極区ははっきりと確認できるが、茎部分の断面が三角形となっている。

47号型建物

挿入 No.	種 類	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第10808	上師器 杯	埋没上 口縁部～体部片	口	18.6		細砂粒/良好/に ぶい 黄緑	口縁部は上半が横ナデ、下半がナデ。体部から底部は手持ちヘラナデ。内面は体部から口縁部に斜放射状凹凸。
第10808	須恵器 杯蓋	埋没上 口縁部～天井部片	口 底	15.0 12.7		細砂粒/還元塩/ 灰	ロクロ整形、回転は右回り。天井部は回転ヘラナデ。内面にカエリを貼付して作る。
第10808	須恵器 杯	床面、カマド ほぼ完成	口 底	11.6 7.8	高 4.2	細砂粒/還元塩/ 灰	ロクロ整形、回転は右回り。底部と底部周囲は回転ヘラナデ。
第10808	上師器 壺	床面、カマド 口縁部～胴部片	口 胴	23.9 22.3		細砂粒/良好/明 赤黄	口縁部は横ナデ。体部から底部は手持ちヘラナデ。
第10908	上師器 壺	床面、カマド、埋没上 胴部下片				細砂粒・粗砂粒/ 良好/黄	胴部は外面がヘラナデ。内面はヘラナデ。

48号型建物

挿入 No.	種 類	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第11108 PL-137	須恵器 杯	カマド 1/2	口 底	13.4 5.9	高 3.7	細砂粒/酸化塩/ にぶい 黄緑	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り無調整。
第11108	須恵器 椀	埋没上 口縁部～底部片	口 底	13.2 5.6	台 高 5.0 5.3	細砂粒/酸化塩/ にぶい 黄緑	ロクロ整形、回転は右回り。底部切り難し技法不明、高台は貼付。内外面の口縁部にスス付着。
第11108	須恵器 椀	埋没上 底部～体部片	口 底 台	6.6 6.0		細砂粒/還元塩/ 灰黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転ヘラナデ、高台は貼付。
第11108 PL-137	上師器 壺	カマド、埋没上 口縁部～胴部中位片	口 胴	18.9 19.4		細砂粒/良好/に ぶい 黄	外面頸部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラナデ。内面は胴部にヘラナデ。

棟 号 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
第11196 PL.137	5	土師器 甕	カマド、埋没土 口縁部～胴部中位片	口 制	19.2 21.0	細砂粒/良好/ ぶい相	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへう削り。内面は胴部にへうナデ。		
第11196 PL.137	6	土師器 埴輪	埋没土 口縁部～胴部上位片	口 制	19.8 20.7	細砂粒/良好/ ぶい相	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへう削り。内面は胴部にへうナデ。		
第11196	7	土師器 埴輪	埋没土 口縁部～胴部上位片	口 制	20.0	細砂粒/良好/ ぶい相	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへう削り。内面は胴部にへうナデ。		
第11196	8	須恵器 甕	埋没土 胴部片			細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	叩き締め成形。外面には平行叩き痕、内面は同心円状アテ貝痕が残る。		
第11196 PL.137	9	紡輪		径 幅	4.4 —	高 重	1.4 48.1	蛇紋岩//	表裏面とも多方向に研磨痕(線索痕)が残されているが、背面側は丁寧に研磨され、軸穴を中心に光沢痕(径1cm)が広がる。体部には縦取り痕が残る。横位線索痕が見られる。断面は台形状を呈する。
第11196	10	鉄滓	1/4	長 幅	8.0 5.7	厚 重	3.6 13.3	//	淨質は密で気泡がわずかに見られる。木炭痕は確認できず、上面は平らで下面はやや凹凸が見られる。

49号竪穴建物

棟 号 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
第11290	1	土師器 土杯	埋没土 口縁部～底部片	口 制	16.2	高		細砂粒/良好/明 黄灰	口縁部は横ナデ。体部は上半がナデ、下半から底部は手持ちへう削り。
第11290	2	土師器 杯	床面 1/5	口 底	16.4 3.8	高		細砂粒/良好/相	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへう削り。
第11290	3	土師器 椀	埋没土 口縁部～体部片	口 制	11.8	高		細砂粒/軟質/相	口縁部は横ナデ、体部は器面厚減のため整形不明。
第11290	4	須恵器 杯蓋	埋没土 口縁部～天井部片	口 制	16.8	高		細砂粒/還元焰/ 灰	ロクロ整形、回転は右回り。天井部は中程まで回転へう削り。口縁部は端部を折角面削げ。
第11290	5	須恵器 杯蓋	埋没土 天井部片	口 制	3.8	高		細砂粒/還元焰/ 浅黄	ロクロ整形、回転は右回り。天井部は回転へう削り。柄はボタン状の粘土板を嵌付し周縁をつまみ上げ環状に作る。
第11290	6	土師器 小型甕	埋没土 口縁部～胴部上位片	口 制	14.8	高		細砂粒・粗砂粒/ 良好/ぶい相	口縁部は横ナデ、胴部はやや斜め方向のへう削り。内面は胴部にへうナデ。
第11290 PL.137	7	土師器 土杯	床面 口縁部～胴部上半片	口 制	24.4 21.3	高		細砂粒/良好/ ぶい相	口縁部は横ナデ、胴部は縦方向へう削り。内面は胴部にへうナデ。

50号竪穴建物

棟 号 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
第11490	1	土師器 土杯	埋没土 1/4	口 底	15.0 9.8	高	4.9	細砂粒/良好/相	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへう削り。
第11490 PL.138	2	土師器 土杯	床面、埋没土 3/4	口 底	16.3 3.4	高		細砂粒/良好/相	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへう削り。内面底部は3～4段に螺旋状暗文。
第11590 PL.138	3	土師器 甕	掘方、埋没土 1/3	口 高	19.8 2.9	高		細砂粒/良好/相	口縁部は横ナデ、底部は手持ちへう削り。内面は口縁部に横方向のヘラミガキ。底部は放射状暗文。
第11490 PL.138	4	須恵器 広口壺	埋没土 口縁部～底部片	口 制	15.0 17.0	高		細砂粒/還元焰/ 灰	胴部は叩き締め成形。胴部には平行叩き痕が残る。内面胴部は下に同心円状アテ貝痕が残るが中位から上位はナデ消されている。
第11590	5	土師器 甕	カマド 底部～胴部下位片	底 孔	11.0 9.0	高		細砂粒/良好/ ぶい黄濁	胴部はへう削り。内面は胴部にへうナデ。底部は内削りする平面を作る。
第11590	6	土師器 土杯	床面、埋没土 口縁部～胴部上位片	口 制	26.0	高		細砂粒/良好/ ぶい黄濁	口縁部は横ナデ、胴部は縦方向のへう削り。内面は胴部にへうナデ。
第11590	7	土師器 土杯	掘方 口縁部～胴部上位片	口 制	27.6	高		細砂粒/良好/ ぶい黄濁	口縁部は横ナデ、胴部は縦方向のへう削り。内面は胴部にへうナデ。
第11590 PL.138	8	土師器 甕(底)	埋没土 口縁部～胴部上位片	口 制	19.8	高		細砂粒/良好/明 濁	口縁部は横ナデ、胴部はへう削り。内面は胴部にへうナデ。

51号竪穴建物

棟 号 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
第11690	1	須恵器 土杯	カマド、埋没土 口縁部～体部片	口 制	16.2	高		細砂粒/還元焰/ 焼/灰黄濁	ロクロ整形、回転は右回りか。内外面とも押し焼成。
第11690	2	土師器 土杯	埋没土 口縁部～胴部上位片	口 制	21.0 21.8	高		細砂粒/良好/ ぶい相	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへう削り。内面は胴部にへうナデ。

53号竪穴建物

棟 号 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
第7990	1	須恵器 杯蓋	埋没土 1/5	口 高	8.0 2.3	高		細砂粒/還元焰/ 灰白	ロクロ整形、回転は右回りか。天井部は降灰待着のため整形不明。

55号竪穴建物

棟 号 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
第11990 PL.138	1	土師器 杯	床面、壁外、42号カマド 1/2	口 底	12.8 11.5	高	6.5	細砂粒・黄/良 好/相	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへう削り。内面は体部から口縁部に斜放射状暗文。底部は螺旋状暗文。
第11990	2	土師器 土杯	埋没土 口縁部～体部片	口 制	13.6 14.0	高		細砂粒/良好/ ぶい黄濁	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへう削り。
第11990 PL.138	3	土師器 土杯	埋没土 1/4	口 高	14.0 4.4	高		細砂粒/良好/ ぶい黄濁	口縁部は横ナデ、体部は上半がナデ、下半から底部は手持ちへう削り。

5号土坑

種 類 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第141図	1	土師器 甕	埋没土 口縁部片	口 底	19.8	細砂粒/良好/橙	成形・整形の特徴 外面頸部に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、頸部には胴部へつ削りの影響がみられる。	

6号土坑

種 類 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第141図 PL.139	1	須恵器 椀	埋没土 1/3	口 底	11.6 5.8	高 3.8	細砂粒/酸化焙/にぶい黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。
第141図 PL.139	2	須恵器 椀	+5,+20,+21,埋没土 3/4	口 底	13.3 6.6	台 6.2 高 5.0	細砂粒・粗砂粒/ 還元焙/灰白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付。
第141図 PL.139	3	灰輪陶器 底部分	埋没土 底部～体部	底 台	7.0 6.7		微砂粒/還元焙/ 灰白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転ヘラナデ、高台は貼付、体部は回転へつ削り。施釉方法は洗け掛け。式副

8号土坑

種 類 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第142図	1	須恵器 椀	埋没土 底部～体部	底	5.4		細砂粒/還元焙/ 灰白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。

9号土坑

種 類 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第142図	1	須恵器 椀	底面 底部～体部片	底 台	6.0 5.4		細砂粒/酸化焙/ 灰黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付。

10号土坑

種 類 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第142図 PL.139	1	鉄製品 不明	定形か	長 幅	6.3 (3.1)	厚 重 0.4 16.0	//	鍍身の一部が欠損しているような形状の鉄製品。外側はやや薄く刃のようにも見えるが、詳細不明。

16号土坑

種 類 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第143図	1	黒色土器 口縁部片	埋没土 口縁部片	口 底	15.6 7.0		細砂粒/酸化焙/ にぶい黄橙	ロクロ整形、回転は右回り。内面黒色処理。内面は体部から口縁部に放射状、口割部に横方向のヘラミガキ。

18号土坑

種 類 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第143図 PL.139	1	須恵器 椀	埋没土 1/4	口 底	13.4 6.8	台 7.0 高 4.9	細砂粒/酸化焙/ にぶい黄橙	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付。

22号土坑

種 類 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第144図	1	須恵器 羽釜	底面 口縁部～胴部上位片	口 跨	18.0 22.2		細砂粒/酸化焙/ 橙	ロクロ整形、回転は右回り。跨は貼付。口割端部は平坦面を作る。

29号土坑

種 類 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第145図	1	土師器 杯	埋没土 口縁部～体部片	口 底	13.4 14.0		細砂粒/良好/橙	口縁部は上半が横ナデ、下半がナデ、体部から底部は手持ちへつ削り。

ビット

4号ビット

種 類 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第135図 PL.139	1	土師器 杯	埋没土 口縁部～底部片	口 底	15.8 12.6		細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへつ削り、器面摩滅のため単位不明。

第15表 溝出土遺物観察表

1号溝

種 類 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第149図	1	灰輪陶器 底部分	埋没土 底部分	底 台	9.2 9.0		微砂粒/還元焙/ 灰白	ロクロ整形、回転は右回り。底部成形不明、高台は貼付。施釉方法不明。

3号溝

種 類 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第151図	1	須恵器 底部分	埋没土 底部分	底 台	8.4 8.2		細砂粒/還元焙/ 灰	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付。内面は二次使用によって磨り磨かれている。
第151図 PL.139	2	瓦 平瓦	埋没土 一部分				細砂粒/酸化焙/ 橙	上面には布目筋。裏面には叩き痕が残る。側面はヘラナデ。
第151図 PL.139	3	瀬戸・美濃 陶器 輪軸瓦	底部	口 底	- 6.4	高 -	黄灰//	内面灰輪軸後に底部内面を蛇の目状に輪割す。外面無釉。17世紀～18世紀中葉

遺物観察表

第16表 遺構外出土遺物観察表

遺構外(1区)

種別 PL No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第1629区 PL.139	1	縄文土器 深鉢	塚下 底部破片		底 (9.2)	縦線飾・輝石・ 白色粒/良好/明 黄褐色	上7底。底部直上は粗粒調整。上位は横位無節取を 施す。内面平滑な撫で調整。	前期前葉
第1629区 PL.139	2	縄文土器 深鉢	淡クロ 体部破片			縦線飾・石英大 ・片岩・白色粒/ 良好/明赤褐色	口条付加の付加条。輪郭は不明である。内面強い斜 位撫で調整。凹凸を見る。	前期中葉
第1629区 PL.139	3	縄文土器 深鉢	淡クロ 底部破片		底 (11.5)	縦線飾・石英・ 輝石・白色粒/直 平軟/にぶい黄 褐色	直立気味に開く体部下。無節縦位取を施す。内面平 滑な撫で調整。	前期中葉
第1629区 PL.139	4	縄文土器 深鉢	淡クロ 口頸部破片			縦輝石・褐色粒 ・白色粒/良好/ にぶい黄褐色	内湾する口頸部。2条隆線による区画構成。渦巻文 と斜先文を配す。頸線は沈線。RLを充填する。内面横 位研磨を加える。	中期後葉
第1629区 PL.139	5	縄文土器 深鉢	口縁～体部1/4残存	口 (26.0)		縦石英・輝石・ 白色粒/良好/ にぶい褐色	平縁。口縁部内湾し体部中で括れを設けるキャリ パー状の器形。口縁部沈線1条を設け、体部上半は連 接する字状意匠。下半は分岐垂文が配される2帯構 成。施文部縄文は縦位L8充填施文。磨消跡及び内面は 研磨を加える。	中期末葉
第1629区 PL.139	6	縄文土器 深鉢	谷地塚下 体部破片			縦石英・輝石多 ・白色粒/良好/ にぶい黄褐色	内湾する体部。数条単位の条線が縦位弧状に施される。 内面強い横位研磨を加える。	後期前葉
第1629区 PL.139	7	縄文土器 深鉢	谷地塚下 口縁部破片			縦石英・輝石・ 褐色粒・白色粒/ 良好/明黄褐色	口唇部に刻みを加え。口縁部は横位沈線で画され斜位 短沈線を充填する。体部上半に横位沈線を設ける。内 面横位沈線を施す。平滑な撫で調整。	後期中葉
第1629区 PL.139	8	縄文土器 浅鉢	谷地塚下 底部残存		底 6.2	縦石英・褐色粒 ・白色粒/良好/ にぶい黄褐色	強く開く体部下。無文で内外面とも丁寧な研磨を加 える。底面削代削。	後期中葉
第1629区 PL.139	9	土師器 杯	0 1/5	口 底 11.0 高 11.6	高 3.3	細砂粒/良好/粗	口縁部は横ナデ。体部は上半がナデ。下半から底部は 手持ちへつ削り。	
第1639区 PL.139	10	須恵器 椀	0 2/3	口 底 12.0 高 5.8	高 4.6	細砂粒/酸化焙/ 浅黄	ロクロ整形。回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。 外面体部に墨書。	
第1639区 PL.139	11	須恵器 0 完形	0 完形	口 底 12.4 高 7.4	高 4.2	細砂粒・塵/酸 化焙/にぶい黄 褐色	ロクロ整形。回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。 外面体部に墨書。	
第1639区 PL.139	12	須恵器 椀	0 1/3	口 底 13.2 高 5.8	高 4.2	細砂粒/酸化焙/ 明黄褐色	ロクロ整形。回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。 全体的に丁寧な作り。	
第1639区 PL.139	13	須恵器 0 底部片	0 底部片	口 底 6.6 高 6.6		細砂粒/還元焙/ 明黄	ロクロ整形。回転は右回り。底部は回転ヘラナデ。高台 は貼付。	
第1639区 PL.139	14	灰輪陶器 0 灰輪陶器	0 口縁部～体部片	口 底 13.0 高 6.2	台 5.8 高 2.5	粗砂粒/還元焙/ 灰	ロクロ整形。回転は右回り。底部は回転ヘラナデ。体 部に回転へつ削り。高台は貼付。無輪方法は漬け掛け。	大塚2号室 式別
第1639区 PL.139	15	灰輪陶器 0 口縁部～体部片	0 口縁部～体部片	口 底 11.8		粗砂粒/還元焙/ 灰白	ロクロ整形。回転は右回り。体部に回転へつ削り。高台 は貼付。無輪方法は漬け掛け。	大塚2号室 式別
第1639区 PL.139	16	土師器 杯	谷地塚下 1/4	口 底 11.8 高 12.4	高 3.8	細砂粒/良好/粗	口縁部は横ナデ。体部は上半がナデ。下半から底部は 手持ちへつ削り。	
第1639区 PL.139	17	土師器 杯	谷地塚下 1/4	口 底 15.8 高 4.2		細砂粒/良好/粗	口縁部は横ナデ。体部は上半がナデ。下半から底部は 手持ちへつ削り。	
第1639区 PL.139	18	土師器 0 1/4	0 1/4	口 底 11.4 高 8.8	高 4.0	細砂粒/良好/粗	口縁部は横ナデ。体部から底部は手持ちへつ削り。器 面摩滅のため単位不明。	
第1639区 PL.139	19	土師器 杯	谷地塚下 口縁部～底部片	口 底 12.8 高 9.0	高 3.5	細砂粒/良好/粗	口縁部は横ナデ。体部から底部は手持ちへつ削り。	
第1639区 PL.140	20	須恵器 杯蓋	谷地塚下 3/4	口 径 11.4 高 3.4	力 9.2 高 2.7	細砂粒/還元焙/ 黄灰	ロクロ整形。回転は右回り。天井部は中程まで回転へ つ削り。内部に力エリを作る。横はボタン状の粘土板 を貼付し周面をつまみ上げ環状にする。	
第1639区 PL.140	21	須恵器 杯	谷地塚下 1/2	口 底 14.0 高 10.2	高 3.6	細砂粒/還元焙/ 灰	ロクロ整形。回転は右回り。底部は回転ヘラナデ。高台 は削り出し。	
第1639区 PL.140	22	須恵器 杯	谷地塚下 口縁部～底部片	口 底 16.8 高 11.3	台 8.8 高 3.9	細砂粒/還元焙/ 灰白	ロクロ整形。回転は右回り。底部は回転ヘラナデ。高台 は貼付。	
第1639区 PL.140	23	須恵器 杯	谷地塚下 底部～下位片	口 底 10.0 高 9.4		細砂粒/還元焙/ 灰黄	ロクロ整形。回転は右回り。底部は回転ヘラナデ。高台 は削り出し。	
第1639区 PL.140	24	須恵器 杯	谷地塚下 底部片	口 底 0		細砂粒/還元焙/ 灰	ロクロ整形。回転は右回り。底部は回転ヘラナデ。高台 は削り出し。	
第1639区 PL.140	25	須恵器 杯	谷地塚下 1/2	口 底 11.6 高 6.0	高 3.4	細砂粒/酸化焙/ 粗/暗灰黄	ロクロ整形。回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。 内外面とも横し焼成。	
第1639区 PL.140	26	須恵器 椀	谷地塚下 2/3	口 底 12.1 高 6.5	高 4.7	細砂粒/還元焙/ 灰白	ロクロ整形。回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第1639区 PL.140	27	須恵器 椀	塚 2/3	口 底 12.4 高 6.6	高 3.5	細砂粒・粗砂粒/ 還元焙/灰白	ロクロ整形。回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第1639区 PL.140	28	須恵器 椀	谷地塚下 1/3	口 底 12.4 高 6.4	台 6.2 高 4.9	細砂粒・粗砂粒/ 酸化焙/にぶい 黄	ロクロ整形。回転は右回り。底部は回転糸切り後ヘラ ナデ。高台は貼付。外面に墨書。墨書上部が欠損した ため読不能。	
第1639区 PL.140	29	須恵器 椀	谷地塚下 1/2	口 底 12.8 高 6.5	台 6.2 高 4.8	細砂粒/酸化焙/ 浅黄	ロクロ整形。回転は右回り。底部は回転糸切り後回転 ヘラナデ。高台は貼付。	

挿 図 PL No.	No.	種 類	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・形状の特徴	備 考		
第163図	30	須臾器	各地跡下 1/4	口 底	13.8 6.8	台 高	6.6 5.1	細砂粒/酸化燼/ にぶい黄橙	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付。	
第164図 PL-140	31	須臾器	各地跡下 1/3	口 底	15.0 7.4	台 高	7.0 5.4	細砂粒/還元燼/ 灰黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付。	
第164図 PL-140	32	黒色土器 輪花段皿	各地跡下 1/4	口 底	13.0 5.6	高 底	3.5	細砂粒/酸化燼/ 淡黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第164図 PL-140	33	黒色土器	各地跡下 1/2	口 底	11.6 6.9	高 底	4.3	細砂粒/酸化燼/ 浅黄橙	内面黒色処理。ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。内面は全面的にヘラミガキ。	
第164図 PL-140	34	黒色土器	各地跡下 1/2	口 底	16.9 6.9	台 高	6.9 7.5	細砂粒/酸化燼/ にぶい黄橙	内面黒色処理。ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転ヘラナデ、高台は貼付。内面は口唇部に横方向ヘラミガキ。底部から体部に草花文状の暗文。	
第164図	35	灰輪陶器 輪花部	各地跡下 口縁部～体部片	口	15.8			微砂粒/還元燼/ 灰黄	ロクロ整形、回転は右回り。施釉方法は刷毛塗りか、口唇部は外反する。	光ヶ丘1号 窯式期
第164図	36	灰輪陶器 輪花部	各地跡下 口縁部片					微砂粒/還元燼/ 灰黄	ロクロ整形、回転は右回り。施釉方法は刷毛塗りか、口唇部は外反する。	光ヶ丘1号 窯式期
第164図 PL-140	37	灰輪陶器 底部片	各地跡下 底部片	底	7.6 6.9			微砂粒/還元燼/ 灰黄	ロクロ整形、回転は右回り。高台は貼付。内面底部に重焼き痕が残る。施釉方法は漬け掛け。	大塚2号窯 式期
第164図	38	灰輪陶器 輪	各地跡下 口縁部～体部片	口	13.8			微砂粒/還元燼/ 灰白	ロクロ整形、回転は右回り。体部は回転ヘラ削り。施釉方法は漬け掛け。	大塚2号窯 式期
第164図	39	灰輪陶器 輪	各地跡下 口縁部～体部片	口	17.6			微砂粒/還元燼/ 灰白	ロクロ整形、回転は右回り。体部下位は回転ヘラ削り。施釉方法は刷毛塗りか。	光ヶ丘1号 窯式期
第164図	40	灰輪陶器 輪	各地跡下 底部～体部片	底 台	6.6 6.6			微砂粒/還元燼/ 灰黄橙	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転ヘラナデ、高台は貼付。施釉方法は漬け掛け。	大塚2号窯 式期
第164図	41	灰輪陶器 底部～体部片	各地跡下 底部～体部片	底 台	7.8 7.0			微砂粒/還元燼/ 灰白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転ヘラナデ、高台は貼付。施釉方法不明。	光ヶ丘1号 窯式期～大 塚2号窯式 期
第164図	42	灰輪陶器 底部～体部片	各地跡下 底部～体部片	底 台	7.2 7.0			微砂粒/還元燼/ 灰黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転ヘラナデ、高台は貼付。体部は回転ヘラ削り。施釉方法は漬け掛け。	大塚2号窯 式期
第164図	43	灰輪陶器 底部～体部片	各地跡下 底部～体部片	底 台	7.4 7.5			微砂粒/還元燼/ 灰白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転ヘラナデ、体部は回転ヘラ削り、高台は貼付。施釉方法は漬け掛け。	大塚2号窯 式期
第164図	44	灰輪陶器 底部～体部片	各地跡下 底部～体部片	底 台	6.6 6.0			微砂粒/還元燼/ 灰白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転ヘラナデ、高台は貼付。施釉方法は漬け掛け。	大塚2号窯 式期
第164図	45	須臾器 横瓶	各地跡下 胴部片					微砂粒/還元燼/ 灰白	胴部は引き締め成形。外面は回転ヘラ削り。内面にはアテ具痕が残るがヘラメ状の工具によるヘラナデ。	
第164図	46	須臾器 長頸壺	各地跡下 胴部片	胴	17.0			微砂粒/還元燼/ 灰白	ロクロ整形、回転は右回り。胴部上位、肩に円線による区画。区画内に刺突文を施す。	
第164図 PL-140	47	須臾器 長頸壺	各地跡下 胴部片	胴	20.2			微砂粒/還元燼/ 灰	ロクロ整形、回転は右回り。胴部は中位から下位にヘラナデ。上位上平はカキム、下平位は円線による区画、区画内に刻み目を巡らす。	
第165図	48	須臾器 長頸壺	各地跡下 胴部小片					微砂粒/還元燼/ 灰白	ロクロ整形、回転は右回り。胴部上位、肩に円線による区画、区画内に刺突文を施す。	
第165図	49	須臾器 長頸壺	各地跡下 頸部1/2	頸	7.0			微砂粒/還元燼/ 灰黄	ロクロ整形、回転は右回り。頸部にて口縁部と胴部を貼付か。	原始灰輪陶 器か
第165図	50	灰輪陶器 長頸壺	各地跡下 口縁部片					微砂粒/還元燼/ 灰白	ロクロ整形、回転は右回り。施釉方法不明。	
第165図 PL-140	51	須臾器 短頸壺	各地跡下 1/4	頸	15.0			微砂粒/還元燼/ 灰黄	ロクロ整形、回転は右回り。天井部は回転ヘラ削り。頸と凸部は一体で貼付。	
第165図 PL-140	52	土師器 上師器	各地跡下 口縁部～胴部片	口 胴	21.2 31.8			細砂粒/良好/稍 にぶい黄橙	外面胴部に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。	
第165図 PL-140	53	須臾器 瓶	各地跡下 底部片	底 孔	18.4 9.0			細砂粒/酸化燼/ にぶい黄橙	ロクロ整形、回転は右回り。内面はヘラナデ。	
第165図	54	須臾器 羽釜	各地跡下 口縁部～胴部上位片	口 胴	20.4 24.2	制	24.0	細砂粒・粗砂粒 /還元燼/灰黄	ロクロ整形、回転は右回り。頸は貼付。口唇部は内縮する平坦面を作る。	
第165図	55	須臾器 壺	各地跡下 口縁部片	口	21.8			細砂粒/還元燼/ 灰	口縁部はロクロ整形、回転は右回り。口唇部にて丸みをもつ凸部を巡らす。	
第165図	56	須臾器 壺	各地跡下 口縁部片					細砂粒/還元燼/ 灰黄	ロクロ整形、回転は右回り。内外面ともヘラナデ。口唇部は上下に引き出されている。	
第165図	57	須臾器 壺	各地跡下 口縁部片	口	47.8			細砂粒/還元燼/ 灰	ロクロ整形、回転は右回り。口唇部は上下に引き出されている。	
第166図 PL-141	58	瓦 丸瓦	各地跡下 1/6					細砂粒・粗砂粒 /酸化燼/にぶい 黄橙	上面には引き痕、下面は布目痕が残る、側面はヘラ削り。	
第166図	59	瓦 丸瓦	各地跡下 一部片					細砂粒・粗砂粒 /還元燼/暗灰黄	上面には引き痕、下面は布目痕が残る、側面はヘラ削り。	
第166図	60	瓦 丸瓦	各地跡下 一部片					細砂粒・粗砂粒 /還元燼/暗灰黄	上面には引き痕、下面は布目痕が残る、側面はヘラ削り。	
第167図	61	瓦 丸瓦	各地跡下 一部片					細砂粒・粗砂粒 /還元燼/暗灰黄	上面には引き痕、下面は布目痕が残る。	
第167図	62	瓦 平瓦	各地跡下 一部片					細砂粒・粗砂粒 /還元燼/暗灰黄	上面には布目痕、下面は引き痕が残る、側面はヘラ削り。	
第167図	63	瓦 平瓦	各地跡下 一部片					細砂粒・粗砂粒 /還元燼/暗灰黄	上面には布目痕、下面は引き痕が残る。	

遺物観察表

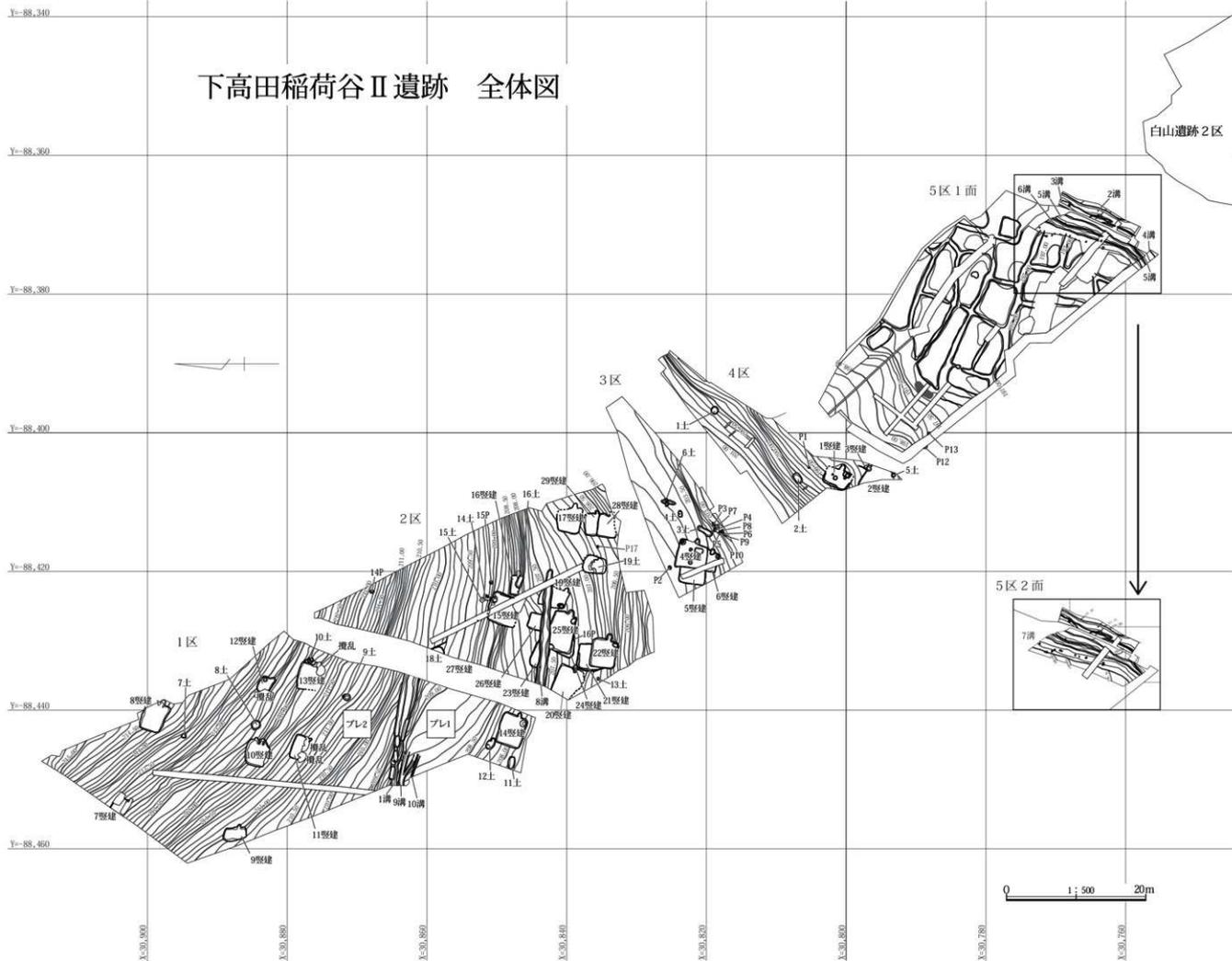
種 類 PL.No.	No.	種 類 種 別	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第167図 PL.141	64	瓦 平瓦	谷地B区下 一部片				細砂粒・粗砂粒 /還元焰/暗灰黄	上面には布目痕、下面は叩き痕が残る。	
第167図 PL.141	65	石蓋		長 幅	2 1.4	厚 0.2 0.5	チャート//	裏面側に節理面、背面側に素材剥離面を残す。加工は丁寧、薄手で、完成状態にある。凹基無茎蓋。	
第167図 PL.141	66	磨製石斧		長 幅	7.6 2.9	厚 0.8 25.0	珪質頁岩//	幅広薄片を用い、周辺加工を施し石蓋を作出する。刃部は表面面とも研磨されている。表面面とも素材面と加工面では剥離面の風化状態が異なり、時間差がある。研磨は部分的で、刃部に限られる。	
第167図 PL.141	67	凹石		長 幅	(13.8) 5.8	厚 3.4 345.7	緑色片岩//	背面側に凹斗状の窪み穴2がある。窪形状としてはやや不定形だが、扁平棒状窪ということになる。下端隅を欠損。窪サイズは不明。	
第167図 PL.141	68	石棒		長 幅	(12.0) 13.0	厚 12.9 2457.9	デイサイト//	円柱状を呈する石棒割部破片。割部径は径13cmほどで、完形なら1m前後の大型石棒となるだろう。表面面とも被熱して剥落。特に裏面側の破損が著しい。	
第167図 PL.141	69	紡輪		径 幅	3.8 -	厚 1.3 29.7	蛇紋岩//	表面面とも研磨が足りず、雑な作り。体部には面取り痕が明瞭に残されている。軸孔穴は径6mmを測る。断面は台形状を呈する。	
第167図 PL.141	70	鉄製品 不明	完形か	長 幅	(6.0) 1.3	厚 1.2 10.0	//	L字形の金属製品。一部劣化による剥離が見られる。断面長方形で両端に出土後の欠けは見られない。	
第167図 PL.141	71	鉄製品 釘	一部欠損	長 幅	(6.3) 0.5	厚 0.4 5.5	//	頭部とわずかに脚部が欠損する釘。頭部は理研時には既に欠損していたとみられる。	
第167図 PL.141	72	鉄製品 釘	一部欠損	長 幅	3.8 0.4	厚 0.4 2.1	//	頭部が欠損するが、理研時には既に欠損してたと見られる。	
第167図 PL.141	73	鉄製品 釘	体部	長 幅	(4.0) 0.5	厚 0.4 2.9	//	体部のみ残存する。断面四角形となる。	
第167図 PL.141	74	鉄滓	破片	長 幅	3.7 4.3	厚 2.7 69.9	//	上面に酸化土砂が付着する。下面はやや窪凹が多く、上面は窪凹が少なく、滓質は密。	
遺構外(区)									
種 類 PL.No.	No.	種 類 種 別	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第168図 PL.141	1	燻土器 深鉢	2区 体部破片				緻繊織・石英・ 片岩/白色粒/良 好/褐色	横位皿を施す。内面平滑な態で調整。	前期中葉
第168図 PL.141	2	土師器 上杯	1/4	口 底	11.8 9.4	高 3.9	細砂粒/良好/稍	口縁部は横ナデ。体部から底部は手持ちヘラ削り、器面摩滅のため単位不明。	
第168図 PL.141	3	須恵器 有台杯	谷地B区下 底部片	口 底	9.8 9.0	高 4.0	細砂粒・粗砂粒 /還元焰/黄灰	ロクロ整形。回転は右回り。底部は回転ヘラ削り、高台は貼付。	
第168図 PL.141	4	須恵器 杯	谷地B区下 1/4	口 底	12.8 6.8	高 4.0	細砂粒/還元焰 ざみ/灰白	ロクロ整形。回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第168図 PL.141	5	須恵器 杯	谷地B区下 3/4	口 底	12.8 6.4	高 3.8	細砂粒・粗砂粒 /還元焰/黄灰	ロクロ整形。回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第168図 PL.141	6	須恵器 杯	谷地B区下 ほぼ完形	口 底	13.5 5.2	高 4.5	細砂粒/還元焰 黄灰	ロクロ整形。回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第168図 PL.141	7	須恵器 杯	谷地B区下 1/2	口 底	11.6 6.2	高 6.0 5.4	細砂粒/還元焰 橙	ロクロ整形。回転は右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付。	
第168図 PL.141	8	黒色土器 杯	谷地B区下 口縁部片	口 底	15.8	高 -	細砂粒/還元焰 にぶい黄橙	ロクロ整形。回転は右回り。内面黒色処理。内面は横方向のヘラミガキ。	
第168図 PL.141	9	灰輪陶器 皿	谷地B区下 1/2	口 底	13.4 6.8	高 6.4 2.9	微砂粒/還元焰 黄灰	ロクロ整形。回転は右回り。底部は回転ヘラ削り。高台は貼付。内面底部に重複き痕が残る。施釉方法は刷毛塗り。	光ヶ丘1号 窯式期
第168図 PL.141	10	灰輪陶器 碗	谷地B区下 1/4	口 底	13.4 6.4	高 6.4 4.3	微砂粒/還元焰 灰白	ロクロ整形。回転は右回り。底部は回転ヘラ削り。高台は貼付。体部下半は回転ヘラ削り。施釉方法は漬け掛け。	大原2号窯 式期
第168図 PL.141	11	灰輪陶器 碗	谷地B区下 1/4	口 底	14.2 7.6	高 7.0 4.2	微砂粒/還元焰 灰白	ロクロ整形。回転は右回り。底部は回転ヘラ削り。高台は貼付。体部下半は回転ヘラ削り。施釉方法は漬け掛け。	大原2号窯 式期
第168図 PL.141	12	灰輪陶器 碗	谷地B区下 1/5	口 底	14.2 7.4	高 7.2 4.9	微砂粒/還元焰 灰黄	ロクロ整形。回転は右回り。底部は回転ヘラ削り。高台は貼付。体部下半は回転ヘラ削り。施釉方法は漬け掛け。	大原2号窯 式期
第168図 PL.141	13	灰輪陶器 碗	谷地B区下 口縁部一体部片	口 底	13.2 0	高 -	微砂粒/還元焰 灰白	ロクロ整形。回転は右回り。体部は回転ヘラ削り。施釉方法は漬け掛け。	大原2号窯 式期
第168図 PL.141	14	灰輪陶器 碗	谷地B区下 口縁部一体部片	口 底	15.8	高 -	微砂粒/還元焰 灰白	ロクロ整形。回転は右回り。施釉方法は漬け掛け。	大原2号窯 式期
第168図 PL.141	15	灰輪陶器 碗	谷地B区下 口縁部一体部片	口 底	15.8	高 -	微砂粒/還元焰 灰黄	ロクロ整形。回転は右回り。体部下半は回転ヘラ削り。施釉方法は刷毛塗り。	光ヶ丘1号 窯式期
第168図 PL.141	16	灰輪陶器 碗	口縁部片				微砂粒/還元焰 オリーブ黄	ロクロ整形。回転は右回り。施釉方法不明。口縁部は外反。	光ヶ丘1号 窯式期～大 原2号窯式 期
第168図 PL.141	17	灰輪陶器 碗	腹 底部～体部	口 底	7.0 6.6	高 -	微砂粒/還元焰 灰白	ロクロ整形。回転は右回り。底部は回転ヘラ削り。体部は回転ヘラ削り。高台は貼付。施釉方法不明。	大原2号窯 式期
第168図 PL.141	18	灰輪陶器 碗	谷地B区下 底部～体部	口 底	7.4 7.0	高 -	微砂粒/還元焰 灰白	ロクロ整形。回転は右回り。底部は回転ヘラ削り。高台は貼付。施釉方法は漬け掛け。	大原2号窯 式期
第168図 PL.141	19	灰輪陶器 碗	谷地B区下 底部～体部	口 底	7.4 7.0	高 -	微砂粒/還元焰 灰白	ロクロ整形。回転は右回り。底部は回転ヘラ削り。高台は貼付。施釉方法不明。	大原2号窯 式期

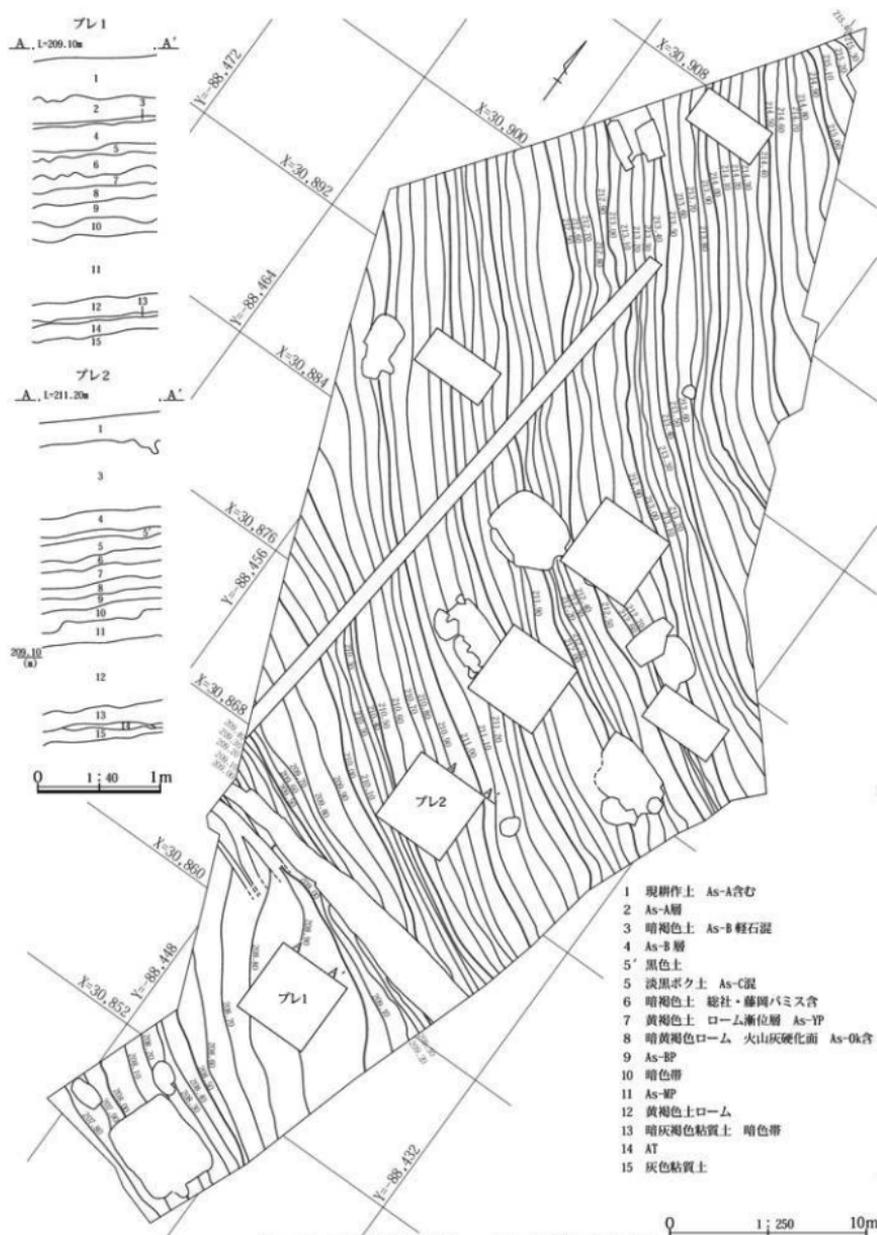
採 掘 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第1688R	20	灰輪陶器 底皿	谷地B区下 底部～体部	底 径 7.7 7.2		微砂粒/還元焼/ 灰黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転ヘラナデ、高台は貼付、体部下半は回転ヘラ削り。施釉方法は漬け掛けか。	大塚2号窯式期
第1688R	21	灰輪陶器 底皿	谷地B区下 底部～体部	底 径 8.0 7.6		微砂粒/還元焼/ 灰白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転ヘラナデ、高台は貼付。施釉方法は不明。	大塚2号窯式期
第1688R PL.141	22	灰輪陶器 底皿	谷地B区下 底部～体部片	底 径 8.8 8.8		微砂粒/還元焼/ 灰黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転ヘラナデ、高台は貼付。内面底部に円形の陰刻文と重なり痕が残る。施釉方法は刷毛塗り。	光ヶ丘2号窯式期古段
第1688R	23	灰輪陶器 須恵器 頸部	臨 頸部～胴部上位片	頸 径 7.4		細砂粒/還元焼/ 灰	ロクロ整形、回転は右回り。頸部にて胴部と口縁部を貼付。	
第1688R	24	須恵器 手付瓶	臨 頸部～胴部上位片	頸 径 8.3		細砂粒/還元焼/ 黄灰	ロクロ整形、回転は右回り。頸部にて胴部と口縁部を貼付。胴部上位に把手が貼付されている。	
第1688R	25	須恵器 壺	臨 底部～胴部下位片	底 径 7.8 8.0		細砂粒/還元焼/ 灰	ロクロ整形、回転は右回り。胴部下位は回転ヘラ削り、高台底面に割目。	
第1689R	26	上師器 甕	谷地B区下 口縁部～胴部上位片	口 径 18.0		細砂粒/良好/橙 黄橙	ロクロ整形、回転は右回り。	ロクロ上師器
第1689R	27	上師器 甕	谷地B区下 口縁部～胴部上位片	口 径 16.8 22.2		細砂粒/良好/橙 黄橙	ロクロ整形、回転は右回り。	ロクロ上師器
第1689R	28	須恵器 羽釜	臨 口縁部～胴部上位片	口 径 18.0 23.2		細砂粒/酸化焼/ 土に黄	ロクロ整形、回転は右回り。罫は貼付。口縁部端は平坦面を作る。	
第1689R	29	須恵器 羽釜	谷地B区下 口縁部～胴部上位片	口 径 19.4 24.0	胸 23.0	細砂粒/酸化焼/ 明褐	ロクロ整形、回転は右回り。罫は貼付。口縁部端は平坦面を作る。	
第1689R	30	須恵器 甕	谷地B区下 頸部～胴部上位片			細砂粒/還元焼/ 褐灰	外面には平行叩き痕が微かに残る。内面はヘラナデ。	
第1689R	31	龍泉京赤内 編連弁文陶	体部片	口 径 -	高 -	灰//	青磁輪の透明感が少なく、片形りの編連弁文が不明瞭。大卒府分類「機IIb類」。	13世紀前半
第1689R	32	瀬戸・美濃 陶器 土野丸皿	1/5	口 径 -	高 -	灰//	内外面長石軸。やや焼成不良。	17世紀中葉～後葉
第1689R PL.141	33	石蔵		長 2.5 幅 1.7	厚 0.2 重 1.0	珪質頁岩//	裏面側に素材面が残る他、押圧跡が全面を覆う。返し部は鋭く、側縁を絞り込んで、尖り気味の先端部を作出する。完成状態。凹基無蓋跡。	
第1689R PL.141	34	石蔵		長 1.7 幅 1.5	厚 0.4 重 0.8	黒曜石//	押圧跡が全面を覆い、丁寧な作り。基部は裏面側とも磨削後研磨され、器体長軸に平行する線条痕が残る。完成状態。平基無蓋跡。	
第1689R PL.141	35	凹石		長 8.1 幅 8.2	厚 6.4 重 547.7	粗粒輝石安山岩 /0/0	円錐中央付近に表裏面ともアバタ状の敲打痕が集中するほか、側縁にも同等の敲打痕が集中する。石材は空隙が多く、側縁は粗く、摩耗痕については不明瞭で、判断が難しい。	
第1689R PL.141	36	敲石		長 17.4 幅 12	厚 4.4 重 1524.8	粗粒輝石安山岩 /0/0	円錐の小口部分に敲打、磨削痕がある。鑿形状は大形の偏平鑿で、鑿の背面側には摩耗が広がるほか、打痕があり、当初は台石として使われたものと思われる。粗熟して全面が覆け、ヒド割れている。	
第1689R PL.141	37	敲石		長 15.9 幅 3.7	厚 3.7 重 276.7	緑色片岩//	背面側全面が敲打されているほか、裏面側先端部が著しく摩耗している。背面側には器体長軸に並行するよう溝2条があり、底石としても機能したのか、溝の断面形状は先端部が内字状、それ以下が外字状を呈す。	
第1700R PL.142	38	鉄製品 紡輪	完形	長 4.8 幅 4.8	厚 0.2 重 16.7	//	中心部の軸穴が一方から成形された痕跡が確認できる。	
第1700R PL.142	39	鉄製品 刀子	一部欠損	長 8.6 幅 1.4	厚 0.4 重 8.7	//	某部分に木質が残存する。某部分の木質は木目が某に対して平行だが、区に近い部分では有機質が直角に巻かれるように見られる。刃区ははっきりと見られず緩やかに刃に移行する。	
第1700R PL.142	40	鉄製品 釘か	破片	長 (3.7) 幅 1.4	厚 1.4 重 8.4	//	周囲が厚いさびに覆われている。断面は四角形とみられるが、残りが見えない。やや太めの釘とみられるが、詳細不明。	
第1700R PL.142	41	鉄製品 未製品か	破片	長 3.6 幅 2.0	厚 0.2 重 4.8	//	一部断面形状が判明しているように見えるが、場所によって刃の付けられている向きが異なるか。製品としては成り立たない。	
第1700R PL.142	42	鉄製品 鏝	一部欠損	長 11.9 幅 2.9	厚 1.2 重 29.9	//	柳葉形鏝。刃は棒状に広がり、某の断面は四角形となる。	
第1700R PL.142	43	鉄製品 鏝	完形	長 6.7 幅 1.5	厚 0.3 重 8.8	//	三角形で逆刺を持つ。某部分の断面は四角く、下部に向かって太くなる。	
第1700R PL.142	44	鉄製品 釘	一部欠損	長 (5.4) 幅 0.6	厚 0.6 重 7.8	//	脚部が欠損する。頭部は折れ直すように見える。脚部の劣化が激しい。	
第1700R PL.142	45	鉄製品 釘	一部欠損	長 7.5 幅 0.4	厚 0.4 重 6.8	//	頭部が一部欠損する。頭部に折れは見られ、頭部の一部の可能性があるが、劣化が激しく確定できない。	
第1700R PL.142	46	鉄滓	破片	長 7.5 幅 5.3	厚 3.0 重 152.8	//	上面、下面ともわずかに酸化土砂が付着している。洋灰は密で空隙は少ない。炭化物は確認できない。	
第1700R PL.142	47	鉄製品 鉄滓	破片	長 6.2 幅 4.4	厚 2.2 重 57.6	//	下面にわずかに酸化土砂と炭化物と見られる箇所が残る。下面は発泡が見られるが、上面の表面は発泡がみられない。	
第1700R PL.142	48	鉄滓	ほぼ完形	長 4.7 幅 4.7	厚 2.0 重 55.0	//	下面に砂が多く付着する。発泡は少なく、洋灰は密。	

遺物観察表

種 類 PL.No.	No.	種 類 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第1709 PL.142	49	鉄製品 鉄滓	破片	長 幅	6.5 5.4	厚 重	2.0 55.2	//	下部に大きめの礫と小石が混じる。上部の滓質は密で気泡はわずかである。
遺構外(3区)									
種 類 PL.No.	No.	種 類 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第1710 PL.1	1	在地系土器 口縁部	口縁部片	口 底	- -	高 -	- -	灰//	還元炎焼成。内面下位使用により、器面平滑となる。15世紀か
遺構外(4区・他)									
種 類 PL.No.	No.	種 類 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第1729 PL.142	1	縄文土器 深鉢	遺構外 体部破片					粗石英・霞母多 良好/褐色	外反する体部。内底沈線による弧状意匠が配され、三又文が施される。内面無文。
第1729 PL.142	2	縄文土器 深鉢	遺構外 体部破片					粗石英・褐色粒 ・白色粒/良好/ 明黄色色	縦位沈線に画された幅狭の磨消部懸垂文構成。施文部は丸充填施文のち弧状沈線を重ねる。内面平滑な型で。
第1729 PL.142	3	縄文土器 深鉢	33住No12 体部破片					粗輝石・褐色粒 ・白色粒/良好/ 赤・黄褐色	体部下平か。縦位沈線による懸垂文と沈線に画された磨消部による1字状意匠。施文部は縦位無節し。内面縦位研磨。
第1730 PL.142	4	縄文土器 浅鉢	46住・47住 体部破片					粗石英・輝石・ 白色粒/良好/ 赤・黄褐色	体部上半か。外面は無文で内面口縁部に3条の横位沈線を設け、斜位刻みを施す。内面研磨を加える。
第1730 PL.142	5	弥生土器 甕	体部片					輝石・安山岩系 粗粒/明黄色色 //	横位の磨擦羽状文。外面整形はハケメ、内面は粗いミガキ。
第1730 PL.142	6	弥生土器 甕	掘方 口縁片					安山岩系粗～細 砂/黒褐色//	口唇と口縁外面に縄文(LR)。
第1730 PL.142	7	弥生土器 甕	掘方 口縁片					安山岩系粗～細 砂/黒褐色//	口唇と口縁外面に縄文(LR)。
第1730 PL.142	8	弥生土器 甕	埋土 胴部片					輝石・安山岩系 粗粒/明黄色色//	横位沈線区内に沈線波状文をめぐらす。施文は反時計回り。外面無文部はミガキ。内面ナデ。
第1730 PL.142	9	土師器 杯	埋没土 口縁部～体部片	口	11.4			細砂粒/良好/暗	口縁部は上半が横ナデ、下半がナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。
第1730 PL.142	10	須恵器 杯蓋	埋没土 1/3	口 幅	11.2 5.0	力 高	10.2 2.0	細砂粒/還元焰/ 灰黄	ロクロ整形。回転は右回り。天井部は回転ヘラ削り。内面にカエリを作る。
第1730 PL.142	11	須恵器 椀	1/3	口 底	13.0 6.4	高 3.9		細砂粒/還元焰/ 灰白	ロクロ整形。回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。
第1730 PL.142	12	須恵器 長頸甕	製部片	制	18.0			細砂粒/還元焰/ 灰	ロクロ整形。回転は右回り。胴部中心は回転ヘラ削り。胴部上位・肩に凹線が深がり、その上位に刺突文を施す。
第1730 PL.142	13	土師器 蓋	埋没土 底部～胴部下位片	底	9.6			細砂粒/良好/ 赤・黄褐色	底部と胴部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。内外面とも器面厚減のため単位不明。
第1730 PL.142	14	石蔵		長 幅	2.1 (1.5)	厚 重	0.4 0.8	黒曜石//	加工は丁束で、鉋削が全面を覆う。返し部は丸味を持つ。左辺部の返し部を欠損する。完成状態。内基無著跡。
第1730 PL.142	15	鉄製品 蓋	破片	径	(9.0)	厚 重	0.2 23.0	//	内面に外径から6mmの所で突起が作られ、上面は中心部がわずかにへこむ。
第1730 PL.142	16	鉄製品 釘	破片	長 幅	(2.2) 0.4	厚 重	0.2 0.8	//	細部のみが残存し、劣化によりやせている釘。一部劣化に薄くなっているが、断面形状は四角形であったとみられる。
第1730 PL.142	17	鉄貨 大銀通寶	完形	長 幅		厚 重		//	面の文字、輪、郭は明瞭。背は一部輪、郭が不明瞭。穴が非常に丸く、輪の幅が狭い。
第1730 PL.142	18	鉄貨 古寛永	完形	長 幅		厚 重		//	面、背ともに文字、輪、郭は明瞭。背の輪、郭がわずかに右上にずれる。
第1730 PL.142	19	鉄貨 新章永(11 波)	完形	長 径 短 径	2.810 2.011	厚 重	0.122 4.5	//	面の形は深く、文字、輪、郭が明瞭。背はやや形が浅い。

下高田稲荷谷Ⅱ遺跡 全体図





第175図 下高田稲荷谷Ⅱ遺跡 1区旧石器試掘平・断面図

第2節 下高田稲荷谷Ⅱ遺跡

〔概要〕南東に在る下高田白山遺跡の1区と谷を隔て、本遺跡低地部の5区、続いて北西方向に台地上の4区、3区、2区、1区と遺構は展開する。

検出された遺構は、低地部の5区ではAs-B(浅間山B軽石)下の水田遺構や溝跡などの生産遺構が、台地上では2区を中心に古墳時代後期から平安時代に至る竪穴建物、溝、土坑など集落を構成する遺構が検出された。

第1項 竪穴建物

調査において谷側の4区より3軒、3区より3軒、台地上の2区より15軒、1区より8軒の竪穴建物跡が検出された。

建物の時期は、全て奈良・平安時代と推定され、検出

建物の分布から、集落の中心は2区中央付近にあるものと推察される。

また、検出された竪穴建物は、隣接する下高田白山遺跡と同様にカマドの設置方向で、北東壁にカマドを持つ一群と、南東壁にカマドを持つ一群に大別され、重複関係では南東壁にカマドを持つ建物の方が新しい傾向にある。

以下に個々の建物についての詳細を記す。

1号竪穴建物 第176～179図 PL.63・86・143

(旧4区1号住居)

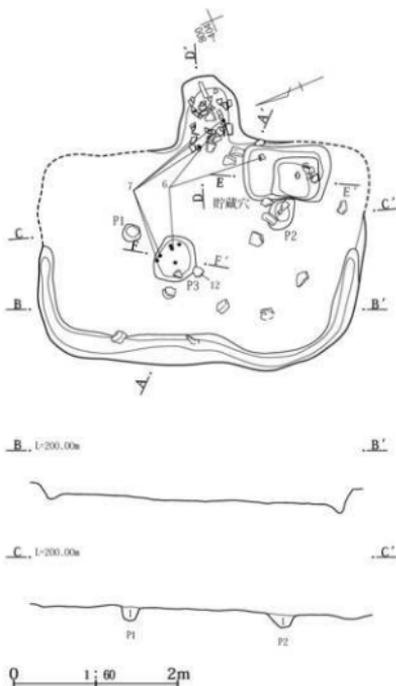
位置：4区 801-406付近

規模：3.86m×2.65m程、深度は26～43cm程を計る。

面積：(10.604)m²

形状：隅丸長方形

主軸方位：N-113°-E



4区1号竪穴建物

- 1 黒褐色土 軽石粒と焼土粒・炭化物を微量含む。しまりあまりなし。
- 2 黒褐色土 焼土と炭化物を少量含む。しまり、粘性ともにややあり。
- 3 黒褐色土 焼土と炭化物・ロームブロックを少量含む。しまりあまりなし。

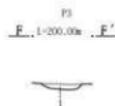


4区1号竪穴建物貯蔵穴

- 1 黒色土 φ1～10mmの軽石粒を部分的に含む。焼土粒をわずかに含む。しまりあまりなし。
- 2 黒色土 φ1～10mmの軽石粒を部分的に含む。しまりあまりなし。

4区1号竪穴建物P1・2

- 1 黒褐色土 φ1～3mmの軽石粒を微量含む。焼土粒をわずかに含む。しまりあまりなし。



4区1号竪穴建物P3

- 1 黒褐色土 焼土粒と焼土ブロックを多量に含む。しまりあまりなし。

第176図 1号竪穴建物平・断面図

埋没土：黒褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。建物の南東半は、上面の削平により一部の壁を失う。

床面：東コーナーと南コーナー付近の削平部を除き、地山ローム面の硬化が確認される。

カマド：南東壁のほぼ中央に位置する。遺存状態は悪く、カマドに据えられたと思われる礎が床面上より出土しているため、石組みのカマドであったと推察される。燃燒部は壁ラインのやや外側に位置し、浅く窪む。煙道部は壁よりあまり突出せず、緩やかな勾配で立ち上がる。

柱穴：中央部の長軸線上に1.8mほどの間隔で2穴のピットが検出され、深度は15cm程と浅いが、位置的に柱穴と考えられる。

貯蔵穴：カマド右脇のコーナー寄りの壁際から、方形を呈し、深度15cm程を計る土坑が1基検出される。

壁周溝：北西壁と南西・北東壁の北西半部に壁周溝が残る。

掘り方：なし。

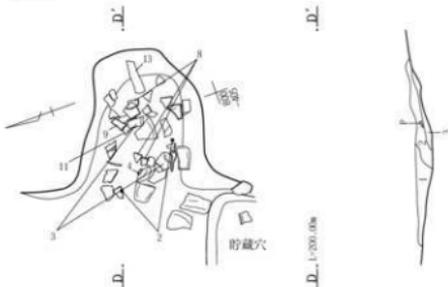
重複：なし。

遺物：本建物からは土師器、須恵器、灰軸陶器などが出土している。図示した土器には、土師器杯・甕、須恵器杯・椀・壺・羽釜・甕、灰軸陶器皿がある。このうち、No. 2の土師器椀、No. 3の須恵器椀、No. 4の灰軸陶器皿、No. 6・7の土師器甕、No. 8～11の須恵器羽釜がカマドからの出土である。なお、No. 6の土師器甕の一部は貯蔵穴とP 3、No. 3の須恵器椀とNo. 7の土師器甕の一部片がP 3から出土している。No. 5の須恵器壺は口縁部が欠損後に頸部を平滑に調整して使用している。

所見：本建物は、調査区4区の南端に在り、南西の低地へと傾斜する地形変換点に当たる。

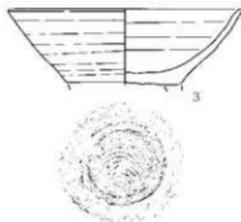
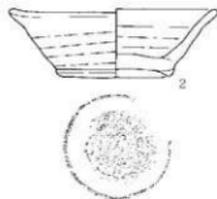
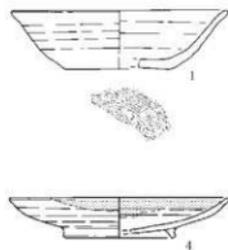
本建物の時期については、カマドから出土した須恵器椀と羽釜から、10世紀第1四半期に比定できる。

カマド



4区1号貯穴建物カマド

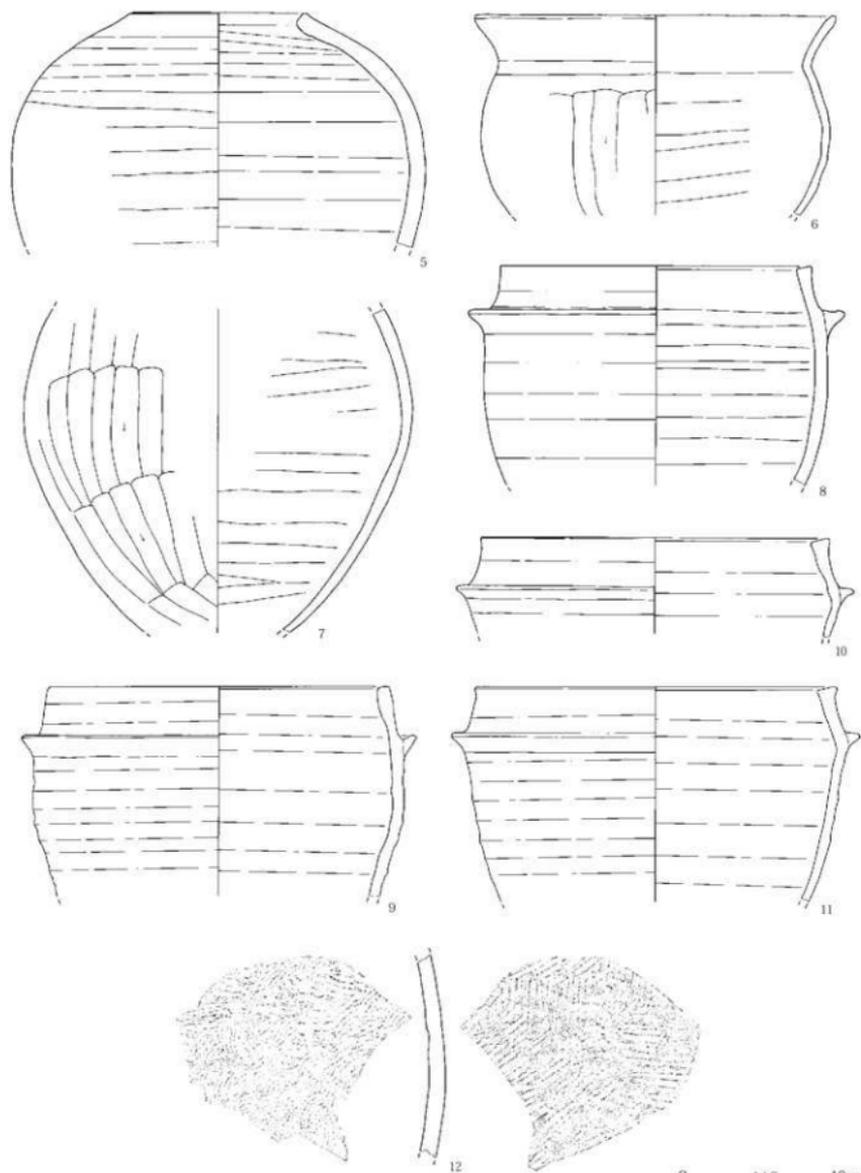
- 1 黒褐色土 焼土粒をわずかに含む。しまりありなし。
- 2 黒褐色土 焼土粒と炭化物をわずかに含む。しまりありなし。
- 3 黒色土 φ1～3mmの軽石粒をわずかに含む。しまりややあり。



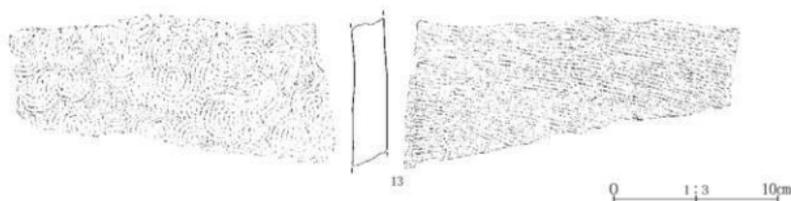
0 1:30 1m

0 1:3 10cm

第177図 1号貯穴建物カマド平・断面図及び出土遺物(1)



第178図 1号竪穴建物出土遺物(2)



第179図 1号竪穴建物出土遺物(3)

2号竪穴建物 第180～182図 PL.64・86・143・144

(旧4区2号住居)

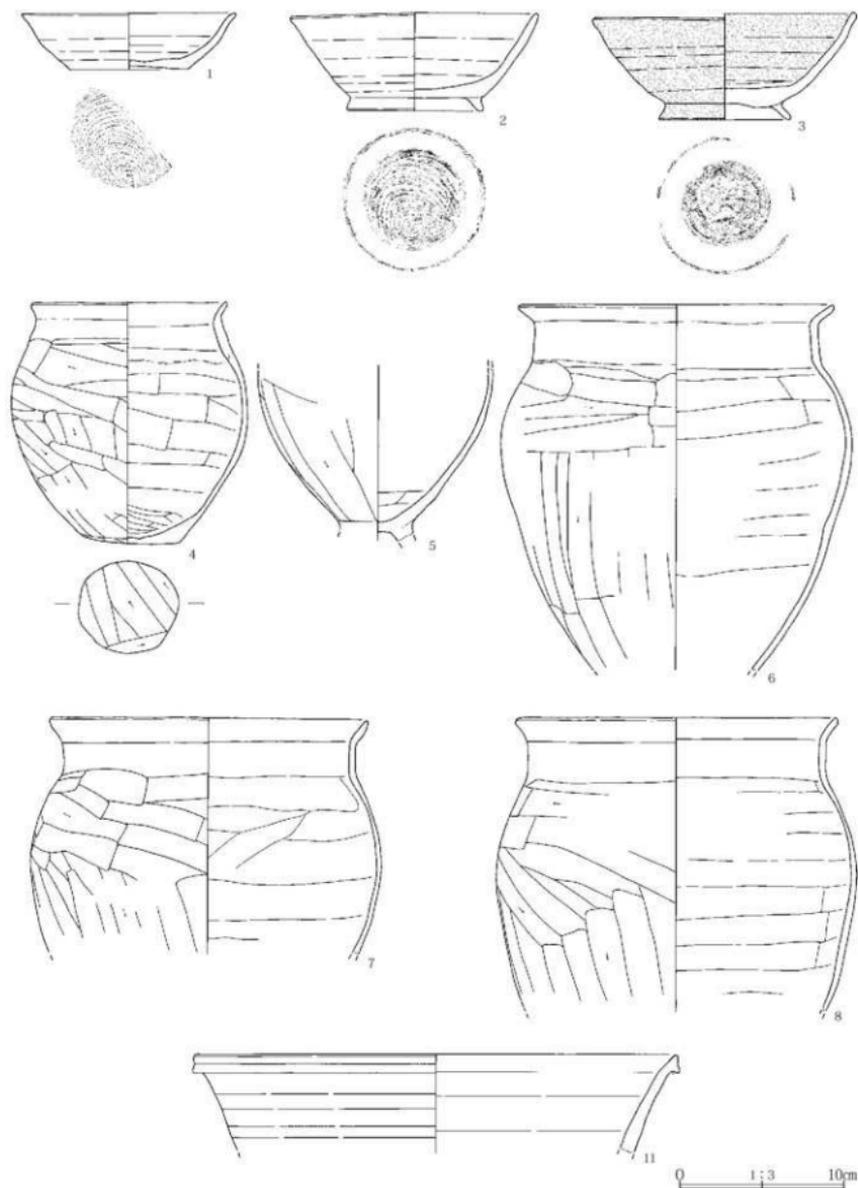
位置: 4区 796-406付近**規模:** (3.85)m×(3.20)m、深度は31～40cmほどを計る。**面積:** 7.219+α㎡**形状:** 不明。調査区端に位置し、北東壁の一部のみを調査。**主軸方位:** N-29°-E**埋没土:** 黒褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。**床面:** 掘り方・貼り床を有さず、掘削土を踏み固め、床面とする。**カマド:** 北東壁に設けられるが、建物内の位置関係は不明。上面の遺存状態は悪いが、両袖部の袖石は原位置を保つ。燃焼部は壁ラインのやや外側に位置し、浅く窪む。煙道部は壁より突出せず、緩やかな勾配で立ち上がる。**柱穴・貯蔵穴・壁周溝:** 不明。いずれも調査範囲内での検出はない。**掘り方:** なし。**重複:** 北東壁のカマド煙道部にて3号竪穴建物と重複し、カマドの遺存状態より、本建物の方が新しいものと判断された。**遺物:** 本建物からは土師器、須恵器などが出土している。図示した土器には、土師器台付甕・甕、須恵器杯・椀・甕がある。このうち、No. 2・3の須恵器椀が床面、No. 5の土師器台付甕、No. 6～10の土師器甕がカマドからの出土である。なお、No. 6・8・9の土師器甕の一部片は床面から出土したものと接合している。**所見:** 調査区4区の南端に在り、南西側の低地へと傾斜する地形変換点に当たる。

本建物の時期については、カマドから出土した土師器甕から9世紀第3四半期に比定できる。

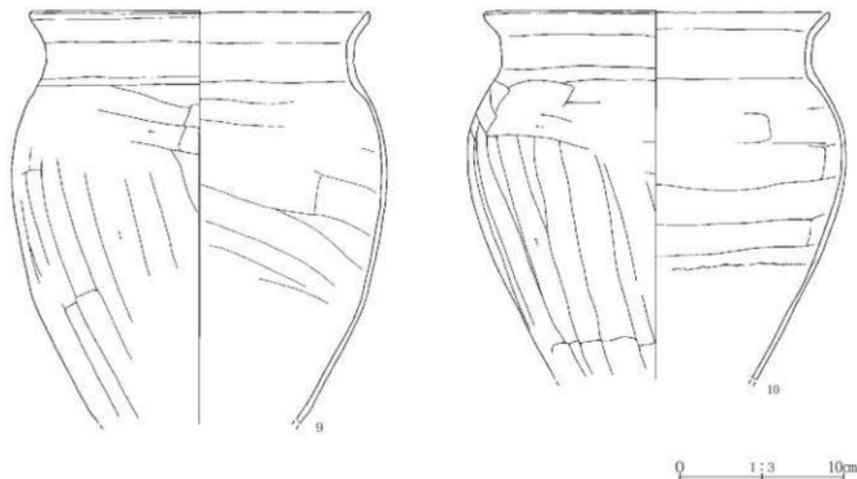
3号竪穴建物 第180図 PL.86

(旧4区3号住居)

位置: 4区 798-404付近**規模:** (1.30)m×(0.90)mほどを計る。**面積:** 0.57+α㎡**形状:** 不明。**主軸方位:** N-17°-E**埋没土:** 不明。上面の削平により僅かに床面が残るのみ。**床面:** 掘り方・貼り床を有さず、掘削底面の地山ローム土を踏み固めて床面とする。**カマド・柱穴・貯蔵穴・壁周溝:** 不明。いずれも調査範囲内での検出はない。**掘り方:** なし。**重複:** 南西部において2号竪穴建物のカマド部と重複し、カマドの遺存状況より本建物の方が古いものと判断される。**遺物:** なし。**所見:** 調査区4区の南端に在り、南西側の低地へと傾斜する地形変換点に当たる。上面の削平を受け、僅かに床面の一部を検出するのみ。本建物の時期については、2号竪穴建物との重複関係より9世紀の前半と推定される。



第181图 2号竪穴建物出土遺物(1)



第182図 2号竪穴建物出土遺物(2)

4号竪穴建物 第183～185図 PL.65・66・86・144

(旧3区4号住居)

位置: 3区 822-418付近

規模: 4.54m×3.01m、深度は4～11cmほどを計る。

面積: (16.675)㎡

形状: やや歪な台形

主軸方位: N-102°-E

埋没土: 褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。

床面: 地山土または掘り方埋土の上面を踏み固めて床面とする。カマド前面の床面上には粘土の散乱が確認される。

カマド: 南東壁のほぼ中央部に位置する。上面の削平により遺存状態は悪く、僅かに燃焼部が残るのみ。燃焼部は壁ラインよりやや外側に位置し、浅く窪む。煙道部はあまり突出せず、緩やかな勾配で立ち上がる。貯蔵穴の中より大型の焼礫が出土しており、カマド構築材として使用されていた物と推察される。

柱穴: 床面中央部に1.9mほどの間隔で径35～60cm、深度20～40cmほどを計るピットが2穴検出される。建物の短軸中央部を結ぶ位置に在り、柱穴と推察される。

貯蔵穴: 北コーナー部において検出され、径80cm、深度35cmほどを計る。坑内より焼礫が出土していることから、

カマド廃棄時には貯蔵穴が開いていたものと推察される。

壁周溝: なし。

掘り方: 床面中央部を中心に10～15cmほど皿状に掘り窪め、一部に土坑状の掘り込みを有する。

重複: 西壁側にて5号竪穴建物と、南壁側にて6号竪穴建物と重複し、埋土の状況より、いずれの建物より本建物の方が新しいものと判断された。新旧関係は、新しいものより4号→6号→5号竪穴建物となる。

遺物: 本建物からは土師器、須恵器、黒色土器、灰軸陶器などが出土している。図示した土器には、土師器甕、須恵器椀・羽釜、黒色土器椀、灰軸陶器椀がある。このうち、No.1須恵器椀、No.3の灰軸陶器皿、No.5の土師器小型甕、No.8の須恵器羽釜が床面、No.6・7の須恵器羽釜が貯蔵穴、No.2の灰軸陶器椀が掘り方からの出土である。なお、No.2・3の灰軸陶器椀は、光ヶ丘1号窯式期、皿は大原2号窯式期に比定できる。

所見: 調査区3区の西端部に在り、周囲には建物の密集は見られないが、本遺構のみ3軒の重複となる。

本建物の時期については、床面や貯蔵穴から出土した灰軸陶器椀、須恵器羽釜から10世紀第1四半期に比定できる。

5号竪穴建物 第183・184・186図 PL.65・66・86

(旧3区5号住居)

位置：3区 822-420付近

規模：3.77m×2.21m、深度は5～21cmほどを計る。

面積：8.713+α㎡

形状：不明。方形か

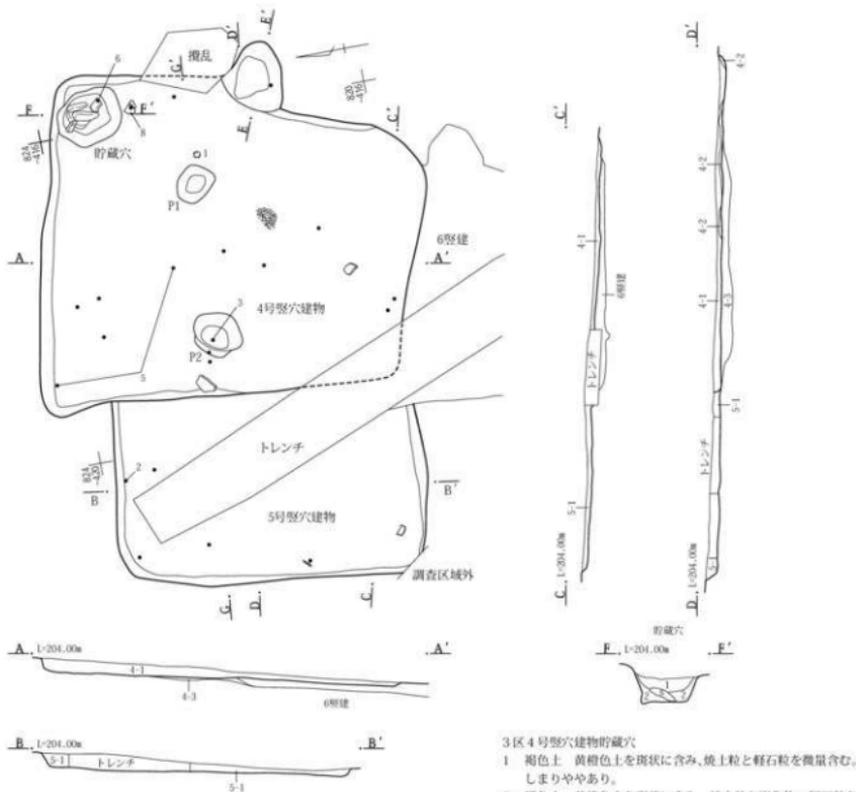
主軸方位：N-9°-E

埋没土：褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。

床面：残存部においては、貼り床を有さず、掘削下面の地山ローム土を踏み固めて床面とする。

カマド：不明。残存範囲においてはカマドもがも検出されていない。

柱穴・貯蔵穴・壁周溝：残存範囲においては検出されていない。



3区4・5号竪穴建物

- 4-1 暗褐色土 ローム粒とロームブロックを部分的に含み、焼土粒を微量含む。しまりあまりなし。
- 4-2 褐色土 ローム粒を多量に含み、ローム小ブロックを少量含む。
- 4-3 褐色土 黄褐色土を斑状に含み、軽石粒と焼土粒・炭化物を微量含む。しまりややあり。
- 5-1 褐色土 ローム粒とロームブロックを部分的に含み、焼土粒と炭化物を微量含む。しまりあまりなし。

3区4号竪穴建物貯蔵穴

- 1 褐色土 黄褐色土を斑状に含み、焼土粒と軽石粒を微量含む。しまりややあり。
- 2 褐色土 黄褐色土を斑状に含み、焼土粒と炭化物・軽石粒を少量含む。しまりややあり。

第183図 4・5号竪穴建物平・断面図

掘り方：なし。

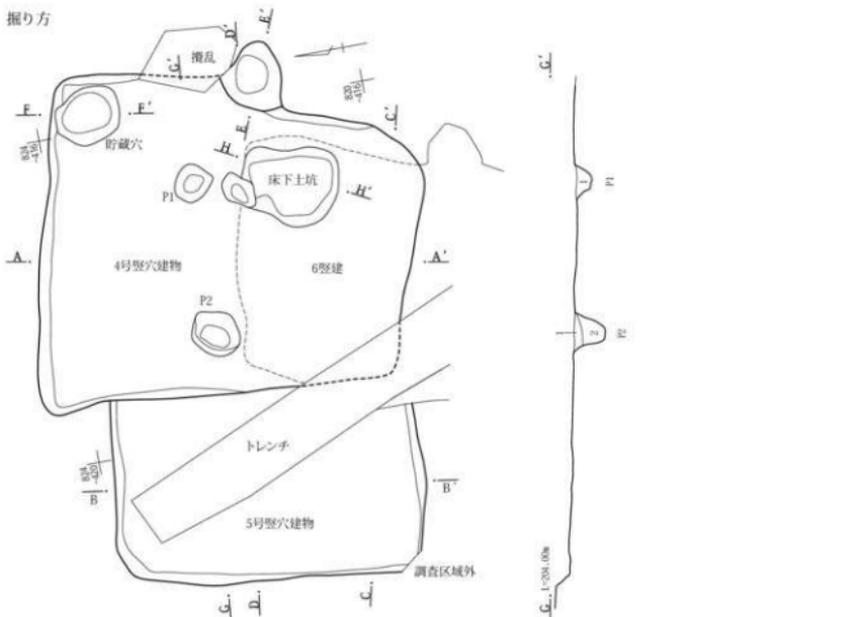
重複：東側にて4号竪穴建物と、南東側にて6号竪穴建物と重複し、埋土状況よりいずれの建物より古いものと判断された。新旧関係は、新しいものより4号→6号→5号竪穴建物となる。

遺物：本建物からは土師器、須恵器が出土している。図

示できたものは、土師器甕の2点だけであった。この2点はともに床面からの出土である。

所見：調査区3区の西端部に在り、周囲には建物の密集は見られないが、本遺構のみ3軒の重複となる。本建物の時期については、床面から出土した土師器甕から7世紀代に比定できる。

掘り方

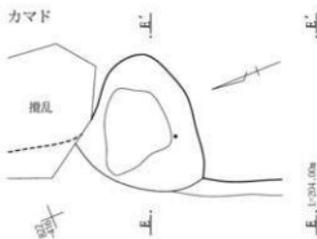


3区4号竪穴建物床下土坑

- 1 褐色土 軽石粒を少量含む。焼土粒と炭化物を微量含む。しまりややあり。
- 2 黄褐色土 褐色土が部分的に混じる。軽石粒を微量含む。しまりややあり。

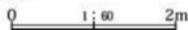
3区4号竪穴建物P1・P2

- 1 褐色土 黄褐色土が部分的に混じる。焼土粒と炭化物をわずかに含む。しまりあまりなし。
- 2 黄褐色土 褐色土が混じり合う。焼土粒と炭化物をわずかに含む。しまりあまりなし。

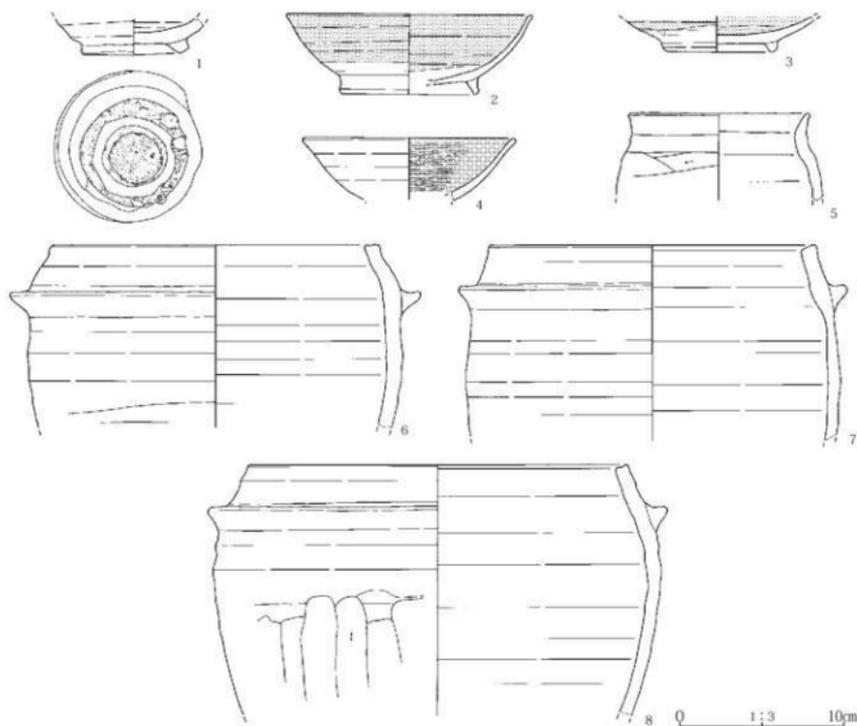


3区4号竪穴建物カマド

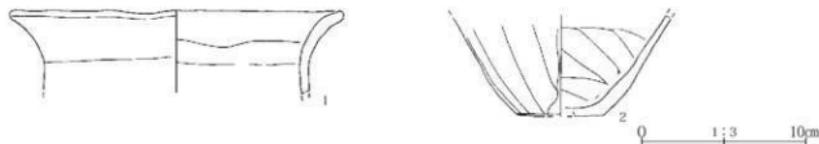
- 1 褐色土 焼土粒と炭化物・ローム粒・ロームブロックを微量含む。しまりなし。
- 2 褐色土 焼土粒と焼土ブロックを多量に含む。しまりなし。



第184図 4・5号竪穴建物掘り方平・断面図



第185図 4号竪穴建物出土遺物



第186図 5号竪穴建物出土遺物

6号竪穴建物 第187・188図 PL.65・66・86・145

(旧3区6号住居)

位置：3区 819-418付近

規模：3.45m×2.70mほどを計る。

面積：(10.568)m²

形状：隅丸長方形。

主軸方位：N-104°-E

埋没土：褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。北

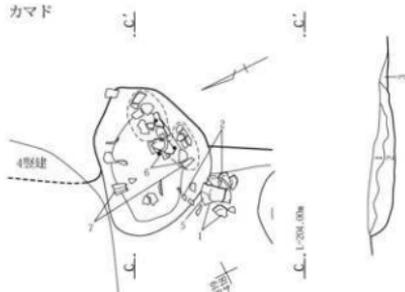
半上層部を重複により失う。

床面：貯蔵穴周辺を除く掘り方の上面を踏み固めて床面とする。

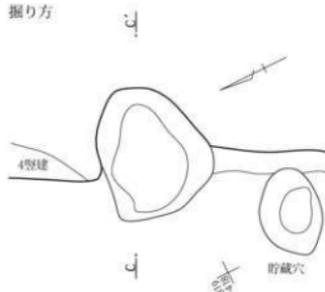
カマド：南東壁の南コーナー寄りに位置する。上面の削平により遺存状態は悪く、僅かに燃焼部が残るのみ。燃焼部は壁ラインよりやや外側に位置し、浅く窪む。煙道部はあまり突出せず、緩やかな勾配で立ち上がる。

柱穴：残存範囲においては検出されていない。

カマド



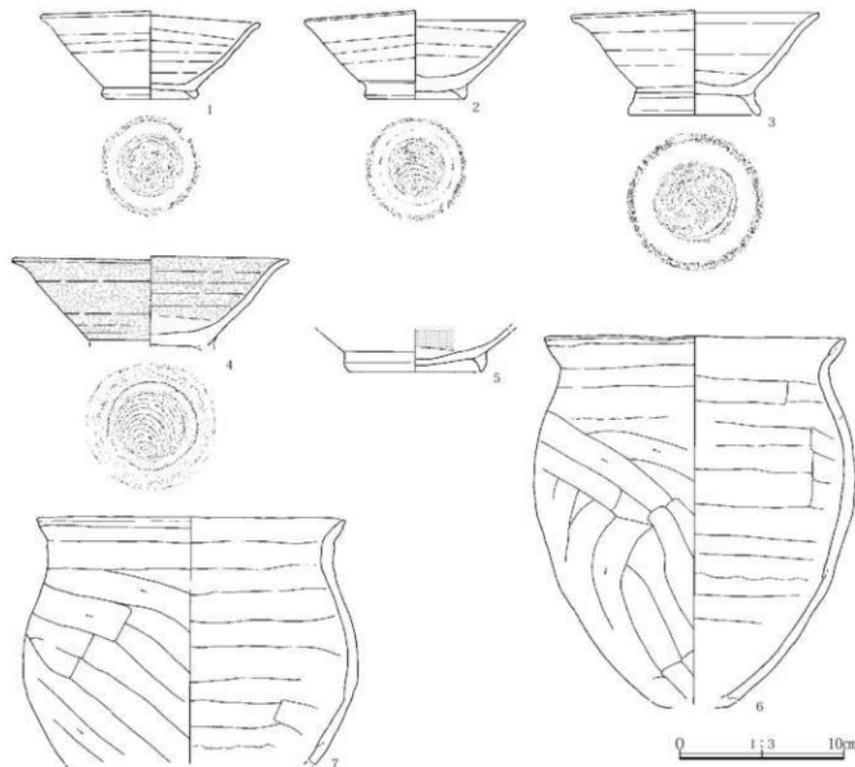
掘り方



3区6号竪穴建物カマド

- 1 黄褐色土 焼土粒と軽石粒を微量含む。しまりあまりなし。
- 2 褐色土 焼土粒と焼土ブロック・炭化物・軽石粒を少量含む。しまりあまりなし。
- 3 黄褐色土 褐色土がわずかに混じる。しまりややあり。

0 1:30 1m



第188図 6号竪穴建物カマド平・断面図及び出土遺物

7号竪穴建物 第189図 PL.67

(旧1区7号住居)

位置：1区 904-454周辺

規模：(2.26)m×(1.95)m、深度は10~25cmほどを計る。
北西半部が調査区域外に在り、全容は不明。

面積：3.736+α㎡

形状：不明。調査範囲の大半が攪乱による削平を受ける。

主軸方位：N-125°-E

埋没土：褐色~黒褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。

床面：地山ローム土を踏み固めて床面とする。

カマド：南東壁にカマドの一部が検出されるもの、攪

乱により大半を失う。

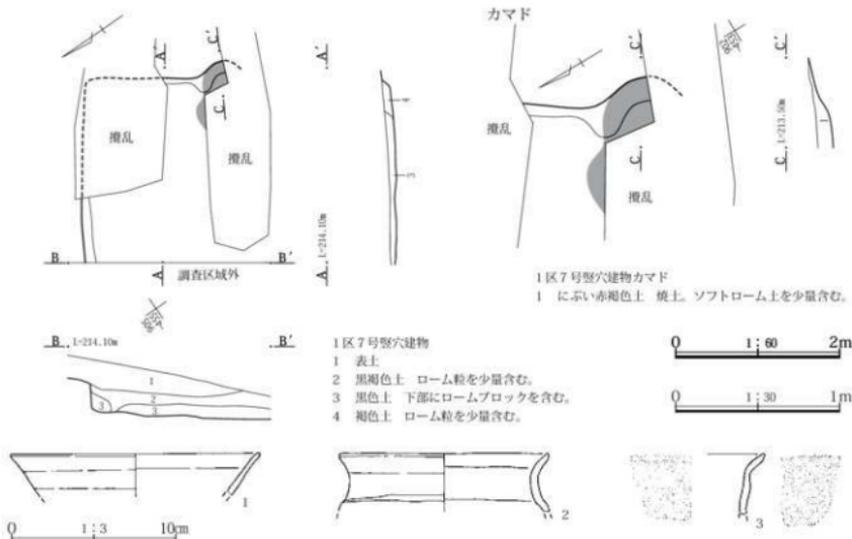
柱穴・貯蔵穴・壁周溝：いずれも残存範囲内では検出されていない。

掘り方：全体に5~8cmほど掘り下げる。

重複：なし。

遺物：本建物からは土師器、須恵器などが出土している。図示した土器には、土師器甕、須恵器椀がある。図示した土器は埋没土からの出土である。

所見：調査区1区の北西端に在り、周囲の竪穴建物とは間隔が開く。本建物の時期については、軸方位と出土した土器から9世紀後半に比定できる。



第189図 7号竪穴建物平・断面図及び出土遺物

8号竪穴建物 第190~192図 PL.68・145・146

(旧1区8号住居)

位置：1区 899-441周辺

規模：4.24m×2.91m、深度は22~59cmほどを計る。

面積：13.352+α㎡

形状：やや歪な隅丸長方形

主軸方位：N-111°-E

埋没土：褐色~暗褐色砂質土による自然埋没の様相を呈

する。

床面：掘り方の土坑上面を除き、地山ローム土を踏み固めて床面とする。

カマド：南東壁のほぼ中央部に位置する。燃烧部はほぼ壁のライン上に位置し、浅く窪む。掘り方下面のローム地山が赤く焼土化しており、長期間の使用の痕跡が認められる。煙道部はあまり突出せず、緩やかな勾配で立ち上がる。袖部は地山を掘り残して構築される。

柱穴：なし。

貯蔵穴：残存範囲においては検出されていない。北東コーナー部分が未調査のため、この部分に在る可能性はある。

壁周溝：なし。

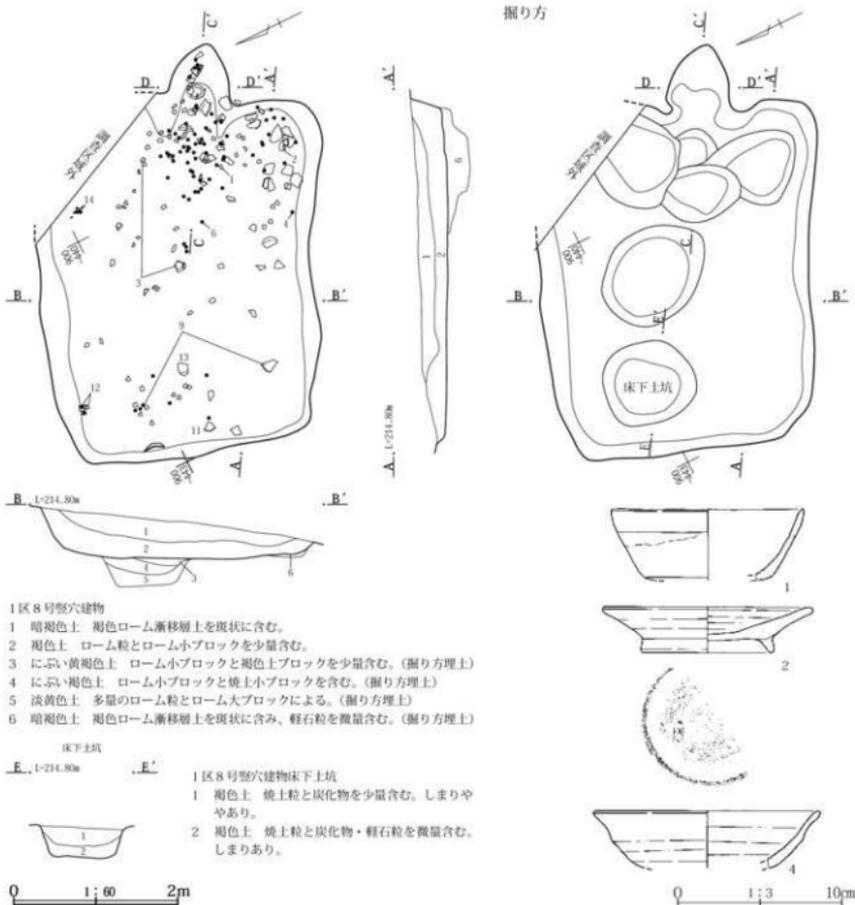
掘り方：床面中央長軸上からカマド前面にかけて、円形の土坑状の掘り方を有する。

重複：なし。

遺物：本建物からは土師器、須恵器、鉄製品(紡錘車)などが出土している。図示した土器には、土師器杯・

甕、須恵器皿・杯・椀・手付瓶・甕がある。このうち、No. 3の須恵器椀、No. 7の台付甕、No. 13の須恵器甕が床面、No. 8・10・11の土師器甕がカマド、No. 4の須恵器椀、No. 9の土師器甕が掘り方からの出土である。

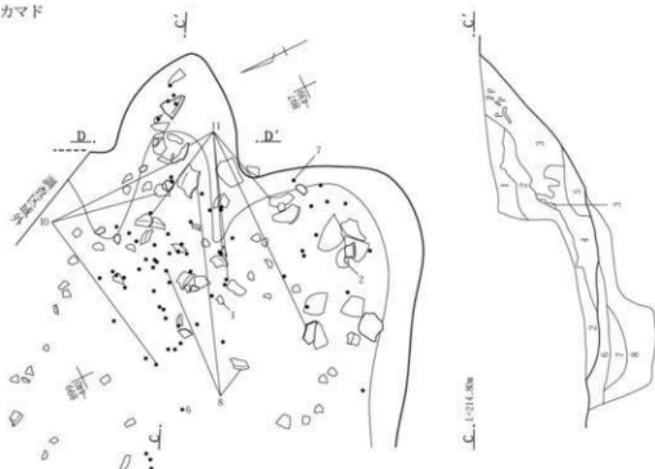
所見：調査区1区の北東端部に在り、周囲の竪穴建物とは間隔が開く。本建物の時期については、床面やカマドから出土した須恵器椀、土師器甕から、9世紀第3四半期に比定できる。



第190図 8号竪穴建物平・断面図及び出土遺物(1)

第2章 検出された遺構と遺物

カマド

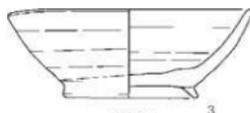
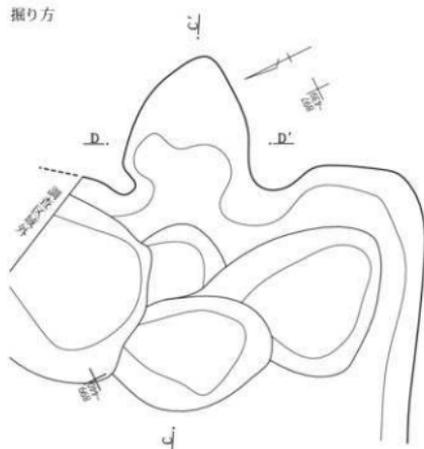


1区8号竪穴建物カマド

- 1 褐色土 ローム粒とローム小ブロックを少量含む。
- 2 棕色土 炭土粒を含む。
- 3 赤棕色土 焼土を主体に棕色土を少量含む。天井部崩落焼土。
- 4 にぶい赤褐色土 焼土小粒～中粒を含む。
- 5 棕色土 焼土を少量を含む。
- 6 棕色土 焼土とローム粒を少量含む。(掘り方埋土)
- 7 褐色土 焼土と炭化物を少量含む。軽石粒を微量含む。しまりあり。(掘り方埋土)
- 8 暗褐色土 ローム漸移層土を斑状に含み、軽石粒を微量含む。しまりややあり。



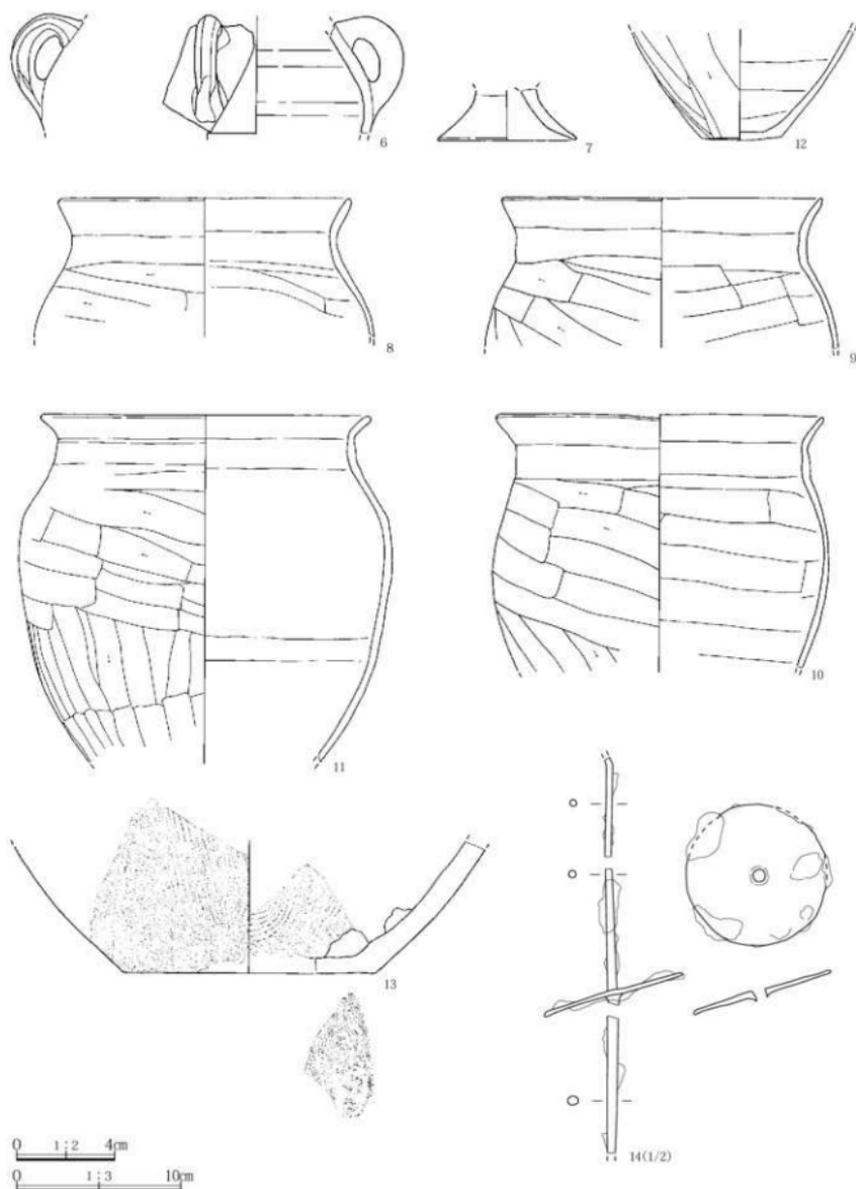
掘り方



0 1:30 1m

0 1:3 10cm

第191図 8号竪穴建物カマド平・断面図及び出土遺物(2)



第192図 8号竪穴建物出土遺物(3)

9号竪穴建物 第193・194図 PL.69・146

(旧1区9号住居)

位置：1区 887-458周辺

規模：3.34m×1.47m、深度は4～16cmほどを計る。

面積：5.788㎡

形状：歪な隅丸長方形

主軸方位：N-88°E

埋没土：褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。

床面：掘り方の土坑上面を除き、地山ローム土を踏み固めて床面とする。

カマド：東壁の南東コーナー寄りに位置する。

上面の削平により、遺存状態は悪い。燃焼部はほぼ壁のライン上に位置し、浅く窪む。煙道部は壁より突出せず、緩やかな勾配で立ち上がる。

柱穴：なし。

貯蔵穴：なし。

壁周溝：なし。

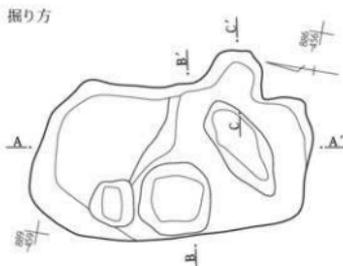
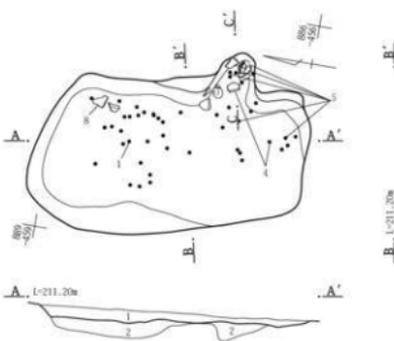
掘り方：深度15～25cmほどの土坑状の掘り込みを3カ所ほど有する。

重複：なし。

遺物：本建物からは土師器、須恵器、灰釉陶器などが出土している。図示した土器には、土師器甕、須恵器椀・甕、灰釉陶器椀がある。このうち、No. 1の須恵器椀が床面、No. 2の灰釉陶器椀、No. 3～6の土師器甕、No. 7の須恵器甕がカマド、No. 8の須恵器甕が掘り方からの出土である。なお、カマドから出土したNo. 2の灰釉陶器椀は大原2号窯式期に比定できる。

所見：調査区1区の北西端部に在り、周囲の竪穴建物とは間隔が開く。

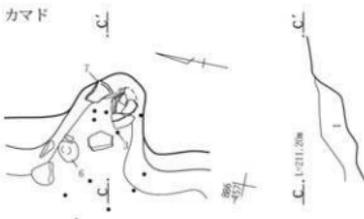
本建物の時期については、カマドから出土した土師器甕や灰釉陶器椀から、9世紀第4四半期～10世紀第1四半期に比定できる。



1区9号竪穴建物

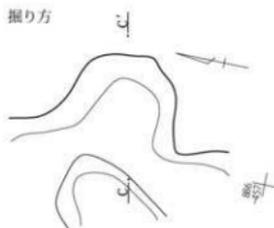
- 1 褐色土 ローム小ブロックを少量含む。
- 2 暗赤褐色土 褐色ローム層移層上を塊状に含み、焼土粒を含む。

0 1:40 2m



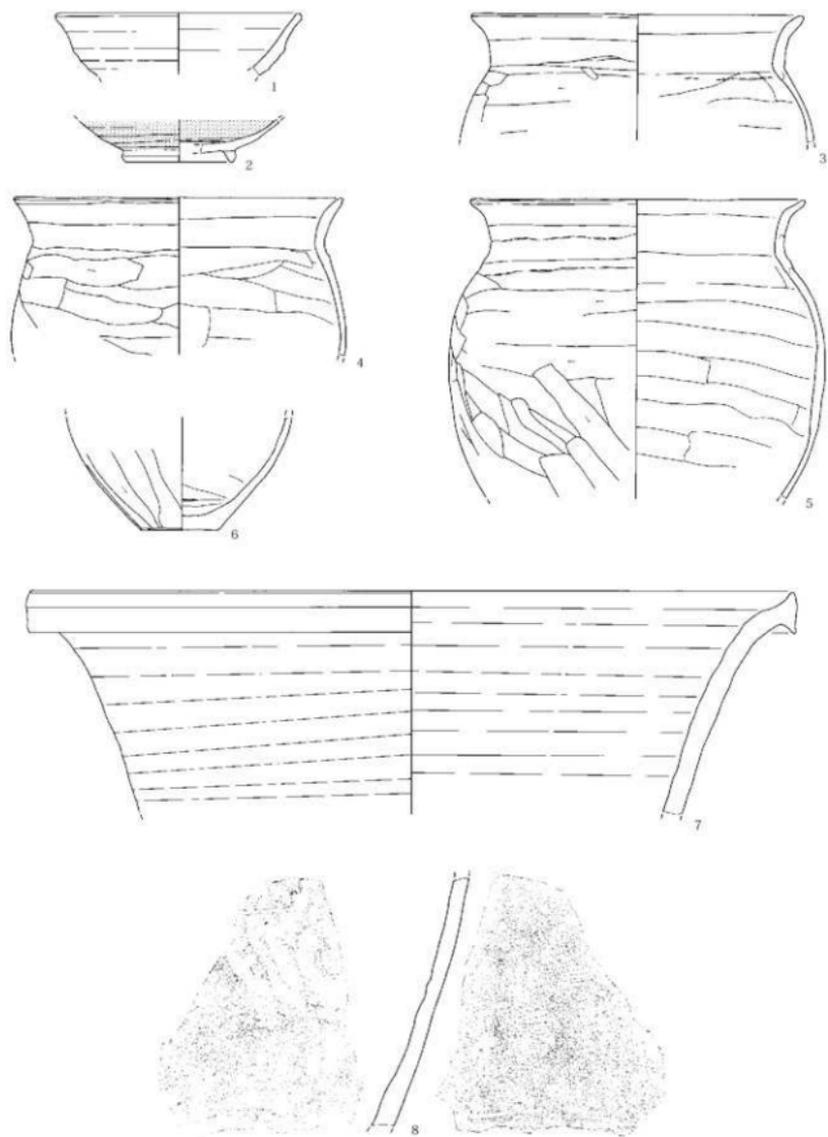
1区9号竪穴建物カマド

- 1 褐色土 ローム小ブロックと焼土粒を少量含む。



0 1:30 1m

第193図 9号竪穴建物平・断面図



0 1:3 10cm

第194図 9号竪穴建物出土遺物

10号竪穴建物 第195・196図 PL.69・146

(旧1区10号住居)

位置：1区 884-446周辺

規模：3.64m×2.62m、深度は9～60cmほどを計る。南西壁を攪乱により失う。

面積：(11.383)m²

形状：やや歪な四角形

主軸方位：N-106°-E

埋没土：褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。

床面：カマド寄りの南東半部は、掘り方土を踏み固めて床面とし、北西半部は地山ローム土を固めて床面とする。

カマド：南東壁のほぼ中央に位置する。燃焼部は壁ラインより内側に位置し、煙道部は壁より突出せず急峻な勾配で立ち上がる。右袖から燃焼部壁にかけて、カマド構築材の礫が残ることから、石組みのカマドであったと推察される。

柱穴：なし。掘り方調査においても柱穴と思われる掘り込みは検出されなかった。

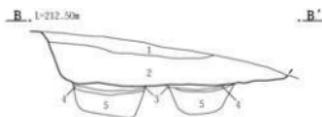
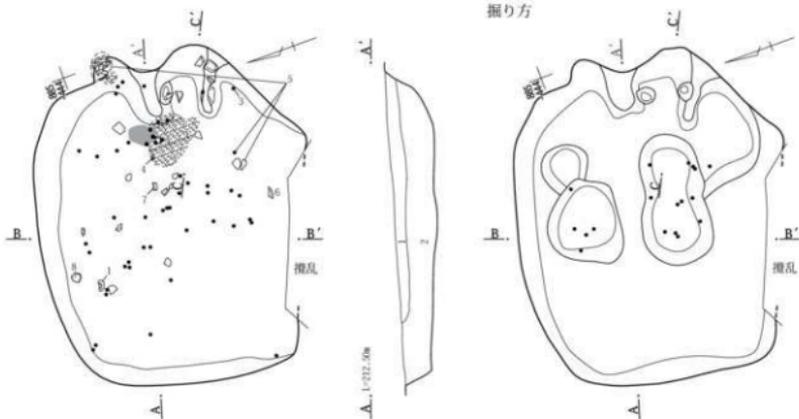
貯蔵穴・壁周溝：なし。

掘り方：建物の中央付近に、深度5～40cmほどの土坑状の掘り込みを2カ所所有する。

重複：なし。

遺物：本建物からは土師器、須恵器、棒状鉄製品などが出土している。図示した土器には、土師器甕、須恵器椀がある。このうち、No.1の須恵器椀が床面、No.2・3の須恵器椀、No.5の土師器甕がカマド、No.6の土師器甕が掘り方からの出土である。出土した土器には須恵器椀に還元焙焼成と酸化焙焼成、土師器甕に器壁の薄いものや厚いものがあり時間差がみられる。

所見：調査区1区の中央付近部に在り、周囲の竪穴建物とは間隔が開く。本建物の時期については、床面やカマドから出土した須恵器椀、土師器甕から9世紀第4四半期～10世紀第1四半期に比定できる。



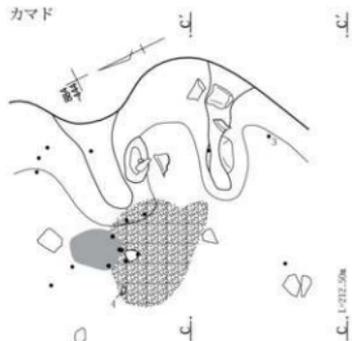
1区10号型穴建物

- 1 褐色土 黄褐色土ローム薄移層土を塊状に含み、ローム粒を微量含む。
- 2 褐色土 黄褐色土ローム薄移層土を塊状に含み、ローム粒とローム小ブロックを含む。
- 3 褐色土 黄褐色土ローム薄移層土を塊状に含み、ローム粒とローム小ブロックを少量含む。(床下土坑)
- 4 明褐色土 ローム小～中ブロックを多量に含む。(床下土坑)
- 5 明褐色土 ローム小～中ブロックを少量含む。(床下土坑)

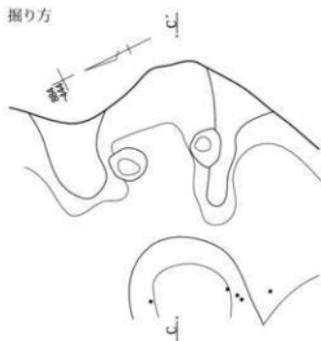
0 1:60 2m

第195図 10号竪穴建物平・断面図

カマド



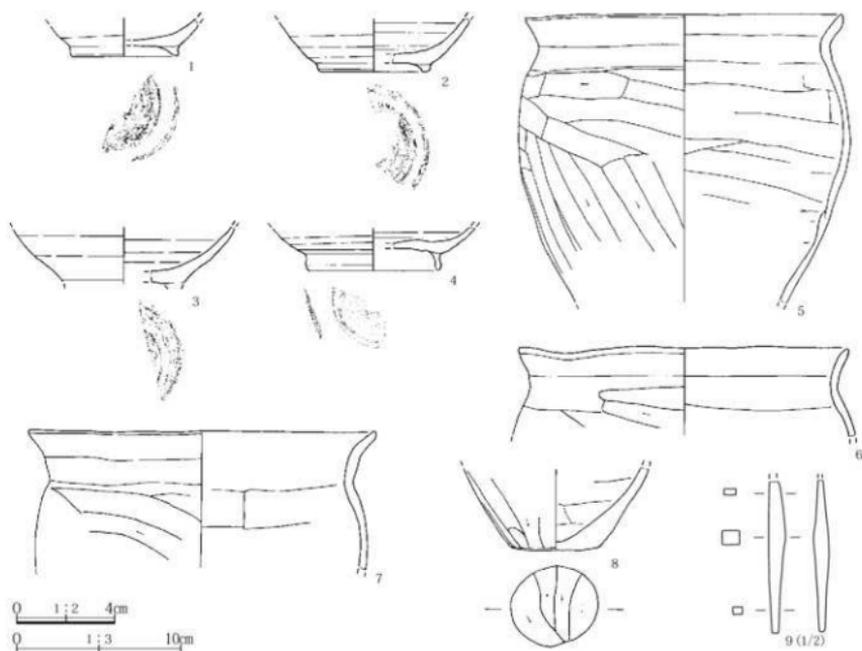
掘り方



1区10号竪穴建物カマド

- 1 褐色土 ローム漸移層上を斑状に含み、軽石粒を微量含む。しまりややあり。
- 2 褐色土 軽石粒とロームブロックを微量含む。しまりややあり。
- 3 暗褐色土 軽石粒とローム粒を微量含む。しまりややあり。
- 4 褐色土 軽石粒と焼土粒・炭化物を微量含み、ロームブロックを多量に含む。しまりややあり。
- 5 褐色土 軽石粒とロームブロックを微量含む。しまりややあり。

0 1:30 1m



第196図 10号竪穴建物カマド平・断面図及び出土遺物

11号竪穴建物 第197図 PL.69・146

(旧1区11号住居)

位置：1区 878-445周辺

規模：3.59m×(2.02)m、深度は16～51cmほどを計る。

南西半部を攪乱と削平により失う。

面積：6.333+α㎡

形状：不明。隅丸長方形か。

主軸方位：N-111°-E

埋没土：埋土の大半を削平で失っており、埋没の様相は明らかではない。

床面：調査された北東半部は、ローム地山を踏み固めて床面とする。

カマド：南東壁において検出されるが、攪乱を受け遺存状態は悪い。カマドの主軸は建物軸よりやや南へ傾いており、建物の南西壁を確認できないものの、恐らく東コーナー部に設けられたカマドと推察される。燃焼部中央に

は支脚石が、側面には構築材の礫が据えられた状態に残る。

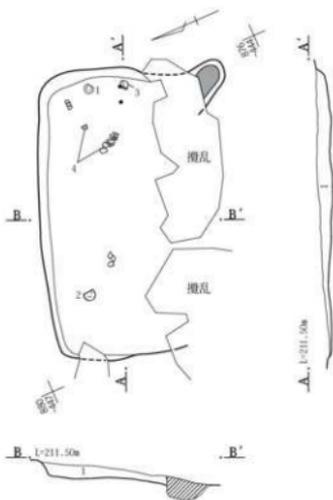
柱穴・貯蔵穴・壁周溝：不明。いずれも残存部においては検出されていない。

掘り方：なし。

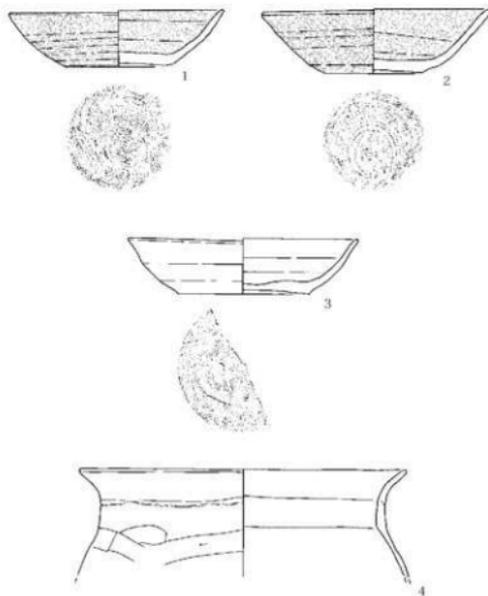
重複：なし。

遺物：本建物からは土師器、須恵器などが出土している。図示した土器には、土師器甕、須恵器杯がある。このうち、No. 2・3の須恵器杯、No. 4の土師器甕が床面からの出土である。

所見：調査区1区の中央部に在り、周囲の竪穴建物とはやや間隔が開く。建物の規模としては、短辺が2mほどの小型の建物である。本建物の時期については、床面から出土した須恵器杯、土師器甕から9世紀第3四半期に比定できる。



1区11号竪穴建物
1 ぶい黄褐色土 ロームブロックを少量含む。



0 1:60 2m

0 1:3 10cm

第197図 11号竪穴建物平・断面図及び出土遺物

12号竪穴建物 第198・199図 PL.70・146

(旧1区12号住居)

位置：1区 823-436周辺

規模：2.46m×1.93m、深度は17~23cmほどを計る。

面積：(4.771) m²形状：やや歪な隅丸長方形。短辺が2m弱の小型建物。
北西コーナー部を攪乱にて失う。

主軸方位：N-123°-E

埋没土：褐色~にぶい黄褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。

床面：一部の掘り方土坑上面を除き、ローム地山土を固めて床面とする。

カマド：南東壁の南コーナー部に位置する。遺存状態は悪いが、掘り方には軸石や壁芯材の石と中央部に支脚石が据えられたまま残る。いずれの礫も被熱のため焼礫化する。燃焼部は壁のやや外側に位置し、煙道部は突出せず、急な勾配で立ち上がる。

柱穴：なし。

貯蔵穴：カマド脇の建物東コーナー部に検出されるが、深度が15cmほどしかない。

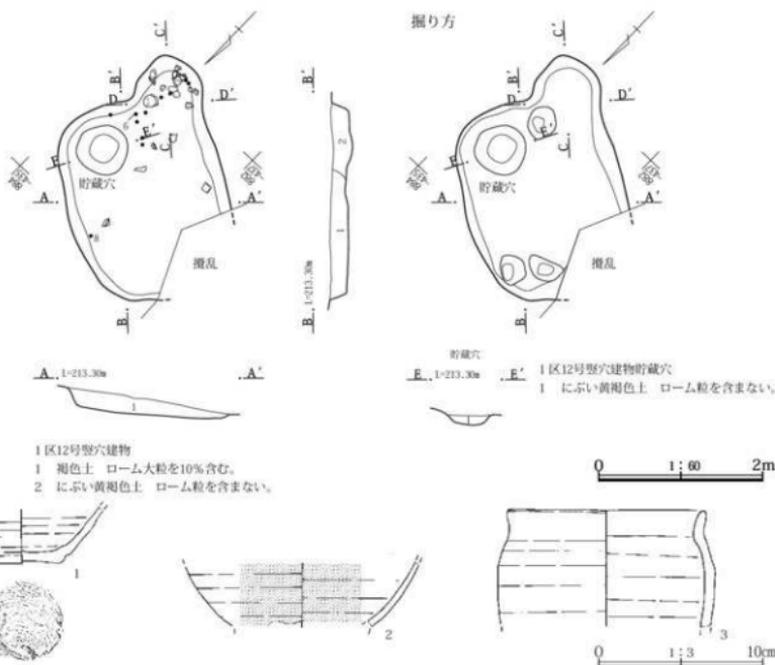
壁周溝：なし。

掘り方：カマド前面と建物北コーナー寄りに土坑状の掘り込みを有する。

重複：なし。

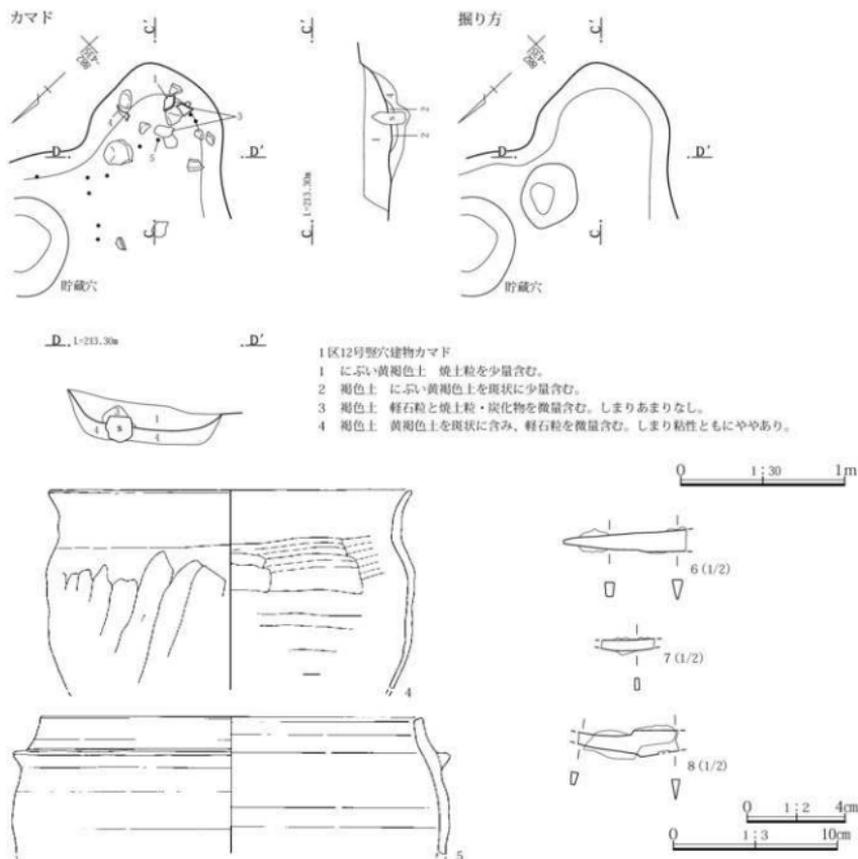
遺物：本建物からは土師器、須恵器、灰釉陶器、鉄製品(刀子)などが出土している。図示した土器には、土師器甕、須恵器椀・羽釜、灰釉陶器椀がある。No. 3の土師器小型甕はロクロ成形によるものである。このうち、No. 1の須恵器椀、No. 3の土師器小型甕、No. 4の土師器甕、No. 5の須恵器羽釜がカマドからの出土である。

所見：調査区1区の東端に在り、周囲の竪穴建物とはやや間隔が開く。本建物の時期については、カマドから出土した土師器甕や須恵器羽釜から、10世紀第2四半期に比定できる。



第198図 12号竪穴建物平・断面図及び出土土物(1)

第2章 検出された遺構と遺物



1区12号竪穴建物カマド

1 にぶい黄褐色土 焼土粒を少量含む。

2 褐色土 にぶい黄褐色土を斑状に少量含む。

3 褐色土 軽石粒と焼土粒・炭化物を微量含む。しまりあまりなし。

4 褐色土 黄褐色土を斑状に含み、軽石粒を微量含む。しまり粘性ともにややあり。

第199図 12号竪穴建物カマド平・断面図及び出土遺物(2)

13号竪穴建物 第200・201図 PL.71・147

(旧1区13号住居)

位置：1区 877-435周辺

規模：3.85m×2.53m、深度は9～26cmほどを計る。

建物南西部を削平により失う。

面積：12.551+α㎡

形状：不明。歪な隅丸方形か

主軸方位：N-101°-E

埋没土：主に暗褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。

床面：振り方土上の上面を踏み固めて床面とする。中央付近には焼土の散乱がみられる。

カマド：南東壁に設けられるが、建物の南西部が削平により失われているため、位置関係は不明。南西半の上面を失い、遺存状態は悪い。燃焼部は壁のやや外側に位置し、煙道部は突出せず、やや急峻な勾配で立ち上がる。

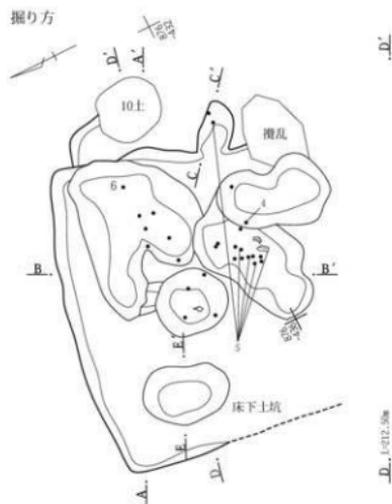
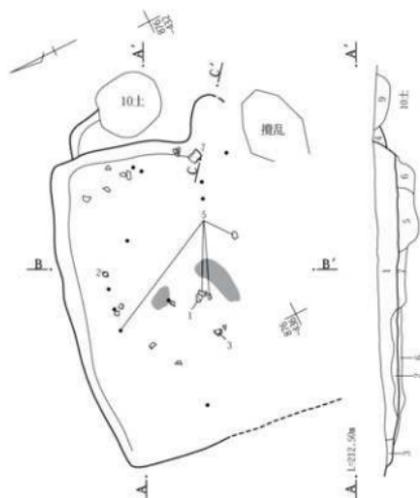
柱穴・貯蔵穴・壁周溝：不明。いずれも残存部では検出されていない。

掘り方：カマド前面を中心に、深度15～25cmを計る土坑状の掘り込みが複数検出される。

重複：北東部の壁直近にて10号土坑と重複し、検出時の埋土の状況より、本建物の方が古いものと判断される。

遺物：本建物からは土師器、須恵器などが出土している。図示した土器には、土師器甕、須恵器杯・椀・羽釜がある。このうち、No. 5の土師器甕とNo. 7の須恵器羽釜がカマドから、No. 4・6の土師器甕が掘り方からの出土である。なお、No. 5の土師器甕の一部は床面や掘り方から出土したものと接合している。

所見：調査区1区の東端に在り、周囲の竪穴建物とはやや間隔が開く。本建物の時期については、カマドから出土した土師器甕や須恵器羽釜から、9世紀第4四半期～10世紀第1四半期に比定できる。



カマド
C, 1-212.50m C'



1区13号竪穴建物カマド

- 1 明赤褐色土 焼土粒を多量に含む。
- 2 ローム中に焼土粒を少量含む。

1区13号竪穴建物

- 1 暗褐色土 ローム粒を含まない。
- 2 暗褐色土 ローム粒を多量に含む。
- 3 明黄褐色土 ローム小ブロックを多量に含む。
- 4 暗褐色土 (カマド埋土)
- 5 褐色土 焼土粒を微量含む。(掘り方埋土)
- 6 明黄褐色土 大径のハードローム粒を少量含む。(掘り方埋土)
- 7 6層上に少量の焼土粒を含む。(掘り方埋土)
- 8 5層上に少量の焼土粒を含む。(掘り方埋土)
- 9 に近い黄褐色土 焼土粒と炭化物を少量含む。(10号土坑埋土)

床下土坑
E, 1-212.50m E'

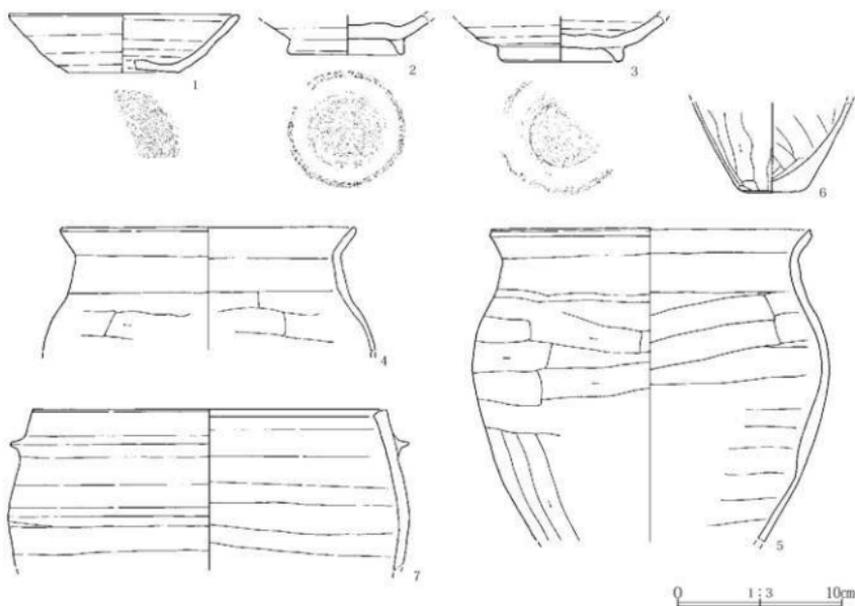


1区13号竪穴建物床下土坑

- 1 褐色土 焼土粒を微量含む。

0 1:60 2m

第200図 13号竪穴建物平・断面図



第201図 13号竪穴建物出土遺物

14号竪穴建物 第202～204図 PL.72・73・147

(旧1区14号住居)

位置：1区 848-443周辺

規模：4.68m×3.62m、深度は16～51cmほどを計る。

面積：16.915㎡

形状：隅丸長方形

主軸方位：N-109°-E

埋没土：暗褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。

床面：掘り方理土の上面を踏み固め、床面とする。

カマド：南東壁の中央やや南コーナー寄りに位置する。遺存状態は悪く、右側部の袖と壁芯材の礫が残り、掘り方には両袖部と中央に袖石と支脚石の設置坑が穿たれ、床面上にもカマド構築材と思われる礫の散乱が見られる。燃焼部は壁ラインよりやや外側に位置し、煙道部は突出せず、急峻な勾配で立ち上がる。掘り方理土内にも焼土が見られることから、使用用途で改修が行われたものと推察される。

柱穴：なし。

貯蔵穴：カマド脇の建物南コーナー部に検出され、径85cm、深度35cmほどを計る。

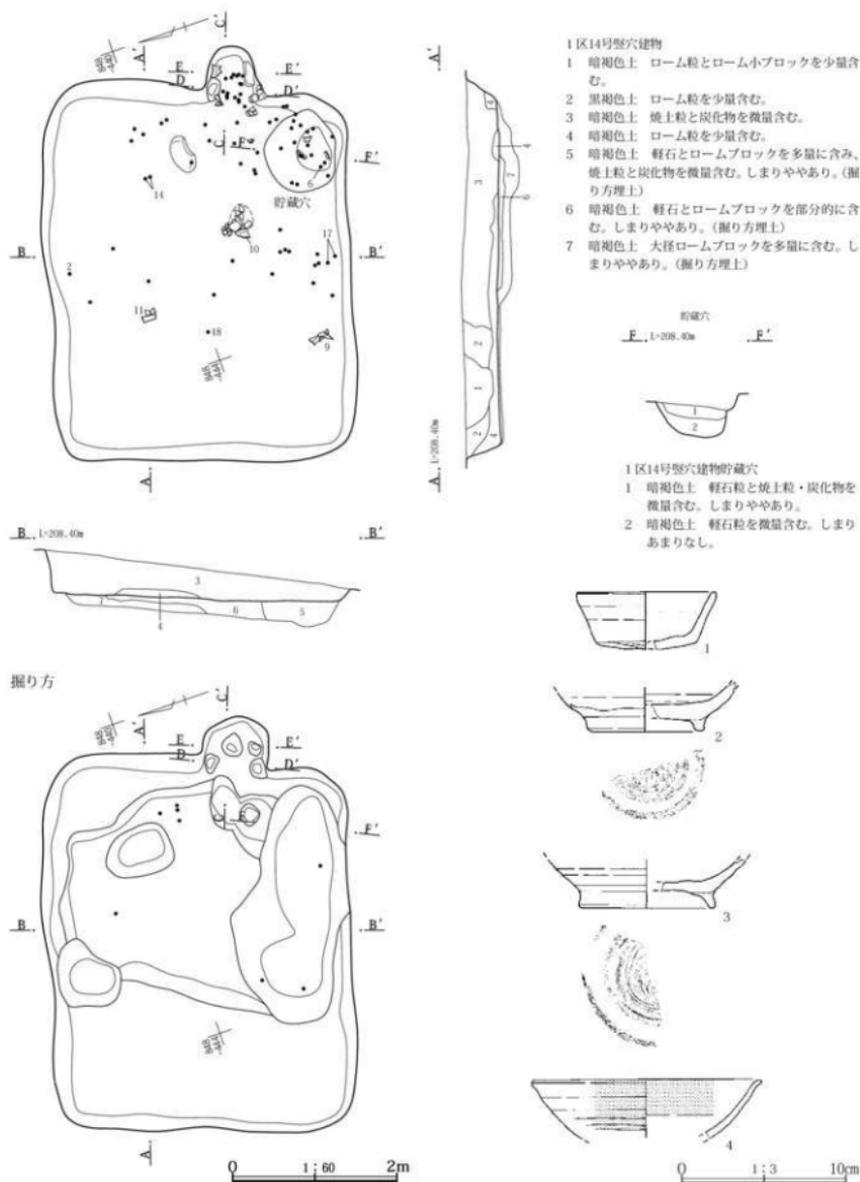
壁周溝：なし。

掘り方：建物南東半部に深度25～30cmの掘り方を有する。

重複：なし。

遺物：本建物からは土師器、須恵器、灰軸陶器、鉄製品(鏃)などが出土している。図示した土器には、土師器杯・甕、須恵器杯・椀、羽釜・甕、灰軸陶器椀がある。このうち、No.17の須恵器甕が床面、No.5の灰軸陶器椀、No.12・15の須恵器羽釜がカマド、No.4の灰軸陶器皿、No.6の灰軸陶器椀が貯蔵穴からの出土である。なお、掘り方や理土から出土したNo.1の須恵器杯、No.9の土師器壺、No.10の土師器甕、No.16の須恵器甕は7世紀後半の年代観が与えられることから本竪穴建物構築時に周囲から混入したと判断できる。

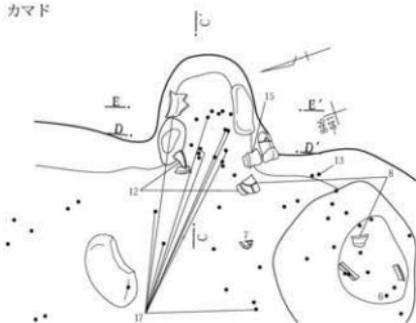
所見：調査区1区の中央部に在り、周囲の竪穴建物とはやや間隔が開く。本建物の時期については、カマドから出土した須恵器羽釜などから10世紀前半に比定できる。



第202図 14号竪穴建物平・断面図及び出土遺物(1)

第2章 検出された遺構と遺物

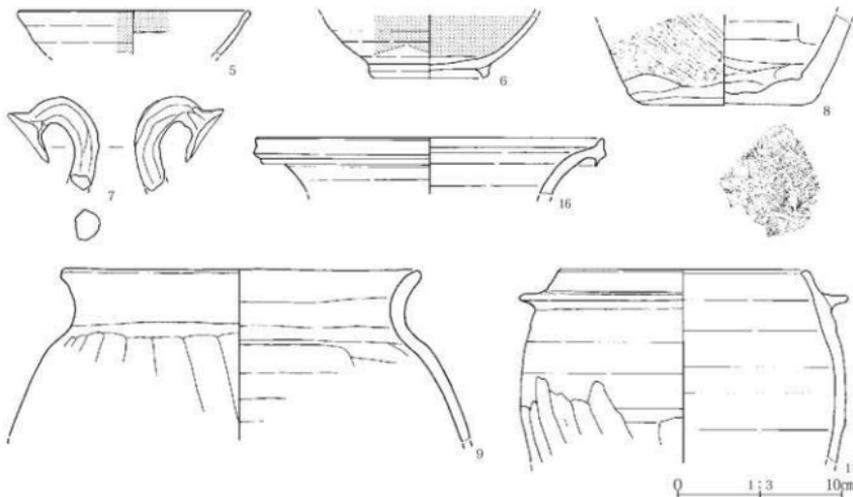
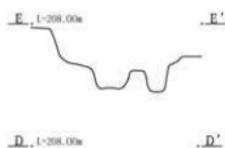
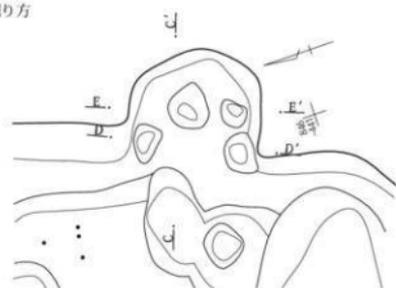
カマド



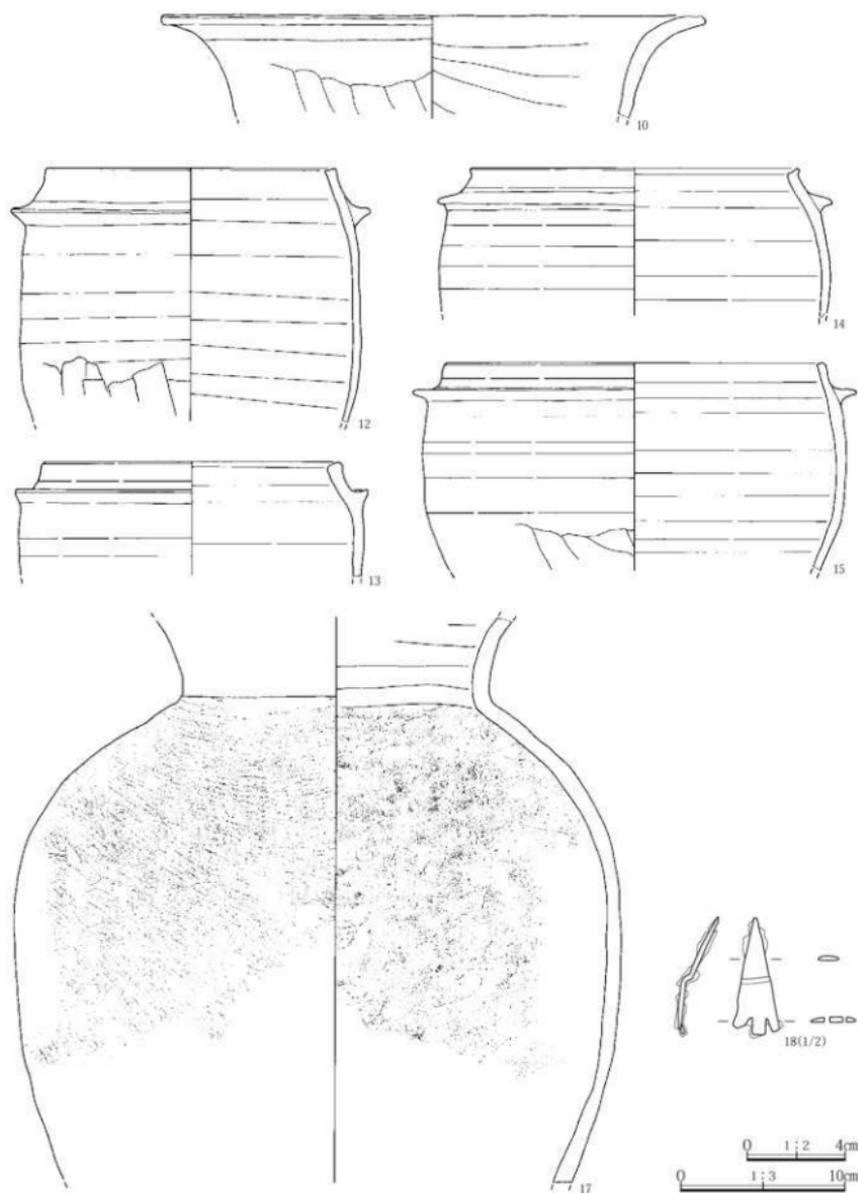
1区14号竪穴建物カマド

- 1 褐色土 ローム粒と焼土粒を微量含む。しまりややあり。
- 2 褐色土 ロームブロックを多量に含み、焼土粒を少量含む。しまりややあり。
- 3 褐色土 焼土粒と焼土ブロックを多量に含む。しまりややあり。

掘り方



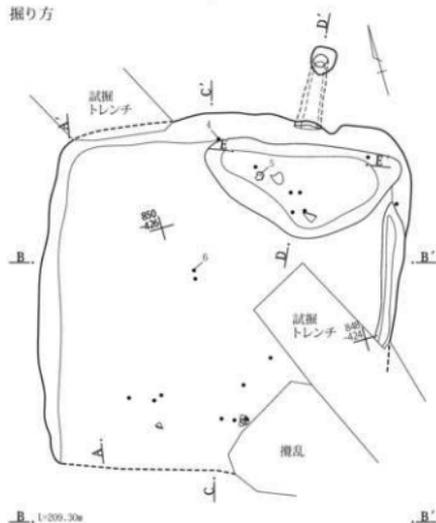
第203図 14号竪穴建物カマド平・断面図及び出土遺物(2)



第204図 14号塚穴建物出土遺物(3)



掘り方

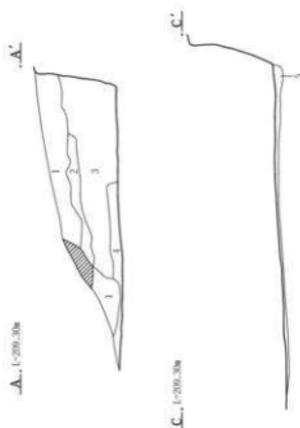


B. 1:200.30m



0 1:60 2m

第205図 15号竪穴建物平・断面図



2区15号竪穴建物

- 1 灰黄褐色土 浅間A軽石を30%程含む。近世上。
- 2 暗褐色土 ローム粒を少量含む。
- 3 暗褐色土 ソフトローム小を少量含む。
- 4 暗褐色土 ローム粒と黒色土小ブロックを微量含む。
- 5 暗褐色土 ローム粒とローム小ブロックを少量含む、硬くしる。貼り床土。

15号竪穴建物 第205～208図 PL.74・75・148

(旧2区15号住居)

位置：2区 849～425周辺

規模：4.29m×(4.28)m、深度は99cmほどを計る。

面積：(18.336)m²

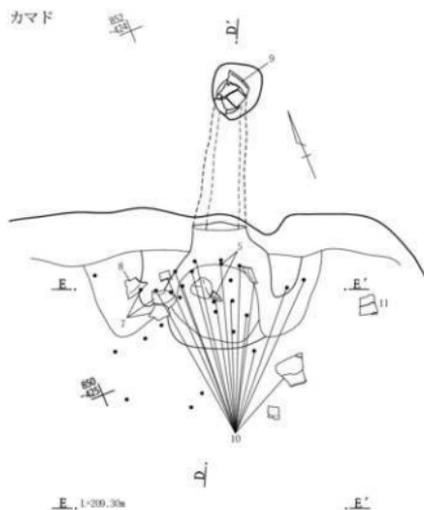
形状：隅丸方形か

軸方位：N-20°-E

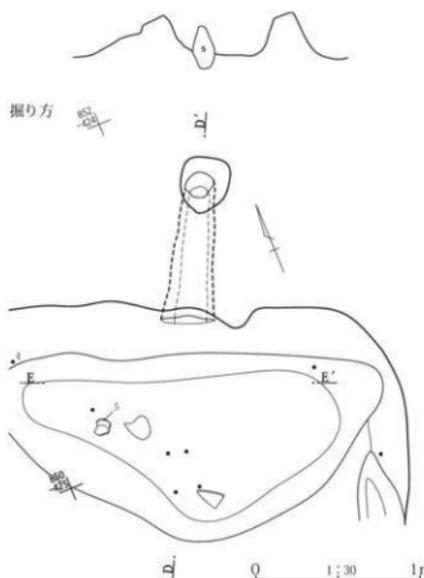
埋没土：暗褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。北東壁側は残りが良く壁高1m程を計り、上層にAs-Aを含む近世土の堆積が確認される。逆に南西壁側は傾斜による流失や削平により壁を失う。

床面：カマド前面の掘り方土坑上面を除き、ローム地土を踏み固めて床面とする。

カマド：北東壁の中央やや東コーナー寄りに設けられる。北東壁上面の削平が少なく、煙道部の遺存状態が極めて良好であった。燃焼部は壁から30cmほど内側に位置し、中央やや左に支脚石が据えられたまま残る。袖部・燃焼部の壁・天井部は失われる。燃焼部端から緩やかな勾配



- 2区15号竪穴建物カマド
- 1 暗褐色土 ローム粒と焼土粒を少量含む。
 - 2 暗褐色土 ローム粒と焼土粒・炭化物・灰を含む。
 - 3 灰黄褐色土 焼土ブロックを多量に含み、炭化物と灰を少量含む。
 - 4 灰黄褐色土 灰白色粘土ブロックと焼土粒を少量含む。
 - 5 暗赤褐色土 焼土粒を少量含む。(掘り方埋土)



第206図 15号竪穴建物カマド平・断面図

で立ち上がり、煙道部は使用面から60cmほどの壁側面に径20～30cmほどの孔を穿ち、80cmほどの水平なトンネルを経て、垂直に立ち上がる。この煙道内の随所には、被熱による地山ローム土の焼土化が認められる。

柱穴：なし。

貯蔵穴：なし。

壁周溝：南東壁際のみを検出される。南西壁は失われているために、有無も不明。

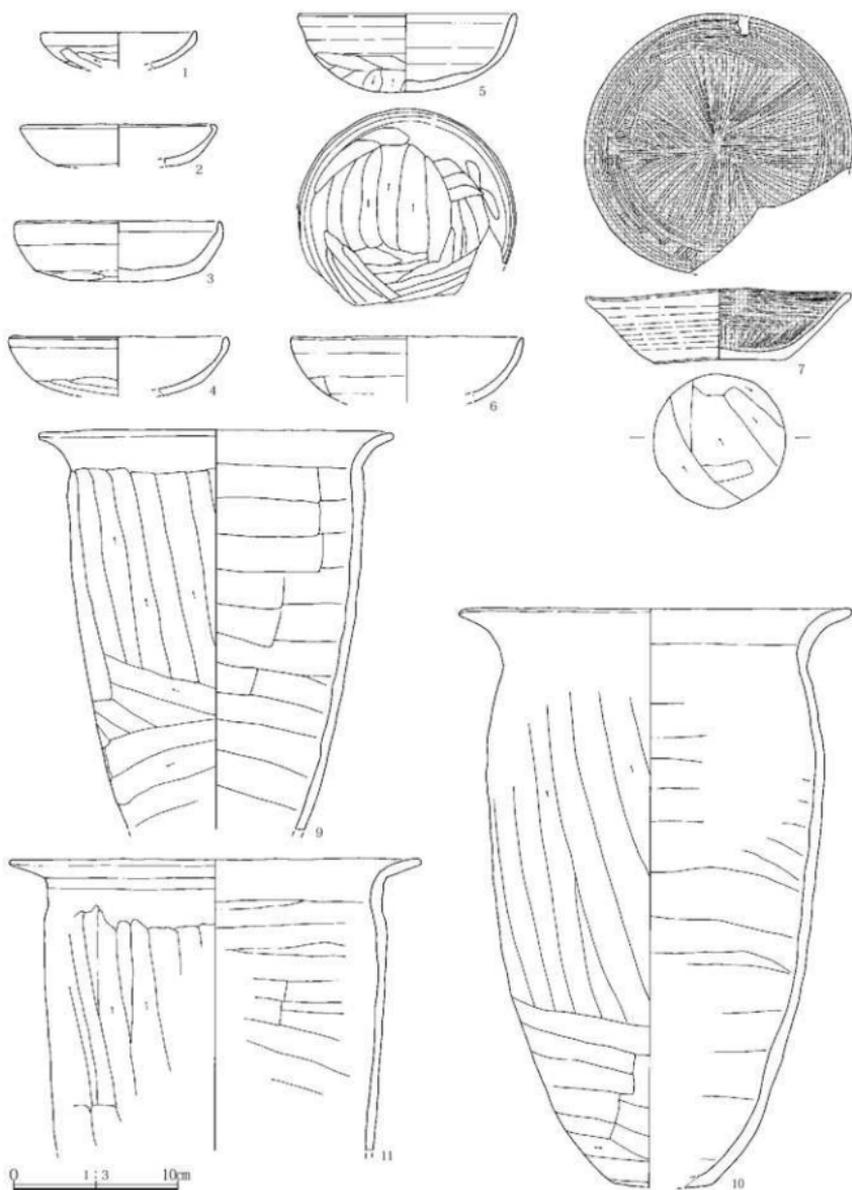
掘り方：カマド前面にのみ、楕円形の土坑状掘り込みを有する。

重複：煙道部にて14号土坑と重複し、検出の様相より本建物の方が古いものと判定される。

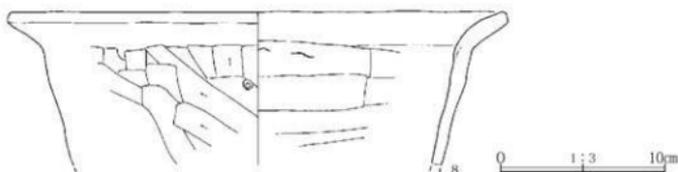
遺物：本建物からは土師器、須恵器、黒色土器などが出土している。図示した土器には、土師器杯・甕、須恵器杯、黒色土器椀がある。このうち、No. 5の須恵器杯、No. 8～10の土師器甕がカマドからの出土である。No. 9の土師器甕はカマド煙道部で煙突に使用されていたものである。なお、No. 7の黒色土器椀もカマドからの出土であるが、この土器は10世紀前半の年代観が与えられることから本竪穴建物埋没後に混入したものである。

所見：調査区2区の中央部に在り、周囲に同時期の建物は見られない。本建物の時期については、カマドから出土した土師器甕から7世紀後半に比定できる。

第2章 検出された遺構と遺物



第207図 15号竪穴建物出土遺物(1)



第208図 15号竪穴建物出土遺物(2)

16号竪穴建物 第209図 PL.76・148

(旧2区16号住居)

位置：2区 847-422周辺

規模：2.90m×(1.42)m、深度は15～20cmほどを区。

面積：3.236㎡

形状：不明。

主軸方位：N-83°-W

埋没土：暗褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。

床面：地山ローム土を踏み固めて床面とする。

カマド：不明。残存範囲内においては検出されていない。

柱穴：なし。

貯蔵穴・壁周溝：不明。残存範囲内においては検出されていない。

掘り方：なし。

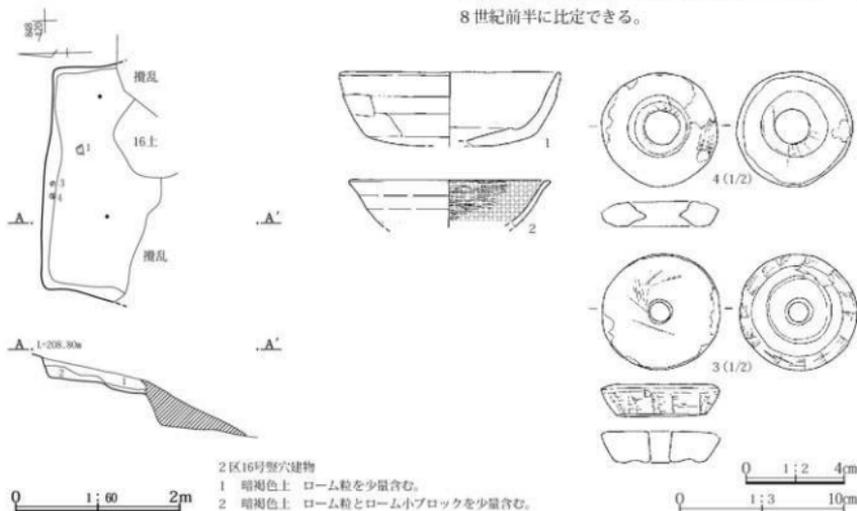
重複：16号土坑と重複し、検出時の埋土の様相より本建物の方が古いものと判定される。

遺物：本建物からは土師器、須恵器、黒色土器、石製品(紡錘車紡輪ほか)などが出土している。

図示できた土器は、土師器杯、黒色土器椀の2点だけである。このうち、No. 1の土師器杯は床面からの出土である。なお、No. 1の土師器杯は8世紀前半、No. 2の黒色土器椀は9世紀後半の年代観が与えられる。

また、No. 3石製紡錘車紡輪とNo. 4不明石製品の2点は、隣接して出土する。No. 4は形状が紡輪と近似するものの孔径が大きく、その用途は不明である。

所見：調査区2区中央部の北東寄りに在り、本建物の時期については、床面から出土した土師器杯の年代観から8世紀前半に比定できる。



2区16号竪穴建物

1 暗褐色土 ローム粒を少量含む。

2 暗褐色土 ローム粒とローム小ブロックを少量含む。

第209図 16号竪穴建物平・断面図及び出土遺物

17号竪穴建物 第210・211図 PL.77・148

(旧2区17号住居)

位置：2区 839-412周辺

規模：3.55m×3.43m、深度は3～10cmほどを計る。

面積：(12.048)m²

形状：やや歪な間丸方形

主軸方位：N-91°-E

埋没土：にぶい黄褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。後世の上面の削平により、埋土は多い所で10cm程しか残っていない。

床面：掘り方の土坑上面を除き、ローム地山土を踏み固めて床面とする。

カマド：東壁の中央やや南東コーナー寄りに位置する。上面の削平により、使用面を失う。燃焼部は壁ラインのやや外側に位置し、煙道部はあまり突出せず、緩やかな勾配で立ち上がる。

柱穴：なし。

貯蔵穴：掘り方調査時に、カマド脇の南東コーナー部で土坑が検出されるが、床面上の開口が確認できない。

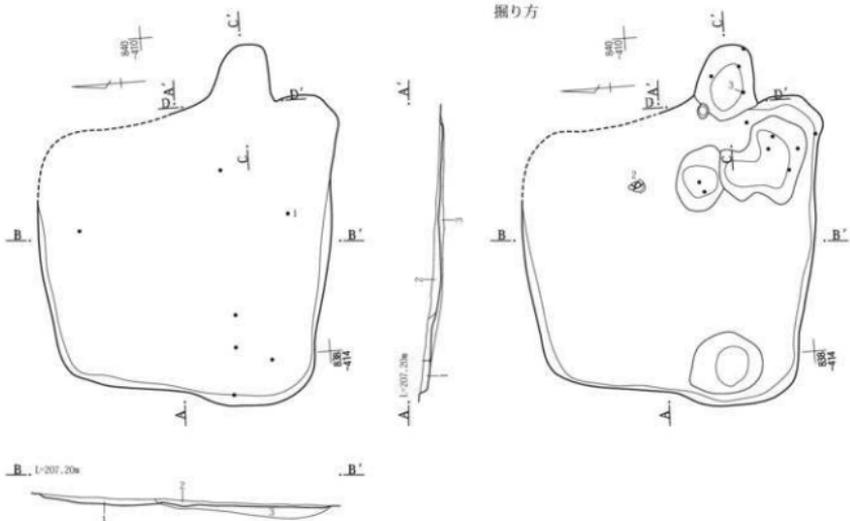
壁周溝：残存部では検出されていない。

掘り方：カマド前面から南東コーナー部にかけてと南西コーナー付近に、深度20cm前後の土坑状の掘り込みを有する。

重複：直接の重複は無いが、南側に29号竪穴建物が近接する。

遺物：本建物からは土師器、須恵器、黒色土器などが出土している。図示した土器には、土師器甕、須恵器杯・椀、黒色土器鉢がある。このうち、No. 3の黒色土器小型甕がカマド、No. 2の須恵器杯とNo. 4の土師器小型甕が掘り方からの出土である。

所見：調査区2区の南東端に在り、周囲には3軒の建物が隣接する。本建物の時期については、掘り方から出土した須恵器杯、土師器甕から9世紀後半に比定できる。

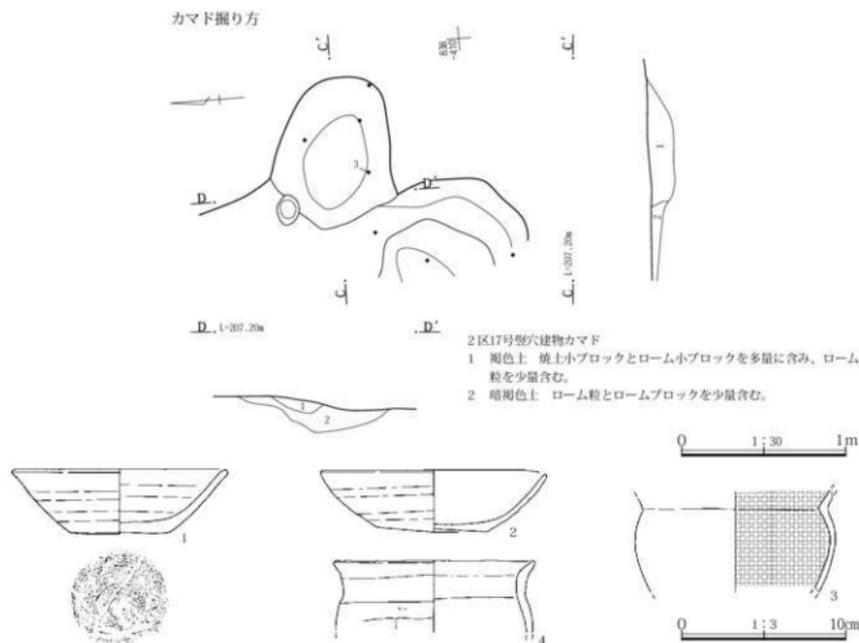


2区17号竪穴建物

- 1 にぶい黄褐色土 ローム粒とローム大ブロックを少量含む。
- 2 にぶい黄褐色土 ローム粒とローム小ブロックを含む。
- 3 褐色土 ロームとにぶい黄褐色土との混土。(掘り方埋土)

0 1:60 2m

第210図 17号竪穴建物平・断面図



第211図 17号竪穴建物カマド平・断面図及び出土遺物

18号竪穴建物=19号土坑に変更

(旧2区18号住居)

調査時に平面形状が隅丸方形を呈していたため、竪穴建物(住居)として調査されたが、整理時に再検証したところ、生活の痕跡が認められず、側壁がオーバーハンクしていることから、廃屋を利用した地山ローム土・ローム下の粘質土の採掘土坑と判断される。

19号竪穴建物 第212・213図 PL.78・89

(旧2区19号住居)

位置：2区 842-424周辺

規模：3.90m×2.53mほどを計る。

面積：(10.987)㎡

形状：歪な隅丸長方形

主軸方位：N-109°-E

埋没土：暗褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。

床面：全面に掘り方土を踏み固めて床面とする。

カマド：南東壁の南コーナー寄りに位置する。上面の削平を受け、遺存状態は悪い。燃焼部はほぼ壁ライン上に位置し、煙道部はあまり突出せず、緩やかな勾配で立ち上がる。掘り方底面の地山に焼土化が観られることから、長期間に及ぶ使用が想定される。

柱穴：南コーナー付近で検出されたP1が柱穴となる可能性があるが、他に対応する柱穴は検出し得なかった。

貯蔵穴：建物南西コーナー部に土坑が検出され、調査時は重複する27号土坑として記録されたが、内部よりカマド構築材の礫が複数出土することから、建物廃絶時に開口していた貯蔵穴と判断した。

壁周溝：なし。

掘り方：建物中央部を中心に、土坑状の掘り込みとピット状の掘り込みを有する。

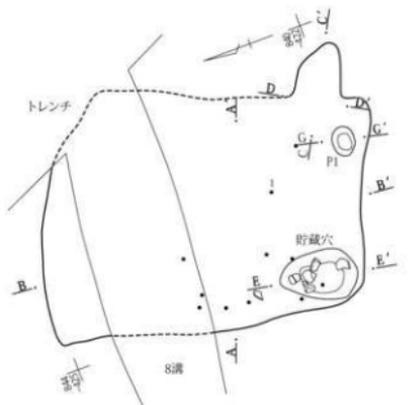
重複：建物北半部で8号溝と重複し、埋土の様相より本建物の方が古いものと判断された。8号溝の最終埋没土には、多量の浅間B軽石が含まれる。

第2章 検出された遺構と遺物

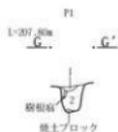
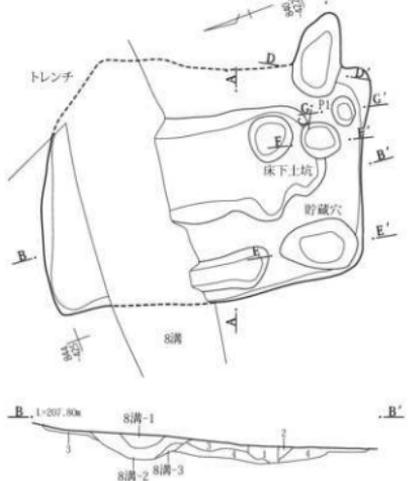
遺物：本建物からは土師器、須恵器、埴輪片などが出土している。図示できた土器類は、土師器甕、埴輪片がある。このうち、No. 1の土師器甕が掘り方からの出土である。

所見：調査区2区の中央部に在り、周囲には竪穴建物が

密集する。本建物の時期については、掘り方から出土した土師器甕も小片のため判然としないが、8世紀代と想定できる。



掘り方



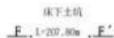
2区19号竪穴建物P1

- 1 暗褐色土 焼土粒と炭化物・軽石粒を微量含む。しまりあまりなし。
- 2 褐色土 黄褐色土と軽石粒を多量に含む。しまり粘性ともにややあり。



2区19号竪穴建物貯蔵穴

- 1 褐色土 暗褐色土と焼土粒・炭化物・軽石粒を少量含む。しまりややあり。
- 2 褐色土 暗褐色土と焼土粒・炭化物を微量含む。しまりややあり。
- 3 褐色土 炭化物と軽石粒・ロームブロックを微量含む。しまりややあり。



2区19号竪穴建物床下土坑

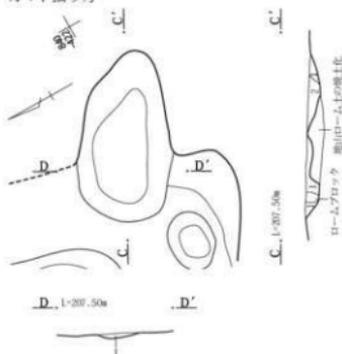
- 1 褐色土 焼土粒と炭化物・軽石粒を微量含む。しまり粘性ともにややあり。
- 2 褐色土 軽石粒を多量に含む。しまり、粘性ともにややあり。
- 3 褐色土 軽石粒を微量含む。しまり、粘性ともにややあり。

2区19号竪穴建物

- 1 暗褐色土 褐色土を多量に含み、軽石粒とロームブロックを少量含む。しまりややあり。
 - 2 暗褐色土 軽石を多量に含む。しまりあり。
 - 3 暗褐色土 褐色土を多量に含み、軽石粒と焼土粒を微量含む。しまりややあり。
 - 4 暗褐色土 褐色土とロームブロックを多量に含み、軽石粒と焼土粒を微量含む。しまりあり。
- 8溝-1 暗褐色土 黒褐色土と浅間B軽石を多量に含む。しまりあり。
- 8溝-2 暗褐色土 浅間B軽石を多量に含む。しまりあり。
- 8溝-3 暗褐色土 黒褐色土を多量に含み、ロームブロックを少量含む。しまりあり。粘性ややあり。

第212図 19号竪穴建物平・断面図

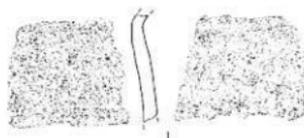
カマド掘り方



2区19号竪穴建物カマド

- 1 暗褐色土 軽石粒と焼土粒を微量含む。しまりややあり。
2 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。しまりあり。

0 1:30 1m



0 1:3 10cm

第213図 19号竪穴建物カマド平・断面図及び出土遺物

20号竪穴建物 第214～216図 PL.79・148・149

(旧2区20号住居)

位置：2区 840～436周辺

規模：(4.40)m×(3.85)m、深度は17～26cmほどを計る。

面積：16.327+α㎡

形状：北西壁が調査区域外にかかり、南西壁を上面の削平により失うため、全容は不明。

主軸方位：N-114°E

埋没土：褐色～暗褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。

床面：検出部全面が掘り方土を踏み固めて床面とする。

カマド：南東壁に設けられるが、建物南西部を失っているため、位置関係は不明。燃烧部は壁ライン上のやや内側に位置し、煙道部はあまり突出せず、緩やかな勾配で立ち上がる。上面の削平を受けるものの、燃烧部壁に据えられた礫の多くが残り、被熱による焼硬化が観られることから、長期間に及ぶ使用が想定される。

柱穴：なし。貯蔵穴：なし。壁周溝：なし。

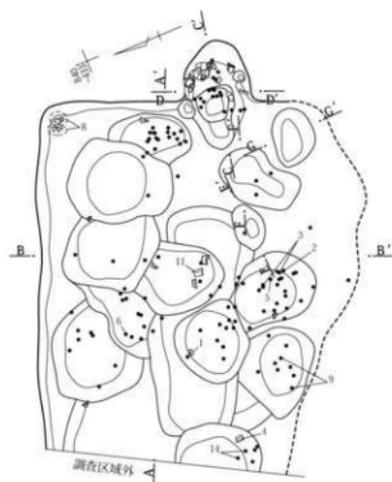
掘り方：調査域のほぼ全面に、大型の円形土坑が掘られ

る。

重複：なし。

遺物：本建物からは土師器、須恵器、黒色土器、灰軸陶器などが出土している。図示した土器には、土師器杯・甕、須恵器皿・椀・甕、黒色土器椀・鉢、灰軸陶器段皿がある。このうち、No. 8の黒色土器椀が床面、No. 12の土師器甕、No. 16の須恵器甕・No. 17の須恵器甕がカマド、No. 1・2の土師器杯、No. 3の須恵器皿、No. 4～6の須恵器椀、No. 9の黒色土器鉢、No. 10・11・13～15の土師器甕が掘り方からの出土である。なお、No. 1・2の土師器杯とNo. 10の土師器甕は7世紀後半から8世紀前半の年代観が与えられ、構築時に周囲から混入したとみられる。また、No. 16の須恵器甕は口縁部下の凸帯に板状の把手を4方に貼付した特異な個体である。

所見：調査区2区の西端部に在り、周囲には竪穴建物が密集する。本建物の時期については、床面、カマド、掘り方から出土した土師器甕や須恵器椀から9世紀第3四半期に比定できる。



E, L=207.60m E'



F, L=207.60m F'



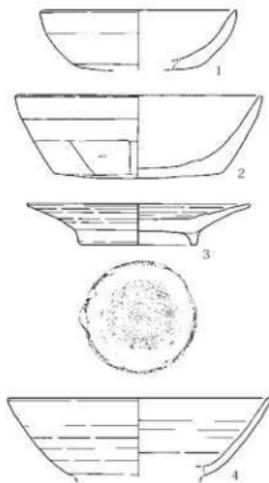
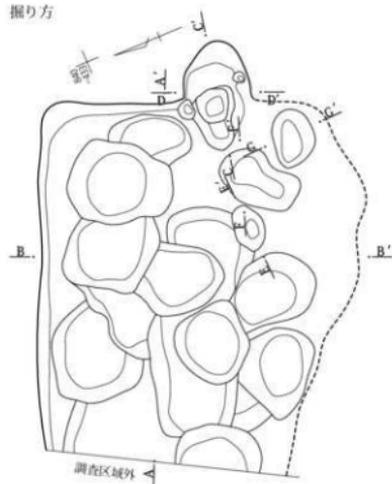
G, L=207.60m G'



2区20号竪穴建物

- 1 攪乱
- 2 褐色土 ローム粒とローム小ブロックを少量含む。
- 3 暗褐色土 ローム粒を微量含む。
- 4 褐色土 ハードロームブロックと黒褐色土ブロック・ロームスコリア・IPを多量に含む。(掘り方理上)
- 5 暗褐色土 ハードロームブロックを多量に含む。(掘り方理上)
- 6 褐色土 焼土粒と焼土小ブロックを多量に含む。(掘り方理上)

掘り方

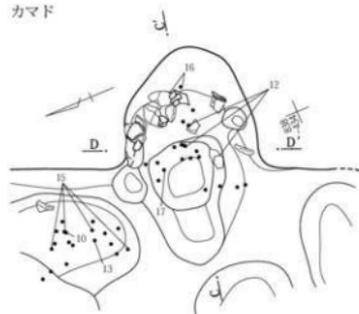


0 1:60 2m

0 1:3 10m

第214図 20号竪穴建物平・断面図及び出土遺物(1)

カマド



C.

C. 1:207.60m

2区20号竪穴建物カマド

1 暗褐色土 ロームブロックと軽石粒・焼土粒を微量含む。しまりあり。

2 暗褐色土 焼土粒と焼土ブロックを多量に含み、炭化物と軽石粒を微量含む。しまりややあり。

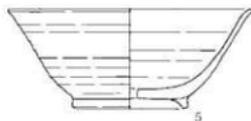
3 暗褐色土 黒褐色土とロームブロック・軽石粒を少量含む。しまりややあり。

D. 1:207.60m

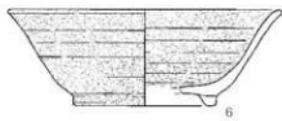
D'



0 1:30 1m



5



6



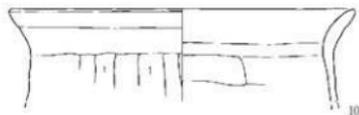
8



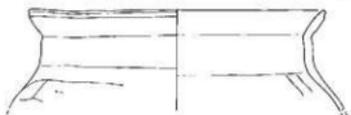
7



9



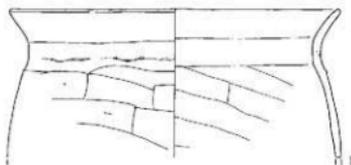
10



12



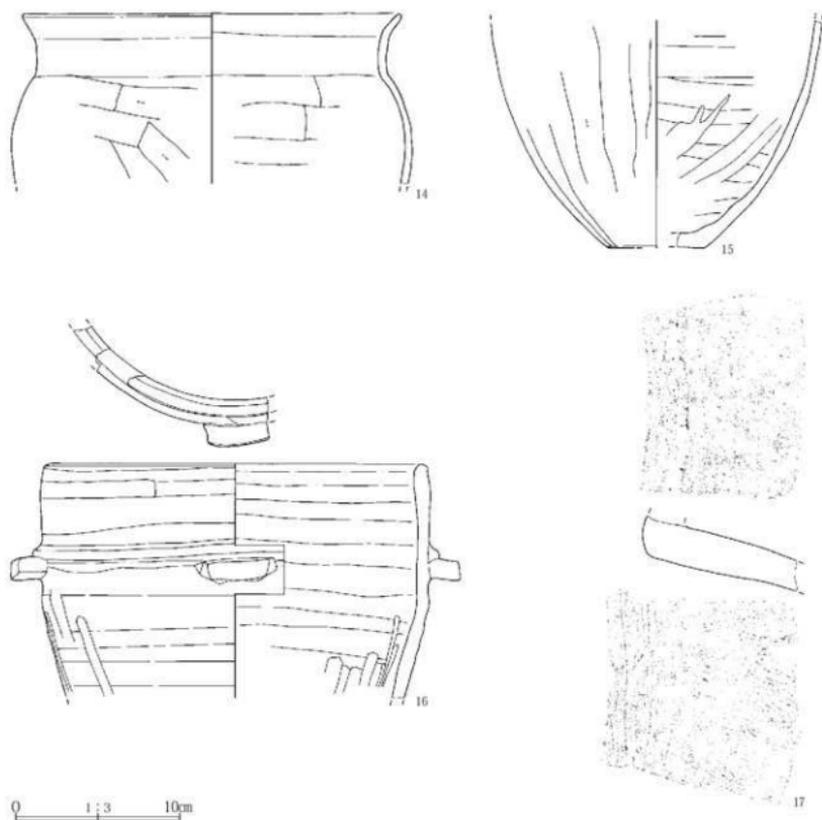
11



13

0 1:3 10m

第215図 20号竪穴建物カマド平・断面図及び出土遺物(2)



第216図 20号竪穴建物出土遺物(3)

21号竪穴建物 第217～219図 PL.80・149・150

(旧2区21号住居)

位置：2区 836-432周辺

規模：4.51m×3.46m、深度は13～25cmほどを計る。

面積：16.611㎡

形状：やや歪な隅丸長方形

主軸方位：N-94°-E

埋没土：暗褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。

床面：掘り方上と重複建物上を除き、ローム地山土を踏み固めて床面とする。

カマド：南東コーナー部に位置する。燃焼部は壁ライン

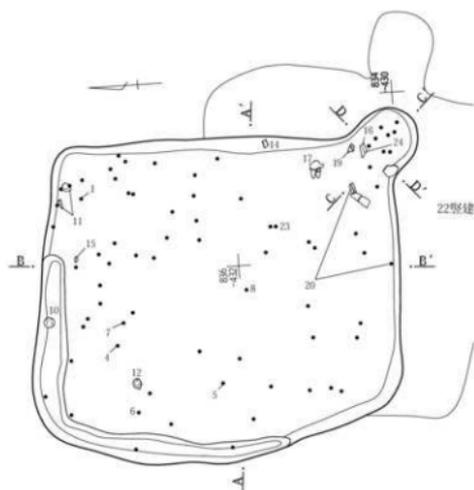
よりやや外側に位置し、煙道部はあまり突出せず、先端は緩やかな勾配で立ち上がる。少量の焼土・炭化物・灰は残るものの、使用感はあまりない。

柱穴：なし。 貯蔵穴：なし。

壁周溝：北壁の西半から西壁の北半壁際に、深度10cmほどの溝が検出される。南壁側は重複遺構の埋土となり判別が難しいが、断面上では他所には確認されていない。

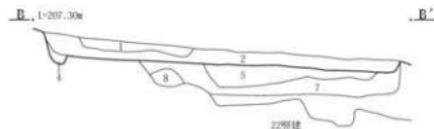
掘り方：中央付近において、土坑状の掘り込みが、南半部は重複遺構の埋土となり検出し得なかった。

重複：南半部にて22号竪穴建物と重複し、カマドの存在と埋土の様相より、本建物の方が新しい物と判断される。

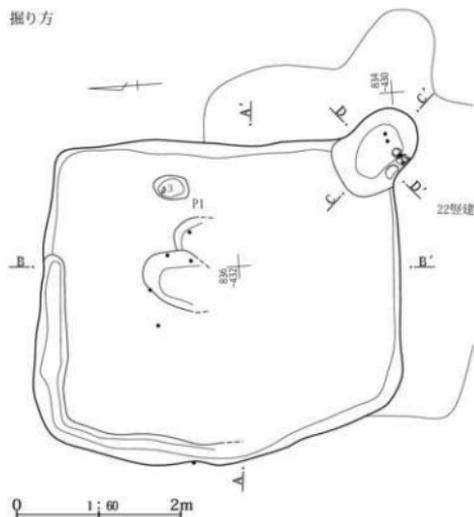


2区21号竪穴建物

- 1 暗褐色土 ローム小ブロックを少量含む。
- 2 暗褐色土 ロームブロックと褐色土ブロックを多量に含む。
- 3 黒褐色土 ローム小ブロックと炭化物粒を少量含む。
- 4 褐色土 ローム粒を多量に含み、ローム小ブロックを少量含む。
- 5 褐色土 ロームブロックと黒褐色土ブロック・灰白色粘土小ブロックを多量に含む。(掘り方埋土)
- 6 暗褐色土 ローム小ブロックと焼土小ブロックを少量含む。(掘り方埋土)
- 7 暗褐色土 ロームブロックとローム小ブロックを少量含む。(掘り方埋土)
- 8 褐色土 ローム小ブロックと焼土小ブロック・焼土粒を少量含む。(掘り方埋土)



掘り方



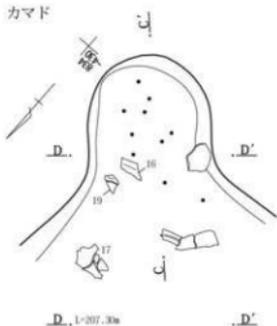
第217図 21号竪穴建物平・断面図

遺物：本建物からは土師器、須恵器、灰釉陶器、鉄製品(釘・鉄滓)などが出土している。図示した土器には、土師器杯・甕、須恵器杯蓋、杯・碗、長頸壺、羽釜、灰釉陶器耳皿がある。このうち、No. 5の土師器杯、No. 17の土師器甕、No. 20の須恵器羽釜が床面、No. 13の須恵器碗、No. 16の土師器甕、No. 18～22の須恵器羽釜がカマドからの出土である。なお、No. 1～6の土師器杯は8世紀代の年代観が与えられ構築時の混入とみられる。No. 9～11の須恵器杯と16の土師器甕は重複関係にある22号竪穴建物からの混入とみられる。

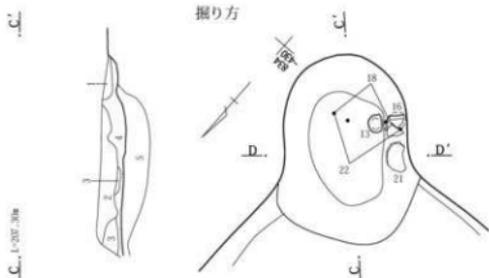
所見：調査区2区の西端部に在り、周囲には竪穴建物が密集する。本建物の時期については、床面から出土したNo. 17の土師器甕やNo. 20の須恵器羽釜、カマドから出土したNo. 21・22の須恵器羽釜から10世紀第1四半期に比定できる。

第2章 検出された遺構と遺物

カマド



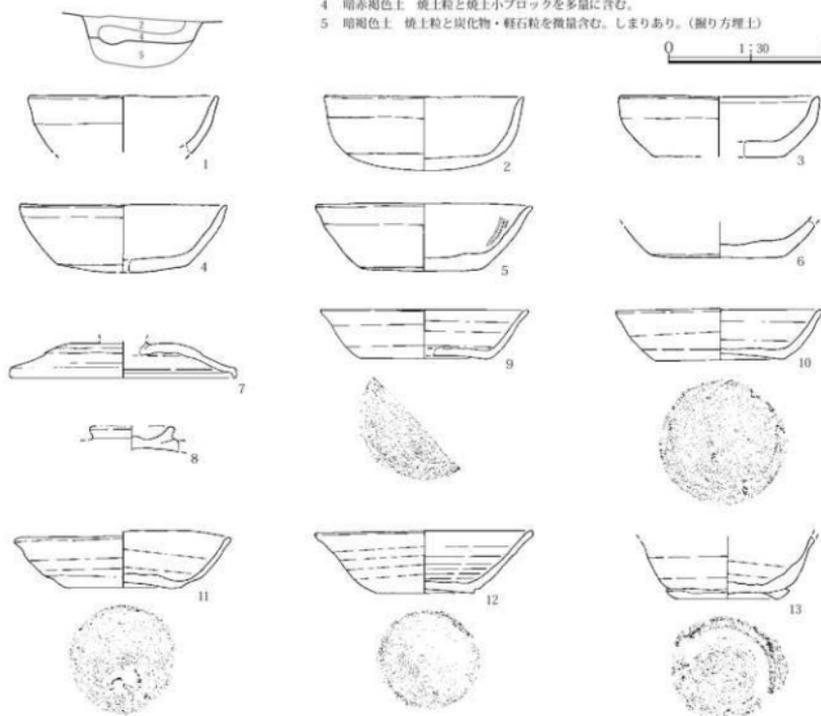
掘り方



2区21号竪穴建物カマド

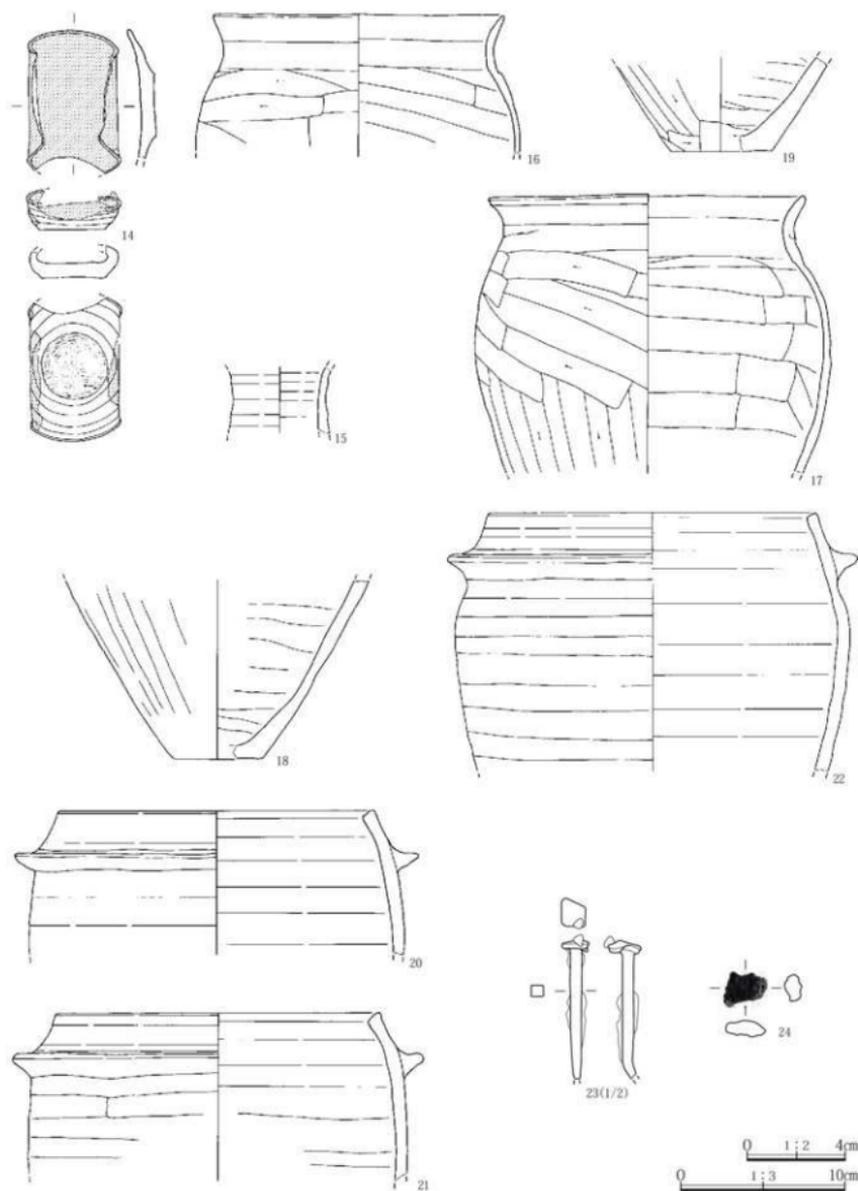
- 1 攪乱
- 2 暗褐色土 褐色土ブロックを多量に含む。
- 3 黄褐色粘質土 ローム土と粘土の混土。一部焼土化する。天井部崩落土。
- 4 暗赤褐色土 焼土粒と焼土小ブロックを多量に含む。
- 5 暗褐色土 焼土粒と炭化物・軽石粒を微量含む。しまりあり。(掘り方埋土)

0 1:30 1m



0 1:3 10cm

第218図 21号竪穴建物カマド平・断面図及び出土遺物(1)



第219図 21号塚穴建物出土遺物(2)

22号竪穴建物 第220～222図 PL.81・150

(旧2区22号住居)

位置：2区 835-432周辺

規模：4.20m×3.62m、深度は48cmほどを計る。

面積：15.386㎡

形状：やや歪な隅丸長方形

主軸方位：N-99°-E

埋没土：暗褐～黒褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。北西半部は重複遺構により、南壁部は削平により上層を失う。

床面：掘り方埋土を踏み固めて床面とするが、北西半部は重複遺構により一部床面を逸する。

カマド：南東壁の中央南コーナー寄りに位置する。燃焼部はほぼ壁のライン上に位置し、煙道はあまり突出せず、緩やかに立ち上がる。右側部は遺存状態が良く、焼土化した側壁や掘えられた抽しが残り、礫は被熱のため赤く焼礫化していることから、長期間に及ぶ使用が想定される。

柱穴：なし。

貯蔵穴：カマド右脇の南コーナー部より、深度25cmほどを測る楕円形の土坑が検出される。

掘り方：床面下全域に土坑状の深い掘り込みが複数穿たれる。

重複：北西部において、21号竪穴建物と重複し、埋土の様相や21号建物のカマドの遺存状況より、本建物の方が古いものと判断される。掘削深度が深く、重複部においても本遺構の掘り方は遺存している。

遺物：本建物からは土師器、須恵器、灰軸陶器、鉄滓などが出土している。

図示した土器には、土師器杯・鉢・甕、須恵器皿・杯・椀・壺、灰軸陶器椀がある。このうち、No.8の灰軸陶器椀、No.10の須恵器壺、No.11・13の土師器甕が床面、No.12の土師器甕がカマド、No.3の須恵器杯が貯蔵穴、No.9の土師器鉢が掘り方からの出土である。なお、No.1の土師器杯とNo.9の土師器鉢は8世紀代の年代観が与えられ構築時の混入とみられる。No.8の灰軸陶器椀は黒笹14号窯式期に比定できるもので伝世品とみられる。

所見：調査区2区の南西部に在り、周囲には竪穴建物が密集する。本建物の時期については、床面やカマドから

出土した土師器甕や貯蔵穴から出土した須恵器杯から9世紀第3四半期に比定できる。

23号竪穴建物 第223図 PL.82・150

(旧2区23号住居)

位置：2区 844-432周辺

規模：4.15m×2.08m、深度は1～19cmほどを計る。

面積：(9.112)㎡

形状：隅丸長方形

主軸方位：N-161°-E

埋没土：黒褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。中央部を重複遺構の削平により失う。

床面：残存部においては、ローム地山土を踏み固めて床面とする。

カマド：南西壁の東コーナー部に位置する。燃焼部はほぼ壁のライン上に位置し、煙道部はあまり突出せず、緩やかな勾配で立ち上がる。先端部には、被熱により焼礫化した構築材礫が残り、長期間に及ぶ使用が想定される。

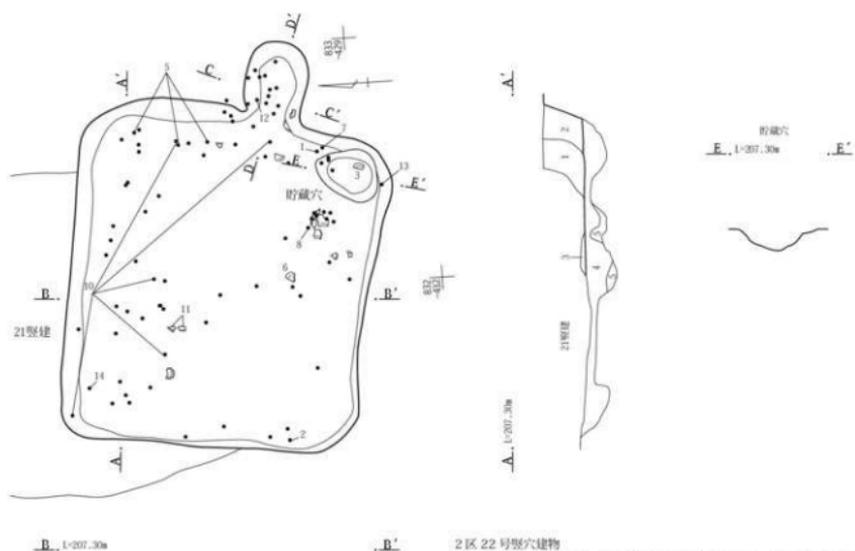
柱穴・貯蔵穴：不明。残存部の東側においては検出されていない。

掘り方：なし。

重複：カマド部において、25号竪穴建物と重複し、カマドの遺存状況より本建物の方が新しいものと判断される。また、中央部において8号溝と重複し、遺構確認時の埋土の様相より、本建物の方が古いものと判断される。8号溝の埋土上層部には、大量の浅間B軽石が含まれ、最終埋没は平安末から中世初頭と推察される。

遺物：本建物からは土師器、須恵器、黒色土器などが出土している。図示した土器には、土師器甕、須恵器皿・椀、黒色土器椀がある。このうち、No.1の須恵器皿、No.2の須恵器椀が床面、No.3の黒色土器椀、No.4の土師器甕がカマドからの出土である。

所見：調査区2区の中央西側に在り、周囲には竪穴建物が密集する。本建物の時期については、床面やカマドから出土した須恵器皿・椀、土師器甕から9世紀第2四半期に比定できる。



B., L=207.30m

B'

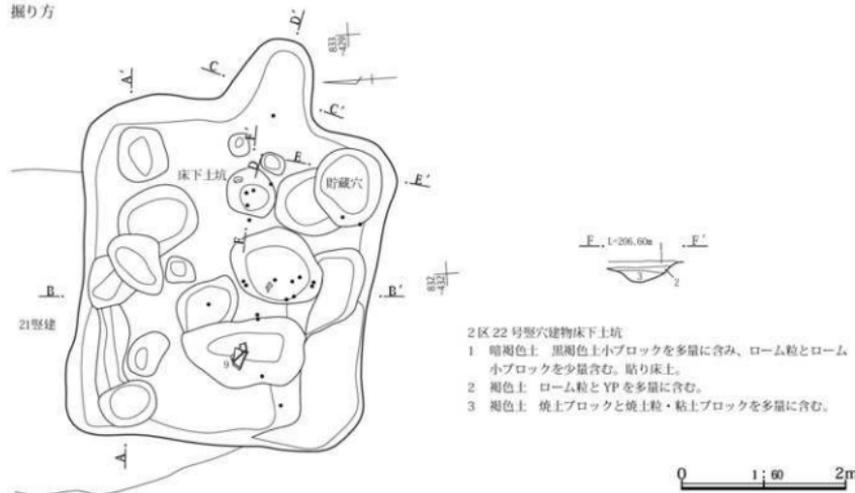


21号建

2区 22号竪穴建物

- 1 暗褐色土 褐色土ローム層移層上を斑状に含み、ローム粒を少量含む。
- 2 褐色土 ローム粒を多量に含み、ローム小ブロックを少量含む。
- 3 褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 4 黒褐色土 赤褐色土を斑状に含み、白色軽石とローム小ブロックを少量含む。(掘り方埋土)
- 5 赤褐色土 ロームブロックと粘土ブロックを多量に含む。(掘り方埋土)

掘り方



B.

21号建

E., L=206.60m



2区 22号竪穴建物床下土坑

- 1 暗褐色土 黒褐色土小ブロックを多量に含み、ローム粒とローム小ブロックを少量含む。掘り床上。
- 2 褐色土 ローム粒とYPを多量に含む。
- 3 褐色土 焼土ブロックと焼土粒・粘土ブロックを多量に含む。

0 1:60 2m

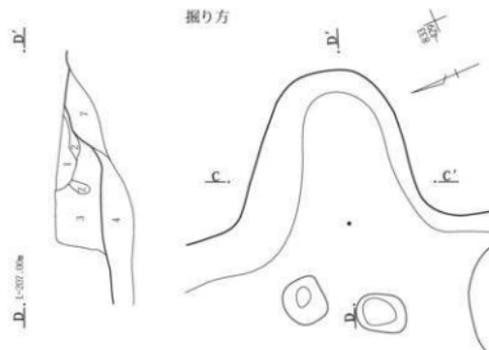
第220図 22号竪穴建物平・断面図

第2章 検出された遺構と遺物

カマド



掘り方



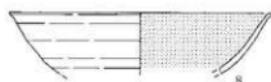
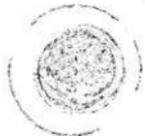
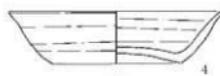
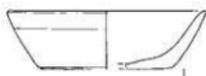
C, 1:207.00m C'



2区 22号竪穴建物カマド

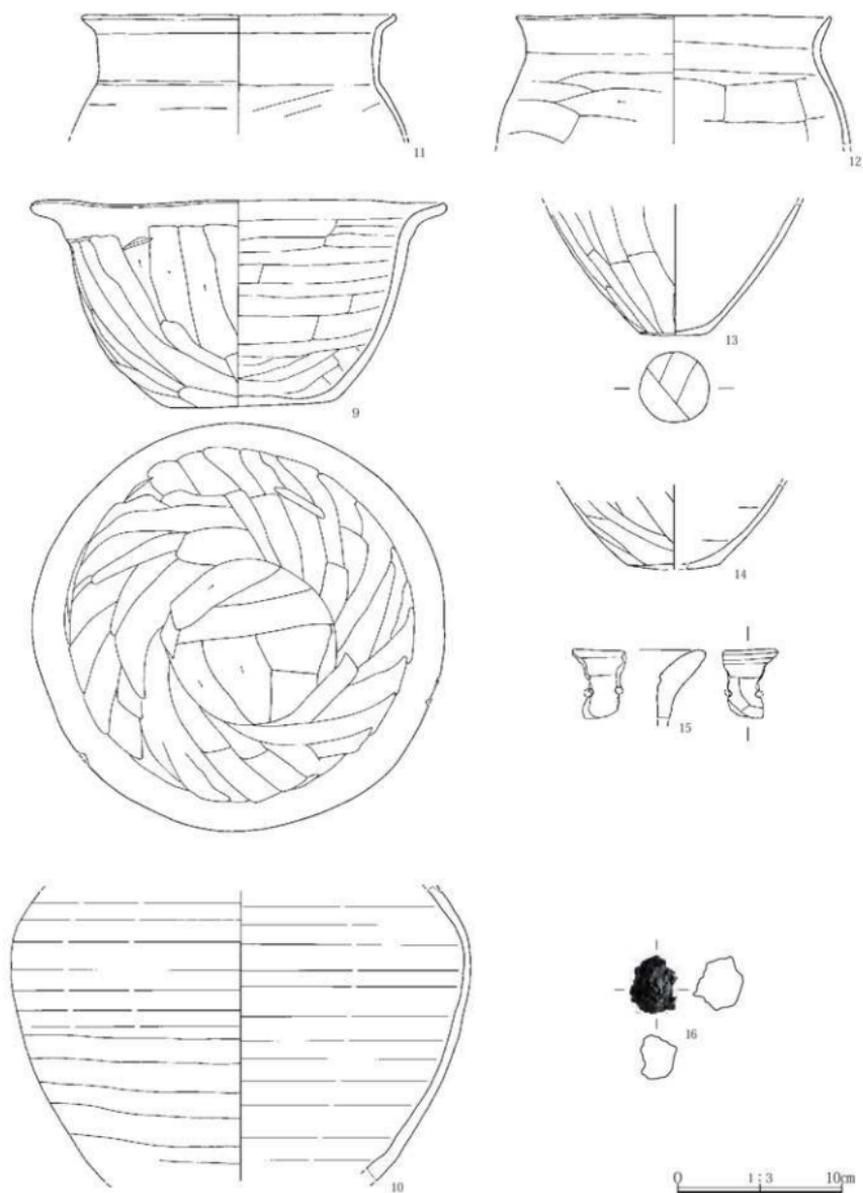
- 1 褐色土 焼土小ブロックを少量含む。
- 2 暗褐色土 焼土小ブロックを少量含む。
- 3 明褐色土 焼土粒を少量含む。
- 4 炭化物・灰層 焼土粒を少量含む。
- 5 浅黄色粘質土 ローム土と粘土の混土。一部焼土化。(右壁)
- 6 暗褐色土 5層上に焼土ブロックと黒褐色土ブロックを多量に含む。壁の修復か。(左壁)
- 7 暗褐～黒褐色土 ローム粒とローム小ブロックを少量含む。(掘り方埋土)

0 1:30 1m

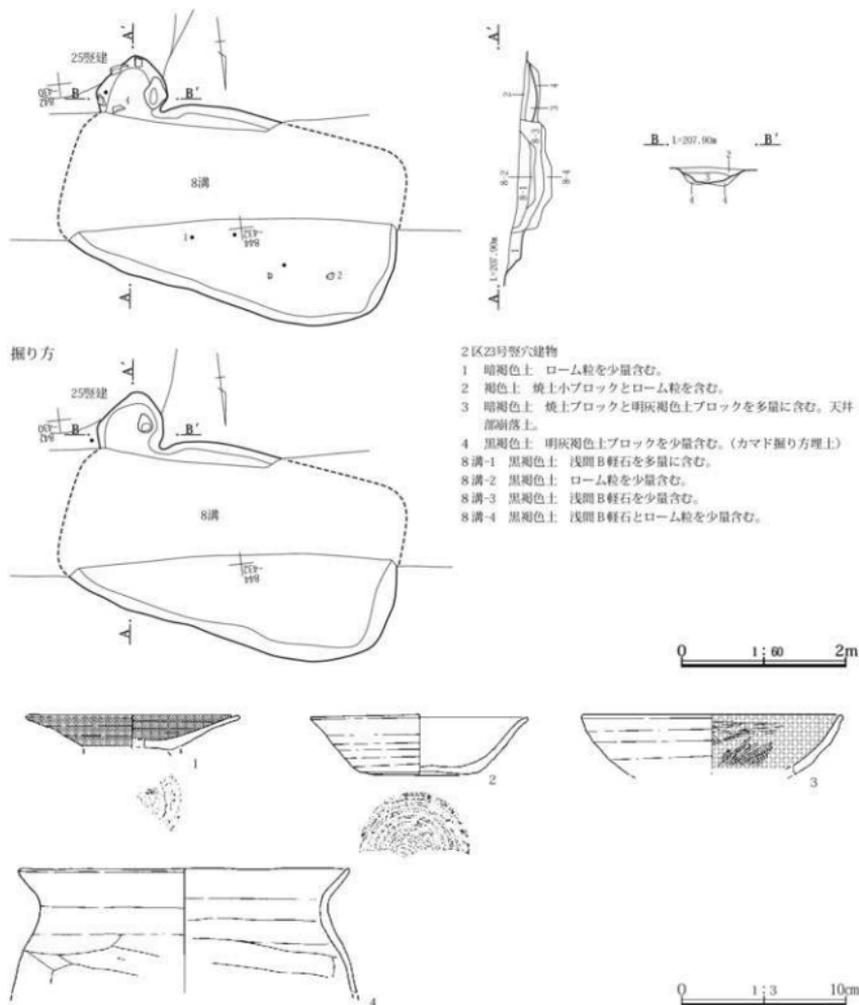


0 1:3 10cm

第221図 22号竪穴建物カマド平・断面図及び出土遺物(1)



第222図 22号竪穴建物出土遺物(2)



第223図 23号竪穴建物平・断面図及び出土遺物

24号竪穴建物 第224・225図 PL.83・84

(旧2区24号住居)

位置：2区 840—432周辺

規模：(3.60)m×(2.77)m、深度は12cmほどを計る。

面積：1.841+α㎡

形状：不明。南西コーナー部を残し、重複遺構により大半を失う。

主軸方位：不明

埋没土：暗褐色砂質土による埋没。削平と重複により、上層の大半を失う。

床面：遺存部はローム地山土を踏み固めて床面とする。
カマド・柱穴・貯蔵穴・壁周溝：不明。いずれも残存部の東側においては検出されていない。

掘り方：なし。

遺物：本建物からは土師器、須恵器、黒色土器などが出土している。図示できた土器は、須恵器椀の1点だけである。この須恵器椀は床面からの出土である。

所見：調査区2区のほぼ中央に在り、周囲には竪穴建物が密集する。本建物の時期については、床面から出土した須恵器椀から9世紀後半に比定できる。

25号竪穴建物 第224～227図 PL.83・84・150・151

(旧2区25号住居)

位置：2区 840-428周辺

規模：5.88m×(3.60)m、深度は8～18cmほどを計る。

面積：19.845+ α ㎡

形状：歪な隅丸長方形

主軸方位：N-101°-E

埋没土：褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。

床面：掘り方土を踏み固めて床面とする。

カマド：南東壁の南コーナー寄りに位置する。燃焼部はほぼ壁のライン上に位置し、左側の袖部から燃焼部壁が、比較的良く残る。燃焼部端は緩やかに立ち上がる。

柱穴：なし。

貯蔵穴：カマド右脇の南コーナー部にあり、深度は20cmほどを測る。

壁周溝：なし。

掘り方：建物の全域に、深度20～50cmを計る土坑状の掘り込みを多数穿つ。

重複：南西部にて24号竪穴建物と重複し、埋土の様相より本建物の方が新しいものと判断される。また、北西部にて23号竪穴建物、並びに8号溝と重複し、いずれの遺構より古いものと判断される。

遺物：本建物からは土師器、須恵器、黒色土器、石製品(鈴車紡輪)、鉄製鉄製品などが出土している。図示した土器には、土師器・杯・椀・台付甕・甕、須恵器杯蓋・杯、黒色土器椀がある。このうち、No.2～4の土師器杯、No.12の須恵器杯、No.16・17・19の土師器甕が床面、No.6の須恵器杯が貯蔵穴、No.7・8・10の須恵器杯、No.13の黒色土器椀、No.14の土師器甕、No.18・20の土

師器甕が掘り方からの出土である。なお、No.1～4の土師器杯、No.20の土師器甕は8世紀代の年代観が与えられ、No.14の土師器甕も年代観は明確ではないが構築時の混入とみられる。

所見：調査区2区の中央部西寄りに在り、周囲には竪穴建物が密集する。本建物の時期については、床面や貯蔵穴から出土した須恵器杯や土師器甕から9世紀後半に比定できる。

26号竪穴建物 第228図 PL.83・84・151

(旧2区26号住居)

位置：2区 844-428周辺

規模：2.40m×(1.73)m、深度は6～12cmほどを計る。

面積：4.327+ α ㎡

形状：不明。南西部を重複する8号溝に切られるため、全容は不明。

主軸方位：N-16°-E

埋没土：暗褐色砂質土による自然埋没の様相を呈するが、削平により上層を大きく失う。

床面：掘り方の土坑上は掘り方土を、他はローム地山土を踏み固めて床面とする。

カマド：カマド本体は検出されていないが、残存部南東端の床面に焼土が見られ、直下の床下土坑の埋土にも多量の焼土ブロックが含まれることから、この位置の壁際にカマドが設けられていたと推察される。

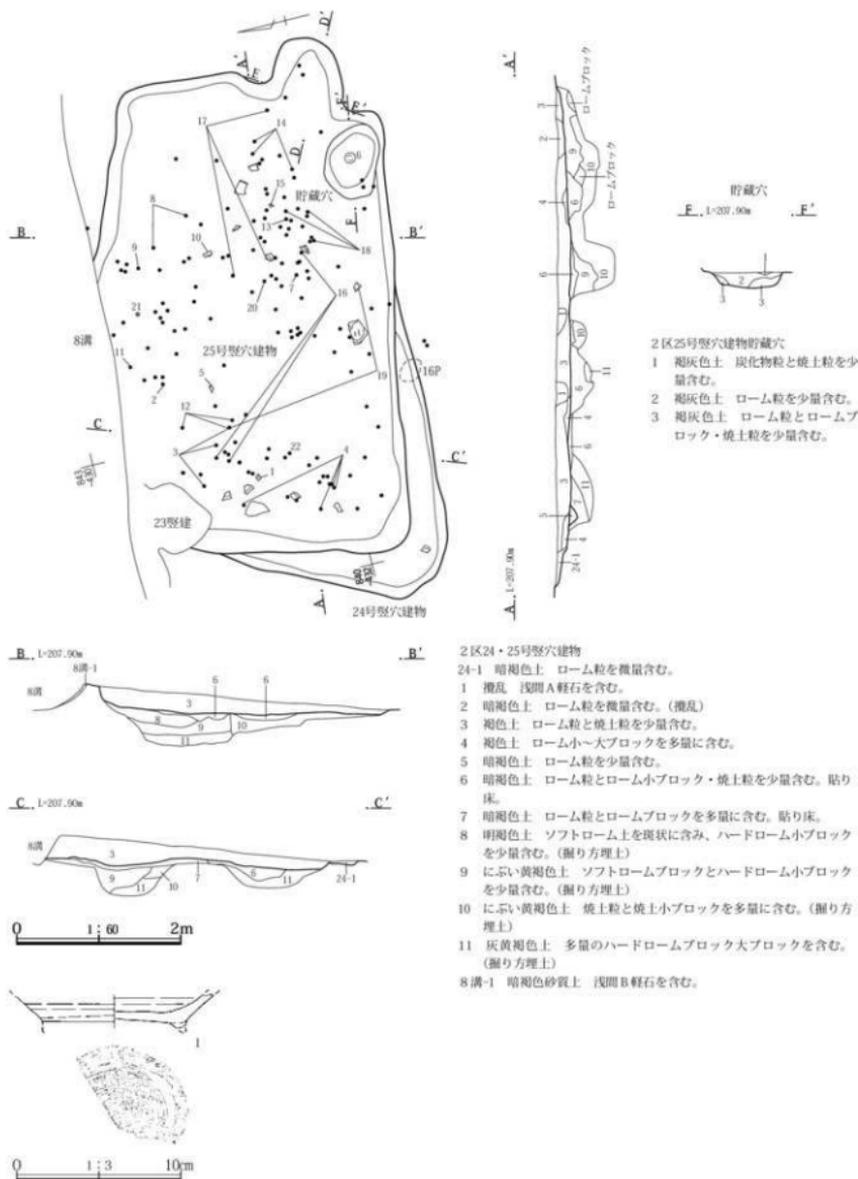
柱穴・貯蔵穴・壁周溝：不明。いずれも残存部においては検出されていない。

掘り方：残存部では土坑状の掘り込み1基を検出するのみ。

重複：南半部で8号溝と重複し、埋土の様相より本建物跡の方が、古いものと判断される。8号溝の埋土上層部には、大量の浅間B軽石が含まれ、最終埋没は平安未から中世初頭と推察される。

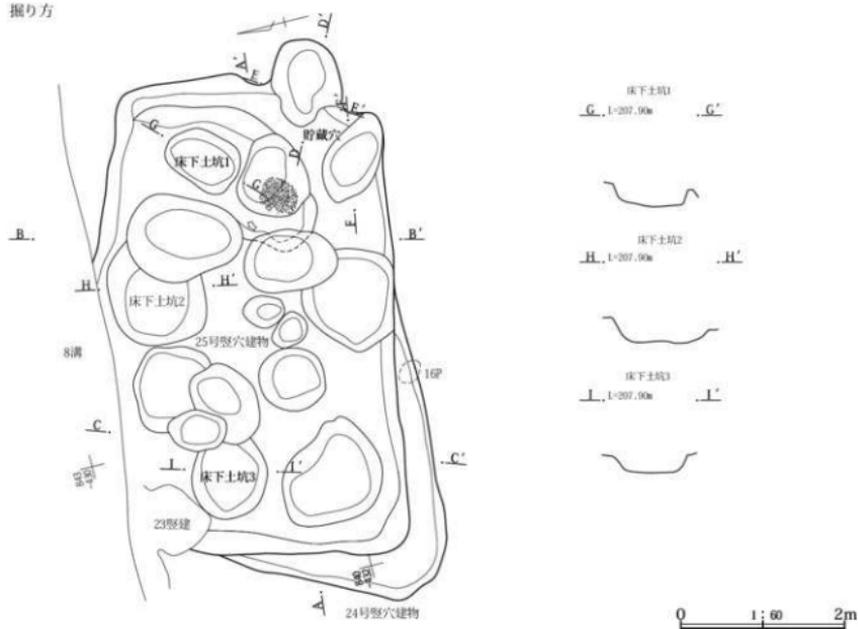
遺物：本建物からは土師器、須恵器などが出土している。図示できた土器は、須恵器椀と羽釜の2点だけであった。この2点はともにカマド掘り方の出土である。

所見：調査区2区の中央部に在り、周囲には竪穴建物が密集する。本建物の時期については、カマド掘り方から出土した須恵器椀と羽釜から10世紀前半に比定できる。

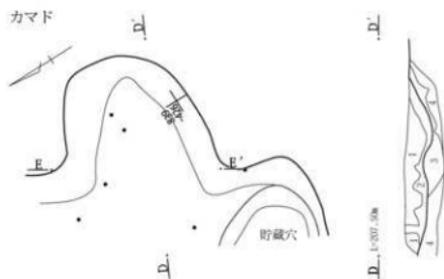


第224図 24・25号貯穴建物平・断面図及び24号貯穴建物出土遺物

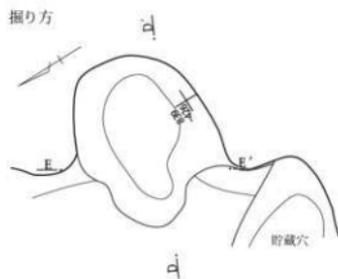
掘り方



カマド



掘り方



E, l=207.50m



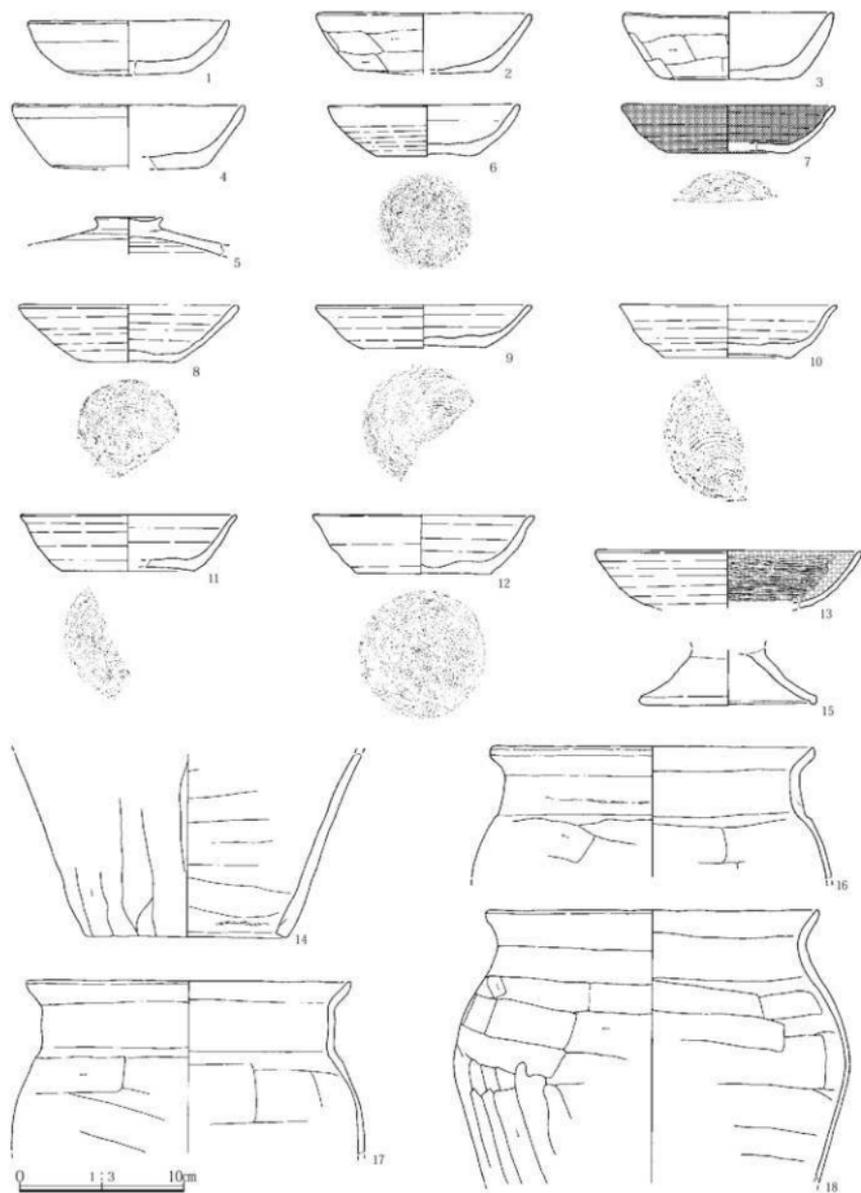
2区25号壑穴建物カマド

- 1 暗褐色土 ローム粒を微量含む。
- 2 にぶい黄褐色土 ローム小ブロックとローム粒・焼土ブロックを多量に含む。天井部崩落土。
- 3 黒褐色土 灰と炭化物・焼土粒を多量に含む。(使用面)
- 4 明黄褐色土 ローム下灰白色粘上小ブロックとローム小ブロックを多量に含む。(掘り方土)

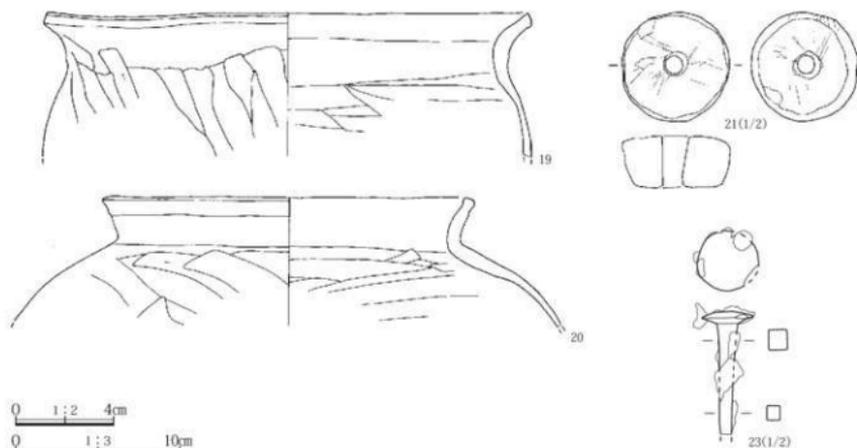
0 1:30 1m

第225図 24・25号壑穴建物掘り方、25号壑穴建物カマド平・断面図

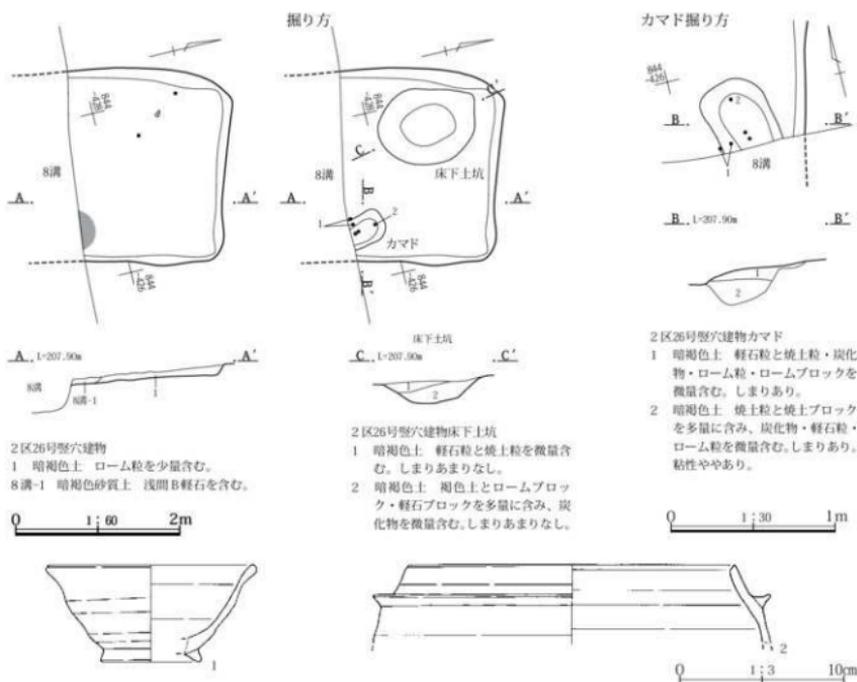
第2章 検出された遺構と遺物



第226図 25号竪穴建物出土遺物(1)



第227図 25号竪穴建物出土遺物(2)



2区26号竪穴建物
 1 暗褐色土・ローム粒を少量含む。
 8溝-1 暗褐色砂質土・浅間B軽石を含む。

2区26号竪穴建物床下土坑
 1 暗褐色土・軽石粒と焼土粒を微量含む。しまりあまりなし。
 2 暗褐色土・褐色土とロームブロック・軽石ブロックを多量に含み、炭化物を微量含む。しまりあまりなし。

2区26号竪穴建物カマド
 1 暗褐色土・軽石粒と焼土粒・炭化物・ローム粒・ロームブロックを微量含む。しまりあり。
 2 暗褐色土・焼土粒と焼土ブロックを多量に含み、炭化物・軽石粒・ローム粒を微量含む。しまりあり。粘性ややあり。

第228図 26号竪穴建物平・断面図及び出土遺物

27号竪穴建物 第229図 PL.84

(旧2区27号住居)

位置：2区 858-431周辺

規模：(2.26)m×(1.40)m、深度は8cmほどを計る。

面積：1.877+α㎡

形状：不明。北西は調査区外、南西は攪乱により逸し、北東壁の一部が残るのみ。

主軸方位：N-24-W

埋没土：褐色砂質土による埋没と思われる。

床面：後記の重複土坑と併せた埋土断面を見ると、竪穴建物の床面となり得る平坦な堆積が見られない。

カマド・柱穴・貯蔵穴・壁周溝：不明。いずれも残存部においては検出されていない。

掘り方：不明。

重複：直下に断面形状が袋状を呈する18号土坑と重複し、本建物の方が新しいと判断される。

遺物：本建物からは土師器、須臾器などが出土している。図示できた土器は、須臾器碗1点だけである。この須臾器碗は埋没土からの出土で、本竪穴建物に共存するか否か判然としない。

所見：調査区2区の北西端の中ほどに在り、周囲に建物はない。前記のとおり、竪穴建物として調査されるが、埋土断面からは床面の存在が確認できず、直下の土坑と一体となる可能性もある。遺構の時期については、出土遺物の年代から9世紀後半に比定できる。

28号竪穴建物 第230～232図 PL.85・151

(旧2区28号住居)

位置：2区 834-413周辺

規模：3.39m×2.30m、深度は32～58cmほどを計る。

面積：9.047+α㎡

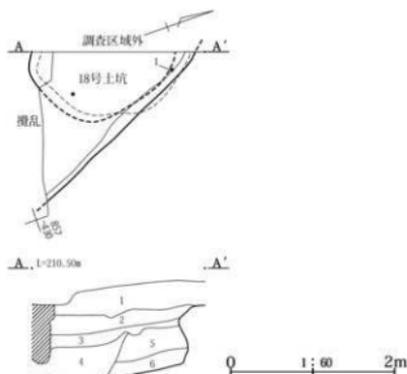
形状：不明。隅丸長方形。南半部を削平により失うため、全容は不明。

主軸方位：N-99-E

埋没土：単一の暗褐色砂質土による埋没であるが、埋土には人為的な埋め戻しの様相は見られない。

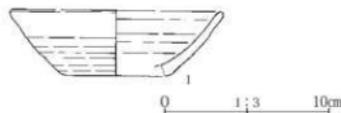
床面：掘り方の土坑上は掘り方埋土を、他はローム地山土を踏み固めて床面とする。検出時の床面上には、カマドの破壊に伴う焼土・炭化物が散乱する。

カマド：東壁に設けられるが、建物の南限が不明のため、



2区27号竪穴建物

- 1 表土
 2 暗褐色土 少量の褐色ローム層移層土を斑状に含む。
 3 褐色土 褐色土ブロックを多量に含む、ロームブロックを少量含む。
 4 褐色土 ローム小ブロックとロームブロックを少量含む。(18号土坑)
 5 黒褐色土 褐色土ブロックを少量含む。(18号土坑)
 6 黒褐色土 ハードローム小ブロックを少量含む。(18号土坑)



第229図 27号竪穴建物平・断面図及び出土遺物

位置関係も明らかではない。遺存状態は悪く、使用面の一部を残すのみ。焼土部はほぼ壁のライン上にあり、煙道部へは緩やかな勾配で立ち上がる。形状は歪だが、主軸はほぼ東を向く。

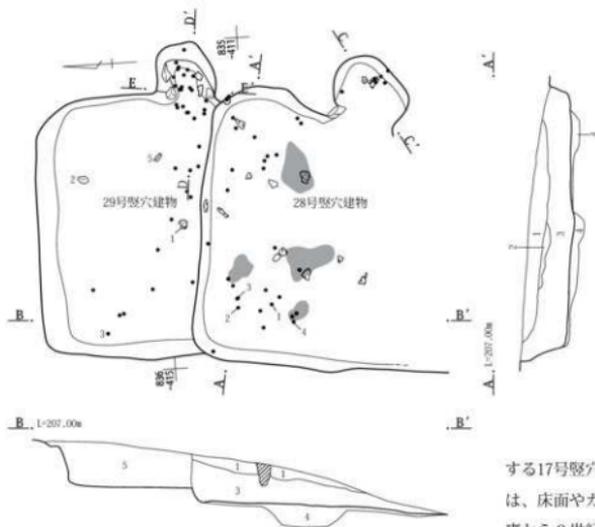
柱穴・貯蔵穴・壁周溝：不明。いずれも残存部においては検出されていない。

掘り方：建物の中央部に深度25cmほどの大型の土坑状掘り込みを有する。

重複：北半部において29号竪穴建物と重複し、検出時の埋土の様相より、本建物の方が新しいものと判断される。

遺物：本建物からは土師器、須臾器、黒色土器などが出土している。図示した土器には、土師器甕、須臾器碗・甕、黒色土器碗がある。このうち、No. 2の須臾器碗が床面、No. 5の土師器甕とNo. 6の須臾器甕がカマドからの出土である。

所見：調査区2区の東端部に在り、北側には軸を同じく

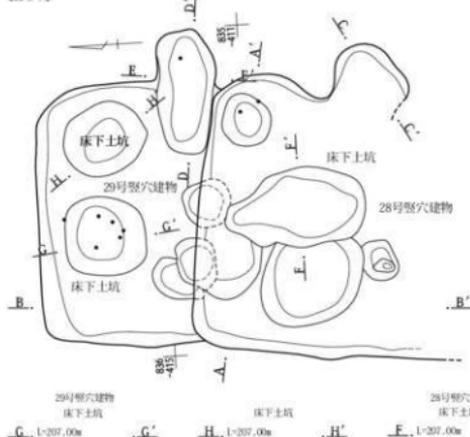


2区28・29号竪穴建物

- 1 褐色土 暗褐色土を斑状に含み、軽石粒と炭化物を微量含む。しまりややあり。
- 2 褐色土 ロームブロックを多量に含む。しまりあり。
- 3 暗褐色土 褐色ローム薄層層土を斑状に含み、軽石粒と焼土粒を微量含む。しまりややあり。
- 4 黒褐色土 ローム大ブロックを多量に含み、スコリアを少量含む。
- 5 暗褐色土 軽石粒を微量含む。しまりややあり。

する17号竪穴建物が並ぶ。本建物の時期については、床面やカマドから出土した須恵器類、土師器類から9世紀第4四半期に比定できる。

掘り方



29号竪穴建物 第230・231・233図 PL.85-151

(旧2区29号住居)

位置：2区 836-413周辺

規模：3.08m×1.79m、深度は54cmほどを計る。

面積：6.661 + a m²

形状：不明。隅丸方形か。後記の重複遺構により南半部を失うため、全容は不明。

主軸方位：N-91°-E

埋没土：褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。

床面：掘り方土坑上は掘り方埋土を、他はローム地山土を踏み固めて床面とする。

2区28号竪穴建物床下土坑

- 1 黒褐色土 褐色土ブロックを少量含む。
- 2 焼土
- 3 黒褐色土 焼土小ブロックと白色灰・ローム小ブロックを少量含む。

2区29号竪穴建物床下土坑

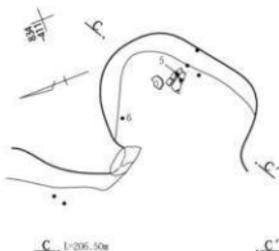
- 1 明褐色土 ローム土を主体に、黒褐色土小ブロックを少量含む。
- 2 黒褐色土 ローム粒と焼土粒を少量含む。



第230図 28・29号竪穴建物平・断面図

第2章 検出された遺構と遺物

28号竪穴カマド



2区28号竪穴建物カマド

- 1 褐色土 ロームブロックを多量に含み、焼土粒を微量含む。しまり粘性ともにややあり。
- 2 褐色土 焼土粒と焼土ブロックを多量に含む。(使用面)
- 3 暗褐色土 ロームブロックと焼土粒を少量含む。しまり粘性ともにややあり。
- 4 褐色土 ローム小ブロックを微量含む。しまりややあり。粘性あり。
- 5 黒褐色土 ローム粒を微量含む。しまりあまりなし。

29号竪穴カマド



2区29号竪穴建物カマド

- 1 にぶい赤褐色土 ローム粒を少量含む。
- 2 にぶい赤褐色土 焼土粒を少量含む。
- 3 暗褐色土 ローム小ブロックとローム粒を多量に含む。
- 6 褐色土 ローム粒とローム小ブロック・焼土小ブロックを少量含む。
- 7 褐色土 ローム粒と焼土粒を少量含む。(掘り方理上)
- 8 褐色土 焼土粒と焼土小ブロック・炭化物を多量に含む。(掘り方理上)
- 9 褐色土 焼土粒と焼土小ブロックを多量に含み、ローム小ブロックと炭化物を少量含む。(掘り方理上)
- 10 暗褐色土 ローム小ブロックを少量含む。(掘り方理上)

0 1:30 1m

カマド：東壁に設けられるが、建物の南限が不明のため、位置関係も明らかではない。基部の遺存状態は良く、両袖石と燃焼部両側に据えられた礎が残り、表面は被熱により焼礫化する。燃焼部は壁ラインのやや外側にあり、煙道部へは緩やかな勾配で立ち上がる。袖石裏の掘り方埋土内に焼土ブロックが含まれることから、使用用途での改修・補修が行われたものと推察される。

柱穴・貯蔵穴・壁周溝：不明。いずれも残存部においては検出されていない。

掘り方：深度20～30cmほどを計る円形の土坑状掘り込みが穿たれる。

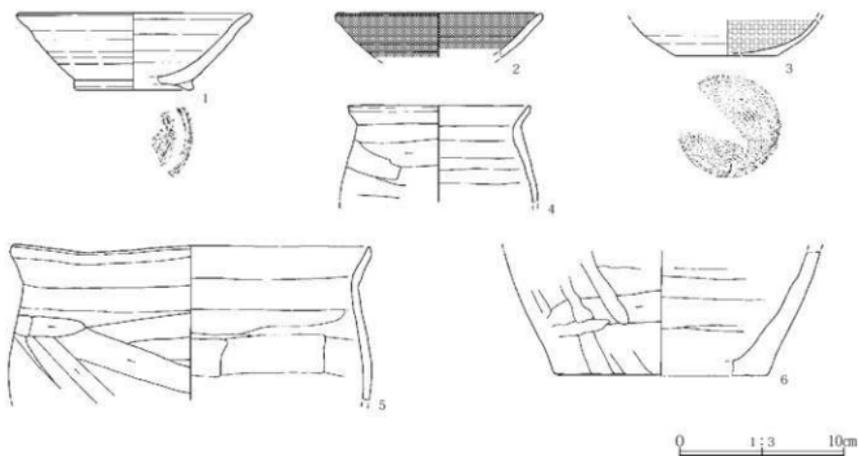
重複：南半部において28号竪穴建物と重複し、検出時の埋土の様相より、本建物の方が古いものと判断される。

遺物：本建物からは土師器、須恵器、灰釉陶器などが出土している。図示した土器には、土師器杯・甕、灰釉陶器長頸甕がある。このうち、No. 1の土師器杯が床面、No. 4・5の土師器甕がカマドのからの出土である。

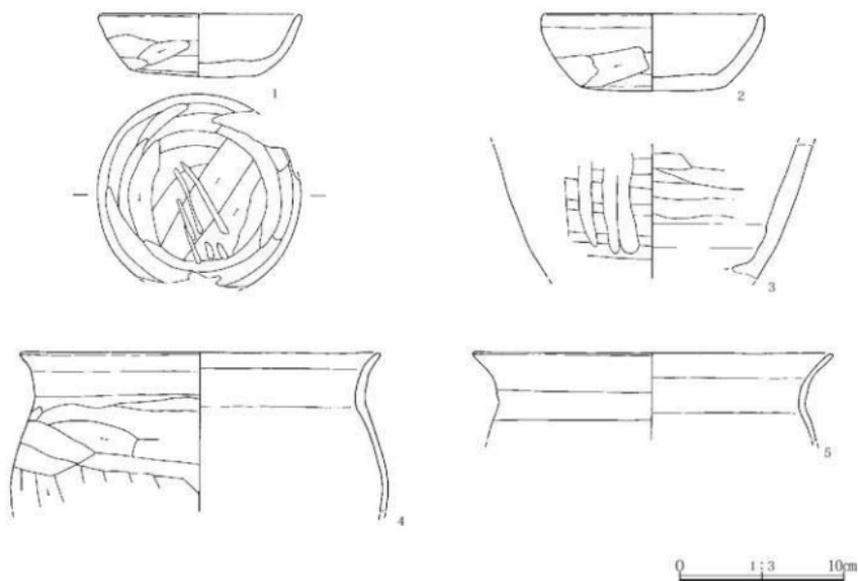
第231図 28・29号竪穴建物カマド平・断面図

所見：調査区2区の東端部に在り、周囲には重複する28号竪穴建物の他に、北側には17号竪穴建物が近接する。

本建物の時期については、カマドから出土した土師器甕から9世紀前半に比定できる。



第232図 28号竪穴建物出土遺物



第233図 29号竪穴建物出土遺物

第2項 ビット・土坑

以下に個々の計測値等をまとめた一覧を記す。

第17表 ビット計測表

名称	区	写真番号	位置(X-Y)	平面形状	断面形状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	重複遺構	備考
1号ビット	4	PL.89	805-404	楕円形	V字状	29	27	43		
2号ビット	3	PL.89	825-419	楕円形	U字状	53	42	50		
3号ビット	3	PL.89	818-412	楕円形	逆台形状	52	35	22		
4号ビット	3	PL.89	818-413	楕円形	U字状	42	37	26		
5号ビット	3	PL.89	818-414	楕円形	不明	39	30	45	10ビット	
6号ビット	3	PL.90	817-414	楕円形	V字状	45	39	74		
7号ビット	3	PL.90	818-413	不整形	V字状	68	64	74		
8号ビット	3	PL.90	817-413	不整形	V字状	49	27	48	10ビット	
9号ビット	3	PL.90	817-414	楕円形	U字状	29	21	26		
10号ビット	3		817-414	(不整形)	V字状	42	(25)	44	5・10ビット	
12号ビット	5		788-402	(不整形)	V字状	60	(25)	35		旧5区2ビット
13号ビット	5		788-400	(不整形)	U字状	43	(20)	39		旧5区3ビット
14号ビット	2	PL.90	867-422	楕円形	V字状	59	43	48		
15号ビット	2		850-421	楕円形	U字状	45	42	34		
16号ビット	2	PL.90	838-429	楕円形	V字状	33	23	40		24型穴建物
17号ビット	2	PL.90	835-416	円形	U字状	33	32	50		

1号ビット



A. 1-199.90m A'



2号ビット



A. 1-204.10m A'



3号ビット



A. 1-203.40m A'



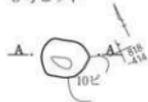
4号ビット



A. 1-203.60m A'



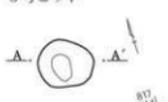
5号ビット



A. 1-203.40m A'



6号ビット



A. 1-203.30m A'



7号ビット



A. 1-203.20m A'



8号ビット



A. 1-203.20m A'



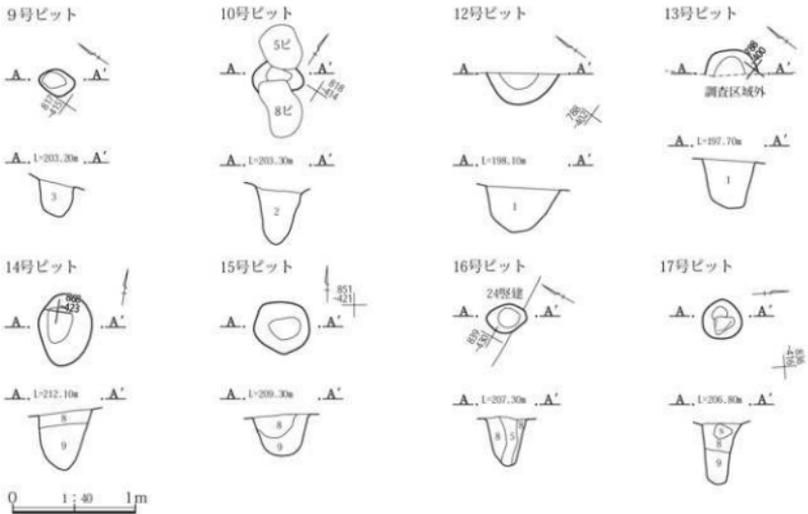
2～5区ビット

- 1 黒褐色土 褐色土を少量含む、1～20mm大軽石粒を微量含む。しまりややあり。
- 2 褐色土 黒褐色土と黄褐色土を斑状に含む、1～10mm大軽石粒を微量含む。しまり粘性ともにややあり。
- 2' 黒褐色土 1～3mm大軽石粒と3～5mm大ロームブロックを微量含む。しまりあまりなし。
- 3 黒褐色土 軽石粒と軽石ブロックを多量に含む。しまりややあり。

- 4 黄褐色土 軽石ブロックが部分的に混じる。しまり粘性ともにややあり。
- 5 褐色土 黄褐色土をブロック状に含む。しまりあまりなし。柱頭跡か。
- 6 褐色土 1～10mm大軽石粒を少量含む。しまりあまりなし。粘性ややあり。
- 7 明黄褐色土 粘質土。しまりややあり。
- 8 暗褐色土 1～5mm大軽石粒を微量含む。しまりややあり。
- 9 暗褐色土 黄褐色土と軽石ブロックを含む。しまり粘性ともにややあり。

第234図 1～8号ビット平・断面図

0 1:40 1m



第235図 9～17号ピット平・断面図

第18表 土坑計測表

名称	区	写真番号	位置 (X-Y)	平面形状	断面形状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	主軸方位	重複遺構	備考
1号土坑	4	PL.88	818-396	ほぼ円形	皿状	111	104	12	N-86°-W		9世紀後半
2号土坑	4		806-405	楕丸長方形	皿状	158	94	15	N-55°-E		
3号土坑	3		819-413	不整形	逆台形状	234	85	23	N-30°-E		
4号土坑	3	PL.88・151	823-411	楕円形	皿状	93	54	15	N-88°-E		9世紀末～10世紀初頭
5号土坑	4	PL.88	792-405	楕円形	逆台形状	58	57	23	N-77°-W	2重穴建物	重複は全体図参照
6号土坑	3	PL.88	824-409	不整形	不明	215	117	12	N-21°-E		9世紀後半か
7号土坑	1		894-443	楕円形	皿状	72	67	8	N-49°-W		
8号土坑	1	PL.88	883-441	楕円形	U字状	145	132	36	N-60°-W		
9号土坑	1	PL.88・151	871-437	楕円形	逆台形状	117	94	35	N-14°-E		10世紀前半
10号土坑	1	PL.151	876-432	楕円形	U字状	84	73	18	N-11°-W	13重穴建物	10世紀代
11号土坑	1		847-446	楕円形	逆台形状	177	105	16	N-80°-W		
12号土坑	1	PL.88・151	850-444	不整形	皿状	183	107	15	N-56°-W		10世紀代
13号土坑	2	PL.88・151	835-435	楕丸長方形	皿状	39	32	6	N-82°-E		8世紀代
14号土坑	2		850-433	(不整形)	不明	(102)	53	57	N-5°-W	15土坑	9世紀後半か
15号土坑	2		851-433	楕円形	U字状	71	70	52	N-78°-E	14土坑	9世紀後半か
16号土坑	2	PL.89・151	846-420	楕円形	逆台形状	195	83	118	N-68°-W	16重穴建物	10世紀代
18号土坑	2	PL.89	857-430	不整形	不明	(175)	(85)	75	不明	27重穴建物	調査区外へ 229図
19号土坑	2		834-417	楕丸長方形	袋状	332	250	80	N-8°-E		旧地区18重穴建物

1号土坑



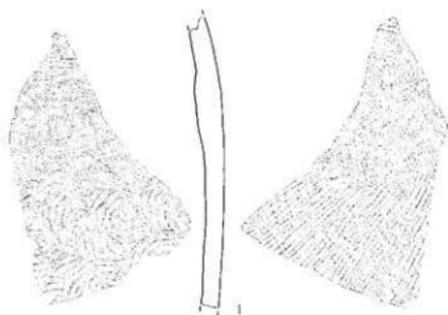
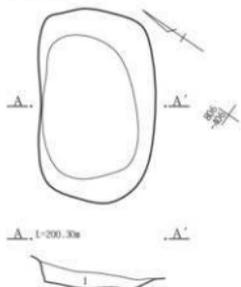
4区1号土坑

1 黒褐色土 部分的にロームと微量の軽石粒を含む。しまりあまりなし。

第236図 1号土坑平・断面図及び出土遺物

第2章 検出された遺構と遺物

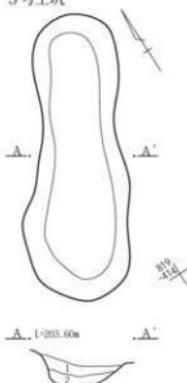
2号土坑



4区2号土坑

- 1 黒褐色土 部分的にロームと微量の軽石粒を含む。しまりあまりなし。

3号土坑

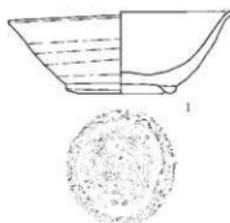


4号土坑



3区4号土坑

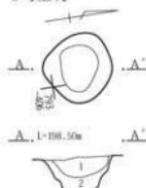
- 1 褐色土 黄褐色土ブロックを部分的に含み、焼土粒と炭化物・軽石粒を微量含む。しまりややあり。



3区3号土坑

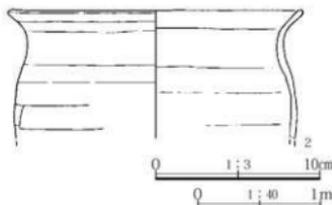
- 1 黒褐色土 褐色土ブロックを部分的に含み、軽石粒を微量含む。しまりあまりなし。
2 黒褐色土と褐色土・黄褐色土の混土。しまりあまりなし。

5号土坑



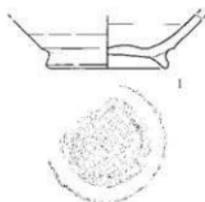
4区5号土坑

- 1 黒褐色土 軽石粒と焼土粒・炭化物を微量含む。しまりあまりなし。粘性ややあり。
2 黒褐色土 暗褐色土の混土に、軽石粒を微量含む。しまりあまりなし。粘性ややあり。



第237図 2～5号土坑平・断面図及び出土遺物

6号土坑



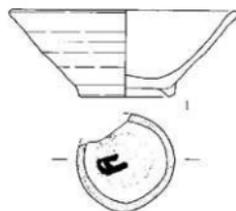
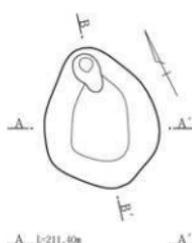
3区6号土坑

- 1 褐色土 炭化物粒を微量含む。
- 2 褐色土 ローム粒を少量含む。
- 3 暗赤褐色土 焼土粒を多量に含む。下面是焼土極めて多い。
- 4 褐色土 ローム粒を少量含む。

7号土坑



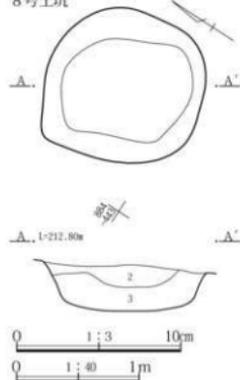
9号土坑



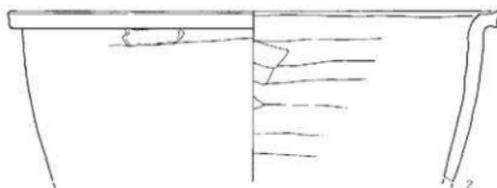
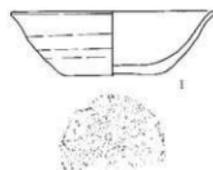
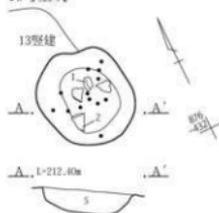
1区7～12号土坑

- 1 暗褐色土 大粒炭化物粒を少量含む。
- 2 褐色土 ローム粒を少量含む。しまりなし。
- 3 褐色土 中粒ローム粒を少量含む。
- 3' 褐色土 3層土に比べよりローム粒を多く含む。
- 4 褐色土 ローム土との混土。
- 5 に近い黄褐色土 焼土粒と炭化物粒を少量含む。

8号土坑



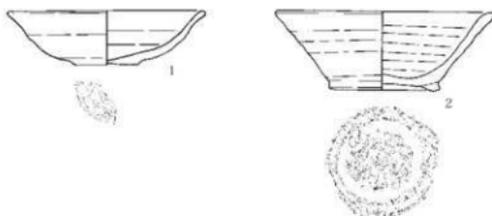
10号土坑



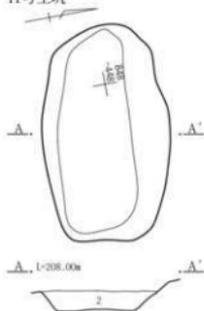
第238図 6～10号土坑平・断面図及び出土遺物

第2章 検出された遺構と遺物

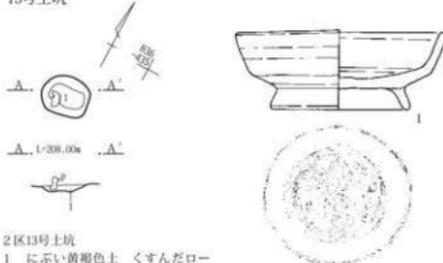
12号土坑



11号土坑



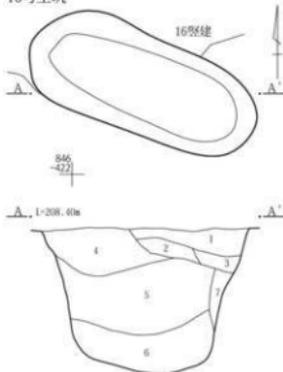
13号土坑



2区13号土坑

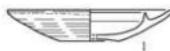
1 にふい黄褐色土 くすんだローム。しまりなく軟らかい。

16号土坑



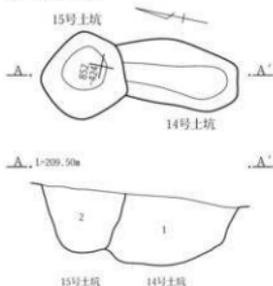
2区16号土坑

- 1 暗褐色土 軽石粒と焼土粒を微量含む。しまりあり。
- 2 暗褐色土 軽石粒と軽石ブロックを多量に含む。しまりあまりなし。
- 3 暗褐色土 ローム粒とロームブロックを多量に含む。軽石粒と軽石ブロックも部分的に含む。しまりややあり。
- 4 褐色土 黒褐色土が部分的に混じり、ローム粒とロームブロック・軽石粒・軽石ブロックを多量に含む。しまりややあり。
- 5 褐色土 黒褐色土が部分的に混じり、ローム粒とロームブロック・軽石粒・軽石ブロックを少量含む。炭化物もわずかに含む。しまりあまりなし。
- 6 褐色土 軽石粒と軽石ブロックを微量含む。しまりあまりなし。
- 7 褐色土 ロームブロックを多量に含む。しまりあまりなし。(壁の崩落)



第239図 11～13・16号土坑平・断面図及び出土遺物

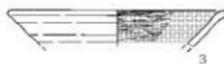
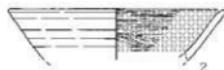
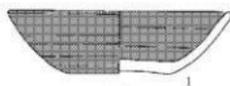
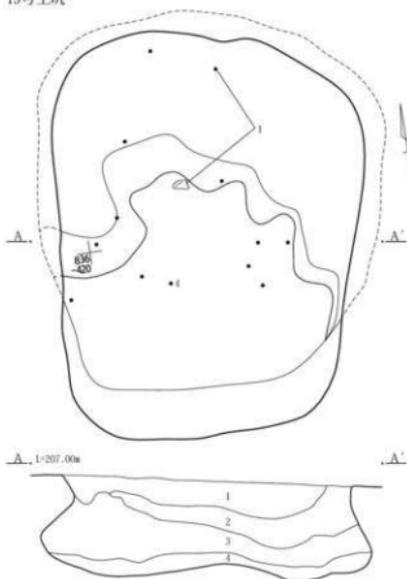
14・15号土坑



2区14・15号土坑

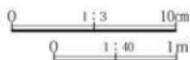
- 1 黒褐色土 ローム粒と焼土粒を少量含む。
 2 黒褐色土 ローム粒と焼土粒を微量含む。

19号土坑



2区19号土坑

- 1 暗褐色土 ハードローム粒を少量含む。
 2 暗褐色土 ハードローム粒を微量含む。
 3 暗褐色土 極大粒ハードローム粒を多量に含む。
 4 褐色土 極大粒ハードローム粒を含む。



第240図 14・15・19号土坑平・断面図及び出土遺物

第3項 溝・水田

[溝]

1区・2区において東西走向の溝を4条、5区南東端部において北東から南西走行の6条の溝が検出される。1区検出の1・9・10号溝は、埋土中に純層に近い二次堆積のAs-Aの堆積が確認され、勾配から水路と推察される。2区検出の8号溝は、数軒の竪穴建物と重複し、埋土の中ほどにAs-Bの堆積が確認され、勾配を持たないことから、平安時代の区画溝と推察される。5区検出の7号溝は、後記のAs-B直下水田の耕作土下の古い溝で、残る2〜6号溝は全てAs-B下水田より新しい溝である。この5区南東部の溝群は、時期の異なる同一走行の溝が地形変換点の等高線に沿うように設けられていることから、溝群の両端には継続的な農耕地とその水源の存在が窺える。以下に個々の遺構についての詳細を記す。

1号溝 第241図 PL.91

(旧1区1号溝)

位置：1区 864-444周辺

規模：巾0.4〜0.8m×長16m

断面形状：U字形

走行及び底面標高：E 209.89m→W 208.69m

埋没土：As-A純層

水流痕跡：不明

重複：長方形の土坑状攪乱4基

遺物：なし。

所見：調査区1区の南寄りに在り、9・10号溝と並行し、2条から1条に合流。勾配が確認されることから、水路と推察される。本溝の時期については、埋土に堆積した浅間A軽石(As-A)の降下年代より、江戸時代中期頃と推定され、軽石降下により廃絶に至る。

9号溝 第241図 PL.91

(旧1区1号溝南)

位置：1区 863-448周辺

規模：巾0.5〜0.8m×長4.6m

断面形状：U字形

走行及び底面標高：SE 208.81m→NW 208.59m

埋没土：As-A純層に近い二次堆積

水流痕跡：不明

重複：なし

遺物：なし。

所見：調査区1区の南寄りに在り、1・10号溝と並行し、2条から1条に合流。東側の大半を削平により失う。残存部に勾配が確認されることから、水路と断定。本溝の時期については、埋土に堆積した浅間A軽石(As-A)の様相より、江戸時代中期頃と推定され、軽石降下後もまもなく廃絶に至る。

10号溝 第241図 PL.91

(旧1区1号溝南)

位置：1区 862-448周辺

規模：巾0.24〜0.3m×長2.8m

断面形状：U字形

走行：SE→NW

埋没土：As-A純層に近い二次堆積

水流痕跡：不明

重複：なし

遺物：なし。

所見：調査区1区の南寄りに在り、1・9号溝と並行。東側の大半を削平により失う。残存部に若干の勾配が確認されることから、水路と断定。本溝の時期については、9号溝と同様に堆積したAs-Aの降下年代より、江戸時代中期頃と推定され、軽石降下後もまもなく廃絶に至る。

2号溝 第243図 PL.92・93

(旧5区2号溝)

位置：5区 764-368周辺

規模：巾0.8〜1.3m×長11.8m

断面形状：U字形

走行及び底面標高：NE 197.46m→SW 196.93m

埋没土：黒褐色弱粘質土・細粒砂

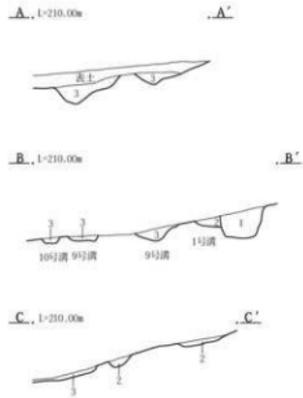
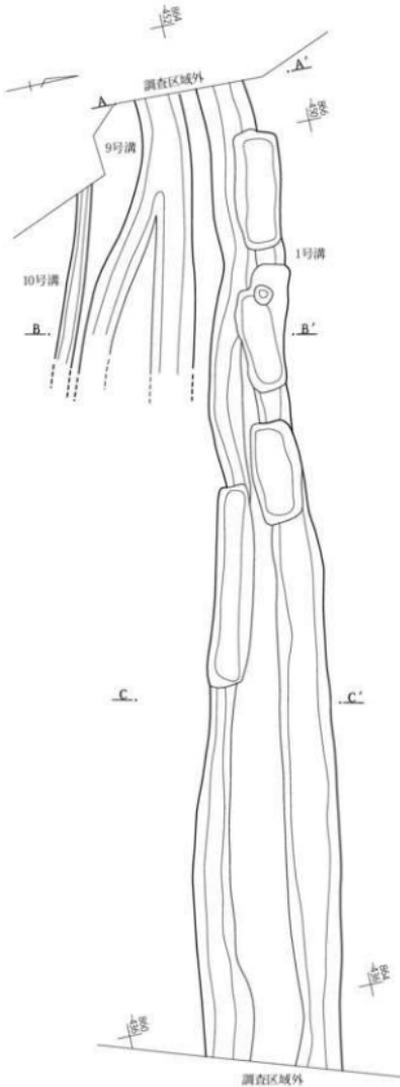
水流痕跡：あり。砂層堆積

重複：3・4号溝と合流の可能性あり。

遺物：なし。

所見：調査区5区の南東端部に在り、並行する溝群の中では最も新しい。中ほどに溝を横断する木杭列の打設が検出され、堰の痕跡と推察される。本溝の時期については、As-A降下以前の近世と推定される。

1区1号溝、9号溝、10号溝



1区1・9・10号溝

1 攪乱

2 浅間A軽石鈍層

3 にふい黄褐色土 浅間A軽石を70～80%程含む。(浅間A軽石の二次堆積)

0 1:80 2m

第241図 1号溝・9号溝・10号溝平・断面図

3・4号溝 第243図 PL.92・93

(旧5区3・4号溝)

位置：5区 760-372周辺

規模：巾0.7-1.7m×長15.5m

断面形状：U字形

走行：NE→SW

埋没土：黒褐色弱粘質土・細粒砂

水流痕跡：あり。

重複：2号溝と合流の可能性あり。

遺物：なし。

所見：調査区5区の南東端部に在り、低地への地形変換点に時期の異なる溝が並行して設けられる。本溝の時期については、5号溝より新しいことから、中世と推定される。

5・6号溝 第242・243図 PL.92・93

(旧5区5・6号溝)

位置：5区 764-371周辺

規模：巾0.7-1.2m×長15m

断面形状：U字形

走行及び底面標高：NE196.80m→SW196.55m

埋没土：黒褐色弱粘質土・細粒砂

水流痕跡：あり。

重複：5・6号溝が中ほどで合流して1条になる。

遺物：埋土中よりNo.1・2須恵器碗、No.3須恵器羽釜、No.4須恵器甕が出土する。

所見：調査区5区の南東端部に在り、低地への地形変換点に時期の異なる溝が並行して設けられる。本溝の時期については、1号水田より新しいことから、平安時代末から中世と推定される。

7号溝 第243・244図 PL.92・93・151

(旧5区7号溝)

位置：5区 764-373周辺

規模：巾1.3-1.6m×長15.5m

断面形状：U字形

走行及び底面標高：NE196.50m→SW196.22m

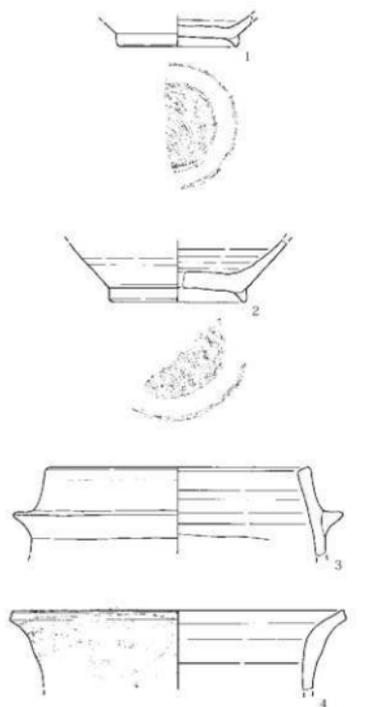
埋没土：埋没土上に1号水田耕作土およびAs-B

水流痕跡：あり。砂層堆積

重複：5号溝と重複し、本溝の方が古いと判断される。

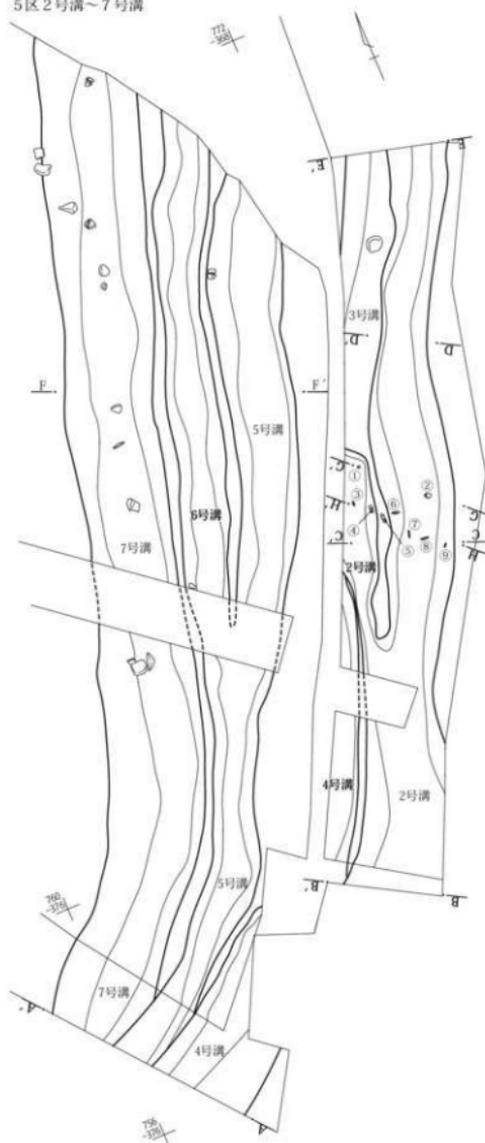
遺物：埋土中よりNo.1土師器杯、No.2須恵器杯、No.3須恵器碗、No.4須恵器甕が出土する。

所見：調査区5区の南東端部に在り、低地への地形変換点に時期の異なる溝が並行して設けられる。本溝の時期については、本溝の埋没後に堆積した浅間B軽石(As-B)の降下年代や出土遺物の年代より、8-10世紀代と推定される。

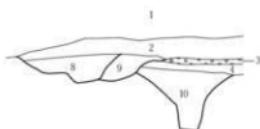


第242図 5・6号溝出土遺物

5区2号溝~7号溝



A, 1-198.10m A'



B, 1-198.10m B' C, 1-198.10m C'



D, 1-198.10m D' E, 1-198.10m E'



E, 1-198.10m E'



G, 1-198.10m G' H, 1-198.10m H'

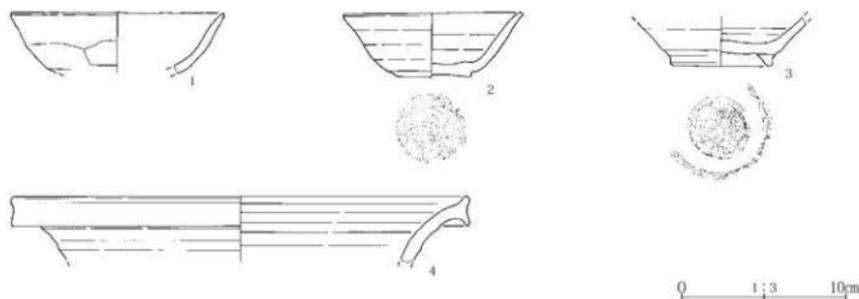


5区2~7号溝

- 1 褐灰色土 近代水田床上。
- 2 黒褐色土 白色・黄色軽石と部分的にAs-B軽石2次堆積を含む。しまり粘性ともややあり。
- 3 As-B軽石層
- 4 黒褐色土 しまりややあり、粘性やや強い均質土。水田耕作土。床上層の形成は確認できない。(B下水田)
- 5 灰白色土 しまり粘性ともあり。不均質なローム相当土。
- 6 褐灰色土 黄色粘質土ブロックと粗粒砂層を不規則に含む。しまりあまりなく粘性あり。(2溝杭1~9出土)
- 7 にぶい黄褐色土 1cm大の軽石及び砂層の互層堆積。(3溝)
- 8 にぶい黄褐色土 砂層の互層堆積。白色粘質土ブロックを一部に含む。(4溝)
- 9 黒褐色土 軽石を底部にわずかな互層としてしか含まない均質土。しまりあまりなく粘性あり。
- 10 黒褐色土 細粒砂層の互層堆積。底部付近では顕著。底部から遺物出土。しまりあまりなく粘性あり。(7溝)

0 1:80 2m

第243図 2号溝、3・4号溝、5・6号溝、7号溝平・断面図



第244図 7号溝出土遺物

8号溝 第245図 PL.91・151

(旧2区8号溝)

位置：2区 843-428周辺

規模：巾1～1.5×長16.8m

断面形状：U字形

走行及び底面標高：E 209.89m→W 208.69m

埋没土：上層に多量のAs-B

水流痕跡：なし

重複：19・23・25・26号竪穴建物と重複し、いずれの建物より新しいものと判断される。

遺物：埋土中よりNo. 1の須恵器杯、No. 2須恵器碗が出土する。

所見：調査区2区の中央に在り、直線的で勾配が確認されないことから、区画のための溝と推察される。本溝の時期については、埋土の最終段階に堆積した浅間B軽石(As-B)の降下年代や出土遺物の年代より、10世紀前半と推定される。

[水田] 第246・247図 PL.5・94・95

位置：5区 南東部

区画形状：方形～やや歪な長方形

区画規模：小区画＝巾2.2m×長2.2m

大区画＝巾2～3.4×長11.4m

畦巾：0.4m～1.2m

底面標高：NW 197.55m→S E 196.85m

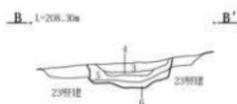
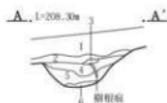
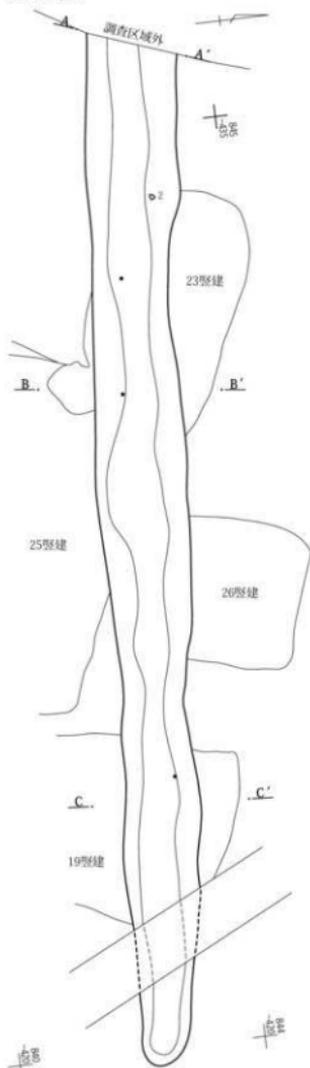
埋没土：成層した浅間Bテフラ(As-B)

耕作土：暗灰色～暗褐色泥層

所見：下高田稻荷谷Ⅱ遺跡南東端と隣接する下高田白山遺跡1・2区の間にある谷地部に設けられる。直上に層厚9.9cmの成層した浅間Bテフラ(粗・細粒火山灰、粗・細粒軽石層)の堆積が確認される。併せて植物珪酸体分析の結果、Bテフラ直下とその下位の耕作土中より多量のイネが検出され、継続的な稲作の実施が明らかとなったが、耕作面としての検出はテフラ直下の1面に留まった。この水田への水の供給については、5区北西部に水路の検出はなく、谷頭よりの湧水を水田北西側より南東方向へかけ流しているものと推察される。また、南東部に検出された溝も水田と同時期に比定されるものはない。

南東端の一部に、浅間Bテフラ層の上から攪拌した痕跡も認められるが、ほぼ全面にテフラの堆積を留めているため、天仁元(1108)年以降の復興は成されなかったものと推察される。

2区8号溝



2区8号溝

1 表土 As-Aを少量含む。

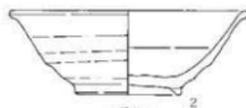
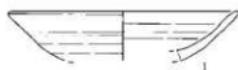
2 黒褐色砂壤土

3 黒褐色土 浅間B軽石を多量に含む。

4 黒褐色土 ローム粒を少量含む。

5 黒褐色土 浅間B軽石を少量含む。

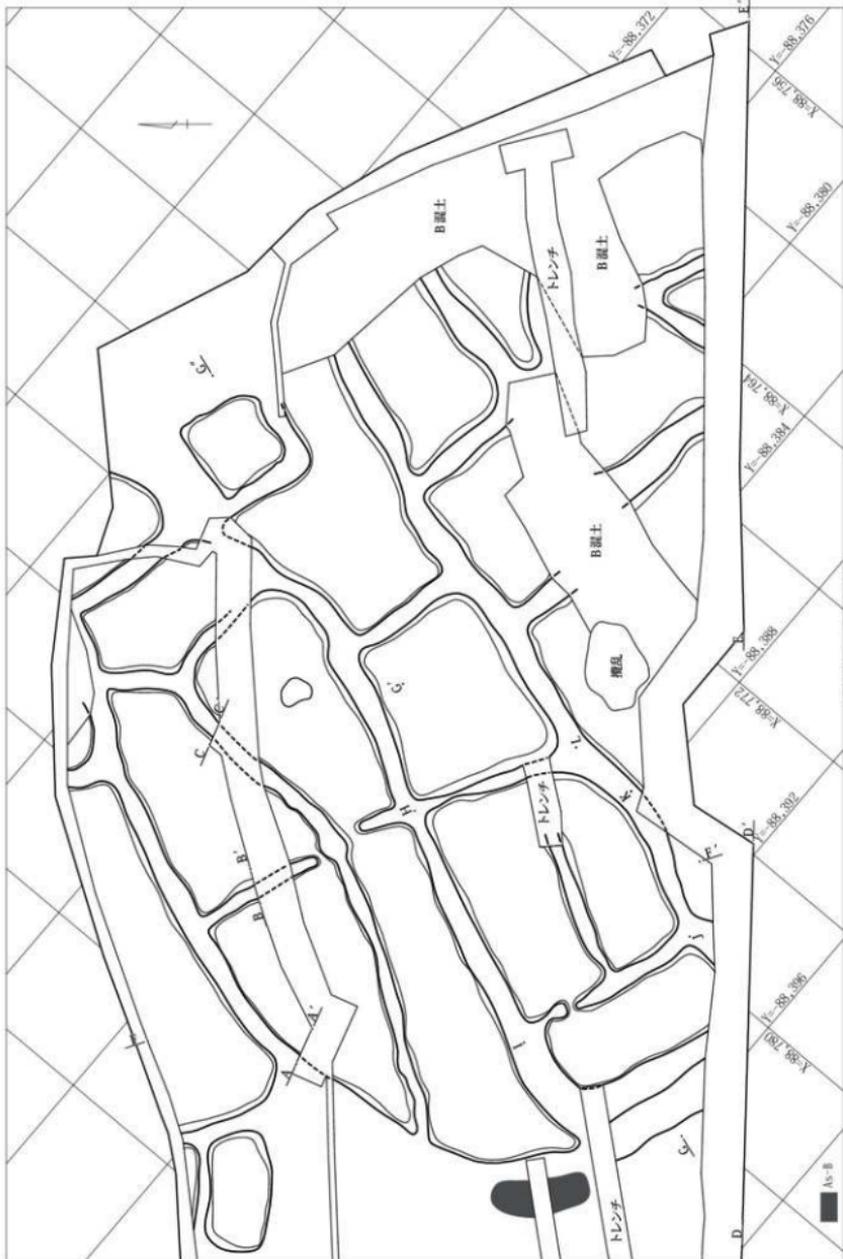
6 灰黄褐色土 ローム粒とローム小ブロックを多量に含む。



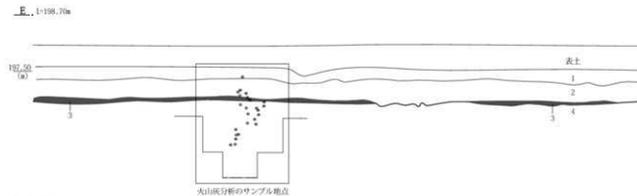
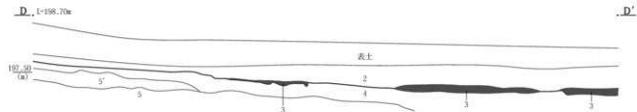
0 1:80 2m

0 1:3 10cm

第245図 8号溝平・断面図及び出土遺物



第246図 水田平面図



- 5区As-8下水田
- 1 褐灰色土 近代水田床土。
 - 2 黒褐色土 白色・黄色軽石粒を若干含み、部分的にAs-8軽石2次堆積ブロックを含む。しまり粘性ともややあり。
 - 3 As-8軽石層
 - 4 黒褐色土 水田耕作土。床土層の形成は確認できない。しまり粘性ともややあり。(B下水田)
 - 5 灰白色土 不均質なロー土相当土。しまり粘性ともあり。
 - 5' 褐灰色土 しまり粘性ともあり。5層に比して色調暗い。

.E'

0 1:80 2m

第247図 水田断面図

第4項 遺構外出土遺物(第248~252図、PL.152)

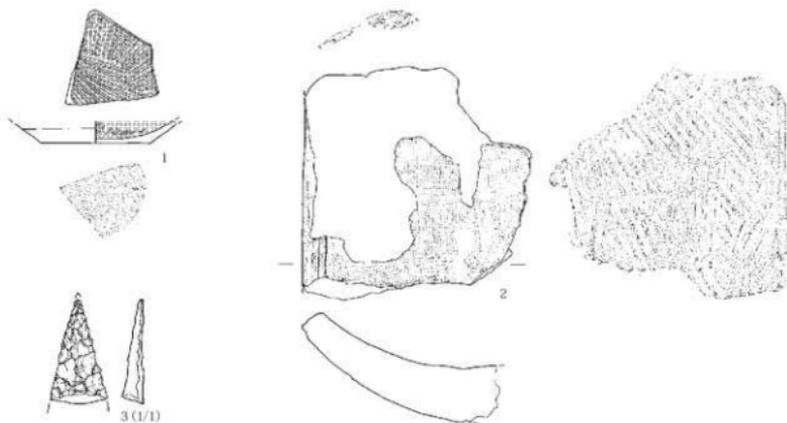
主に表土除去作業から遺構確認作業において遺構以外の地点から採取された資料を以下に掲げる。

特筆すべき遺物として、黒曜石石核(原石)(2区No.5)がある。平成25(2013)年に群馬県教育委員会文化財保護課(当時)により実施された試掘調査で、調査区2区の中

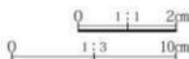
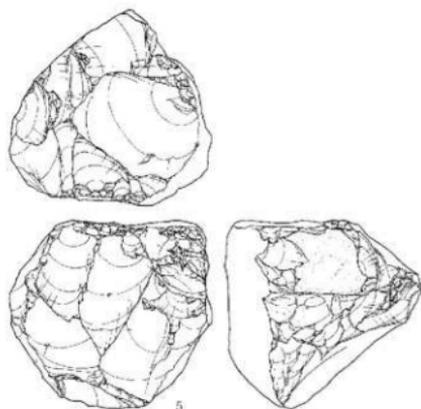
央に路線に沿って設定されたトレンチの中央やや北西寄りの底面付近より出土した。その後の本調査において、当該地点やその周辺からは遺構が検出されなかったことから、遺構外出土遺物として扱った。

また、本遺跡における縄文時代の遺構の検出はなく、土器の出土も後掲の2点の他、前期中葉から中期後葉にいたる6点の未掲載小破片のみと極めて少ない。

1区

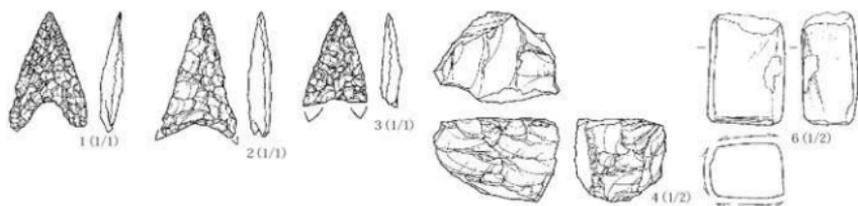


2区

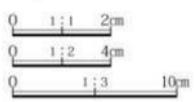
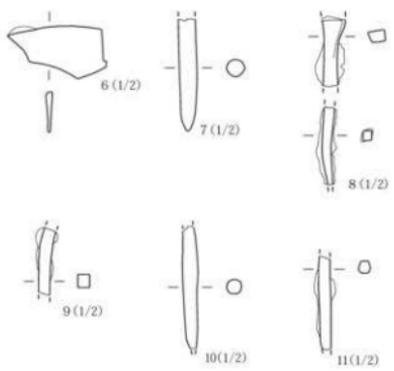
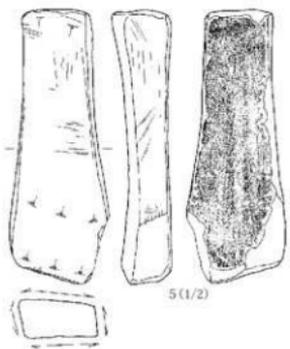
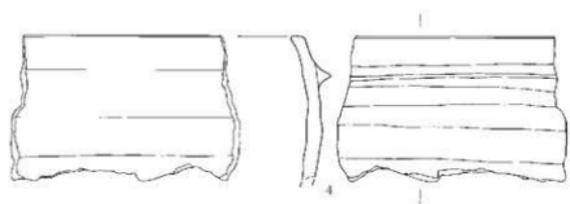
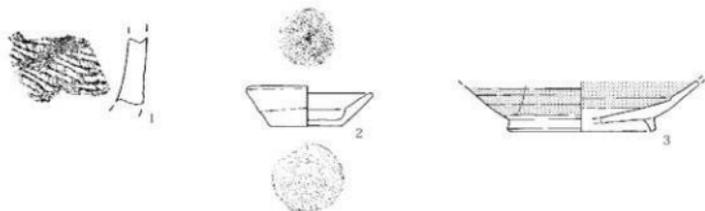


第248図 1・2区遺構外出土遺物

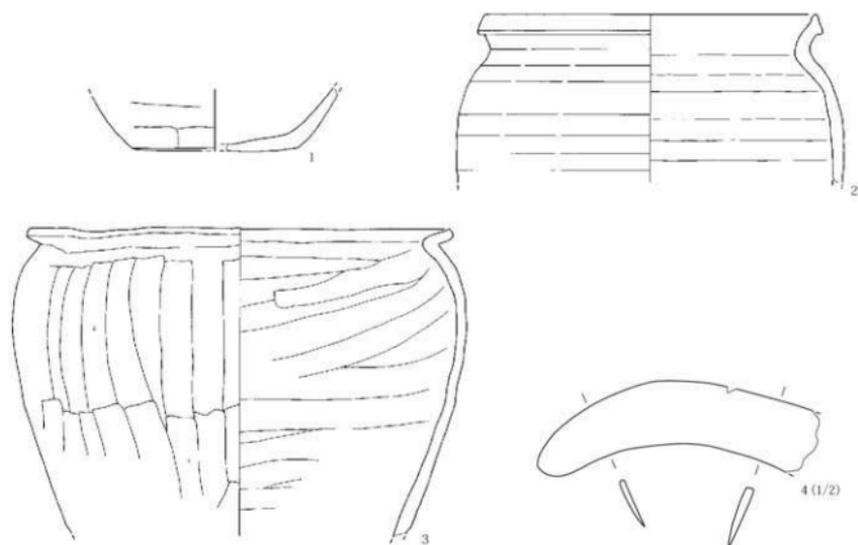
第2章 検出された遺構と遺物



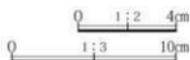
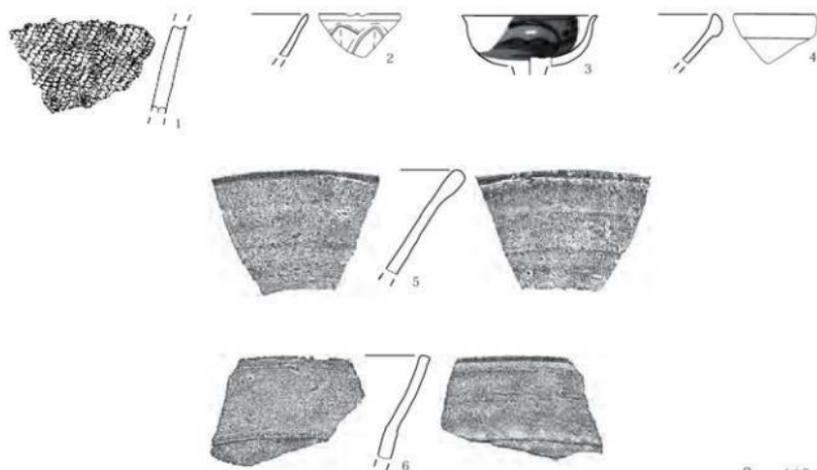
第249図 2区遺構外出土遺物(2)



第250図 3区遺構外出土遺物



第251図 4区遺構外出土遺物



第252図 5区・その他の遺構外出土遺物

第19表 竪穴建物出土遺物観察表

1号竪穴建物		種 類	出上位置 残 存 率	計測値		胎上/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
挿 入 PL.No.	No.			口	底			
第177図	1	須臾器 杯	埋没上 口縁部～底部片	口 13.0 底 6.4	高 3.6	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/黄灰	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第177図	2	土師器 椀	カマド 1/2	口 12.3 底 7.0	台 6.6 高 4.2	細砂粒/還元焰/明 黄釉	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付。	
第177図 PL.143	3	須臾器 椀	カマド、P113 高台欠損	口 14.0 底 7.2		細砂粒/還元焰/浅 黄釉	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付が剥落。	
第177図 PL.143	4	灰輪陶器 皿	カマド 1/2	口 13.2 底 6.8	台 6.4 高 2.5	微砂粒/還元焰/褐 灰	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転ヘラナデ、高台は貼付。塗布方法は漬け掛け。	太原2号窯式 煎
第178図 PL.143	5	須臾器 盃	B混 口縁部～胴部片	口 10.4 脚 25.2		細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/褐灰	費の口縁部を取り除き、頸部を磨り磨く再調整をしている。 ロクロ整形、回転は右回り。胴部下平は回転ヘラナデ。	
第178図	6	土師器 甕	カマド、貯蔵六、 P113 口縁部～胴部片	口 21.6 脚 21.0		細砂粒/良好/灰黄	口縁部から頸部下まで横ナデ、胴部は縦方向へラ削り。内面は胴部にヘラナデ。	
第178図 PL.143	7	土師器 甕	カマド、P113 胴部片	脚 23.6		細砂粒/良好/橙	外面は縦方向のへら削り。内面は横方向のへらナデ。	
第178図 PL.143	8	須臾器 羽釜	カマド 口縁部～胴部中 位片	口 18.8 脚 23.0	脚 21.0	細砂粒/還元焰/粗	ロクロ整形、回転は右回り。踵は貼付。口唇端部は内傾する平坦面を作る。	
第178図	9	須臾器 羽釜	カマド 口縁部～胴部上 半片	口 20.6 脚 24.0	脚 22.6	細砂粒/還元焰/明 赤釉	ロクロ整形、回転は右回り。踵は貼付。口唇端部はほぼ水平な平坦面を作る。	
第178図	10	須臾器 羽釜	カマド 口縁部～胴部上 位片	口 21.0 脚 24.2	脚 22.2	細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転は右回り。踵は貼付。口唇端部はやや内傾する平坦面を作る。	
第178図	11	須臾器 羽釜	カマド 口縁部～胴部上 半片	口 21.8 脚 24.8	脚 23.1	細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転は右回り。踵は貼付。口唇端部はやや内傾する平坦面を作る。	
第178図	12	須臾器 甕	埋没上 胴部片			細砂粒/還元焰/灰 黄	叩き締め成形。外面には平行叩き皿、内面は同心円状アテ 具痕が残る。	
第179図	13	須臾器 甕	カマド 胴部片			細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	叩き締め成形。外面は平行叩き皿をカキメテにて消している。 内面は同心円状アテ具痕が残る。	

2号竪穴建物

2号竪穴建物		種 類	出上位置 残 存 率	計測値		胎上/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
挿 入 PL.No.	No.			口	底			
第181図 PL.143	1	須臾器 杯	カマド 1/2	口 12.8 底 7.2	高 3.4	細砂粒/還元焰/ ふい黄釉	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第181図 PL.143	2	須臾器 椀	床面、埋没上 4/5	口 14.8 底 8.0	台 8.0 高 6.0	細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付。	
第181図 PL.143	3	須臾器 椀	床面、埋没上 4/5	口 15.6 底 7.1	台 7.8 高 6.5	細砂粒/還元焰・ 焼/灰	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り後回転ヘラ ナデ。高台は貼付。内外面とも底部を除き焼し焼成。	
第181図 PL.143	4	土師器 小型甕	埋没上 3/4	口 11.8 脚 14.3	底 6.1 高 14.8	細砂粒/良好/赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部と底部はへら削り。内面は 底部から胴部にヘラナデ。	
第181図 PL.143	5	土師器 台付甕	カマド 胴部下平	底 4.3 脚 14.2		細砂粒/良好/明赤 褐	台部は添付。胴部は縦方向へラ削り。内面はへらナデ。器 面厚さのため単位不明。	
第181図 PL.143	6	土師器 甕	床面、カマド、 埋没上 口縁部～胴部片	口 19.0 脚 21.3		細砂粒/良好/褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面は胴部に ヘラナデ。	
第181図 PL.143	7	土師器 甕	カマド、埋没上 口縁部～胴部 中位	口 19.1 脚 21.2		細砂粒/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面は胴部に ヘラナデ。	
第181図 PL.144	8	土師器 甕	床面、カマド、 埋没上 口縁部～胴部片	口 19.2 脚 22.0		細砂粒/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面は胴部に ヘラナデ。	
第182図 PL.144	9	土師器 甕	床面、カマド、 埋没上 口縁部～胴部	口 20.4 脚 22.8		細砂粒/良好/にぶ い褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面は胴部に ヘラナデ。	
第182図 PL.144	10	土師器 甕	カマド 口縁部～胴部片	口 21.0 脚 23.0		細砂粒・粗砂粒/ 良好/明赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面は胴部に ヘラナデ。	
第181図	11	須臾器 甕	埋没上 口縁部片	口 29.4		細砂粒/黒色粒/ 還元焰/灰	ロクロ整形、回転は右回り。口唇部は上下に引き出されて いる。	

4号竪穴建物

棟目 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第185図 PL.144	1	須恵器 椀	床面 底部～体部	底 台	6.4 5.8		細砂粒/酸化塩/明 黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り、高台は貼付。体部上半欠損後欠損部を調整して使用か。	
第185図 PL.144	2	灰輪陶器 椀	榎方 1/4	口 底	14.8 8.4	台 高	8.0 4.9	微砂粒/還元塩/灰 黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転ヘラナデ、高台は貼付。施釉方法は刷毛塗りか。
第185図 PL.144	3	灰輪陶器 皿	床面 底部～体部	底 台	7.0 6.3			微砂粒/還元塩/灰 黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転ヘラナデ、高台は貼付。施釉方法は漬け掛け。
第185図	4	黒色土器 椀	埋没土 口縁部片	口	12.8			細砂粒/酸化塩/に ぶい黄橙	内面黒色処理。ロクロ整形、回転は右回り。内面は横方向のヘラミガキ。
第185図	5	土師器 小型甕	床面、埋没土 口縁部～胴部上 位片	口	10.8			細砂粒/良好/灰黄 褐	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。
第185図	6	須恵器 羽釜	貯蔵穴 口縁部～胴部上 半片	口 跨	19.6 25.0	胴	22.8	細砂粒・粗砂粒/ 還元塩/	ロクロ整形、回転は右回り。跨は貼付。胴部中位から下位はヘラナデ。口唇端部は内傾する平面面を作る。
第185図	7	須恵器 羽釜	貯蔵穴 口縁部～胴部上 半片	口 跨	19.8 23.6	胴	22.8	細砂粒・粗砂粒/ 酸化塩/浅黄	ロクロ整形、回転は右回り。跨は貼付。口唇端部は内傾する平面面を作る。
第185図 PL.144	8	須恵器 羽釜	床面 口縁部～胴部上 半片	口 跨	23.0 28.0	胴	27.2	細砂粒・粗砂粒/ 還元塩/暗灰黄	ロクロ整形、回転は右回り。跨は貼付。胴部中位より下位はヘラ削り。口唇端部は内傾する平面面を作る。

5号竪穴建物

棟目 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第186図	1	土師器 甕	床面 口縁部～胴部上 位片	口	20.0			細砂粒/良好/にぶ い褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。
第186図	2	土師器 甕	床面 底部～胴部下位 片	底	5.3			細砂粒/良好/にぶ い褐	底部と胴部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。

6号竪穴建物

棟目 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第188図 PL.145	1	須恵器 椀	床面 2/3	口 底	13.0 5.6	台 高	5.3 5.4	細砂粒・粗砂粒/ 酸化塩/にぶい黄 橙	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り、高台は貼付。
第188図 PL.145	2	須恵器 椀	床面、カマド 3/4	口 底	13.0 6.0	台 高	5.7 5.4	細砂粒・粗砂粒/ 酸化塩/にぶい黄 橙	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り、高台は貼付。
第188図 PL.145	3	須恵器 椀	カマド 4/5	口 底	14.9 7.0	台 高	7.6 6.4	細砂粒/酸化塩/に ぶい黄橙	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り後周囲を回転ヘラナデ。高台は貼付。
第188図 PL.145	4	須恵器 椀	床面 口縁部一部欠損	口 底	16.3 6.8			細砂粒/酸化塩・ 燻/灰黄褐	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り、高台は貼付が剥落。外面と内面の口縁部から体部に燻し焼成。
第185図	5	灰輪陶器 椀	床面 底部～体部片	底 台	8.6 8.0			微砂粒/還元塩/灰 黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転ヘラナデ、高台は貼付。施釉方法不明。
第185図	6	土師器 口縁部～胴部片	カマド 口縁部～胴部片	口 胴	18.1 19.6			細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい橙	外面胴部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。
第188図 PL.145	7	土師器 口縁部～胴部片	カマド 口縁部～胴部片	口 胴	18.5 20.2			細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい橙	内面胴部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。

7号竪穴建物

棟目 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第189図	1	須恵器 椀	埋没土 口縁部片	口	15.0			細砂粒/還元塩/灰 白	ロクロ整形、回転は右回り。
第189図	2	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴部上 位片	口	12.6			細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。
第189図	3	土師器 甕	埋没土 口縁部片					細砂粒/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ。

遺物観察表

8号竪穴建物

棟号 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第1908 PL.145	1	土師器 杯	埋没土 口縁部～底部片	口 底	11.6 7.6		細砂粒/良好/橙	外面体部に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。
第1908 PL.145	2	須恵器 皿	埋没土 1/2	口 底	12.0 7.8	台 高 7.7 2.8	細砂粒/還元焰/灰 白	口クロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付。
第1918 PL.145	3	須恵器 椀	床面、埋没土 3/4	口 底	14.6 8.0	台 高 7.7 5.4	細砂粒/還元焰/灰 黄	口クロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付。
第1908	4	須恵器 椀	床下土坑、埋没土 口縁部～体部片	口	13.6		細砂粒/還元焰/に ぶい黄橙	口クロ整形、回転は右回り。
第1918	5	須恵器 椀	カマド 底部～体部	底 台	6.9 6.6		細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰白	口クロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付。
第1928 PL.145	6	須恵器 把手付遊	埋没土 胴部・把手片	胴	20.0		細砂粒・黒色粒/ 還元焰/灰オリー ブ	口クロ整形、把手は貼付。
第1928	7	土師器 台付甕	床面 台部片	台	8.4		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	台部は内外面とも横ナデ。
第1928 PL.145	8	土師器 甕	カマド、埋没土 口縁部～胴部上 位片	口	17.6		細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、稜下から底部は手持ちヘラ削り。
第1928	9	土師器 甕	掘方 口縁部～胴部上 位片	口	19.4		細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部に ヘラナデ。
第1928 PL.145	10	土師器 甕	カマド、埋没土 口縁部～胴部中 位	口 胴	19.8 20.4		細砂粒/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部に ヘラナデ。
第1928 PL.145	11	土師器 甕	カマド、掘方、 埋没土 口縁部～胴部	口 胴	19.3 22.7		細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部に ヘラナデ。
第1928	12	土師器 甕	埋没土 底部～胴部下位 片	底	4.9		細砂粒/良好/明 褐	底部と胴部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。
第1928	13	須恵器 甕	床面 底部～胴部下位 片	底	15.2		細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰オリー ブ	甲き締め成形。底部はヘラ削り、胴部には平行甲き痕が残る。内面に底面から胴部に同心円状アテ貝痕が残る。内外面に空体土砂塊が付着。内面に障灰が付着。
第1928 PL.145	14	鉄製品 紡錘車	一部欠損	長 直 径	(H.7) (5.7)	厚 重 — 41.9	//	接合関係はないが3片に分かれるが同一個体とみられる。紡錘の中心に空いている穴は一方からの圧力がかけられている。

9号竪穴建物

棟号 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第1948	1	須恵器 椀	床面 口縁部～体部片	口	14.6		細砂粒/還元焰/灰 白	口クロ整形、回転は右回り。
第1948	2	灰輪陶器 椀	カマド掘方 底部～体部片	底 台	6.8 6.4		微砂粒/還元焰/灰 白	口クロ整形、回転は右回り。底部は回転ヘラナデ、高台は大原2号窯式 期。旋輪方法は漬け掛け。
第1948	3	土師器 甕	カマド 口縁部～胴部上 位片	口	19.8		細砂粒/良好/にぶ い褐	内面頸部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。
第1948	4	土師器 甕	床面、カマド 口縁部～胴部上 位片	口 胴	19.6 20.3		細砂粒/良好/にぶ い褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部に ヘラナデ。
第1948 PL.146	5	土師器 甕	床面、カマド、埋 没土 口縁部～胴部 中位片	口 胴	20.2 22.8		細砂粒/良好/にぶ い橙	内外面に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。
第1948 PL.146	6	土師器 甕	カマド 底部～胴部下位 片	底	4.7		細砂粒/良好/にぶ い黄褐	底部と胴部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。
第1948 PL.146	7	須恵器 甕	カマド 口縁部片	口	46.0		細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/残黄	口縁部は口クロ整形、回転は右回り。口唇端部は上下に引き出されている。

挿入 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第194図	8	須恵器 甕	掘方 胴部下位片				細砂粒/還元焰/に ぶい黄	叩き締り成形。外面は平行叩き痕が残るが、下位にヘラナデ。内面もアテ具痕が一部に残るが、大部分はナデ消されている。	

10号竪穴建物

挿入 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第196図	1	須恵器 検	床面 底部～体部片	底 6.6	高 6.4		細砂粒/還元焰/浅 黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転ヘラナデ、高台は貼付。施釉方法は刷毛塗。	
第196図	2	須恵器 検	カマド 底部～体部片	底 7.0	高 6.1		細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付。	
第196図	3	須恵器 検	カマド 底部～体部片	底 7.6	高 6.1		細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転ヘラナデ、高台は貼付が剥落。	
第196図	4	須恵器 検	埋没土 底部～体部片	底 8.2	高 8.0		細砂粒/還元焰/灰 黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付。断面内部は還元焰状態。	
第196図 PL.146	5	土師器 甕	カマド、壁上、 埋没土 口縁部～胴部	口 19.0	胴 20.0		細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部から胴部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。	
第196図	6	土師器 甕	掘方、埋没土 口縁部～胴部上 位片	口 19.8	胴 20.2		細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部から胴部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。	
第196図	7	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴部上 位片	口 20.8	胴 20.2		細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部から胴部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。	
第196図	8	土師器 甕	埋没土 底部～胴部下位 片	底 5.3× 4.9	高 4.9		細砂粒/良好/にぶ い橙	底部と胴部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。	
第196図 PL.146	9	鉄製品 不明	一部欠損か	長 (6.2)	厚 0.6	重 4.8	//	断面四角形の棒状の鉄製品。中はどでわずかに太くなる。用途不明。	

11号竪穴建物

挿入 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第197図 PL.146	1	須恵器 杯	埋没土 4/5	口 12.8	高 6.6	3.4	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰・橙/灰	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。内外面とも焼し焼成。	
第197図 PL.146	2	須恵器 杯	床面 3/4	口 13.6	高 6.0	3.9	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰・橙/灰白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。内外面とも焼し焼成。	
第197図 PL.146	3	須恵器 杯	床面 1/3	口 13.8	高 8.0	3.4	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第197図 PL.146	4	土師器 甕	床面 口縁部～胴部上 位片	口 19.8	胴 19.8		細砂粒/良好/明赤 褐	外面口縁部に輪積み痕が残る。口縁部から胴部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。	

12号竪穴建物

挿入 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第198図	1	須恵器 検	カマド 底部～体部	底 5.0	高 6.0		細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第198図	2	灰釉陶器 検	埋没土 口縁部～体部片				微砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転は右回り。施釉方法は漬け掛け。	大原2号窯式 期
第198図 PL.146	3	土師器 小型甕	カマド 口縁部～胴部上 半片	口 11.8	胴 13.2		細砂粒/良好/橙	ロクロ整形、回転は右回りか。残存は2片が接合しているが、片は2次焼成を受けたか。	ロクロ土師器
第199図 PL.146	4	土師器 甕	カマド 口縁部～胴部上 半片	口 21.8	胴 22.4		細砂粒/良好/橙	口縁部から胴部は横ナデ、頸部下にナデ部分が残る。胴部は縦方向のヘラ削り。内面は胴部が木口を使ったヘラナデ。	
第199図	5	須恵器 割釜	カマド 口縁部～胴部上 位片	口 23.2	胴 26.6	26.6	細砂粒/還元焰/明 赤褐	ロクロ整形、回転は右回りか。跨は貼付。口唇端部は内傾する平坦面を作る。	
第199図 PL.146	6	鉄製品 刀子	一部	長 (5.0)	厚 0.4	重 4.3	//	茎と刀身の一部が残る。上下ともに区ははっきりとしない。	
第199図 PL.146	7	鉄製品 刀子か	破片	長 2.1	厚 0.5	重 0.6	//	茎部が残存しているが、わずかに反りが見られるが、詳細不明。	

遺物観察表

採 掘 PL.No.	No.	種 類 種 別	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第1999区 PL-146	8	鉄製品 刀子	破片	長 幅	4.0 1.3	厚 重	0.4 4.4	//	茎と刀身の一部分が残存する。大きく錆に覆われており、区 の形状は見えずらい。

13号竪穴建物

採 掘 PL.No.	No.	種 類 種 別	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第2019区 PL-147	1	須臾器 杯	埋没土 1/4	口 底	13.8 6.8	高	3.6	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。
第2019区	2	須臾器 検	埋没土 底部～体部下位	底 台	7.0 6.7			細砂粒/還元焰/濁 灰	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り後ヘラナデ、 高台は貼付。
第2019区	3	須臾器 検	埋没土 底部～体部下位 片	底 台	8.5 7.0			細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付。
第2019区	4	土師器 甕	掘方 口縁部～胴部上 位片	口	17.6			細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部に ヘラナデ。
第2019区 PL-147	5	土師器 甕	体面、カマド、 掘方、埋没土 口縁部～胴部片	口 胴	19.2 21.6			細砂粒/良好/明 赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部に ヘラナデ。
第2019区	6	土師器 甕	掘方 底部～胴部下位 片	底	4.2			細砂粒/良好/明 赤褐	底部と胴部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。
第2019区 PL-147	7	須臾器 羽釜	カマド 口縁部～胴部上 半片	口 跨	21.4 24.2	胴	24.2	細砂粒/還元焰/明 赤褐	ロクロ整形、回転は右回り。跨は貼付。胴部は下半から下 位は回転ヘラナデ。内面も同様。

14号竪穴建物

採 掘 PL.No.	No.	種 類 種 別	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考	
第2029区 PL-147	1	須臾器 杯	掘方 1/3	口 底	8.2 6.0	高	3.5	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転ヘラ削り。	重複関係にある 15号竪穴建 物より混入。
第2029区	2	須臾器 検	埋没土 底部～体部片	底 台	7.4 6.8			細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り後回転ヘラ ナデ、高台は貼付。	
第2029区	3	須臾器 検	埋没土 底部～体部片	底 台	8.0 8.0			細砂粒/還元焰/灰 黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付。	
第2029区	4	灰軸陶器 皿	貯蔵穴 口縁部～体部片	口	13.6			細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転は右回り。体部下半は回転ヘラ削り旋軸 方法不明。	大原2号窯式 期
第2039区	5	灰軸陶器 検	カマド 口縁部片	口	14.0			微砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転は右回り。旋軸方法は漬け掛けか。	大原2号窯式 期
第2039区	6	灰軸陶器 検	貯蔵穴 底部～体部片	底 台	7.4 6.6			微砂粒/還元焰/黄 灰	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転ヘラナデ、高台は 灰付。旋軸方法は漬け掛けか。	大原2号窯式 期
第2039区	7	須臾器 把手付壺	埋没土 把手片					細砂粒/還元焰/黄 灰	把手は胴部に貼付が剥落。表裏側面ともナデ。	
第2039区	8	須臾器 甕	カマド、埋没土 底部～胴部下位 片	底	11.0			細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/濁灰	甲き締め成形。底部はヘラ削り、胴部には平行甲き痕は残 る。内面はアテ具載をナデ消している。	
第2039区 PL-147	9	土師器 壺	埋没土 口縁部～胴部上 位片	口	21.6			細砂粒・粗砂粒/ 良好/明赤褐	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。	重複関係にある 15号竪穴建 物より混入。
第2049区	10	土師器 甕	掘方、埋没土 口縁部～胴部上 位片	口	32.8			細砂粒/良好/明 赤褐	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。	重複関係にある 15号竪穴建 物より混入。
第2039区 PL-147	11	須臾器 羽釜	埋没土 口縁部～胴部中 位片	口 跨	15.0 20.0	胴	19.8	細砂粒/還元焰/灰 黄	ロクロ整形、回転は右回り。跨は貼付。胴部は下位にヘラ 削り。口縁部は内傾する平坦面を作る。	
第2049区	12	須臾器 羽釜	カマド、埋没土 口縁部～胴部中 位片	口 跨	17.6 21.8	胴	20.6	細砂粒/還元焰/相 黄	ロクロ整形、回転は右回り。跨は貼付。胴部は下位にヘラ 削り。	
第2049区	13	須臾器 羽釜	埋没土 口縁部～胴部上 位片	口 跨	17.8 21.4	胴	20.8	細砂粒/還元焰/相 黄	ロクロ整形、回転は右回り。跨は貼付。口縁部は内傾す る平坦面を作る。	

挿入 PL.No.	No.	種類	出上位置 残存率	計測値		胎上/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第204図	14	須臾器 羽釜	埋没上 口縁部～胴部上 位片	口 径	20.0 24.0	側 23.7	細砂粒/酸化塩/に ぶい黄橙	ロクロ整形、回転は右回り。跨は貼付。口唇部は内傾する平坦面を作る。	
第204図	15	須臾器 羽釜	カマド 口縁部～胴部中 位片	口 径	22.8 27.0	側 25.7	細砂粒/酸化塩/浅 黄	ロクロ整形、回転は右回り。跨は貼付。胴部は下位にヘラ削り。	
第203図	16	須臾器 甕	埋没上 口縁部片	口 径	20.6 21.4		細砂粒・粗砂粒/ 還元塩/灰	ロクロ整形、回転は右回り。口唇部端部は上に引き出され、口唇部下に幅広い三角形の凸部が貼付。	
第204図 PL.147	17	須臾器 甕	床面、カマド、 埋没上 口縁部下半～胴 部	径 側	18.6 39.0		細砂粒・粗砂粒/ 還元塩/黄灰	胴部は叩き締め成形、口縁部はロクロ整形。口縁部は内面にヘラナデ。胴部は外面に平行叩き痕が残るが、内面はアテ具痕をナデ消されている。	
第204図 PL.147	18	鉄製品 鍔		長 幅	5.3 2.0	厚 重	0.3 6.4	//	柳葉式で根柢を持つ。頸部の途中から欠損している。鎌身部の途中で段になって折り曲げられており、加工途中のようにも見られる。

15号竪穴建物

挿入 PL.No.	No.	種類	出上位置 残存率	計測値		胎上/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考		
第207図	1	土師器 杯	埋没上 口縁部～底部片	口 径	9.2 9.5		細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ、体部は上半がナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。		
第207図	2	土師器 杯	埋没上 口縁部～底部片	口 径	11.4 11.9		細砂粒/良好/橙	口唇部は横ナデ、口縁部から体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。		
第207図	3	土師器 杯	埋没上 1/4	口 径	12.4 12.7	底 高	10.0 3.7	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り、底部ヘラ削りは器面摩滅のため単位不明。	
第207図 PL.148	4	土師器 杯	瓶方 口縁部～底部片	口 径	13.0 13.3		細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。		
第207図 PL.148	5	須臾器 杯	カマド、瓶方、 埋没上 3/4	口 径	13.1 4.8	高		細砂粒/還元塩/灰 白	ロクロ整形、回転は右回り。底部から体部下位は手持ちヘラ削り。	
第207図 PL.148	6	土師器 杯	瓶方 口縁部～底部片	口 径	14.0			細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第207図 PL.148	7	黒色土器 椀	カマド、埋没上 ほぼ正形	口 径	15.8 7.9	高	4.6	細砂粒・粗砂粒/ 酸化塩/橙	内面黒色処理、ロクロ整形、回転は右回り。底部は手持ちヘラ削り。内面は口縁部に横方向、底部から体部に放射状ヘラミガキ。	重複する14号型穴建物に共存か。
第208図	8	土師器 甕	カマド 口縁部片	口 径	30.0			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。	
第207図 PL.148	9	土師器 甕	カマド横道 口縁部～胴部片	口 径	21.4			細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	口縁部は横ナデ、胴部は上半が瓶方向、下半は横方向のヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。	
第207図 PL.148	10	土師器 甕	カマド、埋没上 口縁部～底部水 平計測2/3	口 径	23.2 20.4	底 高	6.2 35.3	細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	口縁部は横ナデ、胴部は上位から中位に瓶方向、下位は横方向のヘラ削り、底部もヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。	
第207図	11	土師器 甕	埋没上 口縁部～胴部中 位片	口 径	24.8			細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。	

16号竪穴建物

挿入 PL.No.	No.	種類	出上位置 残存率	計測値		胎上/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第209図 PL.148	1	土師器 杯	床面 1/4	口 径	13.2 10.0	高	4.5	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。
第209図	2	黒色土器 椀	埋没上 口縁部片	口 径	12.0			細砂粒/酸化塩/黒 褐	内面黒色処理、ロクロ整形、回転は右回り。内面は横方向のヘラミガキ。
第209図 PL.148	3	紡輪		径	5.3	高 重	1.2 48.2	滑石//	表裏面とも最打痕が目立ち、跡な作り。背面側の軸穴周辺は光沢を帯び、使い込まれていることが分かる。裏面側外縁は帯状の高まりがある。体部には整形痕が残る、横位跡条痕が残る。軸穴は9mm。
第209図 PL.148	4	石製品		径	4.7	高 重	1 31.6	滑石//	石材、形態要素は紡輪だが、軸穴に相当する孔が広過ぎるため、石製品とした。断面形状は台形状を呈することから紡輪に似て固くおいた。軸穴は背面側が段を有しているが、裏面側は浅くレンズ状に窪みただけである。感覚的だが背面側より裏面側の光沢に差があり、厚い紡輪を二分したものを素材に加した可能性も考えておきたい。

遺物観察表

挿入 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
PL-148	5	硬片	住居 フク土	長 幅	2.9 1.6	厚 重 1.6 7.3	玉蜀	良質で火打石として用いることも可能だが、明瞭な敲打痕の痕跡は見られない。やや脆く、破損して本来形状は不明。	

17号竪穴建物

挿入 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第211号 PL-148	1	須臾器 椀	埋没土	口 底	12.8 6.0	高 0 4.0 0	細砂粒・粗砂粒/ 礫/還元焰/黄灰	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第211号 PL-148	2	須臾器 杯	掘方 4/5	口 底	13.6 6.7	高 0 3.8 0	細砂粒/還元焰/に ぶい黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は手持ちヘラ削りか、器面摩滅のため不鮮明。	
第211号	3	黒色土器 小型甕	カマド 口縁部下半～胴部片	胴 胴	11.2 12.0		細砂粒/良好/褐	内面黒色処理。口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り後丁寧なヘラナデか。内面胴部はヘラナデか、単位不鮮明。	
第211号	4	土師器 小型甕	掘方 口縁部～胴部上位片	口	12.0 0		細砂粒/良好/にぶ い赤褐	口縁部から胴部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。	

19号竪穴建物

挿入 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第213号	1	土師器 甕	掘方 頸部～胴部上位片				細砂粒・粗砂粒/ 良好/黄灰	胴部は外面が縦方向ヘラ削り。内面はヘラナデ。	
第213号	2	埴輪 円筒	掘方 胴部片				細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい赤褐	凸帯は台形状を呈し、貼付。胴部は縦方向ハケメ。	
第213号	3	埴輪 円筒か	床面 胴部片				細砂粒・粗砂粒/ 良好/明赤褐	凸帯は貼付、凸帯の上下はナデ、外面は器面摩滅のため整形不鮮明。内面は縦方向のナデ。	

20号竪穴建物

挿入 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第214号	1	土師器 杯	掘方 1/4	口 底	11.8 7.8	高 3.7	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。器面摩滅のため単位不明。	
第214号 PL-148	2	土師器 杯	掘方 1/4	口 底	14.8 10.4	高 5.1	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
第214号 PL-148	3	須臾器 皿	掘方 1/2	台 底	13.2 7.4	台 高 6.7 2.5	細砂粒/還元焰/褐 灰	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付。高台端部に乾燥時の置き台痕が残る。	
第214号	4	須臾器 椀	掘方 口縁部～体部片	口	15.8		細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転は右回り。	
第215号 PL-148	5	須臾器 椀	掘方 1/3	口 底	14.6 6.9	台 高 6.4 6.1	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/にぶい黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付。高台端部に乾燥時の置き台痕が残る。	
第215号	6	須臾器 椀	掘方 口縁部～底部片	口 底	16.2 8.6	台 高 7.6 5.9	細砂粒/還元焰/ 焼/黒褐	ロクロ整形、回転は右回り。体部下位は回転ヘラ削り、高台はロクロ整形、回転は右回り。体部下位は回転ヘラ削り、高台は貼付。内外面とも焼成。	
第215号 PL-148	7	灰輪陶器 段皿	埋没土 口縁部～体部片	口	17.8		細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転は右回り。体部下位は回転ヘラ削り。施 ケツ丘1号 式期	
第215号 PL-148	8	黒色土器 椀	掘方、埋 没土 完形	口 底	12.4 6.4	高 5.0	細砂粒/還元焰/橙	内面黒色処理。ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り後底部四縁とともに手持ちヘラ削り。内面は口縁部は横方向、底部から体部は放射状ヘラミガキ。	
第215号 PL-149	9	黒色土器 鉢	掘方 口縁部～体部片	口	25.6		細砂粒/還元焰/に ぶい褐	内面黒色処理。ロクロ整形、回転は右回り。内面は口縁部が横方向。体部は放射状ヘラミガキ。	
第215号	10	土師器 甕	掘方 口縁部～胴部上位片	口	20.8		細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、胴部は縦方向ヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。	
第215号	11	土師器 甕	掘方 口縁部～胴部上位片	口	17.8		細砂粒/良好/にぶ い橙	外面頸部に輪積み痕が残る。口縁部から胴部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。	
第215号 PL-148	12	土師器 甕	カマド、掘方 口縁部～胴部上位片	口	17.8		細砂粒/良好/橙	口縁部から胴部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。	
第215号	13	土師器 甕	掘方 口縁部～胴部上位片	口	19.8		細砂粒/良好/にぶ い赤褐	外面頸部に輪積み痕が残る。口縁部から胴部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。	

挿入 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第216図	14	土師器 甕	瓶方 口縁部～胴部上 位片	口 22.8 底 24.2			細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラナデ。内面は胴部にヘラナデ。
第216図	15	土師器 甕	瓶方 底部～胴部下平 方	底 6.0			細砂粒/良好/にぶ い黄橙	底部と胴部はヘラナデ。内面は底部から胴部にヘラナデ。
第216図 PL.149	16	須恵器 瓶	カマド 口縁部～胴部上 位片	口 23.3 肩 24.6			細砂粒/酸化塩/に ぶい橙	ロクロ整形、回転は右回り。肩と把手は貼付。口縁部はヘラナデ。内面はヘラナデ。4方または2方に長4.3、幅1.8、厚1.2cmの把手が貼付。
第216図 PL.149	17	須恵器 甕	カマド 胴部上位片				細砂粒/還元塩/灰 黄	甲き締め成形、口縁部は頸部にて貼付。頸部はヘラナデ。胴部は外面に平行甲き直、内面には同心円状アテ貝殻が残る。

21号竈穴建物

挿入 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第218図	1	土師器 杯	埋没土 口縁部～体部片	口 11.4 底 12.0			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部は手持ちヘラ削り器面摩滅のため単位不明。
第218図	2	土師器 杯	埋没土 1/3	口 12.0 高 4.5			細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削りか、器面摩滅のため整形や単位不詳明。
第218図 PL.149	3	土師器 杯	瓶方、P11 1/5	口 12.0 底 8.0	高 3.7		細砂粒/良好/にぶ い黄褐	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り、器面摩滅のため単位不明。
第218図 PL.149	4	土師器 杯	埋没土 1/4	口 12.4 底 7.8	高 4.1		細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り、器面摩滅のため単位不明。
第218図 PL.149	5	土師器 杯	床面、22号建 ほぼ正形	口 13.0 底 7.5	高 4.1		細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り、器面摩滅のため単位不明。内面も大部分器面が摩滅しているが、ごく僅か体部から口縁部に斜射状暗文が残る。
第218図	6	土師器 杯	埋没土 底部～体部片	底 8.2			細砂粒・粗砂粒(片 岩)/良好/橙	底部と体部は手持ちヘラ削り、器面摩滅のため単位不明。
第218図	7	須恵器 杯蓋	埋没土 口縁部～天井部 片	口 13.8			細砂粒/還元塩/灰 白	ロクロ整形、回転は右回り。天井部は中程まで回転ヘラ削り。口縁部は端部を折り曲げ、柄は貼付。
第218図	8	須恵器 杯蓋	埋没土 柄	柄 5.2			細砂粒/還元塩/灰 黄	ロクロ整形、回転は右回り。柄はボタコ状の粘土板を貼付し周囲をつまみ上げ環状にする。
第218図	9	須恵器 杯	埋没土 1/3	口 12.4 底 7.8	高 3.0		細砂粒/還元塩/灰 黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り無調整。
第218図 PL.149	10	須恵器 杯	埋没土 完形	口 12.4 底 7.9	高 3.2		細砂粒・粗砂粒/ 還元塩/灰黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り無調整。
第218図 PL.149	11	須恵器 杯	埋没土 完形	口 12.8 底 6.8	高 3.5		細砂粒・粗砂粒/ 還元塩/灰黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り無調整。体部中に段を作る。
第218図 PL.149	12	須恵器 瓶	埋没土 3/4	口 13.0 底 6.0	高 3.8		細砂粒/還元塩/灰 黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り無調整。
第218図 PL.149	13	須恵器 瓶	カマド瓶方 底部～体部	底 7.0 台 6.0			細砂粒・粗砂粒/ 還元塩/灰黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り後ヘラナデ、高台は貼付。
第219図 PL.149	14	灰輪陶器 耳皿	埋没土 口縁部の大半を 欠損	口 9.0 幅 5.3	底 高 3.3		微砂粒/還元塩/浅 黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り無調整。口縁部の対になる2方を折り曲げている。施釉方法は洗け掛けか。
第219図	15	須恵器 長頸壺	埋没土 口縁部片				細砂粒/還元塩/黄 灰	ロクロ整形、回転は右回り。
第219図 PL.149	16	土師器 甕	カマド、カマド 瓶方 口縁部～胴部上 位片	口 17.6			細砂粒/良好/明 陶	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。
第219図 PL.149	17	土師器 甕	床面、埋没土、 22号 口縁部～胴部 中位片	口 18.9 胴 21.5			細砂粒/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。
第219図	18	須恵器 羽釜	カマド瓶方 底部～胴部下位 片	底 5.6			細砂粒・粗砂粒/ 還元塩/にぶい黄	ロクロ整形、回転は右回りか。底部と胴部はヘラ削り、底部とその両縁は器面摩滅のため単位不明。内面は底部から胴部にヘラナデ。

遺物観察表

種 別 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
第21900 PL.149	19	須恵器 羽釜	カマド 底部～胴部下位 片	底	6.2		細砂粒/還元焰/灰 黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部と胴部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。	
第21900 PL.149	20	須恵器 羽釜	床面 口縁部～胴部上 位片	口 径	19.0 24.4	胴	22.8	細砂粒/還元焰/浅 黄	ロクロ整形、回転は右回り。罫は貼付。口唇端部は内傾する平坦面を作る。
第21900 PL.149	21	須恵器 羽釜	カマド製方 口縁部～胴部上 位片	口 径	19.4 25.0	胴	23.0	細砂粒/還元焰/浅 黄	ロクロ整形、回転は右回り。罫は貼付。胴部は内外面ともヘラナデ。口唇端部は内傾する平坦面を作る。
第21900 PL.150	22	須恵器 羽釜	カマド製方、埋 没上、2窓建 口縁部～胴部中 位片	口 径	19.6 24.8	胴	23.8	細砂粒/酸化焰/に ぶい黄褐色	ロクロ整形、回転は右回り。罫は貼付。胴部はヘラナデ。口唇部に粘土小塊が付着。
第21900 PL.149	23	鉄製品 釘	ほぼ完成形	長 幅	5.5 0.5	厚 重	0.5 5.8	//	頭部が大きく折り返されている。脚部の先端がやや曲がって伸びるとみられるが欠損している。
第21900 PL.149	24	鉄滓	破片	長 幅	2.4 2.1	厚 重	1.0 5.4	//	酸化土砂が付着し、気泡の痕跡わずかにあるが小さい。木炭痕跡は確認できない。

22号竪穴建物

種 別 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
第22100 PL.150	1	土師器 杯	埋没上 1/3	口 底	12.0 8.2	高	3.5	細砂粒/良好/褐	口縁部は横ナデ。体部から底部は手持ちヘラ削り、器面摩滅のため単位不明。
第22100 PL.150	2	須恵器 杯蓋	埋没上 柄～天井部片	柄	3.7			細砂粒/還元焰/黄 灰	ロクロ整形、回転は右回り。天井部は回転ヘラ削り。柄はボタン状の粘土板を貼付し周囲をつまみ上げ環状に作る。
第22100 PL.150	3	須恵器 杯	床面、奇蹟穴 ほぼ完成形	口 底	12.6 7.8	高	3.1	細砂粒/還元焰/黄 灰	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り無調整。
第22100 PL.150	4	須恵器 杯	埋没上 1/4	口 底	12.8 8.0	高	3.2	細砂粒/還元焰/黄 灰	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り無調整。
第22100 PL.150	5	須恵器 碗	埋没上 1/2	口 底	13.6 8.0	高	4.0	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り無調整。
第22100 PL.150	6	須恵器 碗	埋没上 1/2	口 底	12.4 6.0	高	3.8	細砂粒・粗砂粒/ 酸化焰/にぶい黄 褐色	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り無調整。
第22100 PL.150	7	須恵器 皿	埋没上 底部	底 径	7.0 7.8			細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転系切り、高台は貼付。
第22100 PL.150	8	灰釉陶器 土師器	床面 口縁部～体部片	口 径	15.8			微砂粒・細砂粒/ 還元焰/灰黄	ロクロ整形、回転は右回り。胎土方法は内面に浸し掛けか、口唇端部は外反する。
第22200 PL.150	9	土師器 鉢	飯方、埋没上 完成形	口 底	24.8 10.6	高	12.7	細砂粒・粗砂粒/ 良好/黄褐色	口縁部は横ナデ。体部から底部は手持ちヘラ削り。内面は底部から体部にヘラナデ。
第22200 PL.150	10	須恵器 壺	床面、埋没上 胴部片	口 径	27.0			細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/暗灰黄	ロクロ整形、回転は右回り。胴部下手は回転ヘラ削り。外面胴部上位に腐炭が付着。
第22200 PL.150	11	土師器 甕	床面、飯方、埋 没上 口縁部～胴部上 位片	口 径	16.7			細砂粒・濃/良好/ にぶい赤褐色	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。
第22200 PL.150	12	土師器 甕	カマド 口縁部～胴部上 位片	口 径	19.0			細砂粒・濃/良好/ 明赤褐色	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。
第22200 PL.150	13	土師器 甕	床面、埋没上 底部～胴部下位 片	底 径	4.2			細砂粒/良好/にぶ い褐色	底部と胴部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。
第22200 PL.150	14	土師器 甕	埋没上 底部～胴部下位 片	底 径	6.0			細砂粒/良好/にぶ い黄褐色	底部と胴部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。
第22200 PL.150	15	土師器 不明	埋没上 口縁部片					細砂粒/良好/褐	口縁部は横ナデ、頸部はヘラナデ。頸部に1.5cmの間隙に穿孔。
第22200 PL.150	16	鉄滓	破片	長 幅	3.0 2.0	厚 重	2.5 26.4	//	やや小さな気泡の痕跡が残る。滓質は密。

23号竪穴建物

棟 号 PL.No.	No.	種 類 器 種	出上位置 残 存 率	計測値		胎上/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第22300	1	須臾器 須臾器	床面 口縁部～底部片	口 底	12.6 6.0	高 3.7	細砂粒/還元焰/焼/黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り後ヘラナデ、高台は貼付が剥落。内外面とも焼し焼成。
第22300 PL.150	2	須臾器 筒	床面 1/3	口 底	12.9 6.4		細砂粒/還元焰/灰黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。底部は疑似高台状を呈す。
第22300	3	黒色土器 筒	カマド 口縁部～体部片	口	15.8		細砂粒/還元焰/にふい黄橙	内面黒色処理。ロクロ整形、回転は右回り。内面は口縁部が横方向、体部は斜放射状ヘラミガキ。
第22300 PL.150	4	土師器 甕	カマド 口縁部～胴部上 位片	口	19.8		細砂粒・粗砂粒・ 礫/良好/にふい濁	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。

24号竪穴建物

棟 号 PL.No.	No.	種 類 器 種	出上位置 残 存 率	計測値		胎上/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第22400	1	須臾器 筒	床面 底部～体部片	底	8.6		細砂粒/還元焰/黄 灰	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付が剥落。

25号竪穴建物

棟 号 PL.No.	No.	種 類 器 種	出上位置 残 存 率	計測値		胎上/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第22600	1	土師器 杯	埋没上 1/4	口 底	12.0 7.8	高 3.3	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。器面摩滅のため単位不明。
第22600 PL.150	2	土師器 土師器	床面、掘方 1/3	口 底	12.8 8.2	高 3.7	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。
第22600 PL.150	3	土師器 杯	床面 2/3	口 底	12.7 8.6	高 4.1	細砂粒・粗砂粒/ 良好/にふい黄橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。
第22600 PL.150	4	土師器 杯	床面、掘方 1/3	口 底	14.0 9.2	高 3.9	細砂粒/良好/にふ い橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。器面摩滅のため単位不明。
第22600	5	須臾器 杯蓋	床面 筒～天井部片	筒	4.1		細砂粒/還元焰/黄 灰	ロクロ整形、回転は右回り。天井部は回転ヘラ削り。蓋はボタン状の粘土板を貼付し、端部をやや外に引き出している。
第22600 PL.150	6	須臾器 須臾器	貯蔵穴 完形	口	11.4 5.8	高 3.2	細砂粒・粗砂粒・ 礫/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。
第22600	7	須臾器 杯	掘方 1/4	口 底	12.8 7.4	高 3.0	細砂粒/還元焰/焼/黒濁	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。内外面とも焼し焼成。
第22600	8	須臾器 杯	掘方 1/3	口 底	13.0 6.1	高 3.5	細砂粒/還元焰/浅 黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。
第22600 PL.150	9	須臾器 杯	8溝 1/3	口 底	13.0 7.6	高 2.6	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。
第22600	10	須臾器 杯	掘方 1/4	口 底	13.0 7.8	高 3.2	細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。
第22600 PL.150	11	須臾器 杯	8溝 1/4	口 底	13.0 8.0	高 3.4	細砂粒/還元焰/灰 オリーブ	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。
第22600 PL.151	12	須臾器 筒	床面、掘方 4/5	口 底	13.2 8.1	高 4.6	細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。
第22600	13	黒色土器 筒	口縁部～体部片	口	16.0		細砂粒/還元焰/に ふい濁	内面黒色処理。ロクロ整形、回転は右回り。内面は口縁部が横方向ヘラミガキ。
第22600	14	土師器 甕	掘方、埋没上 底部～胴部下位 片	底	12.1		細砂粒・粗砂粒・ 良好/にふい黄濁	底部と胴部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。底部は平坦面を作る。
第22600	15	土師器 台付甕	掘方 台部片	台	10.2		細砂粒/良好/にふ い濁	台部は甕底部に貼付。内外面ともナデ。
第22600 PL.150	16	土師器 甕	床面、掘方 口縁部～胴部上 位片	口	19.6		細砂粒・礫/良好/ 明赤濁	外面頸部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。
第22600 PL.150	17	土師器 甕	床面、掘方、埋 没上 口縁部～胴部上 位片	口	19.6		細砂粒/良好/にふ い黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。
第22600 PL.150	18	土師器 甕	床面、掘方 口縁部～胴部上 半片	口 胴	20.0 24.0		細砂粒/良好/赤濁	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。

遺物観察表

挿入 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第227図 PL.151	19	土師器 甕	体面 口縁部～胴部上 位片	口 29.2		細砂粒/良好/にぶ い濁	口縁部は横ナデ、胴部は下から頭部に向けての縦方向へラ 削り。内面は胴部にヘラナデ。
第227図	20	土師器 甕(直)	体面 口縁部～胴部上 位片	口 21.6		細砂粒/良好/にぶ い濁	口縁部から頭部は横ナデ、胴部は斜め方向のへラ削り。内 面は胴部にヘラナデ。
第227図 PL.151	21	紡輪		径 4.5 高 2.1 重 58.7		変質デイスイト//	背面側は内端が研ぎ減り、よく研磨されている。これに 対し裏面側は磨き減り、線条痕がよく残る。軸穴は9mmを 測る。
PL.151	22	砥石		長 28.3 幅 19.1	厚 24.4 重 1980.0		粗粒輝石安山岩 角柱状に近い亜角礫を用いる。礫面には凹凸があり、風化 しているが、対ならしきズ3条が残る礫面のみ平坦で、使 用面側には熱ハゼが見られる。このほか、左辺には浅い研 磨痕がある。礫砥石。
第227図 PL.151	23	鉄製品 飾り金具が	一部欠損	長直 径 (5.0) (2.5)	厚 一 重 16.0	//	頭部が丸く作り出されており、釘とは異なる形状をしてい る。体部、脚部は断面四角形。

26号竪穴建物

挿入 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第228図 PL.151	1	須恵器 椀	カマド側方 口縁部～底部片	口 12.4 底 5.8	台 5.8 高 5.9		細砂粒/酸化塩/に ぶい黄褐色	ロクロ整形、回転は右回り。底部の整形技法不明、高台は 貼付。
第228図	2	須恵器 羽釜	カマド側方 口縁部～胴部上 位片	口 19.6 跨 24.2			酸化塩/酸化塩/に ぶい黄褐色	ロクロ整形、回転は右回り。跨は貼付。胴部最大径は跨径 と同等か大きくなる。口唇端部は内傾する平坦面を作る。

27号竪穴建物

挿入 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第229図	1	須恵器 椀	埋没上 口縁部～体部片	口 12.6 底 6.0			細砂粒/還元塩/灰 黄	ロクロ整形、回転は右回り。

28号竪穴建物

挿入 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第232図	1	須恵器 椀	埋没上 口縁部～底部片	口 14.0 底 7.6	台 6.8 高 4.7		細砂粒/還元塩/灰 オリーブ	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切りか、高台は 貼付。
第232図	2	須恵器 椀	体面、掘方 口縁部～体部片	口 12.4			細砂粒/還元塩・ 焼/オリーブ黒	ロクロ整形、回転は右回り。内外面とも焼し焼成。
第232図	3	黒色土器 椀	埋没上、29号建 底部～体部	底 6.4			細砂粒/酸化塩/に ぶい黄褐色	内面黒色処理。ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸 切り無調整。内面は底部から体部までヘラミガキ、器面摩 減のため単位不明。
第232図	4	土師器 小型甕	埋没上 口縁部～胴部上 位片	口 10.9			細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部から頭部は横ナデ、胴部はへラ削り。内面は胴部に ヘラナデ。
第232図 PL.151	5	土師器 甕	カマド 口縁部～胴部上 位片	口 21.8 胴 22.0			細砂粒/良好/明濁	口縁部から頭部は横ナデ、胴部はへラ削り。内面は胴部に ヘラナデ。
第232図	6	須恵器 甕	カマド 底部～胴部下位 片	底 13.0			細砂粒・粗砂粒/ 酸化塩/にぶい黄 褐色	ロクロ整形、回転方向不明。底部はへラ削り、胴部はへラ 削り後ナデ。内面はヘラナデ。

29号竪穴建物

挿入 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第233図 PL.151	1	土師器 杯	体面、埋没上 ほぼ完形	口 12.0 底 8.4	高 3.9		細砂粒/良好/明赤 濁	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへラ削り。
PL.151	2	土師器 杯	埋没上 1/2	口 13.2 底 8.8	高 4.7		細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部は上半がナデ、下半から底部は手持 ちへラ削り。
第233図	3	灰輪陶器 甕	埋没上 胴部下位片				細砂粒/還元塩/灰 白	ロクロ整形、回転は右回り。外面は回転へラ削り後部分的 に縦方向のナデ。内面はヘラナデ。
第233図	4	土師器 甕	カマド、埋没上 口縁部～胴部上 位片	口 21.6 胴 22.8			細砂粒/良好/濁	口縁部から頭部は横ナデ、胴部はへラ削り。内面は胴部に ヘラナデ、器面厚減のため単位不明。

挿入 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第2338	5	土師器 甕	カマド、埋没上 口縁部～胴部上 位片	口 21.8	細砂粒/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。	

第20表 土坑出土遺物観察表

1号土坑

挿入 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第2360	1	須恵器 杯	埋没土 底部～体部片	底 8.0	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転ヘラ起こし後回転ヘラ削り。	

2号土坑

挿入 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第2370	1	須恵器 甕	埋没土 胴部片		細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/黄灰	叩き締め成形。外面は格子目状叩き痕が残る。内面は同心円状アノ子具痕が残るが、頸部よりは回転ヘラナデで消されている。	

4号土坑

挿入 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第2370 PL.151	1	須恵器 椀	底面 3/4	口 13.3 底 6.7	台 5.4 高 5.0	細砂粒・粗砂粒/ 褐色粒/酸化焰/稍	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付。
第2370 PL.151	2	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴部上 位片	口 17.6	細砂粒/良好/橙	ロクロ成形。口縁部から頸部は横ナデ、頸部下にナデ部分が残り、胴部上位はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。	

6号土坑

挿入 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第2380	1	須恵器 甕	埋没土 底部～体部片	底 7.1 台 7.1	細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付。	

9号土坑

挿入 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第2380 PL.151	1	須恵器 椀	埋没土 1/2	口 13.5 底 6.1	台 5.4 高 5.3	細砂粒・粗砂粒/ 酸化焰/浅黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付。外面底部に傷書、判読不能。

10号土坑

挿入 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第2380 PL.151	1	須恵器 椀	埋没土 1/2	口 12.2 底 6.4	高 3.9	細砂粒/酸化焰/明 黄褐色	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。
第2380	2	須恵器 鉢	埋没土 口縁部～体部片	口 29.8	細砂粒・粗砂粒・ 褐色粒/酸化焰/に ぶい黄	ロクロ整形、回転方向不明。体部は内外面ともヘラナデ。口唇部は水平、端部を上下に引き出している。	

12号土坑

挿入 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第2390	1	須恵器 杯	埋没土 1/4	口 11.6 底 3.8	高 3.3	細砂粒・粗砂粒/ 酸化焰/にぶい黄 橙	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。
第2390 PL.151	2	須恵器 甕	埋没土 1/2	口 12.9 底 7.0	台 6.6 高 4.9	細砂粒・粗砂粒/ 酸化焰/にぶい黄 橙	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付。高台端部に乾燥時の置き台と見られる痕跡が残る。
第2390	3	須恵器 壺	B段 口縁部～胴部片	口 10.4 胴 25.2	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/濁灰	甕の口縁部を取り除き、頸部を磨り磨く再調整をしている。ロクロ整形、回転は右回り。胴部下半は回転ヘラナデ。	
第2390 PL.151	4	鉄滓	破片	長 3.3 幅 3.0	厚 1.0 重 10.6	//	材質は密でわずかに発色が見られる。確はわずかに確認できる。

13号土坑

挿入 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第2390 PL.151	1	須恵器 杯	埋没土 ほぼ完形	口 12.4 底 7.8	台 8.3 高 4.8	細砂粒/還元焰/黄 灰	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転ヘラナデ、高台は貼付。

14・15号土坑

挿入 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第2400	1	須恵器 椀	底面 1/3	口 13.2 底 6.0	高 3.8	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/橙/黄灰	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。内外面とも横ナデ焼成。

遺物観察表

16号十坑

挿入 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第23904 PL.151	1	製作地不詳 陶器 灯火受皿	1/3	口 底	13.9 (3.6)	高 1.9	灰白//	上面に貫入の入る灰輪。下面は無輪で下半を回転段時削り。	19世紀中頃に以降

19号十坑

挿入 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第24006	1	須恵器 碗	底面 1/3	口 底	13.2 6.0	高 3.8	細砂粒・粗砂粒/還元焰・黄灰	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。内外面とも種し焼成。	
第24006	2	黒色土器 碗	埋没土 口縁部片	口	13.0		細砂粒/酸化焰/粗	内面黒色処理。ロクロ整形、回転は右回り。内面は横方向のヘラミガキ。	
第24006	3	黒色土器 碗	埋没土 口縁部片	口	13.0		細砂粒/酸化焰/粗	内面黒色処理。ロクロ整形、回転は右回り。内面は横方向のヘラミガキ。	
第24006	4	土師器 甕	底面 口縁部片	口	19.0		細砂粒/良好/にぶい	口縁部は横ナデ。	

第21表 溝出土遺物観察表

5・6号溝

挿入 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第24206	1	須恵器 碗	埋没土 底部～体部片	底 台	7.4 7.0		細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付。	
第24206	2	須恵器 碗	埋没土 底部～体部片	底 台	8.2 8.0		細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/黄灰	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付。	
第24206	3	須恵器 羽釜	埋没土 口縁部～胴部上 位片	口 径	15.8 20.0		細砂粒/還元焰/灰 黄緑	ロクロ整形、回転は右回り。踵は貼付。	
第24206	4	須恵器 甕	埋没土 口縁部片	口	20.1		細砂粒/酸化焰ざ み/灰黄	ロクロ整形、回転方向不明。口唇部は櫛状工具による整形、口縁部はヘラナデカ。	

7号溝

挿入 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第24406	1	土師器 杯	埋没土 口縁部～体部片	口	12.8		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
第24406 PL.151	2	須恵器 杯	埋没土、 (5・6)溝 3/4	口 底	10.6 4.5	高 4.0	細砂粒・粗砂粒/ 酸化焰ざみ/黄橙	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第24406	3	須恵器 碗	埋没土 底部～体部片	底 台	6.4 5.7		細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付。	
第24406	4	須恵器 甕	埋没土 口縁部片	口	27.6		細砂粒・粗砂粒/ 黄/還元焰/灰	ロクロ整形、回転は右回り。口唇部は上に引き出され、口唇部下の幅狭い内面は貼付カ。	

8号溝

挿入 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第24506 PL.151	1	須恵器 杯	埋没土 口縁部～体部片	口	13.8		細砂粒/還元焰/灰 黄	ロクロ整形、回転は右回り。	
第24506 PL.151	2	須恵器 碗	埋没土 1/3	口 底	14.3 6.5	台 高	6.2 5.1	細砂粒/酸化焰/灰 黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付。高台端部に乾燥時の置き台と見られる痕跡が残る。

第22表 遺構外出土遺物観察表

遺構外(1区)

挿入 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第24806	1	黒色土器 碗	カクラン 底部～体部片	底	6.6		細砂粒/酸化焰/に ぶい黄橙	内面黒色処理。ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。内面は底部に一定方向、体部に放射状ヘラミガキ。	
第24806 PL.152	2	瓦 平瓦	谷地B調下 一部片				細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/黄灰	粘土を板状に重ねあわせて成形。上面には布目、裏面は板叩き痕が残る。側面はヘラ削り。	
第24806 PL.152	3	石蔵		長 幅	-2.2 -1.2	厚 重	-0.4 0.6	チャート//	完成状態。表裏面とも丁寧な押圧剥離。右辺は裏面側に近い形状を呈す。器体下半部の欠損面は平坦で、素材剥片剥離時にさかのぼるような古い打撃が原因している可能性が高い。形態不明。

遺構外(2区)

採掘 PL.No.	No.	種 器 種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第24906 PL.152	1	石蔵		長 幅	2.5 1.6	厚 重	0.5 1.0	黒曜石// 完成状態。裏面に加工前の剥離面があるほか、丁寧に全面加工。背面側先端に焼熱剥離面を残す。凹基無蓋跡。	
第24906 PL.152	2	石蔵		長 幅	(2.6) (1.6)	厚 重	0.5 1.3	細粒輝石安山岩// 完成状態。側縁は直線的で、石器基部の作出は浅く抉る程度で、返し部は浅い。凹基無蓋跡。	
第24906 PL.152	3	石蔵		長 幅	(2) (1.3)	厚 重	0.4 0.6	黒曜石// 完成状態。側縁は直線的で、石器基部両端を欠く。残存状況からみて石器基部は深く抉り込まれ、逆U字状を呈するものと見られる。凹基無蓋跡。	
第24906 PL.152	4	石核		長 幅	3.4 5.1	厚 重	3.7 72.4	玉髓// 上下面に大きな分割面が、裏面側左辺には広い接触面が残る。剥片剥離は内端の分割面より行われ小形剥片を剥離する。夾雑物の少ない良質石材。	
第24806 PL.152	5	石核		長 幅	11.6 12.3	厚 重	12.0 1633.7	黒曜石// 上面および正面で、長さ5～8cmの幅広剥片を剥離する。裏面側は自然面で石核消費の初期段階にある。表裏内面と左側面部分使用は確実、右側面は光沢に乏しく、整形段階に留まる可能性が高い。形状が整う下層側は折断整形、不規則な破断面となる上層側は破損した可能性が高い。手持ち砥石。	
第24906 PL.152	6	砥石		長 幅	4.6 3.1	厚 重	2.3 55.8	砥沢石//	

遺構外(3区)

採掘 PL.No.	No.	種 器 種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考		
第25006 PL.152	1	燧土石器 深鉢	6区建掘方				粗・繊維・白色粒/ 良好/浅黄褐色	体部下平。無刃Rが横位に施される。内面研磨を加える。	前期中葉	
第25006 PL.152	2	須臾器 杯	埋没上 ほぼ完形	口 底	7.5 4.4	高	3.5	細砂粒/酸化塩/明 視	口ロコ整形。回転は左回り。底部は回転糸切り無調整。	
第25006 PL.152	3	灰輪陶器 段輪	埋没上 底部～体部片	口 底	8.8 8.4			微砂粒/還元塩/浅 黄	口ロコ整形。回転は右回り。底部は回転ヘラナデ、高台は貼付。施軸方法は潰け潰け。	大原2号窯式 期
第25006 PL.152	4	須臾器 羽釜	埋没上 口縁部～胴部上 位片	口 前後	40mm			細砂粒・粗砂粒/還 元塩/明視	口ロコ整形。回転は右回り。跨は貼付。胴部はヘラナデ。口唇縁部は外形する平坦面を作る。	
第25006 PL.152	5	砥石		長 幅	11.3 4.0	厚 重	2.5 120.2	砥沢石//	四面使用。各面とも砥面は磨ぎ減り、裏面側砥面に縦位の浅い溝状研磨痕がある。上層側は折断後、形状を整える。手持ち砥石。	
第25006 PL.152	6	鉄製品 鎌か	破片	長 幅	(3.8) (2.1)	厚 重	0.3 5.7	//	鎌の未製品となるか。やや薄くなっているが、錆に覆われており詳細不明。	
第25006 PL.152	7	鉄製品 棒状製品	破片	長 幅	4.6 0.7	厚 重	0.7 4.3	//	一方の端部が尖る。もう一方は欠損している。断面は丸く、新しい時代の遺物の可能性も考えられる。	
第25006 PL.152	8	鉄製品 釘	1/2か	長 幅	(6.0) 1.3	厚 重	0.6 6.3	//	体部の一部が欠損している。接合関係は確認できない。断面四角形。	
第25006 PL.152	9	鉄製品 釘	破片	長 幅	2.8 0.5	厚 重	0.6 3.1	//	体部のみが残存する。断面形状は四角い。	
第25006 PL.152	10	鉄製品 不明	破片	長 幅	5.0 0.6	厚 重	0.6 4.8	//	一方の端部はやや細くなる。断面形状は丸く詳細不明。	
第25006 PL.152	11	鉄製品 不明	破片	長 幅	3.8 0.4	厚 重	0.6 4.1	//	体部のみが残存する。やや丸みを帯びた断面形状となっている。	

遺構外(4区)

採掘 PL.No.	No.	種 器 種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考		
第25106 PL.152	1	土師器 大型杯	埋没 底部～体部片	底	10.0			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
第25106 PL.152	2	土師器 鉢	埋没 口縁部～体部片	口	20.0			細砂粒/酸化塩/明 赤褐	口ロコ整形。回転は右回り。口唇部は上下に引き出されている。	
第25106 PL.152	3	土師器 甕	埋没、CⅡ 口縁部～胴部片	口	25.4 27.6			細砂粒・粗砂粒/良 好/灰褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。	
第25106 PL.152	4	鉄製品 鎌	一部欠損	長 幅	11.4 2.6	厚 重	0.4 28.9	//	耳部分が欠損しているが、埋藏中に既に残存していなかった。わずかに耳の形状につながる立ち上がりのように見られる。	

遺物観察表

遺構外(5区)

採 掘 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第2528区 PL.152	1	縄文土器 深鉢	2～7溝 体部破片				糠・石英・輝石・角 安・白色粒/良好/ 灰色	縦位R.Lが施される。内面平滑な横位撫で調整	後期前葉
第2528区 PL.152	2	龍泉系青 磁 鍋連弁文碗	口縁部片	口 底 -	高 -		灰白色//	外面片彫りによる鍋連弁文。内外面青磁釉。大宰府分類「青 磁碗II B類」。	13世紀前半
第2528区 PL.152	3	肥前磁器か 染付碗	1/5	口 底 -	高 -		白色//	器高が低い端反碗。外面染付。内面無文。	19世紀前葉～ 中葉
第2528区 PL.152	4	中国白磁 碗	口縁部1/8	口 底 -	高 -		白色//	肉厚の玉縁口縁。大宰府分類「白磁碗IV類」。As-B下出上。	11世紀後半～ 12世紀初
第2528区 PL.152	5	常滑陶器 片口鉢	口縁部1/8	口 底 -	高 -		灰白//	口縁部薄い玉縁状を呈する。片口鉢I類。	13世紀中葉～ 後葉
第2528区 PL.152	6	在地系土器 内耳鍋	口縁部片	口 底 -	高 -		橙、にぶい橙//	片岩由来と考えられる雲母状鉱物含む。内面側はにぶい橙 色。外面側は橙色。頸部付近外面器表は黒色。口縁部やや 内湾。	15世紀後半
PL.152	7	8混上一括 火打石?	長 幅	3.1 4.7	厚 重	1.7 29.7	玉髓	エッジはシャープで、明確な最打痕はない。粗く結晶化し た薄層を挟み、不純物の少なく良質石材の部類に入る。薄 板状を呈す。	

第3節 向原IV遺跡

〔概要〕 遺跡は、下高田稲荷谷Ⅱ遺跡の北740mほどの位置にあり、安中市と富岡市(旧妙義町)との行政区境にあたる。第一次調査の北側調査区では近世の畑、平安時代の土坑6基・ピット53基・溝5条、ローム暗色帯中より旧石器時代の石器群が検出された。続いて第二次調査の南側調査区では、近世の畑・溝、平安時代の牧に伴う大型の溝とピット14基、旧石器時代の石器群5カ所などが検出された。

第1項 畑・溝

〔畑〕 第一次調査区、および第二次調査区において、天明3(1783)年の浅間山噴火に伴い降灰した浅間A軽石(As-A)を、復興のため畑の隅に寄せ集めた「灰かき山」が検出され、その直下より被災前の畑の畝も検出された。

以下に個々の遺構についての詳細を記す。

1号畑 第253図 PL.96・153

位置：466-316周辺

規模：巾3m×長12m

畝：巾0.25~0.45m

サク：巾0.1~0.35m

走行：SSE-NNW

埋没土：As-A純層・同二次堆積

重複：なし

遺物：埋土中よりNo.1 陶胎染付碗、No.2 瀬戸・美濃碗、No.3 同片口鉢、No.4 鉄製品鏝が出土する。

特徴：第一次調査区の北寄りに在り、北側は後世の耕作により逸する。南北走行の畑の南限に当たり、天明3(1783)年の浅間山噴火に伴い降灰したAs-Aを復興のため畑の隅に寄せ集めた「灰かき山」の直下より検出される。被災直前の畑の一部と推察されるが、栽培の有無や栽培種の特定は難しい。本溝の時期については、遺構直上を覆う浅間A軽石(As-A)の降下年代より、江戸時代中期頃と推定される。

9号溝 第253図

(旧1号畑 溝番号なし)

位置：466-316周辺

規模：巾0.35~1.10m×長12m

断面形状：U字形

走行及び底面標高：W248.23m-E248.09m

埋没土：多量のAs-A

水流痕跡：なし

重複：なし

遺物：なし

特徴：1号畑に沿い、直線的で水流の痕跡が確認されないことから、作業道を兼ねた1号畑の南限を画する溝と推察される。本溝の時期については、直上に堆積した浅間A軽石(As-A)の降下年代より、江戸時代中期頃と推定される。

2号畑 第254図 PL.97

位置：355-329周辺

規模：巾4.5m長4.5m

畝：巾0.05~0.2m

サク：巾0.15~0.35m

走行：E-W

埋没土：As-A純層・同二次堆積

重複：なし

遺物：なし

特徴：第二次調査区の南端部に在り、東西走行の畑の北西端に当たる。天明3(1783)年の浅間山噴火に伴い降灰したAs-Aを復興のため畑の隅に寄せ集めた「灰かき山」の直下より検出され、被災直前の畑の一部と推察されるが、栽培の有無や栽培種の特定は難しい。本溝の時期については、遺構直上を覆う浅間A軽石(As-A)の降下年代より、江戸時代中期頃と推定される。

10号溝 第254図

(旧2号畑 溝番号なし)

位置：356-330周辺

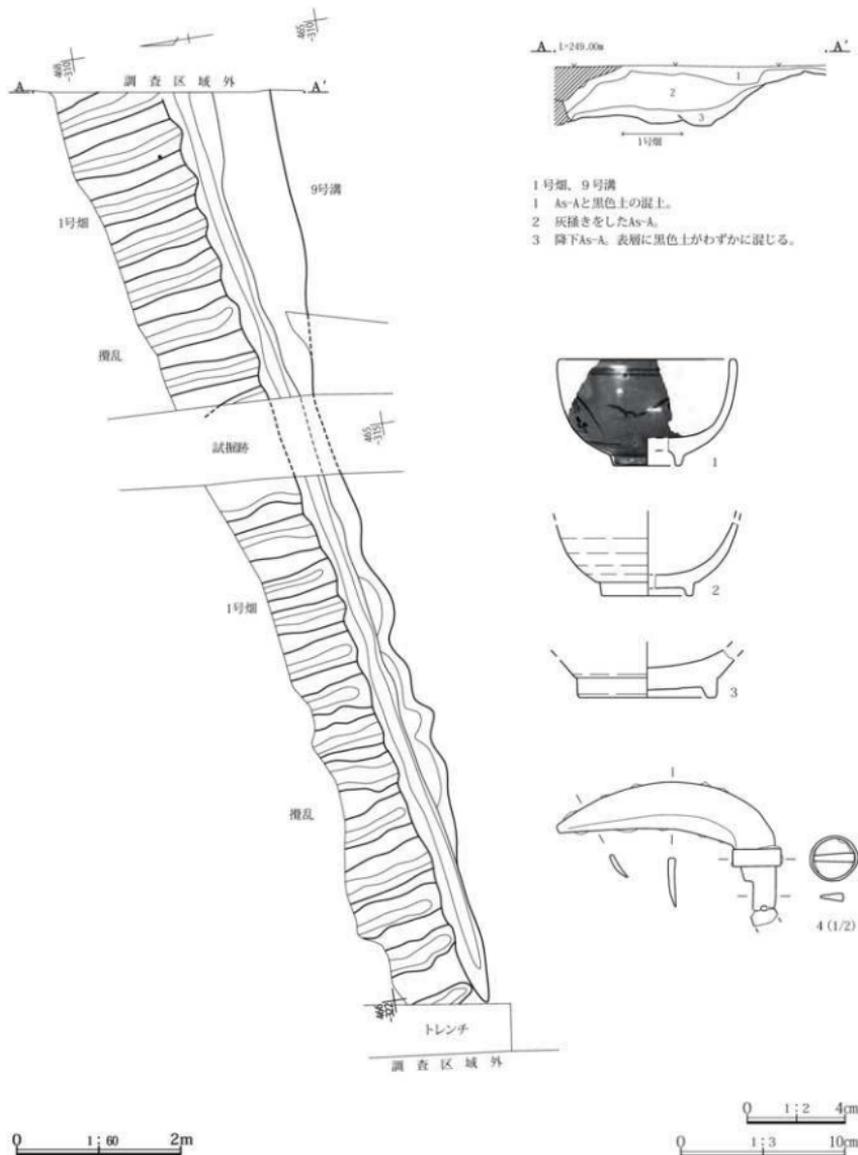
規模：巾0.45~0.85m×長9.5m

断面形状：U字形

走行及び底面標高：NE-SW

第2章 検出された遺構と遺物

1号畑・9号溝



第253図 1号畑、9号溝平・断面図及び1号畑出土遺物

埋没土：多量のAs-A

水流痕跡：なし

重複：なし

遺物：なし

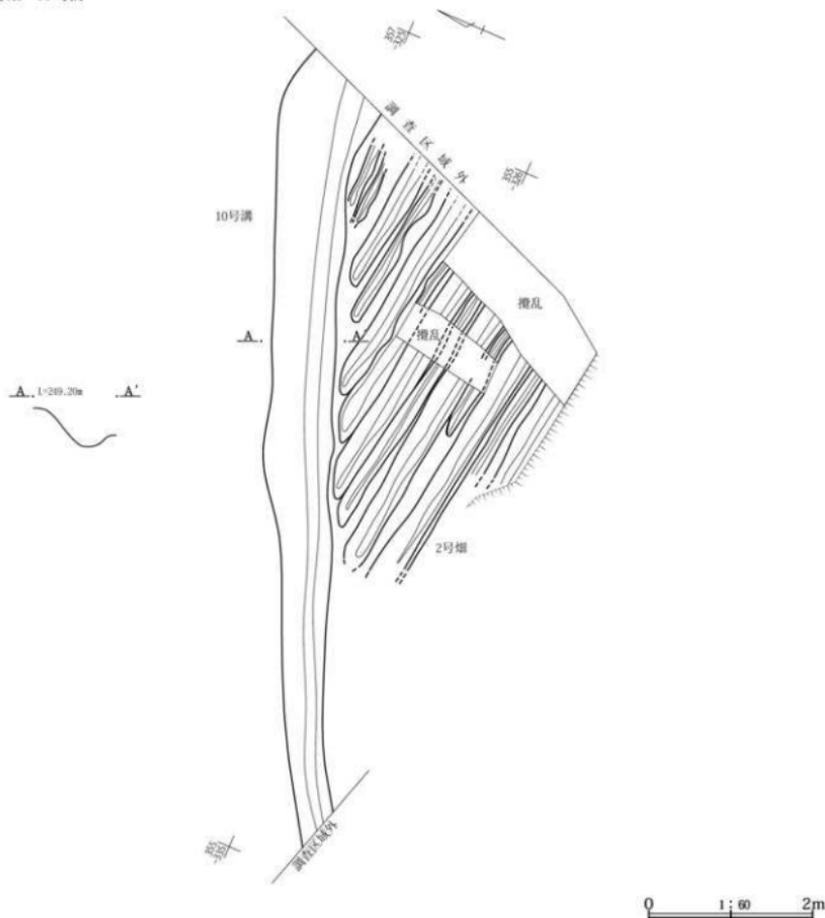
特徴：2号畑に沿いやや湾曲する。水流の痕跡は認められず、作業道を兼ねた2号畑の北西限を画する溝と推察

される。本溝の時期については、直上に堆積した浅間A軽石(As-A)の降下年代より、江戸時代中期頃と推定される。

埋没土：多量のAs-A

水流痕跡：なし

2号畑・10号溝



第254図 2号畑、10号溝平・断面図

[溝] 第一次・第二次調査において、都合10条の溝が検出される。北側の第一次調査区で検出された1～5号溝はすべて東西方向に走行する。1号溝は、埋土中に浅間B軽石(As-B)が散見され、検出状態からも他の溝より埋没時期が少し新しいものと思われる。2号溝のみが勾配と埋土から水路と推察され、1・3～5号溝は勾配が少なく水流の痕跡も認められないことから、区画目的の溝である可能性が高い。南側の二次調査区で検出された6号溝は、7号溝と並行するものの、埋土から近世の溝と推定され、7号溝との関連性はない。

本線部で検出された東西方向に走る7号溝と、拡張部で検出された南北走行の8号溝は、共に上巾が4m強の大型の溝で、埋土の最終段階にAs-Bの堆積が確認される。両溝は、調査区域外でL字状に結合すると推察され、7号溝の西側は隣接の真光寺原遺跡検出のM-1号溝に、8号溝の北側は向原Ⅲ遺跡検出のM-1号溝にそれぞれ接続し、横野台地一帯で検出されている古代の牧(放牧地)に伴う外周溝の一部と推察される。(第259図参照)

9・10号溝は、調査時には番号が付与されていないが、共にAs-A埋没畑に伴う近世遺構と判断される。

以下に個々の遺構についての詳細を記す。

1号溝 第255図 PL99

位置：465-317周辺

規模：巾0.25～0.85m×長11.5m

断面形状：U・V字形

走行及び底面標高：W248.17m—E248.16m

埋没土：As-Bを含む

水流痕跡：なし

重複：なし

遺物：なし

特徴：第一次調査区の北寄りに在り、5号溝と並行する。直線的に走行し、勾配がないことから、水路ではなく区画目的の溝と推察される。底面には掘削時の工具(鏝)痕が残る。本溝の時期については、埋土中に浅間B軽石(As-B)が散見されることから、平安時代と推定される。

5号溝 第255図 PL100

位置：465-317周辺

規模：巾0.35～0.50m×長6.3m

断面形状：皿状

走行及び底面標高：W248.10m—E247.98m

埋没土：暗褐色砂質土

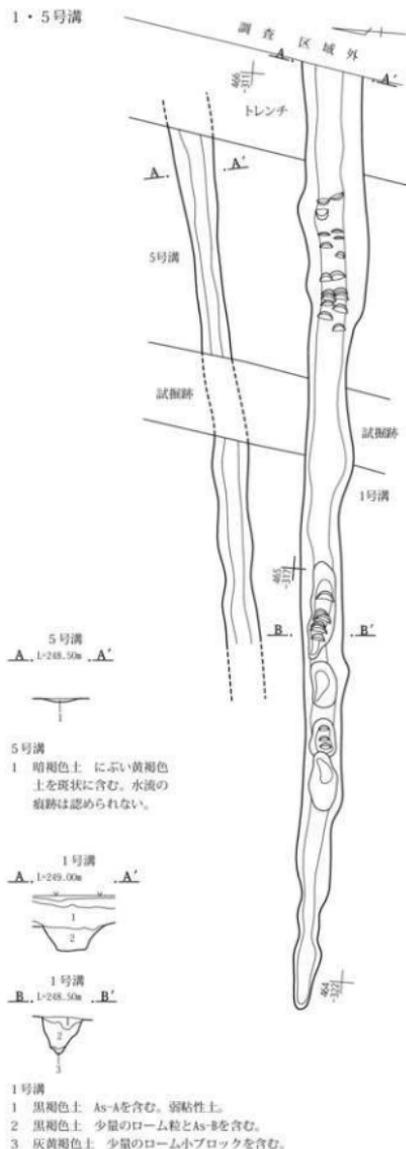
水流痕跡：なし

重複：なし

遺物：なし

特徴：第一次調査区の北寄りに在り、1号溝と並行する。直線的に走行し、勾配があまりないことから、水路ではなく区画目的の溝と推察される。上面の削平により遺存状態は悪く、西側を逸する。本溝の時期については、埋土中にAs-Bが認められないことから、1号溝に先行する時期と推定される。

1・5号溝



2号溝 第255図 PL.99

位置：479-310周辺

規模：巾0.4～0.5m×長3.8m

断面形状：皿状

走行及び底面標高：E 247.69m→W247.60m

埋没土：埋土中にAs-B

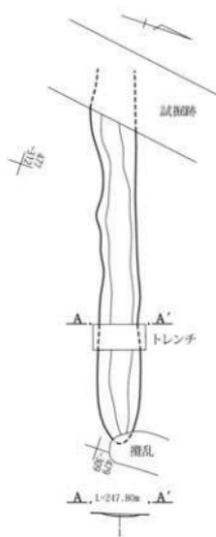
水流痕跡：あり

重複：なし

遺物：なし

特徴：第一次調査区の北寄りに在り、直線的で若干の勾配が認められることから、水路と推察される。上面の削平により遺存状態は悪く、西側を逸する。本溝の時期については、埋土中にAs-Bが認められるため、平安時代と推定される。

2号溝



第255図 1・5号溝、2号溝平・断面図

3号溝 第256図 PL.99

位置：495-308周辺

規模：巾0.2~0.4m×長3.8m

断面形状：U字形

走行及び底面標高：W247.04m-E247.00m

埋没土：多量のAs-Bを含む

水流痕跡：なし

重複：なし

遺物：なし

特徴：第一次調査区の北端部に在り、4号溝と並行する。直線的に走行し、勾配がないことから、水路ではなく区画目的の溝と推察される。本溝の時期については、埋土中にAs-Bが認められることから、平安時代と推定される。

4号溝 第256図 PL.100

位置：493-310周辺

規模：巾0.65~2.0m×長9.7m

断面形状：皿状

走行及び底面標高：W246.99m-E246.91m

埋没土：多量のAs-Bを含む

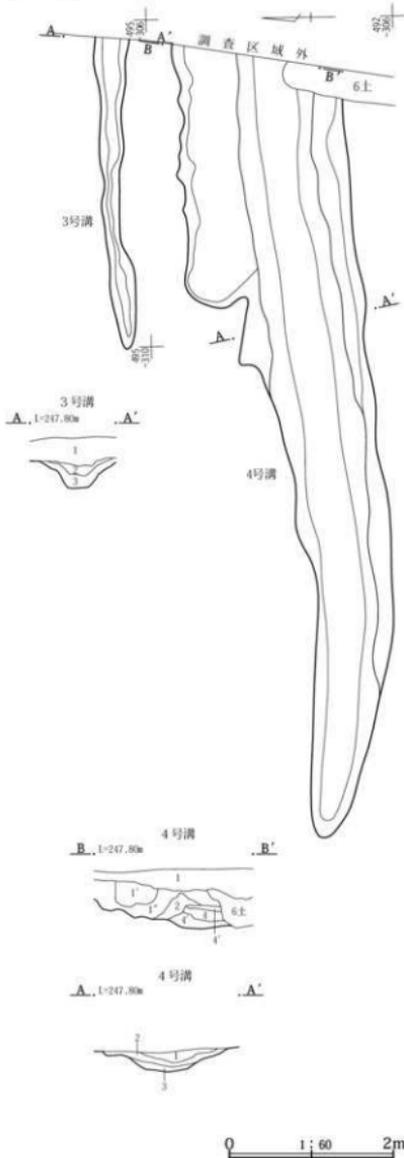
水流痕跡：なし

重複：6号土坑と重複し、本溝の方が古い。

遺物：なし

特徴：第一次調査区の北端部に在り、3号溝と並行する。直線的に走行し、勾配がないことから、水路ではなく区画目的の溝と推察される。本溝の時期については、埋土中にAs-Bが認められることから、平安時代と推定される。

3・4号溝



3号溝、4号溝 B-B'

- 1 黒褐色土 As-A混上。As-Aは比較的密度高い。
- 1' かなり高密度で粒径大きい。
- 1'' 小粒で粘性土と互層状。
- 2 暗褐色土 ややしまりある粘性土。バミスの混入少ない。
- 3 暗褐色土 As-B混上。
- 4 暗褐色土 As-B混上。最もAs-Bの密度高く、細粒の川砂のような層を作る部分あり。灰は見られず一次堆積ではない。
- 4' やや粗粒のAs-Bの混じる非粘性土層。

4号溝 A-A'

- 1 灰黄褐色土 二次堆積の細かなAs-Bを多量に含む。非粘性土。
- 2 黒褐色土 黒色土と1層土の混上。黒色土は南側から混入。
- 3 細かなバミス多く、底面付近に二次堆積火山灰が見られる。

第256図 3・4号溝平・断面図

6号溝 第257図 PL.100

位置：372-329周辺

規模：巾0.65~1.70m×長22.0m

断面形状：U字形

走行及び底面標高：不明

埋没土：多量のAs-A

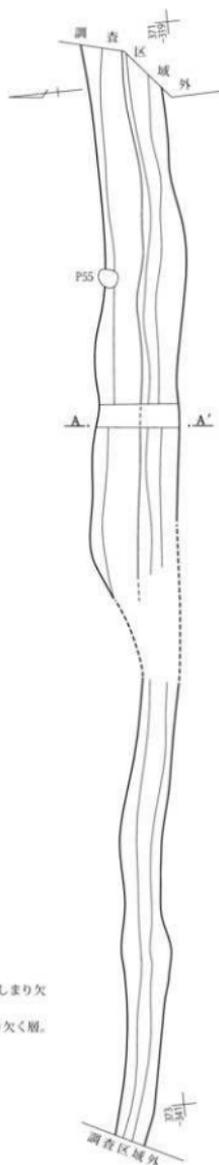
水流痕跡：なし

重複：なし

遺物：なし

特徴：第二次調査区に在り、直線的で水流の痕跡が確認されないことから、区画のための溝と推察される。7号溝と並行するが、関連性はないものと思われる。本溝の時期については、埋土の最終段階に堆積した浅間A軽石(As-A)の降下年代より、近世と推定される。

6号溝



6号溝

- 1 黒褐色土 少量のAs-Aを含む。
- 2 にぶい黄褐色土 ロームブロックを含む。
- 3 暗褐色土 中央に密度の高い二次堆積As-Aを含む、ややしまり欠く層。
- 4 暗褐色土 ローム小ブロックを不均等に含む、ややしまり欠く層。

0 1:60 2m

0 1:100 5m

第257図 6号溝平・断面図

7号溝 第258・259図 PL.101・103

位置: 376-327周辺

規模: 巾4.5m×長23m×深度1.5m 北西端部は攪乱により失われる。

断面形状: 逆台形～椀形

走行及び底面標高: W250.04m-E250.03m

埋没土: 埋没の最終段階にAs-B純層を含む。両端の立ち上がり部が攪乱を受け不明。

水流痕跡: なし

重複: なし。溝肩部や底部に検出されたピット・土坑については、重複ではなく本溝に伴う遺構と判断される。

遺物: なし

特徴: 第二次調査区の中程に在り、東西方向に直線的に走行し、勾配はない。東側で検出された南北方向に走る8号溝と、南側調査区外において直角に接続し、全体ではL字状の溝となる。本溝の時期については、埋土の最終段階に浅間B軽石(As-B)の堆積が見られることから、平安時代と推定される。

本溝の西側は、隣接する真光寺原遺跡(平成12年度安中市教育委員会調査)検出のM-1号溝に接続し、西向原遺跡へと続く、古代の牧(放牧地)に伴う長大な溝の東端部となるものと推察される。

8号溝 第258・259図 PL.102・103

位置: 380-292周辺

規模: 巾4.3~4.5m×長8.2m×深度1.2m

断面形状: 逆台形～椀形

走行及び底面標高: N250.20m-W250.23m

埋没土: 埋没の最終段階にAs-B純層を含む。上面は近世の耕作により削平され、土塁状の盛り土の痕跡は不明。

水流痕跡: なし

重複: なし

遺物: なし

特徴: 第二次調査区の拡張部東端に在り、南北方向に直線的に走行し、勾配はない。本溝の時期については、埋土の最終段階に浅間B軽石(As-B)の堆積が見られることから、平安時代と推定される。南側調査区外において7号溝と直角に接続し、全体ではL字状の溝と考えられる。また、本溝の北側は、隣接する向原Ⅲ遺跡(平成18年度安中市教育委員会調査)検出のM-1号溝に接

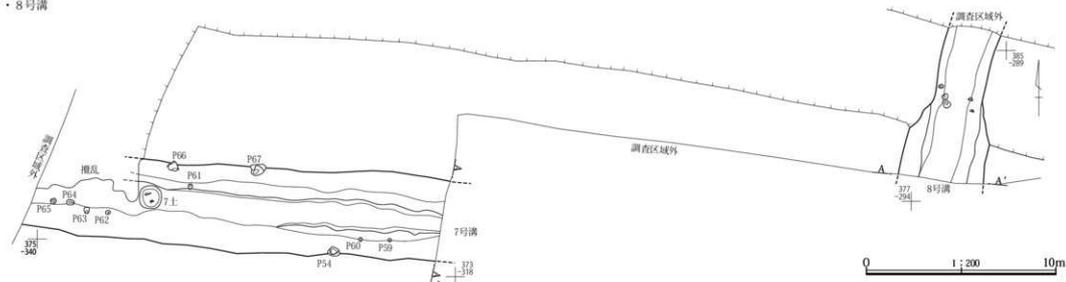
続する。

本遺跡の本線部南端で検出された東西方向に走る7号溝と、拡張部で検出された南北走行の8号溝は、共に上巾が4m強、深度1.2~1.5mを測る大型の溝で、埋土の最終段階にAs-Bの堆積が確認された。両溝は南東の調査区域外でL字状に結合すると推察される。7号溝の西側は、隣接の真光寺原遺跡検出のM-1号溝に、8号溝の北側は、向原Ⅲ遺跡検出のM-1号溝にそれぞれ接続し、両遺跡で検出されている横野台地一帯に広がる古代の牧(放牧地)に伴う外周溝の一部となることが確認された。(第259図参照)

この牧(放牧地)は、碓氷川と高田川に挟まれた東西に伸びる細長い横野台地上一帯に、延長9km以上に及ぶ大溝により区画された広大なものであるが、史料には比定できる御牧(官牧)がないことから、推定地不明の御牧、史料にはない官・私牧、『延喜式』以前に廃絶した牧のいずれかであった可能性と、東山道駅跡の碓氷郡内に設置された坂本・野後のふたつの駅家との関連が指摘されている。

本遺跡の調査では、この牧(放牧地)について新たな知見に至るものは無く、区画溝の南東端の一部を検出したに留った。

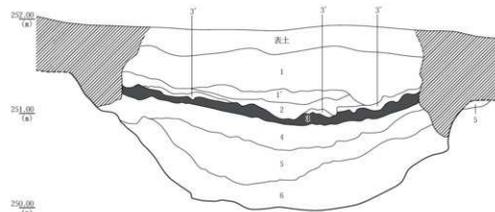
7・8号溝



A, L=252.50m

7号溝

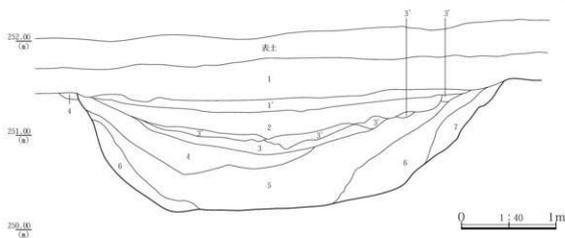
A'



A, L=252.50m

8号溝

A'



7号溝

表土 黒褐色砂質土。

1 黒褐色土 ややしりある弱粘性土。φ2～5mm大のAs-Aハミスを不均等に多く含む耕作土。

1' やや赤色味を帯び、φ1～2mm大のハミス (As-A・As-B) を少量含む。しりやや強。

2 黒色土 φ1～2mm大のAs-Bハミスをおおむね含む緻密土。弱粘性土。

3 一時堆積のAs-B層。下層で火山灰層が見られるが層厚は数mm程度。

3' やや赤色味を帯びた暗褐色土。細粒のAs-Bを多量に含む。しりあり。粘性なし。

4 灰褐色土 YPを不均等に少量含む。ややしりある弱粘性土。ローム小ブロックが若干混じる。

5 暗褐色土 ローム上説入。YP・SPを多く含む。しりある弱粘性土。

6 褐色土 ローム上の混入多く、YP・SPを不均等に多く含む。しりある弱粘性土。底面付近ではブロック状のローム上混入多。

8号溝

表土 黒褐色砂質土。

1 黒褐色土 ややしりある弱粘性土。φ2～5mm大のAs-Aハミスを不均等に多く含む耕作土。

1' やや赤色味を帯び、φ1～2mm大のハミス (As-A・As-B) を少量含む。しりやや強。

2 黒色土 φ1～2mm大のAs-Bハミスをおおむね含む緻密土。弱粘性土。

3 一時堆積のAs-B層。下層で火山灰層が見られるが層厚は数mm程度。

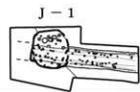
3' やや赤色味を帯びた暗褐色土。細粒のAs-Bを多量に含む。しりあり。粘性なし。

4 灰褐色土 YPを不均等に少量含む。ややしりある弱粘性土。ローム小ブロックが若干混じる。

5 暗褐色土 ローム上説入。YP・SPをやや多く含む。しりある弱粘性土。

6 褐色土 ローム上の混入多く、YP・SPを不均等に多く含む。しりある弱粘性土。底面付近ではブロック状のローム上混入多。

7 黒褐色土 東壁脚に見られる黒色味帯びる土。YP細粒をやや多く含む。ややしりある弱粘性土。



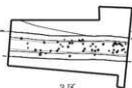
1区



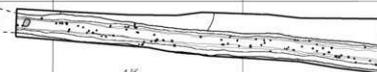
2区

真光寺原遺跡

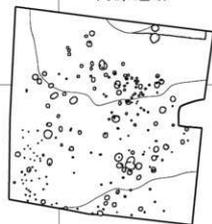
M-1号溝



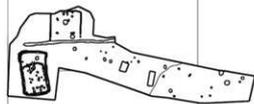
3区



4区

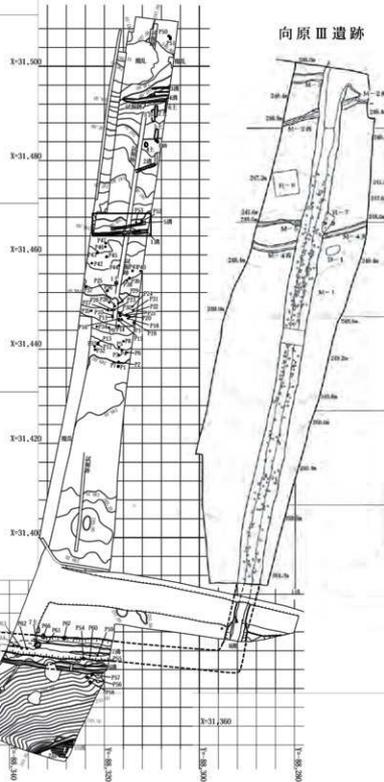


向原遺跡



向原II遺跡

向原IV遺跡



向原III遺跡

第259图 周辺遺跡合成図

第2項 ビット・土坑 第260～265図

〔ビット・土坑〕 第一次調査区より53基、第二次調査区より14基、都合67基のビットが検出される。この内、前

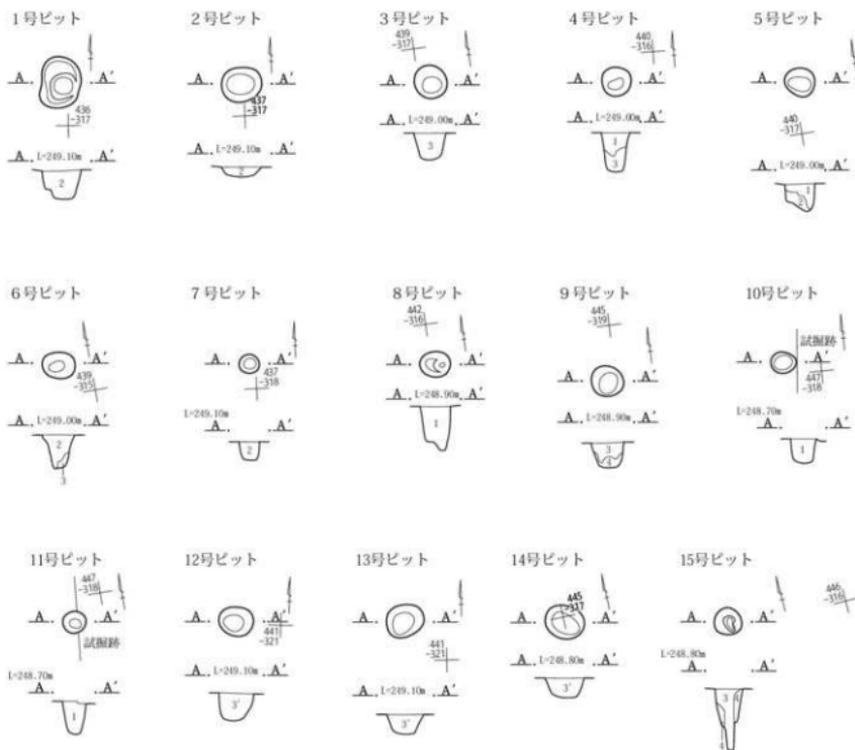
掲の7・8号溝内に設けられたビットは、柵などの牧に伴う遺構である可能性が高い。以下に検出された土坑・ビットの計測表を記す。

第23表 ビット計測表

名 称	区	写真番号	位置(X-Y)	平面形状	断面形状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	重複遺構	備 考
1号ビット		PL.107	436-316	隅丸長方形	逆台形状	42	31	23		
2号ビット		PL.107	437-316	楕円形	皿状	33	29	8		1～3・5号は間隔が不揃いながら、南北軸に並ぶ。 延長上に14・15・16号
3号ビット		PL.107	438-316	ほぼ円形	U字状	28	27	22		
4号ビット		PL.107	439-316	ほぼ円形	U字状	25	24	32		
5号ビット		PL.107	440-316	楕円形	不明	25	23	22		
6号ビット		PL.107	439-315	楕円形	V字状	27	21	27		
7号ビット		PL.107	437-317	円形	U字状	17	16	15		
8号ビット		PL.107	441-315	楕円形	V字状	25	21	36		
9号ビット		PL.108	444-318	ほぼ円形	U字状	27	25	20		
10号ビット		PL.108	447-318	楕円形	U字状	21	18	20		
11号ビット		PL.108	446-318	円形	V字状	19	18	27		
12号ビット		PL.108	440-321	楕円形	U字状	28	24	23		
13号ビット		PL.108	441-321	楕円形	逆台形状	31	26	16		
14号ビット		PL.108	444-316	楕円形	逆台形状	32	27	16		
15号ビット		PL.108	445-316	円形	不明	23	23	50		14～16号は間隔が不揃いながら、南北軸に並ぶ。 延長上に1～3・5号
16号ビット		PL.108	446-316	楕円形	不明	26	18	27		
17号ビット		PL.109	446-316	円形	皿状	36	35	10		
18号ビット		PL.109	446-314	楕円形	U字状	24	21	17		
19号ビット		PL.109	445-313	楕円形	U字状	40	34	24		
20号ビット		PL.109	446-314	楕円形	不明	26	25	22		
21号ビット		PL.109	447-315	楕円形	不明	39	38	23		
22号ビット		PL.109	446-316	楕円形	不明	36	33	32		
23号ビット		PL.109	448-317	楕円形	V字状	20	14	26		
24号ビット		PL.109	449-314	円形	U字状	17	16	10		
25号ビット		PL.110	449-317	楕円形	U字状	22	16	18		
26号ビット		PL.110	448-318	楕円形	V字状	23	20	22		23・26・27・31号は間隔が不揃いながら、東西軸に並ぶ。
27号ビット		PL.110	448-319	隅丸長方形	U字状	25	21	26		
28号ビット		PL.110	449-318	楕円形	逆台形状	30	25	17		
29号ビット		PL.110	449-317	楕円形	U字状	23	20	20		
30号ビット		PL.110	447-316	楕円形	不明	47	37	21		
31号ビット		PL.110	448-313	楕円形	V字状	26	24	26		
32号ビット		PL.110	439-321	楕円形	U字状	31	27	24		
33号ビット		PL.111	440-321	楕円形	U字状	28	25	25		
34号ビット		PL.111	444-321	楕円形	U字状	23	19	15		
35号ビット		PL.111	448-323	円形	V字状	25	25	28		
36号ビット		PL.111	452-319	楕円形	V字状	40	30	26		
37号ビット		PL.111	453-323	ほぼ円形	U字状	35	33	18		
38号ビット		PL.111	454-315	楕円形	U字状	20	18	14		
39号ビット		PL.111	454-314	隅丸長方形	V字状	35	25	21		
40号ビット		PL.111	456-312	楕円形	U字状	27	21	20		
41号ビット		PL.112	456-313	楕円形	U字状	32	25	19		
42号ビット		PL.112	458-322	楕円形	逆台形状	28	25	29		
43号ビット		PL.112	460-321	楕円形	筒状	34	30	19		
44号ビット		PL.112	457-316	楕円形	U字状	19	16	17		
45号ビット		PL.112	459-319	ほぼ円形	逆台形状	37	35	25		
46号ビット		PL.112	461-319	円形	U字状	27	26	20		
47号ビット		PL.112	462-319	楕円形	V字状	29	25	23		
48号ビット		PL.112	483-308	不整形	不明	92	41	31		
50号ビット		PL.113	506-306	ほぼ円形	不明	34	33	27		
51号ビット		PL.113	505-305	楕円形	不明	69	34	19		
52号ビット		PL.113	467-312	楕円形	逆台形状	26	23	12		
53号ビット		PL.113	466-313	楕円形	逆台形状	19	16	7		
54号ビット		PL.113	373-324	不整形	不明	62	47	55		
55号ビット		PL.113	372-323	楕円形	V字状	43	36	50	6号溝	
56号ビット		PL.113	369-323	不整形	V字状	51	36	40		

第2章 検出された遺構と遺物

名称	区	写真番号	位置(X-Y)	平面形状	断面形状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	重複遺構	備考
57号ビット		PL.113	370-322	楕円形	V字状	51	40	48		
58号ビット		PL.114	368-322	楕円形	V字状	45	40	47		
59号ビット		PL.114	374-321	円形	U字状	19	18	22		
60号ビット		PL.114	374-322	円形	U字状	20	19	31		
61号ビット		PL.114	377-331	楕円形	不明	29	24	39		
62号ビット		PL.114+115	376-336	楕円形	V字状	26	21	29		
63号ビット		PL.114+115	376-337	楕円形	不明	35	27	35		
64号ビット		PL.114+115	376-337	楕円形	V字状	41	29	20		
65号ビット		PL.114+115	376-338	楕円形	U字状	32	30	26		
66号ビット		PL.115	378-332	不整形	不明	(50)	(48)	75		
67号ビット		PL.115	378-327	不整形	不明	82	60	63		



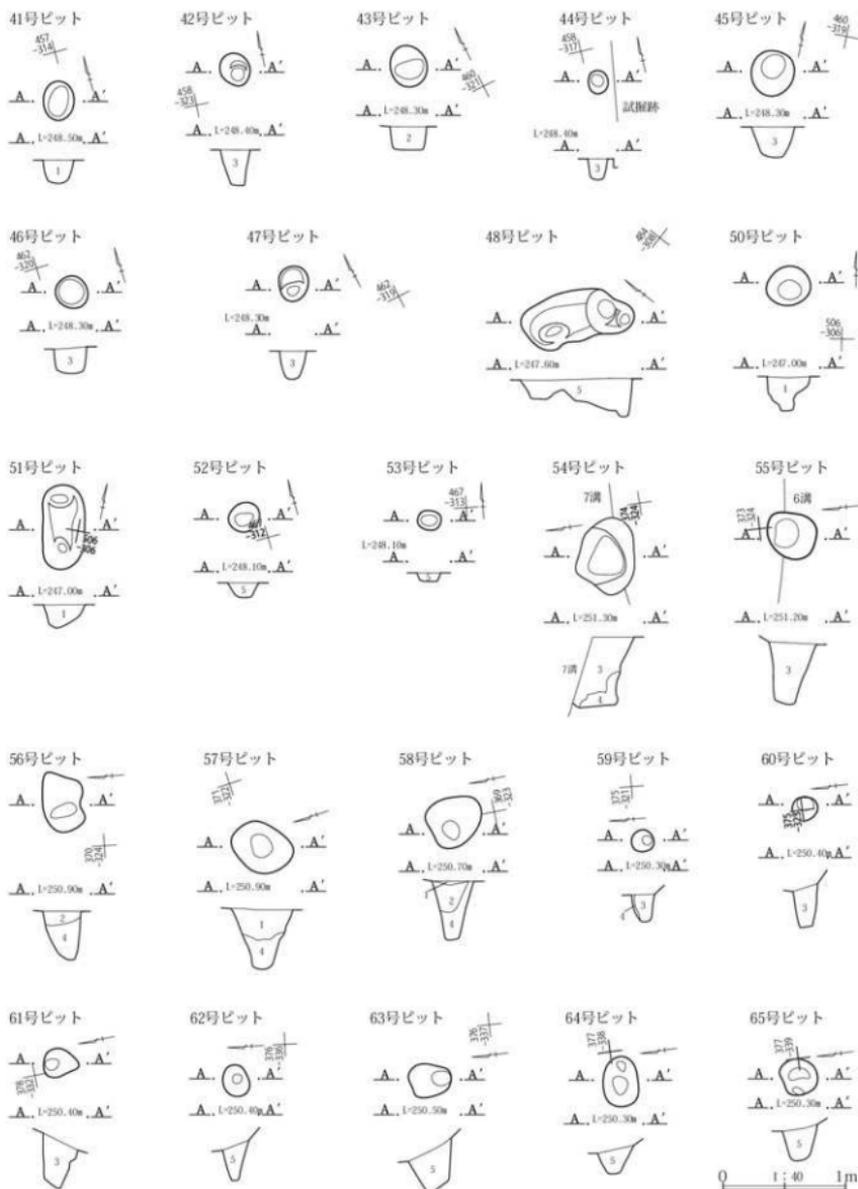
ビット

- 1 黒褐色上 弱粘性土。微量の灰白色ハミス(As-B)小粒とローム粒を含む。
- 2 灰黄褐色上 しまり強い弱粘性土。地山ソフトロームをブロック状に含む。
- 3 暗褐色上 小粒のソフトロームブロックを少量含む。しまり強い。
- 3' 暗褐色上 3層上に少量のAs-Bを含む。
- 4 にぶい黄褐色上 基質に淡くロ土とAs-Aを多量に含むザラザラした感の、ややしまり欠く層。
- 5 灰黄褐色上 基質にAs-B下の黒色土を多く含む層。

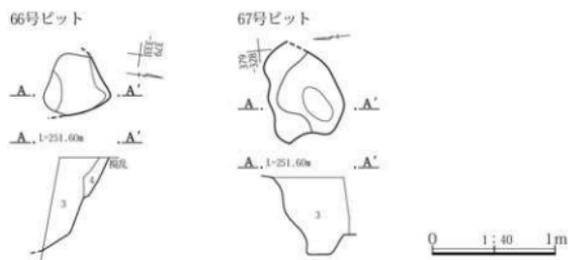
0 1:40 1m

第260図 1～15号ビット平・断面図

第2章 検出された遺構と遺物



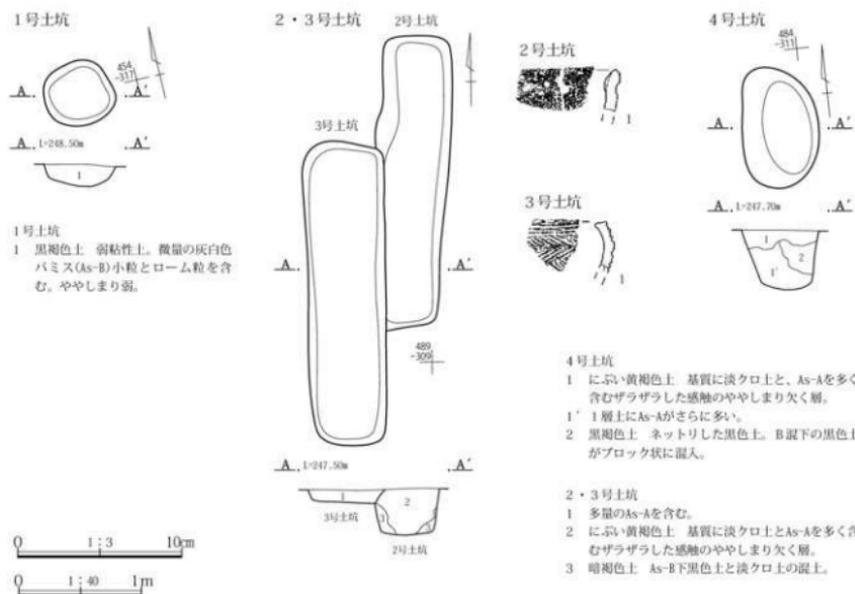
第262図 41～65号ビット平・断面図



第263図 66・67号ピット平・断面図

第24表 土坑計測表

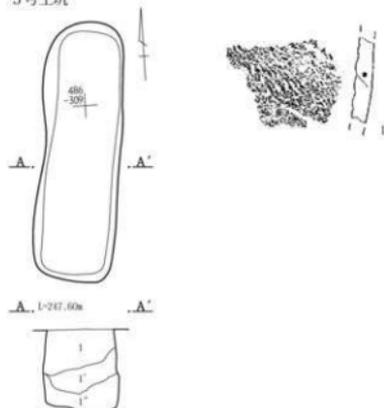
名称	区	写真番号	位置(X-Y)	平面形状	断面形状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	主軸方位	重複遺構	備考
1号土坑		PL.106	453-317	楕円形	皿状	59	54	18	N-77°-W		
2号土坑		PL.106-153	489-308	(長方形)	逆台形状	238	61	38	N-1°-E	3土坑	
3号土坑		PL.106-153	488-309	長方形	皿状	249	66	11	N-1°-W	2土坑	2～6号土坑は、近接して長軸を南北方向に同じくする。
4号土坑		PL.106	482-310	楕円形	U字状	98	63	48	N-5°-E		
5号土坑		PL.106-153	484-308	楕丸長方形	袋状	218	67	66	N-9°-E		
6号土坑			490-306	(不整形)	不明	326	(35)	40	N-9°-E	4溝→土坑	
7号土坑		PL.106	376-333	楕丸長方形	不明	121	116	24	N-3°-E	7溝(第238図)	旧6土坑(29年度調査)



第264図 1～4号土坑平・断面図及び2・3号土坑出土遺物

第2章 検出された遺構と遺物

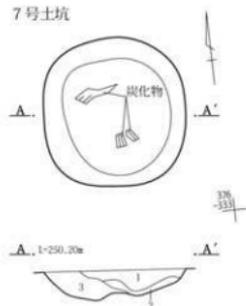
5号土坑



5号土坑

- 1 にふい黄褐色土 人為的な埋め戻し土。淡クロ土と黒色土のブロック状混土でAs-Aが混じる。
 1' 1層土に比して淡クロの混入多い。
 1'' 1層土に比して黒色土の混入多い。全体が一気の埋め戻しと思われる。

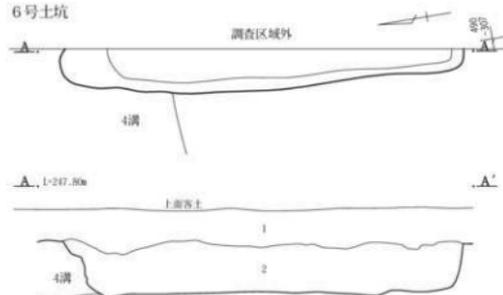
7号土坑



7号土坑

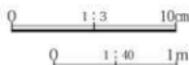
- 1 黒褐色土 炭化物粒の混入多い、サラサラした感触の粘性土。IPが少量混じる。しまりやや弱。東側下端に焼土混じる。
 2 灰褐色土 1層と3層の混土。焼土粒をわずかに含む。
 3 にふい黄褐色土 ローム状土中に細かな炭化材をやや多く含む。焼土小ブロックも少量混じる。しまりあり。

6号土坑



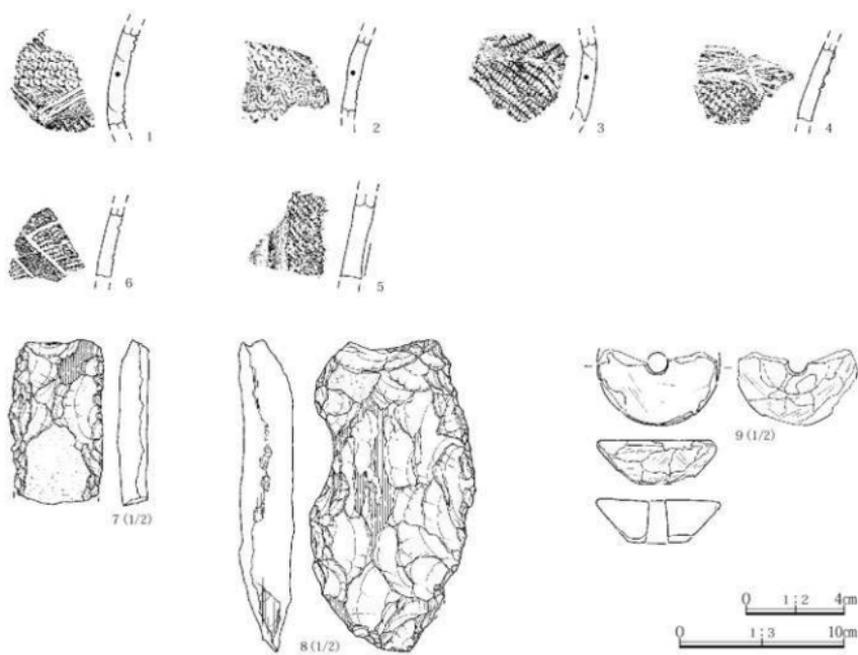
6号土坑

- 1 黒褐色土 As-A混土。As-Aは高密度部分があるが、一次堆積ではない。
 2 暗褐色土 4号溝の埋め戻しに近い。As-B混土主体だが大粒のAs-Aを含む。ややしまり欠く。



第265図 5～7号土坑平・断面図及び5号土坑出土遺物

第3項 遺構外出土遺物(第266図、Pl.153)



第266図 遺構外出土遺物

第2章 検出された遺構と遺物

第25表 向原IV遺跡遺物観察表

1号畑									
種別 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第253回 PL.153	1	肥前陶器 陶胎染付碗	1/6	口 底	-	高	灰白色//	素地に白土掛けした後に染付。軸に貫入する。高台端部の み無軸。	18世紀前半～ 中葉
第253回 PL.153	2	瀬戸・美濃 陶器 碗	体部以下1/4	口 底	-	高	灰白色//	内面から体部外面下位に筋軸。高台幅以下無軸。	18世紀
第253回 PL.153	3	瀬戸・美濃 陶器 片口鉢か	底部	口 底	-	高	灰白色//	内面に灰軸。底部内面に目跡3カ所。	江戸時代
第253回 PL.153	4	鉄製品 鏝	ほぼ完形	長 幅	9.0 2.0	厚 重	0.3 26.6	/有/20	片刃のようである。口がねが残存する。目釘を留める穴状 のものが確認できるが、その部分が劣化しておりはっきり としない。

2号土坑									
種別 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第264回 PL.153	1	縄文土器 深鉢					雑石英・輝石・白 色粒/やや軟/にぶ い黄褐色	波状縁か。口縁部肥厚。無文で器面摩滅する	中期末葉

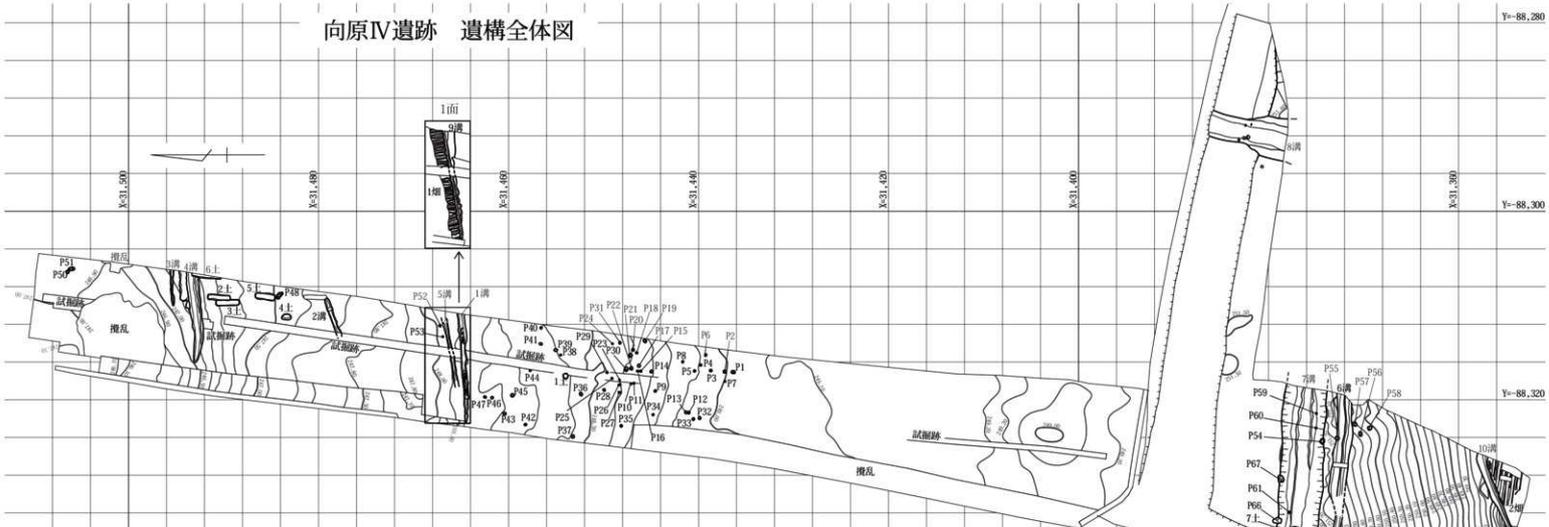
3号土坑									
種別 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第264回 PL.153	1	縄文土器 深鉢					雑輝石・白色粒/ 良好/明黄褐色	口縁部内湾。口唇部に横位平行沈線と以下同沈線による 横位矢状文が施される。内面平滑な態で調整	前期後葉

5号土坑									
種別 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第265回 PL.153	1	縄文土器 深鉢					雑輝石・石英・白 色粒/良好/褐色	内湾気味の体部。無筋Rを横位施文する。内面撫で調整	前期中葉

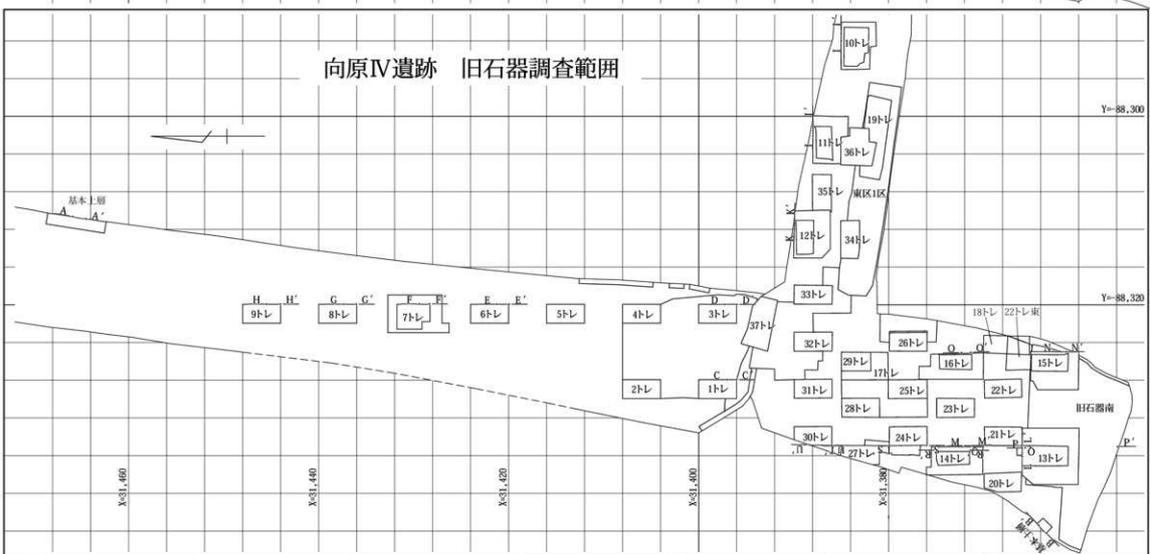
遺構外

種別 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第266回 PL.153	1	縄文土器 深鉢	北側				雑輝石・石英粒/ 白色粒/良好/黄褐 色	外反気味の体部。斜位内皮平行沈線による波状文を配し、 環付末端を多段に施す。内面平滑な態で調整	前期前葉
第266回 PL.153	2	縄文土器 深鉢	北側				雑輝石・石英・白 色粒/良好/灰黄褐 色	外反気味の体部。横位コンパス文を配し。環付末端を斜位 多段に施す。内面平滑な態で調整	前期前葉
第266回 PL.153	3	縄文土器 深鉢	北側				雑輝石・輝石・白 色粒/良好/にぶい 褐色	内湾気味の体部。横位LRとRLによる羽状縄文構成。内面撫 で調整。凸凹が顕著	前期中葉
第266回 PL.153	4	縄文土器 深鉢	畑下				雑輝石・白色粒/ 良好/灰黄褐色	斜位刻みを加えた浮線文を横位多段に配す。以下横位RLを 施す。内面平滑な態で調整	前期後葉
第266回 PL.153	5	縄文土器 深鉢					雑石英・輝石・白 色粒/良好/にぶい 黄褐色	縦位隆線による懸垂文構成。無筋は幅広い沈線。縦位LRを 充填する。内面平滑な態で調整	中期後葉
第266回 PL.153	6	縄文土器 深鉢	北側				雑石英・輝石多・ 白色粒/良好/にぶ い黄褐色	沈線に両された磨消部による幾何学文構成。施文部縄文を LR充填施文。内面弱い研磨が加わる	後期前葉
第266回 PL.153	7	打製石斧		長 幅	6.7 3.8	厚 重	1.2 42.2	珪質頁岩	短冊状を呈する。表裏面とも加工は丁寧。器体中央付近で 破損。折れ面には肉縁割離した痕跡が残る。上端側面には 線条痕が見られる。当初刃部とされたのであろうが、刃 部としては厚く再生途上破損した可能性が高い。
第266回 PL.153	8	打製石斧		長 幅	12.7 6.7	厚 重	2.3 215	珪質頁岩	左側縁は器体中央より上位が括れエッジが摩耗するのに対し、 右側縁は弧状を呈し、初期形態が大きく変形する。器 体の中央付近には摩耗痕を認定してみたが、表裏面とも器具 痕と見られるキズがあるように見える。分銅型。
第266回 PL.153	9	紡輪		径 幅	3.1 -	高 重	1.8 23	変質デイスサイト	背面側には線条痕が残されているが、良く研磨されている。 裏面側は整形時の面取りが残る。軸穴は径8mmを測る。 断面台形状を呈する。

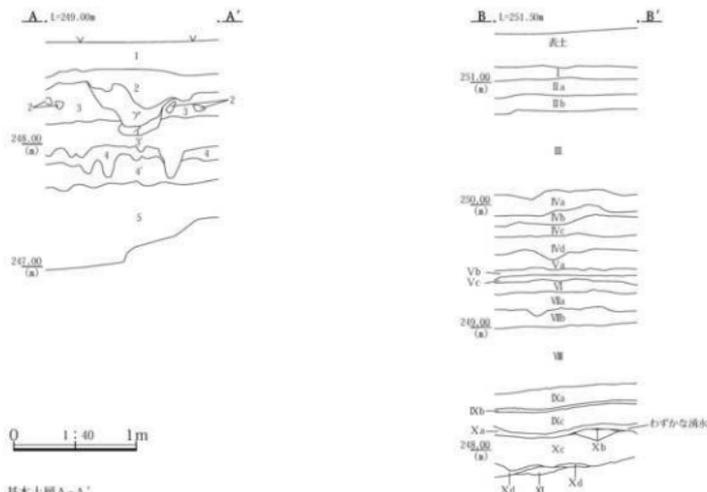
向原IV遺跡 遺構全体図



向原IV遺跡 旧石器調査範囲



基本土層



基本土層 A-A'

- 1 黒褐色土 As-A下の黒色積土。
- 2 黒褐色土 As-B混上。
- ア 黒褐色土 少量のAs-Bを含む。(1号溝埋土)
- イ 灰黄褐色土 少量のAs-Bとローム小ブロックを含む。(1号溝埋土)
- 3 暗褐色土 ブロック状に2層土が混じる層。炭化物粒の混入見られない。
- 3' 黄色バミスが少量混じり、下側で漸移的に黄色味増す。
- 4 にぶい黄褐色土 ローム漸移層。
- 4' YP粒多く、黄色味の濃淡不均等。
- 5 As-YP

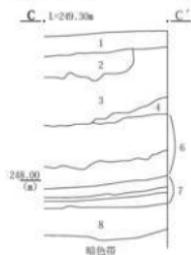
基本土層 B-B'

- 表上
- I 黄褐色ローム 不揃いのYP粒を不均等に含み、滑ったように乱れたローム層。
 - II a 層とII層の漸移層。
 - II b 一次堆積のYP層。粒径不揃いだが生10mm前後の大粒が多い。
 - III 黄褐色ローム。下側ほど色調淡くなり、BP粒を含む。白色バミス(SP)散在。
 - IV a 最上位のBP層。バミス主体。風化して粒が不明瞭になる部分が縦方向に多数見られる。
 - IV b 明黄褐色ローム。BP層内の最上位にあるローム質部分。V c 層のバミスを不均等に含む。
 - IV c 浅黄色ローム BP層内の2番目にあたるバミス主体部分。バミスは風化が進む。
 - IV d 明黄褐色ローム BP層内の2番目にあたるローム質部分。
 - V a 浅黄色バミス BP層内の風化著しいバミス主体部分。V層内ではバミスは最も粗粒で径5mm前後で比較的均質。
 - V b 灰白色風化バミス層 V層内では最もバミス細粒で風化も顕著で粘性上状。
 - V c b層に近似。バミスはやや粗粒だが、風化は進む。
 - VI 暗黄褐色土 BP-PP間の暗色帯。炭化物粒を不均等に含む粘性土。
 - VII a 灰黄色風化バミス層 にぶい黄褐色土 VI-VII bの漸移層。下側ほどバミス多くなる。
 - VII b にぶい黄褐色土 BP層の最上位にあたるバミス主体部分。バミスは小粒で風化著しい。
 - VIII 明褐色バミス MP層の中心部分。火山起源の微細な角礫混じる。バミスやや大粒。下で風化は進み、淡い色調になる。
 - IX a 灰白色風化バミス層 MP層下層の風化顕著なバミスで粘性強くしまりない層。
 - IX b 褐色粘性土層 IX a-IX b層間の極細い暗色帯部分。しまり弱い粘性強。広い範囲で同じような層厚(10~20mm)で分布している。
 - IX c 灰白色風化バミス層
 - X a 褐色土層 暗色帯最上部。MP直下のしまりある粘性土層。最下層に層厚不定なAT層あり。微細な斑状に鉄・マンガンの凝集層あり。
 - X b AT層 極微細な灰層。層厚は最大で20mmほど。火山ガラスを多量に含み、微細な灰としては、わずかにザラツとした感触。
 - X c 灰褐色土層 暗色帯のしまり強い粘性土層。炭化物粒を散見、鉄・マンガンの凝集も不均等にあり。
 - X d マンガン分凝集層。
 - XI 灰オリーブ~灰白色粘性土層 しまり強。上側には斑状の酸化鉄分凝集やや多い。

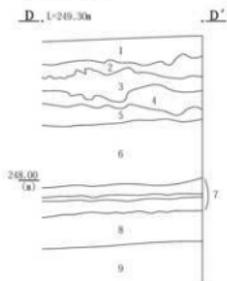
第268図 基本土層図

第2章 検出された遺構と遺物

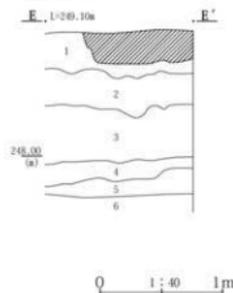
1号トレンチ



3号トレンチ



6号トレンチ



1号トレンチ C-C'

- 1 褐色土 BP層内。φ1～5mm大のバミス。
- 2 上面に1層上にあるバミス層が部分的に見られる。
- 3 灰黄褐色土 ややしまり欠く粘性土。上側中心に黄白色のバミス混じる。BP層内のやや土壌化した部分。炭化物粒を不均等に含む。
- 4 3号トレンチ4層の南側にある強い粘性土ブロック。(風化したバミス)
- 6 にふい黄褐色土 粘性のあるグズグズしたバミス層。上側でφ3～8mm、下側でφ1～4mm、赤色味著しく強い部分あり。室田層。
- 7 にふい黄褐色土 シルト質の透水層。φ1～2mm大のバミスの混入多い。中央に黒色味を帯びた薄層のペレット。下側にやや黄色味を帯びた含水の多い層。
- 8 黄褐色土 暗色帯。上側に顕著な鉄分・マンガン分の編状腐集層。AT層の小ブロックが確認できる。中層でも編状腐集は見られ特にマンガンの小粒が広がっている。

3号トレンチ D-D'

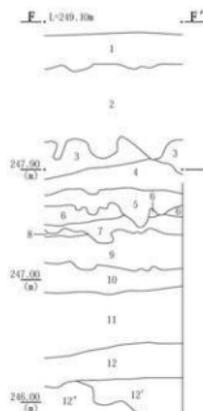
- 1 褐色土 BP層内。φ1～5mm大のバミス。
- 2 にふい黄褐色土 粗砂(透明感のあるφ1mm大の石英・長石混じり)およびバミスによるしまり強い層。粗砂とバミスが互層上に堆積する部分が、下側中心に一部で見られる。
- 3 灰黄褐色土 ややしまり欠く粘性土。上側中心に黄白色のバミス混じる。BP層内のやや土壌化した部分。炭化物粒を不均等に含む。
- 4 北側は灰黄褐色砂質土。砂粒はφ1mm以下でしまりあり。南側は3層土・5層土の混土状。
- 5 褐色土 1層上にやや近以。粗砂の混入やや多く、下側で白色味の強いバミスの混入多い。
- 6 にふい黄褐色土 粘性のあるグズグズしたバミス層。上側でφ3～8mm、下側でφ1～4mm、赤色味著しく強い部分あり。室田層。
- 7 にふい黄褐色土 シルト質の透水層。φ1～2mm大のバミスの混入多い。中央に黒色味を帯びた薄層のペレット。下側にやや黄色味を帯びた含水の多い層。
- 8 黄褐色土 暗色帯。上側に顕著な鉄分・マンガン分の編状腐集層。AT層の小ブロックが確認できる。中層でも編状腐集は見られ特にマンガンの小粒が広がっている。
- 9 暗色帯下 青灰色土・ベントナイト層。

6号トレンチ E-E'

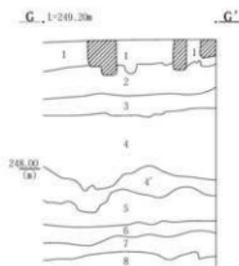
- 1 YP直下のローム白色バミス不均等に含む。
- 2 ロームには下側中心に少量のBP混じる。しまりあり。
- 3 MAXφ10mm程の砂。粗砂混じりのローム、MAXφ3mm程の砂混じりのロームの互層。
- 4 BPと粗砂層。
- 5 やや細かい砂主体にバミスの混じるややしまり強い層。
- 6 土壌化したBP内の層。

第269図 トレンチ断面図(1)

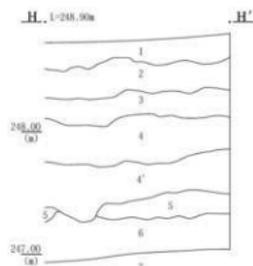
7号トレンチ



8号トレンチ



9号トレンチ



7号トレンチ F-F'

- 1 YP層 9号トレンチ3層上に同じ。上側2層相当部分がある層押を受ける。上面にかすかにローム上に残る部分あり。
- 2 にふい黄褐色土 ややしまり欠く粗粒の粘性土。白色味帯びる。微細な砂を帯降状に含む。炭化物粒混じる。
- 3 褐色土 MAX ϕ 10mm程のバミス層。下側ほど小粒になる。BP層、黄色味帯びる。微細な岩片混じる。
- 4 褐色土 バミス層(ϕ 3mm前後)シルト、砂質土等が不均等に混じる層。
- 5 にふい黄褐色土 9号トレンチ6層上にも含まれる粘性土。
- 6 にふい黄褐色土 ϕ 2mm前後の粗粒とバミスの混土層。BP内の土壌化した層の直上層。
- 7 5層上の白色シルト、9層上を小ブロック状に不均等に含む。
- 8 しまりある細かな砂とバミス。
- 9 BP内の土壌化した部分。
- 10 粗粒の脆い粘性バミス。
- 11 にふい黄褐色土 粘性のあるグズグズしたバミス層。上側で ϕ 3~8mm、下側で ϕ 1~4mm、赤色味著しく強い部分あり。室田層。
- 12-12' にふい黄褐色土 シルト質の透水層。 ϕ 1~2mm大のバミスの混入多い。中央に黒色味を帯びた薄層のベルト。下側にやや黄色味を帯びた含水の多い層。

8号トレンチ G-G'

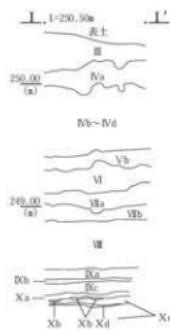
- 1 灰黄褐色土 ローム薄移層。不揃いのYPを不均等に含む。しまり強い粘性土。
- 2 褐色土 ϕ 2~3mmのバミス主体に3層上内の大粒バミスや ϕ 1mm以下の透明感のあるバミス、黒色味を帯びた砂粒等を含むYP上層。上層に一部ロームらしい土も重る。
- 3 褐色土 最大 ϕ 30mmを超える大粒バミス主体のYP層。 ϕ 2~5mm前後の火山噴出の層床や透明感のある微細バミスも混じる。
- 4 にふい黄褐色土 ややしまり欠く粗粒の粘性土。白色味帯びる。微細な砂を帯降状に含む。炭化物粒混じる。
- 4' 混入物少なくやや細粒になり、黄色味強くなる。
- 5 褐色土 最大 ϕ 10mm程のバミス層。下側ほど小粒になる。BP層、黄色味帯びる。微細な岩片混じる。
- 6 褐色土 5層上に近い。粒径やや小さく、最大 ϕ 5mm程。
- 7 灰黄色土 シルト、微細なバミスや褐色強い粘性土をブロック状に混入。炭化物粒を少量含む。
- 8 にふい黄褐色土 ϕ 2mm前後の粗粒とバミスの混土層。BP内の土壌化した層の直上層。

9号トレンチ H-H'

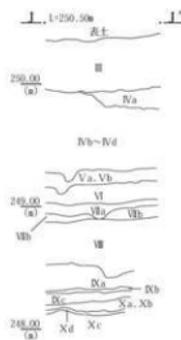
- 1 灰黄褐色土 ローム薄移層。不揃いのYPを不均等に含む。しまり強い粘性土。
- 2 褐色土 ϕ 2~3mmのバミス主体に3層上内の大粒バミスや ϕ 1mm以下の透明感のあるバミス、黒色味を帯びた砂粒等を含むYP上層。上層に一部ロームらしい土も重る。
- 3 褐色土 最大 ϕ 30mmを超える大粒バミス主体のYP層。 ϕ 2~5mm前後の火山噴出の層床や透明感のある微細バミスも混じる。
- 4 にふい黄褐色土 ややしまり欠く粗粒の粘性土。白色味帯びる。微細な砂を帯降状に含む。炭化物粒混じる。
- 4' 混入物少なくやや細粒になり、黄色味強くなる。
- 5 褐色土 最大 ϕ 10mm程のバミス層。下側ほど小粒になる。BP層、黄色味帯びる。微細な岩片混じる。
- 6 褐色土 バミス層(ϕ 3mm前後)シルト、砂質土等が不均等に混じる層。
- 7 にふい黄褐色土 ϕ 2mm前後の粗粒とバミスの混土層。BP内の土壌化した層の直上層。

第2章 検出された遺構と遺物

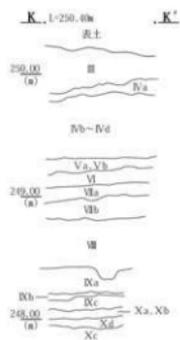
10号トレンチ



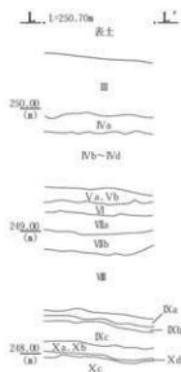
11号トレンチ



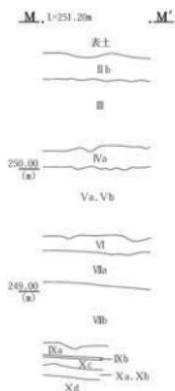
12号トレンチ



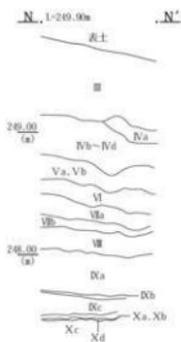
13号トレンチ



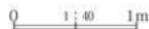
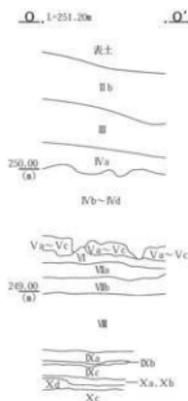
14号トレンチ



15号トレンチ

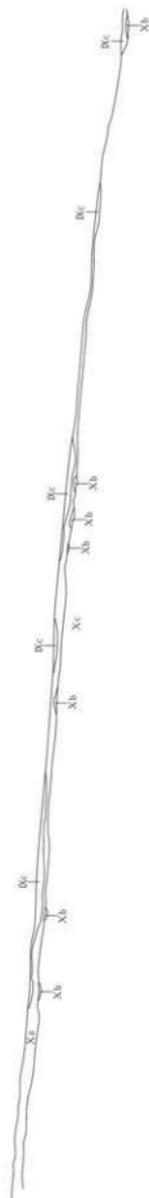


16号トレンチ



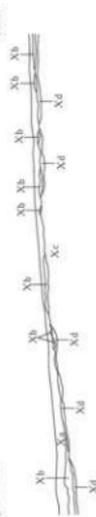
第271図 トレンチ断面図(3)

P. 1:248.50m



P.

Q. 1:248.50m



R. 1:248.50m



S. 1:248.50m



T. 1:248.50m



U. 1:248.50m



第272図 トレンチ断面図(4)

第4項 旧石器時代

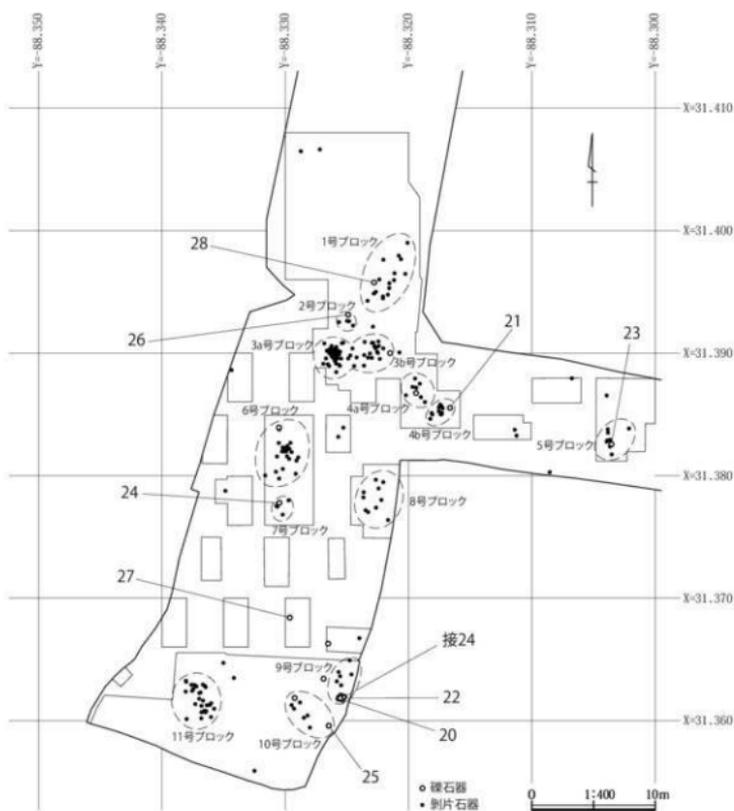
1. 概要

本遺跡は、碓氷川右岸に広がる上位段丘面に立地する。この段丘面は中野谷面に当たり、地元では「横野台地」と呼ばれている。台地内には数本の小河川が流れるだけであるが、碓氷川下流(安中市岩井付近)では段丘面の浸食が進んで、台地と谷が入り組んだ複雑な地形が広がっている。

本遺跡から出土した旧石器時代石器群は安中-富岡市が接した行政区界にあり、南側は高田川に続く樹枝状の谷

戸田に臨み、北側は緩く傾斜する平坦な台地となっている。旧石器時代の遺物は古代牧の区画溝(7・8号溝)の南東部コーナー付近に広がっていた。石器群の分布域から150mほど北を猫沢川が流れており、どちらかと言えば石器群は樹枝状に入り組む南側の谷を意識した立地となっているが、両者は距離的に極端な差がないことから、樹枝状に入り組む谷も猫沢川の谷も、ともに視界に入れて遺跡を選地したのであろう。

旧石器時代の石器群は、合計229点(礫・礫片11点を含む)が出土した。いずれもAs-MP下の暗色帯中から出土したものである。As-MP下数cmにAT(始良・丹沢火山灰、厚



第273図 石器分布図

第26表 器種・石材構成

石材	ナイフ	石刃	加工	石核	剥片	砕片	巖石	台石	礫	礫片	総計
黒色安山岩			2	6	65	74					147
硬質泥岩		1		4	34	4	1				44
チャート		1									1
ホルンフェルス					1		1				2
珪質頁岩	1				3		1				5
玉髄					1						1
黒曜石					1	1					2
粗粒安山岩					2	5	1	5	5		18
砂岩									1		1
珪質変質岩					1	5					7
不明							1				1
総計	1	2	2	10	106	86	9	1	6	6	229

第27表 ブロック別器種構成

ブロック	ナイフ	石刃	加工	石核	剥片	砕片	巖石	台石	礫	礫片	総計
1		1		1	12	2	1				17
2			1		1	2	1				5
3a		1	1	1	17	27					46
3b					10	11			1		22
4a					3	3				2	8
4b					8	3	1				12
5					4	4	1				9
6				3	10	11			1		25
7					2	2	1				5
8				2	8						10
9					5	1		1	1	4	12
10					1	5	1	1	1		8
11				4	14	10					28
外	1	1			10	5	3		2		22
総計	1	2	2	10	106	86	9	1	6	6	229

第28表 ブロック別石材構成

ブロック	黒安	硬質	チャ	ホルン	珪質	玉髄	黒曜	粗安	砂岩	珪質	不明	総計
1	7	8					1				1	17
2	4							1				5
3a	42	3			1							46
3b	20	1						1				22
4a	4	2						1		1		8
4b	8	3		1								12
5	2	4			2					1		9
6	17	4						3		1		25
7	4	1										5
8		8		1						1		10
9	6							6				12
10	6							2				8
11	22	5			1							28
外	5	5	1		2		1	4	1	3		22
総計	147	44	1	2	5	1	2	18	1	7	1	229

さ1 cm程度)があり、暗色帯中石器群であることが明らかであった。As-MP直下やAT直下、暗色帯最下層には堅い鉄分凝集層があり、調査に支障を来した。この凝集層は谷を挟んだ南側台地(下高田白山遺跡・下高田稲荷谷II遺跡)にもあり、下高田白山遺跡では鉄分凝集層が固

くAs-MP以下の旧石器調査を断念せざるを得なかったが、本遺跡では予想以上に薄く、旧石器調査を行なうことができた次第である。薄層とはいえ凝集層は固く、バチ鉄により掘削せざるを得ず、このため本来なら出土すべき相当量の砕片類の回収ができなかったものと思われる。結果的に制約条件の多い調査となってしまったが、西毛域では数少ない旧石器調査となった。災害規模が大きいほど資源復活には時間を要しただろうが、どの程度で人が戻り始め、従来の生活スタイルに戻れたのか、具体的な検討材料が必要になる。

第273図に、石器の分布状況を図示した。石器群は南北50m、東西30mの範囲に分布、おおむね2群に分れて分布した。各石器群には剥片・砕片類が集中分布するブロックと比較的散漫に分布するブロックがある。またそれぞれには大形棒状礫があり注目しておきたいが、大形礫は特徴的な打痕等があるわけではなく、その機能判定は難しい。ただ、どこか一定の場所に集中するわけではなく、各ブロックに1点があるという状況にある。加えて、9号ブロックにはこれと同質石材が被熱破損した状態で出土、火床の存在を間接的に教えてくれている。

接合資料は黒色安山岩に18例、硬質泥岩に5例が確認されている。ブロック内で接合するか、近接ブロック間で接合するか、いずれかである。ブロック間接合の最大は約30m離れて接合したものの(接-20)があり、加えて同一個体と見られる剥片類(黒色安山岩-1)が遠く離れて分布しており、南北2群からなる石器群の同時性も否定できない状況にある。

個体別資料の観点からみた剥片剥離の特徴は、①大型剥片を得て、これを石核として小形剥片を剥離、②これとは別に、石刃様の剥片を取る技術があり、これを素材にナイフ形石器や石刃を折り取り加工した台形様石器が製作されたということになる。今回、調査で発見された資料には、黒色安山岩や硬質泥岩などの在地石材を用いた剥片生産がある一方、同じ在地石材だが硬質泥岩やチャート製石刃類があり、いずれも遺跡外から持ち込まれたものであった。

石器石材は11種が確認されているが、石材二種(黒色安山岩147点・64.1%、硬質泥岩44点・19.1%)で出土量の80%を大きく超えている。出土点数には巖石や台石、礫・礫片類が含まれているが、これを除けば石器類の9

割以上(191点/208点, 91.8%)が黒色安山岩と硬質泥岩ということになる。他の石材についても基本は在地石材が占め、明らかな非在地石材は黒曜石2点のみで、搬入石器も玉髄・チャート各1点と数量は限られていた。

礫石器類は敲石9点・台石1点があり、粗粒輝石安山岩(6点)・ホルンフェルス(1点)などのほかに硬質泥岩や珪質頁岩製のものがある。礫石器類はブロックの中心にあるもの(1・4a・5号)、ブロック外縁にあるもの(2・3b・4b・6・7・9・10号)、単独出土(ブロック外)するものなど、その在り方は多様である。

2. 石器ブロック

暗色帯中石器群は台地縁辺部にあり、石器ブロック11からなることが明らかになった。各ブロックの規模は径2~6m程度、出土した石器も平均20点ほどで、概して小規模であった。暗色帯には鉄分凝集層複数枚があり、これが固く、調査に支障を来した。このため、通常より碎片類の回収率が落ちているのが気にかかるが、石器ブロックには必ず剥片・碎片類があり、石器ブロックが概して小規模であるという傾向に変わりはなさそうである。

石器分布はX=370ライン付近が空白域となっているが、X=370~380間が台地縁辺となり、このラインを境に徐々に南側傾斜が強まる地点になる。石器分布の空白域があり、石器分布と地形の関係性が指摘できよう。

1号ブロック(第274・287図)

規模 長軸5.8m・短軸2.2m

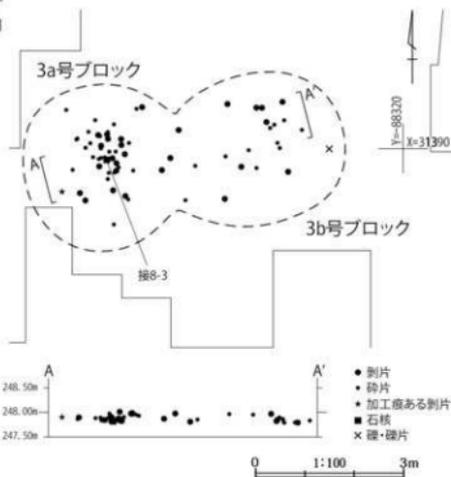
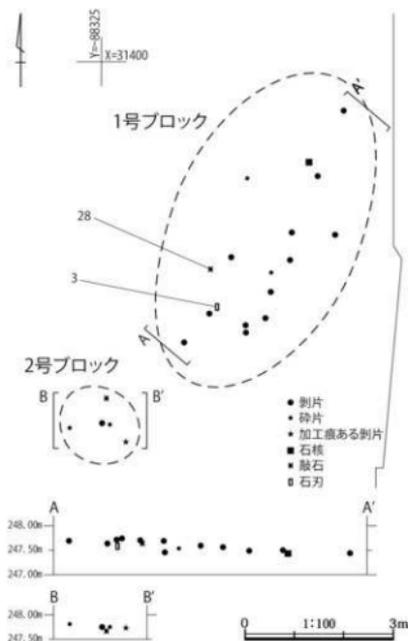
石器点数 17点

器種構成 石刃1、剥片12、碎片2、石核1、敲石1

石材構成 黒色安山岩7、硬質泥岩8、黒曜石1、不明1

出土状況 南北軸に楕円形状に広がり、比較的散漫に分布する。敲石は1kgを超える大形品がブロック内にある。

所見 黒色安山岩・硬質泥岩とも石核がある。剥片類の生産は確実で、接合資料2例(接-3・14)が確認されている。敲石は大形で、小型剥片剥離には不向き。



第274図 1~3号ブロック石器分布図

2号ブロック(第274・287図)

規模 長軸1.2m、短軸0.9m

石器点数 5点

器種構成 加工痕ある剥片1、剥片1、砕片2、敲石1

石材構成 黒色安山岩4、粗粒輝石安山岩1

出土状況 ほぼ東西方向に広がり、分布は比較的散漫である。このブロックにも1kgを超える敲石がある。

所見 黒色安山岩・硬質泥岩とも剥片類で、数量が少ない。現状で接合資料1例(接-13)が確認されているが、これは大形石刃を3分割、このうち1点を台形様石器?に加工したものである。残る砕片類も同一母岩であり、剥片生産は低調である。このブロックの敲石も大形で、小型剥片の剥離には向き。

3a号ブロック(第274・287図)

規模 長軸2.7m、短軸2.5m

石器点数 46点

器種構成 加工痕ある剥片1、剥片17、砕片27、石核1

石材構成 黒色安山岩42、硬質泥岩3、珪質頁岩1

出土状況 最も出土量が多く、密集度が高い。黒色安山岩が集中剥離されており、硬質泥岩も少量の剥片が剥離されている。敲石等の大形礫の出土はない。

所見 黒色安山岩が集中剥離されており、接合資料6例(接-4・6・8・11・13・18)がある。接合資料6例の内訳はブロック内で完結するもの3例(接-4・6・11)、ブロック間で接合するもの3例(接-8・13・18)であり、活発な剥片生産が裏付けられる。

3b号ブロック(第274・287図)

規模 長軸2.8m・短軸1.9m

石器点数 22点

器種構成 剥片10、砕片11、礫1

石材構成 黒色安山岩20、硬質泥岩1、粗粒輝石安山岩1

出土状況 剥片類は、ブロックの北東側に濃く分布している。剥片類の出土量は平均的だが、集中性は高い。

所見 黒色安山岩製剥片類の出土量が多く、同種石材を用いた剥片類の生産は確実。接合資料4例(接-7・8・14・18)があり、接-14が1号ブロックの石核と、接-18が3a号ブロック剥片とブロック間で接合する。

4a号ブロック(第275・287図、PL.118)

規模 長軸2.1m・短軸1.4m

石器点数 8点

器種構成 剥片3、砕片3、礫2

石材構成 黒色安山岩4、硬質泥岩2、粗粒輝石安山岩1、珪質変質岩1

出土状況 硬質泥岩や粗粒輝石安山岩がブロック中心域に、黒色安山岩が周辺域に分布、密集度は比較的散漫である。接合資料1例(接-7)があり、隣接ブロックの剥片類と接合関係が確認されている。

所見 石核は硬質泥岩製と粗粒輝石安山岩製のそれである。2点ともブロック内では消費されておらず、ブロックに単独出土したものである。

4b号ブロック(第275・287図、PL.118)

規模 長軸1.9m・短軸0.9m

石器点数 13点

器種構成 剥片8、砕片3、敲石1

石材構成 黒色安山岩9、硬質泥岩3、ホルンフェルス1

出土状況 剥片類の密集度は高く、ホルンフェルス製の敲石は剥片類に近接して出土した。敲石は小型で78gと軽量だが、小型剥片類の剥離に適している。

所見 黒色安山岩製剥片類の接合資料2例(接-9・17)が確認されている。黒色安山岩を用いた剥片類の生産は確実だが、いずれも石核消費を部分的に示唆するだけである。敲石は小型剥片剥離に適したサイズ。

5号ブロック(第275・287図、PL.118)

規模 長軸2.2m・短軸2.0m

石器点数 9点

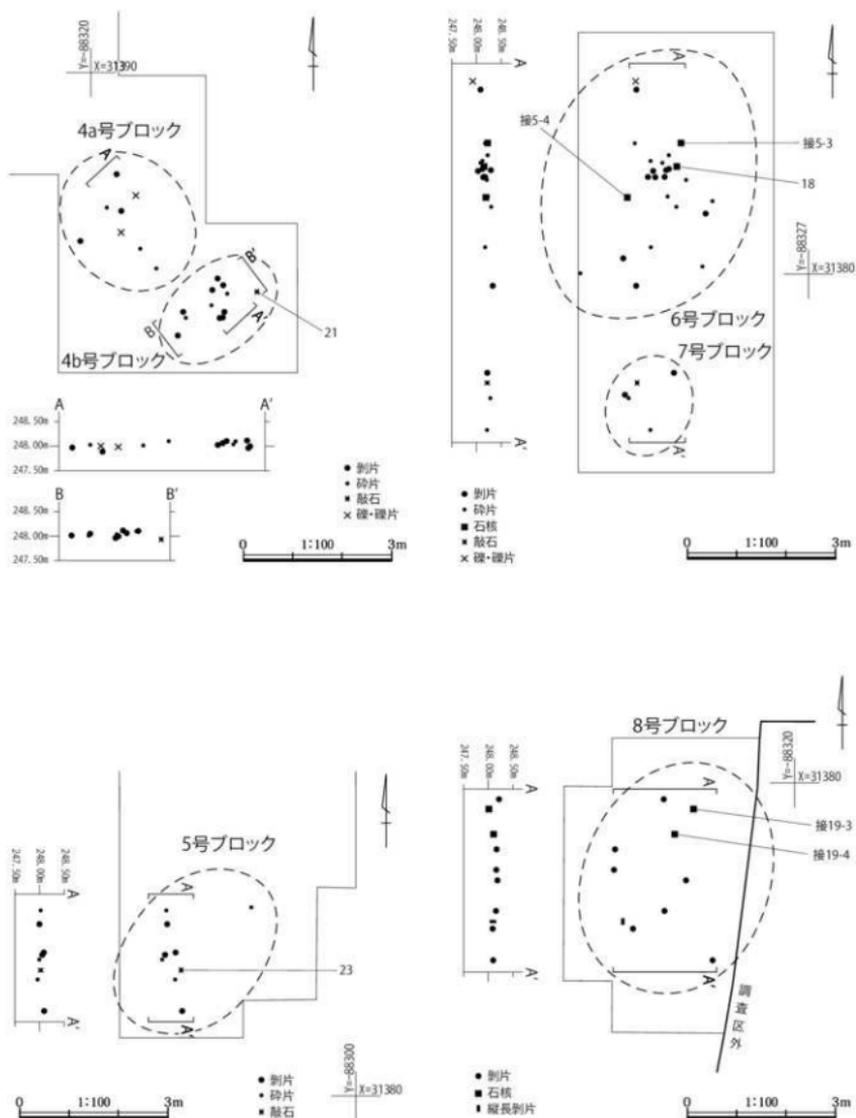
器種構成 剥片4、砕片4、敲石1

石材構成 黒色安山岩2、硬質泥岩4、珪質頁岩2、珪質変質岩1

出土状況 石器群の分布域から10mほど離れた地点にあり、調査区の最も東端にある。分布域は狭く、剥片類の集中性が高い。敲石は小形で(第280図23)、小形剥片の剥離に適している。

所見 剥片類は集中性が高く偏在気味。石器ブロックは広がる可能性があり、拡張不足。

第2章 検出された遺構と遺物



第275図 4～8号ブロック石器分布図

6号ブロック(第275・287図、PL.119)

規模 長軸4.2m・短軸2.8m

石器点数 25点

器種構成 剥片10、砕片11、石核3、礫1

石材構成 黒色安山岩17、硬質泥岩4、珩質変質岩1、粗粒輝石安山岩3

出土状況 台地南側縁辺に分布する。黒色安山岩製剥片類の集中性が高い半面、他の石材はブロックの中心域を外れて分布する傾向が強い。

所見 黒色安山岩製の剥片類は集中性が高く、この地点が剥離地点となる。接合資料は2例7点(接-5・15)がある。その他の石材では接合資料は確認できていないが、硬質泥岩では少量の剥片生産が行われたことを示唆している。粗粒輝石安山岩は150g弱で、敲打痕等は明らかでないが、敲打石としての可能性が指摘されよう。

7号ブロック(第275図)

規模 長軸1.3m・短軸0.9m

石器点数 5点

器種構成 剥片2、砕片2、敲打石1

石材構成 黒色安山岩4、硬質泥岩1

出土状況 剥片類の分布域は狭く、6号ブロックの南側に近接して分布する。典型的な小規模ブロックで、剥片類の密集性は低い。

所見 6号ブロックの南側に近接分布する。位置的に隣接ブロックとは接合資料や母岩を共有するなどしてもよさそうだが、そうした関係は確認できていない。

8号ブロック(第275・289図)

規模 長軸4.4m・短軸2.0m

石器点数 10点

器種構成 縦長剥片1、剥片7、石核2

石材構成 硬質泥岩8、珩質変質岩1、ホルンフェルス1

出土状況 硬質泥岩製剥片類が集中分布したほか、珩質変質岩やホルンフェルス製の剥片類も各1点が出土している。石器ブロックは調査区外へ延びる可能性がある。接合資料は1例4点(接-19)があり、母岩1/4を消費。

所見 硬質泥岩が集中消費されていた。接合関係は確認できないが、同一個体と見られる剥片類が複数あり、石器ブロックは調査区へ延びるものと思われる。

9号ブロック(第273・276・287図)

規模 長軸3.3m・短軸1.3m

石器点数 12点

器種構成 剥片5、砕片1、台石1、礫・礫片5

石材構成 黒色安山岩6、粗粒輝石安山岩6

出土状況 分布域北に黒色安山岩製剥片類が分布するのに対して、粗粒輝石安山岩製礫片類は分布域南にあり、対象的である。石器ブロックは東壁際にあり、調査区外へ分布が延びる可能性がある。接合資料2例(接-16・24)が確認されている。

所見 剥片類は調査区へ延びる可能性がある。接-24は礫片類が接合したものであるが、被熱破損した礫片類が接合したもので、火床の存在を暗示する。

10号ブロック(第276・287図)

規模 長軸3.7m・短軸1.2m

石器点数 8点

器種構成 剥片1、砕片5、敲打石1、礫1

石材構成 黒色安山岩6、粗粒輝石安山岩2

出土状況 9号ブロックの南西側にある。黒色安山岩製剥片類が散漫に分布している。接合資料1例(接-12)が確認されている。

所見 剥片類は黒色安山岩製であり、同石材性石核を用いた少量の剥片生産が行われたものと思われる。隣接する石器ブロックとは母岩共有や接合関係が期待されることになるが、現状では確認できていない。

11号ブロック(第276・287図)

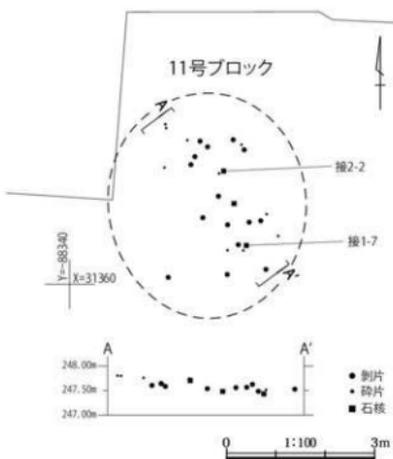
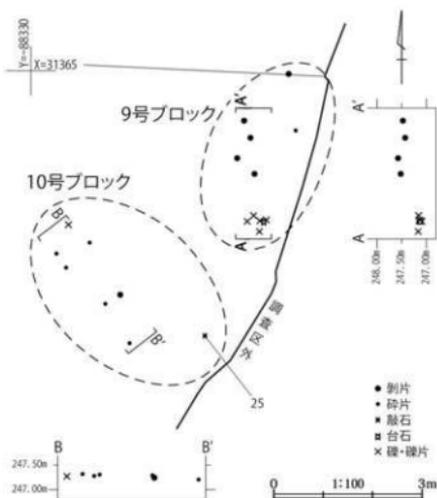
規模 長軸3.8m・短軸2.4m

石器点数 28点

器種構成 剥片14、砕片10、石核4

石材構成 黒色安山岩22、硬質泥岩5、玉髓1

出土状況 台地南側緩斜面にあり、剥片類の出土量は3a号ブロックに次ぐ規模になる。接合資料4例(接-1・2・10・23)があり、4例中3例が黒色安山岩製である。所見 接合資料は黒色安山岩製で、いずれもブロック内で接合したもので、他ブロックとは接合関係がなく、剥片類が集中生産されたことが明らかである。



第276図 9～11号ブロック石器分布図

3. 出土石器

計230点(敲石等礫石器や礫・礫片を含む)が出土した。主な石器には基部加工のナイフ形石器1、縦長剥片(石刃)2があるほかは、剥片106点・砕片87点・石核12点がある。ここでは、石器群を代表的生産具(狩猟具)としてのナイフ形石器、また、その素材となった石刃類、そして、石器群を支えたであろう剥片類を単独出土石器として図示した。

<単独出土石器>

ナイフ形石器(第277図1 PL.153)

縦長剥片の基部を加工したナイフ形石器で、打面は除去され、基部側両側縁は斜向剥離様に刃潰し加工、鋭く尖る剥片端部を石器扇端部に取り込んでいる。左側縁の裏面に浅い剥離痕や微細剥離痕(刃こぼれ)がある。側縁形状は強く捻じれる。珪質頁岩製。

石刃(第277図2・3 PL.153)

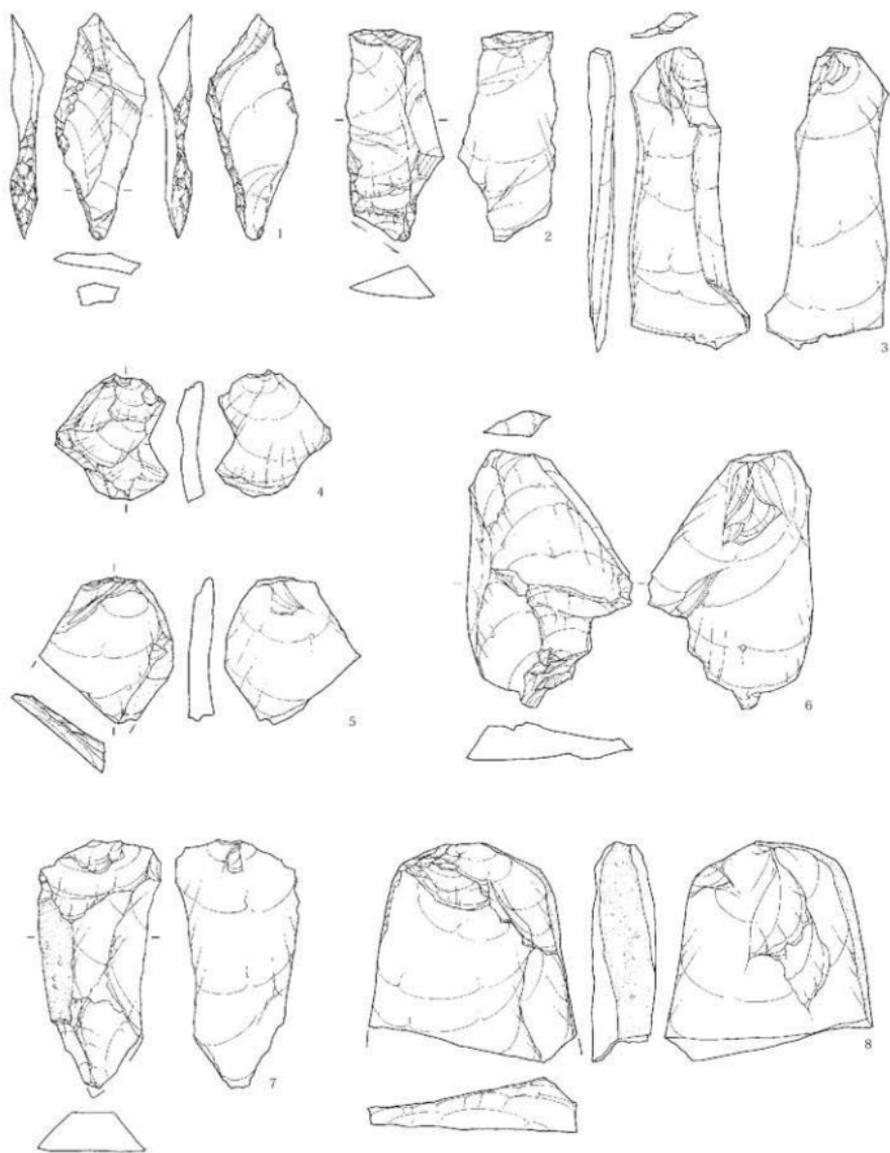
2は、剥片の最大幅が剥片中心よりやや下方にある。表面側剥離面の稜の背後を打点として、平坦な剥離面を打撃、剥離したもの。左側縁に微細剥離、同剥片端部に微細剥離痕が並ぶ。チャート製。

3は、両側縁が概ね並行するもの。平坦な剥離面打面より剥離面の稜上を打撃して、剥片剥離している。剥離時に剥片頭部が弾け飛んでいる可能性がある。表面は風化して白濁傾向。硬質泥岩製。

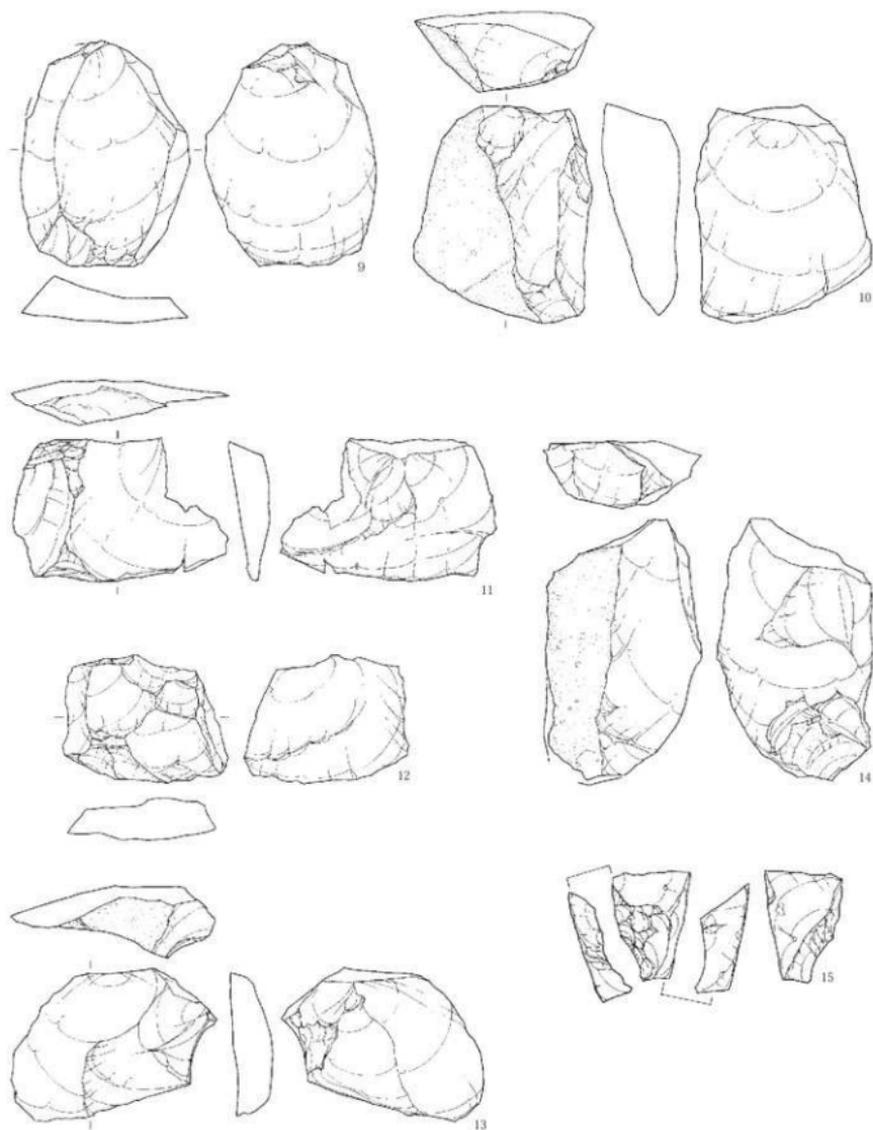
剥片(第277図4～第278図14・第279図16 PL.153・154)

剥片類は概して幅広剥片が剥離されているが、小ぶりなもの(4・5)と、やや大ぶりなもの(8～10・16)がある。小形剥片は平坦な剥離面打面より剥離されているが、意図して剥離面の稜上を打撃することはしないようである。石材は黒色安山岩製のものが主体になっているが、玉髓製のもの(4)もある。大形剥片類は、硬質泥岩製のものが多い。やや幅広く、側縁に礫面を取り込んだものも多く、石核消費の初期段階を示しているのかもしれない。

4は、玉髓製の小形剥片。剥片端部は階段状に破損、左側縁に葉理面が見える。石器群に玉髓製のものはなくおそらく他の地点で剥離され、搬入されたのであろう。11号ブロック出土。5は、黒色安山岩製の小形剥片で、剥片端部を斜め折断する。9号ブロック出土。6は、長さ6.5cmを測る幅広剥片。背面側剥離面の剥離方向は、剥片剥離軸に正対する。黒色安山岩製。7は、剥片先端



第277圖 出土石器(1)

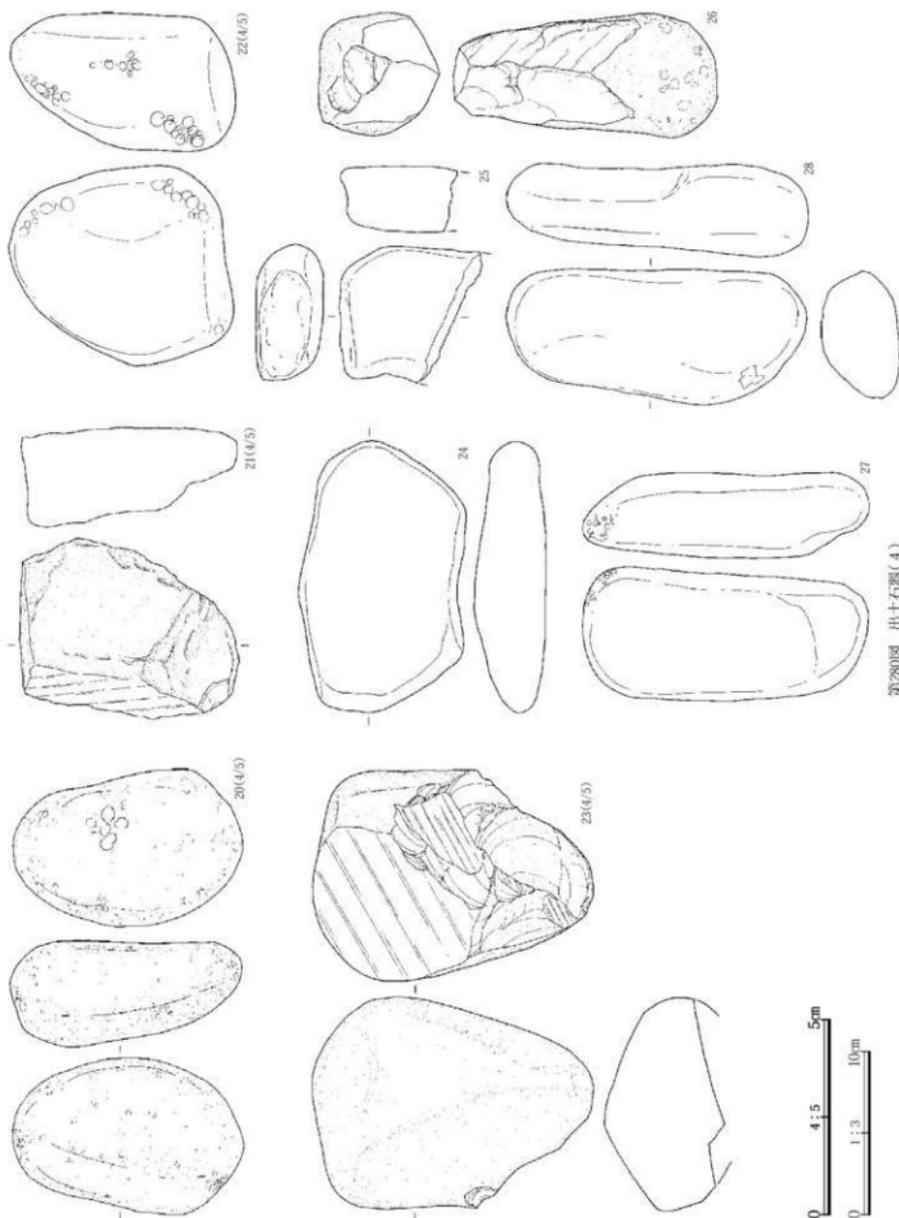


0 4:5 5cm

第278回 出土石器(2)



第279図 出土石器(3)



第280図 出土石器(4)



に稜を取り込んだ縦長の小形剥片で、下端側を欠く。左辺側に礫面が残る。硬質泥岩製。8は、右辺に礫面を残す幅広剥片。剥片中央付近で折断している。硬質泥岩製。9は、上面の平坦打面より剥離されたもの。背面側剥離面と剥片剥離軸が一致する。硬質泥岩製。10は、左辺側に礫面を大きく残した幅広剥片。硬質泥岩製。1号ブロック出土。11は、小形幅広剥片。平坦打面から剥離したもので、打点は表面側剥離面の稜を避ける。黒色安山岩製。1号ブロック出土。12は、黒色安山岩製の小形幅広剥片。裏面側にはハルバスカークが大きく発達する。7号ブロック出土。13は、硬質泥岩製の小形幅広剥片。ハルバスカークが剥片端部まで達し表面側に抜ける。11号ブロック出土。14は、縦長の幅広剥片。左辺側に礫面を残す。硬質泥岩製。4号ブロック。16は、剥片中央右辺側に大きく礫面を残した大形の幅広剥片。背面構成に残る剥離面も大割したようで、原石消費の初期段階であることがわかる。

加工痕ある剥片(第278図15)

15は、接合資料(接-13)に含まれる折断剥片の一つを加工したものが、単に折断後に二次加工したのではなく、①打面側の表面側製品から破損した、②この折断面を打面に剥離、奥まで達する初期の剥離で表面側製品から破損、③略台形状の折断剥片となったところで、いわゆる平坦剥離様の加工が左辺基部側に施されている。基部側加工や形態的特徴は台形様石器のそれであるが、左辺側からみると基部側側面の加工が不十分で、台形様石器としては端部が高く残り、柄に装着するのが難しいかもしれない。未製品とすることも可能だが、ここでは加工痕ある剥片とした。黒色安山岩製。2号ブロック。

石核(第279図17~19 PL.154)

石核は12点が出土した。石核の大部分は接合資料中に含まれるため、ここでは、接合関係のない石核3点を図示した。

17は、剥片素材の石核。打面側で小形剥片を複数枚剥離している。硬質泥岩製。18は、賽子状を呈す小形石核で、各面ともに打面と作業面を固定することなく小形剥片を剥離して、石核消費を終えている。黒色安山岩製。19は、右側面を除く各面で、大形の幅広剥片を剥離したものである。大形石核であり、まだまだ剥片剥離が可能。硬質泥岩製。

敲石類(第280図20~28・第273図 PL.154・155)

敲石類は10点(台石1点を含む)がある。特に、大形礫には打痕や摩耗痕等の明確な使用痕がないものもあるが、意味なく河床礫が出土することはなく、ここではわずかばかりの痕跡でも積極的に器種認定した。

20~22は、小形礫を用いた敲石。側縁や小口部分に敲打痕が見られる。重さは75g~150gを測る。23は、打痕の確認ができていないが、使用時に菓葉面で破損したもの。現状で150g弱を測り、完形でも300gは超えることはない。24~28は、打痕等明瞭な使用痕は見られないが、重さ約1.2kgを測る河床礫を用いたもので、石器ブロックに伴い出土するもの(24~26・28)や、石器ブロックに近接出土するもの(27)などがある。形態的には、24・25は平坦面が広く台石的要素が指摘、27・28は台石とするにはやや平坦面が狭く中間的である。

<接合資料>

接合資料は、24例82点(うち、1例は礫の接合-24)が接合した。

接合資料-1(第281・287図 PL.155)

石核1・剥片7・碎片6点からなる接合資料。厚い盤状剥片を石核素材に用いる。中央付近で石核を分割、左辺下端で1、右辺側で2を剥離、続いて打面転移を行い、3・4を剥離、再び作業面を左辺に移し5・6を剥離する。以上が、石核7から剥離された剥片・碎片類ということになる。これとは別に、右辺側下端で剥片8を剥離したのち、打面転移して右辺側で剥片(9)を連続剥離、最終的に石核10が残される。11号ブロック出土。

接合資料-2(第281・287図 PL.155)

剥片1・碎片1からなる接合資料。盤状剥片石核の側縁で1を剥離する。その後も剥離作業は続き、対辺でも小形剥片を剥離、右辺で大形剥片を剥離する。11号ブロック出土。

接合資料-3(第281図・287図 PL.155)

折断剥片3点からなる接合資料。打点位置と折断面の打点が一致、横位折断面も含め、剥離時に同時破損したことが分かる。1号ブロック出土。

接合資料-4(第281・287図 PL.155)

横位破損した剥片2点の接合資料。上面の平坦な礫面を打面に剥離した剥片が横位折断したもの。折断面の観察では側縁から割れており、果して意図的折断か判断は

難しい。3a号ブロック出土。

接合資料-5 (第282・287図 PL.155)

石核2、剥片1、破片1からなる接合資料。分割礫を小割して石核としたもの。石核は基本的に大型剥片であり、剥離された剥片は小形幅広剥片(1・2)、残核は盤状剥片石核(3・4)となる。6号ブロック出土。

接合資料-6 (第282・287図 PL.155)

剥片5、破片1からなる接合資料。河床礫を1/4分割したもので、これを剥離して大型剥片を剥離する。剥片2・3は、いずれも剥離時の縦位破損。石核は確認できていない。3a号ブロック出土。

接合資料-7 (第283・287図 PL.155)

剥片5点からなる接合資料。上面の礫面を打面に幅広剥片を連続剥離する。剥片1・2は剥離時に同時破損したものの。3b号ブロックと4a号ブロック間で接合する。

接合資料-8 (第283・287図 PL.155)

石核1、剥片3、破片1からなる接合資料。大型剥片を通常剥離したのちに、これを盤状剥片石核(3)として小形剥片を剥離する。接合資料は礫面を大きく残し、石核消費の初期段階を示す。残り石核は別地点に持ち出された可能性が高い。3a・3bブロック間で接合。

接合資料-9 (第284・287図 PL.156)

剥片2点からなる接合資料。打点は上面の礫面として、打点を暫時移動して幅広剥片を剥離。4b号ブロック出土。

接合資料-10 (第284・287図 PL.156)

剥片1、破片1からなる接合資料。1は打点から縦位に破損したもので、剥片2の打点位置に重なる。11号ブロック出土。

接合資料-11 (第284・287図 PL.156)

剥片1、破片1からなる接合資料。接合資料の剥離面構成は求心的。剥離した剥片は小形貝殻状を呈す。3a号ブロック出土。

接合資料-12 (第284・287図 PL.156)

剥片1、破片2からなる接合資料。剥片は大形幅広の剥片で、剥片端部に破片が接合、残る1点の破片は1と同じ打面から剥離されたものであるが、打点が同一で、同時剥離した可能性が高い。10号ブロック出土。

接合資料-13 (第284・287図 PL.156)

折断剥片3点からなる接合資料。本来的には厚手で大型の縦長剥片で、先端部には微細剥離痕がある。折れ面

は表面側からで、意図的折断に見える。中央の台形状剥片には部分的に側縁加工を施す。2・3a号ブロック出土。

接合資料-14 (第285・287図 PL.156)

剥片2からなる接合資料。2点とも表面側に大きく礫面を残す。右辺側剥片は、端部で小形剥片を取っている可能性がある。石核消費の初期段階。1・3b号ブロック。

接合資料-15 (第285・287図 PL.156)

横位折断下2点からなる接合資料。裏面側から折れているが、折断の理由は明らかではない。6号ブロック。

接合資料-16 (第285・287図 PL.156)

剥片2点からなる接合資料。幅広剥片が打点部分で接合したもので、同時破損したものの。9号ブロック出土。

接合資料-17 (第285・287図 PL.156)

剥片1・破片1からなる接合資料。剥片端部に破片が接合したものの。4b号ブロック出土。

接合資料-18 (第285・287図 PL.156)

剥片1、破片1からなる接合資料。剥片の打点部分で縦位破損した2点が接合。3a・3b号ブロック間で接合。

接合資料-19 (第286・289図 PL.156)

石核2点、剥片2点からなる接合資料。まず、正面で大形剥片1を剥離したのち、90°打面転移して幅広剥片を剥離する。再び、90°打面転移して石核(3・4)を得る。石核3・4は分割されているが、それぞれで剥離が行われ、石核3では側面で小形幅広剥片を、石核4では小形台形状剥片(2)を剥離する。石核は、まだ消費途中で放棄されている。8号ブロック出土。

接合資料-20 (第285・289図 PL.156)

剥片2点からなる接合資料。5号ブロックに出土した剥片(1)と、30m離れて単独出土した剥片(2)が接合したものの。5号ブロックとブロック外の遠距離接合。

接合資料-21 (第285・289図 PL.157)

剥片2点からなる接合資料。剥片1は接合図左辺から剥離、剥片2は90°打面転移して剥離。5号ブロック。

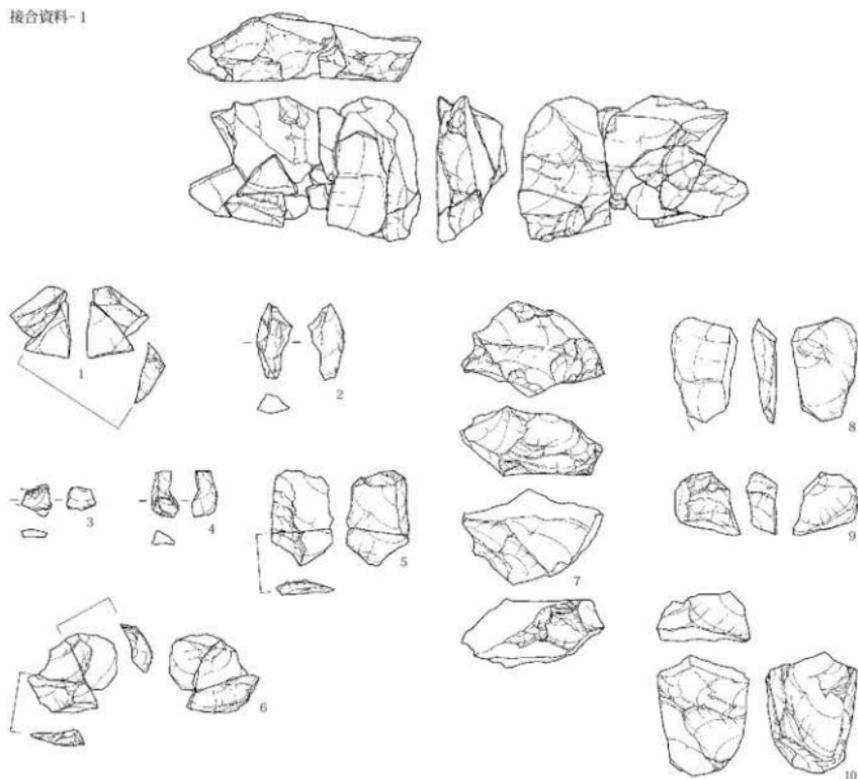
接合資料-22 (第286・289図 PL.157)

剥片2点からなる接合資料。断面台形状を呈する厚い剥片が剥離時に同時破損したものの。3a号ブロック出土。

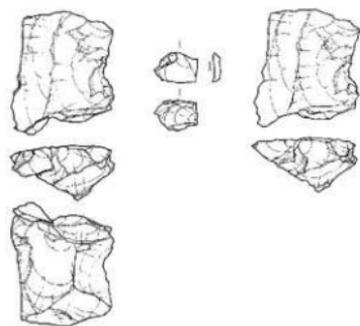
接合資料-23 (第286・289図 PL.157)

剥片3点の接合資料。剥片3点は上端側2ヶ所で破損接合したものであるが、その破損理由は明らかでない。11号ブロック出土。

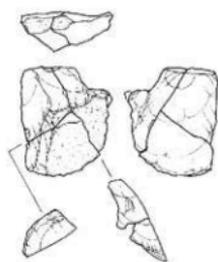
接合資料-1



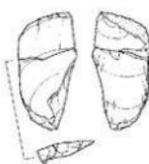
接合資料-2



接合資料-3



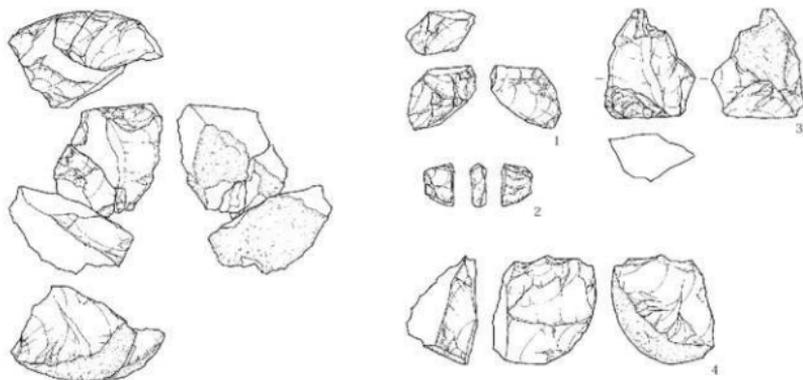
接合資料-4



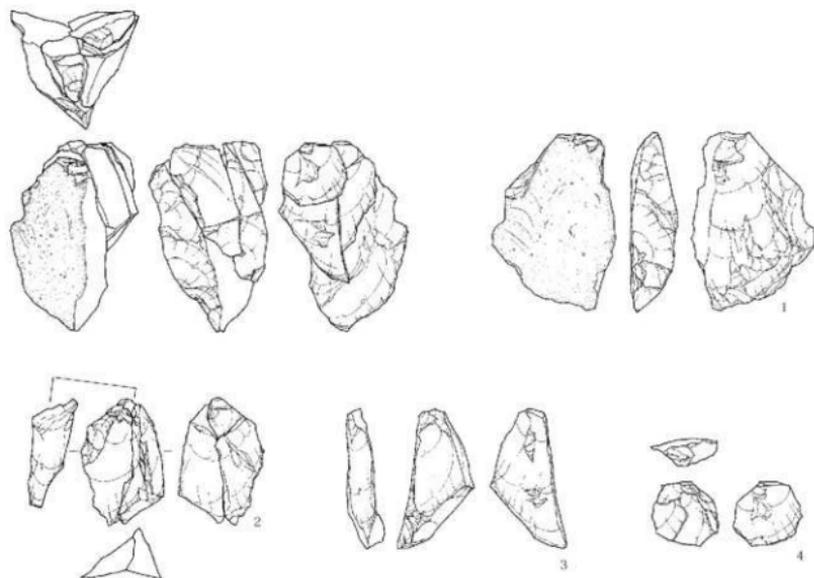
0 1 2 4cm

第281圖 接合資料-1、2、3、4

接合資料-5



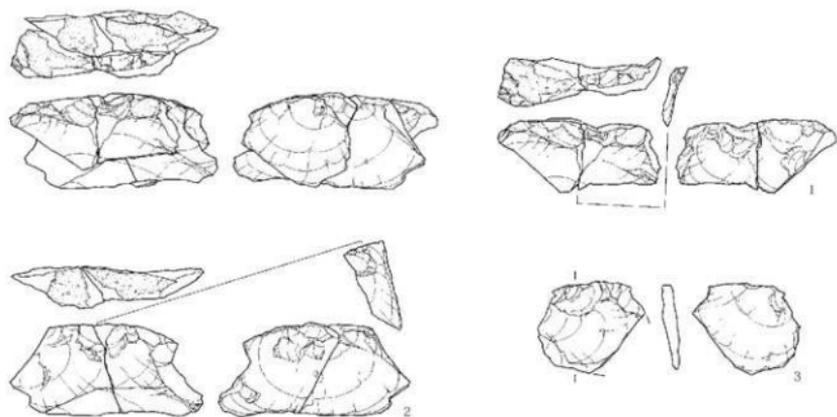
接合資料-6



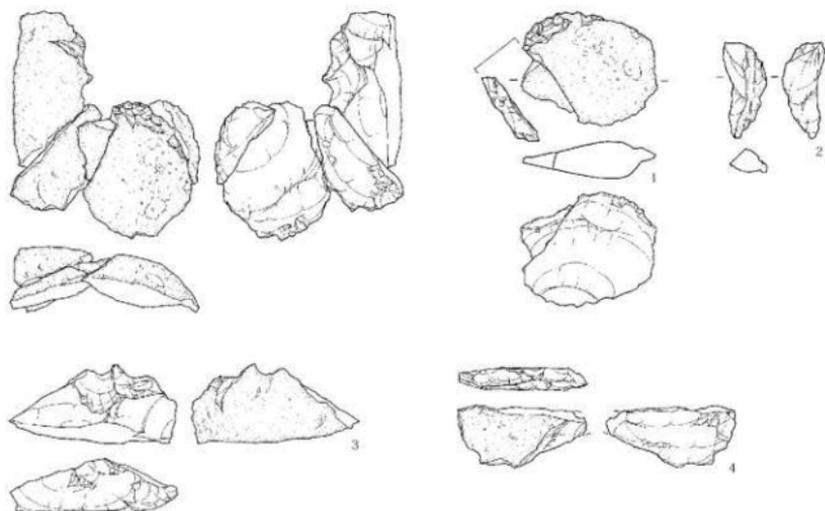
0 1 2 4cm

第282図 接合資料-5、6

接合資料-7



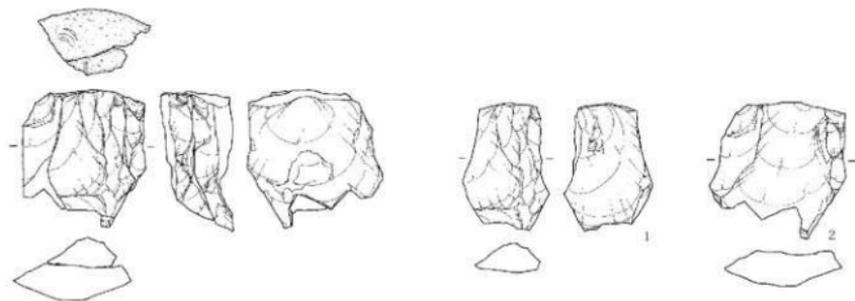
接合資料-8



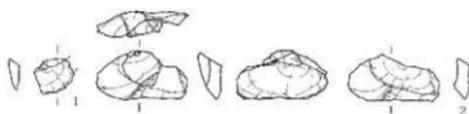
0 1 2 4cm

第283圖 接合資料-7、8

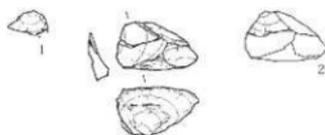
接合資料-9



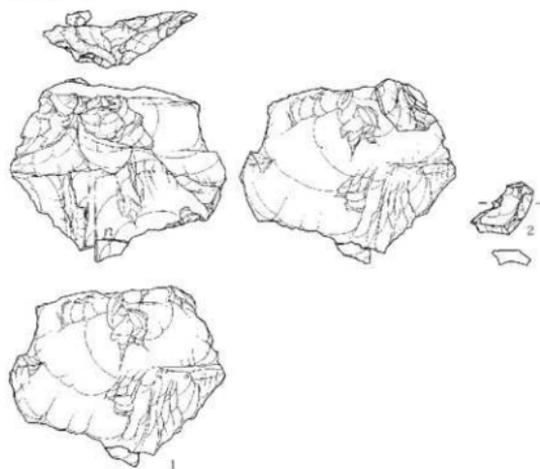
接合資料-10



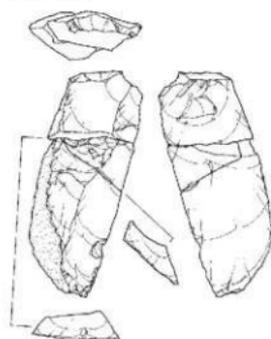
接合資料-11



接合資料-12



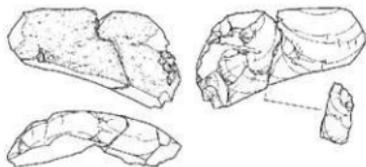
接合資料-13



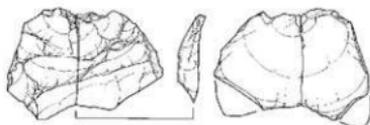
0 1:2 4cm

第284図 接合資料-9、10、11、12、13

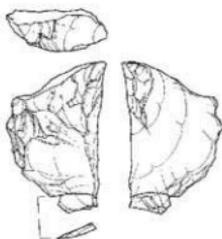
接合資料-14



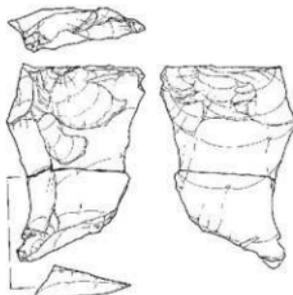
接合資料-16



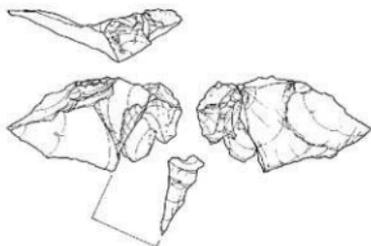
接合資料-17



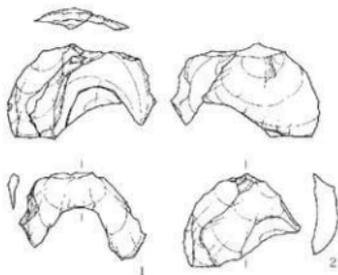
接合資料-15



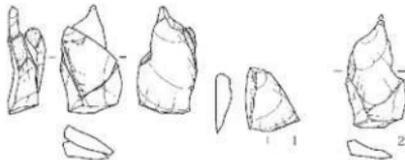
接合資料-18



接合資料-20



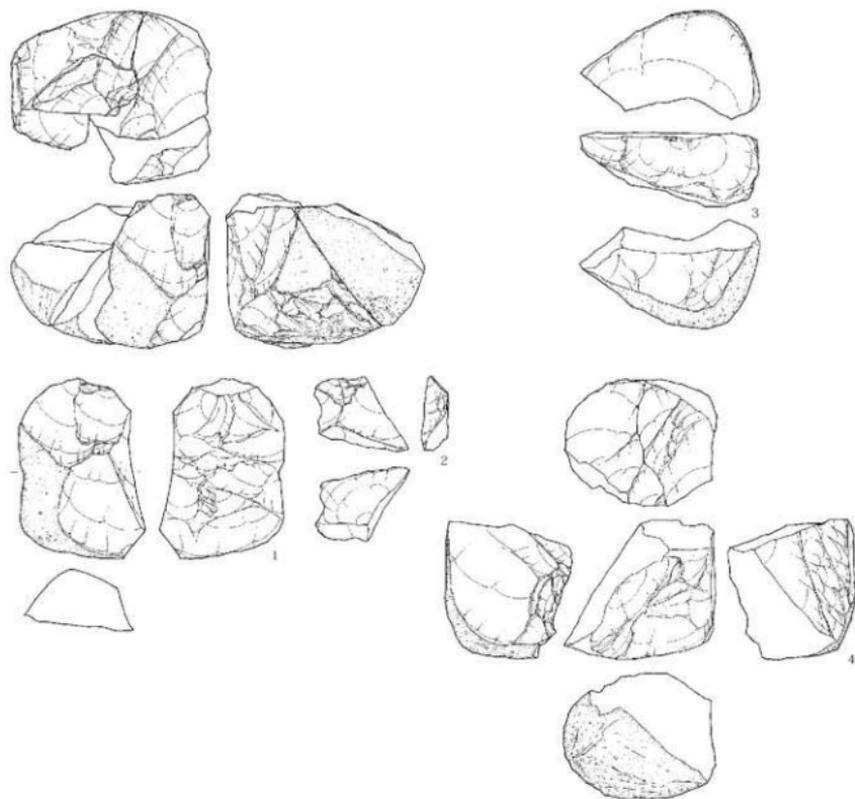
接合資料-21



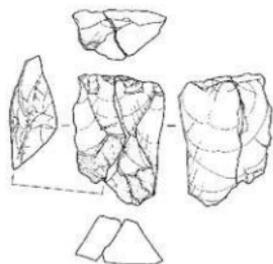
0 1 2 4cm

第285圖 接合資料-14、15、16、17、18、20、21

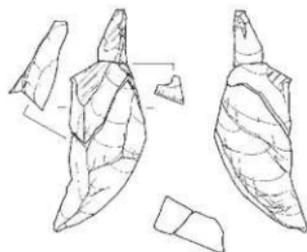
接合資料-19



接合資料-22



接合資料-23



0 1:2 4cm

第286図 接合資料-19、22、23

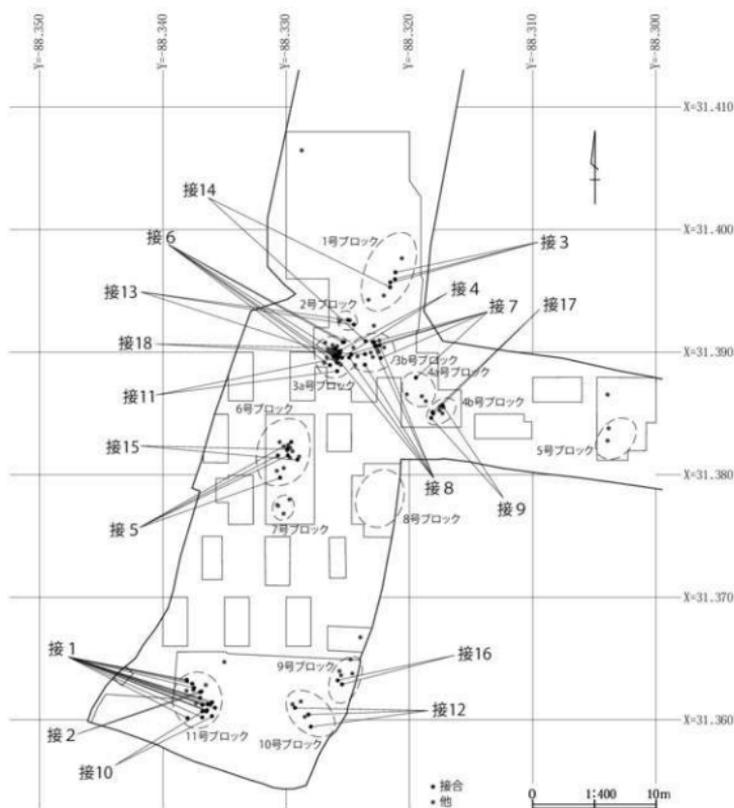
4. 接合資料の分布

接合資料は、黒色安山岩18例63点、硬質泥岩5例13点、粗粒輝石安山岩1例6点が確認されている。以下、石材毎に分布傾向について記載していきたい。

黒色安山岩は計147点(64.1%)が出土、8号ブロックを除く各ブロックに分布した。最も多く分布したのが合地北側緩斜面にある3a・3b号ブロック、次いで多い地点は台地平坦部では6号ブロック、南側緩斜面部では11号ブロックであった。接合資料はブロック内で接合するものと、ブロック間で接合するものがある。ブロック内で

接合するもの13/18例(72.2%、接-1～6・9～12・15～17)、ブロック間で接合するもの5/18例(27.8%、接-7・8・13・14・18)がある。ブロック間接合の内訳は、接-7(3b+4a号ブロック)、接-8・18(3a+3b号ブロック)、接-13(2+3a号ブロック)、接-14(1+3b号ブロック)となり、どれもが3a・3b号ブロックが剥片生産の中心的役割を担っていた。

硬質泥岩は44点(19.1%)が出土、このうち4例13点が接合した。4例中3例がブロック内接合で、1例のみ5号ブロックの剥片が30mほど離れて出土した剥片と接合



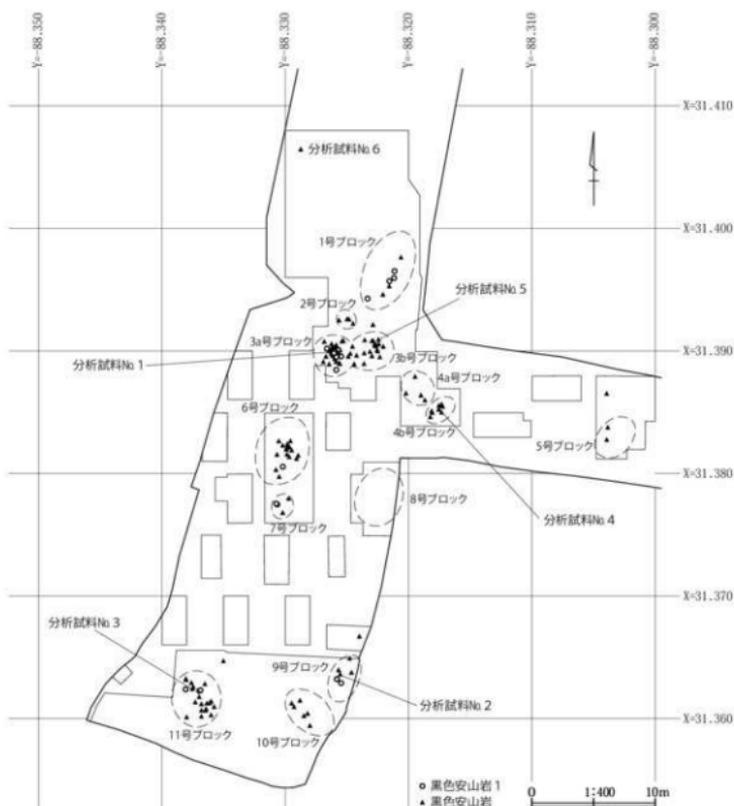
第287図 接合資料分布図(1)

した。

粗粒輝石安山岩は18点(7.8%)が出土している。この種の石材は敲石等に使用されることが圧倒的で、ここでも敲石なら使用中破損した礫片が接合する程度と考えていたが、台石(942.6g)としたものに礫片5点(706.5g)が接合し、接合状態で1649.1gの礫となった。破損理由については被熱破損が有力視され、遺跡構造分析には欠かせない火床の位置が想定されることになった。

5. 個体別資料の分布

黒色安山岩に個体識別の可能な個体1例を認定した。黒色安山岩-1としたのがそれで、白く点々と縞状構造が見られ、1・3a・6・7・11号ブロックに分布した。数量的には3a号ブロックの10点が最も多く、次いで1号ブロックの4点、6・7・9号ブロックには単独で各1～2点がある。ここで重要な点は同一個体(母岩)が南側緩斜面部のブロックにもある点で、ブロックの同時性を示唆することになるためである。本遺跡では接合資料と



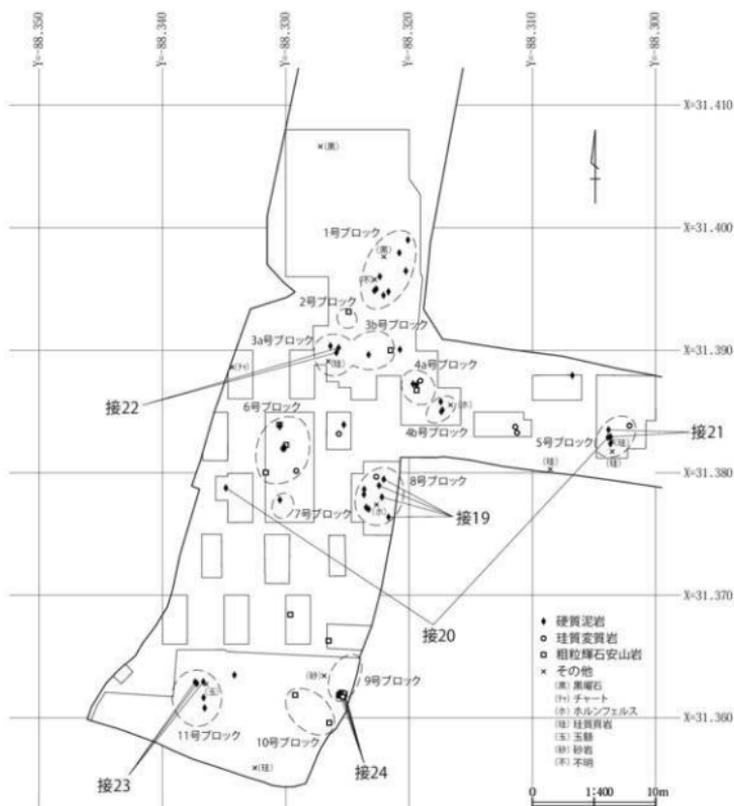
第288図 石器別分布図(1)

して確認されたわけではないが、黒色安山岩製の剥片類生産が3a号ブロックであり、唯一認定した個別別資料も同じく3a号ブロックに分布の主体があるのは、単なる偶然としては片づけられないであろう。

硬質泥岩について個別別資料の確認はできていないが、44点中38点(86.4%)が北側分布域にあり、南側分布域の硬質泥岩は6点(13.6%)と圧倒的に少ない。南側分布域の接合資料(接-23)は6点中3点が接合した大形剥片で、残る2点(石核279図17、剥片278図13)も含めて少

量の剥片生産に止まるようであり、地点間関係は不明とせざるを得ない。

珪質変質岩6点はいずれも碎片類でブロック内に出土するものと、ブロック外に出土するものがあった。破断面が鋭く、良質石材に見えるものがあり、出土地点のみ第289図に図示しておいたが、特に遺物として認定できるものはない。



第289図 接合資料分布図(2)、石器別分布図(2)

第2章 検出された遺構と遺物

第29表 出土石器一覧表

図版番号	写真図版	掲載 サイズ	番号	器種	石材	石材 (母岩)	ブロック	接合	長さ	幅	厚	重さ	分析 番号
277図4	PL153-4	4/5	48	剃片	玉髓		11		3.3	2.9	0.6	5.93	
279図17	PL154-17	4/5	310	石核	硬質泥岩		11		5.5	4.3	2.2	42.14	
278図13	PL154-13	4/5	315	剃片	硬質泥岩		11		3.9	5.2	1.9	23.13	
280図25	PL155-25	1/3	327	敲石	粗粒輝石安山岩		10		(8.7)	(8.4)	4.1	449.2	
277図1	PL153-1	4/5	329	ナイフ形石器	珪質頁岩		外		5.8	2.4	0.8	6.72	
277図5	PL153-5	4/5	331	剃片	黒色安山岩		9		3.8	3.4	0.7	9.13	
280図20	PL154-20	4/5	437	敲石	粗粒輝石安山岩		外		5.9	4.1	2.7	75.1	
280図22	PL154-22	4/5	440	敲石	粗粒輝石安山岩		外		5.8	5.1	3.5	141.0	
280図27	PL155-27	1/3	501	敲石	粗粒輝石安山岩		外		17.3	8.2	5.2	1246.2	
278図12	PL154-12	4/5	559	剃片	黒色安山岩		7		3.3	4.2	1.2	17.43	
277図8	PL153-8	4/5	572	剃片	硬質泥岩		8		5.1	5.3	1.7	63.72	
277図7	PL153-7	4/5	649	剃片	硬質泥岩		6		6.3	3.1	1.7	22.78	
278図11	PL154-11	4/5	682	剃片	黒色安山岩		1		3.7	5.5	1.1	16.96	
277図2	PL153-2	4/5	696	石刃	チャート		外		5.3	2.5	1.1	11.48	
278図9	PL153-9	4/5	726	剃片	硬質泥岩		3b		5.7	4.3	1.6	35.76	
280図23	PL154-23	4/5	758	敲石	珪質頁岩		5		7.1	5.5	3.2	149.07	
280図24	PL155-24	1/3	825	敲石?	硬質泥岩		7		16.6	10.1	4.6	1229.4	
277図6	PL153-6	4/5	833	剃片	黒色安山岩		6		6.6	4.2	1.2	27.41	
279図18	PL154-18	4/5	838	石核	黒色安山岩		6		3.8	4.2	3.9	64.86	
280図26	PL155-26	1/3	937	敲石?	粗粒輝石安山岩		2		16.1	7.6	7.3	1180.3	
278図14	PL154-14	4/5	983	剃片	硬質泥岩		4b		6.7	4.0	1.7	43.93	
279図16	PL154-16	4/5	985	剃片	硬質泥岩		4b		6.8	7.6	2.6	94.87	
280図21	PL154-21	4/5	986	敲石	ホルンフェルス		4b		5.5	4.6	2.4	78.39	
278図10	PL154-10	4/5	トレンチNo.3 No. 1	剃片	硬質泥岩		1		5.6	4.5	2.0	50.81	
279図19	PL154-19	1/2	トレンチNo.3 No. 4	石核	硬質泥岩		1		7.6	13.2	6.1	773.4	
277図3	PL153-3	4/5	ブロック1 No.20	石刃	硬質泥岩		1		7.2	3.1	0.8	14.33	
280図28	PL155-28	1/3	ブロック1 No. 8	敲石	不明		1		18.2	8.2	5.7	1224.7	
	PL157-5		26	剃片	黒色安山岩		9		3.7	3.0	0.9	8.52	2
	PL157-6		307	剃片	黒色安山岩		11		4.7	1.9	1.5	13.93	3
	PL157-3		913	剃片	黒色安山岩		3b		3.8	5.4	1.4	26.57	5
	PL157-4		984	剃片	黒色安山岩		4b		3.9	2.9	1.3	7.93	4
	PL157-1		1018	剃片	黒色安山岩		3a		2.4	2.5	1.6	9.21	1
	PL157-2		1026	剃片	黒色安山岩		3a		3.5	3.3	0.7	7.89	
	PL157-7		トレンチNo.2 No. 1	剃片	黒色安山岩		外		3.2	3.6	0.8	7.75	6
	PL157-8	4/5	ブロック1 No.12	砕片	黒曜石		1		1.8	1.2	0.8	1.20	
	PL157-9	4/5	ブロック1 No.14	剃片	黒曜石		外		1.6	2.2	0.6	2.38	
		4/5	24	礫	砂岩		外		5.6	3.3	1.8	36.04	
			25	剃片	黒色安山岩		9		5.4	6.8	1.6	59.67	
285図挿16	PL156		27	剃片	黒色安山岩	黒安-1	9	16	(4.6)	(2.9)	1.1	12.10	
285図挿16	PL156		29	剃片	黒色安山岩	黒安-1	9	16	(4.1)	(3.6)	1.8	21.89	
281図挿1-6			43	砕片	黒色安山岩		11	1	(2.3)	(2.2)	0.8	2.99	
281図挿2-1	PL155		44	砕片	黒色安山岩	黒安-1	11	2	1.3	1.8	0.4	0.85	
281図挿2-2	PL155		45	石核	黒色安山岩	黒安-1	11	2	4.2	4.9	2.3	33.31	

図版番号	写真図版	掲載 サイズ	番号	器種	石材	石材 (母岩)	ブロック	接合	長さ	幅	厚	重さ	分析 番号
286図接23	PL156		46	剥片	硬質泥岩		11	23	(6.4)	3.7	1.9	34.25	
			47	砕片	黒色安山岩		11		1.3	1.9	0.4	1.32	
			77	剥片	黒色安山岩		外		3.6	1.6	1.1	4.06	
281図接1-3			301	砕片	黒色安山岩		11	1	(0.9)	(1.2)	0.3	0.43	
281図接1-4			302	砕片	黒色安山岩		11	1	1.9	(1.1)	0.6	1.02	
281図接1-2			303	砕片	黒色安山岩		11	1	3.1	1.5	1.2	3.40	
286図接23	PL156		304	剥片	硬質泥岩		11	23	(3.4)	(2.6)	1.9	10.03	
286図接23	PL156		305	剥片	硬質泥岩		11	23	(2.2)	(1.2)	1.0	2.71	
281図接1-9			306	剥片	黒色安山岩		11	1	2.6	2.7	1.3	7.48	
			308	砕片	黒色安山岩	黒安-1	11		2.1	1.6	0.6	1.92	
			309	剥片	黒色安山岩		11		2.8	1.6	0.8	3.04	
281図接1-6			311	剥片	黒色安山岩		11	1	(1.1)	(2.9)	1.0	3.09	
281図接1-1			312	剥片	黒色安山岩		11	1	(2.1)	(2.4)	1.0	3.01	
281図接1-5			313	剥片	黒色安山岩		11	1	(2.6)	2.5	1.1	7.46	
281図接1-6			314	砕片	黒色安山岩		11	1	(2.1)	(2.1)	0.8	2.38	
281図接1-5			316	砕片	黒色安山岩		11	1	(1.6)	2.5	0.7	1.86	
281図接1-7			317	石核	黒色安山岩		11	1	2.8	5.8	4.0	53.34	
284図接10-1	PL156		318	砕片	黒色安山岩		11	10	(1.5)	(1.7)	0.7	1.19	
284図接10-2	PL156		319	剥片	黒色安山岩		11	10	1.9	3.7	1.1	4.71	
281図接1-1			320	剥片	黒色安山岩		11	1	(2.3)	(1.9)	0.8	2.21	
281図接1-10			321	石核	黒色安山岩		11	1	4.9	3.8	2.0	38.32	
			323	剥片	硬質泥岩		外		3.5	2.6	0.9	6.22	
284図接12-2	PL156		324	砕片	黒色安山岩		10	12	2.1	2.5	1.2	3.70	
284図接12-1	PL156		325	剥片	黒色安山岩		10	12	(6.9)	8.8	3.1	114.30	
			326	砕片	黒色安山岩		10		1.6	1.8	1.0	2.50	
284図接12-1	PL156		328	砕片	黒色安山岩		10	12	(0.9)	(1.4)	0.5	0.42	
			332	砕片	黒色安山岩		9		2.2	0.8	0.5	0.70	
			333	剥片	黒色安山岩		外		2.1	3.8	1.0	4.43	
281図接1-8			407	剥片	黒色安山岩		11	1	(4.3)	2.7	1.0	9.09	
			408	砕片	黒色安山岩		10		0.8	1.4	0.3	0.31	
			409	砕片	黒色安山岩		10		1.8	0.7	0.4	0.32	
			410	礫	粗粒輝石安山岩		10		(11.0)	10.6	2.5	379.2	
	PL157		439	礫片	粗粒輝石安山岩		9	24	5.9	6.4	3.8	180.1	
	PL157		441	礫	粗粒輝石安山岩		9	24	4.4	6.0	2.6	73.9	
	PL157		442	礫片	粗粒輝石安山岩		9	24	7.2	8.8	4.5	388.1	
	PL157		443	台石?	粗粒輝石安山岩		9	24	8.3	11.0	8.1	942.6	
	PL157		444	礫片	粗粒輝石安山岩		9	24	3.0	4.1	1.8	24.0	
	PL157		445	礫片	粗粒輝石安山岩		9	24	3.6	4.4	2.0	40.4	
			452	剥片	黒色安山岩		外		5.0	2.6	1.3	16.97	
			547	礫	粗粒輝石安山岩		外		12.5	(12.0)	6.5	1182.0	
285図接20-2	PL156		550	剥片	硬質泥岩		外	20	3.8	4.7	1.1	14.42	
			569	剥片	硬質泥岩		8		4.4	7.5	2.2	71.02	
			570	剥片	硬質泥岩		8		3.7	3.7	1.2	13.84	
			571	剥片	硬質泥岩		8		8.3	1.9	1.2	15.18	
286図接19-4			613	石核	硬質泥岩		8	19	5.7	6.2	5.2	203.27	
286図接19-2			614	剥片	硬質泥岩		8	19	3.1	3.8	1.1	10.85	
			615	剥片	ホルンフェルス		8		6.0	2.7	1.0	16.05	
286図接19-3			616	石核	硬質泥岩		8	19	3.0	7.2	4.4	101.81	

第2章 検出された遺構と遺物

図版番号	写真図版	掲載 サイズ	番号	器種	石材	石材 (母岩)	ブロック	接合	長さ	幅	厚	重さ	分析 番号			
286図版19-1			617	剥片	硬質泥岩		8	19	7.4	5.1	2.9	95.54				
			636	剥片	珪質変質岩		8		2.2	3.0	1.4	9.42				
			650	砕片	黒色安山岩		6		2.2	1.2	0.7	2.01				
			651	砕片	黒色安山岩		6		1.2	1.4	0.7	1.11				
			652	剥片	硬質泥岩		6		5.0	4.7	1.5	35.87				
			653	剥片	硬質泥岩		6		4.6	4.8	1.7	32.83				
282図版5-4			654	石核	黒色安山岩		6	5	4.5	4.2	2.8	50.87				
			666	礫	粗粒輝石安山岩		6		7.5	4.5	2.7	148.21				
			673	剥片	硬質泥岩		6		4.1	2.8	1.3	13.58				
			677	剥片	硬質泥岩		外		2.0	2.6	1.0	4.77				
			678	砕片	珪質変質岩		外		1.5	1.7	1.0	2.97				
			680	剥片	黒色安山岩	黒安-1	1		5.2	4.6	1.3	28.53				
283図版7-2			681	剥片	硬質泥岩		1		9.1	3.4	2.1	39.52				
			683	剥片	硬質泥岩		1		3.5	2.8	0.6	8.05				
			722	剥片	黒色安山岩		3b	7	(3.8)	(5.0)	1.4	21.58				
			283図版8-2	723	剥片	黒色安山岩		3a	8	4.0	1.8	1.2	5.55			
			724	砕片	黒色安山岩		3b		2.0	1.9	0.2	0.66				
			285図版18	PL156	725	砕片	黒色安山岩		3b	18	(3.2)	(2.4)	1.3	6.50		
283図版8-1			727	剥片	黒色安山岩		3b	8	(4.7)	(5.5)	1.4	37.41				
			728	砕片	黒色安山岩		3b		1.5	2.2	0.4	1.18				
			737	砕片	硬質泥岩		4a		2.7	2.7	0.6	3.82				
			738	剥片	硬質泥岩		4a		2.3	3.5	0.8	7.43				
			283図版7-3			739	剥片	黒色安山岩		4a	7	(3.8)	(4.4)	1.0	12.18	
						740	砕片	黒色安山岩		4a		1.7	1.2	0.4	1.16	
741	砕片	黒色安山岩					4a		3.1	2.0	1.0	6.79				
742	石核	珪質変質岩					4a		2.4	1.3	1.3	4.56				
743	礫片	粗粒輝石安山岩					4a		2.7	3.9	1.9	21.61				
753	砕片	黒色安山岩					5		2.1	1.0	0.3	0.75				
285図版21-1	PL156	754	剥片	硬質泥岩		5	21	2.9	2.3	0.8	3.70					
285図版21-2	PL156	755	剥片	硬質泥岩		5	21	(4.4)	2.5	1.2	8.42					
285図版20-1	PL156		756	剥片	硬質泥岩		5	20	3.6	5.1	0.7	5.84				
			757	砕片	黒色安山岩		5		1.4	1.7	0.3	0.30				
			759	砕片	硬質泥岩		5		2.1	1.7	1.5	4.26				
			790	砕片	珪質変質岩		5		1.2	1.8	0.7	1.39				
			791	砕片	珪質変質岩		外		1.5	2.0	0.6	2.01				
			792	砕片	珪質変質岩		外		1.0	1.8	0.9	1.20				
282図版5-1			806	剥片	硬質泥岩		外		2.0	3.3	1.1	5.35				
			822	砕片	黒色安山岩		7		2.0	1.0	0.4	0.77				
			823	砕片	黒色安山岩	黒安-1	7		1.0	1.6	0.5	0.76				
			824	剥片	黒色安山岩	黒安-1	7		2.7	4.1	1.2	8.85				
			827	剥片	黒色安山岩		6	5	2.8	2.6	1.8	11.92				
			828	砕片	粗粒輝石安山岩		6		0.9	1.1	0.3	0.38				
282図版5-2			829	剥片	黒色安山岩		6		2.8	2.9	0.8	5.20				
			830	砕片	黒色安山岩	黒安-1	6		0.4	0.5	0.1	0.04				
			832	砕片	黒色安山岩		6	5	1.8	1.3	0.6	1.71				
			285図版15	PL156	834	剥片	黒色安山岩		6	15	(4.7)	5.5	1.8	43.32		
			836	砕片	粗粒輝石安山岩		6		1.3	1.0	0.4	0.47				
			837	砕片	黒色安山岩		6		1.7	2.4	0.5	2.28				

図版番号	写真図版	掲載 サイズ	番号	器種	石材	石材 (母岩)	ブロック	接合	長さ	幅	厚	重さ	分析 番号
282図接5-3			839	石椀	黒色安山岩		6	5	4.5	3.7	1.8	29.40	
			840	碎片	黒色安山岩		6		2.5	1.4	0.5	1.36	
			841	碎片	黒色安山岩		6		1.2	1.8	0.7	1.75	
283図接15	PL156		842	剥片	黒色安山岩		6	15	(3.8)	4.6	1.7	21.64	
			843	剥片	黒色安山岩		6		1.5	1.0	0.3	0.49	
			844	碎片	珪質変質岩		6		0.8	0.9	0.6	0.37	
283図接7-1			901	剥片	黒色安山岩		3b	7	(2.8)	(3.4)	1.6	10.27	
			902	碎片	黒色安山岩		3b		1.7	2.3	0.4	1.15	
			903	剥片	黒色安山岩		3b		1.6	1.9	0.9	2.37	
			904	剥片	黒色安山岩		3b		1.4	1.0	0.3	0.47	
			905	碎片	黒色安山岩		3b		1.2	1.2	0.4	0.59	
			906	剥片	黒色安山岩		2		1.2	2.8	0.9	2.24	
283図接8-1			907	剥片	黒色安山岩		3b		2.1	1.4	0.4	1.05	
			908	剥片	黒色安山岩		3b	8	(2.2)	(1.1)	0.8	2.11	
			909	剥片	黒色安山岩		3b		2.3	1.0	0.7	1.30	
283図接7-2			910	剥片	黒色安山岩		3b	7	(3.7)	(4.5)	1.7	21.21	
283図接8-4			911	剥片	黒色安山岩		3b	8	2.6	(5.2)	1.0	13.89	
283図接7-1			912	剥片	黒色安山岩		3b	7	(2.9)	(3.5)	2.0	15.28	
			914	碎片	黒色安山岩		外		3.0	1.1	1.0	3.85	
283図接14	PL156		915	剥片	黒色安山岩		3b	14	3.3	4.9	2.3	23.85	
			916	剥片	黒色安山岩		3b		2.6	3.3	1.3	8.75	
282図接6-2			917	剥片	黒色安山岩		3a	6	(5.1)	(2.2)	1.7	10.19	
282図接6-2			918	剥片	黒色安山岩		3a	6	(1.6)	(1.5)	1.5	1.96	
			919	剥片	黒色安山岩		3a		1.4	1.1	0.6	0.84	
286図接22	PL156		920	剥片	硬質泥岩		3a	22	(4.5)	(2.2)	2.1	12.65	
281図接4	PL155		921	剥片	黒色安山岩	黒安-1	3a	4	(3.3)	2.4	0.9	7.67	
282図接6-2			922	剥片	黒色安山岩		3a	6	(4.9)	(1.9)	2.0	14.70	
			923	剥片	黒色安山岩		3a		2.8	2.3	1.1	4.43	
281図接4	PL155		924	剥片	黒色安山岩	黒安-1	3a	4	(2.0)	2.3	0.8	3.40	
			925	剥片	黒色安山岩		3a		2.9	1.5	0.6	2.09	
286図接22	PL156		926	剥片	硬質泥岩		3a	22	(5.3)	(2.6)	1.9	22.33	
284図接13	PL156		927	剥片	黒色安山岩		3a	13	(6.5)	(3.8)	2.0	32.84	
			928	剥片	黒色安山岩		3a		2.9	1.1	0.6	1.20	
284図接11-2	PL156		929	剥片	黒色安山岩	黒安-1	3a	11	2.0	3.4	0.9	4.31	
282図接6-4			930	剥片	黒色安山岩		3a	6	2.7	2.8	1.2	6.38	
			931	剥片	黒色安山岩		3a		2.4	2.5	0.6	3.72	
284図接11-1	PL156		932	剥片	黒色安山岩	黒安-1	3a	11	(1.0)	(1.1)	0.3	0.32	
278図15		4/5	933	加工痕ある剥片	黒色安山岩		2	13	(2.0)	(3.0)	1.1	5.73	
284図接13	PL156	1/2											
			934	剥片	黒色安山岩		2		1.6	1.9	0.4	1.59	
284図接13	PL156		935	剥片	黒色安山岩		2	13	(3.0)	(3.9)	1.7	16.86	
			936	礫	粗粒輝石安山岩		3b		11.7	13.7	11.0	2579.4	
			963	剥片	珪質頁岩		5		4.1	6.8	1.9	458.2	
			975	剥片	黒色安山岩		4a		4.1	2.8	0.7	11.03	
285図接17	PL156		976	剥片	黒色安山岩		4b	17	(5.6)	4.1	1.7	36.26	
284図接9-1			977	剥片	黒色安山岩		4b	9	5.2	3.6	2.4	28.47	
			978	剥片	硬質泥岩		4b		3.1	2.9	0.9	7.94	
284図接9-2			979	剥片	黒色安山岩		4b	9	(5.7)	(5.5)	2.2	48.30	

第2章 検出された遺構と遺物

図版番号	写真図版	掲載サイズ	番号	器種	石材	石材(母岩)	ブロック	接合	長さ	幅	厚	重さ	分析番号
			980	剥片	黒色安山岩		4b		4.6	1.9	1.1	8.27	
			981	砕片	黒色安山岩		4b		1.0	2.4	0.6	1.29	
			982	砕片	黒色安山岩		4b		1.6	1.3	0.5	1.15	
			987	砕片	硬質泥岩		外		1.3	1.4	0.6	0.96	
			1004	加工痕ある剥片	黒色安山岩		3a		2.2	2.4	0.8	5.37	
282図接6-1			1005	剥片	黒色安山岩		3a	6	7.3	5.1	2.0	69.69	
			1006	剥片	珪質頁岩		3a		2.4	5.6	1.8	14.43	
			1007	砕片	黒色安山岩		3a		2.2	2.0	0.3	1.35	
			1009	砕片	黒色安山岩		3a		1.4	1.9	0.4	1.09	
			1010	砕片	黒色安山岩		3a		1.3	1.9	0.4	0.99	
			1011	砕片	黒色安山岩		3a		1.5	1.9	1.0	2.01	
			1012	砕片	硬質泥岩		3a		1.8	2.1	0.9	2.02	
			1013	砕片	黒色安山岩		3a		1.0	0.9	0.4	0.26	
			1014	砕片	黒色安山岩		3a		1.3	2.1	0.4	0.99	
			1015	剥片	黒色安山岩		3a		3.1	2.3	0.9	4.67	
285図接18	PL156		1016	剥片	黒色安山岩		3a	18	(3.9)	(5.9)	2.1	21.65	
			1017	剥片	黒色安山岩		3a		3.3	2.2	0.6	4.51	
			1019	砕片	黒色安山岩		3a		0.7	1.1	0.1	0.18	
282図接6-3			1020	剥片	黒色安山岩		3a	6	5.2	3.2	1.6	18.49	
			1021	砕片	黒色安山岩	黒安-1	3a		0.8	1.3	0.2	0.20	
283図接8-3			1022	石核	黒色安山岩		3a	8	3.3	6.8	2.3	42.56	
			1023	砕片	黒色安山岩	黒安-1	3a		1.5	0.4	0.2	0.12	
			1024	砕片	黒色安山岩	黒安-1	3a		1.2	0.8	0.3	0.30	
			1025	砕片	黒色安山岩		3a		2.2	1.1	0.7	1.48	
			1040	剥片	黒色安山岩		6		2.7	1.8	1.0	4.32	
285図接17	PL156		1041	砕片	黒色安山岩		4b	17	(0.9)	1.7	0.4	0.58	
			1043	砕片	黒色安山岩	黒安-1	3a		0.8	1.8	0.2	0.42	
			1044	砕片	黒色安山岩	黒安-1	3a		1.8	1.3	0.6	1.53	
			1045	砕片	黒色安山岩	黒安-1	3a		2.0	1.2	0.9	1.71	
			1046	砕片	黒色安山岩		3a		1.9	1.4	0.4	0.96	
			1047	砕片	黒色安山岩		3a		1.2	1.1	0.2	0.71	
			1048	砕片	黒色安山岩		3a		2.7	2.0	0.8	3.23	
			1049	砕片	黒色安山岩		3b		1.6	1.0	0.5	0.67	
			1050	砕片	黒色安山岩		3a		2.5	1.9	0.9	5.01	
281図接3	PL155		トレンチNo.3 No.2	剥片	黒色安山岩	黒安-1	1	3	(3.1)	(2.4)	1.6	9.81	
			トレンチNo.3 No.3	剥片	黒色安山岩		1		6.1	6.4	1.7	74.58	
			ブロック1 No.13	剥片	硬質泥岩		1		2.6	4.0	1.6	20.08	
			ブロック1 No.19	剥片	硬質泥岩		1		5.1	5.3	0.9	16.46	
			ブロック1 No.3	剥片	黒色安山岩	黒安-1	1	3	(2.7)	(3.1)	1.2	8.84	
281図接3	PL155		ブロック1 No.4	砕片	黒色安山岩	黒安-1	1	3	(3.5)	(2.5)	1.4	5.42	
281図接3	PL155		ブロック1 No.5	剥片	黒色安山岩		1	14	4.0	3.5	1.8	24.71	
285図接14	PL156		ブロック1 No.6	剥片	硬質泥岩		1		4.3	6.3	0.9	18.34	
			東区1区2曲4	剥片	珪質頁岩		外		2.4	3.2	0.7	4.59	

第3章 科学分析

火山灰分析

発掘調査に際し、下高田白山遺跡では1区の台地部、下高田稲荷谷Ⅱ遺跡では5区の水田検出部において、堆積土壌中のテフラ分析を(株)火山灰考古学研究所の早田氏に依頼し行った。

下高田白山遺跡1区の台地部では、地表下2.5mほどの試料採取範囲より、浅間Bテフラ(As-B)・浅間C軽石(As-C)・浅間D軽石(As-D)・浅間六合軽石・鬼界アカホヤ火山灰・浅間藤岡軽石(As-Fo)・浅間総社軽石(As-Sj)などを検出し、群馬県西毛地区における標準的な土層であることが確認された。また、下高田稲荷谷Ⅱ遺跡の5区水田部では、検出水田を覆う成層したテフラ層の同定を主目的とし、浅間Bテフラ(As-B)と同定された。

植物珪酸体分析・花粉分析

上記の火山灰分析を行った同地点より採取された試料から、植物珪酸体分析・花粉分析を(株)古環境研究所に委託して行った。分析は、下高田稲荷谷Ⅱ遺跡検出のAs-B下水田と下層(As-C)面における稲作の可能性、また、周辺の植生環境を探ることを目的に行われた。

分析の結果、検出のAs-B下水田面および下層より、高い密度のイネのプラント・オパールが検出された。また、下層のAs-C混在層付近においても少量のイネのプラント・オパールが検出され、稲作の可能性が指摘された。

下高田白山遺跡出土須臾器に付着の黒色塗膜分析

分析対象の出土した10号竪穴建物は、調査区1区の南端部に検出された遺構で、やや歪な隅丸長方形を呈した竪穴建物である。分析対象の須臾器鉢(第30図No.9)は、建物掘り方の東コーナー部に穿たれた土埋土内より出土する。底部から体部1/4ほどの破片で、残存する内面の全域に黒色の塗膜が認められる。塗膜は破片の端部まで至るが破断面には至っておらず、塗膜付着・乾燥後に破断したものと推察される。塗膜表面はやや光沢を持ち、籠もしくは刷毛で掻いたと思われる筋状の条痕が多方向に残る。以上の肉眼観察から、付着する黒色塗膜は漆の

可能性が想定され、物質の特定を目的に専門業者に分析を依頼した。

分析は、(株)パレオ・ラボにより、赤外分光分析と顕微鏡観察が行われ、後掲の報告のとおり、付着した黒色塗膜は漆膜が土器に直接塗られたものと判断された。

分析結果を受けて資料の状況を鑑みるに、須臾器内面に付着した黒色塗膜は、塗膜に厚さや縮れが認められないことから、漆が備蓄・保管されたものではなく、籠もしくは刷毛で掻き取ったと思われる筋状の条痕が多方向に残ることから、塗布作業にパレットとして使用されたが須臾器機が、使用後に破断したものと推察される。出土遺構の10号竪穴建物からは他に漆関連の遺物の出土は見られず、本資料も掘り方よりの出土であることから、当該建物が漆関連の工房であったとは断定できない。

下高田稲荷谷Ⅱ遺跡出土の黒曜石石核の産地同定

下高田稲荷谷Ⅱ遺跡出土の黒曜石石核(原石)(第248図No.5)は、平成25(2013)年に群馬県教育委員会文化財保護課(当時)により実施された試掘調査の際に、調査区2区の中央に路線に沿って設定されたトレンチの中央やや北西寄りの底面付近より出土した。その後の本調査において、当該地点から遺構は検出されていない。

対象資料は、径11.6～12.3cm、重量1,633gを測り、外観は自然面と汚れた剥落面、比較的きれいな剥落面の三様が認められる。

本遺跡は群馬県の南西部、高岡市と安中市の境界に位置し、碓氷峠・入山峠・内山峠を越えて、複数のルートで本県と長野県を結ぶ交通の要衝に在る。また、周辺遺跡の中野谷松原遺跡より3,567gを測る超大型の黒曜石原石が出土していることから、原産地の同定を目的に、当該資料の非破壊検査による産地分析を専門業者に依頼した。

分析は、(株)パレオ・ラボにより、後掲の報告のとおりエネルギー分散型蛍光X線分析装置による元素分析が行われ、分析の結果、産地は冷山群(長野県 蓼科エリア)と推定された。

以下に各分析の詳細報告を掲げる。

第1節 下高田白山遺跡・下高田稲荷谷Ⅱ遺跡火山灰分析

(株)火山灰考古学研究所

1. はじめに

関東地方北西部に位置する西毛地域には、浅間、八ヶ岳火山列横岳、御岳をはじめとする北関東地方や中部地方の火山のほか、中国地方さらには九州地方など遠方に位置する火山から噴出したテフラ(火山砕屑物、いわゆる火山灰)が数多く降灰している。とくに後期更新世以降に降灰したそれらの多くについては、層相や年代さらに岩石記載の特徴がテフラ・カタログ(たとえば町田・新井, 2011)などに収録されており、露頭や考古遺跡などで調査分析を行いテフラを検出することで、地形や地層の形成年代さらには考古学的な遺物や遺構の年代などに関する研究を実施できるようになっている。

富岡市向原遺跡の発掘調査でも、層位や不明な土層や水田遺構が認められたことから、地質調査を実施して土層の層序やテフラ層の記載を行うとともに、高純度で分析試料が採取された。ここでは、採取された試料を対象として実験室内で行われたテフラ分析(テフラ検出分析・屈折率測定)を実施した結果を述べる。

2. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

向原Ⅳ遺跡の地点1(下高田白山遺跡・1区トレンチA南壁)と、地点2(下高田稲荷谷Ⅱ遺跡・5区水田A南壁)において、テフラ層ごとに、また土壌や腐植質細粒堆積物については層境にかららないように約5cmごとに設定された試料(図290, 図291)のうち、基本的に1試料おきに採取されたテフラ分析用試料について、軽石や火山ガラスなどのテフラ粒子の量や特徴を定性的に把握するテフラ検出分析を行って、テフラの検出および指標テフラとの同定を行った。また、特徴的な軽石2試料(軽石A・軽石B)についてもテフラ検出分析を実施した。分析対象試料は、合計で45試料である。分析方法は次のとおりである。

- 1) テフラ層試料について5g、土壌試料について8g、さらに腐植質細粒堆積物について10gを電子天秤で秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。

3) 恒温乾燥器により80℃で恒温乾燥。

4) 実体顕微鏡下で観察。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表30および表31に示す。各地点におけるテフラの検出状況を次に記載する。

1) 地点1(下高田白山遺跡・1区トレンチA南壁)

地点1では、最下位の試料46で量はわずかではあるものの、軽石試料をのぞくほかの試料から、火山ガラスが比較的多く検出された。その多くは無色透明や淡灰色の塊状あるいは破片状の分厚い中間型である。また、磁鉄鉱など不透明鉱物以外の重鉱物には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。そのほかには、下記の試料で特徴的なテフラ粒子が認められた。

- ・試料40: 白色のスポンジ状軽石型火山ガラスが含まれる。このような白色のスポンジ状軽石型ガラスは、試料38~34でもごく少量ながら認められる。また重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石のほかに、ごくわずかながら角閃石が含まれている。
- ・試料28・試料26: やや粗粒の火山灰をやや比較的多く含むこれらの試料では、灰白色のスポンジ状軽石型ガラスが認められる。
- ・試料20: 中間型ガラスやスポンジ状あるいは繊維束状の軽石型ガラスのほかに、無色透明ながら薄手のバブル型ガラスがごく少量認められる。
- ・試料16: 黄色の粗粒の軽石(軽石B)を含む土層から採取され、比較的褐色の粗粒火山灰を含むこの試料には、中間型ガラスやスポンジ状あるいは繊維束状の軽石型ガラスのほかに、灰色や白色のスポンジ状軽石型ガラスが含まれている。
- ・軽石B: 軽石はスポンジ状に発泡した軽石には、重鉱物として斜方輝石や単斜輝石が含まれている。
- ・軽石A: 軽石はスポンジ状に発泡した軽石には、重鉱物として斜方輝石や単斜輝石が含まれている。
- ・試料8: 中間型ガラスのほかに、灰白色のスポンジ状軽石型ガラスが連続的に検出されはじめる。
- ・試料1: 試料4からは淡灰色の軽石(最大径2.2mm)や、淡灰色、淡褐色、褐色のスポンジ状軽石型ガラスが

検出されるようになる。そして、これらは、テフラ層から採取された試料1に多く含まれている。

2) 地点2(下高田稲荷谷Ⅱ遺跡・5区水田A南壁)

地点2では、試料23、試料19、試料17でやや量が少ないものの、無色透明や淡灰色の中間型ガラスが比較的多く検出された。このほか、比較的多くの試料に、白色のスポンジ状軽石型ガラスが含まれている。また、ほとんどの試料で、磁鉄鉱など不透明鉱物以外の重鉱物として、斜方輝石や単斜輝石が認められる。ほかには、次の試料でやや特徴的なテフラ粒子が認められた。

- ・試料11・試料10：スポンジ状に発泡した灰白色の軽石が含まれている。試料10には、斜方輝石や単斜輝石のほかに、角閃石がごく少量含まれている。
- ・試料2：成層したテフラ層のうち、軽石に富むユニットから採取された試料2には、淡灰色、淡褐色、褐色の軽石(最大径8.9mm)や、それらの細粒物であるスポンジ状軽石型ガラスが多く含まれている。
- ・試料1：試料1には、淡灰色、淡褐色、褐色、白色の軽石(最大径13.7mm)や、それらの細粒物であるスポンジ状軽石型ガラスが多く含まれている。

3. 屈折率測定(火山ガラス・鉱物)

(1) 測定試料と測定方法

野外での土層観察で認められた比較的大粒の軽石2試料(地点1の軽石A・軽石B)や、軽石を多く含む試料(地点1の試料46)、テフラ検出分析で判明した特徴的なテフラ粒子を含む試料(地点1の試料28、試料20)のうちの3試料の合計5試料に含まれる火山ガラスと斜方輝石の屈折率特性を把握して、指標テフラとの同定精度の向上を図った。測定は、温度変化型屈折率測定法(増原, 1993)に従った。測定対象の火山ガラスは、テフラ検出分析後に篩別で得た0.063~0.125mmの火山ガラスである。一方、斜方輝石は、やはり篩別後に得た>0.25mmの粒子から実顕微鏡下でピックアップした後に、軽く粉砕したものである。

(2) 測定結果

屈折率の測定結果を、西毛地域に降灰している後期旧

石器時代以降の指標テフラの特徴とともに表32に示す。屈折率特性は、下位より次のとおりである。

地点1の試料46に含まれる火山ガラス(31粒子, n)と斜方輝石(32粒子, γ)の屈折率は、それぞれ1.500-1.503と1.702-1.711である。試料28に含まれる火山ガラス(32粒子, n)と斜方輝石(30粒子, γ)の屈折率は、それぞれ1.512-1.518と1.704-1.710である。

試料20に含まれる火山ガラス(31粒子)の屈折率(n)は、1.499-1.510である。この値は1.499-1.503(28粒子)と、1.510(3粒子)のbimodal組成となっている。また、この試料に含まれる斜方輝石(31粒子)の屈折率(γ)は、1.703-1.713である。

軽石Bのガラス部(32粒子, n)と斜方輝石(31粒子, γ)の屈折率は、それぞれ1.514-1.517と1.703-1.709である。また、軽石Aのガラス部(30粒子, n)と斜方輝石(30粒子, γ)の屈折率は、それぞれ1.514-1.517と1.705-1.710である。

4. 考察

テフラ層の層相や、テフラ検出分析と屈折率測定(火山ガラス・鉱物)により判明したテフラ粒子の特徴から、次のような試料の採取層準に指標テフラの降灰層準のある可能性を指摘できる。

(1) 地点1(下高田白山遺跡・1区トレンチA南壁)

1) 試料46(7層)：この試料の重鉱物の組み合わせや、火山ガラスおよび斜方輝石の屈折率特性は、約1.5~1.65万年前に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石(As-YP, 新井, 1962, 町田・新井, 2011など)に類似する。しかしながら、本試料の採取層準はいわゆるローム層とその上位の腐植質土壌の境界付近にあり、As-YPに特徴的な堆積構造も認められない。このことから、この試料付近に降灰層準があるテフラは、斜方輝石の屈折率特性がAs-YPと同様で、軽石粒子の火山ガラスの屈折率のばらつきが大きい、約1.2万年前に浅間火山から噴出した浅間総社軽石(As-Sj, 早田, 1990, 1991, 1996, 2016など)の可能性が高い。

2) 試料28(5層下部)：層位や、重鉱物の組み合わせ、火山ガラスや斜方輝石の屈折率特性などから、約

9,000年前に浅間火山から噴出した浅間藤岡軽石(As-Fo, 早田, 1991, 1996, 2016など)の降灰層準に相当すると考えられる。

- 3) 試料20(5層上部): 本試料に含まれる薄手のパブル型ガラスは、その岩相や試料中に屈折率(n)が1.510の火山ガラスが含まれていることを合わせると、約7,300年前に南九州の鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah, 町田・新井, 1978, 2011など)と考えられる。このことから、そのすぐ上位の試料19に比較的多く含まれている褐色粗粒火山灰は、約6,000年前に浅間火山から噴出した浅間六合軽石(早田, 1991, 1996, 2016など)に関係するテフラの可能性がある。
- 4) 試料16(4層): 比較的粗粒の黄色軽石を含む4層の中で、灰色のスポンジ状軽石型ガラスが出現しはじめる本試料採取層準は、黄色軽石(軽石B)の火山ガラスおよび斜方輝石の屈折率特性から、約5,000年前に浅間火山から噴出した浅間D軽石(As-D, 荒牧, 1968, 新井, 1979, 町田・新井, 2011など)の降灰層準に相当すると考えられる。なお、上位の土層から採取された軽石Aも、火山ガラスおよび斜方輝石の屈折率特性から、As-Dに由来すると考えられる。
- 5) 試料8(3層): この試料で検出されはじめる灰白色のスポンジ状軽石型ガラスは、層位や岩相から3世紀後半に浅間火山から噴出した浅間C軽石(As-C, 荒牧, 1968, 新井, 1979, 町田・新井, 2011など)に由来すると考えられる。
- 6) 試料1(1層基底部・テフラ層): 軽石や火山ガラスの岩相から、1108(天仁元)年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(As-B, 荒牧, 1968, 新井, 1979, 町田・新井, 2011など)に同定される。

(2) 地点2(下高田稲荷谷II遺跡・5区水田A南壁)

- 1) 試料11: この試料に含まれるスポンジ状に発泡した灰白色の軽石は、岩相からAs-Cに由来すると考えられる。このAs-Cと思われる細粒の軽石は試料11が採取された土層全体で少量ながら認められることから、実際には、この土層の形成はAs-C降灰後の可能性が高い。なお、わずかながら角閃石が検出された試料10には、可能性は高くはないものの、6世紀初頭

に榛名火山から噴出した榛名渋川テフラ(Hr-FA, 新井, 1979, 坂口, 1986, 早田, 1989など)の降灰層準があるのかもしれない。

- 2) 試料2: 本試料が採取された成層したテフラ層は、層相や含まれるテフラ粒子の岩相から、As-Bに同定される。
- 3) 試料1: この試料には、As-Bに含まれるような淡灰色、淡褐色、褐色の軽石やスポンジ状軽石型ガラスのほかに、白色の軽石やスポンジ状軽石型ガラスが含まれている。浅間火山から1128(大治3)年に噴出したと考えられている浅間箱川テフラ(As-Kk, 早田, 1991, 1996など)、あるいは1783(天明3)年に浅間火山から噴出した浅間A軽石(As-A, 荒牧, 1968, 新井, 1979など)降灰以降の水成二次堆積物の可能性もあるが、浅間火山の1281(弘安4)年の噴火に由来するテフラの可能性も完全には否定できない。今後、周辺遺跡で注意しておく必要がある。

5. まとめ

富岡市向原IV遺跡において採取された試料を対象として、テフラ分析(テフラ検出分析・火山ガラスおよび鉱物の屈折率測定)を実施した。その結果、浅間総社軽石(As-Sj, 約1.2万年前)、浅間藤岡軽石(As-Fo, 約9,000年前)、鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah, 約7,300年前)、浅間D軽石(As-D, 約5,000年前)、浅間C軽石(As-C, 3世紀後半)、浅間Bテフラ(As-B, 1108年)など多くの指標テフラを検出することができた。今回の分析結果により、向原IV遺跡の土層は、西毛地域において縄文~平安時代の標準的な土層であることを確認できた。

表30 地点1(下高田白山遺跡)におけるテララ検出分析結果

試料	軽石・スコリア		火山ガラス		重産物
	量	色調	形状	色調	
1	***	淡灰, 淡灰, 褐	pt(sp)	淡灰, 淡灰, 褐	qpx, cpx
2	*	淡灰	pt(sp)	無色透明, 淡灰, 淡灰, 褐	qpx, cpx
4	**		nd, pm(sp)	淡灰, 無色透明, 灰白	qpx, cpx
6	**		nd, pm(sp)	淡灰, 無色透明, 灰白	qpx, cpx
8	**		nd, pm(sp)	淡灰, 無色透明, 灰白	qpx, cpx
9	**		nd, pm(sp)	淡灰, 無色透明, 灰	qpx, cpx
10	**		nd, pm(sp)	淡灰, 無色透明, 白, 灰白	qpx, cpx
軽石A (軽石を和砕)	**		pm(sp)	白, 黄	qpx, cpx
12	**		nd, pm(fb)	淡灰, 無色透明	qpx, cpx
14	**		nd, pm(fb, sp)	無色透明, 淡灰, 白	qpx, cpx
軽石B (軽石を和砕)	**		pm(sp)	白, 黄	qpx, cpx
15	**		nd, pm(sp, fb)	無色透明, 淡灰, 灰白	qpx, cpx
16	**		nd, pm(sp, fb)	無色透明, 淡灰, 灰, 白	qpx, cpx
18	**		nd, pm(fb)	無色透明, 淡灰	qpx, cpx
19	**		nd, pm(sp)	無色透明, 淡灰, 灰	qpx, cpx
20	**		nd, pm(sp, fb), bw	無色透明, 淡灰, 灰, 白	qpx, cpx
22	**		nd, pm(sp, fb)	無色透明, 淡灰, 灰, 白	qpx, cpx
23	**		nd, pm(fb, sp)	無色透明, 淡灰, 白	qpx, cpx
24	**		nd, pm(sp, fb)	無色透明, 淡灰, 灰, 白	qpx, cpx
26	**		pm(sp), nd	灰白, 無色透明, 淡灰	qpx, cpx
28	**		pm(sp), nd	灰白, 無色透明, 淡灰	qpx, cpx
30	**		nd, pm(fb)	無色透明, 淡灰	qpx, cpx
32	**		nd, pm(sp, fb)	無色透明, 淡灰, 灰	qpx, cpx
34	**		nd, pm(sp)	無色透明, 淡灰, 白	qpx, cpx
36	**		nd, pm(sp)	無色透明, 淡灰, 白	qpx, cpx
38	**		nd, pm(sp)	無色透明, 淡灰, 白	qpx, cpx
40	**		pm(sp), nd	白, 無色透明	qpx, cpx, (nb)
42	**		nd	無色透明, 淡灰	qpx, cpx
44	**		nd	無色透明, 淡灰	qpx, cpx
46	(*)		nd	無色透明, 淡灰	qpx, cpx

***: 多くに多い, ***: 多い, **=: 中程度, *=: 少ない, (o): 非常に少ない, bw=: フルル型, nd=: 中間型, pm=: 軽石型, qpx=: スボラ, fb=: 繊維束状,

ol=: カンラン石, cpx=: 斜方輝石, qpx=: 単斜輝石, as=: 角閃石, bi=: 黒雲母, 重産物の○は, 量が少ないことを示す。

文献

- 新井房夫(1962) 関東盆地北西部地域の第四紀編年, 群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.
- 新井房夫(1972) 斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフラクロノロジーの基礎的研究, 第四紀研究, 11, p.254-269.
- 新井房夫(1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層, 考古学ジャーナル, no.53, p.41-52.
- 荒牧重雄(1968) 浅間火山の地質, 地質研專報, no.14, p.1-45.
- 増原 徹(1983) 温度変化型屈折率測定法, 日本第四紀学会編「第四紀史料分析法2」, 東京大学出版会, p.149-158.
- 町田 洋・新井房夫(1992) 「火山灰アトラス」, 東京大学出版会, 276p.
- 町田 洋・新井房夫(2003) 「新編火山灰アトラス」, 東京大学出版会, 336p.
- 町田 洋・新井房夫(2011) 「新編火山灰アトラス(第2刷)」, 東京大学出版会, 336p.
- 町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫(1984) テフラと日本考古学—考古学研究に關するテフラのカタログ, 古文化財編集委員会編「文化財に関する保存科学と人文・自然科学」, p.865-928.
- 坂口 一(1986) 榛名二ツ岳起源FA・F9層下の土師器と須恵器, 群馬県教育委員会編「筑碕北原遺跡・今井神社古墳群・筑碕青柳遺跡」, p.103-119.
- 坂口 一(2010) 高崎市・中居町一丁目遺跡周辺集落の動向—中居町一丁目遺跡H22の水田耕作地と埋込集落との関係—, 群馬県埋蔵文化財調査事業団編「中居町一丁目遺跡3」, p.17-22.
- 早田 勉(1989) 6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害, 第四紀研究, 27, p.297-312.
- 早田 勉(1990) 群馬の自然と風土, 群馬県史編さん室編「群馬県史通史編1 原始古代1」, p.37-129.
- 早田 勉(1991) 浅間火山の生い立ち, 佐久考古通信, 57, p.2-7.
- 早田 勉(1996) 関東地方—東北地方南部の示標テフラの諸特徴—とくに御岳第1テフラより上位のテフラについて—, 名古屋大学加路器質量分析計業績報告書, 7, p.256-267.
- 早田 勉(2011) 榛名地域の自然環境とその歴史, 榛名町誌編さん委員会編「榛名町誌通史編上巻 原始 古代・中世」, p.7-56.
- 早田 勉(2014) 渋川市有馬寺畑遺跡におけるテフラ分析, 渋川市教育委員会編「有馬寺畑遺跡」, p.197-211.

表31 地点2(下高田稲荷谷II遺跡)におけるテフラ検出分析結果

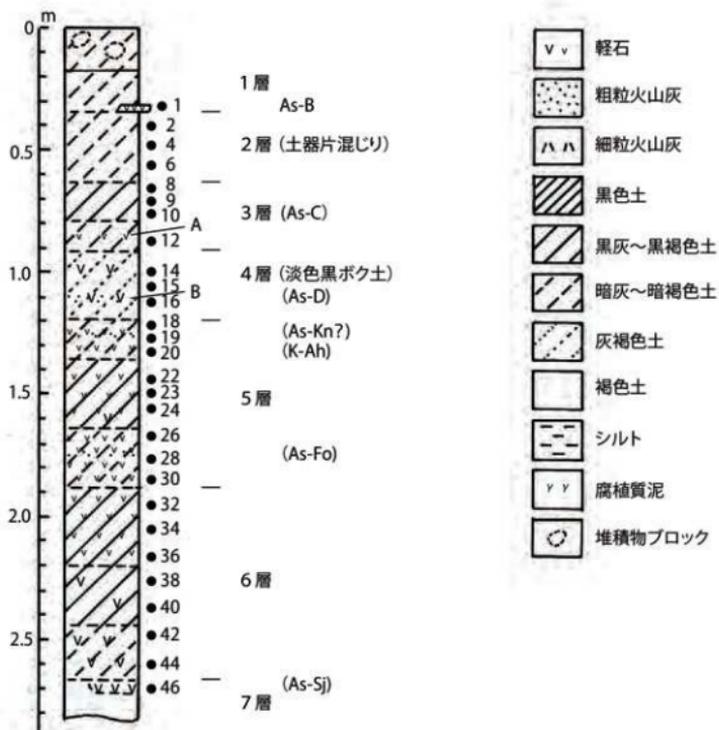
試料	軽石・スゴリア			火山ガラス			重鉱物
	量	色調	個人径	量	色調	形態	
1	***	淡灰, 淡緑, 濁, 白	13.7mm	**	淡灰, 淡緑, 濁, 白	円(Sp)	opx, cpx
2	***	淡灰, 淡緑, 濁	8.9mm	**	淡灰, 淡緑, 濁	円(Sp)	opx, cpx
3	**			**	淡灰, 無色透明, 白, 灰白	nd, pm(Sp)	opx, cpx
5	**			**	淡灰, 無色透明, 白	nd, pm(Sp)	opx, cpx
7	**			**	淡灰, 無色透明, 白	nd, pm(Sp), pm(fb)	opx, cpx
9	**			**	淡灰, 無色透明, 白	nd, pm(Sp)	opx, cpx
10	**			**	淡灰, 無色透明, 白, 灰白	nd, pm(Sp)	opx, cpx, (an)
11	**			**	淡灰, 無色透明, 白, 灰白	nd, pm(Sp)	opx, cpx
13	**			**	淡灰, 無色透明	nd	opx, cpx
15	**			**	無色透明, 淡灰, 白	nd, pm(Sp)	opx, cpx
17	*			*	灰白, 無色透明, 淡灰	pm(Sp), nd	opx, cpx
19	*			*	無色透明, 淡灰	nd	opx, cpx
21	**			**	淡灰, 無色透明, 白	nd, pm(Sp)	opx, cpx
23	*			*	無色透明, 淡灰	nd	opx, cpx
25	**			**	無色透明, 白	nd, pm(Sp, fb)	(opx, cpx)

***: 十分に多い, ***: 多い, **: 多い, *: 多い, (s): 非常に少ない, (a): 非常に少ない, bc: ベツル型, nd: 中間型, pm: 軽石型, sp: スゴリア型, cpx: 輝石, opx: カンラン石, cpx: 斜方輝石, an: 角閃石, bi: 黒雲母, 重鉱物の()は, 量が少ないことを示す。

表 32 屈折率測定結果

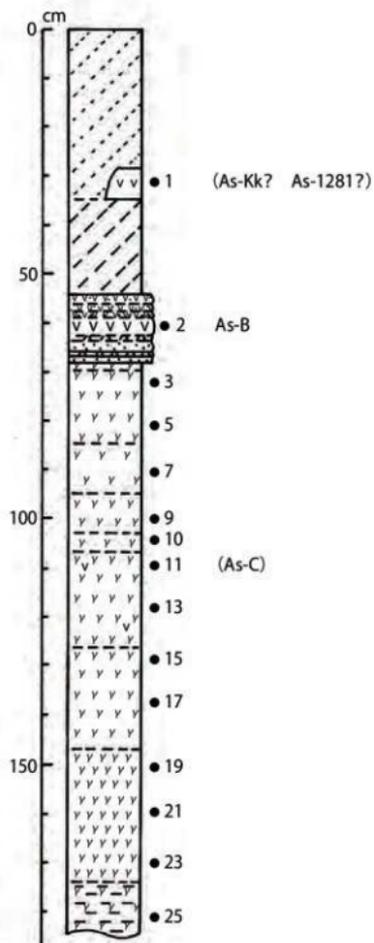
地点・テフラ	火山ガラス		斜方輝石		文献
	屈折率(n)	測定数	屈折率(y)	測定数	
地点1(下高田白山遺跡)・軽石A	1.514-1.517	30	1.705-1.710	30	本報告
地点1(下高田白山遺跡)・軽石B	1.514-1.517	32	1.703-1.709	31	本報告
地点1(下高田白山遺跡)・試料20	1.499-1.510	31	1.703-1.713	31	本報告
	(1.499-1.503)	(28)			
	(1.510)	(3)			
地点1(下高田白山遺跡)・試料28	1.512-1.518	32	1.704-1.710	30	本報告
地点1(下高田白山遺跡)・試料46	1.500-1.503	31	1.702-1.711	32	本報告
西毛地域の代表的な後期更新世後半以降の指標テフラ					
浅間A(As-A, 1783年)	1.507-1.512		1.707-1.712		1)
浅間船川(As-Kk, 1108年)	未詳		1.706-1.712		2)
浅間B(As-B, 1108年)	1.524-1.532		1.708-1.710		1)
榛名二ツ岳沢川(Hr-FA, 6世紀初頭)	1.500-1.502		1.707-1.711		1)
	1.498-1.505				3)
浅間C(As-C, 3世紀後半)	1.514-1.520		1.706-1.711		1)
浅間D軽石(As-D, 約5,000年前)	1.513-1.516		1.706-1.708		1)
浅間六合軽石(As-Kn, 約6,000年前)	未詳		1.706-1.708		2)
鬼界アカホヤ(K-Ah, 約7,300年前)	1.506-1.513				1)
浅間藤岡軽石(As-Fo, 約9,000年前)	1.508-1.516		1.706-1.710		5)
浅間総社(As-S), 約1.2万年前)	1.501-1.518		1.706-1.711		5)
浅間草津(As-K)	1.501-1.503		1.707-1.712		1)
浅間板鼻黄色(As-Y, 約1.5~1.65万年前)	1.501-1.505		1.707-1.712		1)
浅間大窪沢2(As-Ok2, 約1.9~2.0万年前)	1.502-1.504		1.704-1.709		1)
浅間大窪沢1(As-Ok1, 約2.0~2.1万年前)	1.500-1.502		1.704-1.709		1)
浅間白糸(As-Sr, 約2.4万年前)	1.506-1.510		1.675-1.680		1)
浅間萩生(As-Hg, 約2.9~2.4万年前)	1.500-1.502		1.703-1.708		2)
浅間板鼻褐色(群)	上部:	1.515-1.520	1.704-1.714		1)
(As-BP Group, 約2.4~2.9万年前)	中部:	1.508-1.511	1.700-0.709		1)
	下部:	1.505-1.515	1.710-1.725		1)
始良Tn(AT, 約2.8~3万年前)	1.499-1.500				1)
榛名箱田(Hr-BA, 約3.5万年前)	未詳		1.709-1.712		2)

1)町田・新井(2011など)、2)早田(1996)、3)早田(2014)、4)町田ほか(1984)、5)早田(未公表)、
 本報告・3)・5)温度変化型屈折率法(増原, 1993)、1)・2)・4)温度一定型屈折率測定法(新井, 1972, 1993)、
 *1:放射性炭素(14C)年代



第290図 地点1(下高田白山遺跡)の土層柱状図

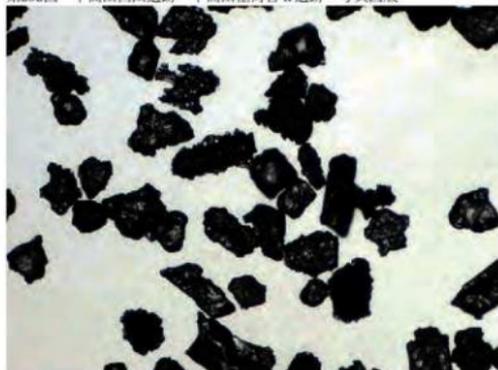
●: テフラ分析試料の層位。数字: テフラ分析の試料番号。



第291図 地点2(下高田稲荷谷Ⅱ遺跡)の土層柱状図

●：テフラ分析試料の層位。数字：テフラ分析の試料番号。

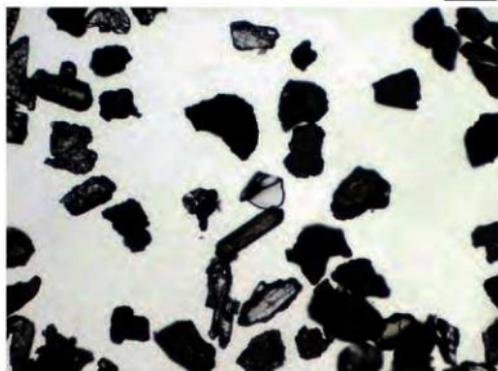
第292図 下高田白山遺跡・下高田稲荷谷Ⅱ遺跡 写真図版



- 1 地点1・軽石A(透過光)
中央左(有色鉱物):斜方輝石
(火山ガラス付着)
中央右(有色鉱物):単斜輝石.



- 2 地点1・軽石B(透過光)
中央上(有色鉱物):斜方輝石,
中央下(有色鉱物):単斜輝石.
いずれにも火山ガラスが付着.



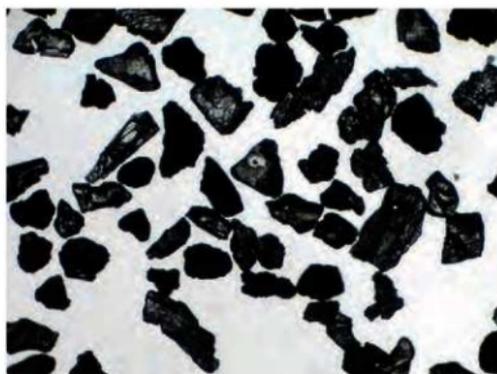
- 3 地点1・試料20(透過光)
中央:バブル型火山ガラス,
中央下(有色鉱物):斜方輝石.



4 地点1・試料28(透過光)
中央右ほか：スポンジ状軽石型ガラス。
中央左(有色鉱物)：斜方輝石。



5 地点1・試料46(透過光)
中央(有色鉱物)：単斜輝石。
中央左・中央右上など(有色鉱物)：斜方輝石。



6 地点2・試料11(透過光)
中央：中間型ガラス。
中央右・中央上など：
スポンジ状軽石型ガラス。

第2節 下高田白山遺跡植物珪酸体・

花粉分析報告

株式会社古環境研究所

1. はじめに

下高田白山遺跡は、富岡市妙義町下高田地内に所在する。高田川左岸の横野台地の南側斜面部に立地する。谷を挟み西側の台地と低地部には、下高田稲荷谷Ⅱ遺跡が所在する。

平成27年度に実施された発掘調査において、台地上で40棟ほどの竪穴住居が検出されている。また、下高田稲荷谷Ⅱ遺跡では古代の水田跡が確認されている。

ここでは、下高田白山遺跡において植物珪酸体分析を行い、植生と堆積環境の変遷を検討する。

2. 植物珪酸体分析の原理

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸(SiO₂)が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石(プラント・オパール)となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている(杉山, 2000)。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である(藤原・杉山, 1984)。

3. 試料

分析試料は、1区トレンチA南壁地点から採取されたP1~P10の計10点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

4. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法(藤原, 1976)を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥(絶乾)
- 2) 試料約1gに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加(0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法(550℃・6時間)による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射(300W・42KHz・10分間)による分散
- 5) 沈底法による20μm以下の微粒子除去
- 6) 封入剤(オイキット)中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物

の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率を乗じて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重(1.0と仮定)と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重)を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる(杉山, 2000)。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

5. 分析結果

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表33および図293に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

イネ、ムギ類(穎の表皮細胞)、ヨシ属、キビ族型、ススキ属型(おもにススキ属)、ウシクサ族A(チガヤ属など)、ジュズダマ属型

[イネ科-タケ亜科]

メダケ節型(メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属)、ネザサ節型(おもにメダケ属ネザサ節)、チマキザサ節型(ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など)、ミヤコザサ節型(ササ属ミヤコザサ節など)、メダケ属型(メダケ属、ホウライチク属)、未分類等

[イネ科-その他]

表皮毛起源、棒状珪酸体(おもに結合組織細胞由来)、未分類等

[樹木]

多角形板状(ブナ科ナラ属など)、その他

6. 考察

(1) 稲作跡の検討

稲作跡(水田跡)の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体(プラント・オパール)が試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している(杉山, 2000)。なお、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出

表 33 下高田白山遺跡における植物性炭体分析結果

分類群	地点・試料									
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
イネ科	Grainineae									
イネ	55									
ムギ類(類の表皮細胞)	12									
ヨシ属	6	14		7	14	14	21	21	14	14
キハヒ属	6	28	14	7	14	21	14	14	14	14
スズキ属	177	110	89	49	84	114	207	161	70	22
ウツクサ科	43	41	131	49	91	107	55	63	63	7
ウツクサ科	6									
タケ類	Equisetaceae									
メダケ属	6	14	14	7						
ネケケ属	288	234	240	253	21	36	21			
ネケケ属	24	14	14	7	7	14	21			
チマキヤケ属	6									
ミヤコヤケ属	6									
マダケ属	31	34	41	14	7	36	35	7	42	14
未分類等	6									
その他のイネ科	Others									
表皮毛起源	43	14	7	14	14	21	14	7		
棒状付着体	104	152	110	127	98	135	193	126	126	50
本分節等	233	283	199	232	258	328	242	238	162	43
樹木起源	Arboreal									
多角形板状(コナク属など)	6									
その他	12	7	34	21						
植物性炭体総数	1065	944	863	781	592	820	836	637	540	206
おもん分節部の形定生産量(単位: kg / m ² ・cm): 試料の比重を1.0と仮定して算出										
イネ	1.62									
ヨシ属	0.39	0.87			0.44	0.90	0.87	1.32	1.33	0.91
スズキ属	2.20	1.37	1.11	0.61	1.04	1.41	2.57	1.99	0.87	0.27
メダケ属	0.07	0.16	0.16	0.08			0.08			
ネケケ属	1.38	1.12	1.15	1.22	0.10	0.17	0.10			
チマキヤケ属	0.18	0.10	0.10	0.05	0.05	0.11	0.16			
ミヤコヤケ属	0.02									
タケ類の比率(%)										
メダケ属	4	12	11	6			24			
ネケケ属	83	81	81	90	66	62	30			
チマキヤケ属	11	7	7	4	34	38	46			
ミヤコヤケ属	1									
メダケ	88	93	93	96	66	62	54			
未分類										

される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

1区トレンチA南壁地点では、As-B直下の2層(P1)から6層(P10)までの層準について分析を行った。その結果、2層(P1)からイネが5,500個/gと高い密度で検出された。したがって、同層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

(2)イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類、ヒエ属型(ヒエが含まれる)、エノコログサ属型(アワが含まれる)、キビ属型(キビが含まれる)、ジュズダマ属型(ハトムギが含まれる)、オシシバ属(シコクヒエが含まれる)、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがある。本遺跡の試料からはムギ類とジュズダマ属型が検出された。以下に各分類群ごとに栽培の可能性について考察する。

ムギ類(穎の表皮細胞)は、2層(P1)から検出された。密度は1,200個/gと低い値であるが、穎(穀殻)が栽培地に残される確率は低いことから、少量が検出された場合でも過大に評価する必要はある。したがって、同層の時期に調査地点もしくはその近辺でムギ類が栽培されていた可能性が考えられる。

ジュズダマ属型は、2層(P1)から検出された。ジュズダマ属には食用や薬用となる栽培種のハトムギが含まれるが、現時点では植物珪酸体の形態から栽培種と野草のジュズダマとを識別するには至っていない。また、密度も600個/gと低い値であることから、ここでハトムギが栽培されていた可能性は考えられるものの、野草のジュズダマに由来する可能性も否定できない。

イネ科栽培植物の中には検討が不十分なものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畑作物は分析の対象外となっている。

(3)植物珪酸体分析から推定される植生と環境

上記以外の分類群の検出状況と、そこから推定される植生・環境について検討を行った。下位の6層下部(P10)では、ヨシ属、キビ族型、ススキ属型、ウシクサ族A、チマキザサ節型、および樹木(その他)などが検出された

が、いずれも少量である。6層上部(P8)にかけては、ススキ属型が増加し、ウシクサ族Aもやや増加している。5層(P5~P7)では、メダケ節型、ネザサ節型が出現し、ススキ属型は減少傾向を示している。4層(P4)では、ネザサ節型が大幅に増加し、ヨシ属は見られなくなっている。3層(P2、3)から2層(P1)にかけては、ススキ属型、ネザサ節型が増加し、2層(P1)ではメダケ属型が出現している。おもな分類群の推定生産量によると、5層よりも下位ではおおむねススキ属型が優勢であり、部分的にヨシ属も多くなっている。また、4層よりも上位ではススキ属型とネザサ節型が優勢であり、2層ではイネも多くなっている。

以上の結果から、下位の6層から5層にかけては、概ねヨシ属が生育するような湿潤な環境であったと考えられ、周辺の比較的乾燥したところにはススキ属をはじめ、ウシクサ族、キビ族、ササ属なども生育していたと推定される。4層(淡色黒ボク土)から2層(As-B直下)にかけては、メダケ属(おもにネザサ節)が増加し、堆積環境の乾燥化など何らかの要因でヨシ属はあまり見られなくなったと推定される。また、遺跡周辺には何らかの樹木が生育していたと考えられる。2層ではメダケ属が出現しているが、メダケ属にはメダケやモウソウチクなど有用なものが多く、建築材や生活用品、食用などとしての利用価値が高い。

7. まとめ

植物珪酸体分析の結果、浅間Bテフラ(As-B, 1108年)直下の2層ではイネが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、同層では少量ながらムギ類(穎の表皮細胞)、ジュズダマ属型が検出され、ムギ類やジュズダマ属(ハトムギ)が栽培されていた可能性も認められた。

下位の6層から5層にかけては、概ねヨシ属が生育するような湿潤な環境であったと考えられ、周辺の比較的乾燥したところにはススキ属をはじめ、ウシクサ族、キビ族、ササ属なども生育していたと推定された。4層(淡色黒ボク土)から2層(As-B直下)にかけては、メダケ属(おもにネザサ節)が増加し、堆積環境の乾燥化など何らかの要因でヨシ属はあまり見られなくなったと推定された。また、遺跡周辺には何らかの樹木が生育していたと考えられた。

第294図 下高田白山遺跡の植物珪酸体(プラント・オパール)



イネ
P1



イネ
P1



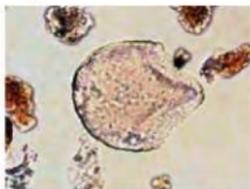
イネ (側面)
P1



ムギ類 (穎の表皮細胞)
P1



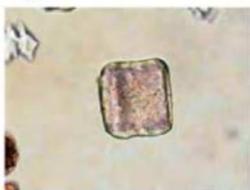
キビ族型
P2



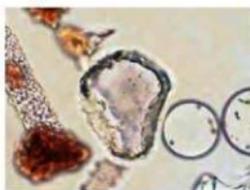
ヨシ属
P9



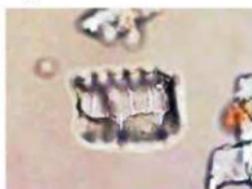
ススキ属型
P1



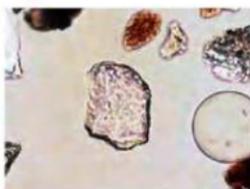
ウシクサ族A
P1



メダケ節型
P1



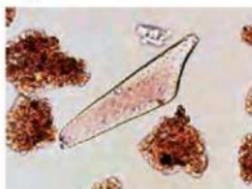
ネザサ節型
P1



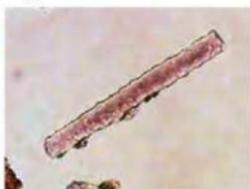
チマキザサ節型
P1



メダケ属型
P1



表皮毛起源
P4



棒状珪酸体
P4



樹木 (その他)
P3

50 μm

下高田稲荷谷Ⅱ遺跡植物珪酸体・

花粉分析報告

株式会社古環境研究所

1. はじめに

下高田稲荷谷Ⅱ遺跡は、富岡市妙義町下高田地内に所在する。高田川左岸の横野台地の南側斜面部に立地する。周辺は谷が複雑に入り組んでおり、谷を挟んで東側の台地には下高田白山遺跡が、西側の台地と低地部には下高田稲荷谷Ⅱ遺跡が位置する。

平成27年度の発掘調査において、浅間Bテフラ(As-B, 1108年)直下層より水田跡が検出された。さらに、その下位層にも水田跡の包蔵が想定された。ここでは、植物珪酸体分析と花粉分析を行い、農耕をはじめとする土地利用、ならびに植生と堆積環境の変遷を検討する。

2. 試料

分析試料は、5区水田A南壁地点から採取されたP1～P9の腐植質泥9点である。なお、P1は浅間Bテフラ直下層、P6は浅間C軽石(As-C, 4世紀初頭)混在層である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3. 植物珪酸体分析

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸(SiO_2)が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石(プラント・オパール)となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている(杉山, 2000)。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である(藤原・杉山, 1984)。

(1)方法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法(藤原, 1976)を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥(絶乾)
- 2) 試料約1gに対し直径約40 μm のガラスビーズを約0.02g添加(0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法(550℃・6時間)による脱有機物処理

第2節 下高田稲荷谷Ⅱ遺跡植物珪酸体・花粉分析報告

- 4) 超音波水中照射(300W・42kHz・10分間)による分散
- 5) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤(オイキット)中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率を乗じて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重(1.0と仮定)と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重)を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる(杉山, 2000)。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

(3)分析結果

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表34および図295に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

イネ、ムギ類(穎の表皮細胞)、ヨシ属、キビ族型、ススキ属型(おもにススキ属)、ウシクサ族A(チガヤ属など)、ウシクサ族B、ジュズダマ属型

[イネ科-タケ亜科]

メダケ節型(メダケ属メダケ節・リュウキュウチケ節、ヤダケ属)、ネザサ節型(おもにメダケ属ネザサ節)、チマキザサ節型(ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など)、ミヤコザサ節型(ササ属ミヤコザサ節など)、未分類等

[イネ科-その他]

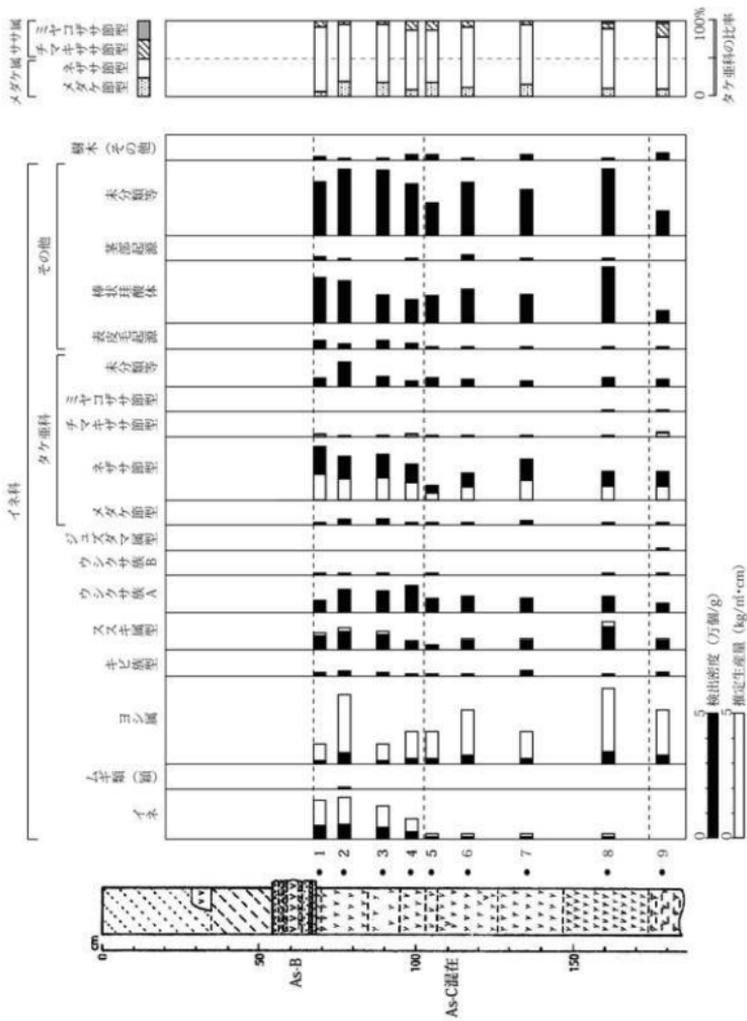
表皮毛起源、棒状珪酸体(おもに結合組織細胞由来)、未分類等

[樹木]

その他

表 34 下高田稲荷谷 II 遺跡における植物有機体分析結果

分類群	学名	5区水田A層壁								
		1	2	3	4	5	6	7	8	
地点・試料										
イネ科	Gramineae									
イネ	<i>Oryza sativa</i>	54	58	46	28	7	7	7	7	7
ムナシ類(表皮細胞)	<i>Abrus</i> - <i>Trifolium</i> (husk Phytolith)									
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	13	45	13	21	21	35	21	49	35
キ七科属	Panicum type	13	19	13	7	7	7	21	7	14
又六中属型	<i>Aristida</i> type	54	71	59	28	14	35	33	91	35
ウシノコ芋属A	Andropogoneae A type	47	91	85	107	55	64	56	63	35
ウシノコ芋属B	Andropogoneae B type	7	6	7						7
ジュズダマ属型	<i>Coix</i> type									7
タケ科属	Bambusoideae									
メダケ属型	<i>Pleurocladus</i> sect. <i>Nipponocladus</i>	7	19	20	7	7	7	14	7	7
ネオケ属型	<i>Pleurocladus</i> sect. <i>Nezasa</i>	221	181	189	149	62	113	109	119	118
チマキケケ属型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	13	6	7	14	7	7	7	7	21
ミヤコケケ属型	<i>Sasa</i> sect. <i>Grassland</i>									7
未分類等	Others	33	97	39	21	34	28	21	35	28
その他のイネ科	Others									
表皮毛起源	husk hair origin	33	19	33	21	7	7	7	7	7
棒状有機体	Rod-shaped	181	168	111	92	109	134	113	224	48
基部起源	Stem origin	13	6							7
未分類等	Others	214	265	261	206	130	212	183	266	97
樹木起源	Arboreal									
その他	Others	13	6	7	21	21	7	21	7	28
植物有機体総数	Total	917	1168	886	732	485	685	684	909	491
おもな分類群の測定生産量(単位: kg / ml・cm): 試料の乾比重を1.0と仮定して算出										
イネ	<i>Oryza sativa</i>	1.57	1.71	1.34	0.84	0.20	0.21	0.21	0.21	0.21
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	0.84	2.86	0.82	1.34	1.29	2.23	1.33	3.09	2.18
又六中属型	<i>Aristida</i> type	0.66	0.88	0.73	0.35	0.17	0.44	0.44	1.13	0.43
ネオケ属型	<i>Pleurocladus</i> sect. <i>Nipponocladus</i>	1.06	0.23	0.23	0.08	0.08	0.08	0.16	0.08	0.08
ネオケケ属型	<i>Pleurocladus</i> sect. <i>Nezasa</i>	0.08	0.87	0.91	0.72	0.30	0.54	0.81	0.57	0.56
チマキケケ属型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.									
ミヤコケケ属型	<i>Sasa</i> sect. <i>Grassland</i>	0.10	0.05	0.05	0.11	0.05	0.05	0.05	0.05	0.02
タケ科属の比率 (%)										
メダケ属型	<i>Pleurocladus</i> sect. <i>Nipponocladus</i>	6	20	19	9	19	12	16	11	10
ネオケ属型	<i>Pleurocladus</i> sect. <i>Nezasa</i>	86	76	77	79	69	80	79	79	69
チマキケケ属型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	8	4	4	12	12	8	5	7	19
ミヤコケケ属型	<i>Sasa</i> sect. <i>Grassland</i>									3
未分類等	Undefined ratio	92	96	96	88	88	92	95	90	79



第295図 下高田稲荷谷II遺跡：5区水田A南壁地点における植物珪酸体分析結果

(3) 考察

1) 稲作跡の検討

稲作跡(水田跡)の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体(プラント・オパール)が試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している(杉山, 2000)。なお、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

5区水田A南壁地点では、P1(As-B直下)からP9までの層準について分析を行った。その結果、P9を除く各試料からイネが検出された。このうち、P1とP2では密度が5,400個/gおよび5,800個/gと高い値であり、P3でも4,600個/gと比較的高い値である。したがって、これらの層準では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

P4では密度が2,800個/gと比較的低い値であり、P5～P8では1,000個/g未満と低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられるが、ここでの原因は不明である。

2) イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類、ヒエ属型(ヒエが含まれる)、エノコログサ属型(アワが含まれる)、キビ属型(キビが含まれる)、ジュズダマ属型(ハトムギが含まれる)、オヒシバ属(シコクビエが含まれる)、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがある。このうち、本遺跡の試料からはムギ類とジュズダマ属型が検出された。以下に各分類群ごとに栽培の可能性について考察する。

ムギ類(穎の表皮細胞)は、P2から検出された。密度は600個/gと低い値であるが、穎(穀殻)が栽培地に残される確率は低いことから、少量が検出された場合でも過大に評価する必要がある。したがって、同層準の時期に調査地点もしくはその近辺でムギ類が栽培されていた可能性が考えられる。

ジュズダマ属型は、P9から検出された。ジュズダマ属には食用や薬用となる栽培種のハトムギが含まれるが、現時点では植物珪酸体の形態から栽培種と野草のジュズ

ダマとを識別するには至っていない。また、密度も700個/gと低い値であることから、ここでハトムギが栽培されていた可能性は考えられるものの、野草のジュズダマに由来する可能性も否定できない。

イネ科栽培植物の中には検討が不十分なものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の起源植物の究明については今後の課題としたい。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畑作物は分析の対象外である。

3) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

上記以外の分類群の検出状況と、そこから推定される植生・環境について検討を行った。下位のP9では、ヨシ属、ネザサ節型が比較的多く検出され、キビ族型、ススキ属型、ウシクサ族A、ウシクサ族B、メダケ節型、チマキザサ節型、および樹木(その他)なども認められた。P8からP1にかけても、おおむね同様の結果であるが、P4よりも上位ではネザサ節型やススキ属型がやや増加している。おもな分類群の推定生産量によると、P5よりも下位ではおおむねヨシ属が優勢であり、部分的にススキ属型、ネザサ節型も多くなっている。また、P4よりも上位ではイネ、ネザサ節型が優勢であり、部分的にヨシ属も多くなっている。

以上の結果から、各層準の堆積当時はおおむねヨシ属が生育するような湿潤な環境であったと考えられ、そこを利用して調査地点もしくはその近辺で水田稲作が行われていたと推定される。また、周辺の比較的乾燥したところにはメダケ属(おもにネザサ節)をはじめ、ススキ属、ウシクサ族、キビ族などが生育していたと考えられ、遺跡周辺には何らかの樹木が生育していたと推定される。

4. 花粉分析

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

(1) 方法

花粉の分離抽出は、中村(1967)の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から1 cm³を採量
- 2) 0.5%リン酸三ナトリウム(12水)溶液を加え15分間湯煎
- 3) 水洗処理の後、0.25mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 4) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 5) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリス処理(無水酢酸9:濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎)を施す
- 6) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 7) 沈澱にチール石炭酸フクシン染色液を加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作製
- 8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300~1000倍で行った。花粉の分類は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン(-)で結んで示した。同定分類には所有の現生花粉標本、島倉(1973)、中村(1980)を参照して行った。イネ属については、中村(1974, 1977)を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。

(2) 結果

1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉27、樹木花粉と草本花粉を含むもの5、草本花粉24、シダ植物胞子2形態の計58である。これらの学名と和名および粒数を表35に示し、花粉数が200個以上計数できた試料については、周辺の植生を復原するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図296に示す。なお、200個未満であっても100個以上計数できた試料については傾向をみるため参考に図示し、主要な分類群は顕微鏡写真に示した。同時に寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。以下に出現した分類群を記載する。

[樹木花粉]

マキ属、モミ属、トウヒ属、ツガ属、マツ属複雑管束亜属、マツ属単維管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ

科—イヌガヤ科—ヒノキ科、ヤナギ属、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属—アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属—ケヤキ、エノキ属—ムクノキ、シキミ属、トチノキ、グミ属、トネリコ属

[樹木花粉と草本花粉を含むもの]

クワ科—イラクサ科、バラ科、マメ科、ウコギ科、ニワトコ属—ガマズミ属

[草本花粉]

ガマ属—ミクリ属、サジオモダカ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、アカザ科—ヒユ科、ナデシコ科、キンボウグ属、カラマツソウ属、アブラナ科、ツリフネソウ属、キカシグサ属、アカバナ科、チドメグサ亜科、セリ亜科、オミナエシ科、タンポポ亜科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属

[シダ植物胞子]

単条溝胞子、三条溝胞子

2) 花粉群集の特徴

花粉構成と花粉組成の変化から、下位より3帯の花粉分帯を設定し、分帯ごとに特徴を記載する。(図296)

① I帯(P9、P8)

樹木花粉の占める割合が草本花粉より高く、P8では、シダ植物胞子も多い。樹木花粉では、コナラ属コナラ亜属が高率に出現し、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属—ケヤキ、クリ、シイ属が低率に伴われる。草本花粉では、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属の出現率がやや高く、キク亜科、セリ亜科が伴われる。

② II帯(P7、P6)

密度が極めて低く、花粉はほとんど検出されないが、わずかに草本花粉のヨモギ属、イネ科、樹木花粉のコナラ属コナラ亜属、トチノキなどが出現する。

③ III帯(P5からP1)

樹木花粉より草本花粉の占める割合が高くなり、56%から65%を占める。草本花粉では、イネ科にはイネ属型が伴われるようになり、カヤツリグサ科、ヨモギ属の出現率が高く、サジオモダカ属、オモダカ属、ミズアオイ属が出現する。樹木花粉では、コナラ属コナラ亜属を主にクリ、コナラ属アカガシ亜属、シイ属、ブナ属が出現

表35 下高田稲荷谷Ⅱ遺跡における花粉分析結果

学名	和名	分相期								
		F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7	F8	F9
Arboreal pollen	樹木花粉									
<i>Podocarpus</i>	マキ属			1						
<i>Abies</i>	モミ属	1	3	1	1	1			1	2
<i>Picea</i>	トウヒ属	1			1					
<i>Tsuga</i>	ツガ属	1	1	2	1	2			1	
<i>Pinus</i> subgen. <i>Bipolaris</i>	マツ属亜属日本東亜属	2	2	1	1			1		
<i>Pinus</i> subgen. <i>Bipolaris</i>	マツ属亜属日本東亜属	1								
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	8	9	7	7	4			1	2
<i>Sciadopitys verticillata</i>	コウヤマキ					1				
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチノキ科-イヌガヤ科-ヒノノ科	15	6	18	13	12			1	9
<i>Sitka</i>	ヤナギ属				1					
<i>Juglans</i>	クルミ属	1			1					
<i>Persea</i> <i>zosterifolia</i>	サワグルミ	1		1	1	1				2
<i>Alnus</i>	ハンノキ属		2	2	3	1	1			
<i>Betula</i>	カバネキ属	3	6	1	1	4				1
<i>Corylus</i>	ハシバミ属			2						
<i>Carpinus</i> <i>obovata</i> <i>japonica</i>	クマノ子属-アサダ	3	3	3		3			3	1
<i>Castanea</i> <i>crinata</i>	クリ	4	12	12	15	24	4		1	9
<i>Castanopsis</i>	シイ属	3	8	2	5	1			2	4
<i>Fagus</i>	ブナ属	1	2	4	6		1			
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	81	52	74	32	62	2	3	43	106
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	17	9	9	12	15			4	7
<i>Elm</i> <i>do-Holm</i> <i>severata</i>	シロカシ	2	5	4	3	3			2	8
<i>Celtis</i> <i>sphenanthe</i> <i>aspera</i>	エナノ木-ムクノキ	1		1		1				2
<i>Ulmus</i>	シキミ属			1						
<i>Aesculus</i> <i>turbinata</i>	トチノキ		1		3		2	1	1	6
<i>Elaeagnus</i>	グミ属						1			
<i>Fraxinus</i>	トネリコ属	1								
Arboreal + Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉									
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	8	8	29	31	7	3	1	4	8
Rosaceae	バラ科	4	3	1						
Leguminosae	マメ科	4	1			1				
Araliaceae	ウコギ科	1								
<i>Sambucus</i> <i>Viburnum</i>	ニワトコ属-ガマズミ属			1						
Nonarboreal pollen	草本花粉									
<i>Typha</i> <i>Sagittaria</i>	カマド属-ミクリ属	2								
<i>Alisma</i>	サジメ-モダカ属	1	1							
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属			2	2					
<i>Gramineae</i>	イネ科	41	82	102	97	98	12	4	15	27
<i>Oryza</i> type	イネ属型	20	17	34	14	5	1			
Cyperaceae	カヤツグ科	105	68	42	38	33			9	21
<i>Rhus</i> <i>Celastrus</i>	ミズアオイ属	1	2							
<i>Polypodium</i> sect. <i>Pesticaria</i>	タデ属ナシタデ亜属	1	1	1			1		1	
<i>Rumex</i>	ギンギン属				2					
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	1	2	1	3	4				1
Caryophyllaceae	ナデシコ科	1	1		2					
<i>Ranunculus</i>	キンポウゲ属			2	2					
<i>Thalictrum</i>	カラマツソウ属	1		1	2	1			3	1
Cruciferae	アブラナ科	1	5	3	5		1			
<i>Ipagietis</i>	ツクリネソウ属				2					2
<i>Bitula</i>	キクソウ科			2	2					
Onagraceae	アカハゲ科	1								
Hydrocotylaceae	チドメグサ科		1	2	1					
Apioidae	セリ科	4	4	1	1	4			2	5
Valerianaceae	オミナエシ科			1		1				
Lactucoidae	タンポポ科	4	5	14	7	18	1			1
Asteroidae	キク科	1	2	9	9	10	2	1	3	14
<i>Lentibium</i>	オナモミ属				1					
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	45	75	33	23	108	36	2	12	34
Fern spore	シダ植物胞子									
Rosulate type spore	単葉溝胞子	3	11	6	3	15	9	1	37	29
Trilate type spore	三葉溝胞子	10	10	10	9	37	12		8	9
Arboreal pollen	樹木花粉	147	116	148	108	136	12	5	61	219
Arboreal + Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	17	12	31	31	8	3	1	4	8
Nonarboreal pollen	草本花粉	230	277	248	212	284	54	7	45	106
Total pollen	花粉総数	394	405	427	351	428	69	13	110	333
Pollen frequencies of Ica ¹	高田Ica ¹ の花粉相度	3.1 × 10 ⁴	1.7 × 10 ⁴	2.2 × 10 ⁴	1.8 × 10 ⁴	3.5 × 10 ⁴	6.8 × 10 ³	1.0 × 10 ³	1.0 × 10 ³	3.0 × 10 ³
Unknown pollen	未特定花粉	4	8	9	6	10	6	0	5	3
Fern spore	シダ植物胞子	13	21	16	12	52	21	1	45	38
Benthic eggs	水生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Stom. cell	石細胞	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Digestion residues	消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Charcoal + woods fragments	炭素質物質-炭素木片	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)
炭素質物質(Charcoal + woods fragments)	(× 10 ³)									
未分解炭体片		2.2	1.4	0.4		0.4	0.4			0.5
分解炭体片		43.8	32.6	17.9	27.2	15.9	25.8	24.7	33.8	22.5
炭化体片(微粒炭)		8.8	2		1.4	2.9	2.8	0.8		1.4

し、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科が増加する。

(3) 考察

花粉分帯に沿って下位より植生と環境の復原を行う。

1) 下部(P9, P8: I 帯期)

コナラ属コナラ亜属が高率に出現し、周辺にはナラ類(コナラ属コナラ亜属)の森林が分布していた。近隣には、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、クリ、シイ属の樹木も分布していた。堆積地には、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属の草本が分布し、やや乾燥した湿原の環境が推定される。

2) 中部(P7, P6: II 帯期)

花粉密度が極めて低く、花粉などの有機質遺体が分解される乾燥ないし乾湿を繰り返す堆積環境であったとみなされる。わずかに検出される花粉から、ヨモギ属、イネ科などの草本、コナラ属コナラ亜属、トチノキなどの落葉樹の生育が推定される。

3) 上部(P5~P1: III 帯期)

イネ属型が出現し、水田雑草のサジオモダカ属、オモダカ属、ミズアオイ属が伴われ、水田の分布が示唆される。上位に向かいカヤツリグサ科が増加し湿潤化する。また近接してヨモギ属の生育する乾燥地も分布していた。周辺にはコナラ属コナラ亜属を主要素とする落葉広葉樹林が分布し、他にスギ林とイチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科の針葉樹林が分布していた。

5. まとめ

下高田稲荷谷Ⅱ遺跡で植物珪酸体分析と花粉分析を行い、農耕をはじめとする土地利用、植生と堆積環境の変遷を検討した。その結果、浅間Bテフラ(As-B, 1108年)直下層およびその下層ではイネが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。調査地においては、遅くとも試料P4の時期には稲作が開始されたと考えられた。また、浅間C軽石(As-C, 4世紀初頭)混在層およびその下位層でも少量ながらイネが検出され、周辺で稲作が行われていた可能性が認められた。さらに、As-B直下の下層では少量ながらムギ類(穎の表皮細胞)が検出され、ムギ類が栽培されていた可能性も認められた。下部(I帯期)はヨシ属、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属の草本が分布する湿原の環境であり、一部やや乾い

たところもみられた。中部(II帯期)も概ね湿った環境であり、周辺はやや乾いた環境になったことが示唆された。上部(III帯期)は湿潤化し、そこを利用して水田稲作が行われていたと推定された。

なお、下部(I帯期)ではコナラ属コナラ亜属の落葉広葉樹林が分布し、上部ではやや衰退した。

文献(下高田山道跡)

杉山真二・藤原宏志(1986) 機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定-古環境推定の基礎資料として-。考古学と自然科学, 19, p.69-84.

杉山真二(2000) 植物珪酸体(プラント・オパール)。考古学と植物学, 同成社, p.189-213.

藤原宏志(1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法-。考古学と自然科学, 9, p.15-29.

藤原宏志・杉山真二(1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)-プラント・オパール分析による水田跡の探査-。考古学と自然科学, 17, p.73-85.

参考文献(下高田稲荷谷Ⅱ遺跡)

金子清俊・谷口博一(1987) 線形動物・扁形動物。医動物学, 新版臨床検査講座, 8, 医歯薬出版, p.9-55.

金原正明・金原正子(1992) 花粉分析および寄生虫。藤原京跡の便所遺構-藤原京7条1坊-。奈良国立文化財研究所, p.14-15.

金原正明(1993) 花粉分析法による古環境復原。新版古代の日本第10巻 古代資料研究の方法, 角川書店, p.248-262.

金原正明(1999) 寄生虫。考古学と動物学, 考古学と自然科学, 2, 同成社, p.151-158.

杉山真二・藤原宏志(1986) 機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定-古環境推定の基礎資料として-。考古学と自然科学, 19, p.69-84.

杉山真二(2000) 植物珪酸体(プラント・オパール)。考古学と植物学, 同成社, p.189-213.

島倉健三郎(1973) 日本植物の花粉形態。大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 60p.

中村純(1967) 花粉分析。古今語訳, p.82-102.

中村純(1974) イネ科花粉について、とくにイネ(*Oryza sativa*)を中心として。第四紀研究, 13, p.187-193.

中村純(1977) 稲作とイネ花粉。考古学と自然科学, 第10号, p.21-30.

中村純(1980) 日本産花粉の標徴。大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p.

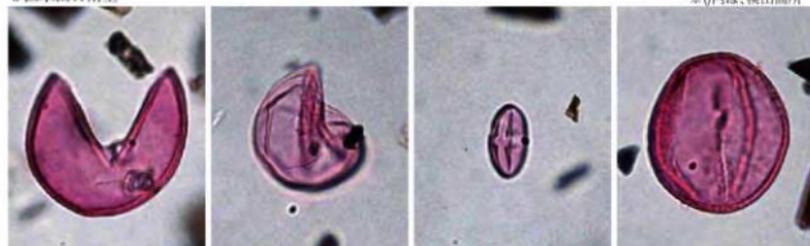
Peter J.Warneck and Karl J.Reinhard (1992) Methods for Extracting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils. Journal of Archaeological Science, 19, p.231-245.

藤原宏志(1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法-。考古学と自然科学, 9, p.15-29.

藤原宏志・杉山真二(1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)-プラント・オパール分析による水田跡の探査-。考古学と自然科学, 17, p.73-85.

第297図下高田稲荷谷Ⅱ遺跡の花粉・胞子
5区水田A南壁

※()内は、検出箇所



1 スギ(P2)

2 イチイ科-イヌガヤ科
-ヒノキ(P1)

3 クリ(P5)

4 コナラ属コナラ亜属
(P1)



5 コナラ属
アカガシ亜属(P1)

6 ニレ属-ケヤキ
(P1)

7 ガマ属-ミクリ属
(P1)

8 クワ科
-イラクサ科(P1)

9 サジオモダカ属
(P2)

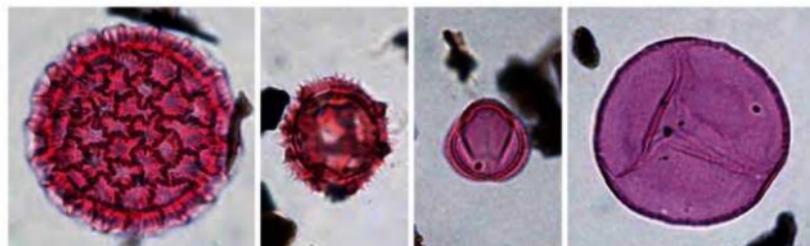


10 イネ科(P1)

11 イネ属型(P2)

12 カヤツリグサ科(P1)

13 ミズアオイ属(P2)



14 タデ属サナエタ節
(P1)

15 タンポポ亜科
(P1)

16 ヨモギ属(P1)

17 シダ植物三条溝胞子(P9)

— 10 μm

第3節 下高田白山遺跡出土漆製品の塗膜分析

竹原弘展・藤根 久・米田恭子(パレオ・ラボ)

1. はじめに

富岡市妙義町下高田に所在する下高田白山遺跡より出土した漆製品について、塗膜薄片を作製し、塗膜構造と材料について検討した。

2. 試料と方法

分析対象は、1区の10号竪穴建物より出土した須臾器の、内面に塗布された黒色塗膜である(表36、図299-1、2)。公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団の担当者によって採取された胎土から遊離した塗膜片を、分析試料とした。分析にあたっては、米田・竹原が薄片作製、藤根が赤外分光分析、竹原が顕微鏡観察、竹原がX線分析を行い、竹原が報告をまとめた。

表36 分析対象遺物

分析No.	区	出土遺構	遺物番号	器種	分類
1	1	10号竪穴建物	118	須臾器	内面付着黒色塗膜

分析は、表面の漆成分を調べるために赤外分光分析を行った。また、塗膜構造を調べるために薄片を作製して、光学顕微鏡と走査型電子顕微鏡による観察、およびX線分析を行った。

赤外分光分析は、手術用メスを用いて塗膜の一部から採取した試料を、厚さ1mm程度に裁断した臭化カリウム(KBr)結晶板に押し潰して挟み、油圧プレス器を用いて約7トンで加圧整形し、測定試料とした。分析装置は日本分光株式会社製フーリエ変換型顕微赤外分光光度計FT/IR-410、IRT-30-16を使用し、透過法により赤外吸収スペクトルを測定し、市販されている生漆の吸収と比較した。

塗膜観察用の薄片は、高透明エポキシ樹脂を使用して包埋し、薄片作製機および精密研磨フィルム(#1000)を用いて厚さ約50 μ m前後に仕上げ、まず走査型電子顕微鏡(日本電子株式会社製JSM-5900LV)による反射電子像観察を行った。さらに、無機物の層を対象として、電子顕

微鏡に付属するエネルギー分散型X線分析装置(同JED-2200)による定性・簡易定量分析を行った。その後、再度精密研磨フィルム(#1000)を用いて厚さ約20 μ m前後に調整した後、生物顕微鏡を用いて塗膜構造の観察を行った。

3. 結果および考察

図299-3、4に、塗膜薄片の生物顕微鏡写真と走査型電子顕微鏡反射電子像を示す。また、図298に赤外吸収スペクトルを示す。図の縦軸は透過率(%R)、横軸は波数(Wavenumber (cm^{-1}); カイザー)である。赤外吸収スペクトルに示した数字は、生漆の主な赤外吸収位置を示す(表37)。さらに、表38に赤色塗膜層等のX線分析結果を示す。

表37 生漆の赤外吸収位置とその強度

吸収No.	生漆		ウルシ成分
	位置	強度	
1	2925.48	28.534	
2	2854.13	36.217	
3	1710.55	42.035	
4	1633.41	48.833	
5	1454.06	47.195	
6	1351.86	50.803	ウルシオール
7	1270.86	46.334	ウルシオール
8	1218.79	47.536	ウルシオール
9	1087.66	53.843	
10	727.03	75.389	

表38 無機物層のX線分析結果(mass%)

分析No.	塗膜層	C	Al ₂ O ₃	SiO ₂	CaO	Fe ₂ O ₃
1	a層	56.37	14.69	14.24	1.66	13.03

以下に、塗膜の分析結果について述べる。塗膜の特徴を表39にまとめた。

塗膜薄片では、胎土a層、透明漆層c層が観察された(図299-3、4)。表層の透明漆層c層の下の断続的な層は、反射電子像の輝度が高く、X線分析においてもアルミニウム(Al₂O₃)やケイ素(SiO₂)、鉄(Fe₂O₃)が主に検出されており、採取した遊離塗膜に付着した須臾器の一部と考えられる。赤外分光分析では、炭化水素の吸収(No. 1とNo. 2)が明確にみられ、生漆を特徴づけるウルシオールの吸収(No. 7とNo. 8の変換点)が確認され、漆と同定された(図298)。

表39 塗膜分析結果

分析No.	器種	採取塗膜	下地	塗膜層
1	須臾器	内面付着黒色塗膜	—	1 透明漆層

4. おわりに

下高田白山遺跡より出土した須恵器の内面に付着する黒色塗膜について塗膜分析を行い、塗膜構造や材料につ

いて検討した。その結果、透明塗層が1層、胎土に直接塗られる構造と考えられた。

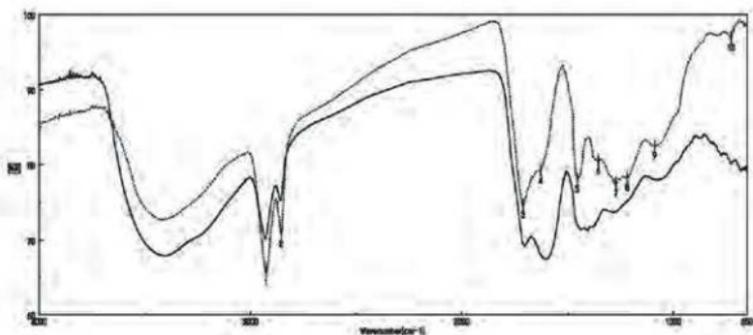


図298 塗膜表面の赤外吸収スペクトル
(実線：試料、点線：生漆、数字：生漆の主な吸収位置)

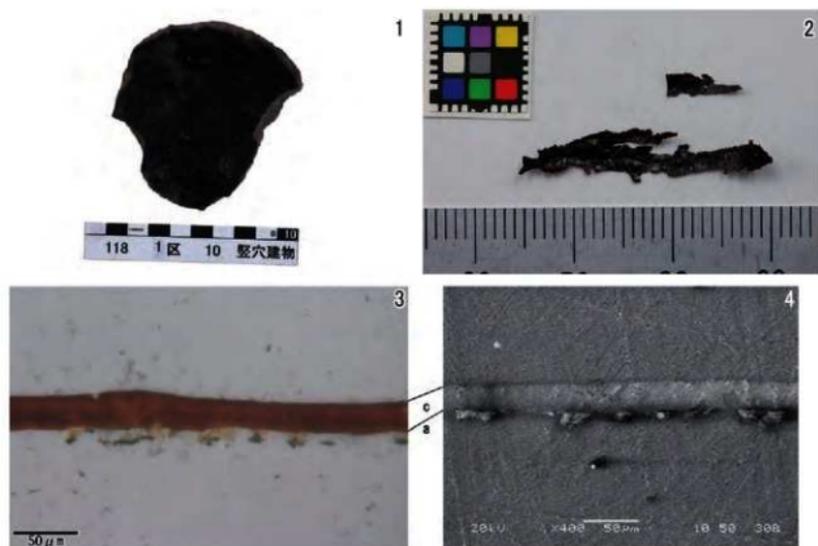


図299 分析対象遺物および塗膜断面構造
1：分析対象遺物 2：採取試料 3：生物顕微鏡写真 4：SEM反射電子像

第4節 下高田稲荷谷Ⅱ遺跡出土の黒曜石裂石核の産地推定

竹原弘展(パレオ・ラボ)

1. はじめに

富岡市妙義町下高田に所在する下高田稲荷谷Ⅱ遺跡から出土した黒曜石裂石核について、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。

2. 試料と方法

分析対象は、下高田稲荷谷Ⅱ遺跡より出土した黒曜石裂石核1点である。試料は、測定前にメラミンフォーム製スポンジと精製水を用いて、測定面の洗浄を行った。

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA1200VXを使用した。装置の仕様は、X線管ターゲットはロジウム(Rh)、X線検出器はSDD検出器である。測定条件は、測定時間100sec、照射径8mm、電圧50kV、電流1000μA、試料室内雰囲気は真空に設定し、一次フィルタにPb測定用を用いた。

黒曜石の産地推定には、蛍光X線分析によるX線強度を用いた黒曜石産地推定法である判別図法を用いた(望月, 1999など)。本方法では、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム(K)、

マンガン(Mn)、鉄(Fe)、ルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)の合計7元素のX線強度(cps; count per second)について、以下に示す指標値を計算する。

$$1) \text{Rb分率} = \text{Rb強度} \times 100 / (\text{Rb強度} + \text{Sr強度} + \text{Y強度} + \text{Zr強度})$$

表40 東日本黒曜石産地の判別群

都道府県	エリア	判別群名	原石採取地	
北海道	白滝	白滝1	赤石山頂(43), 八号沢露頭(15)	
		白滝2	七の沢川支流(2), 披露露頭(10), 十勝沢露頭直下河床(11), アジサイの滝露頭(10)	
	赤井川	赤井川	赤石山頂八号沢露頭, 八号沢, 黒崎の沢, 加林道(36)	
	上土幌	上土幌	十勝二股(4), タウシュベツ川右岸(42), タウシュベツ川左岸(10), 十三ノ沢(32)	
	置戸	置戸山	置戸山(5)	
		所山	所山(5)	
		豊浦	豊浦(10)	
		旭川	定文台(8), 森給台(2)	
		名寄	名寄	忠烈布川(19)
		秩父別	秩父別1 秩父別2 秩父別3	中山(65)
	遠軽	遠軽	社名淵川河床(2)	
	牛田原	牛田原	仁田布川河床(10)	
	留辺蘂	留辺蘂1 留辺蘂2	ケシュマップ川河床(9)	
	網走	網走	網走市宮スキー場(9), 阿摩川右岸(2), 阿摩川左岸(6)	
青森	木造	出来島	出来島海岸(15), 郷ヶ崎(10)	
	深津	八森山	神崎沢(7), 八森山公園(8)	
	青森	青森	大田内川(6)	
秋田	男鹿	金ヶ崎	金ヶ崎温泉(10)	
		船本	船本海岸(9)	
岩手	北上川	北上河原1 北上河原2 北上河原3	北上川(9), 真城(33)	
	宮城	岩崎	黒ノ倉	黒ノ倉(40)
			色麻	黒ノ倉(40)
		仙台	秋保1 秋保2	土蔵(18)
	塩竈	塩竈	塩竈(10)	
山形	羽山	羽山	月山荘前(24), 大越沢(10)	
		柳引	たらのき(19)	
新潟	新発田	帆山	帆山牧場(10)	
	新津	金津	金津(7)	
栃木	佐渡	真光寺	志分(4)	
	甘藷沢	甘藷沢	甘藷沢(22)	
	七尋沢	七尋沢(3), 宮川(3), 桜持沢(3)		
	西野屋	芙蓉ハイライト土砂集積場	(30)	
長野	和田	徳山	徳山(14), 東藤屋(54)	
		小深沢	小深沢(42)	
		土原橋1	土原橋西(10)	
		土原橋2	新和田トンネル北(20), 土原橋北西(58), 土原橋西(1)	
		古峠	和田トンネル北(28), 古峠(38), 和田時スキー場(28)	
		ブドウ沢	ブドウ沢(20)	
新潟	牧ヶ沢	牧ヶ沢下(20)		
	高松沢	高松沢(19)		
	星ヶ台	星ヶ台(35), 星ヶ塔(20)		
神奈川県	箱根	箱根	箱根(51)	
	箱根	箱根	箱根(20)	
静岡県	天城	新峠	新峠(20)	
		伊豆島	伊豆島(27)	
東京都	神津島	砂輪崎	砂輪崎(20)	
		久見	久見ハイライト中(6), 久見採掘現場(5)	
島根	隠岐	筑浦	筑浦海岸(3), 加茂(4), 岸宮(3)	



図300 黒曜石産地分布図(東日本)

2) Sr分率=Sr強度×100/(Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度)

3) Mn強度×100/Fe強度

4) $\log(\text{Fe強度}/\text{K強度})$

次に、これらの指標値を用いた2つの判別図(横軸Rb分率—縦軸Mn強度×100/Fe強度の判別図と横軸Sr分率—縦軸 $\log(\text{Fe強度}/\text{K強度})$ の判別図)を作成し、各地の原石データと遺跡出土遺物のデータを照合して、産地を推定する。この方法は、できる限り蛍光X線のエネルギー差が小さい元素同士を組み合わせて指標値を算出するため、形状、厚み等の影響を比較的受けにくく、原則として非破壊分析が望ましい考古遺物の測定に対して非常に有効な方法である。ただし、風化試料の場合、 $\log(\text{Fe強度}/\text{K強度})$ の値が減少する点に注意が必要である(望月, 1999)。試料の測定面には、なるべく平滑な面を選んだ。判別図のバックデータとなる原石試料は、採取原石を割って新鮮な面を露出させた上で、産地推定対象試料と同様の条件で測定した。表40に判別群一覧とそれぞれの原石の採取地点および点数を、図300に各原石の採取地

の分布図を示す。

3. 分析結果

表41に石核の測定値および算出した指標値を、図301、302に黒曜石原石の判別図に石核の指標値をプロットした図を示す。視覚的にわかりやすくするため、図では各判別群を楕円で取り囲んである。

分析の結果、石核は冷山群(長野県、蓼科エリア)の範囲にプロットされた。表41に、判別図法により推定された判別群名とエリア名を示す。

4. おわりに

下高田稲荷谷Ⅱ遺跡より出土した黒曜石製石核1点について、蛍光X線分析による産地推定を行った。その結果、蓼科エリア産と推定された。

引用文献

望月明彦(1999)上和田城山遺跡出土の黒曜石産地推定。大和市教育委員会編「埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書2—上和田城山遺跡篇—」: 172-179, 大和市教育委員会。

表41 測定値および産地推定結果

K強度 (cps)	Mn強度 (cps)	Fe強度 (cps)	Rb強度 (cps)	Sr強度 (cps)	Y強度 (cps)	Zr強度 (cps)	Rb分率	Mn×100	Sr分率	$\log \frac{\text{Fe}}{\text{K}}$	判別群	エリア
								Fe				
192.7	63.6	1037.8	424.4	525.6	223.3	765.7	21.89	6.13	27.11	0.73	冷山	蓼科



分析資料写真

第5節 黒色安山岩の原産地同定

1. はじめに

県内黒色安山岩研究は、西毛瀧川流域の石材調査から本格化し(桜井ほか、1993)、県内外黒色安山岩の原産地データ集積を経て(津島ほか、2001・2004)、石材入手の実態把握に向けて原産地データが集積された。その後、井野川橋梁工事現場(高崎市綿貫町付近)で、更新世末の利根川流路から黒色安山岩を採集する機会を得て、これを時間軸上に捉え、その消費動向を論じた(津島ほか、2010)。資源としての黒色安山岩は、利根川上流域から常に安定的に供給されていたわけではなく、時期的に増減があったというのが論旨だったが、データ不足は明らかであった。その後は、西毛域の旧石器遺跡や県内縄文・弥生期遺跡出土の黒色安山岩のデータを充実させるべく作業(前橋市唐ノ堀遺跡、第522集)を進めてきた。今回の分析が分析例の少ない西毛域の貴重なデータとなることを期待する。

2. 分析試料

向原IV遺跡では、暗色帯から計229点の石器類が発見されている。このうち、147点(64.1%)が黒色安山岩で、ここでも主体的石材となっていた。遺跡は安中・富岡の行政区にあり、近々の黒色安山岩原産地としては八風山・荒瀬山(長野県境)があり、はたして予想した通り結果が得られるのか、検討したものである。黒色安山岩は個別別分類が難しい石材で、わずか1個体のみが分類されただけであり、ブロック毎に各1点(単独出土の破片類)を選び、分析試料とした。(第288図参照)

3. 同定結果

分析試料6点のプレパラート(岩石薄片)を作成し観察した結果、3つのタイプに分類された。これを原産地薄片と照らし合わせたところ、Aタイプは武尊山産と同定され、B・Cタイプは原産地不明である。次に、各タイプについて記載する。

Aタイプ(武尊山産、分析試料1・2・3・5)

斑品は少ない。斜長石は比較的きれいで、集斑状のものが認められる。鉄鉱物、楕円状の輝石が少量認められる。石基部分は細粒である。一方の薄片では、石基部分の流理構造が比較的明確であり輝石類が粒状であるが、直方向の薄片では、明瞭な流理構造は認められず。輝石が棒状である。

Bタイプ(原産地不明、分析試料4)

斜長石の斑品は比較的きれいである。石基部分は粗流で、斜長石は長柱状〜針状であるが、方向性のある配列を示すのは一部分である。薄片の作成方向による差は見られない。

Cタイプ(原産地不明、分析試料6)

斜長石の斑品は比較的きれいである。斑品と石基部分の中間的な大きさの斜長石が多く認められ、長柱状〜針状である。薄片の作成方向による差は見られない。

参考文献

- 桜井美恵・井上昌美・関口博幸 1993「群馬県における石器石材の研究(1) 群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要11」
津島秀章・桜井美恵・井上昌美 2001「黒色安山岩の原産地試料」群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要19
津島秀章・井上昌美 2004「信濃川中流域の黒色安山岩試料」群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要22
津島秀章・岩崎奈々 2020「武尊山産黒色安山岩の消長—石材資源の動的理解に向けて—」群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要28
津島秀章 2011「黒色安山岩製石器の原産地分析」『上泉唐ノ堀遺跡・上泉新田環遺跡群』群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第522集

第42表 分析試料一覧

試料番号	出土位置	斑品						石基				タイプ			
		斜長石	最大斑	単斜輝石	最大斑	斜方輝石	最大斑	鉄鉱物	最大斑	組織	斜長石		輝石	不透明鉱物	ガラス
1	3a号ブロック(1018)	○	0.6	△	0.2	△	0.5	○	0.2	ガラス基流品質	○	○	△	○	A
2	9号ブロック(26)	○	1.1	△	0.3	△	0.6	○	0.3	ガラス基流品質	○	○	△	○	A
3	11号ブロック(307)	○	0.9	△	0.2	△	0.3	△	0.4	ガラス基流品質	○	○	△	○	A
4	4b号ブロック(984)	○	0.5	△	0.4	△	0.2	△	0.3	ガラス基流品質	○	○	△	△	B
5	3b号ブロック(913)	○	0.9	△	0.5	△	0.3	△	0.2	ガラス基流品質	○	○	△	○	A
6	ブロック外(2トレNo.1)	○	0.6	△	0.2	△	0.2	△	0.3	ガラス基流品質	○	○	△	○	C



試料番号1

a



a'



b



b'



試料番号3

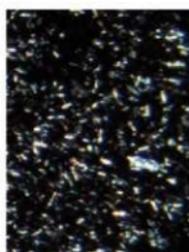
a



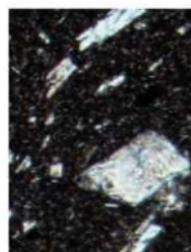
a'



b

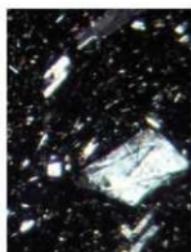


b'



試料番号4

a



a'



b



b'



試料番号6

a



a'



b



b'

第303図 黑色安山岩製石器の薄片の偏光顕微鏡写真 a, b: 平行ニコル a', b': 直交ニコル×50

第4章 まとめ

第1節 下高田白山遺跡出土の弥生土器について

1 群馬県の中期弥生土器研究の概観

群馬県における中期弥生土器の系譜については、若狭徹が総合的な編年案(若狭1996)で示したように、中期前葉の「岩櫃山式」と中期後葉を代表する「竜見町式」との間を埋める土器群の存在が稀薄であり、系統性の検討が遅れていた。その後、石川日出志による「神保富土塚式」の設定(石川2003)によって、中期中葉の土器群の様相が次第に明らかになりつつあるが、未だ地域限定的な型式に留まっている感がある。時間軸上の位置づけはともかくとして、群馬県域における中期中葉土器群の総合的な把握には、地域差や異系統土器群との関係性等の課題が多く残されている。このような状況下において、従来検討に値する資料が稀薄だった地域で、中期中葉の弥生土器資料が次第に知られるようになってきた。渋川市金井東裏遺跡・同市金井下新田遺跡では、神保富土塚式のほか、長野県の松節・境窪段階の壺が伴出することが分かった(群理文2018・2021)。利根川左岸にあたる赤城山麓の新田上遺跡や青柳宿上遺跡では、池上式併行と思われる中期中葉でも新しい段階の土器群が明らかとなり(群理文2015a・b)、断片的資料ながら県内出土土器の系統性を探る手掛かりとなっている。

一方、従来「竜見町式」と呼称されてきた群馬県における栗林式土器の一群(以後「栗林式系土器群」と呼ぶ)は、まとまった好資料のみられる清里・庚申塚遺跡出土土器など新段階の例を代表とした編年観(比田井2002など)が受け入れられがちで、古相段階の出土資料については等閑視されてきたきらいがある。これを払拭したのが安中市二軒在家原田頭遺跡から出土した栗林式土器群の発見である(安中市2017)。これにより、群馬県においても栗林1式を主体とする土器群の存在が明確となり、中期中葉に廻る栗林式集団の移住という歴史事象までが議論の対象として浮かび上がってきたことになる(馬場2018)。このことは、弥生土器編年の広域的検討に益するだけで

なく、群馬県における中期弥生社会の変遷過程を理解するうえでの視座を確かなものにしてくれるはずである。

さて、本項で扱う下高田白山遺跡の弥生土器は、上述した二軒在家原田頭遺跡出土の栗林1式土器から直接的系譜で連なる好例である。ここでは本遺跡例を栗林式系土器編年のなかに位置づけるために、特に4点の土器を取り上げて検討してみたい。なお、栗林式編年観は石川編年(石川2012)に従い、必要に応じて馬場編年(馬場2008)を取り上げる。文様構成の表記は石川案(石川2002)に従う。

2 出土した弥生土器の概要

栗林式系土器は9棟の竪穴建物から出土しており、その建物分布からは遺跡存続の時間幅を長く見積もる必要はないようである。竪穴建物からの土器出土量は少ないものの、32号竪穴建物と36号竪穴建物出土例から、器種は壺と甕で組成されているとみてよい。36号竪穴建物からは高杯か鉢の口縁片が出土したが、組成の中では客体といえる。挿頭未掲載分を含めた全破片数のうち、壺は54%、甕は42%を占めている。

第304図1は口縁と胴部下半を欠く壺である。口頸部の欠損は不慮のものと思われるが、胴部中位はほぼ水平で小刻みな割れ口を示しており、故意による打割整形の可能性もある。器形はやや長めの頸部に中位付近が球形に張り出す胴部形状を呈する。頸部には凸帯に縄文を施し、その下位に笠描き沈線による山形文をめぐらせる。胴部には等間隔を空けた2条の縄文帯をめぐらせ、胴部中位には縄文を地文として三角形か弧線状の文様を重ねている。頸部の山形文以外の沈線は、幅5mm前後と太く、施文具は凸面を利用した半截竹管の可能性もある。そして、太沈線内には赤彩痕跡が認められる。縄文施文は沈線区画後で、沈線帯からはみ出した部分は丁寧に磨き消される。器面整形時には細かいソケメが施され、無文部では丁寧に磨き消されている。球形に胴部が張る器形は栗林1式に近いが、裝飾帯構成が「2・2a・0・4・5」であり、横帯多段から3裝飾帯を無文とした構成に

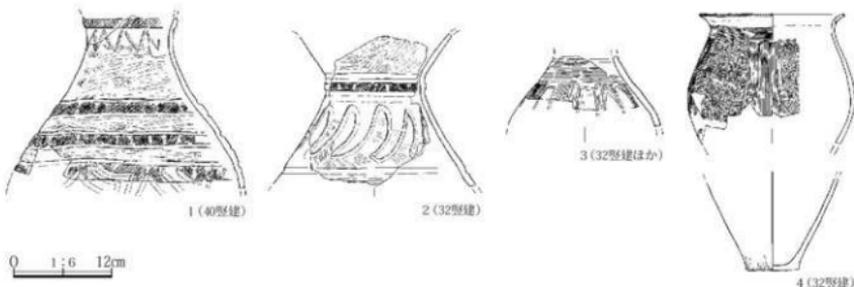
新要素をみる。栗林1式直後の2式古段階でも古相に位置づけられよう。

第304図2は大型の壺で、頸部～肩部の破片である。器高は40cmを越えることが予想されるが、頸部の締まりから太頸形態とは異なる。頸部に凸帯をめぐらせて縄文を施すのは同図1と同じである。文様の個性の特徴は、頸部下位の3装飾帯における大振りの斜行波状文である。これは、5mm幅の太沈線で左下がりの破線を連ねたもので、同類は長野県長野市荒山例(第305図)で知られる。荒山例は『弥生式土器聚成図録』(1939)以来、信濃の古式弥生土器として位置づけられていたが、栗林式土器編年研究の進展により、現時点では栗林1式に含めて考えられる(笹沢1996)。荒山例にみられる3装飾帯の斜行波状文は下位を縄文で充填しており、この部分に地文

がない下高田白山例よりは古相といえる。なお、この斜行する大振りの太沈線波状文は、類似した「舌状懸垂文」とほぼ同時に栗林式文様として採用され、普及しないまま淘汰されていったマイナーな存在と捉えておく。群馬県内ではほかにみなかみ町八東脛洞窟出土例(工業1968)が知られるのみである。

第304図3は単位数の多い「舌状懸垂文」の壺で3装飾帯に柳描充填の横帯を施す。同図4の甕は、胴部の張る器形が栗林2式相当だが、柳描垂下文が幅広く、施文域が胴部上半に限られていることから、2式でも古段階と考える。

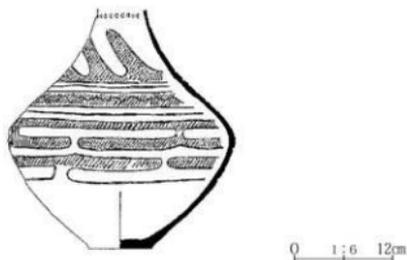
以上の検討から、第304図1～4は栗林2式古段階と考えるのが妥当であろう。



第304図 下高田白山遺跡の弥生土器例

【参考文献】

- 安中市教育委員会 2017「西横野中部地区遺跡群 二軒在家原田遺跡」
石川日出志 2002「栗林式土器の形成過程」『長野県考古学会誌』99・100 p.54-80
石川日出志 2003「神保富士塚式土器の提唱と弥生中期土器研究の意義」『土庫考古』27 p.27-53
石川日出志 2012「栗林式土器の編年・系譜と青銅器文化の受容」『柳沢遺跡』p.182-191
工業普通 1968「北関東地方」『弥生式土器集成 本編2』p.117-121
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2015a「新田上遺跡」
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2015b「青柳宿上遺跡 引切塚遺跡」
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2018「金井東裏遺跡-近世・弥生・縄文時代編-」
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2021「金井下新田遺跡-縄文時代・弥生時代編-」
笹沢 弘 1996「栗林式土器」『日本土器辞典』p.504-505 樋山園
馬場伸一郎 2008「弥生中期・栗林式土器編年の再構築と分布論的研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』145 p.101-174
馬場伸一郎 2018「二軒在家原田遺跡と群馬県西部の弥生中期土器編年」『考古学研究』65-2 p.92-112
比田井克仁 2002「関東・東北地方南部の土器」『考古資料大観2 弥生・古墳時代 土器Ⅱ』p.357-368
若狭 龍 1996「編年編 群馬県地域」『YAY! 弥生土器を語る会』p.223-234



第305図 長野県荒山出土壺(笹沢1996より転載)

第2節 遺跡概観

下高田白山遺跡(以下、白山遺跡)と下高田稲荷谷Ⅱ遺跡(以下、稲荷谷Ⅱ遺跡)は、樹枝状の開析谷に挟まれた台地縁辺部の緩斜面に竪穴建物・掘立柱建物・土坑などの遺構からなる集落が展開し、両遺跡の間にある谷地部に水田が営まれている。検出された遺構を中心に、各時代の様相について、以下に記す。

旧石器・縄文時代の遺構については、検出されていない。採取された遺物も僅かである。特筆できる遺物としては、本調査前の試掘調査時に、稲荷谷Ⅱ遺跡2区中央部のトレンチ内より出土した重さ1,633gを測る黒曜石核(原石)がある。産地同定(蛍光X線)分析を実施した結果、冷山群 蓼科エリア産との結果を得た。ちなみに、群馬県内最大(3,567g)の原石が出土した安中市中野谷松原遺跡は、当遺跡より北北東に僅か2km程の近い位置に在る。

弥生時代中期に比定される竪穴建物6棟が、白山遺跡4区中央部で検出されている。6棟の建物は主軸方向が異なることから、時期差があるものと推察される。遺構は台地縁辺に在り、南側は高田川左岸へと向かい急峻な段丘崖となる。遺構の分布は狹範囲に限られ、広がりは見られない。また、浅間Bテフラ直下の水田遺構が検出された稲荷谷Ⅱ遺跡5区の谷地部において実施した植物珪酸体分析の結果、浅間C軽石(As-C)混在層とその下位層土より少量のイネが検出されており、周辺での稲作の可能性が指摘された。

奈良・平安時代の様相は、7世紀の第4四半期頃から集落の造営が見られる。この時期から8世紀末までの竪穴建物が白山遺跡4区を中心に展開し、9世紀第3四半期から10世紀代には白山遺跡1・2区から稲荷谷Ⅱ遺跡5区の水田を挟み稲荷谷の全域へと広がりを見せる。稲荷谷Ⅱ遺跡5区の水田は、直上に成層した浅間Bテフラ(As-B)の堆積が確認され、併せて植物珪酸体分析の結果、Bテフラ直下とその下位の耕作土中より多量のイネが検出され、継続的な稲作の実施が明らかとなったが、耕作面としての検出はテフラ直下の1面に留まった。この水田への水の供給については、5区北西部に水路の検出はなく、谷頭よりの湧水を水田北西側より南東方向へかけ

流しているものと推察される。また、南東部に検出された溝も水田と同時期に比定されるものはない。また、この水田は、南東端の一部に浅間Bテフラ層を上から掘削した痕跡も認められるが、ほぼ全面にテフラの堆積を留めているため、天仁元(1108)年以降の復興は成されなかったものと推察される。

白山遺跡1・2区南東半部で確認された埋没谷よりの出土遺物の中には、瓦・黒色土器・灰軸陶器が含まれる。居住施設以外の遺構としては、4区東端部中央で礎石が検出されるものの構造物の想定には至らないが、調査区の東側域に富裕層居宅や公的施設が存在が想定される。

向原IV遺跡は、稲荷谷Ⅱ遺跡の北方700m程に在り、富岡市と安中市の境に当たる。東に隣接する向原Ⅲ遺跡は平成18(2006)年度に、西に隣接の向原遺跡・向原Ⅱ遺跡、真光寺原遺跡が平成12(2000)年度に安中市教育委員会により発掘調査が行われている。向原IV遺跡の本線部で検出された東西方向に走る7号溝と、拡張部で検出された南北走行の8号溝は、共に上巾が4m強の大型の溝で、埋土の最終段階にAs-Bの堆積が確認された。両溝は南東の調査区外でL字状に結合すると推察され、7号溝の西側は隣接の真光寺原遺跡検出のM-1号溝に、8号溝の北側は向原Ⅲ遺跡検出のM-1号溝にそれぞれ接続し、両遺跡で検出されている横野台地一帯に広がる古代の牧(放牧地)に伴う外周溝の一部となることが確認された。この牧(放牧地)は、碓氷川と高田川に挟まれた東西に伸びる細長い横野台地一帯に、延長9km以上に及ぶ大溝により区画された広大なものであるが、史料には比定できる御牧(官牧)がなく、推定地不明の御牧、史料にはない官・私牧、『延喜式』以前に廃絶した牧のいずれかであった可能性と、東山道駅路の碓氷部内に設置された坂本・野後のふたつの駅家との関連が指摘されている。向原IV遺跡の調査では、この牧(放牧地)について新たな知見に至るものは無く、区画溝の一部の検出と区画内部には当該期の集落が存在しないことの確認に留った。

遺跡の南端部において、旧石器時代の遺物の出土が確認された。高田川を見下ろす横野台地の南端部に当たり、開析谷の谷頭に湧水点が点在するこの地が、小規模集団の居留地として選地されたと推察される。

